独立行政法人
国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所

精神保健研究所年報

第25号（通巻58号）

平成23年度

National Institute of Mental Health
National Center of Neurology
and Psychiatry

——2012——

独立行政法人

国立精神・神経医療研究センター

精神保健研究所年報

第 25 号（通巻 58 号）

平成 23 年度

National Institute of Mental Health

National Center of Neurology

and Psychiatry

—2012—

「国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所　平成24年2月27日」

巻　頭　言

平成 23 年度の精神保健研究所（精研）年報をお届けします．平成 23 年 3 月 11 日に発生した「東日本大震災」の衝撃も冷めやらぬままスタートした 23 年度でしたが，所員それぞれが様々な感慨と決意のもとに，被災地の皆様や，支援する方々の精神健康を念頭に研究を進めて参りました．私たちは引き続き、大震災の 10 年先 20 年先を見据えたメンタルヘルス支援を意識した，着実な研究そして活動を継続していく所存です．平成 23 年度発行の精研機関誌『精神保健研究』第 58 号では，東日本大震災を特集し，研究所内外の活動を具体的に紹介いたしました．研究の詳細については各研究部の研究活動記録を，また，東日本大震災に関する具体的な支援活動については，巻末の災害支援活動の記録を合わせてご参照ください．

23 年度は精研にとって，大きな節目の年でもありました。昭和 27 年 1 月 1 日に国立精神衛生研究所として設立以降，昭和 61 年に国立精神･神経センター精神保健研究所，平成 22 年に独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所となり，この平成 24 年元旦に創立 60 周年を迎えたことになります．1 月 20 日には祝賀会を都内で開催し，研究所の還暦をスタッフとして迎える幸運を思いつつ，国民への大きな責任と将来への大きな夢を確認しあいました．ご臨席賜りました関係者の皆様に厚く御礼申しあげます．

平成 23 年度の常勤研究者の人事は，下記の通りです．

4 月 1 日に東北大学医学部講師太田英伸が知的障害研究部診断研究室長，勝又陽太郎が自殺予防総合対策センター研究員，佐藤さやかが社会復帰研究部精神保健相談研究室研究員，長沼洋一が司法精神医学研究部研究員としてそれぞれ着任しました．12 月 31 日に心身医学研究部の小牧元部長が国際医療福祉大学教授として，児童思春期精神保健研究部研究員井口英子が関東医療少年院医師として転出しました．24 年 1 月 1 日に成人精神保健研究部室長の松岡豊がトランスレーションメディカルセンター情報管理・解析部長に異動し，3 月 31 日には社会精神保健研究部社会福祉研究室長野田寿恵，成人精神保健研究部認知機能研究室長 福井裕輝（司法精神医学研究部研究員併任），司法精神医学研究部研究員 西中宏史が任期満了で退任しました．

精研は，患者さんやご家族，国民に役立つ研究を実践し，国の精神保健福祉政策策定に貢献するシンクタンクとしての機能を果たす役割を担っており，ここ数年，研究業績において質の向上はもちろん数値の上でも増加の傾向が続いています．今年度も昨年度を大きく上回り，英文原著がトータルで 111 編，和文原著が 50 編，英文総説 3 編，和文総説 205 編，英文著書 7 編，和文著書 183 編（分担執筆含む）掲載され，国際学会発表 145 件，国内学会発表 369 件を行っています．

また，主要学会で筆頭著者としての受賞は，第 18 回日本時間生物学会学術大会で肥田昌子室長と栗山健一室長，The 6th World Congress of the World Sleep Federation で栗山健一室長と塚田絵鯉子研究生，第 31 回日本社会精神医学会で安藤久美子室長と小髙真美流動研究員，第 53 回日本小児神経学会で後藤隆章流動研究員と鈴木浩太科研費研究員，第 43 回日本アルコール・薬物医学会で嶋根卓也研究員が学会表彰を受けました．

私たちは今年度も精神保健分野のさまざまな専門領域の質の高い研修 20 課程を実施し，合計 1,157 名が受講しました．詳細は後述しております．また研究成果を社会に還元するための情報発信を常時行っています．新聞，雑誌，テレビなどのマスメディアからの取材，発表についての概要は一覧表に示しました(p259)．研究者の対外的活動による社会貢献に関する一覧表もご参照ください (p262)．

本年報をぜひご高覧いただき，精神保健研究所の志と活動へのご指導，ご支援を賜りますよう，なにとぞよろしくお願いいたします．

平成 24 年 8 月吉日

国立精神・神経医療研究センター　精神保健研究所
所長　加我牧子

目　　次

**Ⅰ．精神保健研究所の概要　・・・

Ⅰ 精神保健研究所の概要

1. 創立の趣旨及び沿革

Ⅰ. 創立の趣旨

本研究所は，精神衛生に関する諸問題について，精神医学，心理学，社会学，社会福祉学，保健学等各分野の専門家による学際的立場からの総合的，包括的な研究を行うとともに，国，地方公共団体，病院等において精神衛生業務に従事する者に対する精神衛生全般にわたる知識，技術に関する研修を行い，その資質の向上を図ることを目的として，昭和27年1月，アメリカのNIMHをモデルに厚生省の付属機関として設立された。

Ⅱ. 精神衛生研究所の沿革

昭和25年に精神衛生法が制定された際，国立精神衛生研究所を設立すべき旨の国会の附帯決議が採択された。これを踏まえ，厚生省設置法及び厚生省組織規程の一部が改正され，昭和27年1月，千葉県市川市に国立精神衛生研究所が設置された。

研究所の規模について，当初，厚生省は，1課8部60名程度の組織を構想していたが，財政事情等により，総務課，心理学部，生理学形態学部，優生学部，児童精神衛生部及び社会学部の1課5部30名の体制で発足した。また，附属病院をもつことの重要性は，当時から認識されていたが，病院の新設は困難な情勢であったため，隣接する国立国府台病院と連携，協力することとされた。

その後，知的障害に対する対策の確立が社会的に求められるようになったことを受け，昭和35年10月1日，新たに精神薄弱部を設置するとともに既存の各部の再編と名称変更が行われた。この結果，研究所の組織は，総務課，精神衛生部，児童精神衛生部，社会精神衛生部，精神身体病理部，精神薄弱部及び優生部の1課6部となった。

昭和36年には，国立精神衛生研究所組織細則が制定され，部課長のもとに心理研究室，生理研究室，精神衛生相談室及び精神衛生研修室の4室が置かれた。それとともに，昭和35年1月から事実上行われていた精神衛生技術者に対する研修業務が厚生省設置法上の業務として加えられて医学科，心理学科，社会福祉学科及び精神衛生指導科の研修が開始されることとなり，研修業務が調査研究と並ぶ研究所の重要な柱として正式に位置づけられることとなった。

昭和40年には，地域精神医療，社会復帰対策の充実等を内容とする精神衛生法の大改正に伴い，社会復帰部が新設されるとともに，新たに精神発達研究室及び主任研究官（3名）が置かれた。また，昭和46年6月には，社会精神衛生部にソーシャルワーク研究室が設置された。さらに，昭和48年には，人口の高齢化に伴って，痴呆性老人等いわゆる「恍惚の人」が社会問題化したのを背景に，老人精神衛生部が，翌昭和49年には，同部に老化度研究室が新設された。

昭和50年には，精神衛生に関する相談が精神障害者の社会復帰と深く関連することから，社会復帰部を社会復帰相談部に改組，精神衛生相談室を同部に移管した。また，昭和53年12月には，社会復帰相談庁舎が完成し，精神衛生相談をはじめとする精神障害者の社会復帰に関する研究体制が強化された。昭

和54年には，研修各科の名称が医学課程，心理学課程，社会福祉学課程及び精神衛生指導課程に改称されるとともに，新たに精神科デイ・ケア課程が新設された。翌昭和55年には，研修庁舎が完成し研修業務の一層の充実が図られた。

Ⅲ．国立精神・神経センター精神保健研究所の設立

国立精神衛生研究所は，このような着実な歩みをたどった後，昭和61年10月，国立武蔵療養所及び同神経センターとともに国立高度専門医療センターとして発足した国立精神・神経センターに発展的に統合された。ここに，国立精神・神経センター精神保健研究所は，国立高度専門医療センターの一研究部門として，精神保健に関する研究及び研修を担うこととなった。その際組織改正により，総務課が庶務課とされ，精神身体病理部と優生部が統合されて精神生理部とされたほか，精神保健計画部及び薬物依存研究部が新設された。その結果，統合前の1課8部8室は，1課9部19室となり，研究・研修機能の強化が図られた。

半年後の昭和62年4月には，国立精神・神経センターに国立国府台病院が統合され，二病院二研究所を擁する国立高度専門医療センターが本格的に活動を開始した。これに伴い，庶務課は廃止され，精神・神経センター運営部（国府台地区）に研究所の事務部門（主幹，研究所事務係）が置かれた。また，同年10月には，心身医学研究部の新設と精神保健計画部システム開発研究室の増設が認められ，平成元年10月には，社会復帰相談部に援助技術研究室が設置された。

さらに，平成11年4月には，精神薄弱部が知的障害部に名称変更されるとともに，薬物依存研究部が組織改正により，心理社会研究室，依存性薬物研究室，診断治療開発研究室の3室編成となった。

平成14年1月に精神保健研究所が創立50周年を迎え、創立50周年パーティの開催、記念誌の発行、公開市民シンポジウムを行った。

平成15年10月には司法精神医学研究部が新設され、3室体制で、研究員の増員も認められ、研究所の組織は、11部27室体制（精神保健研修室を含む）となった。

平成17年4月には精神保健研究所は小平（武蔵）地区に移転し研究活動を開始した。

平成18年10月には自殺予防総合対策センターの新設により、自殺実態分析室・適応障害研究室・自殺予防対策支援研究室の3室と、成人精神保健部に犯罪被害者等支援研究室・災害時等支援研究室の2室の増設が認められた。

平成21年6月に精神保健に関する技術研修の事務担当が政策医療企画課から研究所事務係へと移管され、また10月に精神生理部に臨床病態生理研究室が設置され3室編成となり、研究所の組織は11部33室（精神保健研修室含）となった。

Ⅳ.独立行政法人　国立精神・神経医療研究センター　精神保健研究所へ改組

国民の健康に重大な影響のある特定の疾患等に係る医療に関し、調査、研究及び技術の開発並びにこれらの業務に密接に関連する医療の提供、技術者の研修等を行う独立行政法人の名称、目的、業務の範囲等に関する事項を定めることを目的とした、「高度専門医療に関する研究等を行う独立行政法人に関する法律」の施行により、それまでのナショナルセンター6組織が平成22年4月1日に独立行政法人化された。

我が国立精神・神経センターは「精神疾患、神経疾患、筋疾患及び知的障害その他の発達の障害に係る医療並びに精神保健」を担当する「独立行政法人国立精神・神経医療研究センター」となり、精神保健研究所も内部の組織が改正された。

自殺予防総合対策センターは、自殺実態分析室、適応障害研究室、自殺予防対策支援研究室の3室編成。

精神保健計画部は、精神保健計画研究部へ名称変更され、統計解析研究室、システム開発研究室の2室編成。

薬物依存研究部は、心理社会研究室、依存性薬物研究室、診断治療開発研究室の3室編成。

心身医学研究部は、ストレス研究室、心身症研究室の2室編成。

児童・思春期精神保健部は児童・思春期精神保健研究部へ名称変更され、精神発達研究室、児童期精神保健研究室、思春期精神保健研究室の3室編成。

成人精神保健部は、成人精神保健研究部へ名称変更され、精神機能研究室、診断技術研究室、認知機能研究室、犯罪被害者等支援研究室、災害等支援研究室の5室編成。

老人精神保健部は、精神薬理研究部へ名称変更され、精神薬理研究室、気分障害研究室の2室編成。

社会精神保健部は、社会精神保健研究部へ名称変更され、社会福祉研究室、社会文化研究室、家族・地域研究室の3室編成。

精神生理部は、精神生理研究部へ名称変更され、精神生理機能研究室、臨床病態生理研究室の2室編成。

知的障害部は、知的障害研究部へ名称変更され、診断研究室、治療研究室、発達障害支援研究室の3室編成。

社会復帰相談部は、社会復帰研究部へ名称変更され、精神保健相談研究室、援助技術研究室の2室編成。

司法精神医学研究部は、制度運用研究室、専門医療・社会復帰研究室、精神鑑定研究室の3室編成。

以上自殺予防総合対策センター及び11部、計33室となった。

また、研究所の事務部門は、主幹が研究所事務室長となり、研究所事務係とともに、研究所の所属となった。

平成23年4月、事務部門の組織変更が行われ、研究所事務室は総務部の所属となった。

平成23年12月には災害時こころの情報支援センターの新設により、情報支援研究室の1室が認められた。

以上自殺予防総合対策センター、災害時こころの情報支援センター及び11部、計34室となった。

平成24年1月、千葉県市川市の地に国立精神衛生研究所が設置されてから、創立60周年を迎え、記念祝賀会を開催し、創立60周年記念誌を発行した。

沿　革

事項 年次	所　長	組　織　等　経　過
昭和25年5月		精神衛生法国会通過（精神衛生研究所設置の附帯決議採択）
26年3月		厚生省公衆衛生局庶務課が設置の衝にあたる
27年1月	黒沢良臣 （国立国府台病院長兼任）	厚生省設置法並びに組織規程の一部改正により精神衛生に関する調査研究を行う附属機関として，千葉県市川市に国立精神衛生研究所設置総務課，心理学部，生理学形態学部，優生学部，児童精神衛生部及び社会学部の1課5部により業務開始
35年10月		心理学部を精神衛生部に，社会学部を社会精神衛生部に，生理学形態学部を精神身体病理部に，優生学部を優生部に名称変更し，精神薄弱部を新設
36年4月 6月	内 村 祐 之	精神衛生研修室，心理研究室，精神衛生相談室及び生理研究室を新設 厚生省設置法の一部改正により精神衛生技術者の研修業務が追加され，医学科，心理学科，社会福祉学科及び精神衛生指導科の研修開始
37年4月	尾 村 偉 久 （公衆衛生局長が所長事務取扱）	
38年7月	若 松 栄 一 （公衆衛生局長が所長事務取扱）	
39年4月 40年7月	村 松 常 雄	主任研究官を置く 社会復帰部及び精神発達研究室を新設
41年7月		本館改築完成（5カ年計画）
44年4月		総務課長補佐を置く
46年6月	笠 松　章	ソーシャルワーク研究室を新設
48年7月		老人精神衛生部を新設

49年7月		老化度研究室を新設
50年7月		社会復帰部を社会復帰相談部に名称変更 精神衛生相談室を精神衛生部から社会復帰相談部の所属に改正
52年3月	加 藤 正 明	
53年12月		社会復帰相談庁舎完成(2カ年計画)
54年4月		研修課程の名称を医学課程，心理学課程，社会福祉学課程及び精神衛生指導課程に名称変更し，精神科デイ・ケア課程を新設
55年4月		研修庁舎完成(講義室・図書室・研修生宿舎)
58年1月 10月	土 居 健 郎	老人保健研究室を新設
60年4月	高 臣 武 史	
61年5月		厚生省設置法の一部改正により，国立高度専門医療センターの設置を決定 厚生省組織令の一部改正により，国立高度専門医療センターの名称と所掌事務が決定　国立高度専門医療センターの一つとして，国立武蔵療養所，同神経センターと国立精神衛生研究所を統合し，国立精神・神経センター設置 ナショナルセンターの1研究所として精神保健研究所に改組，精神身体病理部と優生部を統合し精神生理部としたほか，精神保健計画部及び薬物依存研究部を新設，1課9部19室となる
62年4月	島 薗 安 雄 (総長が所長事務取扱)	厚生省組織規程の一部改正により，国立精神・神経センターに国立国府台病院が統合し，2病院，2研究所となる 庶務課廃止，研究所に主幹を置く
62年6月 10月	藤 縄　昭	心身医学研究部(2室)と精神保健計画部システム開発研究室を新設
平成元年10月		社会復帰相談部に援助技術研究室を新設

6年4月	大 塚 俊 男	
9年4月	吉 川 武 彦	
11年4月		薬物依存研究部で研究室の改組があり，心理社会研究室と依存性薬物研究室となり，診断治療開発研究室を新設 精神薄弱部を知的障害部に名称変更
13年1月 14年1月	堺　宣 道	精神保健研究所創立50周年
14年6月 14年8月	高 橋 清 久 （総長が所長事務取扱） 今 田 寛 睦	
15年10月		司法精神医学研究部を新設（制度運用研究室、専門医療・社会復帰研究室、精神鑑定研究室）
16年4月 16年7月	金 澤 一 郎 （総長が所長事務取扱） 上 田　茂	
17年4月		市川市（国府台）から小平市（武蔵地区）に移転
17年8月	北井 曉子	
18年10月		自殺予防総合対策センターの新設（自殺実態分析室、適応障害研究室、自殺予防対策支援研究室）、成人精神保健部の増設（犯罪被害者等支援研究室、災害時等支援研究室）
19年6月	加我 牧子	
21年10月		精神生理部に臨床病態生理研究室を新設
22年4月		所長補佐の新設（和田 清）
23年12月		災害時こころの情報支援センターの新設（情報支援研究室）

2. 内部組織改正の経緯

	国立精神衛生研究所											国立精神・神経センター精神保健研究所										独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所	
組織	創立昭和27年1月	35年10月	36年6月	40年7月	46年6月	48年7月	49年7月	50年7月	54年4月	58年10月	61年4月	61年10月	62年4月	62年10月	元年10月	11年4月	13年4月	15年10月	18年10月	20年6月	21年10月	平成22年4月	平成23年12月
	総務課	→	総務課 精神衛生研修室 (6月)								総務課 精神衛生研修室	庶務課 精神衛生研修室	運営部庶務第二課 精神保健研修室	運営部庶務第二課 運営部企画室 精神保健研修室			運営部政策医療 企画課 精神保健研修室		運営局 政策医療企画課 精神保健研修室	運営局 政策医療企画課 精神保健研修室 庶務課 研究所事務係		**研究所事務室** 研究所事務係	
												精神保健計画部 統計解析研究室		精神保健計画部 統計解析研究室 システム開発研究室					精神保健計画部 統計解析研究室 システム開発研究室			**精神保健計画研究部** 統計解析研究室 システム開発研究室	
																			自殺予防総合対策センター 自殺実態分析室 適応障害研究室 自殺予防対策支援研究室			**自殺予防総合対策センター** 自殺実態分析室 適応障害研究室 自殺予防対策支援研究室	
												薬物依存研究部 薬物依存研究室 向精神薬研究室		薬物依存研究部 薬物依存研究室 向精神薬研究室		薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室			薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室			**薬物依存研究部** 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室	
	心理学部	精神衛生部	精神衛生部 心理研究室 精神衛生相談室 (4月)					精神衛生部 心理研究室			精神衛生部 心理研究室			心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室					心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室			**心身医学研究部** ストレス研究室 心身症研究室	
	児童精神衛生部	→		児童精神衛生部 精神発達研究室							児童精神衛生部 精神発達研究室	児童・思春期精神保健部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室		児童・思春期精神保健部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室					児童・思春期精神保健部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室			**児童・思春期精神保健研究部** 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室	
																							災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室
						老人精神衛生部	老人精神衛生部 老化研究室			老人精神衛生部 老化度研究室 老人保健研究室	老人精神衛生部 老化度研究室 老人保健研究室	成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室		成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室					成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室			**成人精神保健研究部** 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室	
												老人精神保健部 老化研究室 老人保健研究室		老人精神保健部 老化研究室 老人精神保健研究室					老人精神保健部 老化研究室 老人精神保健研究室			**精神薬理研究部** 精神薬理研究室 気分障害研究室	
	社会学部	社会精神衛生部			社会精神衛生部 ソーシャルワーク研究室						社会精神衛生部 ソーシャルワーク研究室	社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室		社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室					社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室			**社会精神保健研究部** 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室	
	生理学形態学部	精神身体病理部	精神身体病理部 生理研究室 (4月)								精神身体病理部 生理研究室 (4月)	精神生理部 精神機能研究室		精神生理部 精神機能研究室					精神生理部 精神機能研究室		精神生理部 精神機能研究室 臨床病態生理研究室	**精神生理研究部** 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室	
	優生学部	優生学部									優生部												
		精神薄弱部									精神薄弱部	精神薄弱部 診断研究室 治療研究室		精神薄弱部 診断研究室 治療研究室		知的障害部 診断研究室 治療研究室			知的障害部 診断研究室 治療研究室			**知的障害研究部** 診断研究室 治療研究室 発達障害支援研究室	
				社会復帰部				社会復帰相談部 精神衛生相談室			社会復帰相談部 精神衛生相談室	社会復帰相談部 精神保健相談研究室		社会復帰相談部 精神保健相談研究室	社会復帰相談部 精神保健相談研究室 援助技術研究室				社会復帰相談部 精神保健相談研究室 援助技術研究室			**社会復帰研究部** 精神保健相談研究室 援助技術研究室	
																		司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室	司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室			**司法精神医学研究部** 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室	

3. 独立行政法人国立精神・神経医療研究センター組織図
（平成24年3月31日現在）

4. 職員配置（平成24年　3月31日現在）

- 所　長（加我　牧子）
  - 所長補佐（和田　清（併））
  - （自殺予防総合対策センター）（センター長）（竹島 正（併））
    - 自殺実態分析室長（松本　俊彦（併））
      - 研　究　員（勝又陽太郎）
    - 適応障害研究室長（稲垣　正俊）
    - 自殺予防対策支援研究室長（川野　健治）
  - （副センター長）（松本　俊彦（併））
  - （災害時こころの情報支援センター）（センター長）（金　吉晴（併））
    - 情報支援研究室長（欠）
  - 精神保健計画研究部長（竹島　正）
    - 統計解析研究室長（立森　久照）
    - システム開発研究室長（欠）
  - 薬物依存研究部長（和田　清）
    - 心理社会研究室長（部長併任）
      - 研　究　員（嶋根卓也）
    - 依存性薬物研究室長（舩田　正彦）
    - 診断治療開発研究室長（松本　俊彦）
  - 心身医学研究部長（加我　牧子）（事務取扱）
    - ストレス研究室長（安藤　哲也）
    - 心身症研究室長（菊地　裕絵）
  - 児童・思春期精神保健研究部長（神尾　陽子）
    - 精神発達研究室長（部長併任）
    - 児童期精神保健研究室長（高橋　秀俊）
    - 思春期精神保健研究室長（部長併任）
  - 成人精神保健研究部長（金　吉晴）
    - 精神機能研究室長（栗山　健一）
    - 診断技術研究室長（部長併任）
    - 認知機能研究室長（福井　裕輝）「司法部併任」
    - 犯罪被害者等支援研究室長（中島　聡美）
    - 災害等支援研究室長（鈴木友理子）
  - 精神薬理研究部長（山田　光彦）
    - 精神薬理研究室長（斎藤　顕宜）
    - 気分障害研究室長（稲垣　正俊（併））
  - 社会精神保健研究部長（伊藤　弘人）
    - 社会福祉研究室長（野田　寿恵）
    - 社会文化研究室長（部長併任）
    - 家族・地域研究室長（堀口　寿広）
  - 精神生理研究部長（三島　和夫）
    - 精神生理機能研究室長（肥田　昌子）
    - 臨床病態生理研究室長（守口　善也）
  - 知的障害研究部長（稲垣　真澄）
    - 診断研究室長（太田　英伸）
    - 治療研究室長（軍司　敦子）
    - 発達障害支援研究室長（部長併任）
  - 社会復帰研究部長（伊藤順一郎）
    - 精神保健相談研究室長
      - 研　究　員（佐藤さやか）
    - 援助技術研究室長（吉田　光爾）
  - 司法精神医学研究部長（岡田　幸之）
    - 制度運用研究室長（菊池安希子）
    - 専門医療・社会復帰研究室長（安藤久美子）
    - 精神鑑定研究室長（部長併任）
      - 研　究　員（西中　宏吏）
      - 研　究　員（小松　容子）
      - 研　究　員（長沼　洋一）

5. 精神保健研究所構成員（平成23年度）

所長
加我　牧子

秘書室
笹　和紀　　南雲　郁子　　太田　玲子

部名	部長	室長	研究員	流動研究員	非常勤研究員	科研費研究員	科研費研究助手	センター研究助手	協力研究員	併任研究員	客員研究員	外来研究員 外来研究補助員	研究生	実習生	研究員員上
自殺予防総合対策センター	センター長 竹島　正（併任）	松本　俊彦（併任） 川野　健治 稲垣　正俊 （～2011/12/31） （2012/1/1～）	勝又　陽太郎		大槻　露華 山内　貴史 白神　敬介 小高　真美 （2011/8/1～）			滝澤　さなえ 八重樫　弘子 （～2011/4/30） 吉松　純子 （2011/5/24～）					高木　幸子 （2011/6/1～）		増田　久重 長島　弥生
災害時こころの情報支援センター	センター長 金　吉晴（併任） （2012/1/4～）														木村　美也子 （2012/1/12～） 緒方　若菜 （2012/1/12～） 坂巻　郁美 （2012/1/19～） 平井　由季菜 （2012/1/20～） 関根　由美子 （2012/2/1～） 宮下　規子 （2012/3/1～）
精神保健計画研究部	竹島　正	立森　久照		廣川　聖子 赤澤　正人 趙　香花			構　聡子 （～2011/4/30） 吉田　勺美 （2011/5/1～）	吉田　勺美 （～2011/4/30） 構　聡子 （2011/5/1～）	亀山　晶子		清田　晃生 桑原　寛 須賀　万智 助川　征雄 高橋　祥友 野口　正行 橋本　康男 松本　晃明 渡邉　直樹	河野　稔明 荘島　幸子	安藤　俊太郎 大類　真嗣 的場　由木 森川　すいめい 小野　さや香		西口　直樹 ソウ　由香 原　治子
薬物依存研究部	和田　清	舩田　正彦 松本　俊彦	嶋根　卓也	小堀　栄子 富山　健一			庄司　淑子 福田　百合子 斎藤　実穂子	中野　真紀 小島　恵子		小林　桜児 今村　扶美	山口　みほ 山野　尚美 近藤　あゆみ 淺沼　幹人 尾崎　茂		青尾　直也 高野　歩 池田　朋広		
心身医学研究部	小牧　元 （～2011/12/31）	安藤　哲也 菊地　裕絵		兒玉　直樹 （～2011/5/31） 上野　真弓				上村　利恵 坂本　克子 神谷　裕子 吉武　美喜 倉　五月	倉　尚樹 小原　千郷	大和　滋 有賀　元 濱田　孝 天野　智文	近喰　ふじ子 杉田　峰康 関山　敦生 前田　基成 兒玉　直樹 （2011/6/1～）		高橋　晶 辻　裕美子 樽松　文子 権藤　元治 藤川　哲也 金田一　賢顕 向井　智彦 （2011/7/1～）		
児童・思春期精神保健研究部	神尾　陽子	高橋　秀俊	井口　英子 （～2011/12/31）	森脇　愛子 中鉢　貴行		稲田　尚子 （2011/4/16～9/30）		小町　恵子	榊原　信子 辻井　弘美		大森　隆司 奥寺　崇 菊地　吉晃 黒田　美保 武田　俊信 土屋　賢治 飛松　省三 中島　洋子 三宅　篤子 則内　まどか 小石　誠二 （2011/6/1～） 平岩　幹男 （2011/7/1～） 長尾　圭造 （2011/11/1～）	稲田　尚子 （2011/10/1～）	石川　文子 遠藤　明代 武井　麗子 高橋　英之 森田　麻登 手塚　知子 （2011/4/16～） 平本　絵里子 （2011/6/1～） 横田　千賀子 （2011/6/1～） 片桐　正敏 （2011/6/1～）		橋本　邦子
成人精神保健研究部	金　吉晴	中島　聡美 松岡　豊 （～2012/1/31） 鈴木　友理子 栗山　健一 （～2011/12/31） （2012/1/1～） 福井　裕輝 （司法精神医学研究部併任）		本間　元康 岡島　純子 （～2011/6/30） 野口　普子		大沼　麻実 （2011/6/1～7/31） 大滝　涼子 （2011/10/1～） 河瀬　さやか （2011/11/21～） 成澤　知美 （2011/12/16～）	鈴木　春香 木村　美貴子 小山　さより 東　祐子 （2011/6/1～） 東山　明美 （2011/10/18～11/30）	水野　恵子 丸山　京子	石丸　径一郎 井筒　節 白井　明美 堤　敦朗 寺島　瞳 成澤　知美 （～2011/12/15） 西　大輔 西多　昌規 深澤　舞子 正木　智子 松岡　恵子 吉池　卓也	松岡　豊 （2012/2/1～）	宇野　正威 小酉　聖子 加茂　登志子 宮地　光恵 下山　晴彦 鈴木　伸一 北山　徳行	伊藤　正哉 大沼　麻実 （2011/8/1～）	小林　由季 永井　めぐみ 臼杵　理人 堀江　美智子 工藤　紗弓 奥山　紗由 伊東　史ヱ 伊藤　まどか 小暮　由美 島崎　みゆき 石田　牧子 （～2011/5/31） 加藤　典子 淺野　敬子 松田　陽子 村上　尚美 （2011/8/16～） 大滝　涼子 （2011/8/16～9/30） 中谷　優 （2012/3/1～）		内海　知子 （～2011/8/31） 奥村　和香子 （2011/10/1～） 雨宮　千晴 （2012/1/6～）

部名	部長	室長	研究員	流動研究員	非常勤研究員	科研費研究員	科研費研究助手	センター研究助手	協力研究員	併任研究員	客員研究員	外来研究員 外来研究補助員	研究生	実習生	研究層上
精神薬理研究部	山田　光彦	斎藤　顕宜 稲垣　正俊（併任） （～2011/12/31） （2012/1/1～）		岩井　孝志 （～2011/9/30） 橋本　富男		山田　美佐	越阪部　勝江 （～2011/4/30） 松谷　真由美 村松　浩美 櫻井　恭子		岩井　孝志 （2011/10/1～10/31）	米本　直裕	岡　淳一郎 長田　賢一 亀井　淳三 白川　修一郎 林　直樹 古川　壽亮 （2011/5/1～） 神庭　重信 （2011/5/1～） 高原　円 （2011/6/1～）	小高　真美 （～2011/6/30）	西岡　玄太郎 遠藤　香 杉山　梓 高原　円 （～2011/5/31） 中井　亜弓 廣瀬　倫孝 渡辺　恭江 高橋　弘 牧野　祐哉 宮田　茂雄 濱田　幸恵 （2011/6/1～） 神垣　有美 （2011/7/1～） 岩井　孝志 （2011/11/1～） 平山　重人 （2011/11/1～）	大橋　正誠	
社会精神保健研究部	伊藤　弘人	堀口　寿広 野田　寿恵		池野　敬 佐藤　真希子 （2011/5/16～）		清水　沙友里 （～2011/4/30）	江頭　織佳 熊谷　珠樹 原　わかな 村田　江里子 垣内　累美子 （2011/10/1～） 後藤　貴誉加 （2011/10/1～）	稲井　由紀子 山縣　眞美子	桑原　和江 佐藤　真希子 （～2011/5/15）		佐藤　洋 末安　民生 杉山　直也 平田　豊明 安野　史彦 八田　耕太郎 （2011/5/1～） 川畑　俊貴 （2011/6/1～）	奥村　泰之	藤田　純一 三澤　史斉 五十嵐　涼子 峯山　智佳		
精神生理研究部	三島　和夫	肥田　昌子 守口　善也		北村　真吾 榎本　みのり		野崎　健太郎 片寄　泰子 元村　祐貴 寺澤　悠理 （～2011/10/31） 大場　健太郎 大澤　要介 （2011/6/1～）	加藤　美恵 大嶋　美奈子	松本　有希子	三盃　亜美 田村　美由紀 阿部　又一郎 宗澤　岳史 草薙　宏明 梶　達彦 古田　光	亀井　雄一 塚田　恵鯉子	渡辺　範雄 海老澤　尚 山寺　亘 山寺　博史 上田　泰己 遠藤　拓郎 松浦　雅人 井上　雄一 大川　匡子 兼板　佳孝 内山　真 本多　真 池田　正明 白川　美也子 程　肇 樋口　重和 熊野　宏昭		金山　裕介 村上　裕樹 若田　忠之 中島　俊 岩垂　喜貴 （2011/6/1～） 寺澤　悠理 （2011/11/1～）		
知的障害研究部	稲垣　真澄	太田　英伸 軍司　敦子		崎原　ことえ 李　珩 安村　明 （2011/8/1～）		小久保　奈緒美 松田　芳樹 （～2011/9/30） 鈴木　浩太 佐久間　隆介 （～2011/10/31）	真嶋　麻子 （～2011/10/31） 須藤　茉衣子 刑部　仁美 （2011/7/19～） 河野　明佳 （2011/11/1～）	吉川　朋子 中村　紀子 刑部　仁美 （～2011/7/18） 大橋　啓子	矢田部　清美 中村　雅子	中川　栄二	木実谷　哲史 小池　敏英 小枝　達也 杉田　克生 竹市　博臣 田中　敦士 中村　俊 難波　栄二 林　隆 細川　徹 三砂　ちづる 山崎　広子 井上　祐紀	北　洋輔 関　美佳 （2011/9/15～） 戸田　宜子 （2011/10/12～）	小林　朋佳 後藤　隆章 山本　寿子 平井　真洋 （2011/8/1～） 佐久間　隆介 （2011/11/1～）		
社会復帰研究部	伊藤　順一郎	吉田　光爾	佐藤　さやか	高原　優美子 山口　創生		市川　健 下平　美智代 （2011/5/1～）	田中　純子 藤田　真純 梅田　典子 （2011/10/1～） 小川　友季 （2011/11/1～） 柴田　菜生 （2012/1/1～） 仲島　友子 （2012/3/1～）	檜垣　早苗	英　一也	安西　信雄 坂田　増弘 平林　直次	大嶋　巌 西尾　雅明 瀬戸屋　雄太郎	前田　恵子	浪久　悠 鬱川　信幸 久永　文恵 香田　真希子 小川　雅代		
司法精神医学研究部	岡田　幸之	菊池　安希子 安藤　久美子	長沼　洋一 西中　宏吏 小松　容子 福井　裕輝 （成人精神医療研究部併任）					三輪　靖子 堀　喜美		野田　隆政 朝波　千尋 出村　綾子 （2011/6/1～）			淺野　敬子 石塚　聖堂 増井　啓太 中澤　佳奈子 川田　良作		

Ⅱ　研究活動状況

１．精神保健研究所所長室

Ⅰ．概要

1)　人事

平成 23 年度の精神保健研究所所長は前年度に引き続き加我牧子が務めた. 加我は所長着任より内閣府大臣官房審議官（自殺対策推進室次長）として, また 22 年度の独法化以降は内閣府本府政策参与として, 自殺対策に関わる政策立案と情報発信に関与してきたが，本年度も引き続き従前同様の活動を行った.

精神保健研究所常勤研究員人事は巻頭言に記した通りであり，このほか流動研究員，科研費研究員，外来研究員など多数の若手研究者を迎えることができた．所長室秘書は笹和紀，南雲郁子が担当し，太田玲子，大橋啓子が補佐した.

2) 概況

独立行政法人国立精神・神経医療研究センターが発足（平成 22 年 4 月）して 2 年目となり，精神保健研究所は，昨年度に引き続き活発な研究活動を進めた．東日本大震災に関わる研究活動は，大災害の 10 年 20 年後を見据えたメンタルヘルス支援と研究を意識した着実な活動を継続している．機関誌『精神保健研究』（第 58 号）は東日本大震災特集を組み, 研究所の研究者により内外の活動を具体的に紹介した. 研究の詳細については各部の研究活動記録により研究の詳細を，具体的な支援活動については，巻末の災害支援活動の記録を合わせて参照されたい.

平成 24 年 1 月，精神保健研究所が昭和 27 年の国立精神衛生研究所の設立より満 60 年目の記念日を迎えるにあたり，創立 60 周年記念事業実行委員会（委員長 加我牧子，委員：和田清所長補佐，伊藤弘人，伊藤順一郎，稲垣真澄，岡田幸之各委員）を組織し，甲谷亨研究所事務室長の支援を受け，『精神保健研究所 60 周年記念誌』を発行した．また開所当時より発行している『精神衛生研究』『精神衛生資料』および継続誌である『精神保健研究』『精神保健研究所年報』について，平成 23 年 12 月分までの全誌をデジタルデータ化し DVD に収録した. これらは精神保健研究所 60 周年記念祝賀会（平成 24.1.20）にて配布され，今後，当センター図書館をはじめとして主要な研究機関および図書館に配布する予定である.

精神保健研究所では，患者さんやご家族，国民に役立つ研究を実践し，国の精神保健福祉政策策定に貢献するシンクタンクとしての機能を果たしながら，平成 23 年度には英文原著 111 編, 和文原著 50 編, 英文総説 3 編，和文総説 205，英文著書 7 編，和文著書 183 編（分担執筆含む）の報告をはじめ，国際学会発表 145 件，国内学会発表 369 件を行うなど研究成果の公表はここ数年，質の向上はもちろんのこと数値の上でも右肩上がりで増加してきている.

このほか，主要学会等で筆頭著者として優秀賞，奨励賞を受賞する若手研究者を輩出した．具体的には第 18 回日本時間生物学会学術大会で肥田昌子，栗山健一両室長， The 6th World Congress of the World Sleep Federation で栗山健一室長，塚田絵鯉子研究生，第 31 回日本社会精神医学会で安藤久美子室長，小髙真美流動研究員，第 53 回日本小児神経学会で後藤隆章元流動研究員，鈴木浩太科研費研究員，第 46 回日本アルコール・薬物医学会で嶋根卓也研究員が学会表彰を受けた.

平成 24 年 2 月 27 日に精神保健研究所研究報告会が開催され，優秀発表賞である青申賞には太田英伸室長，肥田昌子室長が，若手研究者優秀賞である寒露賞には岩井孝志研究生と元村祐貴科研費研究員が選出された.

研究所の広報活動としては，前年度に引き続き，広報誌「精研だより」を 7 号から 9 号まで刊行し，成人精神保健研究部，児童思春期精神保健研究部，社会精神保健研究部の各部長へのインタビューによる研究活動の紹介をはじめ，研究所内外とのコミュニケーションを向上するための記事を掲載した．さらに，おもに国内外からの訪問客，視察に訪れる来所者に配布することを念頭に，精神保健研究所の歴史および所内各部の研究活動内容について一覧できるパンフレットを作成した．雑誌「厚生労働」から

精研 60 周年にあたっての寄稿の依頼を受け，平成 24 年 2 月号に「国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所　創立 60 周年　過去から現在へ，そして未来へ」と題する記事を掲載することができた．

一方で平成 23 年度には総長を座長とする研究所再編検討委員会が，外部有識者もまじえて 3 回開催され，国立精神・神経医療研究センターの将来計画における，精神保健研究の意義と重要性を国内外に知っていただく必要性がさらに明らかになってきた．

精神保健研究所における精神保健福祉，薬物依存，心身医学，自殺対策，司法精神医学，発達障害，精神医療均霑化など，さまざまな精神保健専門領域の研修を専門家を対象として 20 課程を実施し，合計 1,157 名が受講した点も特記する．詳細は後述した．

3) 精神保健研究所へのゲスト

平成 23 年 7 月 28 日　Shin-Min Lee（李明濱）博士（Acting Director of Department of Health, Yuli Hospital / Professor of National Defense Medical Center）ならびに粟田主一部長（東京都健康長寿医療センター研究所）来所．（対応者　加我牧子所長，立森久照室長，稲垣正俊室長）

平成 23 年 10 月 31 日～11 月 1 日　メルボルン大学 Ian Everall 教授，Chee Ng 准教授らがコンファレンススクエア M プラスにおける国立精神・神経医療研究センターとメルボルン大学との合同シンポジウムのため来日．（対応者　自殺予防総合対策センターなど）

平成 24 年 1 月 10 日～13 日　自殺予防総合対策センターが中心となって Dr Shekhar Saxena 博士，Dr José M. Bertolote 教授，Xiangdong Wang 博士，Yutaro Setoya 博士（WHO）を招聘．学術総合センターにおけるシンポジウム，自殺予防対策，日本の精神保健の現状等に関する検討会議に出席された．（対応者　自殺予防総合対策センターなど）

平成 24 年 3 月 14 日　インドネシア民主党議員 3 名（ノファ・リヤンティ・ユスフ氏，アントン・スカルトノ・スラット氏，他 1 名）ならびにインドネシア民主党幹部 2 名（モハマド・イクサン・モジョ氏，ディディック・ムクリアント氏），通訳 1 名合計 6 名来所．（対応者　加我牧子所長，山田光彦部長，鈴木友理子室長，菊池安希子室長，肥田昌子室長）

Ⅱ．研究活動

1)　自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究

平成 13 年以来，精神保健研究所としてとりくんできた自殺予防に関わる研究をさらに発展させることをめざした研究を継続した．分担研究者としては障害児・者の家族における自殺に関わるメンタルヘルスについても検討をはじめた．（共同研究者：竹島正，松本俊彦，井上祐紀，稲垣真澄）

2)　自閉症，学習障害，AD/HD，精神遅滞（知的障害）の病態・診断・治療開発に関する研究

脳機能評価と早期診断法・治療法の確立をはかるため，臨床的・生理学的，神経心理学的研究を継続した．広汎性発達障害児の指導効果について二次元行動解析による他覚的評価も行った．（共同研究者：稲垣真澄，軍司敦子，井上祐紀，矢田部清美，山﨑広子）

3)　発達障害で期待されるコホートスタディの検討　（共同研究者：稲垣真澄，鈴木浩太，井上祐紀）

4)　小児大脳型 ALD 児の高次脳機能評価による診断ならびに治療効果判定に関する研究

造血幹細胞移植が唯一の治療法である難治性中枢神経疾患 ALD の治療時期決定と治療後評価のため，全国からの紹介症例の評価を実施し，ALD にみられる高次脳機能障害を詳細に検討した．（共同研究者：稲垣真澄，軍司敦子，崎原ことえ，中村雅子，小久保奈緒美，佐久間隆介）

5)　Landau-Kleffner 症候群の臨床研究

後天性失語症，言語性聴覚失認と高度の脳波異常を呈するまれな小児症候群の疫学調査と診断治療後遺症に関する実態調査をもとに研究を継続した．（共同研究者：稲垣真澄，太田玲子）

6)　発達障害児の行動異常モデルに関する研究

Bronx waltzer（bv）マウスはヒトの発達障害の各側面を反映する動物モデルとして適当であり，自閉性障害などの病態研究，治療研究のための研究を継続した．（共同研究者：稲垣真澄，太田英伸，李珩，刑部仁美）

Ⅲ．社会的活動

所長は内閣府自殺対策推進室の定例業務に加え，広報ならびに情報収集のための活動を通じて，社会に貢献した．また，厚生労働省発達障害者施策検討会委員，厚生労働省認知行動療法研修事業評価委員会委員，厚生労働省自殺対策のための戦略研究運営委員，独立行政法人国立特別支援教育総合研究所運営委員，などを務めた．

また国立精神・神経医療研究センター病院併任医師として小児神経科外来で知的障害，自閉症，注意欠如・多動性障害，学習障害などの発達障害児の診療とご家族へのサポートを行った．平成 24 年 4 月設立の「特定非営利活動法人 ALD の未来を考える会　ALD 親の会顧問として ALD 患児とその家族への支援を継続することになる．日本障害者スポーツ協会専門委員会医学委員として知的障害者のスポーツを通じての社会参加に貢献した．

12 月 1 日～3 日には，Joint Academic Conference on Autism Spectrum Disorders　を開催した．この国際会議は，日米自閉症スペクトラム研究会議実行委員会が主催し，Autism Speaks の共催，厚生労働省，文部科学省，日本発達障害ネットワーク，国立精神・神経医療研究センター，日本小児神経学会の後援を得て開催したもので，所長が実行委員長をつとめた．

精神保健研究所では研究成果を社会に還元するための情報発信を常時行っている．新聞，雑誌，テレビなどのマスメディアからの取材，発表については概要を一覧にして示した(p259).

若手研究者への教育活動は研究所職員として当然の業務であり，研究者育成のみならず，病院レジデントの指導にも時間とエネルギーを割いている．研究所全体として，学生教育については東京大学や防衛医科大学校医学部学生に対する実習を，通年，各研究部が交代で担当している．

その他に研究所主催の研修や各種講演を通じて医師，保健師，心理士，社会保健福祉士，言語聴覚士など専門職に対する教育を行い，本年度も研究成果を社会に還元した．大学医学部その他の客員教授，非常勤講師などの依頼を受け，直接学生教育に携わる機会も多い．これら研究者の対外的活動による社会貢献に関する一覧表も参照されたい(p262).

Ⅳ．　研究業績

Ａ．刊行物

(1) 原著論文

1) Kita Y,　Gunji A, Inoue Y, Goto T, Sakihara K, Kaga M, Inagaki M, Hosokawa T: Self-face recognition in children with autism spectrum disorders: A near-infrared spectroscopy study. Brain Dev. 33: 494-503, 2011.
2) Kobayashi T, Inagaki M, Kaga M: Professional Caregiver's View on Mental Health in Parents of Children with Developmental Disabilities: A Nationwide Study of Institutions and Consultation Centers in Japan. IISRN Pediatrics　Volume 2012 (2012), Article ID 121898, 7pages　doi:10.5402/2012/121898.
3) Inoue Y, Sakihara K, Gunji A, Ozawa H, Kimiya S, Shinoda S, Kaga M, Inagaki M: Reduced prefrontal hemodynamic response in children with AD/HD during the Go/NoGo task: A NIRS study. Neuroreport 23: 55-60, 2012.
4) 吉田有里，小池敏英，雲井未歓，稲垣真澄，加我牧子：国語学習の低成績の生起に及ぼすひらがな音読困難の影響について　―小学校 2 年生を対象とした検討―．LD 研究，21：116-124，2011.
5) 小林朋佳，稲垣真澄，軍司敦子，矢田部清美，北洋輔，加我牧子，後藤隆章，小池敏英：学童における呼称能力の発達とひらがな読み書き能力との関連．脳と発達 43：465-470，2011.

(2) 総説

1) 加我牧子：発達障害の認知機能評価．認知神経科学 13：29-33，2011.
2) 加我牧子：小児の誘発電位　基礎．特集「脳機能計測法を基礎から学ぶ人のために」臨床神経生理学 39（4）：227-231，2011.
3) 加我牧子：小児聴覚失認の診療．音声言語医学 52：316-321，2011.
4) 加我牧子，軍司敦子，稲垣真澄：発達障害における認知機能障害と神経生理学的所見．医学のあゆみ 239：609-613，2011.

5)　加我牧子：症状からアプローチするプライマリケア．日本医師会雑誌第 140 巻特別号（2），325-329，2011.

(3) 著書

1)　加我牧子：加藤敏，神庭重信ほか編．脂質代謝障害（p．409），知的障害者福祉法（p．699），糖質代謝障害（p．760），レッシュ=ナイハン症候群（p．1080）．現代精神医学辞典，弘文堂，東京，2011.
2)　加我牧子：VI．小児の症状，観察と看護，Q34 発達の遅れについて，教えてください．これだけは知っておきたい小児ケア Q&A．総合医学社，東京，pp．78－79，2011.
3)　稲垣真澄，加我牧子：診断の考え方．加我牧子，稲垣真澄編：小児神経学．診断と治療社，東京，pp．422-424，2011.
4)　軍司敦子，加我牧子：自閉症の非侵襲的脳機能検査．加我牧子，稲垣真澄編：小児神経学．診断と治療社，東京，pp．506-507，2011.
5)　加我牧子：ランドー・クレフナー症候群．「臨床精神医学」編集委員会編：臨床精神医学．株式会社アークメディア，東京，pp．325-327，2011.
6)　加我牧子：小児の発達の遅れ．日本医師会学術企画委員会編，跡見　裕，磯部光章，井廻道夫，北川泰久，北原光夫，弓倉　整監修：症状からアプローチするプライマリケア．医歯薬出版株式会社，東京，pp．325-329，2011.
7)　Yatabe K, Goto T, Watanabe K, Kaga M, Inagaki M: Reading and Writing Achievement Tests for Assessing Orthographical and Phonological Impairments of Japanese Children with Developmental Disorders. In W. Sittiprapaporn (Ed.), Learning Disabilities. Rijeka, Croatia: InTech Publishing. ISBN 978-953-51-0269-4. pp. 69-86, 2012.
8)　加我牧子：5　知的障害．社会福祉学習双書編集委員会編：社会福祉学習双書 2012　14　医学一般　人体の構造と機能及び疾病保健医療サービス．社会福祉法人全国社会福祉協議会，東京，pp．124-126，2012.

(4) 研究報告書

1)　加我牧子：自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究．厚生労働科学研究補助金障害者対策総合研究事業「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究（研究代表者：加我牧子）」平成 23 年度総括・分担研究報告書，pp．1-6，2012.
2)　加我牧子，井上祐紀，太田玲子，稲垣真澄：障害児・者と家族における自殺の実態と自殺予防に関する研究．厚生労働科学研究補助金障害者対策総合研究事業「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究（研究代表者：加我牧子）」平成 23 年度総括・分担研究報告書，pp．7-11，2012.
3)　加我牧子，稲垣真澄，軍司敦子，崎原ことえ，中村雅子，小久保奈緒美，安村明，佐久間隆介：小児副腎白質ジストロフィーの超早期診断法開発に関する研究．厚生労働科学研究補助金難治性疾患克服研究事業「ライソゾーム病（ファブリ病含む）に関する調査研究（研究代表者：衛藤義勝）」平成 23 年度 総括・分担研究年度終了報告書，pp．112-114，2012.

(5) 翻訳

(6) その他

1)　Kaga M: About the author:Isabelle Rapin, MD. Brain Dev. 33: 449, 2011.
2)　Kaga M: New year's greetings. Brain Dev. 34: 1, 2012.
3)　加我牧子，榊原洋一，清水教一，宮島祐，作田亮一：座談会採録．小児科系医学雑誌の今後の展望—和文・英文誌の意義と投稿のすすめ—．脳と発達，43：pp．173-182，2011.
4)　稲垣真澄，小林朋佳，北　洋輔，井上祐紀，加我牧子，神尾陽子：読み書きのつまずきに関する全国調査（その 1）－担任教師の視点－．脳と発達　43；S．322，　2011.
5)　栗山進一，大内美南，稲垣真澄，角田和彦，栗原亜紀，安原昭博，渡辺端香子，上山真知子，福地　成，加我牧子：自閉症におけるビタミン B_6 反応性を予測する徴候・バイオマーカーの解明．脳と発達　43；S．183，　2011.
6)　宮内彰彦，長嶋雅子，森本哲，稲垣真澄，加我牧子，下澤伸行，山形崇倫，桃井真理子：内包から延髄の錐体路病変で発症した副腎白質ジストロフィーの 1 例．脳と発達　43；S．246，2011.

7) 小林朋佳，稲垣真澄，北　洋輔，井上祐紀，加我牧子，田中康雄，神尾陽子：読み書きのつまずきに関する全国調査（その 2）: ADHD 症状との関連－担任教師の視点－．脳と発達　43 ; S. 323，　2011.
8) 佐久間 隆介，加我 牧子，小笠原 恵，軍司 敦子，後藤 隆章，稲垣 真澄：精神遅滞をともなう自閉症児における要求言語の獲得を目指した ABA 介入効果の検討 - 二次元評価尺度を用いて - ．脳と発達　43 ; S. 341，　2011.
9) 鈴木浩太，北洋輔，井上祐紀，加我牧子，稲垣真澄：乳幼児期の母親の養育行動が学童期の子どもの行動に与える影響：豊かな出産経験の効果に関する出生コホート調査，脳と発達　43 ; S. 334．2011.
10) 加我牧子：大熊先生追悼．大熊輝雄先生追悼文集，pp．116-117，大熊輝雄先生追悼文集編集委員会，2011.
11) 加我牧子：巻頭言．平成 22 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所年報 24（通巻 57 号），　2011.
12) 加我牧子：お医者さんとお人形さん，そしておとなとこども．小児保健研究，70 ; 4，pp．465，2011.
13) 加我牧子：これからも伝えたいこと．厚生科学 weekly　503 号（2011 年 8 月 12 日号）.
14) 加我牧子：自閉症の生物学的精神医学研究に期待すること．アスペハート 9 月号，24-25，2011.
15) 加我牧子：巻頭言．精神保健研究 24 号（通巻 57 号），2011.
16) 加我牧子：ご挨拶~60 年の積み重ねとあるべき姿～．精神保健研究所創立 60 周年記念誌：1-3，2012.
17) 加我牧子：国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所　創立 60 周年．過去から現在へ，そして未来へ．厚生労働 2 月号，pp．58-63，2012,
18) 加我牧子：藤田利治先生に．藤田利治先生追悼シンポジウム　遺稿・追悼文集，p．94，統計数理研究所　リスク解析戦略研究センター，2012.
19) 加我牧子：巻頭言 Brain & Development 編集委員長から．脳と発達　44 ; 3，p．2，　2012.

B．学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

1) 加我牧子：ちょっと気になる子の発達への理解と日常生活での支援の仕方．大田区子どもフォーラム，東京，2011.7.23.

(2) 一般演題

1) Kita Y, Gunji A., Inoue Y, Goto T, Sakihara K., Inagaki M., Kaga M., Hosokawa T: Self-face recognition in children with autism spectrum disorders: a near-infrared spectroscopy study. Exploring Autism Research Collaboration between Japan and the United States: Joint Academic Conference on Autism Spectrum Disorders. Tokyo. Dec 1-3, 2011.
2) Gunji A, Kaga M, Inagaki M:　Voice-specific brain responses: a NIRS study. 40th Annual Meeting International Neuropsychological Society. Montréal, Québec, Canada，February 15-18, 2012.
3) 稲垣真澄，小林朋佳，北　洋輔，井上祐紀，加我牧子，神尾陽子：読み書きのつまずきに関する全国調査（その 1）－担任教師の視点－．第 53 回日本小児神経学会総会．神奈川，2011．5．26-28.
4) 栗山進一，大内美南，稲垣真澄，角田和彦，栗原亜紀，安原昭博，渡辺端香子，上山真知子，福地　成，加我牧子：自閉症におけるビタミン B_6 反応性を予測する徴候・バイオマーカーの解明．第 53 回日本小児神経学会総会，神奈川，2011．5．26-28.
5) 小林朋佳，稲垣真澄，北　洋輔，井上祐紀，加我牧子，田中康雄，神尾陽子：読み書きのつまずきに関する全国調査（その 2）: ADHD 症状との関連－担任教師の視点－．第 53 回日本小児神経学会総会，神奈川，2011．5．26-28.
6) 佐久間隆介，加我牧子，小笠原恵，軍司敦子，後藤隆章，稲垣真澄：精神遅滞をともなう自閉症児における要求言語の獲得を目指した ABA 介入効果の検討 - 二次元評価尺度を用いて - ．第 53 回日本小児神経学会総会．神奈川，2011．5．26-28.
7) 鈴木浩太，北洋輔，井上祐紀，加我牧子，稲垣真澄：乳幼児期の母親の養育行動が学童期の子どもの行動に与える影響：豊かな出産経験の効果に関する出生コホート調査．第 53 回日本小児神

経学会総会，神奈川，2011．5．26-28.

8) 宮内彰彦，長嶋雅子，森本哲，稲垣真澄，加我牧子，下澤伸行，山形崇倫，桃井真理子：内包から延髄の錐体路病変で発症した副腎白質ジストロフィーの 1 例. 第 53 回日本小児神経学会総会，神奈川，2011．5．26-28.

9) 松田 芳樹，泉仁美，井上祐紀，後藤雄一，加我牧子，稲垣 真澄：Bronx waltzer マウスにおける不安行動の発達的変化の検討　Developmental changes of anxiety-related behaviors in Bronx waltzer mice.　第 34 回日本神経科学大会，横浜，2011．9．17.

10) 北　洋輔，軍司敦子，後藤隆章，稲垣真澄，加我牧子：脳機能計測を用いた Social skill training の有効性評価：近赤外線スペクトロスコピー(NIRS) と行動評価との併用から見る問題点．日本特殊教育学会第 49 回大会，青森，2011．9．23-25.

11) 吉田 有里，小池 敏英，雲井 未歓，稲垣 真澄，加我 牧子：国語学習の低成績の生起に及ぼすひらがな音読困難の影響について　―小学校 2 年生を対象とした検討―．日本 LD 学会第 20 回大会，東京，2011.9.17-19.

12) 後藤隆章，小久保奈緒美，小林朋佳，小池敏英，加我牧子，稲垣真澄：視覚イメージの付加に基づく漢字単語読み支援：Developmental Dyslexia 児に対する効果持続性の検討．第 16 回認知神経科学会学術集会，福岡，2011.10.22-23.

13) 小関道夫，下澤伸行，矢部普正，加藤俊一，加藤剛二，加我牧子，辻省次，鈴木康之：副腎白質ジストロフィーに対する造血幹細胞移植効果：国内症例の包括的検討, HSCT for ALD in Japan. 第 53 回日本先天代謝異常学会，千葉，2011.11.25.

14) 小林朋佳，稲垣真澄，山崎広子，北洋輔，加我牧子：視覚誘発脳波を用いた発達性読み書き障害児の大細胞系機能評価．第 41 回日本臨床神経生理学会・学術大会，静岡，2011.11.10.

15) 山崎広子，稲垣真澄，小林朋佳，北洋輔，加我牧子：視覚誘発脳波を用いた緑内障の大細胞系機能評価．第４１回日本臨床神経生理学会・学術大会，静岡，2011.11.10.

16) 崎原ことえ，軍司敦子，古島わかな，北洋輔，加我牧子，稲垣真澄：顔の構造知覚および意味処理に関与する事象関連オシレーションの解析．第４１回日本臨床神経生理学会・学術大会，静岡，2011.11.10.

17) 軍司敦子，加我牧子，稲垣真澄：近赤外線分光法を用いたヒト声に特異的な脳活動の検出．第４１回日本臨床神経生理学会・学術大会，静岡，2011.11.10.

18) 遠藤ゆかり，中川栄二，榎園崇，井上祐紀，安村明，加我牧子，稲垣真澄：小児自閉性症状に対する薬物治療の実態調査－二次アンケート集計結果報告－. 第 52 回日本児童青年精神医学会総会，徳島，2011.11.10-12.

(3) 研究報告会

1) 加我牧子，稲垣真澄，軍司敦子，崎原ことえ，小久保奈緒美，中村雅子：小児副腎白質ジストロフィー症（ALD）の高次脳機能評価について．厚生労働科学研究　難治性疾患克服研究事業「ライソゾーム病（ファブリー病含む）に関する調査研究班」班会議，東京，2011.9.28.

2) 太田英伸，関　美佳，戸田宜子，李　珩，刑部仁美，加我牧子，稲垣真澄：新生児集中治療室における光環境デザイン．精神保健研究所報告会，東京，2012.2.27.

3) 崎原ことえ，軍司敦子，井上祐紀，北　洋輔，加我牧子，稲垣真澄：自閉症スペクトラム障害児における顔識別時脳波の事象関連オシレーション解析．精神保健研究所報告会，東京，2012.2.27.

4) 李　珩，太田英伸，刑部仁美，関　美佳，戸田宜子，松田芳樹，加我牧子，稲垣真澄：不安様行動における CCKA /CCKB 受容体の異なる役割を皮質脳波を指標として明らかにする．精神保健研究所報告会，東京，2012.2.27.

D．学会活動（学会主催，学会役員，座長，編集委員）

(1) 学会役員

1) 日本小児神経学会理事
2) 日本小児神経学会評議員
3) 日本臨床神経生理学会理事
4) 日本臨床神経生理学会技術教育試験委員会委員
5) 小児脳機能研究会世話人
6) 日本小児神経学会関東地方会運営委員

7) 認知神経科学会評議員
8) 日本発達障害学会理事

(2) 座長

1) 加我牧子：座長．英語で論文を書こう！第 53 回日本小児神経学会総会，神奈川，2011.5.27.
2) 加我牧子：座長．教育講演 1「神経疾患治療の最前線」．日本発達障害学会第 46 回研究会，鳥取，2011.8.20.
3) 加我牧子：座長．教育講演Ⅲ．認知科学よりみた発達障害の脱抑制-サッケード，Go/NoGo，強化学習課題を用いて-小児聴覚失認の診療．第 16 回認知神経科学会学術集会，福岡，2011.10.22-23.
4) 加我牧子：座長．シンポジウム 9　学習障害児の脳機能．第 41 回日本臨床神経生理学会・学術大会，静岡，2011.11.11.

(3) 学会誌編集委員等

1) 日本小児神経学会機関誌 Brain & Development 編集委員長
2) 発達障害学会誌　編集委員
3) Journal of Child Neurology 編集委員

2. 精神保健計画研究部

Ⅰ. 研究部の概要

精神保健計画研究部は精神保健に関する計画の調査及び研究を行うため昭和 61 年に設置された．精神保健計画研究部の研究は，①精神保健福祉の現況と施策効果のモニタリングのための技術の開発と実施（モニタリング研究），②精神科医療の現場における治療やリハビリテーション技術に関する科学的根拠（evidence）を充実させるための現場との共同実証研究や研究方法論の提供（臨床疫学研究），③精神保健福祉施策の重要課題の解決方策を得るための情報収集と分析（政策情報研究）に区分できる．

①に関しては，「精神保健福祉資料（630 調査）」の実施と分析，精神療養病棟の役割の検討，医療保護入院の保護者に関する調査などを行った．②に関しては，レット症候群の実態に関する疫学調査，思春期摂食障害に関する疫学調査，レセプト情報を利用したてんかんを有する者の医療機関利用の実態等の共同研究を行った．③に関しては，精神医療の場で経験している自殺ならびに自殺予防に役立っていると考えられる取り組みの調査，てんかんの診療・相談体制に関する実態調査，精神病初回発症例の早期支援・早期治療のための精神保健システムの検討，精神保健システム等の国際比較，困窮者とメンタルヘルスの調査への参画などを行った．

部長：竹島正，統計解析研究室長：立森久照，システム開発研究室長：（公募），流動研究員（3 名）：赤澤正人，趙香花，廣川聖子，外来研究員（2 名）：河野稔明，荘島幸子，客員研究員（9 名）：清田晃生，桑原寛，須賀万智，助川征雄，高橋祥友，野口正行，橋本康男，松本晃明，渡邉直樹，協力研究員（1 名）：亀山晶子，研究生（5 名）：安藤俊太郎，大類真嗣，小野さや香，的場由木，森川すいめい，センター研究助手（1 名）：吉田勺美（4/30 まで），構聡子（5/1 より），科研費研究助手（1 名）：構聡子（4/30 まで），吉田勺美（5/1 より），研究費雇上（3 名）：ソウ由香，西口直樹，原治子

Ⅱ. 研究活動

1)　精神保健医療福祉体系の改革に関する研究

「精神保健福祉資料（630 調査）」による「精神保健医療福祉の改革ビジョン」等に示された達成目標の進捗状況のモニタリング調査を実施した．具体的には，(1)1996 年から 2009 年までの 630 調査データの分析による改革ビジョンの数値目標の変化の把握，(2)電子調査票の利用状況と回答時期の変化の検討，(3)「かえるかわる 精神保健医療福祉の改革ビジョン研究ページ」の継続的な運営，(4)精神疾患に関する理解の深化のためのメディアカンファレンス等を行った．（立森，河野，赤澤，趙，廣川，竹島）

2)　医療保護入院の保護者に関する調査

医療保護入院制度に関わる医療機関，市町村，保護者へのアンケート調査を通じて，医療保護入院制度の運用実態及び課題を明らかにし，制度の見直しや適正な運用に役立てる情報を得ることを目的として，岡山県の精神科病院 20 施設を対象に，保護者制度の運用実態に関する調査を行った．患者と保護者の平均年齢はそれぞれ 67 歳，63 歳と高く，保護者の高齢化などにともない，保護者の意向と，実際に保護義務を履行できる可能性の間に解離が生じている可能性があることことが明らかになった．また，市町村長が保護者となった場合に十分に保護義務を履行できていない可能性があることが示唆された．保護者制度の見直しは精神科医療，患者の人権にも大きな影響を与えることから，大規模な実証データなどに基づいて慎重に検討を進める必要があると考えられた．（趙，立森，河野，竹島）

3)　精神保健システム等の国際比較

欧米では，精神障害者の脱施設化と共に，彼らのホームレス状態が社会問題となった．しかし，社会や家族からの支援の乏しい精神障害者の場合，脱施設化の有無にかかわらず，ホームレス状態になりやすいことも推察され，精神障害者のホームレス状態の予防やホームレス状態からの脱却に向けてメンタルヘルスが果たせる役割を検討していく必要がある．本研究では，ホームレスとメンタルヘルスに関する諸外国の情報収集を目的に，日本，中国，韓国で実施されているホームレス対策とホームレスが抱えているメンタルヘルスの問題についての文献検討を行った．（趙，川野，竹島）

4) レセプト情報を利用したてんかんを有する者の医療機関利用の実態

てんかんは，乳幼児・小児から成人・老年に至る年令層に及ぶ患者数の多い神経疾患であるが，発達障害や精神障害への対応や時に外科治療を要するなど，その診療には診療科の枠を超えた人的・物的医療資源の活用が必要とされる．しかし我が国のてんかん診療は，歴史的に中核となる診療科が不明確な事もあり，必ずしも診療体制の整備は十分ではなく，てんかんの患者数や地域における診療実態が正確に把握されていないのが現状である．そこで，レセプト情報を分析することにより，加入者の性・年齢別のてんかんによる受療者数および受療率などを明らかにし，またそれに基づいて全国のてんかんによる受療者数を推計することとし，その準備を行った．（立森，河野）

5) てんかんの診療・相談体制に関する実態調査

広い年齢層に及び患者数の多い神経疾患であり，複数の診療科によるケアを要する一方で，中核となる診療科が不明確なてんかんについて，診療・相談体制の整備を目的として地域における実態を調査するため，その準備として聞き取り調査を行った．また，てんかんに関して，各地域の診療・相談体制，医療関係者や住民への情報提供，障害者福祉サービスの水準などの項目を盛り込んだ質問紙を作成し，大学の精神医学講座担当者，各都道府県の精神科病院協会会長，精神科診療所協会会長，精神保健福祉センター所長に回答を依頼した．（竹島，河野）

6) レット症候群の実態に関する疫学調査

本邦におけるレット症候群の患者数とその分布を明らかにすることを目的とした疫学調査を協同で実施した．主に方法論的な面の支援，調査対象施設の抽出，および解析を担当した．全国の小児科を有する全病院に大学医学部付属病院とレット症候群の患者が集中すると考える施設を加えた母集団から，層化無作為抽出された施設を対象に一次調査としてレット症候群の患者数についての質問紙調査を郵送にて実施し，全国のレット症候群の推計患者数とその分布を得た．さらに一次調査においてレット症候群の患者がいると回答した施設を対象に，各症例の詳細を尋ねる二次調査を郵送法にて実施し，その結果に基づいて重複患者を省くなど，先に求めた全国のレット症候群の推計患者数とその分布を更新した．（立森）

7) 思春期摂食障害に関する疫学調査

思春期年代の摂食障害の有病率，その日常生活への影響などを明らかにするための疫学調査を協同で実施する．複数の調査地域において中学生を対象にアンケート調査を実施し，さらにアンケート調査結果に基づいて抽出された生徒・保護者に対して構造化面接を実施した．構造化面接に用いるコンピュータ支援面接システムおよび調査票の作成，研究計画の立案などを担当し，調査体制の準備を完了し，訪問面接調査を実施した．また構造化面接による診断の妥当性の検討も行った．（立森）

8) 精神医療の場で経験している自殺ならびに自殺予防に役立っていると考えられる取り組みの調査

平成 22 年度に全国の 1,407 の精神科医療機関を対象として実施した質問紙調査の結果に基づき，精神科医療機関における自殺発生率ならびに医療機関が経験する自殺の実態把握のための分析，精神科医療機関で取り組まれている自殺予防に役立っている取組についての聞き取り調査を行った．推定自殺発生率は通院 100.5，入院 154.5 であり，精神科医療の場は自殺予防の取組を進める上で重要な場であることが明らかになった．また精神科医療で経験される自殺は，比較的継続的な治療関係を持っている事例として特徴づけられ，リスクアセスメントの方法や，受診が途切れた際のフォローアップ体制の整備等が自殺予防に役立つ可能性が示唆された．（竹島，廣川，赤澤）

9) 精神病初回発症例の早期支援・早期治療のための精神保健システムの検討

精神病初回発症例の早期支援・早期治療と，児童青年期に多く見られるメンタルヘルスの問題への対応の向上の両者を実現することのできる精神保健システムを検討することを目的として，地域，行政と精神科医療機関の間で，児童思春期をめぐる連携の発達している H 市において聞き取り調査を行った．早期介入の精神保健システムは，それが単独の目的をもって存在するのでなく，母子保健，児童福祉，学校保健などと連携しながら，地域に発生する多様なニーズに応えていくサービス，連携の一環であることが期待された．（竹島，立森）

10) 思春期・青年期の性的少数者の自殺予防のために役立つと思われる学校での自己構築支援モデルの構築

思春期・青年期の性的少数者にとって「悲惨」とされる学校生活において，性的少数者の心の健康の保持・増進や良好な人格形成を支えることは喫緊の課題である．本研究では，思春期・青年期の性的少数者が学校生活のなかで経験する不適応の状況や生き難さを把握し，性的少数者としての自己構築を支えるモデルを構築することを目的とした．教員・養護教諭への質問紙調査とインタビューから，性的少数者と接触経験のないこと，性的少数者に関する知識不足，対応の不安，近寄りがたさ，理解できないといった要因が性的少数者生徒との関わりの困難を生み出していることが明らかになった．また当事者へのインタビューからは，思春期・青年期に自らのセクシュアリティに自覚的でない場合が多いこと，その場合にも漠然とした性別違和を感じていることが見出された．また学校生活においては周囲の振る舞いに合わせるといった対処方略を取っていることが明らかになった．（荘島，川野）

Ⅲ．社会的活動

1)　市民社会に対する一般的な貢献

竹島正，立森久照，河野稔明，廣川聖子，赤澤正人は，精神保健計画研究部共通の取り組みとして，ウェブサイト「かえるかわる　精神保健医療福祉の改革ビジョン研究ページ」を運営し，わが国の精神保健医療福祉の実態等に関する情報を提供した．

竹島正は，全国精神保健福祉連絡協議会の副会長としてその活動を支援した．また，「支援付き住宅推進会議」委員，NPO 法人「自立支援センターふるさとの会」の苦情解決第三者委員会委員を務めた．

立森久照は，東京大学大学院医学系研究科精神保健学分野と共同研究を行なった．

竹島正，立森久照はメディアカンファレンスを通して，メディア関係者への精神保健啓発を行った．

2)　専門教育面における貢献

竹島正は，第 31 回日本社会精神医学会（大会テーマ「かえる・かわる―メンタルヘルスプロモーションと精神保健医療改革―」の会長を務めた．また，自殺対策のための各種研修の実施・支援を行い，自殺対策のための専門家養成に貢献した．

立森久照は，東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻精神保健学分野の客員研究員として，その機関に所属する研究者，大学院生と共同研究を実施した．情報・システム研究機構統計数理研究所の客員准教授として，同機関の研究者，大学院生と共同研究を実施した．東京大学および防衛医科大学の医学部学生実習，および東京大学医学部健康総合科学科学生実習に協力し，人材養成に貢献した．

3)　精研の研修の主催と協力

竹島正は，精神保健計画研究部長として，第 48 回精神保健指導課程（2011.7.13-15）の主任を務めた．また，自殺予防総合対策センター長として，第 5 回自殺総合対策企画研修（2011.8.24-26），第 4 回精神科医療従事者研修（2011.11.29-30）の主任，第 2 回心理職自殺予防研修（2011.7.5-6），第 2 回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修（2011.11.8-9），第 3 回精神科医療従事者自殺予防研修（2011.9.6-9.7）の副主任を務めた．

立森久照は，第 48 回精神保健指導課程（2011.7.13-15）の副主任を務めた．

4)　保健医療行政・政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

竹島正は，内閣府本府政策参与（非常勤），内閣府自殺対策推進会議オブザーバー，厚生労働省平成 23 年度自殺防止対策事業評価委員長，厚生労働省平成 23 年度地域自殺対策推進事業評価委員会委員，精神保健福祉士試験委員，船橋市自殺対策連絡会議委員長，全国精神保健福祉相談員会相談役，日本・プライマリ・ケア連合学会心のケア・自殺予防ワーキンググループメンバー，地域からこころの医療を考える会会長，公益社団法人全日本断酒連盟顧問，子どもたちのインターネット利用について考える研究会フェローを務めた．また，アジア・パシフィック・コミュニティ・メンタルヘルス・プロジェクトに参画して，アジア地域に適した地域精神保健の推進の共同研究を行った．さらに，国立精神・神経医療研究センターとメルボルン大学の 2010 年

9 月から 5 年間の「メンタルヘルスプログラムにおける協力関係に関する覚書」(MEMORANDUM OF UNDERSTANDING 2010 COOPERATION IN MENTAL HEALTH PROGRAMS AS BETWEEN NCNP and THE UNIVERSITY OF MELBOURNE)に基づき，国立精神・神経医療研究センター・メルボルン大学合同カンファレンスを開催した.

立森久照は, 日本医療政策機構市民医療協議会のがん政策情報センタープロジェクト外部評価委員を務めた.

Ⅳ. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

1) Sawamura K, Tachimori H, Koyama T, Koyama A, Naganuma Y, Kim Y, Takeshima T: Lay diagnoses and views on causes, coping strategies, and treatment for schizophrenia. Community Mental Health Journal 48(3): 309-16, 2011.
2) Yamauchi T, Semba T, Sudo A, Takahashi N, Nakamura H, Yoshimura K, Koyama H, Ishigami S, Takeshima T: Effects of psychiatric training on nursing students' attitudes towards people with mental illness in Japan. International Journal of Social Psychiatry 57(6): 576-579, 2011.
3) Sado M, Yamauchi K, Kawakami N, Ono Y, Furukawa T A, Tsuchiya M, Tajima M, Kashima H, Nakane Y, Nakamura Y, Fukao A, Horiguchi I, Tachimori H, Iwata N, Uda H, Nakane H, Watanabe M, Orui M, Funayama K, Naganuma Y, Hata Y, Kobayashi M, Ahiko T, Yamamoto Y, Takeshima T, Kikkawa T: Cost of depression among adults in Japan in 2005. Psychiatry and Clinical Neurosciences 65(5): 442-450, 2011.
4) Orui M, Kawakami N, Iwata N, Takeshima T, Fukao A: Lifetime prevalence of mental disorders and its relationship to suicidal ideation in a Japanese rural community with high suicide and alcohol consumption rates. Environmental Health and Preventive Medicine 16(6): 384-389, 2011.
5) Kameyama A, Matsumoto T, Katsumata Y, Akazawa M, Kitani M, Hirokawa S, Takeshima T: Psychosocial and psychiatric aspects of suicide completers with unmanageable debt: A psychological autopsy study. Psychiatry and Clinical Neurosciences 65(6): 592-595, 2011.
6) Scott K M, Von Korff M, Angermeyer M C, Benjet C, Bruffaerts R, de Girolamo G, Haro J M, Lepine J P, Ormel J, Posada-Villa J, Tachimori H, Kessler R C: Association of childhood adversities and early-onset mental disorders with adult-onset chronic physical conditions. Archives of General Psychiatry 68(8), 838-844, 2011.
7) Aiba M, Matsui Y, Kikkawa T, Matsumoto T, Tachimori H: Factors influencing suicidal ideation among Japanese adults: From the national survey by the Cabinet Office. Psychiatry and Clinical Neurosciences 65(5): 468-475, 2011.
8) 竹島 正，小山明日香，立森久照，金田一正史，小泉典章，松本俊彦，瀬戸秀文，吉住 昭：精神保健福祉法による通報実態から見た触法精神障害者の地域処遇上の課題－全国の都道府県・政令指定都市へのアンケート調査をもとに－. 日本社会精神医学会雑誌 21(1): 22-31, 2012.
9) 山内貴史，藤田利治，立森久照，竹島 正，稲垣正俊：自殺死亡に対する職業および配偶関係の相乗的関連. 厚生の指標 58(11): 8-13, 2011.
10) 瀬戸秀文，島田達洋，入野 康，山本智一，小泉典章，吉住 昭，竹島 正，尾島俊之，野田龍也，山下俊幸，小高 晃：医療観察法入院処遇前における精神保健福祉法入院の現状. 臨床精神医学 40(11): 1495-1505, 2011.
11) 赤澤正人，松本俊彦，勝又陽太郎，木谷雅彦，廣川聖子，亀山晶子，横山由香里，高橋祥友，川上憲人，渡邉直樹，平山正実，竹島 正：死亡時の職業の有無でみた自殺既遂者の心理社会的特徴：心理学的剖検による 76 事例の検討. 日本社会精神医学会雑誌 20(2): 82-93, 2011.
12) 小山明日香，長沼洋一，沢村香苗，立森久照，大島 巌，竹島 正：精神障害を有する人に対する一般地

域住民のイメージ．日本社会精神医学会雑誌 20(2): 116-127, 2011.

13) 松本俊彦，小林桜児，今村芙美，赤澤正人，長 徹二，松下幸生，狩野亜朗：うつ病性障害患者における問題飲酒の依存率：文献的対照群を用いた検討.精神医学 54(1):29-37,2012.

14) 赤澤正人，松本俊彦，勝又陽太郎，廣川聖子，立森久照，竹島 正：若年者の自傷行為と過量服薬における自殺傾向と死生観の比較．自殺予防と危機介入 32 (1): 34-40, 2012.

(2) 総説

1) 竹島 正：自殺予防と地域づくり．こころのけんこう 38: 2-13, 2011.

2) 竹島 正：障害者自立支援法ー制度改正の視点ー．臨床精神医学 40(5): 553-557, 2011.

3) 竹島 正，宇田英典，眞崎直子：地域のメンタルヘルスの問題はどのように変わっているのですか？ 公衆衛生 75(4): 321-325, 2011.

4) 竹島　正：公衆衛生の精神保健，精神保健医療のこれから　本連載をもとに．公衆衛生 76(3): 237-241,2012.

5) 竹島 正：革新的な啓発活動を進めるダックスセンター 第 1 回 革新的な啓発活動を進めるダックスセンター．心と社会 42(4): 94-99, 2011.

6) 竹島 正：革新的な啓発活動を進めるダックスセンター 第 2 回 カニンガムダックスコレクションの誕生前．心と社会 43(1): 94-98, 2012.

7) 眞崎直子，的場由木，竹島 正：活動の始まりの頃　高知県駐在保健婦の活動からみる精神保健活動．こころの健康 26(1): 47-50, 2011.

8) 小野さやか，竹島 正：活動の始まりの頃 芸術活動による共生社会の実現を目指す取り組み～芸術活動を続けている精神障害者の活動から～．こころの健康第 26(2): 69-73, 2012.

9) 河野稔明，竹島 正：精神科病院における行動制限の状況とその背景．心と社会 42(1): 68-76, 2011.

10) 稲垣正俊，大槻露華，竹島 正：自殺とうつ状態．治療　うつ状態を理解する 93(12): 2457-2460, 2011.

11) 竹島 正：わが国の自殺対策・自殺学の方向ー大原先生の業績を振り返って．日本社会精神医学会雑誌 20(2): 138-143, 2011.

12) 竹島 正，森川すいめい，眞崎直子，的場由木，川野健治，若林秀樹，笹井康典，三輪正敬，勝又陽太郎，立森久照，米本直裕：災害支援の社会精神医学的視点．日本社会精神医学会雑誌 21(1): 48-98, 2012.

13) 竹島 正，松本俊彦，川野健治，稲垣正俊，勝又陽太郎：自殺予防総合対策センターの活動．産業精神保健 19(3): 218-223, 2011.

14) 川野健治，竹島 正，白神敬介，的場由木：自殺予防の枠組みと被災地の地域精神保健．精神保健研究 58: 35-41, 2012.

15) 立森久照：現代社会とうつ病(2) うつ病の頻度と社会負担．最新医学 66(6): 1196-1199, 2011.

16) 立森久照：震災時の精神保健システム．日本社会精神医学会雑誌 21(1): 75-77, 2012.

17) 赤澤正人，松本俊彦：労働者におけるアルコールの問題と自殺．産業精神保健 19(2): 93-98, 2011.

18) 趙 香花，野中 猛：韓国における精神保健医療福祉の歴史と現状．日本社会精神医学会雑誌 21(1): 32-40, 2012.

19) 的場由木，川野健治：困窮者支援と被災者．社会精神医学 21, 61-64, 2012.

(3) 著書

1) 吉川武彦，竹島 正：精神保健マニュアル．南山堂，東京，2012.

2) 竹島 正：地域精神保健福祉活動．ストレス科学事典：日本ストレス学会・財団法人パブリックヘルスリサーチセンター監修，実務教育出版，東京，pp699-701, 2011.

3) 竹島 正：国際生活機能分類．現代精神医学事典，弘文堂，東京，　pp335, 2011.

4) 竹島 正：自殺対策基本法．現代精神医学事典，弘文堂，東京，　pp409, 2011.

5) 竹島 正：社会的入院．現代精神医学事典，弘文堂，東京，　pp449, 2011.

6) 竹島 正：通院公費負担制度．現代精神医学事典，弘文堂，東京， pp721, 2011.
7) 竹島 正：精神保健に関する予防の概念と対象．新・精神保健福祉士養成講座 2 精神保健の課題と支援．日本精神保健福祉士養成校協会編集：中央法規出版，東京, pp62-66, 2012.
8) 竹島 正：精神保健に関する国、都道府県、市町村、団体等の役割および連携．新・精神保健福祉士養成講座 2 精神保健の課題と支援．日本精神保健福祉士養成校協会編集：中央法規出版，東京，pp67-73, 2012.
9) 竹島 正：精神保健に関する基本的理解．新・精神保健福祉士養成セミナー2 精神保健学－精神保健の課題と支援．新版精神保健福祉士養成セミナー編集委員会編集：へるす出版，東京，pp1-16, 2012.
10) 竹島 正：地域精神保健の現状と課題．新・精神保健福祉士養成セミナー2 精神保健学－精神保健の課題と支援．新版精神保健福祉士養成セミナー編集委員会編集：へるす出版，東京，pp227-253, 2012.
11) 小山明日香，竹島 正：23.その他の臨床的諸課題 アンチスティグマ．今日の精神疾患治療指針．医学書院，東京，pp925-927, 2012.
12) 竹島 正：年間 3 万人死亡・自殺大国ニッポンの現状と将来対策．西村周三 監修，ヘルスケア総合政策研究所編：医療白書 2011 年度版．日本医療企画，東京，pp 18-26, 2011.
13) 竹島 正：うつ病と自殺防止対策．新・精神保健福祉士養成講座 2 精神保健の課題と支援．日本精神保健福祉士養成校協会編集：中央法規出版，東京，pp224-228, 2012.
14) 竹島 正：自殺の予防．今日の治療指針 私はこう治療している(総集編)．医学書院，東京，pp863, 2012.
15) 立森久照：精神保健福祉に関する制度とサービス 社会調査. MINERVA 福祉資格テキスト 精神保健福祉士 専門科目編．社団法人日本精神保健福祉士協会監修：ミネルヴァ書房，京都，pp370-391, 2012.
16) 立森久照：第 9 章 第 3 節 統計資料．精神保健福祉白書編集委員会（編）：精神保健福祉白書 2012 年版―東日本大震災と新しい地域づくり，中央法規出版，東京，pp181-222, 2011.
17) 河野稔明：第 9 章「資料」第 3 節「統計資料」表 1～11，解説（精神科医療施設，患者数）．精神保健福祉白書編集委員会（編）：精神保健福祉白書 2012 年版―東日本大震災と新しい地域づくり，中央法規出版，東京, pp181-186・220, 2011.

(4) 研究報告書

1) 竹島 正：精神保健医療福祉体系の改革に関する研究．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総合研究報告書（平成 21 年度～23 年度）, pp1-13, 2012.
2) 竹島 正：精神保健医療福祉体系の改革に関する研究．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総括研究報告書, pp1-10, 2012.
3) 竹島 正，赤澤正人，河野稔明，趙 香花，立森久照，廣川聖子，小山明日香，長沼洋一：「改革ビジョン」の進捗状況のモニタリングと評価に関する研究－「精神保健医療福祉の改革ビジョン」中期におけるマクロ実態の変化－．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総合研究報告書（平成 21 年度～23 年度）, pp15-32, 2012.
4) 竹島 正，山内貴史，高橋洋友，立森久照，松本俊彦，樋口輝彦：「改革ビジョン」の進捗状況のモニタリングと評価に関する研究－精神疾患に関する理解の深化のためのメディアカンファレンスの活動報告－．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総合研究報告書（平成 21 年度～23 年度）, pp33-38, 2012.
5) 竹島 正，河野稔明，赤澤正人，趙 香花，立森久照，廣川聖子：「改革ビジョン」の進捗状況のモニタリングと評価に関する研究－「精神保健福祉資料」に係る電子調査票の利用状況と回答時期の変化－．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総合研究報告書（平成 21 年度～23 年度）, pp39-43, 2012.

6) 竹島 正，趙 香花，長沼洋一，堀井茂男，野口正行，藤田健三，太田順一郎，河野稔明，立森久照，白石弘巳：「改革ビジョン」の進捗状況のモニタリングと評価に関する研究－医療保護入院患者の保護者に関する調査－．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総合研究報告書（平成 21 年度～23 年度），pp45-59, 2012.

7) 竹島 正，織田信生，小野さや香，山内貴史，吉川武彦：「改革ビジョン」の進捗状況のモニタリングと評価に関する研究－精神疾患に関する理解の深化のための革新的な取り組みの紹介－．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総合研究報告書（平成 21 年度～23 年度），pp61-67, 2012.

8) 立森久照，河野稔明，赤澤正人，廣川聖子，趙 香花，長沼洋一，竹島 正：精神保健医療福祉体系の改革のモニタリングの詳細分析．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総合研究報告書（平成 21 年度～23 年度），pp69-85, 2012.

9) 萱間真美，角田 秋，大熊恵子，廣川聖子，林 亜希子，瀬戸屋 希，大橋明子，黒川正興：精神科訪問看護の有効活用に関する研究．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総合研究報告書（平成 21 年度～23 年度），pp157-167, 2012.

10) 竹島 正，河野稔明，立森久照，池田 学，中島 央，仲本晴男，原田 豊，堀井茂男，松浦雅人：てんかんの地域医療における保健行政的研究，国外調査及び提言．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「てんかんの有病率等に関する疫学研究及び診療実態の分析と治療体制の整備に関する研究（研究代表者：大槻泰介）」総括・分担研究報告書, pp47-58, 2012.

11) 高岡道雄，宇田英典，伊地智昭浩，山田全啓，加納紅代，本屋敷美奈，酒井ルミ，角田正史，竹島 正，工藤一恵：6．精神保健分野．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）「地域健康安全・危機管理システムの機能評価及び質の改善に関する研究（研究代表者：多田羅浩三）」報告書，pp131-157, 2012.

12) 高岡道雄，宇田英典，伊地智昭浩，山田全啓，加納紅代，本屋敷美奈，酒井ルミ，角田正史，竹島 正，工藤一恵：6．精神保健分野．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）「地域健康安全・危機管理システムの機能評価及び質の改善に関する研究（研究代表者：多田羅浩三）」報告書　別冊　保健所健康危機管理対応指針　日本版標準 ICS/IAP/AC，pp195-210, 2012.

13) 染矢俊幸，森田昌宏，高木 顯，有賀康雄，竹島 正，眞壁伍郎，福島 昇，阿部俊幸，鈴木典子，矢野正枝，小日山俊哉：平成 23 年度精神保健福祉推進事業報告書－新潟県の自殺者数減少に向けた取組みについて－．新潟県自殺予防対策検討会，2011.

14) 吉住 昭，竹島 正，島田達洋，小泉典章，稲垣 中，小口芳世，椎名明大，小山明日香，猪飼紗恵子，瀬戸秀文：医療観察法導入後における触法精神障害者への精神保健福祉法による対応に関する研究 その２　医療観察法導入後における精神保健福祉法第 24 条に基づく警察官通報の現状について．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「重大な他害行為をおこした精神障害者の適切な処遇及び社会復帰の推進に関する研究（研究代表者：平林直次）」総括・分担研究報告書, pp69-107, 2012.

15) 竹島 正：早期介入の精神保健システムにおける位置づけの検討．平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神病初回発症例の疫学研究および早期支援・早期治療法の開発と効果確認に関する臨床研究（研究代表者：岡崎祐士）総括・分担研究報告書，pp126-134，2011.

16) 竹島 正，河野稔明，立森久照，森 隆夫：既存の統計資料を用いた機能分化の現状分析と将来予測．平成 20・21年度厚生労働科学研究費補助金（こころの健康科学研究事業）・平成22年度厚生労働科学研究費

補助金（障害者対策総合研究事業）「精神科病院の機能分化に関する実態の分析と方法論の開発に関する研究」（研究代表者：山内慶太）総合研究報告書， pp83-96, 2011.

17) 竹島 正, 河野稔明, 立森久照, 森 隆夫：既存の統計資料を用いた機能分化の現状分析と将来予測. 平成22年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神科病院の機能分化に関する実態の分析と方法論の開発に関する研究」（研究代表者：山内慶太）総括・分担研究報告書, pp119-139, 2011.

18) 吉川武彦，竹島 正，野口正行，宇田英典：地域精神保健福祉活動における保健所機能強化ガイドラインの作成総括研究報告書. 平成 23 年度精神保健福祉推進事業費補助金「地域精神保健福祉活動における保健所機能強化ガイドラインの作成（社団法人　日本精神保健福祉連盟）」報告書，pp 1-6, 2012.

19) 竹島 正，赤澤正人，立森久照，宇田英典，金田一正史，澁谷いづみ，野口正行，藤田健三：保健所及び市区町村における精神保健福祉業務に関する調査. 平成 23 年度精神保健福祉推進事業費補助金　「地域精神保健福祉活動における保健所機能強化ガイドラインの作成（社団法人　日本精神保健福祉連盟）」報告書，pp 7-57, 2012.

20) 多田羅浩三，宇田英典，高岡道雄，石丸康隆，加納紅代，本屋敷美奈，竹島 正，工藤一恵：精神保健分野における保健所の危機管理体制に関するガイドライン．平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金「健康危機発生時における行政機関相互の適切な連携体制及び活動内容に関する研究（研究代表者：多田羅浩三）」報告書，pp 209-292，2011.

21) 眞崎直子，橋本修二，竹島 正，飯村富子，松原みゆき，森本千代子：災害時要援護精神障害者への支援に関するアンケート調査－災害時要援護精神障害者支援ガイドラインの作成－. 平成 22 年度「赤十字と看護・介護に関する研究助成」報告書，pp1-8，2011.

22) 竹島 正，的場由木，川野健治，趙 香花：欧米を中心とした諸外国の精神保健医療福祉政策の調査，評価－韓国・中国との比較としての，日本の困窮者とメンタルヘルス－. 平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神障害者への対応への国際比較に関する研究（研究代表者：中根允文）」　総括・分担研究報告書, pp41-46, 2012.

23) 竹島 正，趙 香花，的場由木，川野健治：欧米を中心とした諸外国の精神保健医療福祉政策の調査，評価－ホームレス状態等の困窮者のメンタルヘルスについての国際比較－. 平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神障害者への対応への国際比較に関する研究（研究代表者：中根允文）」　総括・分担研究報告書, pp47-55, 2012.

24) 伊藤弘人，西田淳志，水野雅文，鈴木友理子，杉浦寛奈，瀬戸屋雄太郎，野田寿恵，藤本美智，竹島 正，趙 香花：医療政策・医療経済の観点からみた諸外国の精神科医療. 平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神障害者への対応への国際比較に関する研究　（主任研究者中根允文）」総合研究報告書（平成 21～23 年度）, pp17-22, 2012.

25) 竹島 正，大類真嗣，廣川聖子，立森久照，赤澤正人，森 隆夫，秋田宏弥，川野健治，勝又陽太郎，松本俊彦：自殺の心理学的剖検の実施に関する研究. 平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業 ）「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究（研究代表者：加我牧子）」総括・分担研究報告書，pp 13-23, 2012.

26) 松本俊彦，勝又陽太郎，赤澤正人，小高真美，竹島 正，亀山晶子，白川教人，五十嵐良雄，尾崎 茂，深間内文彦，榎本 稔，飯島優子：自殺既遂者心理社会的特徴に関する研究　精神科受診歴のあるうつ病患者における自殺のリスク要因の検討. 平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業 ）「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究（研究代表者：加我牧子）」総括・分担研究報告書, pp25-35, 2012.

27) 松本俊彦，森田展彰，猪野亜朗，小沼杏坪，奥平謙一，成瀬暢也，芦沢 健，松下幸生，武藤岳夫，長 徹二，阿瀬川孝治，長谷川直美，尾崎茂，内門大丈，武川吉和，小林桜児，今村扶美，赤澤正人，上岡陽江，幸田実，山田幸子，渡邊敦子，岡坂昌子，谷部陽子，宮城純子：薬物依存者・アルコール依存者の自殺の実態解明と自殺予防に関する研究. 平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事

業（精神障害分野）「自殺のハイリスク者の実態解明及び自殺予防に関する研究（研究代表者：伊藤弘人）」総括・分担研究報告書, pp121-134, 2012.

28) 松本俊彦，森田展彰，猪野亜朗，小沼杏坪，奥平謙一，成瀬暢也，芦沢 健，松下幸生，武藤岳夫，長 徹二，阿瀬川孝治，長谷川直美，尾崎 茂，内門大丈，武川吉和，小林桜児，今村扶美，赤澤正人，上岡陽江，幸田 実，山田幸子，渡邊敦子，岡坂昌子，谷部陽子，宮城純子：薬物依存者・アルコール依存者の自殺の実態解明と自殺予防に関する研究．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業（精神障害分野）「自殺のハイリスク者の実態解明及び自殺予防に関する研究（研究代表者：伊藤弘人）」総合研究報告書, pp47-60, 2012.

29) 中根允文, 半澤節子, YongJunBae,Jeng-Kyu bae,Moon-Hyeon Chae, 趙 香花：保護者制度のある日韓両国における家族の介護経験に関する調査研究．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神障害者への対応への国際比較に関する研究（研究代表者：中根允文）」　総括・分担研究報告書, pp61-64, 2012.

(5) 翻訳

(6) その他

1) 竹島 正：日本社会精神医学会．精神医学 53(6): 597, 2011.
2) 竹島 正：(書評) 仰うつと自殺の心理学　臨床心理学的アプローチ　坂本真士著. 精神療法 37(4): 492-493, 2011.
3) 竹島 正，樋口輝彦：（質疑応答）自殺者と精神疾患罹患の関係．日本医事新報 4565：56-57, 2011.
4) 有田宏美，上田　正，大塚淳子，禧久孝一，生水裕美，管　美千世，竹島 正，高橋信子，新里宏二，行岡みち子：多重債務者相談の手引き～「頼りになる」相談窓口を目指して～．金融庁・消費者庁，2011.
5) 山内貴史，竹島 正：（質疑応答）飛び込み自殺と日時の関係．日本医事新報 4571：55-56, 2011.
6) 河野稔明：数字で押さえる精神保健医療福祉～630 調査から見えること 第4回 精神科入院患者の静態（在院）と動態（入退院）．公衆衛生情報 41(7): 37-39, 2011.
7) 河野稔明：数字で押さえる精神保健医療福祉～630 調査から見えること 第 5 回 平均残存率・退院率．公衆衛生情報 41(9): 37-39, 2011.
8) 河野稔明：平成 20 年度 630 調査．全国精神保健福祉連絡協議会会報 56：8-10, 2011.
9) 荘島幸子：質的研究における秘密．質的心理学フォーラム 3: 90-92, 2012.
10) 趙 香花：数字で押さえる精神保健医療福祉～630 調査から見えること　第 8 回　精神障害者退院促進・地域移行施策の動向．公衆衛生情報 41(12)：40-42, 2012.
11) 趙 香花：数字で押さえる精神保健医療福祉～630 調査から見えること　第 9 回　精神障害者保健福祉手帳の所持者数と受けられるサービス：公衆衛生情報 42(1)：38-40, 2012.

B．学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

1) Takeshima T，Oda N，Higashino K，Yamauchi T：Japan's Activities for Mental Health Promotion using Art. Asia Australia Mental Health, Melbourne, 2011.11.9.
2) Takeshima T，Inagaki M：Community Mental Health Promotion in Japan-Effort to Propose Effective Suicide Prevention Measures to the Japanese Government-. Asia Australia Mental Health, Melbourne, 2011.11.10.
3) 森川すいめい，竹島 正(シンポジウム司会)，本田 徹，向谷地生良，重富 亮：「ホームレス」化する精神・知的障碍者をどう支えるのか～世界と日本の実情～．第 107 回日本精神神経学会学術総会，東京，2011.10.26.
4) 竹島 正：精神保健医療改革におけるメンタルヘルスプロモーションの意義．　2011 年国立精神・神経

医療研究センター・メルボルン大学合同カンファレンス　セッション2「地域精神保健の発展とNCNPの役割」，東京，2011.10.31.

5) 竹島 正： NGOレベルの連携を進める．　2011年国立精神・神経医療研究センター・メルボルン大学合同カンファレンス　シンポジウム「日本におけるうつ病啓発戦略」，東京，2011.11.1.

6) 稲垣正俊，大槻露華，山田光彦，竹島 正：(シンポジウム)かかりつけの医師によるうつ病の発見と適切な治療への導入のために．第35回日本自殺予防学会総会，沖縄，　2011.12.15-17.

7) 竹島 正：(特別講演) 自殺対策の新たな展開．第18回関西アルコール関連問題学会京都大会，2011.12.4

8) 竹島 正：(学会長講演)かえる・かわるー真の改革に向けてー．第 31 回日本社会精神医学会，東京，2012.3.15.

9) 立森久照：(シンポジウム)「かえる・かわるー精神保健医療の発展のために」日本の精神障害の頻度、受療行動およびリテラシー-現状と将来の課題ー．第107回日本精神神経学会学術総会．東京，2011.10.27.

10) 立森久照：(シンポジウム)数字から見た我が国の精神障害の現状と課題．精神疾患の疫学・国民意識調査からみた日本の現状と将来に求められるもの．第31回日本社会精神医学会，東京，2012.3.15.

11) 川島大輔，荘島幸子，川野健治，多田羅竜平，石井千賀子，無藤 隆：(ワークショップ企画・司会)子どもと／死を／語り直す(2)．第75回日本心理学会，東京，2011.9.15.

(2) 一般演題

1) Yamauchi T, Fujita T, Tachimori H, Takeshima T, Inagaki M: Relative risks of suicide with respect to marital status and employment in Japan. The 26th World Congress of the International Association for Suicide Prevention, Beijing, China, 2011.9.13-17.

2) Yamauchi T, Fujita T, Tachimori H, Takeshima T, Inagaki M: Rates of and factors associated with suicide among adolescents in Japan between 1978 and 2007. The 6th International Conference on Child and Adolescent Psychopathology, London, UK, 2011.7.11-12.

3) Bae Y J, Zhao X, Hanzawa S: Longitudinal Psychloginal Impact on Family Caregivers Traumatized by Schizophrenia Patients Violence Behavior. The 21st World Congress on Psychosomatic Medicine, Korea Seoul, 2011,8.25-28

4) 須賀万智，柳沢裕之，山内貴史，立森久照，竹島 正：医療圏レベルでみた自殺死亡と地域特性に関する分析．第70回日本公衆衛生学会総会，秋田, 2011.10.19-21.

5) 山内貴史，稲垣正俊，竹島 正："Towards Evidence-based Suicide Prevention Programmes" (World Health Organization, 2010)日本語版の刊行．第35回日本自殺予防学会総会，沖縄, 2011.12.15-17.

6) 稲垣正俊，齋藤友紀雄，高橋祥友，河西千秋，齋藤利和，本橋豊，矢永由里子，松本俊彦，川野健治，勝又陽太郎，大槻露華，竹島 正：学術研究の成果を反映した自殺対策の策定に向けた自殺予防総合対策センターの取組み．第35回日本自殺予防学会総会，沖縄，2011.12.15-17.

7) 大槻露華，稲垣正俊，川野健治，勝又陽太郎，松本俊彦，竹島 正：都道府県・政令指定都市における自殺対策の取組．第35回日本自殺予防学会総会，沖縄，　2011.12.15-17.

8) 赤澤正人，江口のぞみ，松本俊彦，勝又陽太郎，廣川聖子，亀山晶子，川上憲人，竹島 正：心理学的剖検による症例対照研究を用いた自殺の社会経済的要因に関する検討．第 31 回日本社会精神医学会，東京，2012.3.15.

9) 廣川聖子，川上憲人，稲垣晃子，江口のぞみ，土屋政雄，立森久照，松本俊彦，勝又陽太郎，亀山晶子，竹島 正：日本における自殺と精神疾患の関係についての検討:心理学的剖検による症例対照研究，第31回日本社会精神医学会，東京，2012.3.15.

10) 松本俊彦，小林桜児，今村扶美，赤澤正人，長 徹二，松下幸生，猪野亜朗：うつ病性障害患者における問題飲酒の併存率：文献的対照群を用いた検討．平成23年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，愛知, 2011.10.14.

11) 大類真嗣，廣川聖子，立森久照，川野健治，森 隆夫，秋田宏弥，竹島 正：精神科医療の現場で経験している自殺の現状について．第 31 回日本社会精神医学会，東京，2012.3.15.
12) 瀬戸秀文，島田達洋，入野 康，山本智一，小泉典章，吉住 昭，竹島 正，尾島俊之，野田龍也，山下俊幸，小高　晃：医療観察法導入後における措置入院制度の現状－2000 年度と 2008 年度の検察官通報調査から．第 31 回日本社会精神医学会，東京，2012.3.16.
13) 趙 香花，竹島 正：中国のホームレスとメンタルヘルスの現状．第 31 回日本社会精神医学会，東京，2012.3.16.
14) 小山明日香，沢村香苗，立森久照，長沼洋一，池田 学，竹島 正：精神障害者およびひきこもり事例についての一般地域住民の認識．第 31 回日本社会精神医学会，東京，2012.3.16.
15) 河野稔明，趙 香花，長沼洋一，立森久照，野口正行，堀井茂男，白石弘巳，竹島 正：市町村長同意による医療保護入院の実態と課題．第 31 回日本社会精神医学会，東京，2012.3.16.
16) 赤澤正人，松本俊彦：若年者における自傷行為と死生観の関連．日本心理学会第 75 回大会，東京，2011.9.17.
17) 赤澤正人：若年者における自殺企図と死生観との関連性についての検討．第 35 回日本死の臨床研究会年次大会，千葉，2011.10.9.
18) 廣川聖子，大山早紀子，大島　巌，角田 秋，添田雅宏，村嶋幸代，萱間真美：生活保護受給者自立支援事業における公民連携：医療に結びつき難い対象への訪問支援に携わる看護師に必要な技術に関する検討．第 31 回日本社会精神医学会，東京，2012.3.16.
19) 荘島幸子，川島大輔，川野健治：死・自殺のイメージスキーマ．第 75 回日本心理学会，東京, 2011.9.17.
20) 荘島幸子：性的少数者の学校生活における経験と対処方略(１)．第 23 回日本発達心理学会，愛知，2012.3.10.

(3) 研究報告会

1) 立森久照，河野稔明，長沼洋一，小山明日香，趙 香花，廣川聖子，竹島 正：統合失調症および認知症の在院患者数の概況．平成22年度国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会，2011. 5. 23.
2) 趙 香花，長沼洋一，堀井茂男，野口正行，河野稔明，立森久照，白石弘巳，竹島 正：医療保護入院患者の保護者に関する研究. 平成22年度国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会, 2011. 5. 23.
3) 竹島 正：630 調査の経緯．精神保健医療福祉改革のモニタリングの改善のために－630 調査の経緯，現状と今後の課題，平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者 竹島 正）」第 1 回班会議，東京，2011.8.1.
4) 竹島 正，川野健治，立森久照，山内貴史：平成 23 年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）「芸術活動を続けている精神疾患当事者の作品の分析に基づく啓発資材の開発に関する研究（研究代表者 竹島 正）」第 1 回班会議，東京，2011.8.3.
5) 竹島 正：欧米を主とした諸外国の精神保健医療福祉政策の調査，評価．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業) 「精神障害者への対応への国際比較に関する研究（研究代表者　中根 充文）」第 1 回班会議，東京，2011.8.6.
6) 竹島 正：てんかんの地域医療における保健行政的研究，国外調査及び提言（地域保健領域）．平成23年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業) 「てんかんの有病率等に関する疫学研究及び診療実態の分析と治療体制の整備に関する研究（研究代表者　大槻泰介）」第 1 回班会議, 東京, 2011.8.20.
7) 竹島 正：保健所等調査グループ研究報告.平成23年度障害者総合福祉推進事業費補助金「地域精神保健福祉活動における保健所機能強化ガイドラインの作成(社団法人精神保健福祉連盟)」第1回検討委員会，東京，2011.10.1.
8) 竹島 正，河野稔明，赤澤正人：「改革ビジョン」の進捗状況のモニタリングと評価に関する研究．平

成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者 竹島 正）」第 2 回班会議，東京，2011.12.22.

9) 竹島 正：精神医療保険福祉体系の改革に関する研究．厚生労働科学研究費研究成果等普及啓発事業障害者対策総合研究成果発表会，東京，2012.2.7.

10) 竹島 正：保健所等調査グループ研究報告.平成 23 年度障害者総合福祉推進事業費補助金「地域精神保健福祉活動における保健所機能強化ガイドラインの作成(社団法人精神保健福祉連盟)」第 2 回検討委員会，東京，2012.2.10.

11) 立森久照，河野稔明，廣川聖子，趙 香花，赤澤正人，長沼洋一，竹島 正：精神科病院の在院患者数等の年次推移．平成 23 年度国立精神･神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会，東京, 2012.2.27.

12) 山内貴史，高橋恵美子，内田祥子，友久保智子，竹島 正：千葉県船橋市における自殺企図の実態：市消防局救急課の救急活動記録の分析．国立精神･神経医療研究センター精神保健研究所平成23年度研究報告会，東京，2012.2.27.

13) 竹島 正：（座長)保健所精神保健福祉活動に関する期待．平成 23 年度障害者総合福祉推進事業費補助金「地域精神保健福祉活動における保健所機能強化ガイドラインの作成(社団法人精神保健福祉連盟)」成果報告会，東京，2012.3.25.

14) 竹島 正:（シンポジウム)保健所・市町村・精神保健関連団体調査をもとに．これからの地域精神保健を考えるー研究成果をもとにー．平成 23 年度障害者総合福祉推進事業費補助金「地域精神保健福祉活動における保健所機能強化ガイドラインの作成(社団法人精神保健福祉連盟)」研究報告会，東京，2012.3.25.

15) 赤澤正人，立森久照，松本俊彦，竹島 正：断酒会と共同したアルコール依存症患者のメンタルヘルス支援についての検討 - 自殺予防の観点に着目して - ．平成22年度国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会，東京，2011. 5. 23.

16) 山内貴史，竹島 正：明治11 年から明治31 年のわが国における自殺死亡の推移．平成22年度国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会, 2011. 5. 23.

17) 稲垣正俊，大槻露華，小高真美，石藏文信，渡辺洋一郎，酒井ルミ，山田光彦，竹島 正：一般身体科医のうつ病に対する態度. 平成22年度国立精神･神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会, 2011. 5. 23.

18) 竹島 正：自殺の心理学的剖検の実施に関する研究．平成23年度厚生労働科学研究費補助金「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究（研究代表者：加我牧子）」第 1 回班会議，東京，2011.6.29.

19) 竹島 正，大類真嗣，廣川聖子：自殺の心理学的剖検の実施に関する研究．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究（研究代表者：加我牧子）」第 2 回班会議，東京，2012.1.24.

20) 立森久照：今後のあり方．精神保健医療福祉改革のモニタリングの改善のためにー630 調査の経緯，現状と今後の課題，平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者　竹島 正)」第 1 回班会議，東京，2011.8.1.

21) 立森久照：精神保健医療福祉体系の改革のモニタリングの詳細分析．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者　竹島 正)」第 2 回班会議．東京，2011.12.22.

22) 河野稔明：主要な分析結果．精神保健医療福祉改革のモニタリングの改善のためにー630 調査の経緯，現状と今後の課題，平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者　竹島 正)」第 1 回班会議．東京，2011.8.1.

23) 廣川聖子：精神科訪問看護の有効活用に関する研究．地域保健医療の充実のためにーアウトリーチを含む地域サービスの充実に向けてー，平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者　竹島 正)」第 1 回班会議，東京，2011.8.1.

24) 萱間真美，廣川聖子：地域精神保健医療福祉のアウトリーチと再編：医療法改正、アウトリーチ推進事業に焦点をあてて．第 7 回医療経済研究会，東京，2011.11.28.
25) 廣川聖子，萱間真美，角田 秋，大熊恵子，林 亜希子，瀬戸屋 希，竹島 正：精神科訪問看護の有効活用に関する研究．平成 23 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会，東京，2012.2.27.
26) 趙 香花，野口正行：医療保護入院患者の保護者に関する研究．医療と権利擁護ー制度改善に向けての論点ー，H23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者　竹島 正）」第 1 回班会議，東京，2011.8.1.
27) 趙 香花，長沼洋一，堀井茂男，野口正行，河野稔明，立森久照，白石弘巳，竹島 正：医療保護入院制度の運用実態に関する調査．平成 23 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会，東京，2012.2.27.

(4) その他

1) 竹島 正：安心ネットづくり促進協議会．東京，2011.5.12.
2) 竹島 正：NPO法人自立支援センターふるさとの会 苦情解決第三者委員会．東京，2011.5.14.
3) 竹島 正：第 14 回精神保健福祉士試験委員会．東京，2011.6.15.
4) 竹島 正：支援付き住宅推進会議検証会．東京，2011.6.25.
5) 竹島 正：JCPTD職場メンタルヘルス対策認証機構第2回準備会．東京，2011.7.22.
6) 竹島 正：全国精神保健福祉連絡協議会常務理事会．東京，2011.8.2.
7) 竹島 正：全国精神保健福祉センター研究協議会．秋田，2011.10.19.
8) 竹島 正：全国精神保健福祉連絡協議会理事会・総会．福井，2011.10.24.
9) 竹島 正：日本精神保健福祉連盟平成 23 年度第 2 回理事会・総会.東京, 2012.2.7.
10) 竹島 正：松戸市第 4 回障害者の居住支援研修会.千葉, 2012.2.16.
11) 竹島 正：「リスク情報システム科学の構築」集会.東京, 2012.2.18.
12) 竹島 正：自殺防止対策事業評価委員会．東京, 2011. 3. 23.
13) 竹島 正，川野健治：被災者支援のための情報収集．青森・岩手, 2011. 3. 30- 4. 2.
14) 竹島 正：被災者支援のための情報収集．宮城, 2011. 4. 15.
15) 竹島 正，松本俊彦，川野健治，立森久照，勝又陽太郎，山内貴史，白神敬介，赤澤正人：第 1 回メディアカンファレンス．東京，2011.4.27.
16) 竹島 正，川野健治：被災者支援のための情報収集．岩手，2011.5.6-7.
17) 竹島 正，川野健治，白神敬介：被災者支援のための情報収集．岩手・宮城，2011.5.25-28.
18) 竹島 正，川野健治，稲垣正俊，勝又陽太郎，大槻露華：第 1 回大綱改正ワーキンググループ会議．東京，2011.6.10.
19) 竹島 正，松本俊彦，川野健治，立森久照，勝又陽太郎，山内貴史，白神敬介，赤澤正人，廣川聖子：第２回メディアカンファレンス．東京，2011.7.25.
20) 竹島 正：自殺対策ネットワーク協議会．東京，2011.7.27.
21) 竹島 正，川野健治，白神敬介，的場由木：被災者支援のための情報収集．岩手・宮城，2011.7.28-29.
22) 竹島 正，川野健治，勝又陽太郎：被災者支援のための情報収集．岩手・宮城，2011.8.18.
23) 竹島 正，松本俊彦，稲垣正俊，大槻露華：第2回大綱改正ワーキンググループ会議．東京，2011.8.28.
24) 竹島 正，川野健治，白神敬介：被災者支援のための情報収集．岩手・宮城，2011.9.1-2.
25) 竹島 正，川野健治：宗教者災害支援連絡会第 5 回情報交換会．東京，2011.9.11.
26) 竹島 正，山内貴史：第 1 回船橋市自殺対策庁内連絡会議．千葉，2011.10.4.
27) 竹島 正：第 1 回船橋市自殺対策連絡会議．千葉，2011.10.12.
28) 竹島 正，川野健治，白神敬介：被災者支援のための情報収集．岩手・宮城，2011.10.6-7.
29) 竹島 正，松本俊彦，大槻露華，小高真美，白神敬介，山内貴史：第 3 回メディアカンファレンス．東京，

2011.11.24.

30) 竹島 正，大槻露華：メディアカンファレンス．秋田，2011.12.2.

31) 竹島 正，川野健治，稲垣正俊，大槻露華：第3回大綱改正ワーキンググループ会議．東京，2012.12.19.

32) 竹島 正：第2回船橋市自殺対策庁内連絡会議．千葉，2012.2.3.

33) 竹島 正，山内貴史：第2回船橋市自殺対策連絡会議．千葉，2012.2.17.

34) 竹島 正，立森久照，松本俊彦，赤澤正人，大槻露華，山内貴史，白神敬介，小高真美：第4回メディアカンファレンス．東京，2012.2.24.

35) 竹島 正，松本俊彦，川野健治，稲垣正俊，勝又陽太郎，大槻露華：第4回大綱改正ワーキンググループ会議．東京，2012.3.21.

36) 竹島 正：自殺防止対策事業評価委員会．東京，2012.3.23.

37) 竹島 正，山内貴史：第3回船橋市自殺対策庁内連絡会議．千葉，2012.3.26.

38) 荘島幸子：GID（性同一性障害）学会第13回研究大会．東京，2011.6.4-5.

C．講演

1) 佐竹隆幸（コーディネーター），木下 浩，竹島 正，川野健治：東日本大震災復興支援イベント　復興への思いを込めて～司法書士は社会とともに～「見識者が語る，東日本大震災の今後」について．大阪，2011.6.26.

2) 竹島 正：こころの健康・地域の健康．平成 23 年度東久留米市心のヘルスサポーター講座．東京，2011.9.14.

3) 竹島 正：お酒とうつの危険な関係－自殺対策の側面から．平成 23 年度アルコール関連問題対策事業に係わる講演会，埼玉，2011.11.26.

4) 竹島 正：こころの健康・地域の健康．鳥取県中部総合事務所福祉保健局主催「眠れてますか？睡眠キャンペーン」1市4町共同講演会，鳥取，2011.12.6.

5) 竹島 正：メンタルヘルス(自殺予防)の視点からの被災者救済．国際医療福祉大学大学院乃木坂スクール「震災と医療福祉のあり方」，東京，2011.12.9.

6) 竹島 正：(座長)(基調講演)被災者支援は我が国の新たな社会保障の開発につながる．みやぎ心のケアセンター主催自殺対策シンポジウム．宮城，2012.2.6.

7) 竹島 正：（シンポジウム）被災地支援と今後の精神保健福祉．みやぎ心のケアセンター主催自殺対策シンポジウム，宮城，2012.2.6.

8) 清水徹夫，竹島 正，中村 純，粥川祐平：(座談会)うつ病・睡眠・自殺予防．「睡眠医療」6巻2号座談会，愛知，2012.2.12.

9) 竹島 正，稲垣正俊：自殺対策の経緯と評価/大綱改正へ向けての提言づくり．第 5 回自殺対策研究協議会，東京，2012.1.11-12.

10) 竹島 正：自殺予防・精神保健分野での故藤田教授の業績と今後の研究動向．藤田利治先生追悼シンポジウム，東京，2012.2.18.

11) 赤澤正人：アルコールによる自死問題　ゲートキーパーの役割．埼玉県断酒新生会酒害相談事業研修講座，埼玉，2011.9.29.

D．学会活動

（1）学会役員

1) 竹島 正：International Advisory Council, Asia Australia Mental Health

2) 竹島 正：日本社会精神医学会常任理事（総務企画委員長）

3) 竹島 正：第31回日本社会精神医学会会長

4) 竹島 正：日本精神衛生学会理事

5) 竹島 正：日本自殺予防学会理事

6) 竹島 正：日本精神保健福祉政策学会理事
7) 竹島 正：日本精神神経学会「精神保健に関する委員会」委員

(2) 座長

1) 竹島 正：(司会) シンポジウム 11　プライマリ・ケアに必要な断酒・節酒指導と地域連携－あなたはお酒と自殺の関係を知っていますか？－. 第２回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会, 北海道, 2011.7.3.
2) 高橋祥友(司会)，竹島 正(司会)，張 賢徳，大塚耕太郎，細田眞二，河西千秋：自殺対策と精神保健. 第 107 回日本精神神経学会学術総会，東京，2011.10.27.
3) 竹島 正(司会)，三井敏子，立森久照，千葉 潜，平林直次：かえる・かわる－精神保健医療の発展のために. 第 107 回日本精神神経学会学術総会，東京，2011.10.27.
4) 竹島 正(座長)，本橋 豊，花城梨枝子，反町吉秀，的場由木：自殺の背景にある格差の再考. 第 35 回日本自殺予防学会総会，沖縄，2011.12.16.

(3) 学会誌編集委員等

1) 竹島 正：日本公衆衛生学会査読委員
2) 立森久照：日本社会精神医学会雑誌編集委員

E. 研修

(1) 研修企画

1) 竹島 正，立森久照：第 48 回精神保健指導課程研修. 東京，2011.7.13-15.
2) 川野健治，竹島 正，松本俊彦，稲垣正俊：第２回心理職自殺予防研修. 東京，2011.7.5-6.
3) 竹島 正，松本俊彦，川野健治，稲垣正俊：第５回自殺総合対策企画研修. 東京，2011.8.24-26.
4) 竹島 正，松本俊彦，川野健治，稲垣正俊：第３回精神科医療従事者研修. 東京，2011.9.6-7.
5) 松本俊彦，竹島 正，川野健治，稲垣正俊：第２回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修. 東京, 2011.11.8-9.
6) 竹島 正, 松本俊彦, 川野健治, 稲垣正俊：第４回精神科医療従事者自殺予防研修. 愛知, 2011.11.29-30.

(2) 研修会講師

1) 竹島 正：生活困窮者の社会的支援とメンタルヘルス－私たちは何ができるのか－. 司法書士を対象としたメンタルヘルス研修会，宮城，2011.10.29.
2) 竹島 正：自殺･うつ病の実態～多様化する健康問題～. 北海道看護協会主催心のケア－自殺・うつ病の現状とその支援－研修会，北海道，2011.12.13.
3) 竹島 正：メンタルヘルスの問題について.金融庁「多重債務者相談の手引き」研修会, 埼玉, 2011.12.21.
4) 竹島 正：メンタルヘルスの問題について. 金融庁「多重債務者相談の手引き」研修会, 大阪, 2012.1.18.
5) 竹島 正：地域における自殺予防の必要性と対応について. 平成 23 年度船橋市民生児童委員大会におけるゲートキーパー研修，千葉，2011.5.31.
6) 竹島 正：地域自殺予防対策について. 松戸市地域自殺予防対策従事者研修会，千葉，2011.8.31.
7) 竹島 正：生活保護における自殺予防の必要性と対応について. 平成 23 年度船橋市ケースワーカー研修，千葉，2011.9.21.
8) 竹島 正：我が国の自殺及び自殺対策の実態. 第３回精神科医療従事者研修，東京，2011.9.6.
9) 竹島 正：生活保護における自殺予防の必要性と対応について. 平成 23 年船橋市ケースワーカー研修，千葉，2011.11.15.
10) 竹島 正：自殺の現状と地域における対応について. 八千代市自殺予防対策研修会，千葉，2012.1.20.
11) 竹島 正：船橋市における自殺対策のあり方について. 平成 23 年度船橋市自殺対策ゲートキーパー研修会，千葉，2012.2.21.

3. 薬物依存研究部

Ⅰ. 研究部の概要

薬物依存研究部は,「麻薬・覚せい剤等に関する実態調査結果に基づく勧告」(総務庁, 平成10年5月)により, 機能強化が要請され, 平成11年度より研究室の改組及び1研究室の新設がなされ, 下記のように3研究室体制となっている.

心理社会研究室

(1) 薬物乱用・依存及び中毒性精神障害の実態調査研究に関すること.

(2) 薬物依存の発生要因に係わる心理学的及び社会学的調査研究に関すること.

(3) 薬物依存の予防及びその指導, 研修の方法の研究に関すること.

依存性薬物研究室

(1) 薬物依存の発生要因に係わる精神薬理学的調査研究に関すること.

(2) 依存性薬物の薬効に係わる精神薬理学的及び心理学的調査研究に関すること.

(3) 中毒性精神障害に係わる精神薬理学的及び心理学的調査研究に関すること.

診断治療開発研究室

(1) 薬物依存及び中毒性精神障害の診断技術及び治療法の開発の研究に関すること.

(2) 薬物依存及び中毒性精神障害の治療システムの開発の研究に関すること.

(3) 薬物依存及び中毒性精神障害の診断技術及び治療法の研修に関すること.

しかし, 診断治療開発研究室には人員がつかず, 2研究室体制のままであったが, 平成20年10月から人員がつき, 3研究室体制となった. 従来同様, 平成23年度も, 官民を問わない各種問い合わせ, 講師派遣, 調査・研修等各種協力依頼が殺到し, それらは人員的限界を超えるものであったが, 最大限の協力を惜しまなかったつもりである.

人員構成は, 次のとおりである. 部長:和田 清, 心理社会研究室研究員:嶋根卓也, 依存性薬物研究室長:舩田正彦, 診断治療開発研究室長:松本俊彦, 流動研究員:富山健一, 小堀栄子.

Ⅱ. 研究活動

A. 疫学的研究

1) 薬物使用に関する全国住民調査(2011年)

層化2段無作為抽出により選ばれた全国の15歳以上64歳以下の国民5,000人に対する訪問留置法による医薬品・規制薬物の使用実態と意識に関するわが国唯一最大規模の調査であり, 1995年より隔年で実施されている. 回収率は63.0%であり, 生涯経験率は, 有機溶剤1.6%, 大麻1.2%, 覚せい剤0.4%, 何らかの違法性薬物2.7%であった. 2009年調査との比較では, 覚せい剤, MDMA, いずれかの薬物の生涯経験率は横ばいであったが, それ以外の薬物では減少傾向にあった. わが国の薬物乱用状況は, 従来の「わが国独自型(有機溶剤優位型)」から欧米型(大麻優位型)」へと急速に変化していることが再確認された. (平成23年度厚生労働科学研究費補助金:医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業. 和田 清, 嶋根卓也, 小堀栄子)

2) 薬物乱用・依存者におけるHIV感染の実態とハイリスク行動についての研究

薬物依存症者におけるHIV/HCV/HBV感染の実態とハイリスク行動に関するわが国唯一の継続的定点調査である. 全国4カ所の医療施設調査(全国の精神科病院に入院中の覚せい剤関連精神障害患者の約12%を捕捉できる)及び6カ所での非医療施設調査を実施した. HIV抗体陽性者は1名認められたが, 東アジア某国のMSMであった. 覚せい剤関連精神障害患者でのHCV抗体陽性率は38.0%と高かった. 覚せい剤関連精神障害患者における感染危険行動は年々低下しているにも関わらず, HCV抗体陽性率は2008年以降上昇傾向にあるが, その原因としては, 覚せい剤関連精神障害患者の高齢化が最も疑われた. (平成23年度厚生労働科学研究費補助金:エイズ対策研究事業. 和田 清)

3) 様々な依存症における医療・福祉の回復プログラムの策定に関する研究–向精神薬乱用と依存–

薬物依存症専門外来（首都圏 4 施設）を受診した BZ（ベンゾジアゼピン）系薬剤の使用障害患者 87 名について調査した．88.5%の者が、乱用物質である BZ を精神科医療機関から「処方」という形で入手しており、84.0%の者が、前医である一般精神科治療の経過中に BZ 使用障害を発症していた。前医での処方には，「短時間作用型薬剤などの依存の危険の高い薬剤の処方」（71.2%）、「薬剤を貯めている可能性を顧慮せずに漫然とした処方が続けられる」（68.5%）、「診察なしで薬剤の処方を受ける」（43.8%）といった問題が認められた。また、主治医から処方される薬剤の依存性に関して，指導や説明を受けていた者は、32.9%にとどまった。向精神薬乱用・依存、過量服薬の予防には、精神科医療の質の向上が必要である。

また，向精神薬の過量服薬者に対するゲートキーパーとして薬剤師の活用が期待されているが、埼玉県薬剤師会の薬剤師 1,414 名に対し、服薬指導や疑義照会に着目した疫学調査を実施した。（平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金：障害者対策総合研究事業．松本俊彦，嶋根卓也，和田清）

4) クラブユーザーにおける MDMA 等のクラブドラッグ乱用実態に関する研究

関東地方のクラブで開催された音楽イベント来場者 237 名を対象に疫学調査を実施した。（平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業．嶋根卓也, 和田清 ）

5) インターネットによる MSM の HIV 感染予防に関する行動疫学研究

わが国の HIV 感染者の過半数を占める Men who have Sex with Men（MSM）における HIV 感染予防行動と、安全な性行動の阻害要因としてのアルコール・薬物使用を調べるために、インターネットによる行動疫学調査を実施した。合計 10,442 名の MSM より回答を得た。（平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金：エイズ対策研究事業．嶋根卓也）

6) 薬剤師を情報源とする医薬品乱用の実態把握に関する研究

鎮咳薬など一般用医薬品（OTC 薬）の乱用・依存症例が引き続き報告されているため，「薬局における OTC 薬の販売」という視点で、薬物依存者および薬剤師対象の聞き取り調査を実施し、薬物乱用・依存の防止策を探った。（平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業．嶋根卓也 ）

B．臨床研究

1）薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究

独自に開発した認知行動療法による薬物依存症治療プログラム（SMARPP）、ならびに、SMARPP と同種の治療プログラムを、国立精神・神経医療研究センター病院（外来及び医療観察法病棟）、埼玉県立精神医療センター、東京都多摩総合精神保健福祉センター、東京都中部総合精神保健福祉センター、さらには刑事施設である播磨社会復帰促進センターや美祢社会復帰促進センター、栃木・千葉・館山・横浜の各ダルクなどの、性質の異なる援助機関で実施し、介入前後の評価尺度の変化、治療継続状況、感想に関する自由記述などの情報を収集し、評価を行った。また、プログラム実施に併せて、本プログラムの研修会、講演会などを通じて本プログラムの広報，普及と均てん化を試みた。（平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金：障害者総合対策研究事業．松本俊彦）

2）医療観察法指定入院医療機関における物質使用障害治療プログラムの開発とその効果に関する研究

NCNP 病院医療観察法病棟における物質使用障害治療プログラムの介入効果判定研究を行った．物質使用障害治療プログラムによる介入後には，アルコール問題に関しては，SOCRATES の下位尺度「病識」および総得点において有意な上昇傾向が認められ，薬物問題に関しては自己効力感スケールの下位尺度「全般的な自己効力感変化」において有意な得点上昇が認められた．また, 介入後には「抗酒剤」の服用率および自助グル

ープへの参加同意率の顕著な上昇が認められた.（平成 23 年度精神・神経疾患研究開発費，松本俊彦 ）

3）司法関連施設における少年用薬物乱用防止教育ツールによる介入効果とその普及に関する研究

少年鑑別所入所中の薬物乱用者を対象として開発した再乱用防止のための自習ワークブック「SMARPP-Jr.」を、薬物乱用問題を持つ成人女性の刑事施設被収容者 135 名に対して教育プログラムと共に実施し、薬物の誘惑に抵抗できる自信、問題認識の深度や援助に対する必要性の認識に関する評価尺度の得点変化を検討した。その結果、本ワークブックによる自習プログラムを含む介入結果は、成人男性を対象とした先行研究ほどには明確なものとはいえず、薬物問題の重症度と介入効果との関係も直線的なものではなかった。女性の場合には、併存する精神医学的問題やトラウマ関連問題を抱える薬物乱用者が少なくなく、薬物問題の重症度だけでは分類しきれない、不均質な集団である可能性が高いと考えられる。（平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業，松本俊彦）

C．基礎研究

1）合成カンナビノイドの精神依存性に関する基盤的研究

脱法ハーブには，大麻の精神活性成分である Δ^9-THC と薬理作用が類似した合成カンナビノイド（脱法ドラッグ）が含まれていることが明らかになっている．そこで，脱法ハーブに含まれている合成カンナビノイドの精神依存性について，条件付け場所嗜好性試験により検討した．その結果，合成カンナビノイドの JWH-210 および RCS-4 は，精神依存形成能を有する事が判明した．また，薬物弁別試験から，JWH-210 および RCS-4 は Δ^9-THC と類似の自覚効果（感覚効果）を示すことが明らかになった．合成カンナビノイドの薬物依存性は，条件付け場所嗜好性試験と薬物弁別試験を利用する事で，効率よく評価できると考えられる．（平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業．舩田正彦，富山健一）

2）合成カンナビノイドの細胞毒性評価に関する研究

脱法ハーブに含まれている合成カンナビノイドの細胞毒性について検討を行った．NG108-15（細胞樹立細胞株）を使用して，JWH-210 および RCS-4 の作用を検討した． NG108-15 細胞において，JWH-210 および RCS-4 は強力な細胞毒性を示し，この細胞毒性の発現には，カンナビノイド CB_1 受容体が重要な役割を果たしていることが明らかになった．合成カンナビノイドは数多くの類縁誘導体が存在するため，培養細胞を利用した細胞毒性の評価は，迅速かつ正確な毒性評価法として有用であると考えられる．（平成 23 年度精神・神経疾患研究開発費：アルコールを含めた物質依存に対する病態解明及び心理社会的治療法の開発に関する研究．舩田正彦，富山健一）

Ⅲ．社会的活動

当研究部は，研究部創設以来，厚生労働省に限らず，薬物乱用・依存対策に関係する各省庁・自治体・市民団体等と連携を取り続けてきており，独自に研修会を主催するのみならず，各種研修会への講師派遣，啓発用資料および教材作成，調査等への協力などを行っている（細目は研究業績参照）．

1）保健医療行政・政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

・政府委員会

厚生労働省薬事・食品衛生審議会臨時委員（和田 清），厚生労働省医薬食品安全局依存性薬物検討会委員（和田 清），厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部精神・障害保健課「地域依存症対策推進モデル事業の評価に関する検討会」委員（和田 清），厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部精神・障害保健課「 公募型補助金事業（平成 23 年度依存症回復施設職員研修事業）評価検討会構成員（和田 清），文部科学省スポーツ・青少年局「高等学校における薬物乱用防止啓発 DVD 作成協力者（和田 清），法務省保護局「薬物処遇研究会」メンバー （和田清，松本俊彦），法務省矯正局「少年院矯正教育プログラム（薬物非行）開発会議」メンバー（和田 清，松本俊彦），文部科学省スポーツ・青少年局「薬物乱用防止広報啓

発活動推進協力者会議」委員（松本俊彦）、参議院法務委員会「刑の一部執行猶予法案」審議 参考人（松本俊彦）、内閣府共生社会政策「アメリカにおける青少年の薬物乱用対策」企画分析会議委員（松本俊彦），文部科学省スポーツ・青少年局「薬物等に対する意識等調査に関する協力者会議」委員（嶋根卓也）

・その他公的委員会

東京都薬物情報評価委員会委員（和田 清），独立行政法人医薬品医療機器総合機構専門委員（和田 清），東京地方裁判所登録精神保健判定医（松本俊彦）,世田谷区自殺対策連絡協議会会長（松本俊彦），中央区自殺対策検討委員会委員長（松本俊彦），東東京都脱法ドラッグ専門調査委員会専門委員（舩田正彦），社団法人全国高等学校 PTA 連合会薬物乱用防止啓発パンフレット編集委員（嶋根卓也），社団法人埼玉県薬剤師会職能委員会（嶋根卓也）、財団法人麻薬・覚せい剤乱用防止センター資材改善委員会（嶋根卓也）

・研究成果の行政貢献

・「脱法ドラッグ」「指定薬物」について，依存性・細胞毒性等を評価し，薬物使用の禁止・制限について具体的な提案（依存性薬物の指定）を行った（厚労省医薬食品局）。

・「刑の一部執行猶予」制度導入を見越して，薬物依存者に対する「保護観察所における治療プログラムの開発」、ならびに、「地域支援ガイドライン」(案)の策定に貢献した（法務省保護局）.

・少年院収容者対する薬物離脱指導プログラム導入に対して，「矯正教育プログラム(薬物非行)」策定に貢献した（法務省矯正局）.

・自殺との関連が指摘されている向精神薬の過量服薬に関する研究を実施し、その成果としての向精神薬の過量服薬および薬剤師の関与について，自殺予防総合対策センターによる自殺総合対策大綱改正に向けての提言に盛り込んだ.（厚労省社会援護局）

2）市民社会に対する一般的な貢献

・市民向け講演会：(Ⅳ．研究業績 C.講演 参照)

・報道：(Ⅳ．研究業績 G. その他(1)取材 参照)

3）専門教育面における貢献

・研修会・研究会

・第 25 回薬物依存臨床医師研修会（主催），第 13 回薬物依存臨床看護研修会（主催）

・各種研修会等への講師派遣（Ⅳ．研究業績 C. 講演 参照）

・大学教育

星薬科大学非常勤講師(舩田正彦)，津田塾大学非常勤講師(嶋根卓也)．国立障害者リハビリテーションセンター学院非常勤講師(嶋根卓也)．

・その他

"Addiction" Editorial advisory board （和田 清），Psychiatry and Clinical Neurosciences Reviewer（和田 清，松本俊彦），

Ⅳ．研究業績

A．刊行物

(1) 原著論文

1) Osaki Y, Suzuki K, Wada K, Hitaumoto S: Association of Parental Factors with Student Smoking and Alcohol Use in Japan. Jpn. J. Alcohol & Drug Dependence 46(2): 270-278, 2011.

2) Srisrapanont M, Arunpongpaisal S, Wada K, Marsden J, Ali R, Kongsakon R,: Comparison of methamphetamine psychosis and schizophrenic symptomes: A defferential item functioning analysis.Progress in Neuro-Psychoparmacology & Biological Psychiatry 35: 959-964, 2011.

3) Suzuki H, Kaneita Y, Osaki Y, Minowa M, Kanda H, Suzuki K, Wada K, Hayashi K, Ohida T: Clarification of the factor structure of the 12-item General Health Questionnaire among Japanese adolescenta and associated sleep status. Psychiatry Research 188: 138-146, 2011.

4) Matsumoto T, Chiba Y, Imamura F, Kobayashi O, Wada K: Possible effectiveness of interven tion using a self-teaching workbook in adolescent drug abusers detained in a juvenile classific ation home. Psychiatry and Clinical Neurociences 65: 576-583, 2011.
5) Aiba M, Matsui Y, Kikkawa T, Matsumoto T, Tachimori H: Factors influencing suicidal ideat ion among Japanese adults: From the national survey by the Cabinet Office. Psychiatry and Clinical Neurosciences 65: 468-475, 2011.
6) Matsumoto T, Azekawa T, Uchikado T, Ozaki S, Hasegawa N, Takekawa Y, Matsushita S: Comparative study of suicide risk in depressive disorder patients with and without problem d rinking. Psychiatry and Clinical Neurosciences 65: 529–532, 2011.
7) Kameyama A, Matsumoto T, Katsumata Y, Akazawa M, Kitani M, Hirokawa S, Takeshima T: Psychosocial and psychiatric aspects of suicide completers with unmanageable debt: A psyc hological autopsy study. Psychiatry and Clinical Neurosciences 65: 592–595, 2011.
8) Matsumoto T, Matsushita S, Okudaira K, Naruse N, Cho T, Muto T, Ashizawa T, Konuma K, Morita N, Ino A: Depression and suicide risk of outpatients at specialized hospitals for su bstance use disorder: Comparison with depressive disorder patients at general psychiatric clini cs. Japanese Journal of Alcohol and Drug Dependence 46 (6): 554-559, 2011.
9) Tsutsumi A, Izutsu T, Matsumoto T: Risky sexual behaviors, mental health, and history of c hildhood abuse among adolescents. Asian Journal of Psychiatry. 5: 48–52, 2012.
10) 松本俊彦、今村扶美、小林桜児、和田 清、尾崎士郎、竹内良雄、長谷川雅彦、今村洋子、谷家優子、安達泰盛：PFI（Private Finance Initiative)刑務所における薬物依存離脱指導の効果に関する研究：自習ワークブックとグループワークによる介入一第１報一．日本アルコール・薬物医学会雑誌 46(2)：279－296, 2011.
11) 小林桜児, 松本俊彦, 今村扶美, 和田 清, 尾崎士郎, 竹内良雄, 長谷川雅彦, 今村洋子, 谷家優子, 安達泰盛：PFI(Private Finance Initiative）刑務所における薬物依存離脱指導の効果に関する研究：自習ワークブックとグループワークによる介入-第２報：重症度別による効果の分析ー．日本アルコール・薬物医学会雑誌 46(3): 368-380, 2011.
12) 関口隆一, 塚本哲司, 深井美里, 菊池礼子, 岡崎直人, 山川敬子, 森宏美, 黒田安計, 杉山一, 松本俊彦: 精神科救急医療電話相談における自殺企図切迫例への対応: 埼玉県医学会雑誌 16 (1): 291-296, 2011.
13) 松本俊彦、尾崎 茂、小林桜児、和田 清：わが国における最近の鎮静剤（主としてベンゾジアゼピン系薬物)関連障害の実態と臨床的特徴-覚せい剤関連障害との比較ー. 精神神経学雑誌 113(12): 1184-1198, 2011.
14) 松本俊彦、嶋根卓也、尾崎茂、小林桜児、和田 清：乱用･依存の危険性の高いベンゾジアゼピン系薬剤同定の試み．精神医学 54(2): 201-209, 2012.
15) 松本俊彦, 小林桜児, 今村扶美, 赤澤正人, 長 徹二, 松下幸生, 猪野亜朗: うつ病性障害患者における問題飲酒の併存率: 文献的対照群を用いた検討. 精神医学 54 (1): 29-37, 2012.
16) 赤澤正人, 松本俊彦, 勝又陽太郎, 廣川聖子, 立森久照, 竹島正: 若年者の自傷行為と過量服薬における自殺傾向と死生観の比較. 自殺予防と危機介入 32 (1): 34-40, 2012.
17) 勝又陽太郎, 松本俊彦, 赤澤正人, 廣川聖子, 高橋祥友, 川上憲人, 渡邉直樹, 平山正実, 亀山晶子, 横山由香里, 竹島 正: 男性自殺既遂者におけるうつ症状の世代別特徴. 精神科治療学 27 (4): 543-553, 2012.
18) 舩田正彦：大麻乱用による薬物依存形成と精神疾患．精神科, 18, 61-66. 2011.

(2) 総説

1) 尾崎茂, 小林桜児, 松本俊彦, 和田 清：医療施設からみた最近の特徴．日本社会精神医学会雑誌 20(4): 399-406, 2011.

2) 和田 清, 嶋根卓也, 舩田正彦：わが国における薬物乱用・依存の最近の特徴. 日本社会精神医学会雑誌 20(4): 407-414, 2011.
3) 松本俊彦: 7. アルコールとうつ病、自殺. 日本アルコール関連連問題学会雑誌特別号: S12-S13, 2011.
4) 松本俊彦: 物質依存の強迫性・衝動性―渇望に対する薬物療法―. 臨床精神薬理 14: 607-614, 2011.
5) 松本俊彦: アルコール依存症と嗜癖概念: DSM-5 ドラフトを受けて. 日本精神科病院協会雑誌 30 (4): 298-305, 2011.
6) 松本俊彦: 子どもの自殺. 小児内科 43: 909-914, 2011.
7) 松本俊彦: 思春期の自傷行為―その実態と予防を中心に―. 精神科治療学 25 (5): 553-559, 2011.
8) 松本俊彦: 薬物臨床の最前線 SMARPP が丸ごとわかる! 第3回 スマープの実際―セッションはどんな感じ? 季刊 Be! 103 号 2011. 3: 58-62, 2011.
9) 松本俊彦: わが国における性被害の実態―少年施設男子入所者の調査から―. 被害者学研究 21: 89-100, 2011.
10) 松本俊彦: 嗜癖問題と自傷・自殺. アディクションと家族 27 (4): 297-301, 2011.
11) 小林桜児, 松本俊彦: 覚せい剤・大麻・多薬物依存. 精神科 18(6): 607-610, 2011.
12) 松本俊彦: 地域づくりのためのメンタルヘルス講座 6: 虐待、暴力を経験した人たちの抱えやすいメンタルヘルス問題の特徴と支援上の注意事項を教えてください. 公衆衛生 75: 725-728, 2011.
13) 松本俊彦: リストカットする思春期の理解と支援―かかわるすべての支援者のために―. 広島県小児科医会会報 52: 12-20, 2011.
14) 松本俊彦: 自傷行為の理解と援助～アディクションと自殺のあいだ～. 日本アルコール関連問題学会雑誌 13: 18-21, 2011.
15) 赤澤正人, 松本俊彦: 労働者におけるアルコールの問題と自殺. 産業精神保健 19: 93-98, 2011.
16) 松本俊彦: 薬物臨床の最前線 SMARPP が丸ごとわかる! 第4回 タマープの挑戦―精神保健福祉センターで. 季刊 Be! 104 号 2011. 9: 74-77, 2011.
17) 松本俊彦: 思春期における薬物乱用の危険因子と保護的因子. 財団法人麻薬・覚せい剤乱用防止センターNEWS LETTER 2011.2・第 85 号: 2-7, 2011.
18) 松本俊彦: 非行や死の危険が高まる思春期―衝動行為の増加. 児童心理 2011 年 10 月号 臨時増刊 No.939: 99-105, 2011.
19) 松本俊彦: 覚せい剤検出時の法的対応: 精神科医の立場から. 中毒研究 24: 193-197, 2011.
20) 松本俊彦: 境界性パーソナリティ障害の自己破壊的行動への対応. 精神科治療学 26: 1135-1142, 2011.
21) 竹島　正, 松本俊彦, 川野健治, 稲垣正俊, 勝又陽太郎: 自殺予防総合対策センターの活動. 産業精神保健 19: 218-223, 2011.
22) 松本俊彦: 認知行動療法を取り入れた包括的外来治療プログラムの必要性. 日本社会精神医学会雑誌 20 (4): 415-419, 2011.
23) 松本俊彦:　依存・嗜癖における強迫性・衝動性と薬物療法. 精神神経学雑誌 1133 (10): 999-1007, 2011.
24) 木村勝智, 松本俊彦: 日常診療ケーススタディ メンタルヘルス編～見逃さないで!　あなたも診ている心の病気～CASE 8「この世から消えてしまいたい人」への対応: プライマリケアで診る自殺念慮. 日本医事新報 No. 4569; 2011. 11. 19; 36-40, 2011.
25) 松本俊彦: 薬物臨床の最前線 SMARPP が丸ごとわかる! 第5回 医療観察法の「想定外」!?　季刊 Be! 105 号 2011. 12: 58-62, 2011.
26) 松本俊彦: 薬物依存臨床から見えてくる精神科薬物療法の課題―「全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査」の結果より―. 精神科治療学 27 (1): 71-79, 2012.
27) 宮崎　仁, 松本俊彦: 日常診療ケーススタディ メンタルヘルス編～見逃さないで!　あなたも診ている心の病気～CASE 10「朝から酒を飲まずにいられない人」への対応: プライマリケアで診るアルコール依存症. 日本医事新報 No. 4578; 2012. 1. 21; 36-40, 2012.
28) 松本俊彦: 見逃すな!　緊急報告と提言 一般精神科における「うつ×飲酒」「向精神薬」の問題. 季刊 Be!

106号2012. 3: 36-42, 2012.

29)松本俊彦: 精神科治療薬の乱用・依存―医原性の薬物依存―. 財団法人麻薬・覚せい剤乱用防止センターNEWS LETTER 2012.2・第86号: 2-7, 2012.

30)木村勝智, 松本俊彦: 日常診療ケーススタディ メンタルヘルス編～見逃さないで! あなたも診ている心の病気～CASE 12「リストカットを繰り返す人への対応：プライマリケアで診る自傷行為. 日本医事新報 No. 4586; 2012. 3. 17; 35-39, 2012.

31)松本俊彦: 若者の自傷行為～その実態と予防教育のあり方. 心と社会 148: 111-121, 2012.

32)松本俊彦: アディクション概念～その理解と今日的な意義～. 日本アルコール・薬物医学会雑誌 47 (1): 13～23, 2012.

33)松本俊彦: 2. うつ病治療～ベンゾジアゼピンの功罪. 医薬ジャーナル 48 (4): 1139-1142, 2012.

34)松本俊彦: アルコール・薬物問題と自殺予防. 治療 94 (4): 515-520, 2012.

35)松本俊彦: 物質使用障害と自傷・自殺. 精神科 20 (3): 257-262, 2012.

36)嶋根卓也：【精神科医の多剤併用・大量処方を考えるI】薬剤師から見た向精神薬の過量服薬. 精神科治療学27(1)：87-93, 2012.

37)嶋根卓也：思春期における薬物乱用の実態と対策. 産婦人科治療103(2)：144-150, 2011.

38)嶋根卓也：薬局薬剤師を情報源とする向精神薬の乱用・依存の実態把握に関する研究. 埼玉県薬剤師会雑誌37(8)：17-21, 2011.

39)嶋根卓也：思春期における薬物乱用の実態と予防, 思春期学29(1)：13-18, 2011.

(3) 監修

1) 嶋根卓也：薬物乱用防止パンフレット, お父さん, お母さん「うちの子に限って･･･」は危険です!! (社)全国高等学校PTA連合会, 2012.

(4) 著書

1) 和田 清、尾崎 茂、近藤あゆみ、嶋根卓也：Ⅰ 物質依存 2. わが国の物質乱用･依存の疫学と動向. 専門医のための精神科臨床リュミエール26, 中山書店, 東京, pp.14-27, 2011.6.10.

2) 和田 清：Key Word 85 薬物依存、物質依存. 精神医学キーワード事典. 中山書店, 東京, pp.242-243, 2011.7.15.

3) 和田 清：薬物乱用. 今日の小児治療指針 第15版. 医学書院, 東京, pp.692-693, 2012.2.15.

4) 和田 清：ヘロイン依存. 今日の精神科治療指針. 医学書院, 東京, pp.630-631, 2012.2.15.

5) 和田 清：薬物乱用防止教育の前に知っておくべきこと. 保健総合大百科 小学保健ニュース・心の健康ニュース 縮刷活用版 2012年, 小学写真新聞社, 東京, pp.38-38, 2012.2.1.

6) 和田 清：一度だけでもダメ！薬物のこわさを知ろう. 保健総合大百科 小学保健ニュース・心の健康ニュース 縮刷活用版 2012年, 小学写真新聞社東京, pp.40-40, 2012.2.1.

7) 松本俊彦: 薬物依存とアディクション精神医学. 金剛出版, 2012.

8) 松本俊彦: Ⅴ. 自殺プロセスの各段階での自殺予防［自殺予防を念頭に置いた精神科治療］ 6. 薬物乱用・依存. 張 賢徳編集 専門医のための精神科臨床リュミエール29 自殺予防の基本戦略, pp89-95, 中山書店, 東京, 2011.

9) 松本俊彦: 薬物依存対策と行政・保健機関. 福居顯二編 脳とこころのプライマリケア. 株式会社シナジー, 東京, pp573-583, 2011

10) 松本俊彦: Ⅱ. 薬物療法の到達点 D. 不安障害 5. ベンゾジアゼピン常用量依存を防ぐには. 樋口輝彦・石郷岡純編 専門医のための精神科臨床リュミエール 25. 向精神薬のリスク・ベネフィット, pp207-214, 中山書店, 東京, 2011

11) 松本俊彦: 12 社会心理的疾患. 薬物乱用. 五十嵐 隆編 小児科診療ガイドライン―最新の診療指針―［第2版］, 514-518, 総合医学社, 東京, 2011

12) 松本俊彦: V. 薬物依存 4. 心理社会的治療. 福居顯二編 専門医のための精神科臨床リュミエール 26. 依存症・衝動制御障害の治療, pp132-142, 中山書店, 東京, 2011
13) 松本俊彦: 11 章 薬物乱用・依存とその支援. 平木典子・斉藤こずゑ・氏家達夫・稲垣佳世子・髙橋惠子・湯川良三編 児童心理学の進歩・2011 VOL. 50, pp255-280, 東京, 金子書房, 2011
14) 松本俊彦: Question 22 自傷行為をする生徒への学校での対応について教えてください. 住田実編 養護教諭のための教育実践に役立つ Q&A 集Ⅳ 保健指導をめぐる疑問・質問を中心に（健康教室 2011 年 7 月号増刊号）. pp80-82, 東山書房, 京都, 2011.
15) 松本俊彦: 思春期編: リストカットが続いている [自傷]. 山登敬之・斎藤 環 編 入門 子どもの精神疾患: 悩みと病気の境界線. pp67-72, 日本評論社, 東京, 2011.
16) 松本俊彦:自殺対策のこれまでとこれから. こころの科学増刊号　井原 裕編　精神科臨床はどこへ行く. pp115-120, 日本評論社, 東京, 2011.
17) 松本俊彦: 第Ⅱ章 症状および発病状況にもとづいて分類した病態とその治療　9. 通院中の患者が自殺企図した後に初めて診察するときの精神科主治医の対応. 精神科治療学 vol. 26 増刊号 精神科治療学編集委員会編集 「神経症性障害の治療ガイドライン」, pp343-347, 星和書店, 東京, 2011.
18) 松本俊彦: 第Ⅱ章 症状および発病状況にもとづいて分類した病態とその治療　10. 通院中の患者の自傷行為を発見したときの精神科主治医の対応. 精神科治療学 vol. 26 増刊号 精神科治療学編集委員会編集 「神経症性障害の治療ガイドライン」, pp348-353, 星和書店, 東京, 2011.
19) 松本俊彦: 2-1-5 今後の自殺対策における課題と関連学会の果たす役割. 精神保健福祉白書編集委員会編 精神保健福祉白書 2012 年度版: 東日本大震災と新しい地域作り, pp38, 中央法規出版, 東京, 2011.
20) 松本俊彦: 第 8 章 アルコール依存症. 水野雅文編集 一般診療科医と精神科医のメンタルヘルス連携ハンドブック, pp87-95, 東京都保健福祉局, 東京, 2012.
21) 松本俊彦: 摂食障害の関連症状（自傷, 過量服薬）. 樋口輝彦, 市川宏伸, 神庭重信, 朝田　隆, 中込和幸 編集 今日の精神疾患治療指針, pp276-278, 医学書院, 東京, 2012.
22) 松本俊彦: 大麻依存. 樋口輝彦, 市川宏伸, 神庭重信, 朝田　隆, 中込和幸 編集 今日の精神疾患治療指針, pp631-632, 医学書院, 東京, 2012.

(5) 研究報告書

1) 和田 清 : 総括研究報告書. 平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業）「薬物乱用･依存等の実態把握と薬物依存症者に関する制度的社会資源の現状と課題に対する研究」(H23-医薬-一般-014）研究報告書, pp.1-pp.14, 2012.3.31.
2) 和田 清, 嶋根卓也, 小堀栄子, : 飲酒・喫煙・くすりの使用についてのアンケート調査（2011 年）通称 : 薬物使用に関する全国住民調査（2011 年）. 平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業）「薬物乱用･依存等の実態把握と薬物依存症者に関する制度的社会資源の現状と課題に対する研究」(H23-医薬-一般-014）研究報告書 pp.15-pp.95, 2012.3.31
3) 和田 清, 石橋正彦, 中村亮介, 前岡邦彦, 森田展彰 : 薬物乱用･依存者における HIV 感染と行動のモニタリングに関する研究. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策研究事業）「国内外の HIV 感染症の流行動向及びリスク関連情報の戦略的収集と統合的分析に関する研究」総括・分担研究報告書, pp.175-192, 2011.3.30.
4) 松本俊彦 : 薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究: 総括報告書. 平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業（精神障害分野）「薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究（研究代表者 : 松本俊彦）」総括・分担研究報告書, pp1－10, 2012.

5) 松本俊彦，今村扶美，小林桜児，和田清，尾崎士郎，今村洋子：司法関連施設における認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究. 平成23年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業（精神障害分野）「薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究（研究代表者：松本俊彦）」総括・分担研究報告書，pp55－69，2012.

6) 松本俊彦，近藤あゆみ，高橋郁絵，今村扶美，神田博之，栗坪千明，白川裕一郎，矢澤祐史：民間回復施設における認知行動療法治療プログラムの開発と効果に関する研究（1）．平成23年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業（精神障害分野）「薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究（研究代表者：松本俊彦）」総括・分担研究報告書，pp71－80，2012.

7) 松本俊彦，近藤あゆみ，高橋郁絵，今村扶美，神田博之，栗坪千明，白川裕一郎，矢澤祐史：民間回復施設における認知行動療法治療プログラムの開発と効果に関する研究（2）．平成23年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業（精神障害分野）「薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究（研究代表者：松本俊彦）」総括・分担研究報告書，pp81－90，2012.

8) 小林桜児，松本俊彦，今村扶美，根岸典子，若林朝子，和田 清：専門外来における認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究. 平成23年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業（精神障害分野）「薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究（研究代表者：松本俊彦）」総括・分担研究報告書，pp11－19，2012.

9) 今村扶美，松本俊彦，小林桜児，平林直次，和田 清：医療観察法における物質使用障害治療プログラムの開発と効果に関する研究. 平成23年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業（精神障害分野）「薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究（研究代表者：松本俊彦）」総括・分担研究報告書，pp43－53，2012.

10) 松本俊彦，森田展彰，猪野亜朗，小沼杏坪，奥平謙一，成瀬暢也，芦沢 健，松下幸生，武藤岳夫，長徹二，阿瀬川孝治，長谷川直美，尾崎 茂，内門大丈，武川吉和，小林桜児，今村扶美，赤澤正人，上岡陽江，幸田 実，山田幸子，渡邊敦子，岡坂昌子，谷部陽子，宮城純子：薬物依存者・アルコール依存者の自殺の実態解明と自殺予防に関する研究. 平成23年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業（精神障害分野）「自殺のハイリスク者の実態解明及び自殺予防に関する研究（研究代表者：伊藤弘人）」総括・分担研究報告書，pp121－134，2012.

11) 松本俊彦，森田展彰，猪野亜朗，小沼杏坪，奥平謙一，成瀬暢也，芦沢 健，松下幸生，武藤岳夫，長徹二，阿瀬川孝治，長谷川直美，尾崎 茂，内門大丈，武川吉和，小林桜児，今村扶美，赤澤正人，上岡陽江，幸田 実，山田幸子，渡邊敦子，岡坂昌子，谷部陽子，宮城純子：薬物依存者・アルコール依存者の自殺の実態解明と自殺予防に関する研究. 平成23年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業（精神障害分野）「自殺のハイリスク者の実態解明及び自殺予防に関する研究（研究代表者：伊藤弘人）」総合研究報告書，pp47－60，2012.

12) 川﨑二三彦，松本俊彦，高橋 温，上野昌江，長尾真理子：社会福祉法人横浜博萌会子どもの虹 情報研修センター（日本虐待・思春期問題情報研修センター）平成22年度研究報告書「親子心中」に関する研究（1）―先行研究の検討―. 社会福祉法人横浜博萌会子どもの虹 情報研修センター（日本虐待・思春期問題情報研修センター），横浜，2012.

13) 竹島 正，大類真嗣，廣川聖子，立森久照，赤澤正人，森 隆夫，秋田宏弥，川野健治，勝又陽太郎，松本俊彦：自殺の心理学的剖検の実施に関する研究. 平成23年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究（研究代表者：加我牧子）」総括・分担研究報告書，pp13－23，2012.

14) 松本俊彦，勝又陽太郎，赤澤正人，小髙真美，竹島 正，亀山晶子，白川教人，五十嵐良雄，尾崎 茂，深間内文彦，榎本 稔，飯島優子：自殺既遂者の心理社会的特徴に関する研究―精神科受診歴のあるうつ病患者における自殺のリスク要因の検討―. 平成23年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究（研究代表者：加我牧子）」総括・分担研究報告書，pp25－35，2012.

15) 松本俊彦，尾崎 茂，嶋根卓也，小林桜児，和田 清：全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業「薬物乱用・依存等の実態把握と薬物依存症者に関する制度的社会資源の現状と課題に関する研究（研究代表者：和田清）」総括：分担研究報告書，pp97－106，2012.

16) 松本俊彦，今村扶美，小林桜児：司法関連施設における少年用薬物乱用防止教育ツールによる介入効果とその普及に関する研究．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業「薬物乱用・依存等の実態把握と薬物依存症者に関する制度的社会資源の現状と課題に関する研究（研究代表者：和田 清）」総括：分担研究報告書，pp185－200，2012.

17) 松本俊彦，成瀬暢也，梅野 充，上原（青山）久美，小林桜児，森田展彰，嶋根卓也，和田 清，湯本洋介，高濱三穂子，合川勇三：向精神薬乱用と依存(1)―依存症専門医療機関調査―．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業（精神障害分野）「様々な依存症における医療・福祉の回復プログラムの策定に関する研究（研究代表者：宮岡等）」総括・分担研究報告書，pp26-47，2012.

18) 松本俊彦，嶋根卓也，和田 清：向精神薬乱用と依存(2)―薬剤師調査―．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業（精神障害分野）「様々な依存症における医療・福祉の回復プログラムの策定に関する研究（研究代表者：宮岡等）」総括・分担研究報告書，pp48-68，2012.

19) 宮岡 等，田辺 等，石川 達，松本俊彦，後藤 恵，伊波真理雄，樋口 進，真栄里仁，神村栄一，岡崎直人，岩崎正人，稲村厚，田中克俊，佐藤拓，村井俊哉，河本泰信：病的ギャンブリング(いわゆるギャンブル依存)の概念の検討と各関連機関の適切な連携に関する研究．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業（精神障害分野）「様々な依存症における医療・福祉の回復プログラムの策定に関する研究（研究代表者：宮岡 等）」総括・分担研究報告書，pp69-125，2012.

20) 舩田正彦：違法ドラッグの精神依存並びに精神障害の発症機序と乱用実態把握に関する研究(研究代表者：舩田正彦)（H21-一般-031）．平成 23 年度厚生労働科学研究補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業）平成 23 年度総括研究報告書．pp1-11，2012.

21) 舩田正彦：脱法ハーブ含有合成カンナビノイドの薬物依存性および細胞毒性の評価．平成 23 年度厚生労働科学研究補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業）「違法ドラッグの精神依存並びに精神障害の発症機序と乱用実態把握に関する研究（H21-一般-031）（研究代表者：舩田正彦）」．平成 23 年度分担研究報告書．pp12-23，2012.

22) 富山健一：合成カンナビノイドの薬物弁別刺激特性：カンナビノイド受容体の役割．平成 23 年度厚生労働科学研究補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業）「違法ドラッグの精神依存並びに精神障害の発症機序と乱用実態把握に関する研究（研究代表者：舩田正彦）（H21-一般-031）」．平成 23 年度総括研究報告書．pp24-36，2012.

23) 嶋根卓也，菅原 誠，田中さゆり，平 重忠，染谷和子，藤堂千浪，菊地晴美，岡崎重人，中川拓也，横田 薫，加藤武士，太田実男：若年薬物乱用者向け認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究（研究代表者：松本俊彦）」平成 23 年度総括･分担研究報告書．pp.121-pp.134，2012.

24) 嶋根卓也，日高庸晴，和田 清：クラブユーザーにおける MDMA 等のクラブドラッグ乱用実態に関する研究．平成 23 年度厚生労働科学研究補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業）「違法ドラッグの精神依存並びに精神障害の発症機序と乱用実態把握に関する研究（研究代表者：舩田正彦）」．平成 23 年度分担研究報告書．pp.50-pp.67，2012.

25) 嶋根卓也，日高庸晴，和田 清，三島健一，藤原道弘：違法ドラッグの乱用実態把握に関する研究．平成 21-23 年度厚生労働科学研究補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業）「違法ドラッグの精神依存並びに精神障害の発症機序と乱用実態把握に関する研究（研究代表者：舩田正彦）」．平成 21-23 年度総合研究報告書．pp.101-pp.105，2012.

26) 嶋根卓也，川村和美：薬剤師を情報源とする医薬品乱用の実態把握に関する研究．平成 23 年度厚生労

働科学研究補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業）「薬物乱用・依存等の実態把握と薬物依存症者に関する制度的社会資源の現状と課題に関する研究（研究代表者：和田清）」．平成23年度総括分担研究報告書．pp.127-pp.134，2012.

27）嶋根卓也，日高庸晴，松崎良美：インターネットによるMSMのHIV感染予防に関する行動疫学研究（REACH Online 2011）．平成23年度厚生労働科学研究補助金（エイズ対策研究事業）「HIV感染予防対策の個別施策層を対象にしたインターネットによるモニタリング調査・認知行動理論による予防介入と多職種対人援助職による支援体制構築に関する研究（研究代表者：日高庸晴）」．平成23年度総括分担研究報告書．pp.127-pp.249，2012.

(6) 翻訳

(7) その他

1） 和田 清：社会精神医学研究ワークショップの報告．日本社会精神医学会雑誌 20(2)：159-160，2011.
2） 和田 清：診断の指針　治療の指針　薬物依存症．綜合臨床 60(7)：1615-1616，2011.
3） 和田 清：超理解！最近の薬物乱用･依存　第4回 薬物依存症に対する治療．Ricetta Vol.15 No.2，ノバルティスファーマ株式会社，10-11，2011.7.
4） 和田 清：超理解！最近の薬物乱用･依存　第5回 薬剤師が知っておくべきこと薬剤師に期待すること．Ricetta Vol.15 No.3．ノバルティスファーマ株式会社，10-11，2011.12.
5） 和田 清：薬物乱用の問題点ー医学的視点からー第一回 依存形成の恐ろしさー乱用・依存･中毒の違い．少年写真新聞社，中学保健ニュース第1516号付録：10-11,2012.1.8.
6） 石郷岡純，和田 清，多田幸司，稲田健：座談会　ベンゾジアゼピンの光と影．臨床精神薬理 15：123-133，2012.
7） 和田 清：薬物乱用の問題点ー医学的視点からー第二回 身体依存と精神依存．少年写真新聞社，　中学保健ニュース第1516号付録：10-11,2012.2.8.
8） 和田 清：薬物乱用の問題点ー医学的視点からー第三回 中学生対象の全国調査からわかること．少年写真新聞社，中学保健ニュース第1522号付録：10-11,2012.3.8.
9） 和田 清：3 講義 薬物の乱用，依存，中毒の違いを理解する．第61回全国学校保健研究大会報告書，静岡県教育委員会，pp.76-78，2012.3.
10） 松本俊彦：アディクションと自殺．社団法人座編 陽だまりの庭Ⅱ，23-27，ぶどう書房，奈良，2011
11） 松本俊彦：薬物依存症の精神ケア．ドクターサロン 55 (7)：501-505，2011
12） 松本俊彦：自殺予防のために薬剤師にできること．Grobal Pharmacists Vol. 7 (3)：9，2011
13） 松本俊彦：インタビュー・松本俊彦さんに聴く 思春期における自己破壊的行動・自殺―「ダメ、ゼッタイ」では救えない―．季刊SEXUALITY 53：32-47，2011.
14） 松本俊彦：書評　岡野憲一郎著『続 解離性障害～脳と身体からみたメカニズムと治療』（岩崎学術出版社，2011）．精神療法 38 (2)：276-277，2012.
15） 嶋根卓也，日高庸晴：インターネットアンケートREACH Online 2011について．FUKUOKA Gay Community Guide SEASON，　vol.26，2011.
16） 嶋根卓也，日高庸晴：インターネットアンケートREACH Online 2011について．MASH OSAKA SaL+，　vol.104，2011.
17） 嶋根卓也，日高庸晴：インターネットアンケートREACH Online 2011について．Community center akta monthly paper，　vol.08，2011.
18） 嶋根卓也，日高庸晴：インターネットアンケートREACH Online 2011について．YOKOHAMA Gay Community Paper CREW，　vol.7，2011.
19） 嶋根卓也，日高庸晴：インターネットアンケートREACH Online 2011について．OKINAWA Gay Community Paper nankr-okinawa，　vol.4，2011.

20) 嶋根卓也, 日高庸晴：インターネットアンケート REACH Online 2011 について. ANGEL LIFE NAGOYA Gay Community Paper h.a.n.a. vol.2, 2011.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

1) Wada K: The History and Current State of Drug Abuse in Japan. The First Asian Paciffic Conference on Substance Abuse and Prevwention/Treatmenent. 國立中正大學大禮堂國際會議廳(台湾）,國立中正大學, 國立成功大學, 國家衛生研究院, 2011.5.26-27.

2) Matsumoto T, Imamura F, Kobayashi O: Treatment program for substance use disorder under the Medical Treatment and Supervision Act of Japan. XXII International Congress on Law and Mental Health, Berlin (Humbolt University), July 21, 2011.

3) Ando S, Hojo A, Kanata S, Yasugi D, Matsumoto T: One-year follow-up of 132 patients who admitted due to self-poisoning. XXVII International Association for Suicide Prevention World Congress, Beijin, Sep 15, 2011

4) Kobayashi O, Suzuki J, Matsumoto T, Wada K: Adolescents' Attitude Towards illicit drug use-comparison between US & Japan-. The American Academy of Addiction Psychiatry's (AAAP) 22nd Annual Meeting and Symposium, Scottsdale, AZ, Dec 8, 2011.

5) 和田 清：有機溶剤精神病と統合失調症の類似点と相違点. シンポジウム 6 薬物誘発性精神病と統合失調症ーその類似点と相違点を探る. 第 21 回日本臨床精神神経薬理学会. 第 41 回日本神経精神薬理学会　合同年会, 京王プラザホテル(東京）,2011.10.27.

6) 松本俊彦: 自傷行為の理解と援助. 第 33 回日本アルコール関連問題学会 公開シンポジウム「若者の自傷行為～生きる支援へ～」, 佐賀, 2011. 7. 23 .

7) 松本俊彦: アルコール問題と自殺. シンポジウム 11 プライマリ・ケアに必要な断酒・節酒指導と地域連携～あなたはお酒と自殺の関係を知っていますか? 第 2 回日本プライマリ・ケア連合学会, 札幌,2011. 7. 3.

8) 松本俊彦: アディクションの背後にあるもの―「故意に自分の健康を害する」症候群―. 第 30 回信州精神神経学会 特別講演, 松本,2011. 10. 1.

9) 松本俊彦: アディクション概念の理解と意義. シンポジウム 5「物質依存から『多様なアディクション』へ（Ⅱ）―何が違って何が同じなのか―. 平成 23 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会,名古屋, 2011. 10. 14.

10) 松本俊彦: アルコール・薬物問題と自殺予防. 3 学会合同市民公開講座「アルコール・薬物依存と自殺防止」, 平成 23 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 2011. 10. 15, 名古屋

11) 松本俊彦: 依存・嗜癖における強迫性・衝動性と薬物療法. シンポジウム 29 強迫スペクトラム障害の可能性と治療～DSM-5 の動向と薬物療法を中心に～. 第 107 回日本精神神経学会学術総会, 東京,2011. 10. 27.

12) 松本俊彦: 自殺対策から見えてくる精神科医療のこれから. コアシンポジウムⅢ「問題行動の精神病理学」, 第 31 回日本社会精神医学会, 東京, 2012. 3. 16.

13) 松本俊彦: 我が国の自殺の現状と自殺予防に期待する薬剤師の役割. シンポジウム S37 薬剤師を真の“ゲートキーパー”とするために　～薬剤師が潜在的な精神科疾患や処方薬による薬物依存をピックアップできるようになるためにはどうすることが必要か～. 第 132 回日本薬学会, 札幌, 2012. 3.31.

14) 嶋根卓也：向精神薬乱用・依存の予防に薬局薬剤師はどのように関われるか. 一般シンポジウム「薬剤師を真の“ゲートキーパー”とするために　～薬剤師が潜在的な精神科疾患や過量投与、自殺をピックアップできるようになるためにはどうすることが必要か～」日本薬学会第 132 年会, 北海道, 2012.3.31.

(2) 一般演題

1) 今村扶美, 松本俊彦, 小林桜児, 尾崎士郎, 和田 清: PFI (Private Finance Initiative) 刑務所における薬物依存離脱指導の効果に関する研究: 自習ワークブックとグループワークによる介入. 第 7 回日本司法精

神医学会大会, 岡山, 2011.6.4.

2) 今村扶美, 松本俊彦, 小林桜児, 和田 清, 尾崎士郎, 竹内良雄, 長谷川雅彦, 今村洋子, 谷家優子, 安達泰盛: PFI 刑務所における薬物依存離脱指導の効果に関する研究: 自習ワークブックとグループワークによる介入. 平成 23 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 名古屋, 2011.10.13.

3) 小林桜児, 松本俊彦, 今村扶美, 和田 清, 尾崎士郎, 竹内良雄, 長谷川雅彦, 今村洋子, 谷家優子, 安達泰盛: 刑務所における薬物依存離脱指導の効果―重症度別による効果の分析―. 平成 23 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 名古屋, 2011.10.13.

4) 池田朋広, 常岡俊昭, 髙木のり子, 石坂理江, 清水勇人, 稲本淳子, 松本俊彦, 加藤進昌: 精神科亜急性期における併存性障害治療プログラムの試行. 平成 23 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 名古屋, 2011.10.13.

5) 小林桜児, 松本俊彦, 今岡岳史, 和田 清: 物質使用障害と統合失調症における解離の併存. 平成 23 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 名古屋, 2011.10. 13.

6) 松本俊彦, 小林桜児, 今村扶美, 赤澤正人, 長徹二, 松下幸生, 猪野亜朗: うつ病性障害患者における問題飲酒の併存率: 文献的対照群を用いた検討. 平成 23 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 名古屋, 2011.10. 14.

7) 嶋根卓也, 松本俊彦, 和田 清: 薬局薬剤師を情報源とする向精神薬の乱用・依存の実態把握に関する研究. 平成 23 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 名古屋, 2011.10.15.

8) 松本俊彦, 嶋根卓也, 尾崎茂, 小林桜児, 和田清: 乱用・依存の危険性の高いベンゾジアゼピン系薬剤同定の試み: 文献的対照群を用いた予備的研究. 平成 23 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 名古屋, 2011.10.15.

9) 近藤千春, 鈴木竜世, 久保マリ子, 柴田枝里子, 高橋祐香里, 松本俊彦: O 病院におけるアルコール依存症患者を対象にした SMARPP 実施における集団凝集性とその効果について. 平成 23 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 名古屋, 2011.10.14.

10) 稲垣正俊, 齋藤友紀雄, 高橋祥友, 河西千秋, 齋藤利和, 本橋 豊, 矢永由里子, 松本俊彦, 川野健治, 勝又陽太郎, 大槻露華, 竹島 正 : 学術研究の成果を反映した自殺対策の策定に向けた自殺予防総合対策センターの取組み. 第 35 回日本自殺予防学会総会.沖縄, 2011.12.15-17.

11) 大槻露華, 稲垣正俊, 川野健治, 勝又陽太郎, 松本俊彦, 竹島 正 : 都道府県・政令指定都市における自殺対策の取組. 第 35 回日本自殺予防学会総会. 沖縄, 2011.12.15-17.

12) 舩田正彦, 富山健一:合成カンナビノイド誘発細胞毒性発現におけるカスパーゼカスケードの役割 : NG 108-15 細胞による検討. 第 85 回日本薬理学会年会. 京都, 2012.3.18.

13) 舩田正彦, 富山健一, 和田 清: 薬物依存性および毒性の評価法, 合成カンナビノイドの特性. 第 1 回レギュラトリーサイエンス学会学術大会. 東京, 2011.9.3.

14) 富山健一, 和田 清, 舩田正彦:JWH-203 および JWH-210 の弁別刺激特性並びに細胞毒性の評価. 第 46 回日本アルコール・薬物医学会. 愛知県産業労働センター. 名古屋, 2011.10.13.

15) 嶋根卓也, 日高庸晴 : クラブカルチャーとの親和性と MDMA 使用との関連. 第 70 回日本公衆衛生学会総会, 秋田, 2011.10.19-21.

16) 仁木敦子, 立賀英子, 小堀栄子, 嶋根卓也, 今野弘規, 磯 博康 : A 市における中学生の喫煙・薬物乱用の機会と生活背景との関連. 第 70 回日本公衆衛生学会総会, 秋田, 2011.10.19-21.

17) 竹原健二, 野口真貴子, 嶋根卓也, 三砂ちづる : 立ち会い出産がその後の男性による育児サポートにもたらす影響. 第 70 回日本公衆衛生学会総会, 秋田, 2011.10.19-21.

18) 三砂ちづる, 竹原健二, 嶋根卓也, 野口真貴子:"豊かな"初産経験は次の出産につながるか? 出産時からのコホート研究より. 第 70 回日本公衆衛生学会総会, 秋田, 2011.10.19-21.

19) 松崎良美, 竹原健二, 嶋根卓也, 三砂ちづる : 助産所で過ごす妊産婦の「曖昧さに対する受容」と「完全性を求める傾向」は変化するか. 第 70 回日本公衆衛生学会総会, 秋田, 2011.10.19-21.

20) 嶋根卓也, 松本俊彦, 和田 清 : 薬局薬剤師を情報源とする向精神薬の乱用・依存の実態把握に関する研究.

第 46 回日本アルコール薬物医学会，愛知，2011.10-13-15.

21)嶋根卓也，松本俊彦，和田 清：調剤レセプトを通じて把握された向精神薬の重複処方の実態について．第 17 回埼玉県薬剤師会学術大会，埼玉，2011.11.6.

22)小堀栄子,前田祐子：新来在日タイ人の生活実態と健康．第 70 回日本公衆衛生学会総会，秋田,2011.10.20

(3) 研究報告会

1) 和田 清(開催)：アルコールを含めた物質依存に対する病態解明及び心理社会的治療法の開発に関する研究(22-2)．精神･神経疾患研究開発費．平成 23 年度研究成果報告会．アルカディア市ヶ谷,2011.12.1

2) 和田 清，石橋正彦，中村亮介，前岡邦彦，森田展彰：薬物乱用･依存者における HIV 感染と行動のモニタリングに関する研究．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策研究事業）「国内外の HIV 感染症の流行動向及びリスク関連情報の戦略的収集と統合的分析に関する研究」班総会．ホテル東京ガーデンパレス．2012.3.3.

3) 和田 清（開催）：平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業）「薬物乱用･依存等の実態把握と薬物依存症者に関する制度的社会資源の現状と課題に対する研究」(H23-医薬-一般-014）研究成果報告会．2012.3.9.

4) 和田 清，嶋根卓也，小堀栄子，：飲酒・喫煙・くすりの使用についてのアンケート調査（2011 年）通称：薬物使用に関する全国住民調査（2011 年）．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業）「薬物乱用･依存等の実態把握と薬物依存症者に関する制度的社会資源の現状と課題に対する研究」(H23-医薬-一般-014）研究成果報告会．2012.3.9.

5) 舩田正彦，富山健一，三島健一，藤原道弘，和田 清：大麻成分の薬物依存性及び神経毒性に関する研究．平成 22 年度精神・神経疾患研究開発費「アルコールを含めた物質依存に対する病態解明及び心理社会的治療法の開発に関する研究」(22 指-2-04）（主任研究者：和田 清)」研究成果報告会，東京，2011.12.1.

6) 嶋根卓也，川村和美：薬剤師を情報源とする医薬品乱用の実態把握に関する研究．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業）「薬物乱用･依存等の実態把握と薬物依存症者に関する制度的社会資源の現状と課題に対する研究」研究成果報告会．川口メディアセブン，2012.3.9.

7）嶋根卓也，日高庸晴，松崎良美：インターネットによる MSM の HIV 感染予防に関する行動疫学研究（REACH Online 2011）．平成 23 年度厚生労働科学研究補助金（エイズ対策研究事業）「HIV 感染予防対策の個別施策層を対象にしたインターネットによるモニタリング調査・認知行動理論による予防介入と多職種対人援助職による支援体制構築に関する研究（研究代表者：日高庸晴)」．合同班会議，早稲田奉仕園，2012.1.21-22.

C．講演

1) 和田 清：有識者ヒアリング「薬物事犯者に対する医療・援助の現状と課題―薬物乱用・依存・中毒の違いを理解することの重要性―．犯罪対策閣僚会議：第 2 回再犯防止対策ワーキングチーム幹事会．中央合同庁舎第 4 号館 12 階共用 1208 特別会議室．2011.4.15.

2) 和田 清：わが国の薬物乱用・依存状況と薬物乱用による健康への害．教養講話　東京税関．東京税関本関大会議室．2011.5.11.

3) 和田 清：薬物の乱用・依存・中毒の違いを理解することの重要性と薬物依存の治療．千葉県東部地区精神科治療学術講演会．吉富薬品株式会社、大日本住友製薬株式会社．国保旭中央病院 5F 大講堂．2011.6.2.

4) 和田 清：「ダメ。ゼッタイ。」トークライブ．平成 23 年度「6. 26 国際麻薬乱用撲滅デー」都民の集い．東京都、厚生労働省，(財）麻薬・覚せい剤乱用防止センター，東京都薬物乱用対策推進本部，東京都薬物乱用防止推進協議会，六本木ヒルズアリーナ，2011.7.3.

5) 和田 清：薬物問題解決に重要な普通の生活とは―乱用・依存・中毒の違いと「普通の生活」の大切さ―．山形県看護協会研修「性の健康教育―思春期と薬物問題を考える―」．山形県看護協会，山形県看護協会会館・看護研究センター，2011.7.22.

6) 和田 清：青少年における薬物乱用の現状と健康影響について―乱用・依存・中毒の違いと「普通の生活」の大切さ―．平成 23 年度薬物乱用防止教育研修会．高知県健康政策部医事薬務課，高知県立精神保健福祉

センター, 高知県警察本部, 高知県教育委員会事務局スポーツ健康教育課, 高知城ホール, 2011.7.26.

7) 和田 清 : 医学的視点から見た薬物乱用問題ー乱用・依存・中毒の違いを理解することの重要性と全国中学生調査の結果が教えることー. 平成23年度財団法人日本学校保健会夏期セミナー坐財団法人日本学校保健会夏期セミナー, 北区滝野川会館, 2011.8.3.

8) 和田 清 : 薬物乱用と健康への影響についてー乱用・依存・中毒の違いと「普通の生活」の大切さー. 薬物乱用防止教育推進事業 薬物乱用防止教室推進のための講習会, 文部科学省・愛知県教育委員会, 愛知県産業労働センター, 2011.8.9

9) 和田 清 : 薬物の心身に与える影響. 少年補導幹部専科教養. 警察大学校. 2011.9.21

10) 和田 清 : 再乱用防止に向けての薬物依存症の理解ー薬物乱用・依存・中毒の違いを理解することの重要性ー. 平成23年度薬物中毒対策連絡会議. 厚労省医薬食品局監視指導・麻薬対策課, ホテル日航高知 旭ロイアル, 高知, 2011.9.27.

11) 和田 清 : 薬物依存に関する考え方・理解促進に向けてー薬物乱用・依存・中毒の違いを理解することの重要性ー. 平成23年度再乱用防止対策講習会. 厚労省医薬食品局監視指導・麻薬対策課, ホテル日航高知 旭ロイアル, 高知, 2011.9.28.

12) 和田 清 : 薬物依存に関する考え方・理解促進に向けてー薬物乱用・依存・中毒の違いを理解することの重要性ー. 薬物乱用防止啓発講演. 栃木県薬物乱用防止指導県南地区協議会, 小山市立文化センター, 2011.10.6

13) 和田 清 : 薬物依存に関する考え方・理解促進に向けてー薬物乱用・依存・中毒の違いを理解することの重要性ー. 平成23年度再乱用防止対策講習会, 厚労省医薬食品局監視指導・麻薬対策課, エル・大阪, 大阪, 2011.10.17.

14) 和田 清 : 再乱用防止に向けての薬物依存症の理解ー薬物乱用・依存・中毒の違いを理解することの重要性ー. 平成23年度薬物中毒対策連絡会議. 厚労省医薬食品局監視指導・麻薬対策課, エル・大阪, 大阪, 2011.10.18.

15) 和田 清 : 第10課題 喫煙, 飲酒, 薬物乱用防止教育 薬物の乱用, 依存, 中毒の違いを理解する.第61回全国学校保健研究大会.静岡県コンベンションアーツセンター（グランシップ）, 静岡県教育委員会, 2011.10.28.

16) 和田 清 : 薬物依存に関する考え方・理解促進に向けてー薬物乱用・依存・中毒の違いを理解することの重要性ー. 平成23年度再乱用防止対策講習会. 厚労省医薬食品局監視指導・麻薬対策課, 長崎県医師会館, 2011.11.1.

17) 和田 清 : 再乱用防止に向けての薬物依存症の理解ー薬物乱用・依存・中毒の違いを理解することの重要性ー.平成23年度薬物中毒対策連絡会議, 厚労省医薬食品局監視指導・麻薬対策課, 長崎県医師会館, 2011.11.2.

18) 和田 清 : 覚せい剤依存症と医療. 法務省矯正研修所任用研修科高等科第43回研修. 法務省矯正研修所, 2011.11.22.

19) 和田 清 : 薬物依存に関する考え方・理解促進に向けてー薬物乱用・依存・中毒の違いを理解することの重要性ー. 第5回麻薬取締官中等科研修. 厚生労働省医薬食品局監視指導・麻薬対策課, 法務総合研究所名古屋支所, 2011.12.16.

20) 和田 清 : 地域社会における薬物依存者への回復支援の現状と課題. 少年院矯正教育プログラム（薬物非行）開発会議, 多摩少年院, 2012.1.18.

21) 和田 清 : 薬物依存症の最新動向と対応のポイント. 平成23年度薬物依存症対策事業に係る講演会, 埼玉県川口保健所, 2012.1.27.

22) 松本俊彦: 自殺予防について. 特定非営利活動法人ワーカーズコープ主催 社会人基礎学習講座, UKビル, 2011.4.4.

23) 松本俊彦: 自殺予防のために私たちができること」. 社団法人厚木市医師会主催, 医師研修会, ロアジールホテル厚木, 2011.4.8.

24)松本俊彦: 職場における自殺予防. 社団法人加賀労働基金主催　講演会, 長生殿, 2011.4.15.
25)松本俊彦: 自殺対策の現状と課題. 子どもの虹情報研修センター主催 「親子心中に関する研究」第 1 回研究会, 子どもの虹情報研修センター, 2011.4.18.
26)松本俊彦: ドラッグから自分をまもろう. 藤田保健衛生大学アセンブリ委員会主催 薬物乱用防止講演会, 藤田保健衛生大学, 2011.5.2.
27)松本俊彦: 自殺対策、いまできること. 逗子市主催 自殺対策職員研修, 逗子市役所, 2011.5.11.
28)松本俊彦: 自殺対策をどうすすめるか.　兵庫県立精神保健福祉センター主催 平成 23 年度 第 1 回自殺対策企画研修会, 兵庫県こころのケアセンター, 2011.5.12.
29)松本俊彦: 自傷行為の理解と援助. 香川県臨床心理士会主催 香川県臨床心理士研修会, サンポートホール高松, 2011.5.15.
30)松本俊彦: 自傷・自殺企図への対応. 東京都教育相談センター主催 平成 23 年度第 1 回都立学校教育相談担当者連絡会, 東京教職員研修センター, 2011.5.16.
31)松本俊彦: 薬物依存の理解と援助. 関東信越厚生局麻薬取締部主催 再乱用防止対策プログラムにかかる講習会, 九段第三合同庁舎, 2011.5.23.
32)松本俊彦: 薬物依存の理解と援助. 横浜ひまわり会主催: ひまわり会勉強会, 横浜ダルク, 2011.5.25.
33)松本俊彦: 自殺の実態と地方自治体の施策について. 横浜市こころの健康相談センター主催 平成 23 年度第 1 回自殺対策「基礎研修」, 栄公会堂, 2011.5.27.
34)松本俊彦: 自傷と自殺～その理解と援助. NPO 法人埼玉児童思春期精神保健懇話会主催 第 21 回埼玉児童思春期精神保健懇話会, さいたま市民会館うらわ, 2011.5.28.
35)松本俊彦: 自傷行為の理解と援助. BPD 家族会主催講演会,ちよだプラットフォームスクエア, 2011.5.29.
36)松本俊彦: 薬物依存の理解と援助. 国連アジア極東犯罪防止研修所主催 アジア極東刑事司法従事者研修会, 国連アジア極東犯罪防止研修所, 2011.5.30.
37)松本俊彦: DV 犯の心理と病理. NPO 法人性犯罪加害者の処遇制度を考える会主催ストーカー・配偶者暴力対策専科研修, 関東管区警察学校, 2011.6.1
38)松本俊彦: 精神科救急における諸問題―物質依存を中心に―. メディカルトリビューン・大塚製薬主催 学術講演会「これからの精神科急性期治療を考える」, ザ・プリンスパークタワー, 2011.6.4.
39)松本俊彦: 依存症の理解と回復. 横須賀刑務支所主催 受刑者対象講話, 横須賀刑務支所, 2011.6.10.
40)松本俊彦: 事例検討会助言者. メンタルケア協議会主催 東京都自殺相談ダイヤル事例検討会, 代々木研修室, 2011.6.12.
41)松本俊彦: 向精神薬乱用・依存の実態と乱用・依存者の臨床的特徴. アディクション研究会主催 定例研究会, 東京都立松沢病院, 2011.6.16.
42)松本俊彦: 自傷行為の理解と援助～若者の自殺予防のために. 埼玉県臨床心理士会主催 埼玉県臨床心理士会総会公開講演会, 埼玉会館, 2011.6.19.
43)松本俊彦: 薬物依存者に対する医療・援助の現状と課題.　法務省保護局主催 平成 23 年度地方構成保護委員会委員長・保護観察所長会合同講演会, 法務省, 2010.6.21.
44)松本俊彦: アルコールとうつ、自殺. 大塚製薬・福島アルコール関連疾患研究会主催 第 12 回福島アルコール疾患研究会, 東北病院, 2011.6.23.
45)松本俊彦: 薬物依存の理解と援助. 川崎ダルク主催 川崎ダルク 7 周年記念フォーラム, 川崎市産業振興会館, 2011.6.24.
46)松本俊彦: 自殺ハイリスク者の対応. 独立行政法人国立精神･神経医療研究センター精神保健研究所主催 第 3 回自殺対策心理職研修, クロスウェーブ府中, 2011.7.5.
47)松本俊彦: 自傷行為の理解と援助. 釧路市医師会・アステラス製薬主催 第 5 回釧路精神科講演会 特別講演, 釧路プリンスホテル, 2011.7.8.
48)松本俊彦: 自傷行為の理解と援助. 佐賀大学医学部同窓会主催 平成 23 年度佐賀大学医学部同窓会特別講演, 国立大学法人佐賀大学医学部, 2011.7.9.

49)松本俊彦: 現在の依存症～理解と援助. 岡山市薬剤師会主催 第10回岡山市薬剤師会オープンフォーラム, 就実大学, 2011.7.10.

50)松本俊彦: わが国の自殺の現状について. 中央区保健所主催 自殺対策講習会, 中央区保健所, 2011.7.13.

51)松本俊彦: 自殺をめぐる最近の動向とその対策. 東京都多摩総合精神保健福祉センター主催 平成23年度自殺対策研修, 東京都多摩総合精神保健福祉センター, 2011.7.15.

52)松本俊彦: 自傷行為関連問題への対応. 日本サイコセラピー学会主催 精神療法の枠組みを学び外来診療に生かすための講座～困る患者について学ぶ. 青山心理臨床教育センター, 2011.7.17.

53)松本俊彦: 学校における自傷・自殺予防. 熊本県高等学校教育研究会健康教育部会・熊本県教育委員会主催 平成23年度熊本県高等学校教育研究会健康教育部会研究大会, 熊本県歯科医師会館, 2011.7.26.

54)松本俊彦: 思春期における自傷行為の理解と自殺予防. 東京都養護教諭部会主催 平成23年度東京都養護教諭部会研究大会, 中野ZEROホール, 2011.7.27.

55)松本俊彦: 自殺予防のために学校にできること. 昭島市教育委員会主催 学校経営研修会, 昭島市市民交流センター, 1011.7.29.

56)松本俊彦: SMARPPとは何か?～薬物依存の理解と援助～. 茨城県立こころの医療センター主催 職員研修会, 茨城県立こころの医療センター, 2011.8.1.

57)松本俊彦: 子どもの心の問題: 子どもの自傷・自殺などの問題. 神奈川県立保健福祉大学主催 平成23年度教員免許状更新講習会, 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター, 2011.8.3.

58)松本俊彦: 自殺念慮者と自殺未遂者への対応. 大阪府こころの健康総合センター主催自殺予防相談従事者養成研修, 大阪赤十字会館, 2011.8.5.

59)松本俊彦: 求められる薬物乱用防止教育とは?～「ダメ、ゼッタイ」だけではダメ. 富山県くすり政策課主催 平成23年度薬物乱用防止フォーラム, 富山婦中ふれあい館, 2011.8.6.

60)松本俊彦: 性被害に遭遇した男性の精神医学的特徴について. 性教育研究会主催 性教育研究会研修会, 国立オリンピック記念青少年総合センター, 2011.8.7.

61)松本俊彦: ワークブックを用いた統合的外来治療プログラム. 北九州市立精神保健福祉センター主催 平成23年度第2回薬物乱用・依存関連問題専門研修, 北九州市立精神保健福祉センター, 2011.8.9.

62)松本俊彦: 思春期の自殺対策について. 埼玉県春日部保健所主催 自殺対策研修会, 埼玉県春日部保健所, 2011.8.10.

63)松本俊彦: 思春期のこころと自己破壊的行動～「故意に自分の健康を害する」症候群. 熊本県精神保健福祉センター主催 平成23年度熊本県自殺予防研修会・思春期精神保健講座, 熊本県立大学, 2011.8.12.

64)松本俊彦: 自殺の実態と地方自治体の施策について. 横浜市こころの健康相談センター主催 平成23年度第2回自殺対策「基礎研修」, 横浜市開港記念会館, 2011.8.17.

65)松本俊彦: 自分を傷つけることでSOSを発する子供への援助のあり方. 香川県津教育センター主催 「子どもを自殺から守る」研修会, 高松商工会議所, 2011.8.19.

66)松本俊彦: 薬物乱用・中毒・依存について. 社団法人東京都病院薬剤師会・吉富製薬共催 平成23年度第3回精神科専門領域薬剤師養成研修会, AP西新宿, 2011.8.20.

67)松本俊彦: 薬物依存の理解と援助. 徳島県教育委員会体育健康課主催 平成23年度薬物乱用防止教育研修会, あわぎんホール, 2022.8.22.

68)松本俊彦: 自傷行為の最近の傾向と事例研究. 日々輝学園高等学校主催 SP関連生徒に対する事例研究会, 池袋「明日館」, 2011.8.26.

69)松本俊彦: アルコール依存と自殺. アディクション問題を考える会主催 第28回AKK市民講座, 全専売会館, 2011.8.28.

70)松本俊彦: 自傷行為と摂食障害. 精神保健研究所主催 摂食障害研修, 独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所, 2011.8.31.

71)松本俊彦: 依存症と自殺. 財団法人大阪府人権協会主催 2011年度自殺防止サポーター養成講座, HRCビル, 2011.9.2.

72)松本俊彦: 自傷行為と薬物依存の青年〜かかわり方を中心に. 明治安田こころの健康財団主催 平成 23 年度第 2 回集中講座「現代の思春期を考える」, 明治安田生命ビル, 2011.9.4.

73)松本俊彦: 自傷行為の理解と援助. 広島大学保健管理センター主催 広島大学学生相談シンポジウム, 広島大学, 2011.9.5.

74)松本俊彦: 「こころの危機」をどう受け止めるか? 群馬県東部保健福祉事務所主催 平成 23 年度地域自殺対策緊急強化事業 自殺予防講演会, 太田市 宝泉行政センター, 2011.9.9.

75)松本俊彦: 自傷行為と自殺予防〜アディクションの視点から. アルコール関連問題ソーシャルワーカー協会北海道支部主催 アルコール関連問題基礎講座 2011, 札幌エルプラザ, 2011.9.17.

76)松本俊彦: 身近なアルコール問題、気になりませんか? 新潟県長岡地域振興局健康福祉環境部・新潟マック主催 平成 23 年度自殺対策市民公開講座, 長岡市立中央図書館, 2011.9.23.

77)松本俊彦: 若者の飲酒の問題を考える〜「故意に自分の健康を害する」症候群. 信州アディクションセミナー実行委員会主催 第 2 回信州アディクションセミナー, 松本市あがたの森文化館, 2011.9.25.

78)松本俊彦: 薬物依存症と認知行動療法. 東京保護観察所主催 保護観察所職員研修, 東京保護観察所, 2011.9.26.

79)松本俊彦: 薬物依存の理解と離脱に関する概念. 多摩少年院主催 職員研修会, 多摩少年院, 2011.9.27.

80)松本俊彦: 薬物依存症と認知行動療法. 東京家庭裁判所主催 家庭裁判所調査官研修, 東京家庭裁判所, 2011.9.28.

81)松本俊彦: 矯正施設における自殺・自傷への対応. 法務省矯正研修所主催 任用課程高等科第 43 回研修, 法務省矯正研修所, 2011.9.30.

82)松本俊彦: 薬物依存症からの回復―親離れ、子離れ. アナク（薬物依存症を考える家族の会）主催 ANAK 8 周年フォーラム, 住金人材開発センター, 2011.10. 2.

83)松本俊彦: 薬物依存の理解と援助. 厚生労働省医薬食品局監視指導・麻薬対策課主催 平成 23 年度東海北陸地区薬物中毒対策連絡会議 相談従事者講習会, 名古屋 KKR ホテル, 2011.10.4.

84)松本俊彦: 自殺の現状や国の施策. 横浜市鶴見区福祉保健センター主催 鶴見地区自殺対策基礎研修, 鶴見区公会堂, 2011.10.5.

85)松本俊彦: なぜ若者たちは自身を傷つけるのか. 東京都福祉保健局主催 平成 23 年度若年層への自殺対策ゲートキーパー研修, 首都大学東京, 2011.10.7.

86)松本俊彦: 自殺ハイリスク患者への対応の原則. ヤンセンファーマ・中国地区 GHP 研究会主催 第 8 回中国地区 GHP 研究会,. ホテルチューリッヒ東方, 2011.10.8

87)松本俊彦: 薬物依存の理解と援助. 「第 3 回アディクション・フォーラム in 鳥取」実行委員会主催 第 3 回アディクション・フォーラム in 鳥取, 鳥取県立さざんか会館, 2011.10.9.

88)松本俊彦: 司法精神医療とアルコール・薬物使用障害. 精神保健研究所主催 第 5 回司法精神医学研修, , 独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所, 2011.10.12.

89)松本俊彦: 電話相談の受け方. メンタルケア協議会主催　自殺相談ダイヤル相談員研修会, 全理連ビル, 2011.10.16.

90)松本俊彦: 働きざかりのこころの健康〜お酒を飲んで頑張りすぎていませんか?〜. 世田谷区北沢総合支所主催 働きざかりのメンタルヘルス講演会, 松沢区民集会場, 2011.10.18.

91)松本俊彦: 自傷行為を行う子どもたちとどのように向き合うか. 一般社団法人埼玉県助産師会主催 思春期保健関係者研究会, 市民会館おおみや 2011.10.19.

92)松本俊彦: 薬物依存の理解と援助. 厚生労働省医薬食品局監視指導・麻薬対策課主催 平成 23 年度北海道・東北地区薬物中毒対策連絡会議 相談従事者講習会, ウェディングプラザアラスカ, 2011.10. 25-26

93)松本俊彦: 自傷行為の理解と援助〜なぜリストカットを繰り返すのか〜. 世田谷区烏山総合支所主催 要保護児童支援烏山地域協議会研修会, 世田谷区烏山区民センター, 2011.10.28.

94)松本俊彦: 自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応. 大分県こころとからだの相談支援センター主催 平成 23 年度自殺対策相談支援研修, 大分県こころと身体の相談支援センター, 2011.10.30.

95)松本俊彦: アルコールと心の健康. 東久留米市主催 平成23年度東久留米市心の健康づくり事業 心のヘルスサポーター講座, 東久留米市役所, 2011.10.31.

96)松本俊彦: 精神保健観察における自殺と物質依存への対応. 法務総合研究所主催 第4回社会復帰調整官初任研修, 法務総合研究所, 2011.11.1.

97)松本俊彦: 自殺企図者の心理. 山梨県立精神保健福祉センター主催 平成23年度自殺対策再企図防止研修, 山梨県立中央病院, 2011.11.2.

98)松本俊彦: 子どもの自殺予防のために学校にできること. 岐阜県高等学校生徒指導研究会主催 第57回岐阜県高等学校生徒指導研究大会, ホテルグランヴェール岐山, 2011.11.4.

99)松本俊彦: 自傷行為の理解と援助～故意に自分の健康を害する若者たち～. 社団法人宮崎県精神科診療所協会主催 宮崎県精神科診療所協会学術講演会, 宮崎観光ホテル, 2011.11.5.

100)松本俊彦: 身近にかくれたアルコールとこころの問題. 新潟県小千谷市健康センター主催 平成23年度心の健康講演会, 小千谷市総合産業会館サンプラザ, 2011.11.7.

101)松本俊彦: 自殺の現状と地域での対策のあり方. 国立保健医療科学院主催 平成23年度専門課程, 国立保健医療科学院, 2011. 11.10.

102)松本俊彦: リストカットと自殺について. 川崎市立商業高等学校主催 学校保健連絡協議会講演会, 川崎市立商業高等学校, 2011.11.14.

103)松本俊彦: 薬物依存の理解と援助. 厚生労働省医薬食品局監視指導・麻薬対策課主催 平成23年度関東・甲信越地区薬物中毒対策連絡会議 相談従事者講習会, 神奈川県民ホール, 2011.11.22.

104)松本俊彦: 地域での自殺予防の取り組み. 東京都多摩立川保健所主催 平成23年度自殺対策ゲートキーパー指導者養成研修, 東京都多摩立川保健所, 2011.11.25.

105)松本俊彦: アルコールと自殺. NPO法人愛媛県断酒会今治断酒会・今治市主催 市民公開セミナー 基調講演, 今治市中央公民館, 2011.11.27.

106)松本俊彦: 薬物依存症の理解と援助～自殺対策という切り口から～. 愛媛県心と体の健康センター主催 平成23年度自殺関連研修会, メルパルク松山, 2011.12.2.

107)松本俊彦: 薬物依存に対する認知行動療法プログラム（SMARPP）の有効性とその導入について. 愛媛県心と体の健康センター主催 平成23年度自殺関連研修会, メルパルク松山, 2011.12.2.

108)松本俊彦: 自殺に傾いた人を支えるために～自殺対策の基礎知識と対応. 広島市主催 平成23年度うつ病・自殺対策相談機関職員研究会, 広島市東区総合福祉センター, 2011.12.5.

109)松本俊彦: 自傷行為と自殺企図の評価のポイント. 上越地域振興局健康福祉環境部主催 平成23年度自殺予防事業医療機関関係者研修会, 上越市民プラザ, 2011.12.7.

110)松本俊彦: 自傷行為の理解と援助. 高知県精神保健福祉センター主催 平成23年度自殺対策関連事業, 高知会館, 2001.12.9.

111)松本俊彦: ドラッグから自分を守ろう! 神奈川県立光陵高等学校主催 生徒対象薬物乱用防止講演会, 神奈川県立光陵高等学校, 2012.12.11.

112)松本俊彦: 地域で役立つ薬物依存症の基礎知識とその対応～若者はなぜ薬物に手を出すのか～. 東京都多摩小平保健所主催 平成23年度薬物依存症講演会, 東京都多摩小平保健所, 2011.12.14.

113)松本俊彦: アルコールとうつ、自殺. 独立行政法人国立病院機構久里浜アルコール症センター主催 平成23年度アルコール問題の早期発見早期介入実践講座, 独立行政法人国立病院機構久里浜アルコール症センター, 2011.12.16.

114)松本俊彦: 薬物依存症とHIV感染症. 東京HIV診療ネットワーク主催 東京HIV診療ネットワーク講演会, 東京医科大学病院, 2011.12.18.

115)松本俊彦: 薬物関連問題の基礎知識と対応について. 鹿児島県精神保健福祉センター主催 平成23年度薬物関連問題従事者研修会, ハートピアかごしま, 2011.12.19.

116)松本俊彦: 自殺および自傷行為の臨床現場から見た死生の課題. 早稲田大学人間科学学術院 健康福祉学科主催 臨床死生学概論講義, 早稲田大学所沢キャンパス, 2011.12. 20.

117) 松本俊彦: 自傷行為の理解と援助. 全国家庭裁判所調査官有志主催 第 43 回カウンセリング研究会　第 1 分科会講師および事例検討会助言者, エルおおさか, 2012.1.15.
118) 松本俊彦: 多重構造の『ザル』を目指して〜治療プログラムを介したつながり. 龍谷大学矯正・保護総合センター主催 第 9 回薬物依存症者回復支援セミナー, 川崎市産業振興会館, 2012. 1. 22.
119) 松本俊彦: 日本の自殺の現状と自殺のリスクアセスメント. 特定非営利活動法人メンタルケア協議会主催 東京都自殺予防のための電話相談技能研修会, 全理連ビル, 2012. 1. 29.
120) 松本俊彦: 自殺に傾く人への介入にあたって〜行政職員が知っておくべき専門知識〜. 特別区研修所主催 平成 23 年度専門研修「自殺対策〜つながる支援に向けて〜」, 特別区研修所, 2012. 2. 1.
121) 松本俊彦: わが国の自殺および自殺対策の実態、臨床における自殺予防. 独立行政法人国立精神・神経医療研究センター病院看護部主催 第 10 回精神科専門講座, 独立行政法人国立精神・神経医療研究センター病院, 2012.2.1.
122) 松本俊彦: 自傷・パーソナリティ障害の理解. 公立大学法人横浜市立大学医学部精神医学講座主催 シニアレジデント講義, 公立大学法人横浜市立大学附属市民総合医療センター, 2012.2.2.
123) 松本俊彦: 自殺予防および発症後のケア. 神奈川労務安全衛生協会厚木支部主催 産業保健研修会, 厚木市勤労福祉センター, 2012. 2.3.
124) 松本俊彦: 自殺とアルコール問題のかかわりについて. NPO 法人愛知県断酒連合会主催 愛知県委託自殺ハイリスク者対策モデル事業（アルコール依存症関連対策）「サイバラ流『お酒と命のたいせつなお話』」, ウィンクあいち, 2012.2.5.
125) 松本俊彦: ドラッグから自分を守ろう.　神奈川県立大和西高等学校主催 生徒対象薬物乱用防止講演, 神奈川県立大和西高等学会, 2012.2.7.
126) 松本俊彦: アルコール問題とうつ、自殺. 石川県医師会主催 平成 23 年度依存症等対応研修事業特別講演会, 石川県医師会館, 2012.2.8.
127) 松本俊彦: 依存症の実態と認知行動療法にもとづく依存症からの回復. 特定非営利活動法人ドムクス主催 第 8 回 NPO 法人ドムクス・フォーラム, 静岡市市民文化会館, 2012.2.11.
128) 松本俊彦: 電話相談の受け方. メンタルケア協議会主催　自殺相談ダイヤル相談員研修会, 全理連ビル, 2012.2.12.
129) 松本俊彦: 自傷行為の理解と援助〜「故意に自分の健康を害する無症候群〜. 筑波大学大学院人間科学総合研究科ヒューマン・ケア科専攻社会精神保健学主催 講演会, 筑波大学総合研究棟 D, 2012. 2.14.
130) 松本俊彦: 自傷と自殺〜若者の自殺予防のために. 京都市主催 自殺予防にかかるゲートキーパー養成研修会 専門講義, キャンパスプラザ京都, 2012.2.15.
131) 松本俊彦: うつとアルコールの関係、過量服薬防止. 長野県健康福祉部主催. 平成 23 年度うつ病の診療・支援基盤強化事業【精神医療関係者研修】, JA 長野ビル, 2012. 2.18.
132) 松本俊彦: プライマリ・ケア医としてのアルコール・薬物依存、自傷、自殺へのかかわり方. 福井県医師会・福井県主催 平成 23 年度うつ病に対する一般医と精神科医の連携強化研修会, 福井県医師会館, 2012. 2.19.
133) 松本俊彦: 自傷行為と自殺について.　大阪自殺防止センター主催 平成 23 年度相談員継続研修会, 長堀安田ビル, 2012. 2.20.
134) 松本俊彦: 向精神薬乱用・過量服薬と自殺予防. 社団法人山梨県看護協会主催 平成 23 年自殺対策人材育成研修会〜薬局等勤務薬剤師に係る研修会〜, 社団法人山梨県看護協会看護教育研修センター, 2012.2.21.
135) 松本俊彦: 被災地におけるうつ・自殺予防について. 新潟県精神保健福祉協会ここのケアセンター主催 被災地におけるうつ・自殺予防講演会, アトリウム長岡, 2012.2.22.
136) 松本俊彦: 自傷する生徒の理解と対応. 川崎市教育委員会主催 川崎市中学校スクールカウンセラー研修会, 川崎市総合教育センター, 2012.2.24.
137) 松本俊彦: 自殺未遂者の実態と対策の必要性. 仙台グリーフケア研究会主催 医療現場で自殺未遂者に対応するためのワークショップ〜精神科関係者篇, 仙台プロミスお客様相談センター・イベントホール,

2012.2.26.

138) 松本俊彦: 地域における自殺ハイリスク者への介入のしかた. 仙台市精神保健福祉センター主催 平成23年度地域自殺対策研修講座 第3回目, 仙台市戦災復興記念館, 2012.2.29.

139) 松本俊彦: 自傷行為の理解と対応. 社会福祉法人相模原市社会福祉事業団主催 平成23年度施設支援事業精神障害研修, 相模原市障害者支援センター松が丘園, 2012.3.2.

140) 松本俊彦: 自傷や薬物に向かう子どもの現状と対策. 第26回日本精神保健会議（メンタルヘルスの集い）シンポジウム「子どもたちは学校に何を求めているのか」,有楽町朝日ホール, 2012.3.3.

141) 松本俊彦: 自傷行為の理解と援助～「故意に自分の健康を害する」症候群. 神奈川県臨床心理士会主催 第2回研修会, 横浜市教育会館ホール, 2012.3.4.

142) 松本俊彦: 薬物依存の理解と援助～薬物依存からの回復のためのプログラム. 熊本県精神保健福祉センター主催 第2回自殺予防従事者研修会（薬物依存対策研修）,熊本県立大学, 2012.3.5.

143) 松本俊彦: 自殺予防のために医療者にできること. 世田谷区医師会主催 平成23年度自殺対策研修会, 世田谷区医師会館, 2012.3.6.

144) 松本俊彦: 解離性同一性障害の精神鑑定事例. 法務省矯正研修所主催 調査鑑別特別科第5回研修, 矯正研修所, 2012. 3.7.

145) 松本俊彦: 地域における自殺対策について. 武蔵野市主催 平成23年度武蔵野市自殺対策職員研修, 武蔵野市総合体育館, 2012.3.7.

146) 松本俊彦: わが国の自殺の現状と対策～市職員の役割～. 篠山市健康課主催 平成23年度 篠山市自殺対策職員研修会, 篠山市福祉保健センター, 2012. 3.19.

147) 松本俊彦: 児童青年期の自傷. 東京都小児総合医療センター主催 子どもの心の診療支援拠点病院事業「医療関係者向け講座」,東京都小児総合医療センター, 2012.3.21.

148) 松本俊彦: 自傷行為の理解と援助～感情的に反応するな、医学的に反応せよ. 北里大学精神科学教室主宰 北里大学精神科教室拡大研究会, 北里大学東病院, 2012.3.22.

149) 松本俊彦: 自傷行為と思春期の自殺未遂. 北海道立精神保健福祉センター主催 北海道自殺未遂者講演会「傷ついたからだ、痛むこころ」, かでる2・7 , 2012. 3.24.

150) 松本俊彦: 大切な人のいのちを守るために、一人ひとりにできること. 大子町主催 大子町うつ・自殺予防対策事業講演会, 大子町文化福祉会館まいん, 2012.3.25.

151) 松本俊彦: 死にたいと言われたときの対応について. 北九州市立精神保健福祉センター主催 平成23年度自殺対策支援者研修, 北九州市立精神保健福祉センター, 2012.3.25.

152) 松本俊彦: 自殺の現状と対策～一人ひとりにできること. 中央区保健所主催 平成23年度第2回自殺対策ゲートキーパー研修会, 中央区保健所, 2012.3.25.

153) 松本俊彦: 自殺をめぐる最近の動向とその対策. 社会福祉法人村山苑主催 職員研修, 救護施設村山荘, 2012. 3.30.

154) 嶋根卓也 : 疫学が楽しくなるコツ ～薬物依存研究を通じて～. 日本国際保健医療学会学生部会東日本地方会ユースフォーラム, 東京大学医学部教育研究棟13 階1304A, 神奈川, 2011.6.19.

155) 嶋根卓也 : 青少年における薬物乱用の実態と予防. 平成23年度香川県薬物乱用防止教育研修会及び薬物乱用防止教室指導者講習会, 高松テレサホール, 香川, 2011.6.28.

156) 嶋根卓也 : 思春期における薬物乱用の特徴とその予防・治療. 平成23年度長野県薬物乱用防止教育指導者講習会, 長野県総合教育センター講堂, 長野, 2011.6.30.

157) 嶋根卓也 : 薬物乱用から身を守るために. 平成23年度薬物乱用防止教室, 横須賀市立公郷中学校体育館, 神奈川, 2011.7.7.

158) 嶋根卓也 : 薬物乱用から身を守るために. 平成23年度薬物乱用防止教室, 横須賀市立大津中学校体育館, 神奈川, 2011.7.7

159) 嶋根卓也 : 思春期における薬物乱用の特徴とその予防・治療. 平成23年度横須賀市教育委員会学校保健研修講座, ヴェルクよこすか(横須賀市立勤労福祉会館）6階ホール, 神奈川, 2011.7.25.

160)嶋根卓也：青少年における薬物乱用の実態と予防・援助．平成 23 年度福井県薬物乱用防止教室講習会および薬物乱用防止学校薬剤師セミナー，福井県生活学習館「ユー・アイふくい」多目的ホール，福井，2011.8.24.

161)嶋根卓也：薬局薬剤師を情報源とする向精神薬の乱用・依存の実態把握に関する研究．平成 23 年度埼玉県薬剤師会保険薬局講習会，さいたま市民会館おおみや大ホール，埼玉，2011.9.23.

162)嶋根卓也：発達段階に応じた薬物乱用防止教育のあり方について．平成 23 年度宮城県薬物乱用防止教室指導者講習会，宮城県行政庁舎 2 階講堂，宮城，2011.10.25.

163)嶋根卓也：青少年期における薬物乱用の特徴とその予防・治療．平成 23 年度埼玉県秩父保健所管内薬物乱用防止指導員協議会，埼玉県秩父保健所，埼玉，2011.11.9.

164)嶋根卓也：薬物依存の最近の傾向と課題．平成 23 年度東京都立中部総合精神保健福祉センター薬物依存（アディクション）研修，世田谷区烏山区民会館集会室，東京，2011.12.14.

165)嶋根卓也：チームで行う認知行動療法ワークブックの作り方．昭和大学医学部精神医学教室サイコエデュケーション研究会，昭和大学烏山病院，東京，2011.12.22.

D．学会活動

(1) 学会役員

1) 和田 清：日本社会精神医学会 常任理事
2) 和田 清：日本アルコール・薬物医学会 理事
3) 和田 清：ニコチン・薬物依存フォーラム 理事
4) 松本俊彦：日本アルコール精神医学会 理事
5) 松本俊彦：日本アルコール・薬物医学会 評議員
6) 松本俊彦：日本アルコール精神医学会 評議員
7) 松本俊彦：日本司法精神医学会 評議員
8) 松本俊彦：日本精神科救急学会評議員
9) 松本俊彦：日本青年期精神療法学会 理事
10) 舩田正彦：日本アルコール・薬物医学会 評議員
11) 舩田正彦：日本神経精神薬理学会 評議員
12) 舩田正彦：日本薬理学会 評議員
13) 舩田正彦：レギュラトリーサイエンス学会 評議員

(2) 座長

1) 白坂知信，和田 清：一般演題 8．第 46 回日本アルコール・薬物医学会．愛知県産業労働センター．名古屋，2011.10.15.
2) 和田 清，宮里勝政：一般講演 02「アルコール・物質関連障害」．第 31 回日本社会精神医学会．学術総合センター．東京, 2012.3.15.
3) 和田 清：教育講演Ⅱ 刑事司法鑑定の基礎ーその手法と考え方（岡田幸之）．第 31 回日本社会精神医学会．学術総合センター．東京, 2012.3.15.
4) 松本俊彦：コアシンポジウムⅢ「問題行動の精神病理学」，第 31 回日本社会精神医学会，東京, 2012.3.16.
5) 舩田正彦：ポスターセッション 29　薬物依存　第 85 回日本薬理学会年会．京都. 2012.3.18.

(3) 編集委員等

1) 和田 清：日本社会精神医学会 学術委員会 委員長，編集委員会委員
2) 和田 清：日本アルコール・薬物医学会 庶務委員会委員，編集委員会委員，教育委員会委員
3) 松本俊彦：日本社会精神医学会 学術委員
4) 松本俊彦：日本精神衛生学会 編集委員

5) 松本俊彦: 日本青年期精神療法学会 編集委員
6) 松本俊彦: 星和書店「精神科治療学」編集委員

E．研修

(1) 研修企画

1) 第13回薬物依存臨床看護等研修会(2011.9.29-10.2)
2) 第25回薬物依存臨床医師研修会(2011.9.29-10.2)

F．その他

(1) 取材等

1) 松本俊彦：読売新聞，薬物依存者家族の支援． 2011.5.31.
2) 松本俊彦：週刊朝日MOOK，新名医の最新治療 完全読本．pp406，2011.9.10.
3) 松本俊彦：毎日新聞（夕刊）「少年院で脱薬物指導強化～新年度再非行恐れの収容者に～」.2012.3.26.
4) 松本俊彦：NHK， ハートをつなごう「依存症」. 2011.6.01.
5)船田正彦：静岡新聞，違法ドラッグ毒性研究．2011．9.26.
6)船田正彦：高知新聞，違法ドラッグ毒性研究．2011．9.26.
7)船田正彦：埼玉新聞，違法ドラッグ毒性研究．2011．9.28.
8)船田正彦：熊本日日新聞，違法ドラッグ毒性研究．2011．9.28.
9)船田正彦：読賣新聞，脱法ハーブの危険性．2011．12.30.
10)船田正彦：共同通信ニュース，脱法ハーブまん延中．2012．2.7.
11)船田正彦：産經新聞，脱法ハーブの危険性．2012．2.7.
12)船田正彦：TBS，Nスタ．脱法ハーブの危険性．2012.1.10.
13)船田正彦：TBS，ニュース23．脱法ハーブの危険性．2012.1.10.
14)船田正彦：NHK，ニュースウォッチ9．脱法ハーブの危険性．2012.1.20.
15)船田正彦：日本テレビ，News ZERO．脱法ハーブの危険性．2012.1.27.
16)船田正彦：KBC，ニュースピア．脱法ハーブの危険性．2012.1.27.
17)船田正彦：日本テレビ，「スッキリ」．脱法ハーブの危険性．2012.1.30.
18)船田正彦：NHK，ゆうどきネットワーク．脱法ハーブの危険性．2012.2.2.
19)船田正彦：大阪朝日放送，キャスト．脱法ハーブの危険性．2012.2.23.
20)船田正彦：テレビ朝日，スーパーJチャンネル．脱法ハーブの危険性．2012.3.7.
21)船田正彦：読賣テレビ，かんさい情報ネットten．脱法ハーブの危険性．2012.3.16.
22)船田正彦：日本テレビ，News ZERO．脱法ハーブの危険性．2012.3.16.

(2) 資料提供等

1) 和田 清：写真提供．「シンナーを吸いつづけると・・・」．東京都港区平成23年度(2011）「子ども健康読本」，pp.25-pp.25，2011.4.
2) 和田 清：薬物はなぜいけないの？小学校特別活動 DVD 薬物乱用防止シリーズ，学研，2011.4.
3) 和田 清：:写真提供．DRUG 2011 薬物乱用のない社会を.警察庁薬物銃器対策課，2011.
4) 和田 清：写真提供．NO! DRUGS 2011.(財）全国防犯協会連合会，(財）社会安全研究財団，2011.
5) 嶋根卓也：資料提供．薬局薬剤師を情報源とする向精神薬の乱用・依存の実態把握に関する研究．朝日新聞東京本社報道局科学医療部，2011.

4. 心身医学研究部

Ⅰ. 研究部の概要

心身医学研究部の研究課題は，ストレス関連疾患，特に心身症や摂食障害，生活習慣病を対象に，Biopsychosocial モデルに基づき，心身相関の観点から病因や発症のメカニズム，病態を臨床的，基礎的に研究することと，効果的な治療法や予防法を開発することである．また，心身症・摂食障害の実態やその背景を調査することと，実証的な診断・治療法を普及していくことである．

臨床面では研究部のスタッフが全員で引き続きセンター病院心療内科外来で診療･研究に携わっている．

人事面ではH23.4.1付で流動研究員に上野真弓が就任，H23.5.31付けで流動研究員の兒玉直樹が退職し産業医科大学神経内科講師に就任，H23.12.31付で部長の小牧　元が定年退職し，国際医療福祉大学福岡リハビリテーション学部教授に就任した．

人員構成は次のとおりである．部長：小牧 元，ストレス研究室長：安藤哲也，心身症研究室長：菊地裕絵，流動研究員：兒玉直樹，上野真弓，併任研究員：濱田　孝，大和　滋，有賀　元，天野智文（センター病院），協力研究員：倉　尚樹，小原千郷，客員研究員：杉田峰康（福岡県立大学），前田基成（女子美術大学），近喰ふじ子（東京家政大学），関山敦夫（榎坂病院付属治療精神医学研究所），研究生7名．

Ⅱ. 研究活動

1）心身症の発症機序と病態，治療に関する基礎的ならびに臨床的研究

(1) 心身症の病態解明と効果的治療法の開発（精神・神経疾患研究開発費）（日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B））

機能性消化管障害，肥満症，摂食障害を対象に客観的指標として，①Ecological Momentary Assessment (EMA)法，②機能的 MRI，③自律神経系変動指標，④ストレスホルモン，⑤腸内フローラについて研究をすすめる．CBT を基盤とした心理療法的介入の開発と有効性の評価を行う．客観的で評価・診断技術と，説明・検証可能な治療法の開発を目的とする（小牧，安藤，菊地）．またアレキシサイミア評価法の一つである TAS-20 高得点群に異なるパーソナリティ傾向を有する群が混在していることを示した（上野，小牧）．正しいアレキシサイミア概念と研究の方向性の確立のためトロント大学 Taylor 教授らと第 15 回世界精神医学会議(WPA)シンポジウム（The Alexithymia Construct: History, Recent Developments, And Future Directions）を開催した（小牧）．

(2) 機能性消化管障害の臨床評価ならびに CBT 開発研究（精神・神経疾患研究開発費）

機能性消化管疾患（過敏性腸症候群や機能性胃腸症）は代表的心身症で有病率は非常に高く慢性に経過し QOL 低下や医療資源への負荷が大きい．認知行動療法センター，病院総合内科，東北大学の協力を得て機能性消化管疾患の認知行動療法の開発を進めた（安藤）．

(3) 肥満・摂食障害の臨床評価ならびに CBT の開発研究（精神・神経疾患研究開発費）

欧米で摂食障害の認知行動療法 CBT-E (enhanced CBT) が開発されている．欧州の治療施設を視察した．CBT-E 導入後は再発率や治療コストが低減されていた．わが国での CBT-E を導入・発展が課題である（小牧，安藤）．摂食障害患者をもつ家族の精神的負担は大きい．効果的な家族への心理的サポートの確立のための調査を開始した（小牧，小原）．

2）摂食障害の臨床的病態解明研究ならびに疫学的研究

(1) 他者比較における自己評価：摂食障害を対象とした機能画像研究（日本学術振興会科学研究費補助金挑戦的萌芽研究，精神・神経疾患研究開発費）

自己の体型の評価のゆがみは摂食障害の中核的な病理である．自己への評価は他者との比較によって決定される．健常女性を対象とした fMRI 実験により，体形比較課題において摂食障害患者で異常が指摘されている前島皮質に活動の変化が認められた．体形の不満は摂食障害発症の予測因子として注目さている．今後は疾患群についても検討を進める予定である（兒玉，小牧）．

(2)思春期摂食障害に関する基盤的調査研究 （厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業）

若年化傾向がみられる摂食障害の中学生における実態把握と，児童・思春期の摂食障害への総合的対策立案のための疫学的調査研究である．首都圏と地方の都市の中学生 6,000 人を対象に摂食障害診断用自記式質問紙（EDE-Q6.0）を用いた調査を実施し，同年代の摂食障害傾向を初めて疫学的に明らかにし，同障害の低年齢化が示唆され，発症危険因子として睡眠など日常生活リズム，性的トラウマ体験などが抽出された．さらに世界精神保健(WMH) 統合国際診断面接 CIDI 3.0 版コンピュータ版摂食障害セクション等を翻訳し，同版を我が国で初めて実施し，同年代の摂食障害の診断に対する有用性と限界性を示した（小牧）．

3）摂食障害の罹患感受性遺伝子研究

(1) 神経性食欲不振症を対象とした一塩基多型マーカーによるゲノムワイド相関遺伝子解析（日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究（B））

全国 60 施設以上からなる摂食障害遺伝子解析協力者会議を組織し全摂食障害患者の試料収集するシステム JGRED を構築した．国際コンソーシアム（Genetic Consortium for Anorexia Nervosa: GCAN）が実施した SNP マーカーを用いた GWAS の再現性試験に JGRED も参加し，試料を提供した．次世代シークエンサーを用いた“Exome sequencing”を応用し，摂食障害の病因に関与する変異を同定する研究を東海大学医学部　猪子英俊教授と共同で進めている（小牧，安藤）．

(2) 候補遺伝子法による相関解析

神経性食欲不振症と脳由来神経栄養因子（BDNF）の Val66Met 多型との関連を検討したが，十分な検出力にもかかわらず関連は認めず，日本人では関連していないと考えられ論文発表した（安藤）．

4）摂食障害のプロテインアクティブアレイを用いた網羅的自己抗体スクリーニング（日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究（C））

摂食障害の病態への自己抗体の関与が示唆されている．産業技術総合研究所五島直樹主任研究員との共同研究でプロテインアクティブアレイを使用して摂食障害と肥満に特異的な自己抗体を探索することを目的とする．今年度は約2万種のヒト蛋白質のアレイを用いてプレスクリーニングを実施した．（安藤）．

5）精神・神経疾患におけるアミノ酸代謝研究（受託・共同研究）

味の素株式会社と共同研究で血漿中の各種アミン酸濃度を測定し対照群と比較した．その結果，神経性食欲不振症患者に特徴的なアミノグラムが認められ，摂食障害のバイオマーカーとしての可能性を日本心療内科学会で発表し，ベストポスター賞を受賞した．（安藤，倉）．

6）食行動と生物心理社会的因子の経時的関連に関する包括的モデルの開発（日本学術振興会科学研究費補助金 若手研究（B））

食行動と生物心理社会的因子の経時的関連の包括的理解を生態学的妥当性および栄養学的正確性の高いデータに基づき行うことを目指し，ecological momentary assessment（EMA）法および携帯情報端末による食事記録システムを用いて調査・解析を進めた．健常若年群を対象とした調査でこれまでに認められていた外食や食直前の抑うつ気分と摂取エネルギー量の関連についての解析を進め，外食と摂取エネルギー量の関連が気分を介するものではないことを明らかにした．さらに肥満群での調査を進めている（菊地）．

7）自覚症状の記憶特性と評価の妥当性に関する検討の実施

東京大学大学院教育学研究科山本義春教授との共同研究により，自覚症状の評価法の一つである，想起に基づく Day reconstruction method（DRM）法を EMA 法と比較することで，自覚症状の記憶特性について検討を行った．救急隊員および非交替勤務者を対象とした調査により，自覚症状や生理的状態（身体活動度）の推移は一日の終わりにおいても正確には思い出せず，またその時何をしていたかによってより症状が強く思い出されるバイアスが存在することが示され，自覚症状の記憶の脆弱性が示唆された（菊地）．

8）日常生活下のストレスの多面的評価法の開発（精神・神経疾患研究開発費）

心身症の評価においては心理的ストレスの経時的評価が必須である．心身症の病態評価における心理的ストレスの評価法として，生態学的妥当性が高く，時間軸が正確で時間解像度の高い評価を行うこと，ストレス因子や認知的評価，ストレス反応，対処行動等を多面的に評価すること，さらに客観的指標を導入

することが必要であることを踏まえ，日常生活下のストレスの多面的評価法の開発を開始した（菊地）.

Ⅲ．社会的活動に関する評価

1）市民社会に対する一般的な貢献

2）専門教育面における貢献

中央労働災害防止協会（産業ストレス）非常勤講師，女子美術大学・東京大学医学部・九州大学医学部心身医学講義非常勤講師（小牧），二葉看護学院非常勤講師（小牧・安藤・菊地・倉），一葉福祉学院非常勤講師（小牧・安藤・菊地），共立女子大学家政学部栄養教育論非常勤講師（菊地）

以上，医学部学生，心理・教育学部学生，看護・介護福祉士学生，心理士などを対象に，心身医学，ストレス関連疾患，ならびに心理学などを中心とした専門教育に貢献した.

3）精研の研修の主催と協力

平成 23 年度精神保健に関する技術研修

第 9 回摂食障害治療研修　2011.8.30～9.2　精神保健研究所セミナー室

第 8 回摂食障害看護研修　2011.10.26～28　精神保健研究所セミナー室

以上，摂食障害治療などについて医療関係者への知識普及及び治療の標準化に貢献した.

4）保健医療行政・政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

小牧　元：（財）精神・神経科学振興財団選考委員会委員

5）センター内における臨床的活動

センター病院心療内科併任医師（小牧，安藤，菊地，兒玉),

同上　心療内科心理士（倉）

Ⅳ．　研究業績

Ａ．刊行物

(1) 原著論文

1）Ando T, Ishikawa T, Hotta M, Naruo T, Okabe K, Nakahara T, Takii M, Kawai K, Mera T, Nakamoto C, Takei M, Yamaguchi C, Nagata T, Okamoto Y, Ookuma K, Koide M, Yamanaka T, Murata S, Tamura N, Kiriike N, Ichimaru Y, Komaki G , the Japanese Genetic Research Group For Eating Disorders : No association of brain-derived neurotrophic factor Val66Met polymorphism with anorexia nervosa in Japanese. Am J Med Genet Part B 159B:48-52, 2012.

2）Kikuchi H, Yoshiuchi K, Yamamoto Y, Komaki G, Akabayashi A : Does sleep aggravate tension-type headache? : An investigation using computerized ecological momentary assessment and actigraphy. BioPsychoSocial Medicine 5:10, 2011.

(2) 総説

1）Kanaoka T, Tamura K, Moriya T, Tanaka K, Konno Y, Kondoh S, Toyoda M, Umezono T, Fujikawa T, Ohsawa M, Dejima T, Maeda A, Wakui H, Haku S, Yanagi M, Mitsuhashi H, Ozawa M, Okano Y, Ogawa N, Yamakawa T, Mizushima S, Suzuki D, Umemura S : Effects of multiple factorial intervention on ambulatory BP profile and renal function in hypertensive type 2 diabetic patients with overt nephropathy - a pilot study. Clin Exp Hypertens 33(4):255-63, 2011.

2）小牧　元：摂食障害～心身両面からのアプローチ～．いしかわ精神保健 51：44-58，石川県精神保健福祉協会，2011.

3）小牧　元：これまでの治療ガイドライン③－摂食障害－．「精神科治療外」編集委員会：編集　神経症性障害の治療ガイドライン．精神科治療学　Vol26 増刊号 pp297-302，2011.

4）中村 亨, 菊地裕絵, 吉内一浩, 山本義春：数理科学モデルから精神行動異常を解く. 精神科 18：554-559, 2011

5) 菊地裕絵，吉内一浩：緊張型頭痛への心身医学的アプローチ．Modern Physician 31:969-973，2011.
6) 菊地裕絵：心身医学における病歴の取り方と面接法．女性心身医学 16(2):134-137，2011.
7) 小原千郷：摂食障害の家族療法と家族支援．精神科治療学 26（増刊号）：257-260，2011
8) 高橋　晶，水上勝義，朝田　隆：【アルツハイマー型認知症の諸問題を再考する】 認知症の早期診断を多角的に考える　初期像の臨床的特徴から　レビー小体型認知症(DLB)の前駆症状，初期症状．老年精神医学雑誌 第 22 巻増刊Ⅰ：60-64，2011.

(3) 著書

1) Kikuchi H, Yoshiuchi K, Ohashi K, Sato F, Takimoto Y, Akabayashi A, Yamamoto Y：Edit by Preedy, V. R., Watson, R. R., Martin, C. R.：Food intake and heart rate variability：toward a momentary biopsychosocial understanding of eating behavior. Handbook of Behavior, Food and Nutrition. pp 845-863, Springer, London, 2011.
2) 小牧　元：器官選択，視床下部-下垂体-副腎系，心因性多飲，摂食障害．日本ストレス学会　監修：ストレス科学事典．pp191, 400,496, 630，　実務教育出版，東京，2011.
3) 小牧　元：女子学生のメンタルケア～その対応の仕方と問題点．女子美術大学保健センター年報 No.10，pp24-30，東京，2011.
4) 小牧　元：今日の精神疾患治療指針　16 心身症　内分泌系の心身症．編集　樋口輝彦ほか，pp.652-656，医学書院，東京，2012.
5) 菊地裕絵，吉内一浩：造血器腫瘍．内富庸介，小川朝生編：『精神腫瘍学』．pp281-283，医学書院，東京，2011.

(4) 研究報告書

1) 金田一賢顕，古川真弓，吉田幸一，益子育代，赤澤　晃：ぜん息キャンプの効果と今後の課題．平成 23 年度東京都独立行政法人環境再生保全機構補助金　研究成果報告書
2) 金田一賢顕，古川真弓，吉田幸一，益子育代，赤澤　晃：FeNO の特性を活かした喘息キャンプ型患者教育の考案．平成 23 年度東京都独立行政法人環境再生保全機構補助金　研究成果報告書

(5) 翻訳

(6) その他

1) 小牧　元：女子学生のメンタルケア～その対応の仕方と問題点．女子美術大学保健センター年報 No.10，pp24-30，2011.
2) 菊地裕絵：書評『緩和ケアと時間　私の考える精神腫瘍学』小森康永著．心と社会 42(1):122, 2011.
3) 菊地裕絵：海外文献「うつ病と慢性身体疾患をもつ患者に対するチーム医療によるケア」．心身医学 51(5):430, 2011
4) 倉 尚樹：「健康坐禅講座」に参加ー日々の雑事を離れ心身をリフレッシュ．神奈川新聞，2011.12.21.

B．学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

1) Komaki G：Symposium2：Validity Issues in the Assessment of Alexithymia. The 21th World Congress on Psychosomatic Medicine, Seoul, 2011.8.25-28.
2) Komaki G：Regular Symposium 71 The alexithymia construct: history, recent developments and future directions Perspectives on the future of alexithymia research based on recent fMRI and self-report alexithymia investigations. 15th World Congress of Psychiatry, Buenos Aires, 2011.9.18-22.

3)　小牧　元：シンポジウム 4　心身症発祥の心理社会的要因．摂食障害発祥の遺伝・心理社会的要因．第 16 回日本心療内科学会学術大会，東京，2011.11.26-27.

4)　安藤哲也，小牧　元：摂食障害の遺伝子研究．シンポジウムⅠ．摂食障害の病態　研究の進歩．第 15 回日本摂食障害学会学術集会，鹿児島，2011.9.3-4.

5)　菊地裕絵：シンポジウム 3　日常臨床の鍵になる心身相関を探る．Ecological momentary assessment による日常生活下での心身相関の評価．第 16 回日本心療内科学会学術大会，東京，2011.11.26-27.

6)　菊地裕絵：シンポジウム 3　不安に関する行動医学的研究．携帯情報端末を用いた気分と食行動の関連の評価．第 4 回日本不安障害学会学術大会，東京，2012.2.4-5.

(2) 一般演題

1)　Komaki G, Hasebe T, Nishimura H, Ueno M, Kodama N, Hamada T, Kikuchi H, Ando T, Tojo M, Tachimori H, Ikuno T, Maeda M：Eating Disorder Examination Questionnaire 6.0 Survey of 6,000 Japanese Junior High School Students. The 21th World Congress on Psychosomatic Medicine, Seoul, 2011.8.25-28.

2)　Ando T, Hasegawa Y, Kochiya Y, Ichimaru Y, Komaki G：Association of stress coping with eating disorder-tendencies in young Japanese women. The 21th World Congress on Psychosomatic Medicine, Seoul, 2011.8.25-28.

3)　Kodama N, Moriguchi Y, Maeda M, Ando T, Kikuchi H, Hamada T, Komaki G：Neural Correlates of Body Dissatisfaction：A Functional MRI Study. The 21th World Congress on Psychosomatic Medicine, Seoul, 2011.8.25-28.

4)　Kim J, Kikuchi H, Kubo Y, Yamamoto Y：Time course of self-reported symptoms among Japanese emergency medical services personnel: investigation using ecological momentary assessment. The 21th World Congress on Psychosomatic Medicine, Seoul, 2011.8.25-28

5)　Hachizuka M, Yoshiuchi K, Kikuchi H, Yamamoto Y, Iwase S, Nakagawa K, Kawagoe K, Akabayashi A：Associations between pain and psychosocial factors using a computerized ecological momentary assessment technique in home hospice cancer patients. 13th World Congress of Psycho-Oncology, Antalya, 2011.10.16-20.

6)　Shimodaira S, Fukuo W, Kikuchi H, Takimoto Y, Yoshiuchi K, Akabayashi A.：Objective evaluation of hyperactivity in outpatients with anorexia nervosa. 70th Scientific Annual Meeting of American Psychosomatic Society, Athens, 2012.3.14-17.

7)　Yoshiuchi K, Hachizuka M, Kikuchi H, Yamamoto Y, Akabayashi A.：Application of a computerized ecological momentary assessment technique in cancer patients receiving home hospice care. 70th Scientific Annual Meeting of American Psychosomatic Society, Athens, 2012.3.14-17.

8)　Takahashi M, Mera, T, Kodama N, Oka T, Tsuji S：Relation between prognosis and dietary intake in the hospital in anorexia nervosa patients. The 21th World Congress on Psychosomatic Medicine, Seoul, 2011.8.25-28.

9)　Takahashi S, Mizukami K, Asada T：Utility of the measurement of ventilatory response to hypercapnia as a means of diagnostic method of depression that　preceeds Dementia with Lewy Bodies. Alzheimer's Association International Conference on Alzheimer's Disease (ICAD) 2011, Paris, 2011.7.17.

10)　Takahashi S, Tachikawa H, Nose M, Ueno Y, Mashiko K, Arai A, Atake S, Kohno M, Asada T: What kinds of association exist between depression and suicidal attempt?　A study of suicidal patients that been hospitalized in the emergency care unit. 26th International Association for suicide prevention World congress, Beijing, 2011.9.16

11）小牧　元，長谷部智子，西村大樹，上野真弓，兒玉直樹，東條光彦，立森久照，菊地裕絵，安藤哲也，前田基成：中学生の摂食障害傾向地域調査．第15回日本摂食障害学会学術集会，鹿児島，2011.9.3-4.

12）高橋美智子，武久千夏，木川恵理，新宅可奈子，小牧　元，生野照子：摂食障害のアセスメント―EDE-Q，EAT-26を用いて―．第52回日本心身医学会総会ならびに学術講演会，横浜，2011.6.9-10.

13）高橋美智子，武久千夏，木川恵理，新宅可奈子，武田　剛，小牧　元，生野照子：EDE-Q6.0から見た思春期・青年期摂食障害患者の特徴．第15回日本摂食障害学会学術集会，鹿児島，2011.9.3-4.

14）安藤哲也，東風谷祐子，市丸雄平，兒玉直樹，菊地裕絵，小牧　元：女子大学生のダイエット経験者および気晴らし喰い経験者の心理的・身体的特徴．第 15 回日本摂食障害学会学術集会，鹿児島，2011.9.3-4.

15）安藤哲也，石川俊男，鈴木（堀田）眞理，成尾鉄朗，岡部憲二郎，中原敏博，瀧井正人，河合啓介，米良貴嗣，中本智恵美，武井美智子，山口　力，永田利彦，岡本百合，大隈和喜，小出将則，山中隆夫，田村奈穂，切池信夫，小牧　元，摂食障害遺伝子解析研究協力者会議：脳由来神経栄養因子遺伝子の多型と神経性食欲不振症との関連の検討．第52回日本心身医学会総会ならびに学術講演会，横浜，2011.6.9-10.

16）羽白　誠，安藤哲也，細谷律子，小牧　元：心身症のアトピー性皮膚炎に対するプライマリケアとしての心身医学療法の可能性：地域による比較．第52回日本心身医学会総会ならびに学術講演会，横浜，2011.6.9-10.

17）安藤哲也，田村奈穂，山本浩史，倉　尚樹，小西　恵，富田吉敏，田中孝幸，知場奈津子，庭瀬亜香，濱田　孝，杤久保修，石川俊男，小牧　元：神経性食欲不振症における血漿アミノ酸濃度プロフィールの検討．第16回日本心療内科学会学術大会，東京，2011.11.26-27.

18）近喰ふじ子，山内麻衣，塚本尚子，安藤哲也：年代別からみた「夫婦親密度尺度」からの検討．第52回日本心身医学会総会ならびに学術講演会，横浜，2011.6.9-10.

19）安藤哲也，東風谷祐子，市丸雄平，兒玉直樹，菊地裕絵，小牧　元：女子大学生のダイエットおよび気晴らし喰いに関連する心理社会的・身体的要因．第 27 回日本ストレス学会学術総会，東京，2011.11.18-21.

20）阿部裕二，鷹羽智子，田口敦子，芳賀麻里子，仁木雅美，今泉博文，塙　悠，濱田　孝，上野真弓，菊地裕絵，安藤哲也，小牧　元：神経性食欲不振症における安静時エネルギー消費量の実測値と推定値の乖離の検討．第120回日本心身医学会関東地方会，東京，2012.3.17.

21）兒玉直樹，守口善也，安藤哲也，菊地裕絵，濱田　孝，小牧　元：機能画像を使った体型の不満と自尊感情に関する研究．第52回日本心身医学会総会ならびに学術講演会，横浜，2011.6.9-10.

22）高橋昌稔・鈴木麻美・林　晴男・兒玉直樹：ミルタザピンが奏功した難治性舌痛症の一例．第51回日本心身医学会九州地方会，北九州，2012.2.17-18.

23）藤川哲也：ESA反応性と予後．DOPPS Symposium in Japan　日本透析医学会学術集会・総会，横浜，2011.6.17-19.

24）山末耕太郎，藤川哲也，小野香奈子，杤久保修，水嶋春朔，境野佳樹，阿部道郎：サラシア属植物を含むサプリメント摂取による MetS 改善効果の評価．第 70 回日本公衆衛生学会総会，秋田，2011.10.19-21.

25）金岡知彦，田村功一，大澤正人，涌井広道，柳　麻衣，前田晃延，出島　徹，小豆島健護，白善　雅，藤川哲也，戸谷義幸，梅村　敏：高血圧・慢性腎臓病教育入院患者における24時間自由行動下血圧・血圧日内変動の意義についての検討．第34回日本高血圧学会総会，宇都宮，2011.10.20-22.

26）大島聡人，石上友章，峯岸慎太郎，山名比早子，新城名保美，梅村将就，内野和顕，梅村敏，藤川哲也：新規家庭血圧計を用いた推定基底血圧の評価についての検討．第34回日本高血圧学会総会，宇都宮，2011.10.20-22.

27）前田晃延，田村功一，金岡知彦，大澤正人，白善　雅，小豆島健護，出島徹，涌井広道，三橋　洋，柳

麻衣, 戸谷義幸, 梅村　敏, 藤川哲也, 水嶋春朔, 杤久保修 : ARB あるいは CCB 単独療法中の高血圧患者に対する ARB と CCB による併用療法の治療効果についての多面的検討. 第 34 回日本高血圧学会総会, 宇都宮, 2011.10.20-22.

28) 藤川哲也, 杤久保修, 菅野晃靖, 倉　尚樹, 梅村　敏, 水嶋春朔 : 客観性と精度の高い基準血圧計(トリプルカフ法)の開発と観血的血圧を用いた比較. 第 34 回日本高血圧学会総会, 宇都宮, 2011.10.20-22

29) 田村功一, 金岡知彦, 大澤正人, 白善　雅, 涌井広道, 前田晃延, 出島　徹, 小豆島健護, 柳　麻衣, 藤川哲也, 岡野泰子, 戸谷義幸 : 梅村敏血圧変動性の新たな視点 ABPM での血圧短期変動性の慢性腎臓病合併高血圧における新たな治療標的としての可能性. 第 34 回日本高血圧学会総会, 宇都宮, 2011.10.20-22.

30) 小原千郷, 鈴木眞理, 大和田里奈, 加茂登志子 : 両親のみを対象とした神経性食欲不振症の家族療法の経験－親へのコンサルテーションとしてー. 日本摂食障害学会, 鹿児島, 2012.9.3-4.

31) 鈴木(堀田)眞理, 小原千郷, 浦野綾子, 荒木まり子, 堀川玲子, 小川佳宏 : 高校の養護教諭へのアンケートによる神経性食欲不振症の疫学調査－東京スタディー. 日本摂食障害学会, 鹿児島, 2012.9.3-4.

32) 高橋　晶, 水上勝義, 朝田　隆 : シンポジウムⅢ　ドーパミンからみる高齢者うつ病　2）レビー小体型認知症とうつ病. 第 26 回老年精神医学会, 東京, 2011.6.16.

33) 高橋　晶, 太刀川弘, 和,野瀬真由美, 新井晶子, 上野幸廣, 阿竹　茂, 河野元嗣, 朝田　隆 : 中高年の自殺企図患者とうつ病入院患者との臨床症候の相違に関する検討. 第 8 回うつ病学会, 大阪, 2011.7.1.

34) 高橋　晶 : DLB の初期精神症状 : うつ状態は認知症の前駆症状となるか. 第 5 回パーキンソン病・運動障害疾患コングレス, 東京, 2011.10.7.

(3) 研究報告会

1) 小牧　元 : 肥満・摂食障害の病態解明ならびに CBT の開発研究. 精神・神経疾患研究開発費（23-2）「心身症の病態解明ならびに効果的治療法の開発研究」（主任研究者 : 小牧　元), 東京, 2011.7.3.

2) 安藤哲也 : 機能性消化管障害の臨床評価ならびに CBT 開発研究. 精神・神経疾患研究開発費（23-2）「心身症の病態解明ならびに効果的治療法の開発研究」（主任研究者 : 小牧　元), 東京, 2011.7.3.

3) 菊地裕絵 : 日常生活下のストレスの多面的評価法の開発. 精神・神経疾患研究開発費（23-2）「心身症の病態解明ならびに効果的治療法の開発研究」（主任研究者 : 小牧　元), 東京, 2011.7.3.

4) 小牧　元 : 肥満・摂食障害の病態解明ならびに CBT の開発研究. 精神・神経疾患研究開発費（23-2）「心身症の病態解明ならびに効果的治療法の開発研究」（主任研究者 : 小牧　元）合同研究報告会, 東京, 2011.12.13.

5) 安藤哲也 : 機能性消化管障害の臨床評価ならびに CBT 開発研究. 精神・神経疾患研究開発費（23-2）「心身症の病態解明ならびに効果的治療法の開発研究」（主任研究者 : 小牧　元）合同研究報告会, 東京, 2011.12.13.

6) 菊地裕絵 : 日常生活下のストレスの多面的評価法の開発. 精神・神経疾患研究開発費（23-2）「心身症の病態解明ならびに効果的治療法の開発研究」（主任研究者 : 小牧　元）合同研究報告会, 東京, 2011.12.13.

C. 講演

1) Murakami M,Komaki G : Special Lecture Japanese treatment of pain and rheumatogical diseases. ACURA-Klinik für Psychosomatik und Psychotherapie (Kooperationsklinik und Akademisches Lehrkrankenhaus der Universität Heidelberg), Germany,2011.10.13

2) 小牧　元 : 産業保健指導専門研修講演 メンタルヘルスの基礎知識（産業ストレス）. 中央労働災害防

止協会，東京，2011.9.28.

3） 小牧　元：思春期の摂食障害―心身両面からのアプローチ―，第 69 回滋賀県医師会学校保健学校医研修会，守口，2011.12.1

D．学会活動（学会主催，学会役員，座長，編集委員等）

(1) 学会役員

1）小牧　元：日本心身医学会　評議員，幹事，　英文誌投稿推進 WG 長
日本心療内科学会　理事（学術企画委員，　会員資格審査委員，
心身医療評価基準作成委員）
日本ストレス学会　評議員，渉外委員会委員（国際連携担当）
日本摂食障害学会　評議員・監事

2）安藤哲也：日本心身医学会　評議員
日本心療内科学会　評議員
日本皮膚科心身医学会　評議員

3）菊地裕絵：日本心身医学会　代議員
日本女性心身医学会　評議員，幹事
日本サイコオンコロジー学会　代議員
日本交流分析学会　評議員

(2) 座長

1） Komaki G: Symposium2: “Alexisomia”: A shift in focus from Alexithymia.：The 21th World Congress on Psychosomatic Medicine, Seoul, 2011.8.25-28

2） 小牧　元：摂食障害Ⅰ．第 52 回日本心身医学会総会ならびに学術講演会．パシフィコ横浜，横浜，2011.6.9-10

3） 小牧　元：地域高齢者のストレス/食とストレス①，第 27 回日本ストレス学会学術総会．東京国際交流館・プラザ平成，東京，2011.11.18-21

4） 小牧　元：シンポジウム4　心身症発症の心理社会的要，第16回日本心療内科学会学術大会，東京国際交流館・プラザ平成，東京，2011.11.16-27

(3) 学会誌編集委員等

1） 小牧　元：日本心身医学会会誌　編集委員
日本心身医学会英文誌 “BioPsychoSocial Medicine”　Deputy Editor

E．研修

(1) 研修企画

1） 小牧　元，安藤哲也：平成 23 年度第 9 回摂食障害治療研修，精神保健に関する技術研修，精神保健研究所，東京，2011.8.30-9.2.

2） 小牧　元，安藤哲也：平成 23 年度第 8 回摂食障害看護研修，精神保健に関する技術研修，精神保健研究所，東京，2011.10.26-28.

3） 倉　尚樹：建長寺健康坐禅講座－禅を通した心身の健康づくり．神奈川県予防医学協会特別企画，鎌倉市，2011.10.13.

(2) 研修会講師

1) 小牧　元：摂食障害病態・治療概論．第 9 回摂食障害治療研修，精神保健研究所，小平市，2011.8.30
2) 小牧　元：摂食障害の疫学・病態・治療概論．第 7 回摂食障害看護研修，精神保健研究所，小平市 2011.10.26
3) 伊藤順一郎，小原千郷：心理教育的グループ．第 9 回摂食障害治療研修，精神保健研究所，小平市，2011.9.1
4) 小原千郷：ケアとコミュニケーションのスキル．第 8 回摂食障害看護研修，精神保健研究所，小平市，2011.10.27
5) 倉　尚樹：医学からみた若手社員の心理および教育．日立 INS㈱ 管理職研修会，横浜，2011.4.2.
6) 小原千郷：摂食障害患者の心理療法・精神療法．女性医療に役に立つ医学と健康学の基礎知識講座－摂食障害集中講座，東京，2011.11.19-20.
7) 小原千郷：摂食障害の家族療法．女性医療に役に立つ医学と健康学の基礎知識講座－摂食障害集中講座，東京，2011.11.19-20.
8) 高橋　晶：精神症状，コミュニケーション，　茨城県緩和ケア研修会，つくば，2011.6.5.
9) 高橋　晶：レビー小体型認知症（DLB）の診断と治療．　第 24 回総合病院精神医学会認知症医療従事者研修会，福岡，2011.11.26.

5. 児童・思春期精神保健研究部

Ⅰ. 研究部の概要

当部は，児童期に発症する種々の行動および情緒の障害について，横断的に疫学的な実態および病態を明らかにすると同時に，発達的観点から年齢に伴う症状や病態の変化の軌跡を縦断的に調べて，それらのエビデンスにもとづき，ライフステージに応じた診断評価法の確立，そして治療法や2次障害の予防法の提案に繋げていくことを，そのミッションとしている．発達最早期から発症し，思春期以降は種々の精神医学的障害を合併するなど，生涯を通じて精神発達に深刻な影響を与える発達障害，なかでも自閉症スペクトラム障害（ASD）は，児童期のみならず，すべてのライフステージを通してリスクともなりうる重要な影響要因であるので，当部が現在，最も精力的に取り組んでいる研究テーマである．

わが国を代表する乳幼児から学童までの疫学的データベースの確立およびエビデンスにもとづく地域や学校ベースの精神保健ケアシステムを提案するとともに，多種の専門領域を統合する手法を用いて新しい発達認知神経科学的観点に立った縦断的および横断的研究に取り組んでいる．また，発達障害者支援法に基づく知識および支援体制の普及推進の目的で，早期発見・早期介入システムと育児支援のための研修，そして一般精神科における成人となった発達障害者への医療に関する研修を含む，多様な情報発信活動にも精力的に取り組んでいる．

児童期における発達障害とその近縁にある種々の発達病理は，児童精神医学の領域を超えて，パーソナリティの形成や成人期における精神病理との連続性を持っており，一般精神医学の諸領域への新しい切り口となる可能性を秘めていると考えている．今後，一般精神医学において発達精神医学的な視点が貢献できるような共同研究を遂行している．

人員構成は以下のとおりである．部長：神尾陽子，児童期精神保健研究室長：高橋秀俊,思春期精神保健研究室研究員：井口英子（～12月），流動研究員（2名）：森脇愛子，中鉢貴行：科研費研究員（1名）：稲田尚子（～9月）,外来研究員（1名）：稲田尚子（10月～）（リサーチレジデント），客員研究員（13名）：大森隆司，奥寺 崇，飛松省三，中島洋子，武田俊信，菊池吉晃，黒田美保，土屋賢治,三宅篤子,則内まどか,小石誠二（6月～）,平岩幹男（7月～）,長尾圭造（11月～）,協力研究員（2名）：榊原信子，辻井弘美，研究生（9名）：石川文子,遠藤明代,武井麗子,高橋英之,森田麻登,手塚知子（4月～）,平本絵里子（6月～）,横田千賀子（6月～），片桐正敏（6月～）．

Ⅱ. 研究活動

1) 発達障害の疫学研究（厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業「就学前後の児童における発達障害の有病率とその発達的変化：地域ベースの横断的および縦断的研究」）
地域の行政および幼稚園・保育所の協力のもと，多摩地域の5歳児を対象とした疫学研究の第1段階（質問紙調査）を完了した．調査に先立ち、地域の保育士対象に子どもの発達についての研修会を開き、知識の向上をはかることで、研究それ自体が地域支援の質を高めることができるような地域介入を行った．（神尾・森脇・遠藤・稲田・平本・武井・中鉢・高橋・三宅）

2) 小平コホート研究：精神医学的障害の早期発見と早期介入（精神・神経疾患研究開発費）
青年期あるいは若年成人期で発症する精神疾患の，早期発見・早期介入の根拠となる病態メカニズムを明らかにし，早期介入可能性を検証することを目的に、ハイリスク児のコホートを行動的および神経生理学的にデータ収集しながら追跡すると同時に，自閉症スペクトラム障害の幼児および成人に対する介入研究に着手した．（神尾・高橋・稲田・黒田）

3) 自閉症スペクトラムの児童期の聴覚性驚愕反射の生理学的メカニズムの解明に関する研究（文部科学省科学研究費 ）
日本人の自閉症スペクトラム児における聴覚性驚愕反射のプロファイルを評価し，それにより、精神疾患のトランスレーショナル・リサーチにおいて有用な中間表現型と考えられているプレパルス・インヒビションを日本人自閉症スペクトラム児において適切に評価できる聴覚性驚愕反射検査パラダイムを同定した．また，自閉症スペクトラムの児童～成人を対象に，近赤外分光計による前頭葉血流評価や脳波事象関連電位，国立精神・神経医療研究センター　脳病態統合イメージングセンターとの共同による聴覚誘発

脳磁界反応などの神経生理学的指標を包括的に評価する研究にも着手した．（高橋、中鉢）

4) 自閉症スペクトラムの診断単位の境界と異種性に関する認知神経科学的研究を実施する（文部科学省科学研究費 ）

PDD-NOS という診断単位が信頼性を持ち, 妥当性を持って他の PDD 下位診断と区別されうるか, という問いに対して,①PDD-NOS 診断の継時的安定性の検討,②PDD 下位診断による PDD 中核症状程度の違いについての検討,③PDD 下位診断による神経生理学的指標の違いについての検討, などを行った. その結果、DSM で定義される PDD-NOS の独自性の根拠は見出せず, 一方、症状程度は軽くても多次元レベルでは PDD に特異的な特徴が確認された．（神尾・森脇・稲田・井口・高橋）

5) 発達障害に関する行動評価尺度の標準化（厚生労働科学研究費補助金事業（障害者対策総合研究事業 精神障害分野）,

医療や教育，福祉などのさまざまな臨床場面で発達障害児者の症状を評定し，ニーズを検討するために必要な，共通して使用可能な評価尺度はほとんど存在しない．また，エコチルのような大規模研究に使用可能な尺度もないのが実情である. このため, 全国データをもとに日本で使える SRS, SCDC, DCDQ, MOQ-T，ADOS など複数の尺度の妥当性検証を行い，ほぼ完了した．（稲田，武井，黒田，森脇，井口，高橋，神尾）

6) 自閉症スペクトラム児者の感情コントロール促進プログラムの開発 （文部科学省科学研究費）

自閉症スペクトラム児者は，怒りや不安などの感情のコントロールが困難であるが，それは自己の感情認知の困難さと密接に関係している．自閉症スペクトラムの幼児と成人を対象として，感情の自己制御と共感，自己や他者の感情認知について検討し，自閉症スペクトラム成人に対する感情コントロールを促進するための介入プログラムの開発を行っている．（稲田・黒田・石川）

7) 自閉症スペクトラム障害の地域で使用可能なスクリーニング・システム開発（JST 社会技術研究開発事業研究啓発成果実装支援プログラム）

自閉症スペクトラムの早期発見に有用なチェックリスト M-CHAT の尺度特性および既存の乳幼児健診システムに導入した場合の有効性について検討した（論文発表，他著書など）．全国のどこの地域においても，乳幼児健診の機会を活用して発達障害の早期発見・早期支援が可能となるように，保健師向け教育ツールの開発を行い， e-learning を含む啓発活動および実践的な後方支援を行い、多数の自治体での導入に際して，スーパーバイズを行っている．（稲田・神尾）

Ⅲ．社会的活動に関する評価

1) 市民社会に対する一般的な貢献

社会全体のニーズの高まりに対応して，全国各地での自治体主催の市民向けの公開講座で精力的に講演を行った．また HP を通じて研究成果を逐次更新し, 発信した.

2) 専門教育面における貢献

神尾は，山梨大学との連携大学院の客員教授として院生 5 名の指導にあたった．また，国や大学，学会，研究会，自治体，そして各地医師会主催の専門家（精神科医，保健師，福祉士，臨床心理士，言語療法士，教員）向けの講演講師を可能な範囲で精力的に引き受け，人材の育成に携わっている．神尾はセンター病院への東大，防衛医大のポリクリ実習生に対する児童精神医学の講義および後期レジデントを対象にクルズスを担当した．対外的には全国の若手精神科医の研究会（JYPO）で児童精神医学を目指す若手向けの講演を行い、国内外の若手精神科医と意見交換を行った. 第 2 回児童精神医学若手人材育成セミナー（於　九州大学）へ参加し, 国内外の児童精神科医と意見交換を行った．稲田は，保健師や臨床発達心理士などの専門家を対象に研修を多数行い，横浜市教育総合相談センターのカウンセラーアドバイザーとして，発達障害のアセスメントとカウンセリングについてのスーパーバイズを行った．また，田園調布学園大学の非常勤講師として，発達障害と療育についての講義を担当した.

3) 精研の研修の主催と協力

発達障害者支援事業の一環として，当部主催で行う研修として，第 6 回「発達障害早期総合支援研修」（自治体の乳幼児健診に携わる医師および保健師対象）を企画・実施し，神尾，稲田，黒田が講義も担当した．また，第 4 回「発達障害精神医療研修」（精神科医対象）を企画・実施し，神尾，井口が講義も担当

した．また事後研修として，昨年度から引き続き京都府舞鶴市，愛媛県新居浜市，長野県諏訪管内の自治体，　福島県いわき市の研究開発アドバイザーとして乳幼児健診における発達障害の早期発達・早期支援に関する継続的なスーパーバイズを TV 会議やカンファレンス，DVD などを通して行い，新規事業の立ち上げに際してマニュアル作成など監修した．

4) 保健医療行政・政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

政府委員会：神尾は，子どもの心の診療拠点病院の整備に関する有識者会議（厚生労働省主宰）委員として，平成 20-22 年度までの拠点病院事業の評価を行った．

その他公的委員会：神尾は，昨年度に引き続き子どもの虹情報研修センター（日本虐待・思春期問題情報研修センター）運営委員を委嘱され，事業評価を行い、進行中の研究への助言を行った．

神尾は，第 21-22 期日本学術会議連携会員，第 21 期日本学術会議臨床医学委員会臨床研究分科会委員として、提言「エビデンス創出を目指す検証的治療研究の推進・強化に向けて」を共同執筆し, Web 上で発信した(http://www.scj.go.jp/ja/info/index.html).第 21 期日本学術会議臨床医学委員会脳とこころ分科会委員として，日本学術会議

広報誌「学術の動向 7 月号」の「20 年後を見据えた精神医学・心身医学研究の展望特集. 」に「児童精神医学研究の将来展望. 」を執筆した．第 22 期の同・出生・発達分科会委員，脳とこころ分科会委員として会議に参加し、活動の方向性を協議した。また，平成 23 年度に立ちあがった環境省エコチル調査のメディカルサポートセンター質問票作成 WG・詳細調査　準備 WG 委員としてプロトコールの策定に助言を行っている．

研究成果の行政活用：日本小児保健協会の「発達障害への対応委員会委員」として、社会への提言を取りまとめているところである。地域では、埼玉県広域特別支援連携協議会委員として発達障害問題に対して専門的助言を行っている。また多摩地区では地域保健医療行政および教育の協力を得て、地域在住の研究協力者である児童とその家族については，当部で事後フォローを引き受け，継続的な評価および育児指導を行い，自治体と定期的にカンファレンスを持ち，フィードバックと助言を行っている．とくに教育行政との関連においては，小平市特別支援教育推進プログラム専門家委員を務め，義務教育期間における特別支援教育を円滑に推進するための「小平市教育委員会の特別支援教育推進の大綱」の評価に携わった．教育への貢献としては，昨年度の提案が事業化された、「教育と医療の連携のための教員実習」を 3 回に分けて実施し、ロールプレイや事例検討を行った．

5) センター内における臨床的活動

研究協力希望者に対する臨床活動および地域コホートの外来診療をセンター病院にて行っている．まだ教育基盤の弱い当該領域における臨床研究の裾野を広げるためにセンター内外の若手医師および若手研究者を主とする発信と指導に積極的に取り組み、センター外から第 1 線の臨床家および研究者を講師に招き、7 回の臨床カンファレンスを持った．

Ⅳ．研究業績

A．刊行物

(1) 原著論文

1) Kuwano Y, Kamio Y, Kawai T, Katsuura S, Inada N, Takaki A, Rokutan K(2011): Autism-associated gene expression in peripheral leucocytes commonly observed between subjects with autism and healthy women having autism children. PloS ONE, 6(9):e24723.Epub 2011 Sep 15.

2) Kamio Y, Inada N, Koyama T: A nationwide survey on quality of life and associated factors of adults with high-functioning autism spectrum disorders. Autism, first published on March 7, 2012 as doi:10.1177/1362361312436848

3) Inada N, Kamio Y: Short forms of the Japanese version WISC-III for assessment of children with autism spectrum disorders. Japanese Journal of Child and Adolescent Psychiatry,51 Supplement, 11-19.

4) Ikezawa K, Ishii R, Iwase M, Kurimoto R, Canuet L, Takahashi H, Nakahachi T, Azechi M, Ohi K, Fukumoto M, Yasuda Y, Iike N, Takaya M, Yamamori H, Kazui H, Hashimoto R, Yoshimine T,

Takeda M. Decreased alpha event-related synchronization in the left posterior temporal cortex in schizophrenia: a magnetoencephalography-beamformerstudy.NeurosciRes.2011 Nov;71(3):235-43.

5) Leonides Canuet, Ryouhei Ishii, Roberto D. Pascual-Marqui, Masao Iwase, Ryu Kurimoto, Yasunori Aoki, Shunichiro Ikeda, Hidetoshi Takahashi, Takayuki Nakahachi, Masatoshi Takeda. Resting-State EEG Source Localization and Functional Connectivity in Schizophrenia-Like Psychosis of Epilepsy. : Resting-State EEG Source Localization and Functional Connectivity in Schizophrenia-Like PLoS One, 6 (11) | e27863, 2011.

6) Kurimoto R, Ishii R, Canuet L, Ikezawa K, Iwase M, Azechi M, Aoki Y, Ikeda S, Yoshida T, Takahashi H, Nakahachi T, Kazui H, Takeda M.Induced oscillatory responses during the Sternberg's visual memory task in patients with Alzheimer's disease and mild cognitive impairment.Neuroimage. 2012 Feb 15;59(4):4132-40.

7) Takahashi H, Iwase M, Yasuda Y, Ohi K, Fukumoto M, Iike N, Yamamori H, Nakahachi T, Ikezawa K, Azechi M, Canuet L, Ishii R, Kazui H, Hashimoto R, Takeda M.. Relationship of prepulse inhibition to temperament and character in healthy Japanese subjects.Neurosci Res. 2012 Feb;72(2):187-93.

8) Hashimoto R, Ohi K, Yasuda Y, Fukumoto M, Yamamori H, Takahashi H, Iwase M, Okochi T, Kazui H, Saitoh O, Tatsumi M, Iwata N, Ozaki N, Kamijima K, Kunugi H, Takeda M. Variants of the RELA gene are associated with schizophrenia and their startle Responses. Neuropsychopharmacology. 2011 Aug;36(9):1921-31.

9) 稲田尚子, 神尾陽子:自閉症スペクトラム幼児に対する早期支援の有効性に対する客観的評価：成果と考察. 乳幼児医学・心理学研究, 特集「自閉症スペクトラム障害の早期療育への前方視的研究」,20, (2), 73-81

10) 高橋秀俊,長尾圭造,神尾陽子:東日本大震災における児童・思春期精神医学的支援活動について.精神保健研究, 58, 43-48, 2012.

(2) 総説

1) Takahashi H, Hashimoto R, Iwase M, Ishii R, Kamio Y, Takeda M. Prepulse Inhibition of Startle Response: Recent Advances in Human Studies of Psychiatric Disease. Clinical Psychopharmacology and Neuroscience 2011 Dec; 9(3): 102-1102.

2) 神尾陽子(2011): 20 年後を見据えた精神医学・心身医学研究の展望特集. 児童精神医学研究の将来展望. 学術の動向, 7, pp.15-19

3) 神尾陽子(2011)：教育講演 児童期から成人期へ：レジリエンスという視点. 児童青年精神医学とその近接領域, 52(4),379

4) 神尾陽子(2011)：カレント・トピックス 発達障害対策はどのようにすすめられているか. 精神科治療学, 26(1), 113-116.

5) 岩瀬真生, 石井良平, 栗本龍, 高橋秀俊, 中鉢貴行, 武田雅俊：臨床精神医学レジリエンスに対応する生理的指標. 41 (2): 135-141, 2012.

(3) 著書

1) Kamio,Y., Tobimatsu, S., & Fukui, H.(2011): Developmental disorders. In J. Decety, J. Cacioppo (eds.), The Oxford Handbook of Social Neuroscience (Oxford Library of Psychology). pp.848-858. Oxford, Oxford University Press.

2) Yamazaki, T., Fujita, T., Kamio, Y, & Tobimatsu, S. (2011): Motion perception in autism spectrum disorder. (eds.), In A. M. Columbus (ed.), Advances in Psychology Research, Vol.82, Motion Perception. pp. 197-211.Nova Science Publishers, New York.

3) 神尾陽子(2011)：チック障害. 専門医をめざす人の精神医学 第 3 版. pp.559-563. 山内俊雄, 小島卓也, 倉知正佳, 鹿島晴雄編. 東京, 医学書院.

4) 神尾陽子(2011)：多動症候群．症候群ハンドブック．pp. 145. 井村裕夫総編集. 福井次矢，辻省次編集. 東京，中山書店.
5) 神尾陽子(2011)：アスペルガー症候群．症候群ハンドブック．pp. 146-147. 井村裕夫総編集. 福井次矢，辻省次編集．東京，中山書店.
6) 神尾陽子(2011)：カナー症候群．症候群ハンドブック．pp. 148. 井村裕夫総編集. 福井次矢，辻省次編集．東京，中山書店.
7) 井口英子，神尾陽子(2011)：代理人によるミュンヒハウゼン症候群. 症候群ハンドブック．pp. 143. 井村裕夫総編集. 福井次矢，辻省次編集．東京，中山書店.
8) 井口英子，神尾陽子：広汎性発達障害の早期徴候．精神医学キーワード事典．松下正明編：中山書店，東京，pp9-11, 2011.
9) 井口英子, 神尾陽子:代理人によるミュンヒハウゼン症候群. 症候群ハンドブック. 井村裕夫編:中山書店，東京，pp143, 2011
10) 石井良平, 栗本龍, カヌエト・レオニデス, 青木保典, 池田俊一郎, 補永栄子, 高橋秀俊, 中鉢貴行, 岩瀬真生: 武田雅俊自発脳律動活動の精神科領域への臨床応用．日本生体磁気学会誌 24(1) 46-47
11) 高橋秀俊，神尾陽子，長尾圭造：思春期の子どもの災害反応．藤森和美，前田正治編著．誠信書房．東京,21-23,2011
12) 高橋秀俊：腎移植．現代精神医学事典．加藤敏，神庭重信，中谷陽二，武田雅俊，鹿島晴雄，狩野力八郎，市川宏伸（編），弘文堂，東京, 505, 2011.
13) 高橋秀俊:人工透析. 現代精神医学事典．加藤敏，神庭重信，中谷陽二，武田雅俊，鹿島晴雄，狩野力八郎，市川宏伸（編），弘文堂，東京，525, 2011.
14) 神尾陽子:子どものこころの発達．からだの科学：子どもの発育・発達と病気．pp.8-11，五十嵐隆編. 東京, 日本評論社.
15) 神尾陽子(2012)：広汎性発達障害（自閉症スペクトラム障害）. 今日の精神疾患治療指針. pp.295-298 樋口輝彦，市川宏伸，神庭重信，朝田隆，中込和幸編，東京，医学書院.
16) 神尾陽子(2011):広汎性発達障害/アスペルガー症候群以外．精神科・わたしの診療手順．臨床精神医学 第 40 巻増刊号(2011), pp354-356 「臨床精神医学」編集委員会編，東京，アークメディア.
17) 神尾陽子(2012)：CHAT（幼児期自閉症チェックリスト）．自閉症スペクトラム辞典．pp.213. 日本自閉症スペクトラム学会編集．東京，教育出版，中山書店.
18) 神尾陽子(2012)：記憶．自閉症スペクトラム辞典．pp.28-29. 日本自閉症スペクトラム学会編集．東京，教育出版，中山書店.
19) 神尾陽子(2012)：遂行機能（実行機能）. 自閉症スペクトラム辞典．pp.120. 日本自閉症スペクトラム学会編集．東京，教育出版，中山書店.
20) 神尾陽子(2012)：神経生物学．自閉症スペクトラム辞典．pp.114-115. 日本自閉症スペクトラム学会編集．東京，教育出版，中山書店.
21) 神尾陽子，田中優子(2012)：ハノイの塔．自閉症スペクトラム辞典．pp.177-178. 日本自閉症スペクトラム学会編集．東京，教育出版，中山書店.
22) 神尾陽子，田中優子，谷口清(2012)：ウィスコンシン・カード分類テスト．自閉症スペクトラム辞典．pp.11-12. 日本自閉症スペクトラム学会編集．東京，教育出版，中山書店.
23) 井口英子，神尾陽子(2012)：行動障害．自閉症スペクトラム辞典．pp.53-54. 日本自閉症スペクトラム学会編集．東京，教育出版，中山書店.
24) 井口英子，神尾陽子(2012)：振戦．自閉症スペクトラム辞典．pp.117. 日本自閉症スペクトラム学会編集. 東京, 教育出版，中山書店.
25) 井口英子，神尾陽子(2012)：遅発性ジズキネジア. 自閉症スペクトラム辞典. pp.151. 日本自閉症スペクトラム学会編集. 東京, 教育出版，中山書店.
26) 井口英子，神尾陽子 (2012)：抗パーキンソン病薬．自閉症スペクトラム辞典．pp.57. 日本自閉症スペクトラム学会編集．東京，教育出版，中山書店.

(4)　研究報告書

1)　神尾陽子：就学前後の児童における発達障害の有病率とその発達的変化：地域ベースの横断的および縦断的研究．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業 精神障害分野「就学前後の児童における発達障害の有病率とその発達的変化：地域ベースの横断的および縦断的研究（研究代表者：神尾陽子）」総括・分担研究報告書，pp1-12，2012.

2)　神尾陽子，森脇愛子，遠藤明代，稲田尚子，立森久照，鈴木友理子，平本絵里子，武井麗子，中鉢貴之，高橋秀俊，三宅篤子：幼児期における発達障害の有病率と関連要因に関する研究．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業 精神障害分野「就学前後の児童における発達障害の有病率とその発達的変化：地域ベースの横断的および縦断的研究（研究代表者：神尾陽子）」総括・分担研究報告書，pp13-18，2012.

3)　三島和夫，北村真吾，稲田尚子，神尾陽子：発達障害児における睡眠習慣・睡眠障害に関する研究．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業 精神障害分野「就学前後の児童における発達障害の有病率とその発達的変化：地域ベースの横断的および縦断的研究（研究代表者：神尾陽子）」総括・分担研究報告書，pp41-50，2012.

4)　小保内俊雅，遠藤明代，稲田尚子，神尾陽子：地域の発達健診事業のあり方に関する研究：５歳児の行動と発達の問題に対する幼稚園・保育所側の担当保育者の認識と対応～発達障害が疑われる児の地域支援のあり方を考える～．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業 精神障害分野「就学前後の児童における発達障害の有病率とその発達的変化：地域ベースの横断的および縦断的研究（研究代表者：神尾陽子）」総括・分担研究報告書，pp41-50，2012.

5)　神尾陽子，武井麗子，稲田尚子，松尾淳子，功刀浩，内山登紀夫：ライフステージに応じた 多次元的鑑別指標の同定に関する研究．平成 23 年度厚生労働科学研究（障害者対策総合研究事業）精神障害分野「発達障害者に対する長期的な追跡調査を踏まえ，幼児期から成人期に至る診断等の指針を開発する研究（研究代表者：内山登紀夫）」総括・分担研究報告書，pp21-30，2012.

(5)　翻訳

(6)　その他

1)　市川宏伸，太田昌孝，神尾陽子，清水康夫．特集 1.自閉症の医療について．座談会，いとしご増刊，かがやき No.7, pp.2-25.　東京，日本自閉症協会，2011.

2)　Leonides Canuet, Ryouhei Ishii, Masao Iwase, Koji Ikezawa, Ryu Kurimoto, Hidetoshi Takahashi, Antonio Currais, Michiyo Azechi, Yasunori Aoki, Takayuki Nakahachi, Salvador Soriano, Masatoshi Takeda　Psychopathology and working memory-induced activation of the prefrontal cortex in schizophrenia-like psychosis of epilepsy: evidence from magnetoencephalography てんかん精神病における精神症状とワーキングメモリ課題による前頭前野の活性化について：脳磁図による検討　精神神経学雑誌 113(6):641

3)　神尾陽子：災害時に見えてくる，これからの子どものメンタルヘルス対策に必要なこと（巻頭言）精神医学, 53, 934-935, 医学書院, 2011.

B．学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

1)　Kamio Y. Neuropsychiatric comorbidities in autism spectrum disorders without intellectual disability. The 9th Asian & Oceanian Epilepsy Congress. March 25, 2012, Manila.

2)　Kamio, Y. (2011). Early detection of autism spectrum disorder at 18 months. Scientific Panels: International applications of the Modified Checklist for Autism in Toddlers (M-CHAT) in level 1 screening. The 10th International Meeting for Autism Research. May 13, San Diego.

3) Kamio, Y: Early diagnosis of ASD in toddlers and school children: Findings from community studies and national survey in Japan. Exploring Autism Research Collaboration between Japan and the United States. Joint Academic Conference on Autism Spectrum Disorders. Tokyo, 2011.12.3.

4) G.A.Light; T.A.Greenwood; A.J.Rissling; H.Takahashi; N.R.Swerdlow; M.Pela; J.Sprock;K. Kirihara; D.L.Braff. Validation of neurophysiological biomarkers in schizophrenia:12 month stability and neurogenetic correlates. 13th International Congress on Schizophrenia Research, Colorado Springs, USA. April 2~6, 2011.

5) 神尾陽子:（教育講演）自閉症スペクトラムの早期診断と早期介入 - 最近の国内外の動向. 第 53 回日本小児神経学会総会, 横浜, 2011.5.27.

6) 神尾陽子: （招待講演）自閉症の動物研究に期待すること. 精神医学と脳科学のコラボレーション : 今後の展望と戦略. 第 I 部 精神疾患のモデル動物はどこまで可能か？包括型脳科学研究推進支援ネットワーク夏のワークショップ, 神戸, 2011.8.22.

7) 神尾陽子: （招待講演）アスペルガー症候群からのレッスン : 精神医学における発達障害再考. 日仏医学コロック 2011/Colloque médical franco-japonais 2011,東京, 2011. 10. 30.

8) 神尾陽子: 精神医学における発達障害再考 : 児童期から成人期へのさまざまな発達軌跡. 第 107 回日本精神神経学会学術総会, 東京, 2011.10.27.

9) 神尾陽子: 広汎性発達障害のライフステージに応じた介入と予防に向けて : 疫学研究から. シンポジウム「精神医学における発達障害再考 : 児童期から成人期へのさまざまな発達軌跡」 第 107 回日本精神神経学会学術総会, 東京, 2011.10.27.

10) 神尾陽子: 小・中学校におけるエビデンスにもとづく学校精神保健の課題. シンポジウム「教育における精神保健ネットワークの構築を目指して」 第 107 回日本精神神経学会学術総会, 東京, 2011.10.27.

11) 石井良平, 栗本龍, カヌエト・レオニデス, 青木保典, 池田俊一郎, 補永栄子, 高橋秀俊, 中鉢貴行, 岩瀬真生, 武田雅俊 : MEG 応用―基礎から臨床まで 自発脳律動活動の精神科領域への臨床応用 第 26 回日本生体磁気学会, 九州大学百年講堂, 福岡市, 2011.6.3-6.4

12) 高橋秀俊 : 神経生理機能・人格傾向とゲノム. 第二回脳表現型の分子メカニズム研究会 チュートリアルコース : ゲノムを用いた脳表現型のトランスレーショナルリサーチ. 東京大学医学部教育研究棟セミナー室. 東京都文京区. 2011.11.19.

13) 石井良平, 栗本龍, 青木保典, 池田俊一郎, カヌエト・レオニデス, 池澤浩二, 補永栄子, 高橋秀俊, 中鉢貴行, 岩瀬真生, 武田雅俊 : シンポジウム 3 精神神経疾患における認知障害と神経生理. MEG によるワーキングメモリ解析の精神科領域への臨床応用 第 41 回日本臨床神経生理学会学術大会. グランシップ. 静岡市. 2011.11.10-12.

14) 神尾陽子:（教育講演）子どもから大人への精神病理の連続性と不連続性 : よりよい長期予後を目指して. 第 3 回日本小児心身医学会関東甲信越地方会, 東京, 2012.3.4.

(2) 一般演題

1) H. Takahashi; A.J. Rissling; K. Kirihara; N.R. Swerdlow; D.L. Braff; G.A. Light. Source Localization Analyses of Hierarchical Early Information Processing Deficits in a Large Cohort of Schizophrenia Patients. 13th International Congress on Schizophrenia Research, Colorado Springs, USA. April 2~6, 2011.

2) A.J. Rissling; D.L. Braff; J. Young; H. Takahashi; K. Kirihara; G.A. Light. Deficits in the Synergistic Enhancement of Automatic Sensory Processing on Controlled Processes in Schizophrenia. 13th

International Congress on Schizophrenia Research, Colorado Springs, USA. April 2~6, 2011.

3) Kamio, Y. (2011). Early detection of autism spectrum disorder at 18 months. Scientific Panls: International applications of the Modified Checklist for Autism in Toddlers (M-CHAT) in level 1 screening. The 10th International Meeting for Autism Research. May 13, San Diego.

4) Hidetoshi Takahashi, Masao Iwase, Yuka Yasuda, Hidenaga Yamamori, Kazutaka Ohi, Motoyuki Fukumoto, Leonides Canuet, Ryouhei Ishii, Hiroaki Kazui, Ryota Hashimoto, Masatoshi Takeda. Relationship of prepulse Inhibition to personality dimensions in Japanese patients with schizophrenia. the 10th World Congress of Biological Psychiatry, Prague Congress Centre (PCC), Prague, Czech Republic, May 30-June 2, 2011.

5) Inada N, Kamio Y: The application of the M-CHAT to the Japanese health check-up system. Exploring Autism Research Collaboration between Japan and the United States. Joint Academic Conference on Autism Spectrum Disorders. Tokyo, 2011.12.2.

6) Kuroda M, Kawakubo Y, Asami A, Kuwabara H, Yamasue H, Kano Y, Kamio Y: A randomized controlled trial of a cognitive-behavioral intervention for the adults with high-functioning autism spectrum disorders. Exploring Autism Research Collaboration between Japan and the United States. Joint Academic Conference on Autism Spectrum Disorders. Tokyo, 2011.12.2.

7) Yamazaki T, Fujita T, Kamio Y, Tobimatsu S: Electrophysiological evaluation of visual impairment in ASD. Exploring Autism Research Collaboration between Japan and the United States. Joint Academic Conference on Autism Spectrum Disorders. Tokyo, 2011.12.2.

8) Kuwano Y, Kamio Y, Kawai T, Katsuura S, Inada N, Takaki A, Rokutan K: Autism-associated gene expression signatures in peripheral blood leukocytes. Exploring Autism Research Collaboration between Japan and the United States. Joint Academic Conference on Autism Spectrum Disorders. Tokyo, 2011.12.2.

9) Inada, N., Kamio, Y. The application of the M-CHAT to the Japanese health check-up system. Joint Academic Conference on Autism Spectrum disorders. pp12. 2011.12.2. Tokyo. （ポスター発表）

10) 井口英子，神尾陽子：高機能自閉症スペクトラム者における言語機能の特異性と発達的変化　−言語流暢性課題を用いた検討−日本生物学的精神医学会第 33 回総会，東京，2011.5.21-22.

11) 稲垣真澄，小林朋佳，北洋輔，井上祐紀，加我牧子，神尾陽子：読み書きのつまずきに関する全国調査（その 1）ー担任教師の視点 - . 第 53 回日本小児神経学会総会，横浜, 2011. 5.26-28.

12) 小林朋佳，稲垣真澄，北洋輔，井上祐紀，加我牧子，田中康雄，神尾陽子：読み書きのつまずきに関する全国調査（その 2）AD/HD 症状との関連ー担任教師の視点 - . 第 53 回日本小児神経学会総会，横浜，2011. 5.26-28.

13) 石井良平，補永栄子，栗本龍，カヌエト・レオニデス，高橋秀俊，中鉢貴行，岩瀬真生，水田一郎，武田雅俊．脳磁図による自閉症スペクトラム障害のミラーニューロンシステムの機能異常の解析．第 33 回日本生物学的精神医学会，港区台場，東京，2011.5.21-22.

14) 高橋秀俊，岩瀬真生，安田由華，山森英長，大井一高，福本素由乙，カヌエト・レオニデス，石井良平，數井裕光，橋本亮太，武田雅俊．統合失調症患者における聴覚性驚愕反射のプレパルス・インヒビションと personality dimension との関連．第 33 回日本生物学的精神医学会, 港区台場, 東京, 2011.5.21-22.

15) 井口英子，森脇愛子，黒田美保，稲田尚子，神尾陽子「児童期における広汎性発達障害の有病率と合併精神障害　ー地域ベースでの検討ー」平成 22 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会，東京，2011.5.23

16) 橋本 亮太，大井 一高，安田 由華，福本 素由己，山森 英長，高橋 秀俊，岩瀬 真生，大河内 智，数井 裕光，斉藤 治，巽 雅彦，岩田 仲生，尾崎 紀夫，上島 国利，功刀 浩，武田 雅俊：RELA 遺伝子は統合失調症とプレパルス抑制と関連する Variants of the RELA gene are associated with schizophrenia and prepulse inhibition 第 34 回日本神経科学大会,パシフィコ横浜，横浜，2011.9.14-9.17

17) 森脇愛子.『自閉症スペクトラム障害児の友人関係支援の効果に関する予備的検討』ポスター発表 日本特殊教育学会第 49 回大会, 弘前大学, 青森,2011.9.23-9.25

18) Ryota Hashimoto, Kazutaka Ohi, Yuka Yasuda, Motoyuki Fukumoto, Hidenaga Yamamori, HidetoshiTakahashi, Masao Iwase, Tomo Okochi, Hiroaki Kazui, Osamu Saitoh, Masahiko Tatsumi, Nakao Iwata, Norio Ozaki, Kunitoshi Kamijima, Hiroshi Kunugi and Masatoshi Takeda. : Variants of the RELA gene are associated with schizophrenia and their startle responses. 第 21 回日本臨床精神神経薬理学会・第 41 回日本神経精神薬理学会 合同年会. 京王プラザホテル. 東京都新宿区. 2011.10.27-29.

19) 武井麗子, 森脇愛子, 高橋秀俊, 神尾陽子 : 一般児童・生徒の情緒・行為の問題に対する自閉症的行動特性と気質の影響. 第 52 回日本児童青年精神医学会総会. あわぎんホール. 徳島市. 2011.11.10-12

20) 栗本龍, 石井良平, 岩瀬真生, 池澤浩二, カヌエト・レオニデス, 疇地道代, 青木保典, 池田俊一郎, 高橋秀俊, 中鉢貴行, 木藤友美子, 吉田哲彦, 数井裕光, 武田雅俊 : レヴィー小体型認知症における開閉眼に伴う脳磁場活動ーアルツハイマー病との比較検討 第 41 回日本臨床神経生理学会学術大会. グランシップ. 静岡市. 2011.11.10-12.

21) 岩瀬真生, 疇地道代, 池澤浩二, 石井良平, 高橋秀俊, 中鉢貴行, レオニデス・カヌエト, 栗本龍, 青木保典, 池田俊一郎, 数井裕光, 福本素由己, 大井一高, 山森英長, 安田由華, 橋本亮太, 武田雅俊 : Sternberg 課題中の前頭部血流変化の NIRS による測定 第 41 回日本臨床神経生理学会学術大会. グランシップ. 静岡市. 2011.11.10-12.

22) 中鉢貴行, 石井良平 : NIRS により測定された健常被験者における符号課題施行時の前頭葉活動. 第 35 回日本高次脳機能障害学会（旧日本失語症学会）学術総会, 鹿児島市民ホール, 鹿児島, 2011. 11.12

23) 森脇愛子, 神尾陽子 :「通常学級に在籍する一般児童・生徒における自閉症的行動特徴の分布と発達精神医学的ニーズとの関連」（ポスター）日本児童青年精神医学会第 52 回総会,徳島,2011.11.10-11.12

24) 則内まどか, 菊池吉晃, 吉浦敬, 吉良龍太郎, 重藤寛史, 原寿郎, 飛松省三, 神尾陽子 : 拡散テンソル画像を用いた社会性の障害に関する研究 : 自閉症スペクトラム障害児の白質構造. 第 65 回日本生理人類学会, 大阪, 2011.10.26.

25) 稲田尚子, 黒田美保, 井口英子, 神尾陽子 : 自閉症スペクトラム幼児の早期診断―日本語版 ADOS モジュール 1 の信頼性と妥当性. 第 52 回日本児童青年精神医学会総会抄録集 pp316.徳島 2011.11.11

26) 黒田美保, 稲田尚子, 神尾陽子, 宇野洋太, 内山登紀夫. 日本語版 Autism Diagnostic Observation Schedule モジュール 4 の妥当性に関する予備的検討. 第 52 回日本児童青年精神医学会総会抄録集、pp327.2011.11.11 徳島

27) 井口英子, 森脇愛子, 黒田美保, 稲田尚子, 神尾陽子. 児童期における広汎性発達障害の有病率と合併精神障害ー地域ベースでの検討ー. 第 52 回日本児童青年精神医学会総会抄録集 pp327.2011.11.10 徳島

28) 森脇愛子, 神尾陽子 : 一般児童・生徒のメンタルヘルスに及ぼす自閉症的行動特徴の影響. 日本精神保健・予防学会第 15 回大会. 東京, 2011.12.3.

29) 稲田尚子, 神尾陽子 : 2 歳の自閉症スペクトラム幼児に対する早期支援の有効性. 第 31 回日本社会精神医学会 2012.3.15.東京

30) 森脇愛子, 伊藤良子, 藤野博（一般演題 : ポスター）高機能 ASD 児の行動特徴・仲間関係・精神的健康の関連. 日本発達心理学会第 23 回大会. 名古屋, 2011.3.10.

31) 森脇愛子, 神尾陽子（一般演題 : ポスター）通常学級に在籍する一般児童・生徒における自閉症的行動特徴と発達精神医学的ニーズとの関連. 日本社会精神医学会第 31 回大会. 東京, 2012. 3.15.

32) 森脇愛子, 藤野博, 神尾陽子（一般演題 : ポスター）子どもの強さと困難さアンケート（Strength and Difficulties Scale : SDQ）日本版の標準化と信頼性・妥当性検証. 日本社会精神医学会第 31 回大会. 東京, 2012. 3.15.

33) 遠藤明代, 神尾陽子, 高橋秀俊, 井口英子, 武井麗子, 稲田尚子, 森脇愛子, 中鉢貴行, 小保内俊雅（一般演題 : ポスター）地域のニーズに応じた 5 歳児健診のあり方についての検討 : 保育所・幼稚園における年中児の行動と発達に関する意識調査. 日本社会精神医学会第 31 回大会. 東京, 2012. 3.15.

(3)　研究報告会

1)　高橋秀俊，中鉢貴行，井口英子，森脇愛子，稲田尚子，武井麗子，神尾陽子. 日本人の自閉症スペクトラム児における聴覚性驚愕反射に関する研究. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 平成 23 年度 研究報告会（第 23 回），国立精神・神経医療研究センター，東京都小平市，2012.2.27.

2)　岩瀬真生，疇地道代，池澤浩二，石井良平，高橋秀俊，中鉢貴行，レオニデス・カヌエト，栗本龍，青木保典，池田俊一郎，数井裕光，福本素由己，大井一高，山森英長，安田由華，橋本亮太，武田雅俊 統合失調症における Sternberg 課題中の前頭部血流変化の NIRS による測定 日本統合失調症学会，愛知県産業労働センター（名古屋市）　2012.3.16

(4)　その他

1)　大野竜三，満屋裕明，直江知樹，神尾陽子，松澤佑次他日本学術会議臨床医学委員会臨床研究分科会. (2011):提言 エビデンス創出を目指す検証的治療研究の推進・強化に向けて. 2011.7.13 http://www.scj.go.jp/ja/info/index.html

2)　高橋秀俊 : 総合病院精神医学会編集委員会企画東日本大震災関連座談会．座長. 第 24 回日本総合病院精神医学会総会. 福岡市. 2011.11.26

C．講演

1)　神尾陽子．発達障害のある人々への精神科的介入のために : 児童期から成人期へ．第 12 回不安・強迫・抑うつ研究会．不安・強迫・抑うつ研究会・Meiji Seika ファルマ株式会社共催，名古屋，2011.6.15.

2)　稲田尚子．発達障害の早期発見の評価尺度について. 長野県松本保健所管内保健師研修会，松本，2011.7.8.

3)　稲田尚子．発達に課題のある子どもの早期発見・早期支援セミナー（1）. 埼玉保健師研修会，浦和，2011.7.22

4)　神尾陽子：自閉症スペクトラム：発達的観点から考える．東京福祉大学，群馬，2011.9.7.（招待講演）

5)　稲田尚子 : 発達に課題のある子どもの早期発見・早期支援セミナー（2）. 埼玉保健師研修会，浦和，2011.9.12.

6)　神尾陽子 : 自閉症・発達障がい児の早期発見と支援．子どもの心の診療関係者研修会．子どもの心の診療拠点病院推進室（鳥取大学医学部付属病院），米子, 2011.11.20.（招待講演）

7)　稲田尚子．発達に課題のある子どもの早期発見・早期支援セミナー（3）. 埼玉保健師研修会，浦和，2011. 11. 30.

8)　神尾陽子．自閉症スペクトラム児の早期診断とその意義 : ライフステージの観点から. 平成 23 年度埼玉小児保健セミナー．　埼玉県小児保健協会主催，埼玉, 2012.1.14.

9)　神尾陽子．児童精神医学 1・2. 平成 23 年度国立精神・神経医療研究センター精神科レジデント研修プログラム中期クルズス，2012.2.20.

10)　Kamio Y. What are expected in child psychiatry in Japan? The 11th Course for Academic Development of Psychiatrists, Japan Young Psychiatrists Organization, Osaka, Japan, 2012.2.17.

D．学会活動

（学会役員等）

1)　神尾陽子 : 日本精神神経学会（児童精神科医の育成に関する委員会委員）

2)　神尾陽子 : 日本自閉症スペクトル学会（評議員）

3)　神尾陽子 : 日本精神保健・予防学会（評議員）

4) 神尾陽子：第 21-22 期日本学術会議（連携会員，臨床医学委員会　脳とこころ分科会委員，出生・発達分科会委員）
5) 高橋秀俊：総合病院精神医学会　（評議員、編集委員、診療報酬問題委員、医療政策委員、広報委員、児童青年期委員）

E．研修

(1) 研修企画

1) 神尾陽子，井口英子：平成 23 年度精神保健に関する技術研修，第 6 回発達障害早期総合支援研修．東京，2011.6.22-24.
2) 神尾陽子，井口英子：平成 23 年度精神保健に関する技術研修，第 4 回発達障害精神医療研修．東京，2011.9.28-9.30.

(2) 研修会講師

1) 神尾陽子．発達障害の早期支援の意義と自治体の役割について．発達支援マネージャー育成研修．埼玉県福祉部福祉政策課，埼玉．2011.4.26.
2) 神尾陽子.自閉症の診断と評価．平成 23 年度第 1 期特別支援教育専門研修．自閉症・情緒、発達障害教育専修プログラム．独立行政法人国立特別支援教育総合研究所主催．横須賀，2011.5.25
3) 神尾陽子．自閉症スペクトラム児の早期診断とその意義：ライフステージの観点から．平成 23 年度精神保健に関する技術研修．第 6 回発達障害早期総合支援研修．国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所，東京，2011.6.22.
4) 神尾陽子．地域における自閉症スペクトラムの早期発見・早期支援．平成 23 年度精神保健に関する技術研修．第 6 回発達障害早期総合支援研修．国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所，東京，2010.6.22.
5) 稲田尚子．乳幼児期の発達障害への気づきと支援―ASD（自閉症スペクトラム障害）の子どもの早期行動特徴について―日本臨床発達心理士会千葉支部専門職公開研修会.千葉.2011.5.29
6) 稲田尚子.乳幼児の対人コミュニケーション行動アセスメント実習Ⅰ．第 6 回発達障害早期総合支援研修．東京.2011.6.23.
7) 森脇愛子．保護者との連携を図りながらの支援について：障害幼児教育研修会講師　宮城県特別支援教育センター,宮城 2011.7.28
8) 稲田尚子．自閉症スペクトラム障害の早期発見・早期支援．いわき市平成 23 年度発達障害早期発見・早期支援のための研修会．2012.3.26．いわき．

6. 成人精神保健研究部

Ⅰ. 研究部の概要

研究部及び研究室の研究目的

自然災害，犯罪被害，虐待等における心理的外傷を緩和し，効果的な治療と支援の研究を進めるとともに，代表的な病態である PTSD の神経科学的な解明と治療研究を推進している．各種震災，事故等に際しては専門家派遣などの現地支援に当たるとともに，効果的な行政・医療対応のシステム研究にも取り組んでいる．また関係諸機関（厚生労働省，警察庁，内閣府等中央省庁，精神保健福祉センター，災害医療センター，保健医療科学院，世界保健機構，兵庫県および新潟こころのケアセンター等）とのネットワークの構築，共同研究の推進，教育研修活動も積極的に行っているところである．平成 22 年度末の 3 月 11 日に発生した東日本大震災に関しては，直ちに国立精神・神経医療研究センターに情報支援サイトを立ち上げ，また精神神経学会において対策にあたるなどの迅速な対応を行った．また平成 23 年 12 月には災害時こころの情報支援センターが発足し，当部の部長がセンター長を併任した。

平成 23 年度の当研究部の構成は以下の通りである．部長：金 吉晴．診断技術研究室長：松岡 豊．犯罪被害者等支援研究室長：中島聡美．災害等支援研究室長：鈴木友理子．精神機能研究室長：栗山健一．認知機能研究室長（司法精神医学研究部併任）：福井裕輝．流動研究員は本間元康，岡島純子，野口普子．外来研究員として伊藤正哉，大沼麻実．協力研究員は西 大輔，堤 敦朗，松岡恵子，白井明美，石丸径一郎，寺島 瞳，深澤舞子，井筒 節，成澤知美，西多昌規，正木智子，吉池卓也．研究生は松田陽子，永井めぐみ，臼杵理人，島崎みゆき，小林由季，堀江美智子，工藤紗弓，奥山紗由，石田牧子，伊東史ヱ，伊藤まどか，小暮由美，加藤典子，淺野敬子，大滝涼子，村上尚美，中谷 優．実習生として木村美貴子．客員研究員として宇野正威，加茂登志子，小西聖子，宮地光恵，下山晴彦，鈴木伸一，北山徳行各氏を迎えている．（順不同）

Ⅱ. 研究活動

1) PTSDに対する持続エクスポージャー療法の効果に関する研究

現在各国のガイドラインでPTSDに対する治療法として最もエビデンスがあるとされている，持続エクスポージャー療法（Prolonged Exposure Therapy）の治療効果についてのRCTが終了し，十分な治療効果が示された．（金，中島，伊藤）

2) 交通外傷後の精神健康に関するコホート研究

事故後6か月間に発症したPTSDの予測因子を検討したところ，生命に対する脅威と心拍数が見出された．ただし心拍数をスクリーニングで用いるには不十分であることが示された（松岡，中島，金）

3) 新潟県中越地震および中越沖地震における地域住民の精神健康追跡調査

新潟県小千谷市および柏崎市，刈羽村，出雲崎町における住民の精神健康調査を実施した．（金，鈴木，深澤，中島）

4) 東日本大震災後の精神健康調査

東日本大震災後の行政職員（県職員，教職員），児童生徒，地域住民の精神健康調査について，各関係機関に専門的技術支援を行い，解析等を担当した．（鈴木，深澤，金）

5) PTSD症状，レジリエンス，そして外傷後成長の関連についての検討

交通外傷患者におけるレジリエンスと外傷後成長との関連を検討した. 外傷後成長を構成する因子のうち，「人生・生命に対する感謝」と「精神性的変容」はPTSD症状と深く関連し，「人間としての強さ」「他者との関係」「新たな可能性」はレジリエンスと深く関連していることが示唆された．（松岡，金）

6) 不飽和脂肪酸によるPTSD予防法の検討

外傷患者のPTSD二次予防を目的としたプラセボ対照二重盲検ランダム化比較試験を実施中である．平成24年3月末までに目標症例140例中89例を登録した．（松岡）

7) 複雑性悲嘆の認知行動療法の効果に関する研究

米国のShearらによって開発された複雑性悲嘆の認知行動療法の有効性をオープントライアルにて検証を行なった。現在目標症例数15例中5例（33%）が終了している。また，Wagnerらによって開発されたインターネットを利用した複雑性悲嘆の認知行動療法の予備的研究を健常者を対象に実施した．（中島，伊藤，白井，小西，金）

8) 犯罪被害者に対する急性期心理社会支援ガイドラインの開発

犯罪被害者支援の専門家によるフォーカスグループと国内外の文献を参考に，日本の現場に即した犯罪被害後の対応のガイドライン案を作成し，精神保健の非専門家を含む支援者（84 名）によってDelphi 法を用いた合意形成を行なった．この結果をもとに修正を行いガイドラインを作成した．（中島，鈴木，深澤，成澤，浅野，金）

9) 健康危機体制における精神保健支援の在り方に関する研究

災害時の精神保健対応のマニュアルに基づいて，研修プログラムの開発を行った．マニュアルの視覚教材，およびウェブ学習プログラムを作成した．また前年度に作成した行政対応のクリティカルパスの東日本大震災における有用性を検討した．（鈴木，深澤，中島）

10) 精神障害に対する偏見・差別除去に関する介入研究

精神障害をもつ人びとが経験した差別に関する国際共同研究，INDIGO 研究に参加した．日本の参加者データについて，親研究と別途分析して，量的および質的に分析をした．また，精神疾患に関する差別除去の目的で，臨床研修医を対象にメンタルヘルス・ファーストエイドプログラムの実証研究を行った．（鈴木）

11) 睡眠剥奪が意図的な恐怖記憶の形成回避に及ぼす影響

睡眠剥奪は恐怖情動記憶の般化を選択的に消去し，さらに，条件付けによる生理反応の消去にも有効であるが，意図的に恐怖記憶の獲得を回避する行動が関わると，恐怖記憶の出来事想起の般化をかえって促進する事が明らかとなった．これはトラウマ受傷後の睡眠剥奪は PTSD 発症を予防する可能性を示唆する半面，重度のストレス体験に対して防衛機制が働き，記憶獲得能が麻痺した症例においては，かえって PTSD の発症を促進し，重症化・遷延化を促すリスクファクターとなりうる可能性を示唆している．（栗山，本間，小山，木村）

12) D-サイクロセリン，バルプロ酸による恐怖記憶消去の促進効果の時間生物学的検討

D-サイクロセリン（DCS）およびバルプロ酸（VPA）によるヒトの恐怖記憶消去学習促進効果の時間生物学的特性を検討した．DCSは昼間覚醒中の恐怖記憶消去を促進させ，VPAは夜間睡眠中の恐怖記憶消去を促進させた．本成果は恐怖記憶消去の背景メカニズムの解明および，これらの薬剤の臨床使用時の有効性向上及び副作用の低減化に有用な知見を示す．（栗山，本間，小山，木村）

13) 大震災が平衡感覚機能に及ぼす影響の検討

東日本大震災の後にめまいを訴える患者の増加が報告されている．この背景メカニズムとして，余震を繰り返し体験した者に有意に強く閉眼時に平衡感覚攪乱が検出された．これは不安や抑うつ傾向と

有意な相関関係を示し，中枢性平衡障害と末梢性平衡障害の要素が混在していた．めまいは心理ストレスのみでも生じうるが，震災後のめまいは，繰り返す余震の物理的影響が原因となり，災害関連心身障害の中でも特有の性質を持つことが明らかとなった．（本間，栗山，小山，木村）

Ⅲ．社会的活動に関する評価

1)　市民社会に対する一般的な貢献

・　東日本大震災に関して，災害情報支援サイトを NCNP の HP に開始した．金，中島，鈴木が被災県に専門家として派遣された．また，栗山は NCNP こころのケアチームの一員として派遣された．

・　以下の報道を通じて研究成果の社会還元を行った．

- 朝日新聞（2011.6.10）アートセラピー「注意を」．（金）
- 読売新聞（2011.7.19）医療ルネサンス　NO.5124　震災関連病 3/3.（金）
- 岩手日報（2011.4.18）被災者の心どうまもる．（中島）
- Psychiatric News（46(11):1, 2011.6.3）Japan's Resilience Eases Impact of Natural Disaster.（鈴木）
- Psychiatric News (46(11):25, 2011.6.3) Lessons Bitterly But Gratefully Learned.（鈴木）
- メディカルトリビューン（2012.11.24）第 10 回トラウマティック・ストレス学会．被災地ではこころのケアの真価が問われる時期.（鈴木）
- どうする？復興を支える自治体職員の心のケア（284(12):10-11. 2011）3. 「心のケア」の課題とは？．連合，東京．（鈴木）
- ヘルス＆ビューティー・レビュー4・5 月号（2011.5.20）未体験のストレスとどうつきあうか．不安，焦り，恐怖を癒すには．講談社，東京．（鈴木）
- 災害後の心のケアと回復力：これまでの事例と取り組み．平成 23 年度第 1 回メディアカンファレンス，東京，2011.4.27.（鈴木）
- 市民向け講演（鈴木）
- 東日本大震災後のメンタルヘルス~中長期の課題．東日本大震災後のメンタルヘルス．特例民法法人　青少年健康センター．東京，2011.12.18.（鈴木）
- 災害後のこころのケア．東北福祉大学メンタルヘルスプロモーション事業公開フォーラム．宮城，2011.6.25.（鈴木）
- 東京新聞（2012.1.8 総合面）心理的苦痛　目立つ被災者．（鈴木）
- 福島民報（2012.1.10）被災者　生活不安　心に重圧．（鈴木）
- 産経新聞（2011.4.5 朝刊）15 面　被災地や周辺地域住民の不眠症対策（栗山）
- 日本経済新聞（2011.8.6 朝刊）NIKKEI PLUS1 健康生活 S13 面「プチ仮眠」で頭すっきり．（栗山）
- 日本経済新聞（2011.8.22 朝刊）科学技術 11 面　不眠がトラウマ防ぐ．（栗山）
- 東京新聞（2011.12.13 朝刊）見たい初夢　1 位は「家族」．（栗山）
- 産経新聞（2011.12.22 朝刊）良い初夢見るには「楽しい気分」「強くイメージ」「良質の睡眠」．（栗山）
- 読売新聞（2012.1.27）　YOMIURI ONLINE.「夢と上手につきあう方法」．（栗山）
- Medical Tribune（2012.2.2 P17）大規模災害時の睡眠問題をめぐり議論．（栗山）

2)　専門教育面における貢献

・　専門家向け情報の提供（中島，伊藤）

国内の悲嘆の研修者とともに災害グリーフサポートプロジェクト（Japan Disaster Grief Support Project; JDGS project）を設立し Web 等を通して被災者遺族にかかわる専門家への情報提供を行った。

・ 専門家向け講演会
全国精神保健福祉センター長会，健康危機管理保健所長等研修，国土交通省幹部職員研修会，行政職員向け研修会等で，災害精神保健に関する最新知見を提供している．（金，鈴木）
・ 客員教授：東京女子医科大学医学部（金），山梨大学（金）
・ 大学講師：東京大学医学部（金），京都大学医学部（金），東京医科歯科大学医学部（金），武蔵野大学（金）
・ 多施設共同研究チーム内での専門家としての貢献：「自殺対策のための戦略研究：自殺企図の再発防止に対する複合的ケースマネジメントの効果：多施設共同による無作為化比較研究」のイベント判定委員会委員（松岡）「同研究：自殺予防地域介入研究」の研究班運営委員（鈴木）
・ 各地の医師会，法務省，警察庁， 精神保健福祉センター等の依頼を受け，トラウマ対応，PTSD 治療，犯罪被害者対応，被災者・遺族対応，災害精神保健に関する一連の講演を行った（金，中島，鈴木）．
・ 国際協力（中島）
JICA による四川大地震後のこころのケアプロジェクトに参加し，兵庫県の研修会において被災者の悲嘆ついての講演を行った．
・ 国際協力（鈴木）
  ・ JICA によるホーチミン医科薬科大学における臨床疫学プログラムにて，講義を行った。
  Suzuki Y: Cross-sectional study. Capacity building toward evidence-based medicine among health care professionals. JICA Partnership program. University of Medicine and Pharmacy- Ho Chi Minh City. Ho Chi Minh City, Vietnam. 2011.8.15-19.
  Suzuki Y: Data management and workflow. Capacity building toward evidence-based medicine among health care professionals. JICA Partnership program. University of Medicine and Pharmacy- Ho Chi Minh City. Ho Chi Minh City, Vietnam. 2011.8.15-19.
  Suzuki Y: Postnatal depression. Staff training for parental support program. Nhan Dan Gia Dinh Hospital. Ho Chi Minh City, Vietnam. 2011.8.17.
  ・ Mental health community's response to the 3.11 disaster and future preparedness. A Panel Discussion on Mental Health following the March 11th, 2011 Disaster, The Embassy of Canada, Tokyo, December 8, 2011.（鈴木）

3) 精研の研修の主催と協力
・ 国立精神・神経医療研究センターにおいて第 6 回犯罪被害者メンタルケア研修を主催した（中島）

4) 保健医療行政・施策に関する研究・調査，委員会等への貢献
①政府委員会
・内閣官房「国民保護訓練」アドバイザー（金，鈴木）
・厚生労働省「原爆体験者等健康意識調査報告書」等に関する検討会　委員（金）
・宇宙開発事業団　有人サポート委員会　委員　（金）
・内閣府　犯罪被害者等施策推進会議専門委員（中島）
・内閣府　犯罪被害者等に対する心理療法の費用の公費負担に関する検討会委員（中島）
・内閣府「平成 23 年度交通事故被害者サポート事業検討会」委員（中島）
・国土交通省「公共交通における事故発生時の被害者支援のあり方」委員（中島）
・厚生労働省「HIV 遺族実態調査検討会」委員長（金），委員（中島）
・東京都　犯罪被害者等支援を進める会議委員　（中島）
・金融庁　振り込め詐欺救済法に係る預保納付金に基づく事業の担い手選定のための有識者ヒアリング委員（中島）

・宮城県，岩手県精神保健福祉センター，こころのケアに関する災害アドバイザー（鈴木）
・福島県立医科大学放射線医学県民健康管理センター　専門委員（鈴木）
・仙台市教育局教育委員会　調査協力専門家（鈴木）

②その他公的委員会
・「新潟こころのケアセンター」アドバイザー
アドバイザーとして，新潟中越地震および中越沖地震後の地域住民の精神健康に関する調査およびプログラム開発の専門的助言を行っている．（金，鈴木）
・「兵庫県こころのケアセンター」外部アドバイザー（金）
・岩手県の精神保健についてのアドバイザーとして被災者のメンタルヘルスに関わる助言を行った（中島）

5)　センター内における臨床的活動
・　認知行動センター設立準備室長を併任（金）
・　病院において PTSD，複雑悲嘆の外来診療，CBT を行っている．（金，中島）
・　トランスレーショナル・メディカルセンター室長併任，平成 24 年 1 月より専任部長（松岡）
・　トランスレーショナル・メディカルセンターの臨床研究研修制度と若手育成カンファレンスの運営ならびに若手研究グループでレジデントとコメディカルの研究指導を行った．（松岡）
・　平成 23 年度 TMC の臨床研究講座にて「主観的評価の測定法（精神症状，QOL 等）」の講義を担当した（2011.6）（鈴木）

6)　その他
・　成人部 HP に「自然災害に関するガイドライン」「薬物療法アルゴリズム」「犯罪被害者のメンタルヘルス情報ページ」を掲載し，専門家，一般に対し治療や対応についての啓発を行っている．（金，中島）

Ⅳ. 研究業績

A．刊行物

(1) 原著論文

1)　Umehara H, Fangerau H, Gaebel W, Kim Y, Schott H, Zielasek J: Von der “Schizophrenie” zur “Störung der Einheit des Selbst”. Der Nervenarzt, 2011. (online)
2)　Kuriyama K, Honma M, Koyama S, Kim Y: D-cycloserine Facilitates Procedural Learning but not Declarative Learning in Healthy Humans: A Randomized Controlled Trial of the Effect of D-cycloserine and Valproic Acid on Overnight Properties in the Performance of Non-emotional Memory Tasks. Neurobiol Learn Mem 95(4): 505–509, 2011.
3)　Kuriyama K, Mishima K, Soshi T, Honma M, Kim Y: Effects of sex differences and regulation of the sleep-wake cycle on aversive memory encoding. Neurosci Res 70(1): 104–110, 2011.
4)　Kim Y, Akiyama T: Post-disaster mental health care in Japan. The Lancet 378 : 317-318, 2011.
5)　Kim Y: Great East Japan Earthquake and Early Mental-health-care Response.Psychiatry and Clinical Neurosciences:　539-548, 2011.
6)　Kim Y, Tsutsumi A, Izutsu T, Kawamura N, Miyazaki T, Kikkawa T.: Persistent distress after psychological exposure to the Nagasaki atomic bomb explosion. Br J Psychiatry. 199:411-6. 2011.（雑誌より press release される．）
7)　Kuriyama K, Honma M, Soshi T, Fujii T, Kim Y. Effect of D-cycloserine and valproic acid on the extinction of reinstated fear-conditioned responses and habituation of fear conditioning in

healthy humans: a randomized controlled trial. Psychopharmacology (Berl). 218(3):589–597. 2011.

8) Kuriyama K, Honma M, Shimazaki M, Horie M, Yoshiike T, Koyama S, Kim Y. An N-methyl-d-aspartate receptor agonist facilitates sleep-independent synaptic plasticity associated with working memory capacity enhancement. Scientific Reports. 1: 127. 2011.

9) Ito M, Nakajima S, Fujisawa D, Miyashita M, Kim Y, Shear MK, Ghesquiere A, Wall MM.: Brief measure for screening complicated grief: reliability and discriminant validity. PLoS One 7(2):e31209 , 2012.

10) Suzuki Y, Kim Y: The Great East Japan earthquake in 2011; toward sustainable mental health care system. Epidemiology and Psychiatric Sciences 21(1): 7 - 11, 2012.

11) Matsuoka Y, Nishi D, Yonemoto N, Hamazaki K, Hamazaki T, Hashimoto K: Potential role of brain-derived neurotrophic factor in omega-3 fatty acid supplementation to prevent posttraumatic distress after accidental injury: An open-label pilot study. Psychother Psychosom. 80:310-312, 2011.

12) Matsuoka Y, Nishi D, Nakaya N, Sone T, Hamazaki K, Hamazaki T, Koido Y: Attenuating posttraumatic distress with omega-3 polyunsaturated fatty acids among disaster medical assistance team members after the Great East Japan Earthquake: The APOP randomized controlled trial. BMC Psychiatry 2011,11:132.

13) Deno M, Miyashita M, Fujisawa D, Nakajima S, Ito M. The relationships between complicated grief, depression, and alexithymia according to the seriousness of complicated grief in the Japanese general population. J Affect Disord. 135(1-3):122-127, 2011.

14) Colucci E, Kelly CM, Minas H, Jorm AF, Suzuki Y: Mental Health First Aid guidelines for helping a suicidal person: a Delphi consensus study in Japan. Int J Ment Health Syst. 2011; 5: 12.

15) Suzuki Y, Inka Weissbecker: Post-disaster mental health care in Japan. Lancet 2011; 378: 317, 2011.

16) Gaebel W, Zäske H, Cleveland HR, Zielasek J, Stuart H, Arboleda-Florez J, Akiyama T, Gureje O, Jorge MR, Kastrup M, Suzuki Y, Tasman A, Sartorius N: Measuring the stigma of psychiatry and psychiatrists:development of a questionnaire. Eur Arch Psychiatry Clin Neurosci , 261 (Suppl 2):119–123, 2011.

17) Suzuki Y, Goto A, Nguyen QV, Nguyen TTV, Pham NM, Chung TMT, Trinh HP, Pham VT, Yasumura S: Postnatal depression and associated parenting indicators among Vietnamese women. Asia-Pacific Psychiatry 3 (2011) 219–227.

18) Goto A, Suzuki Y, Nguyen Q V, Nguyen T T V, Trinh H P, Pham N M, Nguyen T M, Yasumura S & the NDGD Parenting Support Team: Pilot study on a group-based parenting program in a Vietnamese public hospital: Program acceptance among mothers and staff. Asia-Pacific Psychiatry 4 (2012) 76–83, 2012.

19) Honma M, Tanaka Y, Osada Y, Kuriyama K : Perceptual and not physical eye contact elicits pupillary dilation. Biol Psychol. 89: 112–116. 2011.

20) 金 吉晴：認知行動療法における治療者の技量の重要性．精神科治療学 26（3），289-294, 2011.

21) 森田展彰，数井みゆき，金丸隆太，中島聡美：不適切な養育が幼児の自律神経機能に与える影響の心拍変動による評価 ―乳児院児童を対象とした試み―．子どもの虐待とネグレクト 13(3), 409-419，2011.

22) 淺野敬子，小西聖子，中島聡美：痴漢被害の援助要請志向に影響を与える要因の検討．武蔵野大学心理臨床センター紀要(11)，1-11，2011.

23) 栗山健一：精神ストレスの遷延防止 - PTSD の発症・悪化防止の為の睡眠医療 - . 特集　睡眠医療と精神医療のリンケージによる効果的な治療プログラムの提案.　精神神経学雑誌 114(2): 136-143, 2012.

(2) 総説

1) 金 吉晴：PTSD の病態と治療. 神奈川県精神医学会誌 60: 7-10, 2011.
2) 金 吉晴：東日本大震災における被ばく不安. 特集：フクシマの教訓－放射能被ばく事故に学ぶこころのケア. 臨床精神医学, 40(11):1461-1465, 2011.
3) 金 吉晴：外傷後ストレス障害. TODAY'S THERAPY 2012　今日の治療指針　私はこう治療している. 医学書院. 東京. 851-852. 2012.
4) 和田 信, 和田知未, 金 吉晴：がん患者における心的外傷と PTSD. トラウマティック・ストレス 9(2)72-80, 2011.
5) 金 吉晴：持続エクスポージャー療法. 今日の精神疾患治療指針　編集：樋口輝彦他　19 精神療法, 医学書院, P787-788, 2012.
6) 金 吉晴, 秋山 剛, 大沼麻実：東日本大震災後の精神医療初期対応について. 精神保健研究 58：15-26, 2012.
7) 松岡 豊：魚油による PTSD 予防への挑戦. 分子精神医学 11(2): 154-156, 2011
8) 松岡 豊, 浜崎景：うつ病と ω3 系多価不飽和脂肪酸. Depression Frontier 9(1):35-43, 2011.
9) 西 大輔, 臼杵正人, 松村健太, 松岡 豊：事故後の PTSD の予防に向けて. 精神科 8(6):659-663,2011.
10) 中島聡美：複雑性悲嘆の理解とケア. 心と社会 42(3), 15-21, 2011.
11) 中島聡美：犯罪被害者・長期間の虐待被害者に対する治療マネジメント. 精神科治療学(26)増刊号. 神経症性障害の治療ガイドライン. 319-323,2011.
12) 中島聡美：大規模災害における行政の地域精神保健活動への支援. 精神保健研究 58：27-34, 2012.
13) 鈴木友理子：　災害支援のチーム医療. 災害支援-臨床心理士による包括的支援. 臨床心理学. 11(4): 513-518, 2011.
14) 鈴木友理子：東日本大震災後の被災地における精神保健医療活動. 日本精神科病院協会雑誌. 30(10); 21-27, 2011.
15) 鈴木友理子：被災地における精神保健医療の課題. 特集シリーズ　東日本大震災から⑥. 公衆衛生情報. 41(7):pp2-15, 2011.
16) 鈴木友理子：東日本大震災後の地域精神保健医療. 精神保健研究 58：21-26, 2012.
17) 栗山健一：睡眠と記憶,認知機能. 特集 1:　睡眠研究の動向　日本生物学的精神医学会誌. 22(3) 151-157. 2011.
18) 栗山健一, 金 吉晴：ＰＴＳＤ：記憶と意識の病理. 第１１回八ヶ岳シンポジウム「Fear Circuit Disorder の基礎と臨床」. 分子精神医学 11(2): 46-48, 先端医学社 , 2011.

(3) 著書

1) Kuriyama K, Honma M: Effects of sleep debt on cognitive performance and prefrontal activity in humans. Infrared Spectroscopy - Life and Biomedical Sciences. pp.25-40 In-Tech. Croatia. 2011. ISBN 978-953-51-0538-1 .
2) 金 吉晴：外傷後ストレス障害（PTSD）. 精神医学キーワード事典　2 章 Key Word49, 中山書店, 東京, pp125-126, 2011.
3) 藤井 猛, 藤堂直之, 金 吉晴：III 神経症性障害, ストレス関連障害および身体表現性障害.7 外傷後ストレス障害に有効な薬物療法は？. EBM 精神疾患の治療. 中外医学社, 東京, pp169-174, 2011.
4) 金 吉晴：第 2 章　外傷後ストレス性障害. 精神医療の最前線と心理職への期待. 誠信書房, 東京, pp45-58, 2011.

5) 金 吉晴：1-1-3 東日本大震災への精神医療対応．精神保健福祉白書 2012 年版東日本大震災と新しい地域づくり．中央法規，東京，P28, 2012.
6) 松岡 豊，西大輔：交通事故と PTSD．新しい診断・治療の ABC シリーズ 70「外傷後ストレス障害（PTSD）」（飛鳥井望編），最新医学社，大阪，pp136-141, 2011.
7) 松岡 豊：海馬と心的外傷後ストレス障害. TEXT 精神医学改訂 4 版（編者：加藤進昌，神庭重信，笠井清登），南山堂，東京，pp279, 2011.
8) 松岡 豊：心的外傷後ストレス障害（PTSD）．精神科研修ノート（笠井清登，村井俊哉，三村将，岡本泰昌,大島紀人編集），診断と治療社，東京，pp339-343, 2011.
9) 中島聡美：PTSD と ASD. 越智啓太，藤田政博， 渡邉和美編：法と心理学の事典 —犯罪・裁判・矯正—．朝倉書店，東京，2011，pp577-579.
10) 中島聡美：PTSD の治療. 越智啓太，藤田政博， 渡邉和美編：法と心理学の事典 —犯罪・裁判・矯正—．朝倉書店，東京，2011，pp577-579.
11) 中島聡美：災害時のこころのケアについて．日本看護協会出版会編集部，：ルポ・そのとき看護はナース発東日大震災レポート．日本看護協会出版会，東京，2011，pp576-580.
12) 中島聡美：子どもの悲嘆のケア．藤森和美，前田正治編著：大災害と子どものストレス．子どもの心のケアに向けて．誠信書房，東京，88-91，2011.
13) 中島聡美：犯罪被害者支援．飛鳥井望編：最新医学別冊 新しい診断と治療の ABC70 心的外傷後ストレス障害（PTSD）．最新医学社，東京， pp50-59，2011.
14) 鈴木友理子： 4.1 概説—基本的視点． 五百旗頭真（代表）林敏彦（編） 第２章分野別課題 ４．こころのケア．災害対策全書 ３．復旧・復興. 公益財団法人ひょうご震災記念 21 世紀研究機構 災害対策全書編集企画委員会.ぎょうせい，東京，2011.5.30.
15) 鈴木友理子：災害後の調査と倫理．大災害と子どものストレス—子どものこころのケアに向けて．藤森和美，前田正治編著．誠信書房．東京，pp.105-107, 2011.10.
16) 鈴木友理子：第 4 章 各種イベント 自然災害（中長期）．「最新医学」別冊新しい診断と治療の ABC70 心的外傷後ストレス障害（PTSD）精神 7 編集 飛鳥井 望. 最新医学社, 大阪, 128-135, 2011.
17) 鈴木友理子：1-4-4 対策本部機能. 精神保健福祉白書 2012 年版 東日本大震災と新しい地域づくり．小特集：東日本大震災. 精神保健福祉白書編集委員会編集. 東京, p.29. 2011.
18) 鈴木友理子：災害に伴う精神医学的問題．今日の精神疾患治療指針．(編集)樋口輝彦，市川宏伸，神庭重信，朝田隆，中込和幸．医学書院，東京，2012.
19) 鈴木友理子：世界の精神保健医療改革の最近の動向．新版精神保健福祉養成セミナー２精神保健学—精神保健の課題と支援． (編集)新版精神保健福祉養成セミナー編集委員会．へるす出版，東京．2012.
20) 栗山健一：震災後の不眠症．新「名医」の最新治療 2012．朝日新聞社出版．pp124-127. 2012.
21) 伊藤正哉，樫村正美，堀越 勝：こころを癒すノート：トラウマの認知処理療法自習帳．創元社，大阪，2012.

(4) 研究報告書

1) 金 吉晴，加茂登志子，柳田多美：DV 被害母子家庭における母親の育児ストレスと認知特性に関する調査ー主として子どもの精神・行動面の問題との関連についてー調査研究報告書．平成 22 年度児童関連サービス調査研究等事業（研究代表者：加茂登志子），2011.
2) 金 吉晴，加茂登志子，小西聖子，中島聡美，下山晴彦，石丸径一郎，氏家由里，丹羽まどか，中山未知，小菅二三恵，廣幡小百合，堤亜美，佐合累：心的外傷後ストレス障害に対する持続エクスポージャー療法の無作為比較試験．厚生労働科学研究費補助金 障害対策総合研究事業（精神障害分野）大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態把握と介入手法の開発に関する研究 平成

22 年度総括・分担研究報告書（研究代表者　金 吉晴），pp5-14，2011.

3) 松岡 豊，西 大輔，中島聡美，金 吉晴：交通外傷後の精神健康に関するコホート研究．厚生労働科学研究費補助金障害対策総合研究事業（精神障害分野）大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態把握と介入手法の開発に関する研究　平成 22 年度総括・分担研究報告書（研究代表者　金 吉晴），pp71-79，2011.

4) 中島聡美，加茂登志子，小西聖子，中澤直子，金 吉晴：性暴力被害者への急性期心理ケアプログラムの構築に関する研究．厚生労働科学研究費補助金障害対策総合研究事業（精神障害分野）大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態把握と介入手法の開発に関する研究　平成 21 年度総括・分担研究報告書（研究代表者　金 吉晴），pp79-96，2011.

5) 鈴木友理子，深澤舞子，中島聡美，成澤知美，金 吉晴：災害精神保健医療マニュアル改訂版作成の取り組み．厚生労働科学研究費補助金障害対策総合研究事業（精神障害分野）大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態把握と介入手法の開発に関する研究　平成 22 年度総括・分担研究報告書（研究代表者　金 吉晴），pp97-131，2011.

6) 金 吉晴，加茂登志子，小西聖子，中島聡美，下山晴彦，石丸径一郎，氏家由里，丹羽まどか，中山未知，廣幡小百合，心的外傷後ストレス障害に対する持続エクスポージャー療法の無作為比較試験．厚生労働科学研究費補助金　障害対策総合研究事業（精神障害分野）大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態把握と介入手法の開発に関する研究　平成 20 年度―22 年度　総合研究報告書（研究代表者　金 吉晴），pp5-14，2011.

7) 松岡 豊，中川敦夫，中林哲夫：治験・臨床研究に関する教育研修プログラムの整備．厚生労働科学研究費補助金（医療技術実用化総合研究事業）「精神・神経・筋分野における治験・臨床研究の推進のための基盤整備に関する研究」　平成 23 年度分担研究報告書（研究代表者　中込和幸）

8) 松岡 豊，西 大輔，中島聡美，金 吉晴：交通外傷後の精神健康に関するコホート研究．厚生労働科学研究費補助金障害対策総合研究事業（精神障害分野）大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態把握と介入手法の開発に関する研究　平成 20 年度―22 年度　総合研究報告書（研究代表者　金 吉晴），pp95-106，2011.

9) 中島聡美，加茂登志子，小西聖子，中澤直子，金 吉晴：性暴力被害者への急性期心理ケアプログラムの構築に関する研究．厚生労働科学研究費補助金障害対策総合研究事業（精神障害分野）大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態把握と介入手法の開発に関する研究　平成 20 年度―22 年度　総合研究報告書（研究代表者　金 吉晴），pp107-120，2011.

10) 鈴木友理子，深澤舞子，中島聡美，成澤知美，金 吉晴：災害精神保健医療マニュアル改訂版作成の取り組み．厚生労働科学研究費補助金障害対策総合研究事業（精神障害分野）大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態把握と介入手法の開発に関する研究　平成 20 年度―22 年度　総合研究報告書（研究代表者　金 吉晴），pp131-164，2011.

11) 金 吉晴：トラウマ（複雑性悲嘆を含む）に対する認知行動療法の均霑化に関する研究．厚生労働科学研究費補助金　障害者対策総合研究事業（精神障害分野）精神療法の有効性の確立と普及に関する研究　平成 23 年度総括・分担研究報告書（研究代表者：大野　裕），pp40-54,2012.

12) 金 吉晴，大沼麻実：災害時の精神保健医療対応の課題について．厚生労働科学研究費補助金　健康安全・危機管理対策総合研究事業　健康危機発生時における地域健康安全に係る効果的な精神保健医療体制の構築に関する研究　平成 23 年度総括・分担研究報告書（研究代表者：金 吉晴），pp5-10.2012.

13) 金 吉晴，秋山 剛，大沼麻実：東日本大震災後の精神医療初期対応の概要．厚生労働科学研究費補助金　障害者対策総合研究事業（精神障害分野）大規模災害や犯罪被害等による精神疾患の実態把握と対応ガイドラインの作成・評価に関する研究　平成 23 年度総括・分担研究報告書（研究代表者：金 吉晴）pp5-12.2012.

14) 金 吉晴，大沼麻実：自然災害のメンタルヘルスに関する研修の効果について－予備的調査－．厚

生労働科学研究費補助金　障害者対策総合研究事業（精神障害分野）大規模災害や犯罪被害等による精神疾患の実態把握と対応ガイドラインの作成・評価に関する研究　平成 23 年度総括・分担研究報告書（研究代表者：金 吉晴）pp12-20.2012.

15) 加茂登志子，金 吉晴，伊藤史ヱ，丹羽まどか他：DV 被害母子に対する親子相互交流療法（Parent-Child Interaction Therapy: PCIT）の効果に関する研究－DV 被害母子フォローアップ研究との比較．厚生労働科学研究費補助金　障害者対策総合研究事業（精神障害分野）大規模災害や犯罪被害等による精神疾患の実態把握と対応ガイドラインの作成・評価に関する研究　平成 23 年度総括・分担研究報告書（研究代表者：金 吉晴）pp21-38,2012.

16) 中島聡美，加茂登志子，鈴木友理子，金 吉晴，成澤知美，淺野敬子，深澤舞子他：犯罪被害者の急性期心理ケアプログラムの構築に関する研究．厚生労働科学研究費補助金　障害者対策総合研究事業（精神障害分野）大規模災害や犯罪被害等による精神疾患の実態把握と対応ガイドラインの作成・評価に関する研究　平成 23 年度総括・分担研究報告書（研究代表者：金 吉晴）pp39-86,2012.

17) 鈴木友理子，深澤舞子，金 吉晴：心的外傷後ストレス障害のスクリーニングおよび症状評価のための自記式調査票の開発，尺度特性の検討．厚生労働科学研究費補助金　障害者対策総合研究事業（精神障害分野）大規模災害や犯罪被害等による精神疾患の実態把握と対応ガイドラインの作成・評価に関する研究　平成 23 年度総括・分担研究報告書（研究代表者：金 吉晴）pp87-92,2012.

18) 中島聡美：大規模災害時精神保健活動における被災地行政支援のあり方についての検討．厚生労働科学研究費補助金健康安全・危機管理対策総合研究事業．健康危機発生時における地域健康安全に係わる効果的な精神保健医療体制の構築に関する研究．平成 23 年度　総括・分担研究報告書（研究代表者　金 吉晴），pp35-40，2012.

19) 鈴木友理子，黒澤美枝他：災害精神保健に関する研修体制の構築および効果評価研究の予備的検討．厚生労働科学研究費補助金　健康安全・危機管理対策総合研究事業　健康危機発生時における地域健康安全に係る効果的な精神保健医療体制の構築に関する研究．平成 23 年度総括・分担研究報告書（研究代表者：金 吉晴），pp27-34, 2012.

20) 鈴木友理子，瀬戸屋雄太郎，秋山剛，後藤亮：災害時の国際機関等との連携と我が国の役割．厚生労働科学研究費補助金(障害保健福祉総合研究事業)．精神障害者への対応への国際比較に関する研究．平成 23 年度総括・分担研究報告書（主任研究者：中根 允文）,pp78-93, 2012.

(5) 翻訳

1) 松岡 豊：精神科臨床試験におけるデータ解析例．ロンドン大学精神医学研究所に学ぶ精神科臨床試験の実践（Brain S. Everitt, Simon Wessly 編，樋口輝彦・山田光彦監訳，中川敦夫・米本直裕訳），医学書院，東京，pp111-134，2011.

(6) その他

1) 金 吉晴：東日本大震災：安易に声かけせず，そっと寄り添う　遺族支える「悲嘆ケア」．毎日新聞夕刊，2011.4.16.

2) 金 吉晴：犯罪・災害被害者のための精神医療を支える~成人精神保健研究部・金 吉晴部長に聞く~．精研だより　第 7 号，2011.5.

3) 金 吉晴：“大震災後のメンタルヘルスを考える”．うつと不安の情報誌 D-Plus，臨時増刊号，pp2-6,2011.

4) 金 吉晴：東日本大震災と心のケアチームの診療レポート.精神医療　特集　東日本大震災とこころのケア.no.64:　138-148，2011.

5) 加藤 寛，鈴木友理子，金 吉晴：自然災害後の精神保健医療の対応について．トラウマティック・ストレス　特集　東日本大震災―1.　9(2), pp40-45, 2011.

6) 金 吉晴，北村秀明：東日本大震災の復興計画と中長期的支援．特集　東日本大震災の復興計画と

中長期的支援．精神神経学雑誌 114(3):209-210, 2012.
7) 松岡 豊：第 20 回国際心身医学総会に参加して．総合病院精神医学 22(3):263-265, 2010.
8) 松岡 豊：被災者ならびにそのご家族への対応．サイコオンコロジーニュースレター65 号．2011 年 5 月．
9) 大澤智子，中島聡美，村上典子，小西聖子：〔座談会〕東日本大震災における悲嘆反応と支援者ストレス　－3 ヶ月後の現状都これから．トラウマティック・ストレス 9 (2)，158-164，2011.
10) 中島聡美：PTSD とは何か．ストレスアンドヘルスケア Stress & Health Care (201): 3-5, 2011.
11) 中島聡美：記事作成協力：遺族の心身ケア　どう支援．日本経済新聞，2011.5.22
12) 鈴木友理子．メンタルヘルス・ファーストエイドプログラム．心と社会. 143:46-51, 2011
13) 鈴木友理子：災害後の心のケア．ストレスアンドヘルスケア Stress & Health Care (201):6-8, 2011.
14) 安村誠司，マイケル・R・ライシュ，鈴木友理子：第 60 回　東北公衆衛生学会：いま東北の公衆衛生に求められていること．福島医学雑誌 62(1): 1-6, 2012
15) 栗山健一：震災後の不眠症　知って得する！新名医の最新治療 vol.178．週刊朝日，2011.4.22.
16) 栗山健一，三島和夫，内山 真：原発・大震災サバイバルブック　Chapter 57　震災後の「不眠症」を長引かせないためには？．週刊朝日　臨時増刊 2011/5/25 号, p. 93, 2011.
17) 栗山健一：ヒトの恐怖出来事記憶の想起特性－PTSD 発症予防策としての睡眠強制剥奪の有効性の検討－，第 22 回精研研究報告会．精研だより(8)，pp04.2011.
18) 深澤舞子：国立精神・神経医療研究センター「東北地方太平洋沖地震メンタルヘルス情報サイト」の紹介．日本トラウマティック・ストレス学会誌 9: 148-151, 2011.

B．学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

1) Kim Y: Symposium tor depression in Neurological Disorders. Differential diagnosis of primary depression. Psychopharmacological treatment for depression. Hanyang University, Korea, 2011.6.26.
2) Kim Y: Early mental health care response to the tsunami disaster in Japan, 2011. 3rd World Congress of Asian Psychiatry 2011, Melbourne, Australia, 2011.8.1.
3) Kim Y: Dissociation and traumatic memory. The 6th International Conference of Neurons and Brain Disease, Toyama, 2011.8.5.
4) Kim Y: Japan Earthquake and IASC MHPSS Guidelines. DRAFT AGENDA Global Meeting Paris, 2011.11.22.
5) Kim Y: Prolonged psychological distress after nuclear disaster and its countermeasure: from a study of inhabitants in Nagasaki psychologically exposed to the atomic bomb explosion. 2011 University of Occupational and Environmental Health International Symposium. Fukuoka, Japan. 2011.11.9.
6) Kato H, Maeda M, Kamo T, Kim Y: Psychological support after major disaster in Japan: From Kobe and Tohoku experience. .International Society for Traumatic Stress Studies 27th Annual Meeting. Baltimore, Maryland USA. 2011.11.3.
7) Kim Y, Konishi T: Psychological effects of the atomic power plants accident in Fukushima. International Society for Traumatic Stress Studies 27th Annual Meeting. Baltimore, Maryland USA. 2011.11.3.
8) Matsuoka Y: Omega-3 fatty acids may deter posttraumatic stress disorder after accidental injury. Session 6 (Psychiatric Disease and Mechanisms). The 6th International Conference of Neurons and Brain Diseases. (Toyama) 2011.8.3-5.
9) Matsumura K, Yamakoshi T, Noguchi H, Matsuoka Y: Fish consumption and psychophysiological

activities during mental stress. The 34th Annual Meeting of the Japan Neuroscience Society -Neuroscience of the Mind-, Yokohama, 2011.9.14-17.

10) Matsuoka Y, Nishi D, Yonemoto N, Hamazaki K, Matsumura K, Hashimoto K, Hamazaki T: Can fish oil prevent posttraumatic stress disorder?: rationale and pilot study. 21th World Congress on Psychosomatic Medicine. Seoul, 2011.8.25-28.

11) Matsuoka Y: Secondary prevention of posttraumatic stress disorder with fish oil. 31st CMUH Anniversary International Symposium. Mind-Body Interface (II): New Concept and Promising Treatment, Plenary Lecture. Taichung, Taiwan, 2011.11.2.

12) Matsuoka Y: A lesson from conducting psychiatric clinical research in critical care medicine. Symposium "Needs and challenges in conducting clinical research in East Asia: Early career psychiatrists training forum V (Nakagawa A and Han C-S)". World Psychiatric Association Regional Meeting. (Kaohsiung, Taiwan) 2011.11.3-5.(シンポジウム)

13) Matsuoka Y: Omega-3 fatty acids as new hope for preventing posttraumatic distress. Symposium "Omega-3 fatty acids in psycho-immunology of anxiety and depression (Lin P-Y and Su K-P)". World Psychiatric Association Regional Meeting. (Kaohsiung, Taiwan) 2011.11.3-5. (シンポジウム)

14) Matsuoka Y: Omega-3 fatty acids as new hope for preventing posttraumatic distress. Young Investigator Symposium. International Conference on Affective Disorders: between clinical research and practice. (Tokyo) 2011.10.21-22. (シンポジウム)

15) Suzuki Y: Disaster response in Japan: From public mental health perspective. Royal Australian and New Zealand College of Psychiatrists 2011 Congress. RANZCP-JSPN symposium. Northern Territory, Australia, 2011.5.29-6.2.

16) Suzuki Y: Disaster response in Japan: From public mental health perspective. 15th World Congress of Psychiatry. Workshop. 18-22 September, 2011. Buenos Aires, Argentina.

17) Suzuki Y: Japanese response to the Great East Japan Earthquake and further preparedness. 2011 World Psychiatric Association Regional Meeting Symposium, Kaohsiung, Taiwan. 2011.11.3-5.

18) Suzuki Y: Psychological consequence of Nuclear Power Plant accident among clean-up workers. 2011 University of Occupational and Environmental Health International Symposium. Fukuoka, Japan. 2011.11.8-9.

19) 金 吉晴：大規模災害時のこころの支援—自然災害と放射線事故．第 107 回日本精神神経学会議事総会「東日本大震災に対するこころのケア支援と復興支援対策ワークショップ」，基調講演，東京，2011.5.21.

20) 金 吉晴：自然災害とトラウマ．「第 419 回広島精神神経学会」特別講演，広島，2011.7.2.

21) 金 吉晴：トラウマからの回復．第 19 回「脳の世紀」シンポジウム，NPO 脳の世紀推進会議，東京，2011.9.7.

22) 金 吉晴：東日本大震災後に求められるケア．大会企画シンポジウム 2．日本行動療法学会第 37 回大会・第 35 回研修会，東京，2011.11.27.

23) 金 吉晴：シンポジウム　東日本大震災の復興計画と中長期的支援　司会．第 107 回日本精神神経学会学術総会，東京，2011.10.26.

24) 伊藤正哉，中島聡美，金 吉晴：災害後の悲嘆反応とその心理的ケア：これまでの研究と実践．日本トラウマティック・ストレス学会第 10 回大会シンポジウム 8-1「災害による遺族のメンタルヘルスケア」，兵庫，2011.10.10.

25) 吉池卓也，栗山健一，本間元康，金 吉晴，西川徹：NMDA 受容体作動薬は覚醒時間帯における作働記憶容量増大に関わる神経可塑性を促進する．日本時間生物学会第 18 回学術大会，名古屋，

2011.11.24.

26) 松岡 豊：臨床疫学からみた私のサイコオンコロジー臨床研究．ワークショップ「サイコオンコロジー(8) サイコオンコロジーにおける研究の方法論：デザインから測定法まで」．日本心理学会第 75 回大会，東京，2011.9.15-17.

27) 松岡 豊，西 大輔：魚油によるレジリエンス向上の可能性．シンポジウム「レジリエンス―総合病院精神医学における新しい視点（座長：松岡 豊，西大輔）」第 24 回日本総合病院精神医学会総会．福岡，2011.11.25-26.（シンポジウム）

28) 西 大輔，松岡 豊：レジリエンスとは？総合病院における活用に向けて．シンポジウム「レジリエンス―総合病院精神医学における新しい視点（座長：松岡 豊，西大輔）」第 24 回日本総合病院精神医学会総会．福岡，2011.11.25-26.（シンポジウム）

29) 松岡 豊，西 大輔：魚油による PTSD 予防への挑戦．シンポジウム「食生活への介入で精神疾患を予防できるか？（座長：松岡 豊，浜崎景）」第 107 回日本精神神経学会総会，東京，2011.10.26-27.（シンポジウム）

30) 松岡 豊：精神科専門医の養成：臨床研究の教育研修法に関する取組（エビデンスと臨床）．シンポジウム「精神科専門医の養成を考える： 指導現場の取組と課題　-若手指導医の視点から-（座長：鹿島晴雄，中川敦夫）」第 107 回日本精神神経学会総会，東京，2011.10.26-27.（シンポジウム）

31) 中島聡美：日本の犯罪被害者支援の軌跡と今後の課題．国際犯罪学会第 16 回国際大会日本被害者学会シンポジウム，兵庫，2011.8.7.

32) 中島聡美：遺族の複雑性悲嘆に対する認知行動療法の実践．第 27 回日本ストレス学会学術大会シンポジウム　I　がん患者・家族のストレスケア，東京，2011.11.18.

33) 中島聡美：子どもの悲嘆とケア．第 8 回日本周産期メンタルヘルス研究会学術集会教育講演，東京，2011.12.3.

34) 鈴木友理子：災害精神保健の国際的動向と日本の経験．第 107 回日本精神神経学会学術総会「東日本大震災に対するこころのケア支援と復興支援対策ワークショップ」，こころのケアの今後の課題と復興支援，東京，2011.5.21.

35) 鈴木友理子：災害精神保健：概要とこれまでの取り組み．日本若手精神科医の会　災害精神医療ワークショップ，東京，2011.5.22.

36) 鈴木友理子：災害後のメンタルヘルス：危機から回復に向けて．第 60 回東北公衆衛生学会 特別講演，福島，2011.7.22.

37) 鈴木友理子：災害後のこころのケア：危機から回復に向けて．第 13 回東北児童青年精神医学会 教育講演，山形，2011.7.24.

38) 鈴木友理子：災害後のメンタルヘルス：役割分担と連携．常盤大学国際被害者学研究所第 6 回シンポジウム 被災者の心理・社会的回復を促進する．東京，2011.10.1.

39) 鈴木友理子：パブリック・メンタルヘルスの視点から：宮城県の対応を通じての考察．日本トラウマティック・ストレス学会 特別シンポジウム「東日本大震災後のこころのケアを考える」，神戸，2011.10.10.

40) 鈴木友理子：災害後の地域ケアの回復．日本精神障害者リハビリテーション学会 シンポジウム東日本大震災への中長期支援~地域ケアとリハビリテーションの視点から~，京都，2011.11.12.

41) 鈴木友理子：震災被害者への行政サービスのありかた．第 26 回日本総合病院精神医学会 シンポジウム「災害被災者の抱える問題と支援について」，福岡，2011.11.26.

42) 鈴木友理子：災害後のメンタルヘルス：中長期の課題と対応．第 47 回宮城県公衆衛生学会学術総会 特別講演，仙台市，2011.12.1.

43) 鈴木友理子：災害後のメンタルヘルス：中長期の課題．第 38 回山形県公衆衛生学会 特別講演　山形市，2012.3.7.

44) 栗山健一：睡眠中の脳活動が手続き学習に与える影響.第 50 回日本生体医工学会大会 オーガナイズ

ドセッション，東京，2011.4.30.

45) 栗山健一：大規模自然災害被災者への睡眠医療．シンポジウム【災害医療における睡眠問題】，日本睡眠学会第 36 回定期学術集会．京都．2011.10.15.

46) 栗山健一：PTSD の形成と悪化を防止するための睡眠医療．シンポジウム【睡眠医学と精神医療のリンケージによる効果的な治療プログラムの提案】．第 107 回日本精神神経学会学術総会，東京，2011.10.26.

47) 栗山健一：時間認知の生理的・病理的変動．シンポジウム【臨床時間生物学の現状と展望】．日本時間生物学会第 18 回学術大会，名古屋，2011.11.25.

48) 栗山健一：睡眠剥奪による PTSD 予防の可能性．シンポジウム(招待)　第 4 回日本不安障害学会学術大会，東京早稲田，2012.2.4.

(2) 一般演題

1) Fukasawa M, Suzuki Y, Kim Y, Komagata K, Matsuda H, Someya T: Social networks and its relationships with mental health one year after the Niigata chuetsu-oki earthquake. 13th IFPE International Congress, Kaohsiung, 2011.3.30-4.2.

2) Nishi D, Matsuoka Y, Usuki M, Kim Y: Posttraumatic growth, posttraumatic stress disorder and resilience of motor vehicle accident survivors. 21th World Congress on Psychosomatic Medicine. (Seoul) 2011.8.25-28.

3) Suzuki Y, Fukasawa M, Nakajima S, Kim Y: Comparison of experts' consensus on psychosocial care following disasters and major incidents: TENTS guideline and Japanese guideline. 15th World Congress of Psychiatry. Poster presentation. Buenos Aires, Argentina. 2011.9.18-22.

4) Kuriyama K. Effect of D-cycloserine and valproic acid on the extinction of reinstated fear-conditioned responses and habituation of fear conditioning. Poster presentation. 2011 International Summer Conference of Neurons and Brain Diseases. Toyama, 2011.8.3-5.

5) Yoshiike T, Kuriyama K, Honma M, Shimazaki M, Kim Y, Nishikawa T: NMDA receptor agonist facilitates sleep-independent synaptic plasticity associated with enhancement of working memory capacity. Poster Presentation. Worldsleep2011. Kyoto , 2011.10.19.

6) Honma M, Yoshiike T, Shimazaki M, Koyama S, Kimura M, Kim Y, Kuriyama K: Sleep extinguishes false perception acquired by learning of visual-tactile integration. Poster Presentation. Worldsleep2011. Kyoto, 2011.10.19.

7) Kodama M, Kawasaki N, Ishimura I, Hatori K, Asano K, Ito M: Culturally sensitive positive psychological intervention among Japanese college students (1): An overview of the program and its effects on well-being. 6th World Congress for Psychotherapy, 342, Sydney, August 24-28, 2011.

8) Kawasaki N, Ishimura I, Hatori K, Asano K, Ito M, Kodama M: Culturally sensitive positive psychological intervention among Japanese college students (2): The power of Japanese calligraphy, "sho". 6th World Congress for Psychotherapy, 342, Sydney, August 24-28, 2011.

9) Asano K, Ito M, Kodama M, Kawasaki, N, Ishimura I, Hatori K: Culturally sensitive positive psychological intervention among Japanese college students (3): Awareness on and reframing of self-talk about one's weakness. 6th World Congress for Psychotherapy, 342, Sydney, August 24-28, 2011.

10) Ishimura I, Hatori K, Asano K, Ito M, Kodama M, Kawasaki N: Culturally sensitive positive psychological intervention among Japanese college students (4): Discovering the seeds of human strength in one's adversity. 6th World Congress for Psychotherapy, 342, Sydney, August 24-28, 2011.

11) Hatori K, Asano K, Ito M, Kodama M, Kawasaki N, Ishimura I: Culturally sensitive positive

psychological intervention among Japanese college students (5): Thankfulness brings the awareness of being connected to others. 6th World Congress for Psychotherapy, 342, Sydney, August 24-28, 2011.

12) Nakajima S, Narisawa T, Asano K, Suzuki Y, Fukasawa M, Kim Y：Development of early psychosocial care manual for crime victims. International Society for Traumatic Stress Studies 27th Annual Meeting, Baltimore, Maryland USA, 2011. 11. 5.

13) Ito M, Nakajima S, Konishi T, Shirai A, Kim Y: Brief Grief Questionnaire: validation for a Japanese sample. International Society for Traumatic Stress Studies 27th Annual Meeting, Baltimore, Maryland USA, 2011. 11. 3.

14) 永岑光恵，中島聡美，白井明美：犯罪被害者遺族の精神症状の回復およびコルチゾール分泌変化に及ぼすレジリエンスの異なる影響．日本心理学会第 75 回大会，東京，2011.9.17.

15) 深澤舞子，鈴木友理子，駒形規左枝，松田ひろし，染矢俊幸：中越沖地震後 3 年間の地域住民の精神健康．第 31 回日本社会精神医学会　示説，東京，2012.3.15-16.

(3) 研究報告会

1) 栗山健一，曽雌崇弘，金 吉晴：ヒトの恐怖出来事記憶の想起特性－PTSD 発症予防策としての睡眠強制剥奪の有効性の検討－．国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所　平成 22 年度研究報告会 (第 22 回)，東京，2011. 5. 23.

2) 伊藤正哉，中島聡美，藤澤大介，宮下光令，金 吉晴：日本版複雑性悲嘆スクリーニング尺度の信頼性と妥当性：一般成人を対象とした検討．国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所　平成 22 年度研究報告会，東京，2011.5.23.

3) 金 吉晴：エクスポージャー療法から見た PTSD．北海道トラウマ・解離研究会，ホテルクレスト札幌，北海道．2011.6.25.

4) 金 吉晴：健康危機発生時における地域健康安全に係る効果的な精神保健医療体制の構築に関する研究．セッション I　地域健康危機管理の基盤形成に関する研究分野，健康安全・危機管理対策総合研究事業成果発表会，国立保健医療科学院，埼玉，2012.2.24.

5) 鈴木友理子：災害時の国際的支援のあり方の検討．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業「精神障害への対応への国際比較に関する研究」研究班会議，東京，2012.1.28.

(4) その他

1) Kuriyama K: World sleep federation Early Career Award 2011. Kyoto,2011.10.20.

2) 栗山健一：第 9 回日本時間生物学会学術奨励賞　臨床・社会部門．(AWARD)

C．講演

1) Suzuki Y: Stress-related disorders: A perspective from East Asia. Meeting of the Working Group on Stress-Related Disorders. International Advisory Group for the Revision of ICD-10 Mental and Behavioral Disorders. Geneva, Switzerland, 2011.7.14-15.

2) Suzuki Y: Cross-sectional study. Capacity building toward evidence-based medicine among health care professionals. JICA Partnership program. University of Medicine and Pharmacy- Ho Chi Minh City. Ho Chi Minh City, Vietnam, 2011.8.15-19.

3) Suzuki Y: Data management and workflow. Capacity building toward evidence-based medicine among health care professionals. JICA Partnership program. University of Medicine and Pharmacy- Ho Chi Minh City. Ho Chi Minh City, Vietnam, 2011.8.15-19.

4) Suzuki Y: Postnatal depression. Staff training for parental support program. Nhan Dan Gia Dinh Hospital. August 17, 2011, Ho Chi Minh City, Vietnam, 2011.8.17.

5) Suzuki Y： Mental health community's response to the 3.11 disaster and future preparedness. A Panel Discussion on Mental Health following the March 11th, 2011 Disaster, The Embassy of Canada, Tokyo, 2011.12.8.
6) Suzuki Y, Jones L , Wessely S: Acute stress reaction. The 2nd meeting of the working group on the Classification of Stress-Related Disorders. International Advisory Group for the Revision of ICD-10 Mental and Behavioral Disorders. Zurich, Switzerland. 2012.1.19-20.
7) 金 吉晴：災害後の心のケアと回復力：災害のもたらす心への影響とその対応．平成 23 年度第 1 回メディアカンファレンス．東京，2011.4.27.
8) 金 吉晴：人間発達学基礎演習 I 心理学に関する講演．和洋女子大学，千葉，2011.6.8
9) 金 吉晴：PTSD について．海精会病実研セミナー，東京，2011.6.24.
10) 金 吉晴：日常診療における PTSD．第 7 回精神疾患セミナー，東京，2011.6.30.
11) 金 吉晴：震災後のこころのケアを考える．東日本大震災こころのケア支援プロジェクト，ファイザー，岩手，2011.7.27.
12) 金 吉晴：健康危機管理におけるメンタルヘルス対策について．平成 23 年度地域保健総合推進事業「地域保健推進戦略会議（九州ブロック）」，財団法人日本公衆衛生協会，宮崎，2011.8.26.
13) 金 吉晴：大震災と心のケア．平成 23 年度秋田県精神保健福祉協会研修会，秋田県精神保健福祉協会，秋田，2011.9.1.
14) 金 吉晴：トラウマからの回復.第 19 回脳の世紀シンポジウム,NPO 法人脳の世紀推進会議，東京,2011.9.7.
15) 金 吉晴：うつ病の認知行動療法と薬物療法．第 11 回日本認知療法学会，大阪，2011.10.1.
16) 金 吉晴：災害とこころのケアについて．「災害時の地域精神保健活動とメンタルヘルス」講演会．和歌山県御坊保健所，和歌山，2011.10.20.
17) 金 吉晴：社内講演会「災害後のメンタルケア（PTSD）－製薬企業が貢献出来る情報提供活動とは－」．ファイザー㈱，東京，2011.12.1.
18) 金 吉晴：臨床診断・スクリーニングの方法．兵庫県こころのケアセンター，神戸，2011.12.6.
19) 金 吉晴：PTSD の治療法と介入技法（総論）．兵庫県こころのケアセンター，神戸，2011.12.6.
20) 金 吉晴：災害時における心のケア．鳥取県精神保健福祉協会，鳥取，2011.12.8.
21) 金 吉晴：トラウマと悲嘆について．みやぎ心のケアセンター，宮城，2011.12.14-15.
22) 金 吉晴：災害時のこころのケア～いま、一人ひとりができること～．群馬県こころの健康センター，群馬，2012.1.22.
23) 金 吉晴：自然災害と精神医療対応：東日本大震災から．塩野義製薬／日本イーライリリー，東京，2012.1.27.
24) 金 吉晴：外傷後ストレス障害の治療．日本不安障害学会市民公開講座，東京，2012.2.5.
25) 金 吉晴：東日本大震災と精神保医療対応．第 16 回女性精神科医による女性のメンタルヘルスを考える会，東京，2012.2.9.
26) 松岡 豊：What is PTSD? 国立精神・神経医療研究センター病院平成 23 年度看護の日講演，東京，2011.5.16.
27) 松岡 豊：魚嫌いは心の健康に疎い？．武蔵野大学平成 23 年度前期生涯学習講座．三鷹．2011.7.8.
28) 中島聡美：大切な人を失った悲しみに向き合う －悲嘆の理解とケア―．常磐大学心理臨床センター主催公開講演会，常磐大学心理臨床センター，茨城，2011.7.24.
29) 中島聡美：性暴力の被害者のこころの支援．性暴力禁止法を作ろう、全国縦断シンポジウム in 名古屋，愛知，2011.12.10.
30) 中島聡美：職域における PTSD．第 273 回 関東産業健康管理研究会，東京，2012.1.9.
31) 中島聡美：犯罪被害者の心理と支援．大阪被害者支援アドボカシーセンター主催被害者支援セミナー，大阪，2012.3.16.

32) 鈴木友理子：こころに配慮した災害支援．東北関東大震災被災者支援に関する講習会．日本心身医学会関東甲信越支部．東京，2011.4.24.
33) 鈴木友理子：災害後の心のケアと回復力：これまでの事例と取り組み．平成 23 年度第 1 回メディアカンファレンス．東京，2011.4.27.
34) 鈴木友理子：災害後のこころのケアについて．塩釜市管理職員の健康管理講演会．宮城県，2011.4.28.
35) 鈴木友理子:こころに配慮した災害支援．東北関東大震災被災者支援講習会．日本心身医学会関東甲信越支部．東京, 2011.5.8.
36) 鈴木友理子, 深澤舞子:柏崎市、出雲崎町、刈羽村の調査報告．中越沖地震被災者のこころと身体の健康調査報告会, 新潟, 2011.5.10.
37) 鈴木友理子：被災地の対応：危機から回復に向けて．東日本大震災、フクシマとメンタルヘルス．メンタルヘルスケア協議会講演，東京，2011.6.19.
38) 鈴木友理子：災害後のこころのケア．東北福祉大学メンタルヘルスプロモーション事業公開フォーラム．宮城，2011.6.25.
39) 鈴木友理子：主観的評価の測定法. TMC 臨床研究入門講座・ワークショップ TMC 入門講座．東京，2011.6.10.
40) 鈴木友理子：原子力災害とメンタルヘルス．日本精神神経学会　原発事故ストレスー支援者からの情報収集プロジェクト　スタッフ研修会，東京，2011.8.27.
41) 鈴木友理子：災害復興期における精神保健福祉活動の留意点について．震災復興期における精神医療保健福祉活動に関するワークショップ，岩手，2011.9.14.
42) 鈴木友理子，大塚耕太郎：メンタルヘルス・ファーストエイド．相模原市精神保健福祉センター専門研修，神奈川，2011.9.2.
43) 鈴木友理子：災害時のこころのケア：原発事故をめぐって．福島市育児支援研修会．福島，2011.11.21.
44) 鈴木友理子：災害後のこころと身体の健康調査．長期的な視点に立った健康調査のあり方．「平成 23 年度 地域自殺対策研修会：災害時のメンタルヘルス対策」宮城県精神保健福祉センター，宮城，2011.11.22.
45) 鈴木友理子：災害後のメンタルヘルス：危機から回復に向けて．精神保健科学研修会(平成 23 年度特別講義)　山形県精神保健福祉センター，山形，2011.12.2.
46) 鈴木友理子：災害精神保健医療マニュアルの開発について．新潟 PTSD 対策専門研修会アドバンスコース，新潟，2011.12.7.
47) 鈴木友理子：東日本大震災後のメンタルヘルス~中長期の課題．東日本大震災後のメンタルヘルス．特例民法法人　青少年健康センター，東京，2011.12.18.
48) 鈴木友理子，深澤舞子：新潟県中越沖地震　被災者こころと身体の健康調査 3 年間の比較．中越沖地震支援従事者検討会，新潟，2012.3.2.

D．学会活動

(1) 学会役員

1) Kim Y: World Psychiatric Association, Committee of psychopathology.
2) 金 吉晴：日本トラウマティック・ストレス学会，常任理事.
3) 金 吉晴：日本精神神経学会，ガイドライン委員.
4) 金 吉晴：自殺予防学会，理事.
5) 中島聡美：日本トラウマティック・ストレス学会，理事．被害者支援委員会委員長，震災支援員会委員
6) 中島聡美：日本被害者学会，理事．企画委員
7) 中島聡美：日本精神・神経学会災害対策委員会委員，災害対策本部委員

8) 中島聡美：日本学術会議連携委員
9) Suzuki Y: World Health Organization, Working group on the Classification of Stress-Related Disorders. International Advisory Group for the Revision of ICD-10 Mental and Behavioral Disorders.
10) 鈴木友理子：日本精神神経学会，アンチスティグマ委員.
11) 鈴木友理子：日本トラウマティック・ストレス学会，理事.
12) 栗山健一：日本時間生物学会，評議員.

(2) 座長

1) Kuriyama K,Sasaki S: Integrative understandings between basic and clinical findings of sleep dependent learning. Plenary Symposium. Worldsleep2011,Kyoto,201110.17.
2) 金 吉晴：東日本大震災において日本トラウマティック・ストレス学会が果たすべき役割について. 第10回日本トラウマティックストレス学会，兵庫，2011.10.10.
3) 松岡 豊：シンポジウム「食生活への介入で精神疾患を予防できるか？」第107回日本精神神経学会総会, 東京, 2011.10.26-27.
4) 松岡 豊：特別講演「栄養素及び食パターンと抑うつに関する職域江井紀学研究（溝上哲也・南里明子)」，第2回精神栄養研究会, 東京, 2011.10.29.
5) 松岡 豊：シンポジウム「レジリエンス―総合病院精神医学における新しい視点」第24回日本総合病院精神医学会総会．福岡，2011.11.25-26.
6) 中島聡美：日本トラウマティック・ストレス学会第10回大会シンポジウム8-1「災害による遺族のメンタルヘルスケア」， 兵庫，2011.10.10.
7) 中島聡美：特別プログラム「『関係性から見た』子ども虐待」座長，日本子ども虐待防止学会第17回いばらき大会，茨城，2011.12.2.
8) 鈴木友理子：東日本大震災のメンタルヘルスケアを振り返る：岩手県の経験．第31回日本社会精神医学会　シンポジウム（座長)，東京，2012.3.15-16.
9) 栗山健一，平出敦：【災害医療における睡眠問題】．シンポジウム　日本睡眠学会第36回定期学術集会，京都，2011.10.15.
10) 栗山健一：【睡眠と記憶】．NCNP国際セミナー，東京，2011.10.24.
11) 三島和夫，栗山健一：【睡眠医学と精神医療のリンケージによる効果的な治療プログラムの提案】．シンポジウム　第107回日本精神神経学会学術総会，東京，2011.10.26

(3) 編集委員等

1) Kim Y: Cognitive Neuropsychiatry, editorial board.
2) Kim Y: Psychopathology, editorial board.
3) Kim Y: Psychiatry and Clinical Neuroscience, field editor.
4) 金 吉晴：日本トラウマティック・ストレス学会，編集委員長.
5) 金 吉晴：日本精神神経学会，編集委員.
6) 松岡 豊：日本総合病院精神医学会学会誌「総合病院精神医学」編集副委員長.
7) 松岡 豊：日本サイコオンコロジー学会，ニューズレター編集委員.
8) 栗山健一：日本時間生物学会，学会誌　編集委員

E．研修

(1) 研修企画

1) 金 吉晴：平成23年度　東日本大震災トラウマ対策技能研修，国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所，東京，2011.6.22.

2)　金 吉晴：平成 23 年度「こころの健康づくり対策」研修会，トラウマ対策基本技能研修．東京，2011.12.20-21.
3)　金 吉晴：平成 23 年度「こころの健康づくり対策」研修会，自然災害等精神医療対応研修（医療従事者向け）．東京，2012.2.6-7.
4)　金 吉晴：東日本大震災心のケア活動に係る意見交換会．災害時こころの情報支援センター，東京，2012.3.7.
5)　中島聡美：第 6 回犯罪被害者メンタルケア研修. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所，東京，2012.1.16.-18.

(2) 研修会講師

1)　金 吉晴：トラウマ反応総論、支援者ストレス．平成 23 年度　東日本大震災トラウマ対策技能研修，国立精神・線形医療研究センター精神保健研究所，東京，2011.6.22.
2)　金 吉晴：災害時こころのケアに関するかかりつけ医等研修会，岩手県精神保健福祉センター，岩手，2011.6.23.
3)　金 吉晴：災害時における心のケアについて．災害時の保健活動研修会，鹿児島県精神保健福祉センター，鹿児島，2011.7.8.
4)　金 吉晴：うつの認知行動療法．平成 23 年度精神保健福祉研修（前期），東京都立精神保健福祉センター，東京，2011.7.14.
5)　金 吉晴：PTSD の概念と治療，災害時の支援．平成 23 年度「心的外傷後ストレス障害（PTSD）の理解」，東京都立中部総合精神保健福祉センター，東京，2011.7.20.
6)　金 吉晴：震災後の自殺対策.平成 23 年度市町村自殺対策主幹課長・担当者研修会，福島県県北保険福祉事務所，福島，2011.9.29.
7)　金 吉晴，小林由季：PTSD の持続エクスポージャー法.PTSD 認知行動療法基本研修．(独)国立精神・神経医療研究センター　認知行動療法センター，東京，2011.10.5-10.6.
8)　金 吉晴：CAPS 講習会．みやぎ心のケアセンター，宮城，2011.12.15.
9)　金 吉晴：トラウマの概念．トラウマ対策基本技能研修，東京，2011.12.20.
10)　金 吉晴：PTSD の診断と治療．トラウマ対策基本技能研修，東京，2011.12.21.
11)　金 吉晴：PTSD の治療．第 6 回犯罪被害者メンタルケア研修，東京，2012.1.18.
12)　金 吉晴：精神保健．平成 23 年度短期検収健康危機管理研修（実務編第 2 回），埼玉，2012.2.3.
13)　金 吉晴：自然災害時のメンタルケアの基本方針．自然災害等精神医療対応研修（医療従事者向け），東京，2012.2.6.
14)　金 吉晴，鈴木友理子：基本方針と国際ガイドライン．自然災害等精神医療対応研修（行政職員向け）．(独)国立精神・神経医療研究センター，東京，2012.2.7.
15)　松岡 豊：研究倫理の歴史と基本原則．国立精神・神経センター2011 年度臨床研究研修制度 入門講座・倫理講座ワークショップ，東京，2011.6.9.
16)　中島聡美：災害後のこころのケア．いのちの電話　東日本大震災フリーダイヤル相談事業研修．いのちの電話，東京，2011.4.2.
17)　中島聡美：東日本大震災　中長期のメンタルヘルスと支援者のストレスケア．岩手県精神保健福祉センター内部研修，岩手県精神保健福祉センター，岩手，2011.4.16.
18)　中島聡美：想像エクスポージャー法．第 8 回 Prolonged Exposure Therapy 講習会，武蔵野大学，東京，2011.4.30.
19)　中島聡美：突然の喪失による悲嘆への対応．東北関東大震災被災者支援に関する講習会，日本心身学会関東甲信越支部，東京，2011.5.8.
20)　中島聡美：複雑性悲嘆の概念と治療．2011 年春秋上智大学グリーフケア講座，上智大学日本グリーフケア研究所，東京，2011.5.12.

21) 中島聡美：災害時に係わる中長期の心のケアの留意点．一関地域精神保健福祉研修会，一関保健所，岩手，2011.5.26.
22) 中島聡美：中長期におけるこころのケアの留意点について．災害時こころのケア研修会，岩手県精神保健福祉センター，岩手，2011.5.29.
23) 中島聡美：災害とこころのケア，平成 23 年度専門講座，茨城県精神保健福祉センター，茨城，2011.5.30.
24) 中島聡美：被害者の心理・対応および援助者の心理について‥代理受傷．平成 23 年度ストーカー・配偶者暴力専科，関東管区警察学校，東京，2011.5.31.
25) 中島聡美：悲嘆の概念とケア．岩手県臨床心理士会研修，岩手県臨床心理士会，岩手，2011.5.28.
26) 中島聡美：悲嘆と喪失の理解とケア．平成 23 年度東日本大震災トラウマ対策技能研修，国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所，東京，2011.6.22.
27) 中島聡美：複雑性悲嘆の概念と治療．常磐大学心理臨床センター公開研修，常磐大学心理臨床センター，茨城，2011.7.24.
28) 中島聡美：悲嘆と喪失の理解とケア．山田町保健師，三陸病院医療関係者，大船渡市保健師，陸前高田市保健師・心のケアチーム， 岩手，2011.7.27.－28.
29) 中島聡美：犯罪被害者および遺族の心理的ケア．平成 23 年被害者カウンセリング技術（上級）専科，絵警察庁，東京，2011.8.3.
30) 中島聡美：災害と子どもの心．思春期心の健康セミナー，茨城県精神保健福祉センター，茨城，2011.8.29.
31) 中島聡美：PTSD の病態と治療について．第 13 期被害者支援活動員養成講座，いばらき被害者支援センター，茨城，2011.9.9.
32) 中島聡美：被害者の心理とメンタルヘルス対策．平成 23 年度地域自殺対策研修会，宮城県精神保健福祉センター，宮城，2011.9.21.
33) 中島聡美：PTSD について．被害者支援都民センター自助グループ研修会， 被害者支援都民センター，東京，2011.10.4.
34) 中島聡美：犯罪被害者遺族の悲嘆について．平成 25 年度自助グループ運営・連絡会議，内閣府，東京，2011.10.25.
35) 中島聡美：性暴力被害者の心理と支援．いばらき被害者支援センター被害者支援活動員養成講座，いばらき被害者支援センター，茨城，2011.10.14.
36) 中島聡美：トラウマと PTSD 概念．平成 23 度トラウマ技能研修プログラム，岩手県精神保健福祉センター，岩手，2011.11.20.
37) 中島聡美：犯罪被害者の心理と支援． 平成 23 年度第 2 回全国被害者支援ネットワーク北海道・東北ブロック研修会，全国被害者支援ネットワーク・福島被害者支援センター， 福島，2011.12.5.
38) 中島聡美：震災の遺族ケア．JICA/兵庫県こころのケアセンター主催・中国四川大地震復興支援こころのケア人材育成プロジェクト研修，兵庫，2011.12.9.
39) 中島聡美：PTSD の認知行動療法　－長時間曝露療法を中心に－．平成 23 度トラウマ技能研修プログラム，岩手県精神保健福祉センター，岩手，2012.1.22.
40) 中島聡美：災害による悲嘆と喪失．平成 23 年度 「こころの健康づくり対策」研修会自然災害等精神医療対応研修，東京，2012.2.6.
41) 中島聡美：喪失と悲嘆の理解とケア．埼玉県精神保健福祉センター等主催平成 23 年度精神保健福祉専門研修Ⅱ，埼玉，2012.2.10.
42) 中島聡美：悲嘆とケア．平成 23 度トラウマ技能研修プログラム，岩手県精神保健福祉センター，岩手，2012.2.19.
43) 中島聡美：うつ病について．被害者支援都民センター自助グループ研修会， 被害者支援都民センター，東京，2012.3.14.

44) 鈴木友理子：災害時のこころのケアの考え方：IASC ガイドラインの紹介．東日本大震災における IASC ガイドラインに基づいた心理支援に関するワークショップ. 2011.6.11. 東京
45) 鈴木友理子：災害時の精神保健の諸問題．平成 23 年度短期研修　健康危機管理研修．国立保健医療科学院，埼玉，2011.10.7.
46) 鈴木友理子：災害時のストレス：被災者・支援者への対応．災害時の保健活動．東京都特別区職員研修所平成 23 年度専門研修，東京，2011.10.12.
47) 鈴木友理子：メンタルヘルス・ファーストエイド研修: 不安障害．　相模原市精神保健福祉センター教育研修事業（専門研修），神奈川，2011.10.14.
48) 鈴木友理子：指導者の心構え．メンタルヘルス・ファーストエイド指導者養成研修．岩手県精神保健福祉センター，岩手，2011.11.23.
49) 鈴木友理子：不安障害、トラウマ対応．メンタルヘルス・ファーストエイド指導者養成研修．岩手県精神保健福祉センター，岩手，2011.11.23.
50) 鈴木友理子：うつ・自殺の初期対応ゲートキーパー養成のために：メンタルヘルス・ファーストエイド（ゲートキーパー養成研修用テキスト）を用いて．平成 23 年度リスナー育成指導者研修．愛知県精神保健福祉センター．愛知，2012.1.27.
51) 鈴木友理子：職員健康調査を踏まえた管理監督者の役割とメンタルヘルス対策．宮城県管理監督者メンタルヘルス研修会，宮城，2012.1.31.
52) 鈴木友理子：災害時のメンタルヘルス．平成 23 年度　精神保健福祉担当者研修（専門）．神奈川県精神保健福祉センター，神奈川，2012.2.16.
53) 鈴木友理子：被災者とのコミュニケーションにおける留意事項．平成 23 年度専門研修 緊急災害対策派遣隊（TEC-FORCE)研修．国土交通省国土交通大学校，東京，2012.2.23.

F．その他

1) 金 吉晴：国立精神・神経医療研究センターHP「東北地方太平洋沖地震メンタルヘルス情報サイト」開設，2011.3.14.
2) 金 吉晴：震災後メンタルヘルス座談会（東日本大震災後のメンタルヘルスの現状と対策）．ファイザー㈱，宮城，2011.10.16.
3) 金 吉晴：被災者のこころのケア連携会議．内閣府（防災担当），東京，2011.12.21.
4) 金 吉晴：災害医療と IT　対談「遠隔医療とメンタルケア」．㈱ライフメディコム，東京，2012.3.1.
5) 鈴木友理子：被災者の孤立防止と心のケアに関する有識者会議．内閣官房．東日本大震災復興対策本部．東京，2011.12.27.

7．精神薬理研究部

Ⅰ．研究部の概要

精神薬理研究部では，当センター中期目標における位置づけを明確化し研究を進めている．具体的には，わが国において重要な政策課題となっているうつ病と自殺予防に焦点を当て，精神薬理学をバックボーンとする研究手法を用い，政策立案に必須となる臨床疫学研究を実施するとともに，精神神経疾患の診断・評価法、治療介入法の研究開発を行っている．研究成果は，患者，健常成人，実験動物，培養細胞等を対象とした生物学的研究から得られた知見をベッドサイド，ひいては日常臨床へと相互にトランスレーションするための基盤となる．

精神薬理研究部には精神薬理研究室と気分障害研究室の 2 室が所属している．平成 23 年度の常勤研究員は部長の山田光彦と精神薬理研究室長の斎藤顕宜の 2 名であり，気分障害研究室は稲垣正俊（自殺予防総合対策センター適応障害研究室長）が併任した．また，TMC 情報管理･解析部生物統計解析室の米本直裕室長（当部併任），自殺予防総合対策センター適応障害研究室の大槻露華研究員，小高真美研究員（7 月より）と密接に連携し研究を進めた．流動研究員は，岩井孝志（9 月まで），橋本富男の 2 名，科研費研究員は，山田美佐，外来研究員は，小高真美（精神・神経科学振興財団 6 月まで）であった．客員研究員は，岡 淳一郎（東京理科大学薬学部薬理学研究室教授），長田賢一（聖マリアンナ医科大学神経精神科学教室講師），亀井淳三（星薬科大学薬物治療学教室教授），神庭重信（九州大学大学院医学研究院精神病態医学教授），白川修一郎（睡眠評価研究機構代表者），高原 円（福島大学共生システム理工学類准教授），林 直樹（都立松沢病院精神科部長），古川壽亮（京都大学大学院医学研究科教授）であった．研究生は，遠藤 香，神垣有美，杉山 梓，高橋 弘，中井亜弓，西岡玄太郎，濱田幸恵，廣瀬倫孝，牧野祐哉，宮田茂雄，渡辺恭江，実習生は，大橋正誠であった．科研費研究助手は，櫻井恭子，松谷真由美，村松浩美であった．

Ⅱ．研究活動

1) 精神薬理研究室による基盤的創薬研究プロジェクト
グルタミン酸仮説，デルタ受容体仮説による病態モデル研究，行動薬理評価のバッテリーの開発と非臨床試験への応用，新規抗うつ薬シーズの探索研究等を実施した．（山田光彦，斎藤顕宜，山田美佐，岩井孝志，橋本富男，杉山梓，牧野祐哉，大橋雅誠）

2) 気分障害研究室による臨床研究プロジェクト
一般診療科におけるうつ病治療モデルの確立のための研究（山田光彦，稲垣正俊，斎藤顕宜，米本直裕，小高真美），うつ病の最適薬物治療戦略確立のための大型無作為化比較試験（2,000 症例規模の実践的多施設共同無作為化比較試験：SUN☺D）（山田光彦，稲垣正俊，米本直裕），うつ病の難治化を克服するための研究（山田光彦，稲垣正俊，斎藤顕宜）等を実施した．

3) J-MISP group による自殺予防研究プロジェクト
複合的自殺対策プログラムの自殺企図予防効果に関する地域介入研究（212 万人規模の多施設共同非無作為化地域介入比較研究：NOCOMIT-J），自殺企図の再発防止に対する複合的ケースマネージメントの効果（914 名の自殺企図者を対象の多施設共同無作為化比較試験：ACTION-J），ソーシャルワーカーに必要なスキルと研修プログラム研究：態度尺度研究等を実施した．（山田光彦，稲垣正俊，米本直裕，小高真美）

4) JGIDA group によるゲノム医学を活用した精神疾患に対する個別化治療法の開発
薬剤に対する反応性・副作用に関連した遺伝子多型を同定し、精神疾患医療における個別化医療の実現，画期的治療薬開発そして発症脆弱性遺伝子解明を目指す研究をおこなった．（山田光彦）

Ⅲ．社会的活動に関する評価

1) 市民社会に対する一般的な貢献

・ 市民講座，保健所，地方自治体等における講演会，マスメディア等にて普及啓発（山田光彦，稲垣正俊，小高真美）

・　第 1 回町田市行政課題講演会「ゲートキーパー養成講座～ひとりで抱えないために」町田市保健所，東京，2011. 6.30.
・　第 2 回町田市行政課題講演会「ゲートキーパー養成講座～ひとりで抱えないために」町田市保健所，東京，2011.10.24.

2)　専門教育面における貢献

・　日本精神神経薬理学会認定医・指導医・治験登録医，日本臨床薬理学会認定医として、昭和大学，星薬科大学において精神医学の卒前卒後教育活動を実施．（山田光彦）
・　東京理科大学において精神薬理学の卒前卒後教育活動を実施．（斎藤顕宜）
・　ルーテル大学において精神保健の卒前卒後教育活動を実施．（小高真美）

3)　保健医療行政・政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

・　自殺予防総合対策センターと連携し内閣府及び厚労省の事業に貢献（山田光彦，稲垣正俊）

Ⅳ．研究業績

Ａ．刊行物

（1）原著論文

1)　Takahashi K, Murasawa H, Yamaguchi K, Yamada M, Nakatani A, Yoshida M, Iwai T, Inagaki M, Yamada M, Saitoh A : Riluzole rapidly attenuates hyperemotional responses in olfactory bulbectomized rats, an animal model of depression. Behav Brain Res 216 : 46-52, 2011.

2)　Kishi T, Fukuo Y, Okochi T, kitajima T, Kawshima K, Naitoh H, Ujike H, Inada T, Yamada M, Uchimura N, Sora I, Iyo M, Ozaki N, Iwata N : Serotonin 6 receptor gene is associated with methamphetamine-induced psychosis in a Japanese population. Drug Alchol Depend 113：1-7, 2011.

3)　Kishi T, Kitajima T, Kawashima K, Okochi T, Yamanouchi Y, Kinoshita Y, Ujiike H, Inada T, Yamada M, Uchimura N, Sora I, Iyo M, Ozaki N, Iwata N：Association Analysis of Nuclear Receptor Rev-erb Alpha Gene (NR1D1) and Japanese Methamphetamine dependence.Curr Neuropharmacol 9：129-132, 2011.

4)　Kishi T, Kitajima T, Tsunoka T, Okumura T, Kawashima K, Okochi T, Yamanouchi Y, Kinoshita Y, Ujike H, Inada T, Yamada M, Uchimura N, Sora I, Iyo M, Ozaki N, Iwata N：Lack of association between prokineticin 2 gene and Japanese methamphetamine dependence. Curr Neuropharmacol 9：133-136, 2011.

5)　Kobayashi H, Ujike H, Iwata N, Inada T,Yamada M, Sekine Y, Uchimura N, Iyo M, Ozaki N, Itokawa M, Sora I ：Association analysis of the adenosine A1 receptor gene polymorphisms in patients with methamphetamine dependence / psychosis. Curr Neuropharmacol 9：137-142, 2011.

6)　Okochi T, Kishi T, Ikeda M, Kitajima T, Kinoshita Y, Kawashima K, Okumura T, Tsunoka T, Fukuo Y, Inada T, Yamada M, Uchimura N, Iyo M, Sora I, Ozaki N, Ujike H, Iwata N：Genetic association analysis of NOS3 and methamphetamine-induced psychosis among Japanese. Curr Neuropharmacol 9：151-154, 2011.

7)　Okumura T, Okochi T, Kishi T, Ikeda M, Kitajima T, Kinoshita Y, Kawashima K, Tsunoka T, Fukuo Y, Inada T, Yamada M, Uchimura N, Iyo M, Sora I, Ozaki N, Ujike H, Iwata N ：Genetic Association Analysis of NOS1 and Methamphetamine-Induced Psychosis Among Japanese. Curr Neuropharmacol 9：155-159, 2011.

8)　Tsunoka T, Kishi T, Ikeda M, Kitajima T, Yamanouchi Y, Kinoshita Y, Kawashima K, Okochi T, Okumura T, Inada T, Ujike H, Yamada M, Uchimura N, Sora I, Iyo M, Ozaki N, Iwata N ：No Association Between GRM3 and Japanese Methamphetamine-Induced Psychosis. Curr Neuropharmacol 9：160-162, 2011.

9)　Ujike H, Kishimoto M, Okahisa Y, Kodama M, Takaki M, Inada T, Uchimura N, Yamada M, Iwata N, Iyo M, Sora I, Ozaki N：Association Between 5HT1b Receptor Gene and Methamphetamine Dependence. Curr Neuropharmacol 9：163-168, 2011.

10)　Yokobayashi E, Ujike H, Kotaka T, Okahisa Y, Takaki M, Kodama M, Inada T, Uchimura N, Yamada M, Iwata N, Iyo M, Sora I, Ozaki N, Kuroda S：Association study of serine racemase gene with methamphetamine psychosis. Curr Neuropharmacol 9 ： 169-175, 2011.

11) Kobayashi H, Ujike H, Iwata N, Inada T, Yamada M, Sekine Y, Uchimura N, Iyo M, Ozaki N, Itokawa M, Sora I：Association analysis of the tryptophan hydroxylase 2 gene polymorphisms in patients with methamphetamine dependence/psychosis. Curr Neuropharmacol 9：176-182, 2011.
12) Okahisa Y, Kodama M, Takaki M, Inada T, Uchimura N, Yamada M, Iwata N, Iyo M, Sora I, Ozaki N, Ujike H：Association Study of Two Cannabinoid Receptor Genes, CNR1 and CNR2, with Methamphetamine Dependence. Curr Neuropharmacol 9：183-189, 2011.
13) Okahisa Y, Kodama M, Takaki M, Inada T, Uchimura N, Yamada M, Iwata N, Iyo M, Sora I, Ozaki N, Ujike H：Association between the Regulator of G-protein Signaling 9 Gene and Patients with Methamphetamine Use Disorder and Schizophrenia. Curr Neuropharmacol 9：190-194, 2011.
14) Yoshimura T, Usui H, Takahashi N, Yoshimi A, Saito S, Aleksic B, Ujike H, Inada T, Yamada M, Uchimura N, Iwata N, Sora I, Iyo M, Ozaki N：Association analysis of the GDNF gene with methamphetamine use disorder in a Japanese population. Prog Neuropsychopharmacol Biol Psychiatry 35：1268-1272, 2011.
15) Furukawa TA, Akechi T, Shimodera S, Yamada M, Miki K, Watanabe N, Inagaki M, Yonemoto N：Strategic use of new generation antidepressants for depression: SUN(^_^)D study protocol. Trials 12：116, 2011.
16) Kishi T, Okochi T, Kitajima T, Ujike H, Inada T, Yamada M, Uchimura N, Sora I, Iyo M, Ozaki N, Correll CU, Iwata N：Lack of association between translin-associated factor X gene (TSNAX) and methamphetamine dependence in the Japanese population. Prog Neuropsychopharmacol Biol Psychiatry 35：1618-1622, 2011.
17) Kodaka M, Poštuvan V, Inagaki M, Yamada M：A systematic review of scales that measure attitudes toward suicide. Int J Soc Psychiatry 57：338-361, 2011.
18) Kishi T, Fukuo Y, Okochi T, Kitajima T, Ujike H, Inada T, Yamada M, Uchimura N, Sora I, Iyo M, Ozaki N, Correll CU, Iwata N：No significant association between SIRT1 gene and methamphetamine-induced psychosis in the Japanese population. Hum Psychopharmacol 26(7): 445-450, 2011.
19) Kobayakawa M, Inagaki M, Fujimori M, Hamazaki K, Hamazaki T, Akechi T, Tsugane S, Nishiwaki Y, Goto K, Hashimoto K, Yamawaki S, Uchitomi Y : Serum Brain-derived Neurotrophic Factor and Antidepressant-naive Major Depression After Lung Cancer Diagnosis. Japanese Journal of Clinical Oncology 41: 1233-1237, 2011.
20) Saitoh A, Sugiyama A, Nemoto T, Fujii H, Wada K, Oka J, Nagase H, Yamada M：The novel δ opioid receptor agonist KNT-127 produces antidepressant-like and antinociceptive effects in mice without producing convulsions. Behav Brain Res 223：271-279, 2011.
21) Sugiyama A, Saitoh A, Iwai T, Takahashi K, Yamada M, Sasaki-Hamada S, Oka J, Inagaki M, Yamada M：Riluzole produces distinct anxiolytic-like effects in rats without the adverse effects associated with benzodiazepines. Neuropharmacology 62：2489-2498 ,2012.
22) Takahashi K, Saitoh A, Yamada M, Iwai T, Inagaki M, Yamada M：Dexamethasone indirectly induces Ndrg2 expression in rat astrocytes. J Neurosci Res 90：160-166, 2012.
23) Iwai T, Saitoh A, Yamada M, Takahashi K, Hashimoto E, Ukai W, Saito T, Yamada M：Rhotekin modulates differentiation of cultured neural stem cells to neurons. J Neurosci Res 90：1359-1366, 2012.
24) 山内貴史，藤田利治，立森久照，竹島正，稲垣正俊：自殺死亡に対する職業および配偶関係の相乗的関連．厚生の指標 58(11): 8-13, 2011.

(2) 総説

1) 山田光彦：抗うつ薬の開発．こころの科学 158：86-90，2011.
2) 山田光彦，稲垣正俊，米本直裕：向精神薬と自殺予防．臨床精神薬理 14(12):1919-1924, 2011.
3) 山田光彦：自殺企図患者をどうして助けなくてはならないの？救急に必要な精神科的知識と対応．救急・集中治療 24(1.2)：249-253，2012.
4) 稲垣正俊：がん患者における自殺と希死念慮．精神科治療学 26(8): 959-964, 2011.
5) 竹島 正，松本俊彦，川野健治，稲垣正俊，勝又陽太郎：自殺予防総合対策センターの活動．産業精神保健 19(3): 218-223, 2011.
6) 稲垣正俊，大槻露華，竹島正：自殺とうつ状態．治療　うつ状態を理解する 93(12): 2457-2460,

2011.
7) 稲垣正俊，大槻露華：身体疾患に伴う精神障害と自殺予防．日本臨牀 70(1):151-156,2012.
8) 米本直裕：過去の研究報告からみた震災による自殺への影響～震災後に自殺は増えるのか？日本社会精神医学会雑誌　21(1)：78-81，2012.

（3）著書

1) 山田光彦：自殺の予防．山口徹，北原光夫，福井次矢編：今日の治療指針（2011 年度縮刷版）．医学書院，東京, 2011.
2) 山田光彦：自殺の予防．山口徹，北原光夫，福井次矢編：今日の治療指針（2011 年度版）．医学書院，東京, 2011.
3) 中林哲夫，山田光彦：大うつ病性障害－STAR*D の結果の意味するもの．上島国利，三村將，中込和幸，平島奈津子編：2011-2012 EBM 精神疾患の治療中外医学社，東京，2011.
4) 山田光彦：アルギニンバソプレシン．加藤敏，神庭重信，中谷陽二，武田雅俊，鹿島晴雄，狩野力八郎，市川宏伸編：現代精神医学事典．弘文堂，東京, 2011.
5) 斎藤顕宜，山田光彦：抗精神病薬開発の歴史と展望．中村純編：抗精神病薬完全マスター．医学書院，東京，2012.
6) 山内貴史，稲垣正俊：WHO: Towards Evidence-based Suicide Prevention Programmes 日本語訳「エビデンスに基づく自殺予防プログラムの策定に向けて」．自殺予防総合対策センターブックレット No.9，国立精神･神経医療研究センター，東京, 2011.

（4）研究報告書

1) 山田光彦：自殺対策のための複合的介入法の開発に関する研究（総括研究報告書）．平成 23 年度厚生労働省科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業) .研究代表者
2) 山田光彦：うつ病の最適治療ストラテジーを確立するための大規模多施設共同研究（総括研究報告書）．平成 23 年度厚生労働省科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業).研究分担者
3) 山田光彦：精神・神経・筋分野における治験・臨床研究の推進のための基盤整備に関する研究（総括研究報告書）．平成 23 年度 厚生労働省科学研究費補助金.(医療技術実用化総合研究事業)．研究分担者
4) 山田光彦：気分障害の病態解明と診断治療法の開発に関する研究（総括研究報告書）．平成 23 年度精神・神経疾患研究開発費．主任研究者

（5）翻訳

1) 監訳 樋口輝彦，山田光彦，訳 中川敦夫，米本直裕，翻訳協力 稲垣正俊 他 7 名：ロンドン大学精神医学研究所に学ぶ－精神科臨床試験の実践．医学書院，東京，2011.

（6）その他

1) Sugiyama A, Saitoh A, Yamada M, Iwai T, Hashimoto T, Makino Y, Ohhashi M, Hamada S, Oka J, Inagaki M, Yamada M：Riluzole produces distinct anxiolytic-like effects in rats through blockade of voltage-activated sodium channels.J Pharmacol Sci 118:Suppl.pp68 , 2012.

Ｂ．学会・研究会における発表

（1）学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

1) Kodaka M, Poštuvan V, Inagaki M, Yamada M：Personal and occupational factors associated with attitudes of social workers toward suicide, 21st Asia-Pacific Social Work Conference, Tokyo, 2011.7.15-18.
2) Kawanishi C, Yamada M, Inagaki M, Yonemoto N, ACTION-J Group：ACTION-J: A randomized, controlled, multicenter trial of post-suicide attempt case management for the prevention of further attempts in Japan, The 26th World Congress of the International Association of Suicide Prevention (IASP), Beijing , 2011.9.13-17.
3) Yamada M, Inagaki M, Yonemoto N, J-MISP Group：Japanese Multimodal Intervention Trials for Suicide Prevention, J-MISP, The 26th World Congress of the International Association of Suicide Prevention (IASP), Beijing , 2011.9.13-17.
4) Yonemoto N, Akechi T, Shimodera S, Yamada M, Miki K, Watanabe N, Inagaki M, Furukawa TA：Strategic Use of New generation antidepressants for Depression,

SUN(^_^)D : study design and rationale, MRC HTMR Clinical Trials Methodology Conference, Bristol, 2011, 10.4-5.

5) Saitoh A, Sugiyama A, Nemoto T, Fujii H, Wada K, Oka J, Nagase H, Yamada M : The novel d opioid receptor agonist KNT-127 produces antidepressant-like and antinociceptive effects in mice without producing convulsions, Joint symposium between University of Melbourne and NCNP, Tokyo, 2011, 10.31-11.1.

6) Yamada M : A glutamate-modulating drug, riluzole, is one of the candidate drugs for new generation antidepressants and/or anxiolytics, Joint symposium between University of Melbourne and NCNP, Tokyo, 2011, 10.31-11.1.

7) Inagaki M, Yamada M, Kodaka M : NOCOMIT-J (ClinicalTrials.gov: NCT00737165): A community intervention trial of multimodal suicide prevention program in Japan: A Novel multimodal Community Intervention program to prevent suicide and suicide attempt in Japan, International Mental Health Research Colloquium, Melbourne, 2012, 1.31.

8) Yamada M, Inagaki M : A glutamate-modulating drug, riluzole, is one of the candidate drugs for new generation antidepressants and/or anxiolytics, International Mental Health Research Colloquium, Melbourne, 2012, 1.31.

9) Yamada M, Inagaki M, Kodaka M : ACTION-J (ClinicalTrials.gov: NCT00736918.): A randomized controlled multicenter trial of post-suicide attempt case management for the prevention of further attempts in Japan, International Mental Health Research Colloquium, Melbourne, 2012, 1.31.

10) 稲垣正俊 : がんの診断・治療に伴う抑うつの機序とその対応，第 9 回日本予防医学会学術総会, 東京, 2011.11.20.

11) 河西千秋，平安良雄，山田光彦，米本直裕，稲垣正俊，高橋清久：多施設共同無作為化比較研究 ACTION-J の目指すところ．第 35 回日本自殺予防学会総会.沖縄,2011.12.15-17.

12) 稲垣正俊，大槻露華，山田光彦，竹島 正：かかりつけの医師によるうつ病の発見と適切な治療への導入のために．第 35 回日本自殺予防学会総会.沖縄,2011.12.15-17.

（2）一般演題

1) Saitoh A, Sugiyama A, Nemoto T, Fujii H, Wada K, Oka J, Nagase H, Yamada M : The novel ・opioid receptor agonist KNT-127 produces antidepressant-like and antinociceptive effects in mice without producing convulsions, Japan-Italy Joint Symposium 2011, Miyagi, 2011 .9.1.

2) Yonemoto N, Inagaki M, Yamada M : Accuracy of Depression Screening for Suicidal Ideation in Primary Practices and Community Health Services:a Systematic Review, The 26th World Congress of the International Association of Suicide Prevention (IASP), Beijing , 2011.9.13-17.

3) Inagaki M, Ono Y, Yamada M, Yonemoto N, NOCOMIT-J Group : NOCOMIT-J: A Community Intervention Trial of Multi-Modal Suicide Prevention Program in Japan, The 26th World Congress of the International Association of Suicide Prevention (IASP), Beijing, 2011.9.13-17.

4) Yonemoto N, Inagaki M, Yamada M : The Epidemiology of Suicide after Natural Disaster:A Systematic Review, The 26th World Congress of the International Association of Suicide Prevention (IASP), Beijing , 2011.9.13-17.

5) Saitoh A, Sugiyama A, Yamada M, Iwai T, Takahashi K, Yuya M, Inagaki M, Hamada S, Oka J, Yamada M : A glutamate-modulating drug, riluzole, produces anxiolytic-like effects via the sodium channels in rat, The 32nd Naito Conference on Biological Basis of mental functions and disorders, Kitamori, 2011.10.18-21.

6) Saitoh A, Yamada M, Inagaki M, Yamada M : A Glutamate-Modulating Drug,Riluzole,is one of the candidate drugs for new generation antidepressants and/or anxiolytics, 20th European congress of psychiatry EPA 2012, Prague,Czech Republic, 2012. 3.3-6.

7) Inagaki M, Yamada M, Yonemoto N, Takahashi K : NOCOMIT-J: A community intertvention trial of multi-modal suicide prevention program in Japan, 20th European congress of psychiatry EPA 2012, Prague,Czech Republic, 2012. 3.3-6.

8) Yamada M, Inagaki M, Yonemoto N, Takahashi K :ACTION-J:A randomized, controlled, multicenter trial of post-suicide attempt case management for the prevention of further attempts in Japan. 20th European congress of psychiatry EPA 2012, Prague, Czech Republic , 2012.3.3-6.

9) Yamauchi T, Fujita T, Tachimori H, Takeshima T, Inagaki M：Rates of and factors associated with suicide among adolescents in Japan between 1978 and 2007. The 6th International Conference on Child and Adolescent Psychopathology, London, UK, 2011.7.11-12.
10) Yamauchi T, Fujita T, Tachimori H, Takesima T, Inagaki M：Relative Risks of Suicide with Respect to Marital Status and Employment in Japan, The 26th World Congress of the International Association of Suicide Prevention (IASP), Beijing , 2011.9.13-17.
11) 稲垣正俊，大槻露華，小高真美，酒井ルミ，石蔵文信，渡辺洋一郎，山田光彦：医師のうつ病に対する態度と関連する要因の検討，第 8 回日本うつ病学会総会.大阪,2011.7.1-2.
12) 斎藤顕宜，高橋 弘，杉山 梓，牧野祐哉，橋本富男，岩井孝志，山田美佐，稲垣正俊，岡 淳一郎, 山田光彦：グルタミン酸遊離調節作用を有するリルゾールはラットにおいて抗うつ様作用および抗不安様作用を示す，第 30 回躁うつ病の薬理・生化学的研究懇話会,京都,2011.7.15-16.
13) 岩井孝志，高橋 弘，斎藤顕宜，山田美佐，稲垣正俊，山田光彦：単離アストロサイトにおける Ndrg2 のグルココルチコイドによる発現誘導機構，第 34 回日本神経科学大会，横浜，2011.9.14-17.
14) 斎藤顕宜，山田美佐，高橋 弘，岩井孝志，稲垣正俊，山田光彦：グルタミン酸神経調節薬リルゾールは、嗅球摘出ラットうつ病モデルの不安様行動を改善する，第 34 回日本神経科学大会，横浜，2011.9.14-17.
15) 岩井孝志，斎藤顕宜，山田美佐，高橋 弘，橋本恵理，鵜飼 渉，齋藤利和，山田光彦：Rhotekin は培養神経幹細胞において神経分化を調節する，第 41 回日本神経精神薬理学会年会，東京，2011.10.27-29.
16) 斎藤顕宜，杉山 梓，根本 徹，藤井秀明，岡 淳一郎，長瀬 博，山田光彦：新規化合物 KNT127 はマウスにおいて痙攣作用を誘発することなくδオピオイド受容体を介した抗うつ様作用と鎮痛作用を示す，第 41 回日本神経精神薬理学会年会，東京，2011.10.27-29.
17) 斎藤顕宜，山田美佐，高橋 弘，岩井孝志，杉山 梓，牧野祐哉，稲垣正俊，山田光彦：グルタミン酸神経調節薬によるストレス性精神疾患の治療法開発，第 27 回日本ストレス学会, 東京，2011.11.18-20.
18) 山田光彦，古川壽亮，下寺信次，三木和平，明智龍男，渡辺範雄，稲垣正俊，米本直裕，高橋清久：実践的精神科薬物治療研究プロジェクト：Japan Trislists Organization Psychiatry, J-TOP の試み．第 32 回日本臨床薬理学会年会，静岡，2011.12.1-3.
19) 米本直裕，稲垣正俊，山田光彦：臨床試験における自殺リスクマネジメントの問題．第 32 回日本臨床薬理学会年会，静岡，2011.12.1-3.
20) 山内貴史,稲垣正俊,竹島 正：“Towards Evidence-based Suicide Prevention Programmes” (World Health Organization,2010)日本語版の刊行．第 35 回日本自殺予防学会総会.沖縄,2011.12.15-17.
21) 稲垣正俊，齋藤友紀雄，高橋祥友，河西千秋，齋藤利和，本橋豊，矢永由里子，松本俊彦，川野健治，勝又陽太郎，大槻露華，竹島 正：学術研究の成果を反映した自殺対策の策定に向けた自殺予防総合対策センターの取組み．第 35 回日本自殺予防学会総会.沖縄,2011.12.15-17.
22) 米本直裕，稲垣正俊，山田光彦：自殺予防介入研究における自殺リスクマネジメントの問題．第 35 回日本自殺予防学会総会.沖縄,2011.12.15-17.
23) 大槻露華，稲垣正俊，川野健治，勝又陽太郎，松本俊彦，竹島 正：都道府県・政令指定都市における自殺対策の取組．第 35 回日本自殺予防学会総会.沖縄,2011.12.15-17.
24) 杉山 梓，斎藤顕宜，岩井孝志，山田美佐，橋本富男，牧野祐哉，大橋正誠，濱田幸恵，岡 淳一郎，稲垣正俊，山田光彦：リルゾールは電位依存性 Na+チャネルの阻害によりラットにおいて抗不安様作用を示す（Riluzole produces distinct anxiolytic-like effects in rats through blockade of voltage-activated sodium channels.），第 85 回日本薬理学会年会，京都, 2012. 3.14-16.
25) 小高真美，稲垣正俊，山田光彦：薬剤師の自殺に対する態度と関連因子の検討，第 31 回日本社会精神医学会，東京，2012.3.15-16.
26) 光永修一，池田公史，仲地耕平，大野泉，清水怜，高橋秀明，奥山浩之，稲垣正俊，古瀬純司，落合敦志：進行膵がんにおいて、病状悪化を認める IL-6 高値群のうち IL-1 高値群は予後不良である，第 42 回日本膵臓学会大会，青森, 2011.7.29.

(3) 研究報告会

1) 稲垣正俊，大槻露華，小高真美，石藏文信，渡辺洋一郎，酒井ルミ，山田光彦，竹島 正：一般身体科医のうつ病に対する態度．平成 22 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会, 2011.5.23.
2) 斎藤顕宜, 山田光彦 ：オピオイドδ受容体作動薬は新規向精神薬となりうるか？第 1 回代謝脳研究会，富山大学，2011.8.9.
3) 杉山 梓，斎藤顕宜，稲垣正俊，山田美佐，橋本富男，牧野祐哉，大橋正誠，岡 淳一郎，山田光彦: グルタミン酸神経調節薬リルゾールの抗うつ様および抗不安様作用の検討．平成 23 年度精神・神経疾患研究開発費気分障害研究班合同報告会，東京，2011.12.12.
4) 濱田幸恵，酒井浩旭，加藤教史，斎藤顕宜，稲垣正俊，山田美佐，杉山 梓，牧野祐哉，大橋正誠，山田光彦，岡 淳一郎: 海馬神経活動に対するリルゾールの作用の電気生理学的解析．平成 23 年度精神・神経疾患研究開発費気分障害研究班合同報告会，東京，2011.12.12.
5) 斎藤顕宜, 杉山 梓，稲垣正俊，山田美佐，岩井孝志，岡 淳一郎, 長瀬 博，山田光彦 ：新規δ受容体アゴニストの抗うつ様作用の検討．平成 23 年度精神・神経疾患研究開発費気分障害研究班合同報告会，東京，2011.12.12.
6) 岡本泰昌，岡田 剛，土岐 茂，吉村晋平，国里愛彦，小野田慶一，稲垣正俊，竹林 実，山脇成人：うつ病の治療反応性に関する脳画像研究．平成 23 年度精神・神経疾患研究開発費気分障害研究班合同報告会，東京，2011.12.12.
7) 斎藤顕宜, 杉山 梓，山田美佐，稲垣正俊，橋本富男，藤井秀明，岩井孝志，岡 淳一郎，長瀬博，山田光彦：新規に合成された選択的δオピオイド受容体作動薬 KTN127 はラットにおいて抗不安様作用を示す．国立精神･神経医療研究センター精神保健研究所平成 23 年度研究報告会．東京, 2012.2.27.
8) 岩井孝志，斎藤顕宜，山田美佐，高橋 弘，橋本富男，橋本恵理，鵜飼渉，齋藤利和，山田光彦：抗うつ薬関連遺伝子 Rhotekin は神経分化を促進する．国立精神･神経医療研究センター精神保健研究所平成 23 年度研究報告会．東京, 2012.2.27.
9) 牧野祐哉，山田美佐，斎藤顕宜，杉山 梓，大橋正誠，橋本富男，稲垣正俊，山田光彦：マウス成体海馬歯状回腹側部/背側部における遺伝子発現定量法の確立．国立精神･神経医療研究センター精神保健研究所平成 23 年度研究報告会．東京, 2012.2.27.

C．講演

1) 稲垣正俊 ：現場で自殺予防につなげるために～自殺に傾く人への相談技術アップ，自殺対策関係者研修会，山形, 2011.7.15.
2) 稲垣正俊 ：自殺予防対策とうつ病治療，東久留米医師会自殺予防懇話会，東京, 2011.7.25.
3) 稲垣正俊 ：平成 22 年度集積した 89 事例の集計結果について･今後取り組む課題の検討等（第 1 回），愛知県精神保健福祉センター自殺関連事例分析検討会，愛知, 2011.8.19.
4) 稲垣正俊 ：平成22年度集積した89事例の集計結果から今後の自殺対策を考える，愛知県精神保健福祉センター自殺関連事例分析検討会（第 2 回），愛知, 2011.9.22.
5) 稲垣正俊：うつ病　症例検討会．第 2 回東久留米医師会自殺予防懇話会，東京, 2011.11.7.
6) 稲垣正俊:がんの診断･治療に伴う抑うつの機序とその対応. 第 9 回日本予防医学会学術総会，東京, 2011.11.20.
7) 稲垣正俊 ：自殺についていまわかっていること～新潟市に期待される社会的な取り組み，平成 23 年度自殺総合対策事業庁内推進体制強化事業庁内研修会(課長職以上)，東京, 2011.11.21.
8) 稲垣正俊 ：自殺の背景とその対応，医師向け自殺念慮者等対応力研修会，東京, 2011.11.23.
9) 稲垣正俊 ：自殺関連事例の集積結果から今後取組む課題の検討について，自殺関連事例分析検討会，東京, 2011.11.28.
10) 稲垣正俊：平成 23 年度静岡市かかりつけ医等心の健康対応向上研修会「うつ病の基礎知識と自殺予防」,静岡, 2011.12.3.
11) 稲垣正俊：平成 23 年度自殺予防相談従事者養成研修　「私たちに何ができるか・・・地域で取り組む視点 3」,大阪, 2011.12.9.
12) 稲垣正俊 ：相談者のうつ状態のリスクアセスメントと受診勧奨の進め方～うつ病のスクリーニングをするために，平成 23 年度心の健康づくり地域連携研修（ゲートキーパー研修 2）．埼玉, 2012.1.13.
13) 稲垣正俊 ：かかりつけ医におけるうつ病患者へのケアの提供・うつ病患者への声掛け，平成

23 年度東部地域自殺対策「地域医療連携事業研修会」.広島,2012.2.3.
14) 稲垣正俊：精神疾患へのプライマリケア・アプローチ、プライマリ・ケアにおけるうつ病スクリーニングとモニタリング・ケースマネジメント, プライマリ・ケア認定薬剤師研修会及び生涯教育セミナー. 広島, 2012.2.12.
15) 稲垣正俊：うつ病診療と自殺予防, うつ病診療充実強化研修事業講演会.東京,2012.2.13.
16) 稲垣正俊：三重県自殺行動計画について、現三重県自殺対策行動計画の評価について（次期三重県自殺対策行動計画査定方針について等）, 三重県自殺対策行動計画策定に向けた勉強会. 三重,2012.2.23.
17) 稲垣正俊：うつ病に対する医療連携モデル事業に係る考察, うつ病に対する医療連携モデル事業実践報告及び意見交換会. 広島, 2012.2.28.
18) 稲垣正俊：これからの自殺対策の考え方, 平成 23 年度第 5 回自殺対策関係職員研修会. 愛知, 2012.3.12.

D．学会活動（学会主催，学会役員，座長，編集委員等）

（1）学会役員

山田光彦：日本薬理学会　評議員
山田光彦：日本臨床精神神経薬理学会　評議員
山田光彦：日本うつ病学会　評議員
山田光彦：日本神経精神薬理学会　評議員
山田光彦：Mayo Neuroscience Forum 地区幹事
山田光彦：躁うつ病の薬理生化学的研究懇話会　幹事
山田光彦：Japanese Genetics Initiative for Drug Abuse: JGIDA group 幹事
稲垣正俊：日本生物学的精神医学会　評議委員
斎藤顕宜：日本薬理学会　評議員
米本直裕：日本循環器学会　蘇生科学小委員会　委員

（2）座長

石蔵文信，山田光彦：地域・社会要因. 第 35 回日本自殺予防学会総会．沖縄，　2011.12.15-17.
山田光彦：メディカルモデル対策の現実. 第 35 回日本自殺予防学会総会．沖縄，2011.12.15-17.
斎藤顕宜：「一般講演Ⅲ」．第 22 回マイクロダイヤリシス研究会．東京，2011.12.10.
斎藤顕宜：「中枢 13 うつ・不安」．第 85 回日本薬理学会年会．京都，2012.3.15.

（3）学会誌編集委員等

山田光彦：分子精神医学　編集同人
山田光彦：日本神経精神薬理学会　広報委員
山田光彦，稲垣正俊：日本生物学的精神医学会　広報委員
山田光彦：日本臨床薬理学会　認定医
山田光彦：日本臨床精神神経薬理学会　認定医
山田光彦：日本臨床精神神経薬理学会　指導医
山田光彦：日本臨床精神神経薬理学会　治験登録医
山田光彦，稲垣正俊：日本精神神経学会　専門医

E．研修

（1）　研修企画

1)　川野健治，竹島 正，松本俊彦，稲垣正俊：第 2 回心理職自殺予防研修．東京，2011.7.5-6.
2)　竹島 正，松本俊彦，川野健治，稲垣正俊：第 5 回自殺総合対策企画研修．東京，2011.8.24-26.
3)　竹島 正，松本俊彦，川野健治，稲垣正俊：第 3 回精神科医療従事者研修．東京, 2011.9.6-7
4)　松本俊彦，竹島 正，川野健治，稲垣正俊：第 2 回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修．東京，2011.11.8-9.
5)　竹島 正，松本俊彦，川野健治，稲垣正俊：第 4 回精神科医療従事者自殺予防研修．愛知，2011.11.29-30.

8. 社会精神保健研究部

Ⅰ. 研究部の概要

社会精神保健研究部は昭和27年の国立精神衛生研究所創立時の5部の1つとしてスタートし，昭和61年の国立精神・神経センター統合の際に3研究室を有する社会精神保健部となり，平成 22 年に独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会精神保健研究部となった.

当研究部では，すべての国民が質の高い精神科医療をどの医療機関でも受けることができるように，医療機関の評価と医療の質の均てん化に関する多施設臨床研究を，高度専門医療センターにおける研究として進めている．具体的には，研究に関心のある臨床家が参画して，保健医療サービス研究の手法を用いて，身体疾患と精神疾患との融合領域研究，管理研究（医療の質に関する研究）および政策研究を実施している．社会精神保健研究部の所掌事項は「精神疾患と精神保健に関する社会文化的要因との関係」に関する調査及び研究を行うことである.

当研究部には，社会福祉研究室（野田寿恵 室長：平成19年4月から平成24年3月），社会文化研究室（伊藤弘人 部長併任），家族・地域研究室（堀口寿広 室長）がある．また流動研究員（池野 敬：平成 22 年 4 月着任、佐藤真希子：平成23年5月着任）および外来研究員（奥村泰之：平成21年9月着任）が当研究部に配属され，研究に従事してきた．なお臨床での問題意識からの多施設臨床研究を実施すべく，精神科・循環器科・内科医療に従事する専門家等が当研究部の研究に参画している（五十嵐涼子，川畑俊貴，桑原和江，佐藤 洋，清水沙友里，末安民生，杉山直也，平田豊明，藤田純一，三澤史斉，峯山智佳，安野史彦）.

Ⅱ. 研究活動

1）身体疾患と精神疾患に関する研究

- ○ 循環器疾患：国立循環器病研究センター，久留米大学，日本医科大学，名古屋大学，東京女子医科大学，早稲田大学，日本循環器心身医学会の専門家とともに，循環器疾患と精神疾患に関する研究計画の策定及び研究の実施（横山広行，内村直尚，水野杏一，夜久 均，木村宏之，志賀 剛，鈴木豪，鈴木伸一，奥村泰之，笠貫 宏，伊藤弘人）
- ○ 糖尿病：国立国際医療研究センター及び広島大学の専門家とともに，糖尿病と精神疾患に関する研究の実施（峯山智佳，野田光彦，奥村泰之，伊藤弘人）
- ○ 精神科と身体科等との連携マニュアルと地域連携クリティカルパスの開発（三宅康史，小川朝生，木村真人，野田光彦，横山広行，伊藤弘人）
- ○ DPC/PDPS 対象病院における，向精神薬処方・急性医薬品中毒に関する研究（清水沙友里，奥村泰之，伏見清秀，石川光一，松田晋哉，伊藤弘人）
- ○ 医療情報を活用した一般身体科における精神疾患の医療経済・臨床疫学的研究（奥村泰之，伊藤弘人）
- ○ 精神科における糖尿病に関する研究（峯山智佳，奥村泰之，伊藤弘人）
- ○ 慢性疾患における多剤併用と副作用発現との関連に係る疫学調査の手法に関する研究， 既存リソースの特徴の分析（池野 敬，石黒智恵子，奥村泰之，清水沙友里，伊藤弘人）
- ○ 統合失調症患者における QT 間隔延長のリスク因子の解析（池野 敬，伊藤弘人）
- ○ 抗精神病薬が及ぼす心臓への影響に関する分析ーメタ・アナリシスを用いた文献的検討，医薬品医療機器総合機構が公表する副作用報告データベースの整理，症例報告に係る文献的検討ー（池野敬，石黒智恵子，奥村泰之，久木山清貴，伊藤弘人）

2）薬剤処方・行動制限の最適化に関する研究（医療の質に関する研究）

- ○ 精神科医療の質に関する国際的プラットホームの開発（伊藤弘人）
- ○ 日本フィンランド共同 隔離・身体拘束研究の実施・分析（野田寿恵，杉山直也，長谷川利夫，三宅美智，末安民生，伊藤弘人）

○ eCODO センターシステムの開発（eCODO: 行動制限等最適化データベースソフト）（野田寿恵，杉山直也，平田豊明，佐藤真希子，伊藤弘人）
○ 行動制限最小化看護研修 効果検討調査（野田寿恵，吉浜文洋，佐藤真希子，伊藤弘人）
○ 精神科救急・急性期病棟の建築的空間構成の現状分析（渡部美根，野田寿恵，筧 淳夫，伊藤弘人）
○ 隔離室使用時人的投入量調査の実施（泉田信行，野田寿恵，杉山直也，伊藤弘人）
○ 統合失調症患者における再入院に関わる因子の検討（池野 敬，伊藤弘人）
○ 精神科救急における強制治療に関する研究（石井美緒，奥村泰之，三澤史斉，伊藤弘人）
○ 行動制限最小化に関する研究（杉山直也，吉浜文洋，野田寿恵，佐藤真希子，三宅美智，石井美緒，伊藤弘人）

3）政策研究
○ 医療計画における指標および地域連携クリティカルパスモデルの開発（佐藤真希子，伊藤弘人）

4）家族・地域研究（政策研究）
○ 全国の地方公共団体から障害福祉施策における独自の取り組みについて情報の収集を実施（堀口寿広）
○ 交通バリアの解消に向けて公共交通事業者の取り組みについて調査を実施し、交通バリアフリーマップを作成（堀口寿広）

Ⅲ. 社会的活動

1）市民社会に対する一般的な貢献
・三鷹市子ども家庭支援ネットワーク加盟機関に対する助言（堀口寿広）
・日本小児科医会担当医師からの要請に応じ、番組出演に先立ち震災後の子どものこころのケアにおいて必要な配慮についてコメント（堀口寿広）

2）専門教育面における貢献
・第５回精神科医療評価・均てん化研修（野田寿恵，伊藤弘人）
・日本精神科病院協会研修会講師（伊藤弘人）
・東京大学医学部医学科・防衛医科大学学生実習（伊藤弘人）
・慶応大学医学部衛生・公衆衛生学（伊藤弘人）
・行動制限最小化看護研修会（野田寿恵）
・千葉県指定知的障害者移動介護従業者養成研修課程講師（堀口寿広）

3）保健医療行政政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献
・厚生労働省社会援護局「新たな地域精神保健医療体制の構築に向けた検討チーム」報告（伊藤弘人）
・厚生労働省医政局「医療計画の見直し等に関する検討会」報告（伊藤弘人）
・厚生労働省厚生科学審議会「次期国民健康づくり運動プラン策定専門委員会」報告（伊藤弘人）
・厚生労働省社会援護局「精神科救急医療体制に関する検討会」報告（野田寿恵）
・国土交通省「公共交通機関の移動等円滑化整備ガイドライン」検討委員会委員（堀口寿広）
・交通エコロジー・モビリティ財団「公共交通機関の旅客施設に関する移動等円滑化整備ガイドライン」小委員会委員（堀口寿広）
・交通エコロジー・モビリティ財団「公共交通機関の車両等に関する移動等円滑化整備ガイドライン」小委員会委員（堀口寿広）
・国土交通省「都市公園の移動等円滑化整備ガイドライン」検討委員会ヒアリング対象者（堀口寿広）

Ⅳ. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

1) Misawa F, Shimizu K, Fujii Y, Miyata R, Koshiishi F, Kobayashi M, Shida H, Oguchi Y, Okumura Y, Ito H, Kayama M, Kashima H: Is antipsychotic polypharmacy associated with metabolic syndrome even after adjustment for lifestyle effects? : a cross-sectional study. BMC Psychiatry 11:118,2011.
2) 宇佐美しおり，中山洋子，野末聖香，矢野千里，樺島啓吉，中川優子，和田冬樹，斎藤ひろみ，井形るり子，大嶌高昭，大関宏治，青木聖久，中西真理子，伊藤弘人：長期入院となりやすい精神障害者への修正版集中包括型ケア・マネージメント（M－CBCM）の評価に関する研究．看護研究 44(3)：318-332，2011.
3) 藤田純一，西田敦志，高橋雄一，新井 卓，伊藤弘人，岡崎祐士：児童思春期精神科治療施設の初回エピソード精神病に対するサービス調査．精神医学 53(9)：891-897，2011.
4) 坂田 睦，野田幸裕，藤田純一，西田淳志，三澤史斉，野田寿恵，伊藤弘人：抗精神病薬の散剤処方による抗精神病薬の投与量・剤数への影響．臨床精神薬理 14：1839-1844，2011.
5) 野田寿恵，杉山直也，松本佳子，辻脇邦彦，長谷川利夫，伊藤弘人：エッセン精神科病棟風土 評価スキーマ 日本語版 (EssenCES-JPN) の心理測定額的特徴の検討．精神医学 54(2)：211-217，2012.
6) 野田寿恵，安齋達彦，杉山直也，平田豊明，伊藤弘人：精神保健福祉資料 (630 調査) を用いた隔離・身体拘束施行者数の分析．精神医学 54(3)：317-323，2012.

(2) 総説

1) 奥村泰之，横山和仁，伊藤弘人：うつ病における病気出勤による労働生産性の損失．産業医学ジャーナル 34(3)：116-118，2011.
2) 伊藤弘人：精神科地域連携クリティカルパス：総論．日本精神科病院協会雑誌 30(12)：5-10，2011.
3) 石田重信，内野俊郎，橋爪祐二，大島正親，大島博治，平野 隆，伊藤弘人，内村直尚：精神科医療における地域連携―精神障害者にやさしい内科系医療機関一覧（地域診療ガイドマップ）．日本精神科病院協会雑誌 30(12)：51-62，2011.
4) 伊藤弘人，奥村泰之：循環器疾患と精神障害：虚血性心疾患に伴ううつを中心に．総合病院精神医学 23：11-18，2011.
5) 伊藤弘人：地域中心の精神保健医療福祉の構築に向けた政策．精神保健研究 24，5-11，2011.
6) 伊藤弘人：海外諸国の精神保健医療制度：総論．日本精神科病院協会雑誌 31(3)：7-13，2012.
7) 堀口寿広，伊藤弘人：精神科医療と保護者制度―諸外国の現状．精神医学 54(2)：145-154，2012.
8) 丹野義彦，奥村泰之，上野真弓，高野慶輔，星野貴俊，飯島雄大，小林正法，林 明明，磯村昇太: 心理師が実施するうつ病への認知行動療法は効果があるか: 系統的文献レビューによるメタ分析．認知療法研究 4 (1): 8-15, 2011.
9) 峯山智佳：糖尿病の療養指導 Q&A：糖尿病とうつ．Practice28(1)：85-87，2011.
10) 峯山智佳，野田光彦：特集 糖尿病患者のトータルケア：糖尿病とうつ．診断と治療 99(11)：1917-1922，2011.
11) 峯山智佳，野田光彦：トピックス：糖尿病とうつ病．Depression Frontier10(1)：69-75，2012.

(3) 著書

1) Thornicroft G, Semrau M, Alem A, Drake RE, Ito H, Mari J, McGeorge P, R.Thara: Comumunity Mental Health. WILEY-BLACKWELL, USA, 2011.
2) 伊藤弘人：精神医学と疫学・生物統計学．山内俊雄，小島卓也，倉知正佳，鹿島晴雄編集：専門医をめざす人の精神医学第 3 版．医学書院，東京，pp116-122，2011.
3) 伊藤弘人：精神科クリティカルパス総論．古谷龍太，岩尾俊一郎責任編集：精神医療 2011．批評社，東

京，pp26-32，2011.

4) 伊藤弘人：精神科病院の医療経済．精神科．科学評論社，東京，pp296-302，2011.

5) 伊藤弘人：クリニカルパスの作成と連携医療の実践．統合失調症治療の新たなストラテジー―非定型抗精神病薬によるアプローチ―，先端医学社，東京，pp228-234，2011.

6) 伊藤弘人：精神科医療安全管理ポケットマニュアル第２版．伊藤弘人，東北大学病院医療安全推進室編，日本医事新報社，東京，2011.

7) 伊藤弘人：統合失調症クリニカルパス．精神医学キーワード事典，中山書店，東京，pp207-209，2011.

8) 伊藤弘人：精神科クリティカルパス総論．岡崎伸郎編：精神保健・医療・福祉の根本問題２．批評社，東京，pp120-129，2011.

(4) 研究報告書

1) 伊藤弘人，福田 敬，岩成秀夫，西田敦志，奥村泰之：平成 22 年度障害者総合福祉推進事業「精神疾患の社会的コストの推計（学校法人順天堂）」報告書．2011.

2) 河﨑建人，長瀬輝諠，千葉 潜，南 良武，菅野 隆，平川淳一，齋藤章司，直江寿一郎，佐々木 一，馬屋原 健，松本善郎，田口真源，伊藤弘人，山田康夫：平成 22 年度障害者総合福祉推進事業「高齢入院患者の地域移行と精神科医療機関の運営に関する調査（社団法人 日本精神科病院協会）」報告書．2011.

3) 野田寿恵：フィンランド日本 精神科急性期医療における隔離・身体拘束．ファイザーヘルスリサーチ振興財団 平成 19 年度国際共同研究．第 17 回ヘルスリサーチフォーラム及び平成 22 年度研究助成金贈呈式 ―講演録―．165-172，2011.

(5) 翻訳

(6) その他

1) 野田寿恵：身体拘束の定義と現状．日本医事新報 4552：57-58，2011.

2) 石田重信，内野俊郎，橋爪祐二，大島正親，大島博治，平野 隆，伊藤弘人，内村直尚：精神科医療における地域連携―精神障害者にやさしい内科系医療機関一覧（地域診療ガイドマップ）．日本精神科病院協会雑誌 201130(12)：51-62，2011.

3) 飯島 勲，伊藤弘人，櫻井よしこ，篠崎英夫，染矢俊幸，竹中ナミ，広田和子，山崎 學，河﨑建人，長瀬輝諠，冨松 愈，水木 泰：アドバイザリーボード「精神障害者に対する偏見の是正」．日本精神科病院協会雑誌 31(1)：20-42，2012.

4) 伊藤弘人：精神科地域連携パスの開発とその普及への道程．地域連携入退院支援 4(6)：65-70，2012.

5) 伊藤弘人：変貌する社会における外来精神医療の役割とは「厚生労働行政と外来機能への期待」．外来精神医療 12(1)：46-47，2012.

6) 伊藤弘人：認知症患者を地域で支えるために．WAM3，4-5，2012.

7) 池野 敬，奥村泰之，桑原和江，伊藤弘人：循環器，糖尿病及びがんの専門医が有する精神疾患への認識と治療 ―精神科病床を有する一般病院における全国横断調査―．精神保健研究 58：49-56，2012.

B.　学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

1) 伊藤弘人：シンポジウムⅤ 非自発的入院および保護者制度の見直し．第 39 回日本精神科病院協会精神医学会，北海道，2011.7.15.

2) 伊藤弘人：シンポジウムⅠ 変貌する社会における，外来精神医療の役割とは．第 11 回日本外来精神医療学会，東京，2011.7.16.

3) 伊藤弘人：心臓病とストレスをめぐる新しい動向．第 59 回日本心臓病学会学術集会，兵庫，2011.9.24.

4) 伊藤弘人：医療政策とチーム医療．第 64 回九州精神神経学会・第 57 回九州精神保健学会，福岡，2011.10.15.
5) 伊藤弘人：精神科チーム医療～みえてきたものとこれから～．第 64 回九州精神神経学会・第 57 回九州精神保健学会，福岡，2011.10.15.
6) 伊藤弘人：一般急性期病院入院患者への向精神薬の使用実態．第 21 回日本臨床精神神経薬理学会・第 41 回日本神経精神薬理学会合同年会，東京，2011.10.29.
7) 伊藤弘人：５疾病５事業～医療計画と精神神経科診療所～．JAPC 特別講演会，東京，2011.12.11.
8) 伊藤弘人：地域連携と医療計画の見直し～急性期から在宅までの切れ目のない連携を目指して～パネルディスカッション．日本医療マネジメント学会 2011 年度第 1 回医療連携分科会，東京，2012.2.18.
9) 奥村泰之：生物医学統計のコツ．日本行動療法学会第 37 回大会，東京, 2011.11.28.

(2) 一般演題

1) Noda T, Joffe G: What is “Sakura”? An overview of the project, “Sakura”: to secluded or not? A Glance from Finland and Japan: Part I. the 32nd International Congress of Law and Mental Health, Berlin, 2011.7.18.
2) Sugiyama N, Noda T, Sailas E: Visual analogue scale for seclusion and restraint - Why?, “Sakura”: to secluded or not? A Glance from Finland and Japan: Part II. the 32nd International Congress of Law and Mental Health, Berlin, 2011.7.18.
3) Kuroki T, Ito H, Noda T, Sugiyama N, Matsushita S, Hirata T: Crossing the quality chasm in psychiatry: experiences and lessons from around the world: National strategies for measuring mental health quality in Japan. the 15th World Congress of Psychiatry, Buenos Aires, 2011.9.19.
4) 吉浜文洋，野田寿恵，柿島有子，木葉三奈，仲野 栄，伊藤弘人：行動制限最小化看護研修 受講前後における隔離･身体拘束に関する認識調査. 日本精神科看護学会第 18 回 専門学会Ⅰ, 三重, 2011.8.26.
5) 泉田信行，野田寿恵，杉山直也，伊藤弘人：隔離室入室期間の人的資源投入とそのコストの調査及びその短縮化のための検討．第 19 回 日本精神科救急学会総会，宮崎，2011.10.21.
6) 佐藤真希子，野田寿恵，杉山直也，渡部 晃，飯塚香織，冨田 敦，嘉山一壽，渡辺 磨，三宅美智，伊藤弘人：急性期医療における隔離・身体的拘束施行時間と患者特性の関連．第 19 回日本精神科救急学会総会，宮崎，2011.10.21.
7) 内山直樹, 池野 敬, 栗原竜也, 木内祐二, 馬屋原 健, 松本善郎, 平川淳一, 伊藤弘人：統合失調症患者における再入院に関わる因子の検討. 第 107 回日本精神神経学会学術総会, 東京, 2011.10.27.
8) 池野 敬, 石黒智恵子, 奥村泰之, 伊藤弘人: 精神科系薬剤と循環器系薬剤による心毒性を呈した症例の整理 ― 医薬品医療機器総合機構が公表する副作用報告ナショナルデータベース ―. 第 68 回日本循環器心身医学会総会, 東京, 2011.11.26.
9) 堀口寿広：障害児支援をめぐる地方公共団体の取り組み．第 58 回日本小児保健協会学術集会，愛知，2011.9.3.

(3) 研究報告会

1) 伊藤弘人，野田寿恵：平成 23 年度精神・神経疾患研究開発費「精神科医療の質の評価と均てん化に関する研究．（主任研究者：伊藤弘人）」平成 23 年度精神疾患関連研究班・報告会，東京，2011.12.13.
2) 野田寿恵：隔離・身体拘束研究の現状 ―eCODO 開発を通して―．厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業「精神科救急医療における適切な治療法とその有効性等の評価に関する研究（研究代表者：伊藤弘人）」平成 23 年度報告会，東京，2011.12.13.
3) 野田寿恵，泉田信行，杉山直也，平田豊明，伊藤弘人：隔離室入室期間の人的資源投入量の検討―行動制限最適化を目指して―．国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所平成 23 年度研究報告会，東京，2012.2.27.

C．講演

1)　伊藤弘人：精神科における地域連携パスについて．鳥取県精神科病院協議会講演会，鳥取，2011.4.17.
2)　伊藤弘人：精神科地域医療クリティカルパスと今後の課題．厚生労働科学研究班―精神科地域医療計画と地域連携パスの勉強会―，東京，2011.5.11.
3)　伊藤弘人：各国の精神科入院制度の比較．精神科七者懇談会，東京，2011.6.10.
4)　伊藤弘人：医療法改正と精神科救急医療. 第 5 回福岡県精神科救急病棟医療学術講演会, 福岡, 2011.6.17.
5)　野田寿恵，杉山直也，伊藤弘人：精神科における臨床指標を用いた質管理，eCODO センターシステム．第 2 回精神科救急医療体制に関する検討会，東京，2011.6.17.
6)　伊藤弘人：精神保健からみた対人保健活動．平成 23 年度専門課程教育(国立保健医療科学院)，埼玉，2011.7.4.
7)　伊藤弘人：精神科医療の今後の展望．Janssen Medical Management Seminar 2011 in Tokyo，東京，2011.7.23.
8)　伊藤弘人：精神科医療安全管理．CNS 倶楽部 2011，福岡，2011.7.30.
9)　伊藤弘人：クリニカルパスに関して. 通信教育「第 31 回上級コース」スクーリング, 神奈川, 2011.10.18.
10)　伊藤弘人：医療計画策定とこれからの精神科病院．東京精神科病院協会講演会，東京，2011.10.27.
11)　伊藤弘人：クリニカルパスに関して．通信教育「第 31 回上級コース」スクーリング，埼玉，2011.12.1.
12)　伊藤弘人：精神疾患と精神科地域連携クリティカルパス．精神科地域連携クリティカルパス講演会，東京，2012.1.21.
13)　伊藤弘人：長野県における次期医療計画の策定と精神疾患．精神保健研修会，長野，2012.1.26.
14)　伊藤弘人：医療政策と精神科医療の質．静岡県精神科医学学術講演会特別講演．静岡，2012.2.4.
15)　伊藤弘人：医療計画策定への期待と保護者制度・入院制度．平成 23 年度精神保健指定医会議．静岡，2012.2.4.
16)　伊藤弘人：クリニカルパスに関して．日本精神科病院協会通信教育「第 31 回上級コース」スクーリング，福岡，2012.2.17.
17)　伊藤弘人：精神科地域連携クリティカルパスについて．日本医療マネジメント学会 2011 年度第 1 回医療連携分科会，東京，2012.2.18.
18)　伊藤弘人：医療計画における精神疾患の医療体制からみたこれからの地域精神保健．泉州中精神障がい者自立支援促進会議関係機関代表者会議，大阪，2012.2.21.
19)　伊藤弘人：統合失調症のおけるチーム医療の実態と今後の地域医療．アドバイザリー会議「統合失調症治療の医療体制と将来の展望」，東京，2012.2.23.
20)　野田寿恵：隔離・身体拘束の現状と最適化に向けて．桜ケ丘記念病院行動制限最小化に関する研修会―隔離・身体拘束の現状と最適化に向けて―，東京，2011.5.13.
21)　奥村泰之：検定力分析と標準化効果量を超えて: 正確度分析と非標準化効果量. 文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 平成 23 年度選定事業 融合的心理科学の創成：心の連続性を探る心理学における効果の大きさとばらつき，東京, 2012.2.25.

D．学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

(3) 座長

1)　伊藤弘人：救急・リエゾン・サービスと制度の改善．第 31 回日本社会精神医学会，東京，2012.3.15.

(4) 学会誌編集委員等

1) 奥村泰之：日本認知療法学会 編集委員
2) 奥村泰之：日本行動療法学会 編集委員

E．研修

(1) 研修企画

1) 伊藤弘人，野田寿恵：平成 23 年度国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所第 5 回精神科医療評価・均てん化研修，東京，2011.6.13-14.

(2) 研修会講師

1) 野田寿恵：「行動制限最小化研修プログラム（パイロット版）」 わが国の行動制限の実態（630 調査より）と臨床指標について．平成 23 年度国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所第 5 回精神科医療評価・均てん化研修，東京，2011.6.13.
2) 野田寿恵：eCODO（行動制限最適化データベースソフト）操作研修．神奈川県立精神医療センター芹香病院，神奈川，2011.11.7.
3) 野田寿恵：eCODO（行動制限最適化データベースソフト）導入研修ー精神保健医療の今後．神奈川県立精神医療センター芹香病院，神奈川，2011.11.21.
4) 野田寿恵：行動制限最小化の動向と eCODO の活用．国立精神・神経医療研究センター病院 eCODO 研修会，東京，2012.1.17.
5) 野田寿恵：疾病と治療．神奈川県立保健福祉大学ゲストスピーカ，神奈川，2012.1.20，2012.1.24，2012.1.27.
6) 野田寿恵：精神保健福祉の動向 ーeCODO と SAKURA プロジェクトー．財団法人復康会沼津中央病院，静岡，2012.2.10.
7) 佐藤真希子：コンシューマーの役割について．平成 23 年度国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所第 5 回精神科医療評価・均てん化研修，東京，2011.6.13.

F． その他

1) 伊藤弘人：「厚生労働省精神障害の正しい理解のための普及啓発に係る調査・研究事業「メンタルヘルス総合情報サイトの効果検証及び拡充に係る調査・研究業務」」企画委員.
2) 伊藤弘人：「平成 22 年度診療報酬改定結果検証に係る調査（平成 23 年度調査）」検討委員会委員.
3) 伊藤弘人：日本精神科病院協会アドバイザリーボード委員.
4) 伊藤弘人：平成 23 年度社会福祉振興助成事業「精神障害者地域移行・地域定着支援推進事業」検討委員.
5) 伊藤弘人：厚生科学審議会地域保健健康増進栄養部会 次期国民健康づくり運動プラン策定専門委員.
6) 伊藤弘人：一般社団法人日本臨床救急医学会「自殺企図者のケアに関する検討委員会」委員.
7) 伊藤弘人：これからの精神科地域医療体制と医療連携．一般公開ホームページ「精神科医療情報総合サイト」eーらぽーる，2011.

9. 精神生理研究部

I. 研究部の概要

研究部および研究室の研究目的

精神生理研究部では，睡眠，意識，認知，感情，意欲等の精神活動を脳科学的にとらえ，その制御メカニズムを明らかにし，これら生理機能の調節障害に基づく各種の睡眠・覚醒障害，気分障害，認知症，神経症・心身症などの病態と治療法を解明することを目的としている．そのために，精神生理学，時間生物学，分子生物学，神経内分泌学，脳機能画像技術などの手法を用いて，学際的な研究を進めている．
部長１名，室長２名に加え，流動研究員２名，科研費研究員６名，協力研究員７名が研究に携わった．これら研究員と国立精神・神経医療研究センター内外の研究・治療協力施設の客員研究員および協力研究者との連携のもとに研究を進めている．

研究者の構成

部長：三島和夫．精神機能研究室長：肥田昌子．臨床病態研究室長：守口善也．流動研究員：榎本みのり，北村真吾．科研費研究員：野崎健太郎，片寄泰子，寺澤悠理，大澤要介，大場健太郎，元村祐貴．協力研究員：阿部又一郎，梶 達彦，宗澤岳史，古田 光，草薙宏明，三盃亜美，田村美由紀．併任研究員：亀井雄一（センター病院），塚田恵鯉子（同）．客員研究員：樋口重和（九州大学），井上雄一（財：神経研究所），内山 真（日本大学），兼板佳孝（日本大学），遠藤拓郎（スリープクリニック調布），大川匡子（滋賀医科大学），松浦雅人（東京医科歯科大学），海老澤 尚（東京警察病院），山寺博史（杏林大学），白川美也子（昭和大学），本多 真（東京都医学研究機構），上田泰己（理化学研究所），池田正明（埼玉医科大学），程　肇（金沢大学），山寺　亘（東京慈恵会医科大学），渡辺範雄（名古屋市立大学），熊野宏明(早稲田大学).

II. 研究活動

精神生理研究部では，厚生労働科学研究費，文部科学省科学研究費等の公的研究費を中心とした競争的研究資金をもとに，下記のような研究に取り組んでいる．研究課題は睡眠覚醒障害，気分障害，生体リズム障害の病態生理に関する基盤的研究から，精神疾患に関わる情動・認知障害のメカニズムの脳科学的解明研究とその臨床応用，臨床疫学等をもとにした医療行政研究，新規診断法・新規治療法の開発と医療現場への展開をめざしたトランスレーショナル研究まで幅広い分野にわたり，国立精神・神経医療研究センター内外の共同研究者との連携のもとに長期的展望をもって進めている．研究成果を国内，国際学会に発表し，刊行物として発刊した．以下に主たる研究課題を列記する．

1. 睡眠障害患者の QOL を改善するための科学的根拠に基づいた診断治療技術の開発（厚生労働科学研究費補助金　障害者対策総合研究事業）

   睡眠障害の臨床転帰が向上しない主因である QOL 障害の臨床特徴と病態生理を解明し，診断精度の高い睡眠障害用 QOL 評価尺度を開発するとともに，現行の薬物療法の問題点を検証し QOL 改善に資する効果的な不眠治療プログラムの作成を目的とした．（主任研究者：三島和夫，分担研究者：守口善也，肥田昌子）

2. 体とこころの恒常性維持及び破綻機構の遺伝子環境相互作用に関する研究（脳科学研究戦略推進プログラム）

   健常被験者の皮膚繊維芽細胞に時計遺伝子リポータールシフェラーゼ遺伝子を導入し，時計遺伝子の発現プロファイルをリアルタイム測定するシステム（末梢時計診断システム）を確立した．光同調時における時計遺伝子転写発現制御にかかわるシグナルパスウェイを明らかにするため，概日時計リポーター遺伝子マウスの培養切片を用いて，明暗サイクル同調時の中枢および末梢時計遺伝子の発現リズム特性を検討した．さらに，健常者を対象として睡眠負債時の不快な情動誘発刺激に

対する過剰反応とその脳内責任領域を明らかにするための脳機能画像研究を行った．（担当責任者：三島和夫）

3. 睡眠医療及び睡眠研究用プラットフォームの構築にかんする研究（研究開発費）（主任研究者：三島和夫）
睡眠障害の診断・治療・病態生理研究のための信頼性の高いフェノタイピングを可能にする症状評価フォーマットと解析システムを作成し、得られた臨床情報と生体試料を連結可能匿名化の上で研究リソースとして活用するためのデータバンクシステムを同一プラットフォーム上に構築した。本プラットフォームを活用して、概日リズム睡眠障害などを対象に生体リズム異常の診断法開発、治療最適化、疾患感受性遺伝子検索などの睡眠医療・病態生理研究を多施設共同で推進した。

4. 睡眠・覚醒リズム障害の迅速かつ高精度な病態診断システムの開発（文部科学省科学研究費補助金基盤研究（B））
健常被験者を対象として、隔離実験により精密に生物時計周期 τ を決定し，各被験者から樹立した初代培養細胞における概日リポーター遺伝子発光リズム周期との間に正の相関を示していることを確認した．末梢細胞における時計遺伝子発現リズム測定は，個人の生物時計 in vitro 評価法として有用であることが示唆された．（主任研究者：三島和夫，分担研究者：肥田昌子）

5. 就学前後の児童における発達障害の有病率とその発達的変化：地域ベースの横断的および縦断的研究（厚生労働科学研究費補助金　障害者対策総合研究事業）（分担研究者：三島和夫）
地域在住の就学前幼児をもつ保護者を対象として、睡眠習慣調査および睡眠障害スクリーニング調査を就学前後で実施し、同年齢帯における睡眠問題の実態を把握する事業を開始した。就学前幼児期における PDD 児の睡眠障害の特徴を抽出し、縦断追跡が可能な対象児については経年的に発達データを採取し、PDD の臨床経過における睡眠障害の出現時期、障害特性について分析を進めた。

6. 向精神薬の処方実態に関する国内外の比較研究）（厚生労働科学研究費補助金（特別研究事業））
大規模診療報酬データから，日本国内における向精神薬の処方実態を明らかにした．安全性に優れた治療ストラテジーや長期処方を回避するための減薬方法を含め，適正使用に関するガイドラインを整備する必要を示した．（分担研究者：三島和夫）

7. 健康づくりのための休養や睡眠の在り方に関する研究　（厚生労働科学研究費補助金　循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）
健康づくりのための休養や睡眠の在り方についての指針の改定や，健康づくりのための休養，睡眠に関する正しい知識の普及啓発のため、各種の縦断的疫学調査等を行い，休養指針と睡眠指針を基盤とした休養・睡眠の自己調節プログラムを開発した．（分担研究者：三島和夫）

8. リアルタイム fMRI による脳機能画像を用いた，ストレス関連疾患の治療法に関する研究（厚生労働科学研究費補助金　障害者対策総合研究事業）
ストレス関連疾患に対する、ニューロフィードバックの治療的応用をするために、リアルタイムに撮像された画像をリモートに転送するシステムを構築した。次に、脳活動を、撮像と同時にオンラインに被験者にフィードバックするソフトウェアを開発し、聴覚刺激のコントロールや、恐怖刺激に対する視覚的な注意のネットワークのコントロールが可能であることを示した。（主任研究者：守口善也）

9. アレキシサイミアにおける、自己意識・メタ認知に関する統合的脳機能画像研究（文部科学省科学研究費補助金　基盤研究（B））
アレキシサイミア（失感情症）において、自己意識の問題を解決するための課題を開発した。まず運動の自己感 agency に関して,トラックボールを用いて PC 上のピンボールを、遅延フィードバックをかけた状態で追跡する手指の運動学習課題を開発した。さらに自己一貫性に関する課題として,ゴムの手の錯覚課題を MRI 中に行うための器具・システムを開発し、脳活動を fMRI で測定可能な状態にした。（主任研究者：守口善也）

10. 発達性「読み」障害に関する臨床的、計算論的、脳機能研究（文部科学省科学研究費補助金　基盤研究（B））
機能的 MRI（fMRI）を用いて、漢字黙読課題中の脳賦活部位を fMRI で検討した。結果、非実在語の黙読課題中においてのみ左縁上回に有意な賦活が認められ、不規則語よりも規則語の方が、左下頭頂小葉において、有意に高い賦活が認められた。規則的な読みが可能な刺激の場合に、英語圏同様に左下頭頂小葉での処理が関与していることを示唆していると思われた。（分担研究者：守口善也）

11. 睡眠障害・生体リズム障害の新規治療薬候補物質の探索（厚生労働科学研究費補助金　創薬基盤推進研究事業）
複雑な生命現象をつかさどる遺伝子群の発現制御に重要な役割を担うタンパク質間の相互作用を標的として構築された低分子化合物ライブラリーをスクリーニングし，睡眠障害・生体リズム障害の病態生理の背景に存在する生物時計機能に作用する候補物質を探索した．（主任研究者：肥田昌子）

12. 躁うつ病における Wnt シグナル系と生物時計システム（文部科学省科学研究費補助金若手（B））
健常成人被験者から樹立した初代線維芽培養細胞に概日リポーター遺伝子を導入し，培養細胞中における概日リポーター遺伝子発光リズムを測定した．Wnt シグナル系の選択的阻害化合物の投与により，培養細胞中のリポーター遺伝子発光リズムが阻害されたことから，Wnt シグナル系が時計遺伝子発現リズム形成に関わることが示唆された．（主任研究者：肥田昌子）

13. ヒト網膜のメラノプシンの遺伝子多型およびその機能的役割の解明（文部科学省科学研究費補助金挑戦的萌芽研究）
色覚異常のない健常若年者に対して，白色蛍光灯を用いた室内照明下での薄明視と明所視における瞳孔面積を測定し，被験者のメラノプシン遺伝子多型間で比較を行った．その結果，光に対する瞳孔反応は照度によって異なり，メラノプシン遺伝子多型が瞳孔調節反応に影響を及ぼしている可能性が示唆された．（分担研究者：肥田昌子）

14. 光の生理心理作用の脳内機序と健康リスクへの適応（文部科学省科学研究費補助金　基盤研究（B））
光に対する生体反応の個体差の生理的基盤を明らかにするため，健常若年成人を対象として網膜の耳側と鼻側に LED 光を照射した結果，赤色光と青色光に共通してメラトニン抑制量では差がみられず瞳孔の縮瞳量で有意な差がみられたことから，錐体の密度分布を反映した結果と考えられた．また網膜の耳側の一部分で青色光が赤色光に比べて縮瞳が有意に大きく，この違いはメラノプシンの密度分布を反映している可能性が示唆された．（分担研究者：北村真吾）

15. 睡眠調節に関与する生体リズム調節機構と恒常性維持機構との機能的連関の解明（文部科学省科学研究費補助金　若手研究（B））
睡眠圧の増加・解消という睡眠恒常性機能と生物時計調節機構の個人特性との関連を明らかにすることを目的とし、12 時間の睡眠機会を繰り返し行う睡眠の回復評価実験を実施し、生物時計調節機

構の表現型とされる日周指向性と睡眠パラメータとの比較を試みた。（主任研究者：北村真吾）

Ⅲ．社会的活動に関する評価

1）市民社会に対する一般的な貢献

各研究員は，都民・市民のための公開講座，講演会などにおいて睡眠と健康づくり，睡眠障害および関連する健康問題などについての普及啓発に努めた．NHK テレビ，民放テレビ，ラジオ，新聞，雑誌等のメディアを通して，睡眠習慣および睡眠問題の重要性について普及啓発活動を行った．

2）専門教育面における貢献

各研究員は，国内各地の学術集会，研究会，談話会，医師会講演会などで睡眠障害，気分障害，認知症の睡眠行動障害等の治療と予防について講演した．また，東京医科歯科大学，早稲田大学，秋田大学など教育機関の非常勤講師として学生教育の援助を行った．また，日本睡眠学会，日本時間生物学会，日本生物学的精神医学会，日本公衆衛生学会，不眠研究会，睡眠学研究会，関東睡眠障害懇話会，日本生理人類学会などにおける理事，評議員，世話人としての活動を通じて睡眠障害診療従事者の研究及び教育のサポートを行った．国際老年精神医学会，米国睡眠学会，ヨーロッパ睡眠学会，国際時間生物学会等，等において講演者，シンポジスト，オーガナイザーとして研究成果を発表し，各国の第一線の研究者達と意見交換を行った．

3）保健医療行政・政策に関連する研究･調査，委員会等への貢献

三島和夫は，国民健康・栄養調査企画解析検討会構成員として，同調査の項目策定と調査実行に関わった. 厚労省薬事･食品衛生審議会において専門協議委員, 参考人として複数の新薬の審査にたずさわった. JAXA 国際宇宙ステーション「きぼう」利用推進委員会宇宙医学シナリオ WG 委員として宇宙医学研究の指針策定にたずさわった.

4）その他

研究員は，国立精神・神経医療研究センター病院において睡眠障害専門外来を開設し，専門的診療を行った．複数の新規睡眠薬の臨床治験に関わった．複数の企業から要請された治療薬剤および診断機器の安全性，有効性，機能向上に関する受託研究に関わった．

Ⅳ．研究業績

Ａ．刊行物

(1) 原著論文

1) Gamble KL, Motsinger-Reif AA, Hida A, Borsetti HM, Servick SV, Ciarleglio CM, Robbins S, Hicks J, Carver K, Hamilton N, Wells N, Summar ML, McMahon DG, Johnson CH: Shift work in nurses: contribution of phenotypes and genotypes to adaptation. PLoS One 6: e18395, 2011.

2) Moriguchi Y, Negreira A, Weierich M, Dautoff R, Dickerson BC, Wright CI, Barrett LF: Differential hemodynamic response in affective circuitry with aging: an FMRI study of novelty, valence, and arousal. J Cogn Neurosci 23: 1027-41.

3) Ota M, Fujii T, Nemoto K, Tatsumi M, Moriguchi Y, Hashimoto R, Sato N, Iwata N, Kunugi H: A polymorphism of the ABCA1 gene confers susceptibility to schizophrenia and related brain changes. Prog Neuropsychopharmacol Biol Psychiatry. 35(8): 1877-83, 2011.

4) Uchimura N, Kuwahara H, Kumagai Y, Mishima K, Inoue Y, Rayner CR, Toovey S, Davies BE, Hosaka Y, Abe M, Prinssen EP: Absence of adverse effects of oseltamivir on sleep: a

double-blind, randomized study in healthy volunteers in Japan. Basic Clin Pharmacol Toxicol 109: 309-14.

5) Kuriyama K, Mishima K, Soshi T, Honma M, Kim Y: Effects of sex differences and regulation of the sleep-wake cycle on aversive memory encoding. Neurosci Res 70: 104-10, 2011.

6) Shi S, Hida A, McGuinness OP, Wasserman DH, Yamazaki S, Johnson CH: Circadian clock gene Bmal1 is not essential; functional replacement with its paralog, Bmal2. Curr Biol 20: 316-21, 2011.

7) Hida A, Kitamura S, Enomoto M, Nozaki K, Moriguchi Y, Echizenya M, Kusanagi H, Mishima K: Individual traits and environmental factors influencing an individual's sleep timing: a study of 225 Japanese couples. Chronobiol Int, 29: 220-6, 2011.

8) Terasawa Y, Fukushima H, Umeda S: How does interoceptive awareness interact with the subjective experience of emotion? An fMRI Study. Hum Brain Mapp, DOI:10.1002/hbm. 21458, 2011.

9) 梶 達彦，三島和夫，北村真吾，榎本みのり，長瀬幸弘，李 嵐，兼板佳孝，大井田 隆，西川 徹，内山 真：中高年における抑うつ症状の出現と生活上のストレスとの関連－日本の一般人口を代表する大規模集団での横断研究－．精神神経学雑誌 113：653-61，2011.

(2) 総説

1) Hida A, Kitamura S, Mishima K: Pathophysiology and pathogenesis of circadian rhythm sleep disorders. Journal of Physiological Anthropology 31, 7, 2012.

2) 三島和夫：概日リズム睡眠障害研究における課題．睡眠医療 5：9-10，2011.

3) 三島和夫，北村真吾：現代社会が子どもの脳に及ぼす影響．小児内科 43：819-23，2011.

4) 三島和夫：睡眠公衆衛生とは何か　予防的視点の重要性．保健師ジャーナル 67(7)：574-8，2011.

5) 三島和夫，北村真吾：不眠症治療の考え方と実践－リズム調節から考える．Life Style Medicine 5(1)：33-40，2011.

6) 三島和夫：概日リズム睡眠障害を鑑別診断するための基本的診察法．診断と治療 99：1341-7，2011.

7) 三島和夫：睡眠のメカニズムとその障害．薬局 62(10)：13-9，2011.

8) 三島和夫：うつ病の非薬物療法の科学－時間療法という選択肢の根拠を探る－．こころのりんしょう à la carte　30(3)：368-72，2011.

9) 三島和夫：睡眠と生活習慣病．公衆衛生 75(10)：755-9，2011.

10) 三島和夫：冬季のうつ病と睡眠障害．実験　治療 704：39-44，2011.

11) 三島和夫：リズム障害．Mebio 29(3)：70-9，2012.

12) 三島和夫：高齢者の睡眠．Medical 41(3)：18-9，2012.

13) 三島和夫：不眠症の診断・治療ガイドライン．CLINICIAN 59(2)：22-9，2012.

14) 三島和夫：不眠症治療のゴールとは何か－今後の睡眠薬に求められること－．睡眠医療 6(suppl)：172-8，2012.

15) 肥田昌子：概日リズム睡眠障害の病態生理．睡眠医療 5：11-5，2011.

16) 肥田昌子，三島和夫：認知症患者の概日リズムの乱れに対するメラトニン治療の効果－せん妄に対しても効果はあるか？．Cognition and Dementia 10(2)：62-3，2011.

17) 肥田昌子，三島和夫：概日リズム睡眠障害の病態生理研究の動向．日本生物学的精神医学会誌 22(3)：165-70，2011.

18) 肥田昌子，三島和夫：気分障害と生物時計システム－リズム異常をもたらす生物時計機能障害評価法．医学のあゆみ 239(9)：907-11，2011.

19) 守口善也：コミュニケーション障害 アレキシサイミアと感情認知の脳機能画像解析　社会性の観点から．認知神経科学 13：34-42，2011.

20) 北村真吾：生物リズム障害の視点から見た不眠症．睡眠医療 5：62-7，2011.
21) 片寄泰子，三島和夫：抗ヒスタミン薬の睡眠改善効果．睡眠医療 6(1)：76-7，2012.
22) 亀井雄一，榎本みのり：概日リズム睡眠障害の診断技法．睡眠医療 5：29-33，2011.
23) 亀井雄一：日光浴などの光照射による睡眠改善．薬局 62(10)：113-7，2011.

(3) 著書

1) 三島和夫：季節性感情障害．山内俊雄，小島卓也，倉知正佳編：専門医をめざす人の精神医学，医学書院，東京，pp460-3，2011.
2) 三島和夫：第 6 章　睡眠覚醒リズム障害の体内時計機構と時間治療．柴田重信編：体内時計の科学と産業応用，シーエムシー出版，東京，pp48-65，2011.
3) 三島和夫：3. 松果体ホルモン・メラトニン．宮崎総一郎，井上雄一編：睡眠教室　夜の病気たち，新興医学出版社，東京，pp14-23，2011.
4) 三島和夫：季節性感情障害．「臨床精神医学」編集委員会：精神科・わたしの診療手帳，アークメディア，東京，pp183-5，2011.
5) 三島和夫：睡眠相前進症候群．樋口輝彦，市川宏伸，神庭重信，朝田隆，中込和幸編：今日の精神疾患治療方針，医学書院，東京，pp546-9，2012.
6) 三島和夫：睡眠ポリグラフ．樋口輝彦，市川宏伸，神庭重信，朝田隆，中込和幸編：今日の精神疾患治療方針，医学書院，東京，pp705-6，2012.
7) 三島和夫：断民療法．樋口輝彦，市川宏伸，神庭重信，朝田隆，中込和幸編：今日の精神疾患治療方針，医学書院，東京，pp792-4，2012.
8) 三島和夫：高照度光療法．樋口輝彦，市川宏伸，神庭重信，朝田隆，中込和幸編：今日の精神疾患治療方針，医学書院，東京，pp794-5，2012.

(4) 研究報告書

1) 主任研究者；三島和夫，分担研究者；井上雄一，内村直尚，本多真，山寺 亘，渡辺範雄，肥田昌子，守口善也，分担協力者；兼板佳孝，片寄泰子，野崎健太郎，岡島 義，中島 俊：睡眠障害患者の QOL を改善するための科学的根拠に基づいた診断治療技術の開発．厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業「睡眠障害患者の QOL を改善するための科学的根拠に基づいた診断治療技術の開発」　平成 23 年度　総括・分担研究報告書：pp1-14，2012.
2) 分担研究者；肥田昌子，研究協力者；北村真吾，榎本みのり，野崎健太郎，片寄泰子，大澤要介：睡眠障害患者の QOL を改善するための科学的根拠に基づいた診断治療技術の開発．厚生労働科学研究費補助金　障害者対策総合研究事業「睡眠障害患者の QOL を改善するための科学的根拠に基づいた診断治療技術の開発」　平成 23 年度　総括・分担研究報告書：pp43-7，2012.
3) 分担研究者；守口善也，研究協力者；寺澤悠理，元村祐貴，大場健太郎，北村真吾，村上裕樹，金山裕介，三島和夫：不眠症の QOL 評価に関する脳機能画像研究．厚生労働科学研究費補助金　障害者対策総合研究事業「睡眠障害患者の QOL を改善するための科学的根拠に基づいた診断治療技術の開発」　平成 23 年度　総括・分担研究報告書：pp49-68，2012.
4) 研究代表者；守口善也：リアルタイム fMRI による脳機能画像を用いた、ストレス関連疾患の治療法に関する研究．厚生労働科学研究費補助金　障害者対策総合研究事業「リアルタイム fMRI による脳機能画像を用いた、ストレス関連疾患の治療法に関する研究」平成 23 年度　総括研究報告書：pp1-29, 2012.
5) 研究代表者；肥田昌子：睡眠障害・生体リズム障害の新規治療薬候補物質の探索．厚生労働科学研究費補助金　創薬基盤推進研究事業「睡眠障害・生体リズム障害の新規治療薬候補物質の探索に関する研究」平成 22 年度～23 年度　総合研究報告書：pp1-18，2012.
6) 研究代表者；肥田昌子：睡眠障害・生体リズム障害の新規治療薬候補物質の探索．厚生労働科学研

究費補助金　創薬基盤推進研究事業「睡眠障害・生体リズム障害の新規治療薬候補物質の探索に関する研究」平成 23 年度　総括研究報告書：1-12, 2012.

(5) 翻訳

(6) その他

1) 三島和夫：今、子どもの生活リズムが危ない！　遅寝・睡眠不足は成長の大敵．AERA with Baby 18，pp32-47，2011
2) 三島和夫：震災後の不眠症を長引かせないためには？．空前の M9.0!!　原発・大震災サバイバルブック：週刊朝日臨時増刊 2011 年 5 月 25 日号，p93，2011.
3) 三島和夫：自力で乗り切る究極の休息法．週刊文春：p18，2011.
4) 三島和夫：東日本大震災、そして小考．精神医学 53(6)：520-1，2011.
5) 三島和夫：昼を快適に過ごす“本当に満足のいく眠り”－本当にいい睡眠を手に入れるには？－．日経ヘルス　2011 年 9 月号，112-3，2011.
6) 三島和夫：眠りに導く生活習慣．きょうの健康　睡眠の病気，pp68-73，2011.
7) 三島和夫：心地よく眠れる環境．きょうの健康　睡眠の病気，pp74-7，2011.
8) 三島和夫：【監修】不眠に関する意識調査．エスタブリッシュ医薬品事業部門コミュニケーション部編，ファイザー(株)プレスリリース，東京，2011.
9) 三島和夫：特集にあたって．薬局 62(10)：11，2011.
10) 三島和夫：体内時計のコントロールが睡眠の質アップの鍵．日経ヘルス・フォーメン　食べて腹やせ 日経トレンディ 11 月号臨時増刊：98-9，2011.
11) 三島和夫：被災 3 県　不眠症 5 倍に．讀賣新聞，10 月 15 日号，2011.
12) 三島和夫：震災後不眠　見過ごさないで．朝日新聞，11 月 1 日号，2011.
13) 三島和夫：【監修】そもそもなぜ、ヒトは眠るのか？．Tarzan 592，16-23，2011.
14) 三島和夫：【監修】体脂肪、燃えるのはどっち？　生体リズム．Tarzan 595，18-9，2011.
15) 三島和夫：大規模災害時の睡眠問題をめぐり論議．Medical Tribune 45(5)，17，2012.
16) 三島和夫：ぐっすり眠れるすごい技術－慢性不眠－．安心 30，124-5，2012.
17) 對木 悟，笹井妙子，榎本みのり：第 20 回 ESRS 印象記－ユーラシア大陸最西端の街リスボンへ－．睡眠医療 5：99-101，2011.

B．学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

1) Moriguchi Y:【Symposium】Social Neuroscience of Alexithymia. The 21st World Congress on Psychosomatic Medicine, Korea, 2011.8.25-28.
2) Hida A:【Plenary Symposia】Genetic and physiological phenotyping of circadian rhythm sleep disorders. Worldsleep2011, Kyoto, 2011.10.16-20.
3) Enomoto M, Kitamura S, Hida A, Nozaki K, Kamei Y, Katayose Y, Mishima K:【Abstract Symposium】Clinical significance of phase determination of melatonin rhythms for the treatment of circadian rhythm sleep disorders. Worldsleep2011, Kyoto, 2011.10.16-20.
4) Kitamura S, Enomoto M, Tsukada E, Kamei Y, Koyama T, Moriwaki A, Kamio Y, Mishima K:【Abstract Symposium】Sleep habits and sleep problems in school-aged children in Japan: A cross-sectional study. Worldsleep2011, Kyoto, 2011.10.16-20.
5) Tsukada E, Kitamura S, Enomoto M, Kamei Y, Koyama T, Asada T, Kamio Y, Mishima K:【Abstract Symposium】Association between symptoms of sleep-disordered breathing and

daytime sleepiness with school-aged children in Japan: A large-scale cross-sectional survey. Worldsleep2011, Kyoto, 2011.10.16-20.

6) 三島和夫：【講演】睡眠とこころの健康．食品化学新聞社　睡眠科学セミナー，東京，2011.5.19.

7) 三島和夫：【特別講演】不眠症のより精緻な診断と治療をめざしてー不眠を 3 つの視点から診分けるー．会津医学会　学術講演会，福島，2011.8.4.

8) 三島和夫：第 1 回ラメルテオン錠治療研究会，東京，2011.8.7.

9) 三島和夫：【特別講演】震災後の心のケアと睡眠．柴田郡医師会学術講演会，宮城，2011.8.26.

10) 三島和夫：睡眠障害の現状とその対応について．ファイザー(株)　プレスセミナー, 東京, 2011.8.31.

11) 三島和夫：【特別講演】生物時計の調節異常に起因する睡眠障害ー最近の幾つかの知見からー．第 38 回旭川睡眠医学カンファレンス，北海道，2011.9.7.

12) 三島和夫：【シンポジウム】生体リズム異常と肥満・代謝障害．第 32 回日本肥満学会，兵庫，2011.9.23-24.

13) 三島和夫：【特別講演】うつ病における不眠と過眠の臨床的意義とその対処．千葉県うつ病治療学術講演会，千葉，2011.10.6.

14) 三島和夫：【パネルディスカッション】抗うつ薬の有効性及び睡眠に対する影響について．千葉県うつ病治療学術講演会，千葉，2011.10.6.

15) 三島和夫：【シンポジウム】睡眠薬の長期使用、服用量増大の実態とその対処課題．日本睡眠学会第 36 回定期学術集会，京都，2011.10.15-16.

16) 三島和夫：【シンポジウム】東日本大震災に関わる睡眠問題の実態について．日本睡眠学会第 36 回定期学術集会，京都，2011.10.15-16.

17) 三島和夫：【シンポジウム】加齢・認知症と生体リズム．第 21 回臨床精神薬理学会・第 41 回日本神経精神薬理学会合同年会，東京，2011.10.27-29.

18) 三島和夫：【NP 精神科専門薬剤師精神医学セミナー】向精神薬の適正使用について：抗うつ薬と睡眠薬をめぐる問題点. 第 21 回臨床精神薬理学会・第 41 回日本神経精神薬理学会合同年会, 東京, 2011.10.27-29.

19) 三島和夫：【講演】五大疾病に追加された精神疾患と睡眠の重要性．第 3 回 大阪オープン・イノベーション・マッチング会（ライフイノベーション），大阪，2011.11.8.

20) 三島和夫：【講演】生物時計の調節異常に起因する睡眠障害　ー最近の幾つかの知見からー．男鹿南秋地区学術講演会，秋田，2011.11.22.

21) 三島和夫：【シンポジウム】現代社会と睡眠問題．日本学術会議主催「脳と意識」、「神経科学」、「脳とこころ」分科会　合同シンポジウム「脳と睡眠」，東京，2011.12.10.

22) 三島和夫：【講演】「最新の不眠症治療戦略」ー薬物療法と認知行動療法的アプローチー．石巻市不眠症治療講演会，岩手，2012.2.2.

23) 三島和夫：【特別講演】認知症と睡眠．第 28 回多摩田園臨床精神医学研究会，神奈川，2012.2.17.

24) 三島和夫：【講演】睡眠障害の基礎知識　スクリーニング能力アップ．南多摩保健所講演会，東京，2012.2.23.

25) 三島和夫：【特別講演】うつ病診療で留意すべき睡眠の諸問題．日本精神科病院協会岩手支部学術講演会，岩手，2012.2.24.

26) 三島和夫：【講演】認知症診断とケアに関する講演．慧眞会協和病院講演会，秋田，2012.3.12.

27) 三島和夫：【ランチョンセミナー】精神医療で留意すべき睡眠障害とその対策．第 31 回日本社会精神医学会，東京，2012.3.15-16.

28) 守口善也：【シンポジウム】精神・心身医学へのイメージング応用の展望．脳病態統合イメージングセンター　Integrative Brain Imaging Center 開設記念シンポジウムー統合イメージングによる精神・神経疾患へのアプローチをめざしてー，東京，2011.7.21.

(2) 一般演題

1) Hida A, Kitamura S, Watanabe M, Enomoto M, Aritake S, Higuchi S, Nozaki K, Kato M, Moriguchi Y, Mishima K: 【Poster】Evaluation of individual's circadian clock properties at physiological and molecular levels. SLEEP 2011, 25th Anniversary Meeting of the Associated Professional Sleep Societies, LLC (APSS), Minneapolis, Minnesota(USA), 2011.6.11-15.

2) Hida A, Kitamura S, Watanabe M, Enomoto M, Katayose Y, Aritake S, Higuchi S, Kato M, Moriguchi Y, Ikeda M, Mishima K: 【Poster】Assessment of individual circadian phenotypes using biopsy samples. Neuroscience 2011, Washington, DC, 2011.11.12-16.

3) Hida A, Osawa Y, Kitamura S, Watanabe M, Enomoto M, Katayose Y, Nozaki K, Aritake S, Higuchi S, Kato M, Moriguchi Y, Ikeda M, Mishima K: 【Poster】Assessment of individual circadian phenotypes using biopsy samples －Application to Circadian Rhythms Sleep Disorder patients－. International symposium "Designing the circadian clock", Aichi, 2011.11.25-26.

4) Oosterwijk S, Lindquist K, Anderson E, Dautoff R, Moriguchi Y, Barrett L: 【Poster】Mapping the mind: A constructionist view on how mental states emerge from the brain. The Society for Social Neuroscience, Washington, DC, 2011.11.10-11.

5) Moriguchi Y, Komaki G, Hida A, Mishima K: 【Poster】Neural basis for human sensitivity to emotional changes of facial expression: An fMRI study. Neuroscience 2011, Washington, DC, 2011.11.12-16.

6) Moriguchi Y, Touroutoglou A, Dautoff R, Dickerson B, Terasawa Y, Oba K, Mishima K, Barrett L: 【Poster】Neural correlates of differences of affective experience between men and women. American Psychosomatic Society (APS)2012, Athens, Greece, 2012.3.14-17.

7) Kitamura S, Enomoto M, Kamei Y, Koyama T, Kuroda M, Inada N, Moriwaki A, Kamio Y, Mishima K: 【Poster】Association between delayed bedtime and sleep problems among community-dwelling 2-year-old children in Japan. SLEEP 2011, 25th Anniversary Meeting of the Associated Professional Sleep Societies, LLC (APSS), Minneapolis, Minnesota(USA), 2011.6.11-15.

8) Kitamura S, Hida A, Watanabe M, Enomoto M, Aritake-Okada S, Moriguchi Y, Kamei Y, Mishima K: 【Poster】Physiological characteristics of patients with circadian rhythm sleep disorder (free-running type). SLEEP 2011, 25th Anniversary Meeting of the Associated Professional Sleep Societies, LLC (APSS), Minneapolis, Minnesota(USA), 2011.6.11-15.

9) Kitamura S, Enomoto M, Tsukada E, Kamei Y, Koyama T, Moriwaki A, Kamio Y, Mishima K: 【Poster】Sleep habits and sleep problems in school-aged children in Japan: A cross-sectional study. Worldsleep2011, Kyoto, 2011.10.16-20.

10) Kitamura S, Hida A, Watanabe M, Enomoto M, Katayose Y, Nozaki K, Aritake-Okada S, Higuchi S, Moriguchi Y, Kamei Y, Mishima K: 【Poster】Circadian characteristics in nonentrained type of circadian rhythm sleep disorder. Neuroscience 2011, Washington, DC, 2011.11.12-16.

11) Enomoto M, Kitamura S, Tachimori H, Mishima K: 【Poster】Long-term use of hypnotics in Japan. Worldsleep2011, Kyoto, 2011.10.16-20.

12) Katayose Y, Kitamura S, Enomoto M, Aritake S, Nozaki K, Hida A, Moriguchi Y, Kamei Y, Mishima K: 【Poster】Residual sedative effects on next-day alertness and psychomotor performance of bedtime administered antihistamine -Randomized controlled trial-. Worldsleep2011, Kyoto, 2011.10.16-20.

13) Tsukada E, Kitamura S, Enomoto M, Kamei Y, Koyama T, Asada T, Kamio Y, Mishima K: 【Poster】Association between symptoms of sleep-disordered breathing and daytime sleepiness

with school-aged children in Japan: A large-scale cross-sectional survey. Worldsleep2011, Kyoto, 2011.10.16-20.

14) Tamura M, Higuchi S, Hida A, Enomoto M, Moriguchi Y, Mishima K: 【Poster】Individual differences influence on the effects of sleep deprivation during face recognition. Worldsleep2011, Kyoto, 2011.10.16-20.

15) Higuchi S, Hida A, Kinjyo Y, Miyahira M, Fukuda T, Yasukouchi A, Mishima K: 【oral】Association between melanopsin gene polymorphism and pupillary light response in a Japanese young population. 23rd Annual Meeting of the Society for Light Treatment and Biological Rhythms, Canada, 2011.7.10-13.

16) Oba K, Noriguchi M, Atomi A, Matsuoka A, Terasawa Y, Kanayama Y, Moriguchi Y, Mishima K, Kikuchi Y: 【Poster】The neural substrates of positive emotion induction associated with remote autobiographical memory. American Psychosomatic Society (APS)2012, Athens, Greece, 2012.3.14-17

17) Murakami H, Moriguchi Y, Hida A, Mishima K: 【Poster】Neural basis for the mindful coping for affective pictures. American Psychosomatic Society (APS)2012, Athens, Greece, 2012.3.14-17.

18) 三島和夫：【ポスター】ヒトの睡眠と体内時計の調節メカニズムとその測定法．第 4 回脳プロ公開シンポジウム，東京，2012.2.4.

19) 肥田昌子，北村真吾，渡邊真紀子，榎本みのり，片寄泰子，野崎健太郎，有竹清夏，樋口重和，加藤美恵，守口善也，池田正明，三島和夫：【ポスター発表】個人の生物時計機能の生理・分子レベルでの評価．第 33 回日本生物学的精神医学会，東京，2011.5.21-22.

20) 肥田昌子，北村真吾，榎本みのり，野崎健太郎，片寄泰子，加藤美恵，渡邊真紀子，有竹清夏，樋口重和，守口善也，池田正明，三島和夫：【ポスター発表】末梢組織を利用した生物時計機能評価法．第 34 回日本神経科学大会－こころの脳科学－，神奈川，2011.9.14-17.

21) 肥田昌子，大澤要介，北村真吾，榎本みのり，片寄泰子，野崎健太郎，守口善也，亀井雄一，池田正明，三島和夫：【口頭発表】生体組織を利用した生物時計機能評価－概日リズム睡眠障害者への応用－．第 18 回日本時間生物学会学術大会，2011.11.24-25.

22) 肥田昌子，大澤要介，北村真吾，榎本みのり，片寄泰子，野崎健太郎，守口善也，亀井雄一，池田正明，三島和夫：【ポスター発表】生体組織を利用した生物時計機能評価－概日リズム睡眠障害者への応用－．第 18 回日本時間生物学会学術大会，2011.11.24-25.

23) 北村真吾，肥田昌子，渡邊真紀子，榎本みのり，片寄泰子，野崎健太郎，村上裕樹，守口善也，三島和夫：【ポスター発表】概日リズム睡眠障害における生体機能リズム特性．第 33 回日本生物学的精神医学会，東京，2011.5.21-22.

24) 北村真吾，肥田昌子，渡邊真紀子，榎本みのり，片寄泰子，野崎健太郎，岡田（有竹）清夏，樋口重和，守口善也，亀井雄一，三島和夫：【ポスター発表】概日リズム睡眠障害（自由継続型）と健常対照者における概日リズム機能．第 34 回日本神経科学大会－こころの脳科学－，神奈川，2011.9.14-17.

25) 北村真吾，肥田昌子，榎本みのり，片寄泰子，野崎健太郎，元村祐貴，樋口重和，亀井雄一，三島和夫：【ポスター】視覚が健常な概日リズム睡眠障害（自由継続型）患者は長い概日リズム周期を持つ．第 18 回日本時間生物学会学術大会，2011.11.24-25.

26) 片寄泰子，北村真吾，榎本みのり，有竹清夏，野崎健太郎，肥田昌子，守口善也，亀井雄一，三島和夫：【一般口演】鎮静性抗ヒスタミン薬の就寝前投与が翌日の精神運動機能に及ぼす影響．第 33 回日本生物学的精神医学会，東京，2011.5.21-22.

27) 榎本みのり，三島和夫，古田 光，北村真吾，片寄泰子，野崎健太郎，肥田昌子，守口善也：【ポスター発表】日本における 5 年間の抗うつ薬の処方実態－睡眠薬との併用－．第 8 回日本うつ病学会総会，大阪，2011.7.1.

28) 野崎健太郎：【ポスター発表】睡眠障害患者の主観的睡眠状態が日中の生活の質に及ぼす影響．日本睡眠学会第 36 回定期学術集会，京都，2011.10.15-16.
29) 野崎健太郎，亀井雄一，榎本みのり，北村慎吾，肥田昌子，片寄泰子，守口善也，三島和夫：【ポスター】不眠症患者における QOL と主観的睡眠状態および抑うつとの関連の検討．日本行動療法学会第 37 回大会，2011.11.26-28.
30) 元村祐貴，大場健太郎，寺澤悠理，片寄泰子，北村真吾，榎本みのり，守口善也，樋口重和，三島和夫：【ポスター】部分断眠による睡眠負債が情動反応に与える影響：機能的 MRI を用いた検討．日本生理人類学会第 65 回大会，大阪，2011.11.26-27.
31) 田村美由紀，守口善也，樋口重和，肥田昌子，榎本みのり，北村真吾，梅沢 淳，三島和夫：【ポスター発表】思春期後期の神経発達基盤－リスク行動観察から－．第 34 回日本神経科学大会－こころの脳科学－，神奈川，2011.9.14-17.
32) 樋口重和，宮平 学，福田知美，肥田昌子：【口頭発表】メラノプシン遺伝子多型と瞳孔の対光反応の関係．日本生理人類学会第 65 回大会，大阪，2011.11.26-27.

(3) 研究報告会

C．講演

1) 三島和夫：【一般向け講演】睡眠のメカニズムと生活習慣病予防改善への効果．からだ講演会「睡眠と健康　よく眠りよく生きる」，東京，2011.5.17.
2) 三島和夫：【一般向け講演】睡眠の質と睡眠障害について．健康講座「睡眠の質と睡眠障害について」，東京，2011.7.5.
3) 三島和夫：【一般向け講演】質のよい眠りをとるために　～注意すべき睡眠習慣・睡眠障害～．長野県大町講演会，長野，2011.12.1.
4) 三島和夫：【一般向け講演】ここちよく眠るために．中野区　健康づくり講座，東京，2012.2.20.

D．学会活動（学会主催，学会役員，座長，編集委員等）

(1) 学会主催
(2) 学会役員

三島和夫：日本睡眠学会理事
日本時間生物学会理事
日本生物学的精神医学会評議員
日本公衆衛生学会評議員
肥田昌子：日本時間生物学会評議員

研究会役員

三島和夫：睡眠障害とうつ症状の研究会世話人
関東睡眠懇話会世話人
精神科臨床睡眠懇話会世話人

学会員

三島和夫：日本精神神経学会
日本生物学的精神医学会
日本老年精神医学会
日本人類遺伝学会
日本精神・行動遺伝医学学会
日本うつ病学会

Sleep Research Society
Society for Research on Biological Rhythms
守口善也：American Psychosomatic Society
日本心身医学会
肥田昌子：Society for Research on Biological Rhythms
American Academy of Sleep Medicine
日本睡眠学会

(3) 座長

1) 三島和夫：【シンポジウム・座長】睡眠薬の適正使用に向けて．日本睡眠学会第 36 回定期学術集会，京都，2011.10.15-16.
2) 三島和夫：【モーニングセミナー・座長】高齢者の睡眠障害　ーその評価と対応ー．日本睡眠学会第 36 回定期学術集会，京都，2011.10.15-16.
3) Mishima K: 【Plenary Symposia・Organizers】Genetic and physiological phenotyping of human clock system and its psycho-sociological impact on modern human society. Worldsleep2011, Kyoto, 2011.10.16-20.
4) 三島和夫：【シンポジウム・司会】睡眠医学と精神医療のリンケージによる効果的な治療プログラムの提案．第 107 回日本精神神経学会総会，東京，2011.10.26-27.
5) 三島和夫：【シンポジウム・オーガナイザー】リズム研究を医薬品開発に生かす．第 18 回日本時間生物学会学術大会，愛知，2011.11.24-25.
6) 三島和夫：【座長】一般演題セッション 3．不眠研究会　第 27 回研究発表会，東京，2011.12.3.

(4) 学会誌編集委員等

1) 三島和夫：Frontiers in Sleep and Chronobiology　編集委員
2) 守口善也：American Psychosomatic Society Program Committee　編集委員

10. 知的障害研究部

Ⅰ. 研究部の概要

平成 22 年 4 月 1 日の独立行政法人化とともに部の名称が，知的障害研究部に変わり，診断研究室，治療研究室に加えて，発達障害支援研究室（部長併任）の 3 室体制となった．23 年度もこれまで同様に知的障害など発達障害に関する研究を広範に進めた．すなわち，精神遅滞（知的障害），学習障害，注意欠如・多動性障害（ADHD）や自閉症スペクトラムなどの発達障害とその近縁状態の発生要因解明，診断法開発，治療法策定，予防対策に関する研究である．

発達障害児・者はその障害の発生時期や原因，年齢，重症度，養育環境によりまったく異なった症状を示し，多彩な課題を抱えている．これらの問題解決のために当研究部では，臨床例の解析に加えて，調査研究や実験動物を用いた基礎的研究など多面的アプローチを駆使している．部の英語名は独法化後も引き続き Department of Developmental Disorders と表記していることから，発達障害全般について，神経病態から理解して診断・治療・対策・処遇までの広い守備範囲をターゲットとする．

平成 23 年度の常勤研究員は部長の稲垣真澄，治療研究室長の軍司敦子に加えて，診断研究室長として，太田英伸が東北大学病院周産母子センターから就任した．なお前診断研究室長の井上祐紀は 4 月 1 日付けで島田療育センターはちおうじ診療科長に栄転した．太田室長は，胎児環境と光環境整備に焦点をあてた研究を開始し，早産児に高率に発症する ADHD，広汎性発達障害の原因解明とその予防，治療法の開発を目指している．すなわち，稲垣は主として小児神経学，発達障害医学，神経生理学の立場から，太田は新生児医学の立場から，軍司は神経生理学，教育学の立場から研究に加わった．なお稲垣はセンター病院小児神経科外来で診療を継続しており，病院診療部のスタッフとともに臨床研究の充実のため活動を展開した．

23 年度の流動研究員は崎原ことえ，李　珩の二名でスタートし，8 月に安村　明が加わった．併任研究員は中川栄二（センター病院小児神経科医長）が務めた．科研費研究員は，小久保奈緒美，佐久間隆介，鈴木浩太，松田芳樹であり，松田は 9 月に東京都医学総合研究所研究員に採用となった．13 名の客員研究員（井上祐紀，木実谷哲史，小池敏英，小枝達也，杉田克生，竹市博臣，田中敦士，中村　俊，難波栄二，林　　隆，細川　徹，三砂ちづる，山崎広子）が研究部員と相互協力して発達障害に関する研究を実施した．協力研究員は前年度に引き続き中村雅子，矢田部清美であった．研究生として小林朋佳，後藤隆章，山本寿子，平井真洋の 4 名が常勤研究者と共に研究を進めた．北　洋輔は新たに外来研究員に就任した．なお，研究助手として大橋啓子，刑部（泉）仁美，中村紀子，吉川朋子，真嶋麻子，須藤茉衣子が研究活動を支えた．外来研究補助員の関　美佳，戸田宜子は基盤研究を主に補助した．

Ⅱ. 研究活動

1）発達障害児の認知機能評価に基づく認知発達障害の解明と個別支援方法の体系化

乳幼児期からの高次脳機能の発達とその障害について神経生理学的・神経心理学的アプローチにより研究を進めている．特に発達障害児の視・聴覚認知機能に関する研究を推進し，精神遅滞，自閉症，学習障害，ADHD など発達障害児・者に適用してその有用性を報告している．今後は，臨床例を多面的に検討していく予定である．これらはいずれも，発達障害児の認知機能障害を考慮した指導法開発のための研究として展開している．（稲垣，軍司，矢田部，山崎，小久保，小林，安村．精神・神経疾患研究開発費，厚生労働科学研究，脳科学研究戦略推進プログラム）

2）発達障害児の行動異常モデルにおける研究

Bronx waltzer（bv）マウスの中枢神経系病態解明はとくに ADHD，自閉性障害など発達障害の病態研究，治療研究につながるものと考えている．不安惹起物質である CCK を対照マウス脳室内

投与した時の脳波変化，遺伝子変化についての研究を開始し，bv マウスにみられる不安様行動や恐怖体験が脳内 GABA 機能の異常として解析できるか注目し，発達障害の不安症状の解明と治療法開発に向けた基盤研究を行った．（稲垣，太田，松田，刑部，李，関，戸田．厚生労働科学研究，精神・神経疾患研究開発費）

3）学習障害に関する研究

学習障害児の臨床的研究から視・聴覚情報処理機構の解明に焦点をあてながら，リハビリテーションアプローチの重要性について指摘している．発達性読み書き障害や算数障害の診断治療ガイドラインを普及するように，学会発表を通じて内外における広報活動を進めた．ワーキングメモリ機能に焦点をあてた機能的 MRI 撮像を脳病態統合イメージングセンター（IBIC）と共同で行い，病態解明研究を進めた．（稲垣，軍司，小林，北，矢田部，後藤，山崎，細川，小枝，林，杉田．精神・神経疾患研究開発費，厚生労働科学研究）

4）自閉症の病態に関する研究

自閉症の脳機能の検討と早期診断法の確立をはかるため，声認知に関する脳機能評価を健常成人，定型発達小児そして，自閉症スペクトラム児において進めた．また，小児行動の二次元尺度化に基づく発達支援策の有効性定量評価に関する研究をまとめて，ソーシャルスキルトレーニングの効果判定に応用した．応用行動分析による行動変化を客観的に評価し，成果を論文発表した．顔認知に関する神経生理学的研究を進め，健常児と自閉症児の自他識別時における脳血流変化や周波数応答，トレーニングによる顔認知機能変化に注目した解析を論文・学会発表した．（稲垣，軍司，北，佐久間，崎原，林，小池，太田．厚生労働科学研究，文部科学省新学術領域研究，脳科学研究戦略推進プログラム）

5）ADHD に関する研究

ADHD の実行機能障害、抑制機能障害、ワーキングメモリ機能障害を簡便に評価する他覚的検査バッテリーを開発し，行動学的データを蓄積した．また，表情刺激に対する脳血流変化を近赤外線スペクトログラフィー（NIRS）により検討し，反応性の違いを見出した．今後，症例を追加していく予定である．（稲垣，軍司，安村，崎原，太田．厚生労働科学研究，精神・神経疾患研究開発費）

6）小児副腎白質ジストロフィー症（ALD）に関する研究

進行性代謝性変性疾患の一つである小児型 ALD に対する骨髄移植（造血幹細胞移植）療法時期決定と治療後評価のための研究を本年度も継続，協力した．とくに未発症例の大脳機能変化を誘発電位によって見出すための研究を進めた（稲垣，加我，軍司，崎原，小久保，中村（雅）．厚生労働科学研究）

7）コホートスタディのフォローアップに関する研究

先行するバースコホート研究のフォローアップ調査を行った．豊かな出産体験が母親の養育行動や就学期の小児の行動によい影響をもたらすことを統計学的に明らかにし，学会・論文発表した．（稲垣，鈴木，加我．厚生労働科学研究，精神・神経疾患研究開発費）

8）人工保育器開発・光環境開発に関する研究

発達障害予防のため，光受容体メラノプシンを制御するフィルターを用いた人工保育器開発や新生児集中治療室における光環境デザインの研究，ならびに人工子宮の開発に向けた研究を進めた．（太田，李，関，戸田．NEDO，厚生労働科学研究）

Ⅲ．社会的活動に関する評価

1）市民社会に対する一般的貢献

常勤研究者は各種講演などの場を通じて，研究成果を社会に還元した．常勤・非常勤の研究者全員が発達障害児・者とその家族に対しセンター病院において，日常的診療サポートを提供している．

2）専門教育面における貢献

稲垣，軍司を中心に病院小児神経科レジデントなど若手医師への臨床，研究指導を日常的に行っている．太田は病院小児神経科において NICU における光環境を科学するとの講義を担当した．毎週火曜夕方にレジデント対象の神経生理学セミナーを部内で行い，軍司が主に実習を担当し，稲垣は電気生理学的所見判読のアドバイスを行った．また講演会や各種セミナー，講義などにより医師，看護師，保健師，福祉関係専門職，言語聴覚士，学校教員の教育に貢献している．稲垣は日本小児科学会専門医試験委員として，また軍司は二級臨床検査士資格認定試験の試験委員として，神経生理部門について検査技師に対する専門知識の普及・向上に貢献した．軍司は青山学院大学の学生講義も担当した．崎原は杏林大学の講義を担当した．国立精神・神経医療研究センター小児神経セミナーでは，全国から集まった小児神経科医に対して稲垣が発達障害の診断と治療の講義を行った．

3）精神保健研究所の研修の主催

発達障害者支援法の成立に伴う専門家養成のため，医学課程研修を年に二回企画・実施し，好評を得た．

4）保健医療行政・政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

稲垣は，環境省の子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）の評価委員として参加した．厚生労働省平成 23 年度こころの健康づくり対策事業の中で，思春期精神保健研修事業企画委員会委員として，研修内容に関する企画に携わった．稲垣は加我牧子所長とともに日本障害者スポーツ協会専門委員会医学委員として，知的障害者の国際大会参加という社会活動に貢献している．また，東南アジア各国の障害者スポーツ担当者への講義を JICA 研修という形で行った．小林は，障害者スポーツ医養成研修講師を務めた．

5）センター内における臨床的活動

全員が病院に併任としてセンター内の臨床的活動に関わり，知的障害，学習障害，ADHD，自閉症など発達障害の診療に定期的に携わっている．

Ⅳ．研究業績

A．刊行物

(1) 原著論文

1） Inagaki M: Executive functions in children: Diversity of assessment methodology and its relation to attention deficit hyperactivity disorder (ADHD). Brain & Development 33: 454-455, 2011.

2） Kita Y, Gunji A, Inoue Y, Goto T, Sakihara K, Kaga M, Inagaki M, Hosokawa T: Self-face recognition in children with autism spectrum disorders: A near-infrared spectroscopy study. Brain & Development, 33: 494-503, 2011.

3） Sugita K, Uesaka T, Nomura J, Sugita K, Inagaki M: A family-based association study does not support DYX1C1 as a candidate gene in dyslexia in Japan. International Medical Journal 18: 129-131, 2011.

4) Matsuda Y, Inoue Y, Izumi H, Kaga M, Inagaki M, Goto Y: Fewer GABAergic interneurons, heightened anxiety and decreased high-frequency electroencephalogram components in Bronx waltzer mice, a model of hereditary deafness. Brain Res 1373: 202-210, 2011.
5) Mizuno T, Nakagawa E, Sakuma H, Saito Y, Komaki H, Sugai K, Sasaki M, Takahashi A, Otsuki T, Sakihara K, Inagaki M: Multiple band frequency analysis in a child of medialtemporal lobe ganglioglioma. Childs Nerv Syst 27: 479-483, 2011.
6) Yonekawa T, Saito Y, Sakuma H, Sugai K, Shimizu Y, Inagaki M, Sasaki M: Augmented startle responses in opsoclonus-myoclonus syndrome. Brain & Development 33: 335-338, 2011.
7) Kobayashi T, Inagaki M, Kaga M: Professional caregiver's view on mental health in parents of children with evelopmental disabilities: A nationwide study of institutions and consultation centers in Japan. ISRN Pediatrics 2012 doi:10.5402/2012/121898
8) Mori R, Kusuda S, Fujimura M; Neonatal Research Network Japan (Ohta H). Antenatal corticosteroids promote survival of extremely preterm infants born at 22 to 23 weeks of gestation. J Pediatr 159: 110-114, 2011.
9) Sakihara K, Gunji A, Furushima W, Inagaki M: Event-related oscillations in structural and semantic encoding of faces. Clinical Neurophysiology 123: 270-277, 2012.
10) Inoue Y, Sakihara K, Gunji A, Ozawa H, Kimiya S, Shinoda S, Kaga M, Inagaki M: Reduced prefrontal hemodynamic response in children with AD/HD during the Go/NoGo task: A NIRS study. Neuroreport 23: 55-60, 2012.
11) 後藤隆章, 熊沢 綾, 赤塚めぐみ, 稲垣真澄, 小池敏英:特異的読字障害を示す LD 児の視覚性語彙の形成に基づく読み指導に関する研究 －未指導文の読みの改善を含めた検討－. 特殊教育学研究 49: 41-50, 2011.
12) 小林朋佳, 稲垣真澄, 軍司敦子, 矢田部清美, 北 洋輔, 加我牧子, 後藤隆章, 小池敏英:学童における呼称能力の発達とひらがな読み書き能力との関連. 脳と発達 43: 465-471, 2011.
13) 竹下絵里, 中川栄二, 新井麻子, 斎藤義朗, 小牧宏文, 須貝研司, 佐々木征行, 高橋章夫, 大槻泰介, 井上祐紀, 稲垣真澄, 加我牧子:小児の難治性てんかんの外科治療による行動障害の改善:子どもの行動チェックリストによる検討. てんかん研究, 28: 401-408, 2011.
14) 吉田有里, 小池敏英, 雲井未歓, 稲垣真澄, 加我牧子:国語学習の低成績の生起に及ぼすひらがな音読困難の影響について －小学校 2 年生を対象とした検討－. LD 研究, 21: 116-124, 2011.
15) 熊沢 綾, 後藤隆章, 雲井未歓, 小池敏英：ひらがな文の読み障害をともなう LD 児における漢字単語の読みの特徴. －漢字単語の属性効果に基づく検討－. 特殊教育学研究, 49: 117-126, 2011.

(2) 総説

1) 稲垣真澄, 太田英伸：新生児以降の評価 発達障害. 周産期医学 41: 1501-1504, 2011.
2) 稲垣真澄：知的障害と災害ストレス. ドクターサロン 56: 24-27, 2012.
3) 加我牧子, 軍司敦子, 稲垣真澄：発達障害における認知機能障害と神経生理学的所見. 医学のあゆみ 239: 609-613, 2011.
4) 小林朋佳, 稲垣真澄：精神遅滞. 母子保健情報 63: 16-19, 2011.
5) 太田英伸：東日本大震災で研究について感じたこと. 時間生物学 17: 45-47, 2011.
6) 太田英伸：NICU における光環境を科学する. 日本周産期・新生児医学会雑誌 47: 758-762, 2011.
7) 渡辺真平, 秋山志津子, 太田英伸：胎児・新生児期における生物時計と光環境の重要性. 睡

眠医療　5: 47-54, 2011.

8）Kita Y, Hosokawa T: History of autism spectrum disorders: Historical controversy over the diagnosis. 東北大学大学院教育学研究科研究年報　59(2): 147-166, 2011.

(3) 著書

1）Yatabe K, Goto T, Watanabe K, Kaga M, Inagaki M: Reading and Writing Achievement Tests for Assessing Orthographical and Phonological Impairments of Japanese Children with Developmental Disorders. In W. Sittiprapaporn (Ed.), Learning Disabilities. Rijeka, Croatia: InTech Publishing. ISBN 978-953-51-0269-4. pp69-86, 2012.

2）稲垣真澄, 小林朋佳:ADHD と LD. 小野次朗・小枝達也編著:別冊「発達」31 ADHD の理解と援助. ミネルヴァ書房, 東京, pp190-197, 2011.

3）稲垣真澄:学習障害. 総編集　大関武彦, 古川　漸, 横田俊一郎, 水口　雅:今日の小児治療指針. 医学書院, 東京, pp675-676, 2012.

4）稲垣真澄:第Ⅳ編;身体と障害, 第2章;障害各論. 日本障害者スポーツ協会編:障害者スポーツ指導教本　初級・中級. ぎょうせい, 東京, pp140-145, 2012.

5）加賀佳美, 稲垣真澄:第4章　疾患ごとの診断と治療　L 幼・小児, 青年期に発症する障害, 精神遅滞. 永井良三総監修:精神科研修ノート. 診断と治療社, 東京, pp457-459, 2011.

6）太田英伸:早産児によい光環境とは. 海老原史樹文・吉村　崇編集, 時間生物学, 化学同人, p36, 2012.

7）渡辺真平, 太田英伸:早産児・新生児の体内時計と新生児室における光環境の設計. 柴田重信（早稲田大学）編集, 体内時計の科学と産業応用, シーエムシー出版, pp38-47, 2011.

(4) 研究報告書

1）稲垣真澄：特異的発達障害（読み書き障害）の神経科学的病態解明－fMRI による脳機能研究－. 精神・神経疾患研究開発費 22-6, 発達障害の診断および治療法開発に関する臨床研究（主任研究者　稲垣真澄）平成 23 年度総括分担研究報告書. pp1-5, 2011.

2）稲垣真澄：不安病態の中枢神経機構解明に関する基盤研究. 精神・神経疾患研究開発費 23-7, 高次脳機能障害の生物学的基盤研究（主任研究者　一戸紀孝）平成 23 年度総括分担研究報告書. pp1-2, 2011.

3）軍司敦子：自閉症スペクトラムの社会性認知に関する神経生理学的研究. 精神・神経疾患研究開発費 22-6, 発達障害の診断および治療法開発に関する臨床研究（主任研究者　稲垣真澄）平成 23 年度総括分担研究報告書. pp10-12, 2011.

(5) 翻訳

(6) その他

1）稲垣真澄, 小林朋佳, 北　洋輔, 井上祐紀, 加我牧子, 神尾陽子：読み書きのつまずきに関する全国調査（その１）－担任教師の視点－. 脳と発達　43；S.322.2011.

2）稲垣真澄：知能指数は大人になっても高められるの？. web R25, 2011.6.7.

3）菅野　敦, 稲垣真澄, 石塚謙二, 橋本創一, 小澤　温, 松為信雄：「発達障害」をめぐる研究と用語・概念に関する動向. 発達障害研究　33：2-4. 2011.

4）栗山進一, 大内美南, 稲垣真澄, 角田和彦, 栗原亜紀, 安原昭博, 渡辺端香子, 上山真知子, 福地　成, 加我牧子：自閉症におけるビタミン B6 反応性を予測する徴候・バイオマーカーの解明. 脳と発達　43；S.183.2011.

5）林　　隆, 木戸久美子, 稲垣真澄：感覚統合訓練は, ADHD の子ども達の自尊心と対人関係

調整力を変える－二次元尺度を用いた行動解析による有効性の評価－．脳と発達　43；S.182.2011.

6）榎園　崇，中川栄二，遠藤ゆかり，苛原　香，本田涼子，齋藤貴志，斎藤義朗，小牧宏文，須貝研司，佐々木征行，稲垣真澄：小児自閉症症状に対する薬物治療の実態調査．脳と発達　43；S.261.2011.

7）軍司敦子，後藤隆章，佐久間隆介，北　洋輔，加地雄一，稲垣真澄：広汎性発達障害児における援助行動の学習に関する客観的評価：事象関連電位 P300 の検討．脳と発達　43；S.282.2011.

8）後藤隆章，北　洋輔，小池敏英，稲垣真澄：Developmental Dyslexia 児におけるワーキングメモリ課題中の脳血流応答特性に関する研究．脳と発達　43；S.323.2011.

9）小林朋佳，稲垣真澄，北　洋輔，井上祐紀，加我牧子，田中康雄，神尾陽子：読み書きのつまずきに関する全国調査（その２）：ADHD 症状との関連－担任教師の視点－．脳と発達　43；S.323.2011.

10）佐久間隆介，加我牧子，小笠原恵，軍司敦子，後藤隆章，稲垣真澄：精神遅滞をともなう自閉症児における要求言語の獲得を目指した ABA 介入効果の検討 - 二次元評価尺度を用いて - ．脳と発達　43；S.341.2011.

11）鈴木浩太，北　洋輔，井上祐紀，加我牧子，稲垣真澄：乳幼児期の母親の養育行動が学童期の子どもの行動に与える影響：豊かな出産経験の効果に関する出生コホート調査，脳と発達 43；S.334.2011.

12）Ohta H, Ohgi S: Book review: T. Berry Brazelton and J. Kevin Nugent, editor.The Neonatal Behavioral Assessment Scale, Fourth Edition, London: MacKeithPress, 2011. Brain Dev. 10.1016/j.braindev.2012.01.006.

13）宮内彰彦，長嶋雅子，森本哲，稲垣真澄，加我牧子，下澤伸行，山形崇倫，桃井真理子：内包から延髄の錐体路病変で発症した副腎白質ジストロフィーの１例．脳と発達　43；S.246.2011.

Ｂ．学会・研究会における発表

（1）学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

1）Ohta H: Lighting conditions and developing biological clocks. XII Congress of the European Biological Rhythms Society, Oxford, 2011.8. 26.

2）Gunji A: Semantic encoding of face in children with ASD: Neurophysiological study (Session II: Cognitive neuroscience). Exploring Autism Research Collaboration between Japan and the United States: Joint Academic Conference on Autism Spectrum Disorders. Tokyo, 2011.12.1-3.

3）稲垣真澄：発達性読み書き障害児の非侵襲的脳機能評価．第 41 回日本臨床神経生理学会学術大会「学習障害児の脳機能」シンポジウム，静岡，2011.11.10-12.

4）太田英伸：既日リズムの発達に配慮した、新生児および乳児のケアのありかた．第 26 回秋田県母性衛生学会，招待講演，秋田，2011.6.26.

5）太田英伸：NICU における光環境を科学する．第 47 回日本周産期・新生児医学会　学術集会教育講演，北海道，2011.7.12.

6）太田英伸：NICU における光環境デザイン．第 21 回日本新生児看護学会学術集会　「今，改めて考える光環境」ワークショップ，東京，2011.11.13.

7）太田英伸：早生児ケアにおける光環境の影響と臨床へのアプローチ．獨協医科大学　看護学部研修会　招待講演，栃木，2012.1.25.

8）太田英伸：東日本大震災の中で研究について考えたこと．RI 第 2510 地区財団学友会設立 10 周年記念式典，招待講演，北海道，2012.2.11.

10）太田英伸：NICU における光環境を科学する．第 25 回東部地区新生児研究会，招待講演，東

京, 2012.2.14.

11) 太田英伸：NICU の光環境デザイン．札幌シンポジウム「時刻と時間の生理学」，北海道, 2012.3.10.

(2) 一般演題

1) Gunji A, Kaga M, Inagaki M. Voice-specific brain responses: a NIRS study. 40th Annual Meeting of International Neuropsychological Society. Montreal, 2012.2.16-19.
2) Kita Y, Gunji A, Inoue Y, Goto T, Sakihara K, Kaga M, Inagaki M, Hosokawa T. Self-face recognition in children with autism spectrum disorders: A near-infrared spectroscopy study. Exploring Autism Research Collaboration between Japan and the United States: Joint Academic Conference on Autism Spectrum Disorders. Tokyo, 2011.12.1-3.
3) Takeichi H, Gunji A, Inagaki M. Development of an efficient method for evaluation of pervasive developmental disorders. 40th Annual Meeting of International Neuropsychological Society. Montreal, 2012.2.16-19.
4) 後藤隆章, 北　洋輔, 小池敏英, 稲垣真澄：定型発達児における音韻処理に関わる脳血流動態．第 29 回日本生理心理学会, 高知, 2011.5.21-22
5) 稲垣真澄, 小林朋佳, 北　洋輔, 井上祐紀, 加我牧子, 神尾陽子：読み書きのつまずきに関する全国調査（その 1）－担任教師の視点－．第 53 回日本小児神経学会総会, 神奈川, 2011.5.26-28.
6) 小林朋佳, 稲垣真澄, 北　洋輔, 井上祐紀, 加我牧子, 田中康雄, 神尾陽子：読み書きのつまずきに関する全国調査（その 2）：ADHD 症状との関連－担任教師の視点－．第 53 回日本小児神経学会総会, 神奈川, 2011.5.26-28.
7) 軍司敦子, 後藤隆章, 佐久間隆介, 北　洋輔, 加地雄一, 稲垣真澄：広汎性発達障害児における援助行動の学習に関する客観的評価：事象関連電位 P300 の検討．第 53 回日本小児神経学会総会, 神奈川, 2011.5.26-28.
8) 軍司敦子, 加我牧子, 稲垣真澄：近赤外線分光法を用いたヒト声に特異的な脳活動の検出．第 41 回臨床神経生理学会学術大会, 静岡, 2011.11.10-12.
9) 栗山進一, 大内美南, 稲垣真澄, 角田和彦, 栗原亜紀, 安原昭博, 渡辺端香子, 上山真知子, 福地成, 加我牧子：自閉症におけるビタミン B6 反応性を予測する徴候・バイオマーカーの解明．第 53 回日本小児神経学会総会, 神奈川, 2011.5.26-28.
10) 林　隆, 木戸久美子, 稲垣真澄：感覚統合訓練は, ADHD の子ども達の自尊心と対人関係調整力を変える－二次元尺度を用いた行動解析による有効性の評価－．第 53 回日本小児神経学会総会, 神奈川, 2011.5.26-28.
11) 榎園　崇, 中川栄二, 遠藤ゆかり, 苛原　香, 本田涼子, 齋藤貴志, 斎藤義朗, 小牧宏文, 須貝研司, 佐々木征行, 稲垣真澄：小児自閉症症状に対する薬物治療の実態調査．第 53 回日本小児神経学会総会, 神奈川, 2011.5.26-28.
12) 後藤隆章, 北　洋輔, 小池敏英, 稲垣真澄：Developmental Dyslexia 児におけるワーキングメモリ課題中の脳血流応答特性に関する研究．第 53 回日本小児神経学会総会, 神奈川, 2011.5.26-28.
13) 佐久間隆介, 加我牧子, 小笠原恵, 軍司敦子, 後藤隆章, 稲垣真澄：精神遅滞をともなう自閉症児における要求言語の獲得を目指した ABA 介入効果の検討-二次元評価尺度を用いて-．第 53 回日本小児神経学会総会, 神奈川, 2011.5.26-28.
14) 鈴木浩太, 北　洋輔, 井上祐紀, 加我牧子, 稲垣真澄：乳幼児期の母親の養育行動が学童期の子どもの行動に与える影響：豊かな出産経験の効果に関する出生コホート調査．第 53 回日本小児神経学会総会, 神奈川, 2011.5.26-28.
15) 松田芳樹, 泉　仁美, 井上祐紀, 後藤雄一, 加我牧子, 稲垣真澄：Bronx waltzer マウスにおける不安行動の発達的変化の検討．第 34 回日本神経科学大会, 神奈川, 2011.9.17.

16) 北 洋輔, 軍司敦子, 後藤隆章, 稲垣真澄, 加我牧子:脳機能計測を用いた Social skill training の有効性評価:近赤外線スペクトロスコピー(NIRS)と行動評価との併用から見る問題点. 日本特殊教育学会第 49 回大会, 青森, 2011.9.23-25.
17) 吉田有里, 小池敏英, 雲井未歓, 稲垣真澄, 加我牧子:国語学習の低成績の生起に及ぼすひらがな音読困難の影響について－小学校 2 年生を対象とした検討－. 日本 LD 学会第 20 回大会, 東京, 2011.9.17-19.
18) 後藤隆章, 小久保奈緒美, 小林朋佳, 小池敏英, 加我牧子, 稲垣真澄:視覚イメージの付加に基づく漢字単語読み支援:Developmental Dyslexia 児に対する効果持続性の検討. 第 16 回認知神経科学会学術集会, 福岡, 2011.10.22-23.
19) 崎原ことえ, 軍司敦子, 古島わかな, 北 洋輔, 加我牧子, 稲垣真澄:顔の構造知覚および意味処理に関与する事象関連オシレーションの解析. 第 41 回臨床神経生理学会学術大会, 静岡, 2011.11.10-12.
20) 山崎広子, 稲垣真澄, 小林朋佳, 北 洋輔, 加我牧子:視覚誘発脳波を用いた緑内障の大細胞系機能評価. 第 41 回臨床神経生理学会学術大会, 静岡, 2011.11.10-12.
21) 小林朋佳, 稲垣真澄, 山崎広子, 北 洋輔, 加我牧子:視覚誘発脳波を用いた発達性読み書き障害児の大細胞系機能評価. 第 41 回臨床神経生理学会学術大会, 静岡, 2011.11.10-12.
22) 北 洋輔, 山本寿子, 大場健太郎, 寺澤悠理, 守口善也, 内山仁志, 関あゆみ, 細川 徹, 稲垣真澄: Developmental Dyslexia 児における脳機能の脆弱性. 第 3 回 Human Movement 研究会, 北海道, 2012.2.3-4.
23) 安村 明, 松田 剛, 開 一夫 : ワーキングメモリ課題を用いた読解力の神経基盤の探索. 日本光脳機能イメージング研究会, 東京, 2011.7.23.
24) 安村 明, 松田 剛, 開 一夫 : NIRS によるワーキングメモリ課題を用いた読解力の神経基盤に関する研究. 日本認知科学会, 東京, 2011.9.23.
25) 福村 忍, 中川栄二, 岡崎哲也, 比屋根真彦, 真柄慎一, 石山昭彦, 齋藤貴志, 斎藤義朗, 小牧宏文, 須貝研司, 佐々木征行, 高橋章夫, 大槻泰介, 稲垣真澄:てんかん小児に対する Dichotic Listening Test は言語優位半球を推定できる. 第 41 回臨床神経生理学会学術大会, 静岡, 2011.11.10-12.
26) 遠藤ゆかり, 中川栄二, 榎園 崇, 井上祐紀, 安村 明, 加我牧子, 稲垣真澄:小児自閉性症状に対する薬物治療の実態調査－二次アンケート集計結果報告－. 第 52 回日本児童青年精神医学会総会, 徳島, 2011.11.10-12.

(3) 研究報告会

1) 稲垣真澄, 軍司敦子, 後藤隆章, 北 洋輔:ソーシャルスキルトレーニング (SST) における他者認知プロセスの客観的評価:事象関連脳電位 P300 の検討. 包括型脳科学研究推進支援ネットワーク夏のワークショップ, 兵庫, 2011.8.21-24
2) 軍司敦子:自閉症スペクトラムにおけるコミュニケーション行動変化の客観的評価:行動と脳機能の解析. 文科省科研基盤研究 A「特別支援教育における脳科学の活用に関する総合的研究」研究推進会議, 神奈川, 2011.7.11-12.
3) 軍司敦子:自閉症スペクトラムの社会性認知に関する神経生理学的研究. 精神・神経疾患研究開発費 22-6 発達障害の診断および治療法開発に関する臨床研究. H23 年度第 2 回班会議. 東京, 2011.11.19.
4) 崎原ことえ, 稲垣真澄, 軍司敦子, 加地雄一, 北 洋輔:広汎性発達障害児の神経基盤の解明 ―ミラーニューロンシステムと 運動巧緻性発達の観点から―. 財団法人明治安田こころの健康財団 2010 年度(第 46 回)研究成果報告会, 東京, 2011.7.23.
5) 加我牧子, 稲垣真澄, 軍司敦子, 崎原ことえ, 小久保奈緒美, 中村雅子:小児副腎白質ジストロフィー

症（ALD）の高次脳機能評価について. 厚生労働科学研究　難治性疾患克服研究事業「ライソゾーム病（ファブリー病含む）に関する調査研究班」班会議, 東京, 2011.9.28.

6）　北　洋輔：自閉症スペクトラム障害児における社会的刺激の入力と処理. 東京学芸大・首都大学研究交流会, 神奈川, 2011.10.26.

7）　太田英伸, 関　美佳, 戸田宜子, 李　珩, 刑部仁美, 加我牧子, 稲垣真澄：新生児集中治療室における光環境デザイン. 精神保健研究所報告会, 東京, 2012.2.27.

8）　崎原ことえ, 軍司敦子, 井上祐紀, 北　洋輔, 加我牧子, 稲垣真澄：自閉症スペクトラム障害児における顔識別時脳波の事象関連オシレーション解析. 精神保健研究所報告会, 東京, 2012.2.27.

9）　李　珩, 太田英伸, 刑部仁美, 関　美佳, 戸田宜子, 松田芳樹, 加我牧子, 稲垣真澄：不安様行動における CCKA /CCKB 受容体の異なる役割を皮質脳波を指標として明らかにする. 精神保健研究所報告会, 東京, 2012.2.27.

C．講演

1）　稲垣真澄：知的障害の医療．国立障害者リハビリテーションセンター　自立支援局秩父学園附属保護指導職員養成所講義，埼玉，2011.6.16.

2）　稲垣真澄：発達障害の診断と治療の実際．第 17 回国立精神・神経医療研究センター小児神経セミナー，東京，2011.7.16.

3）　稲垣真澄：認知に偏りのある子ども達への効果的な学習支援．平成 23 年度鳥取県立鳥取聾学校　職員研修会，鳥取，2011.7.22.

4）　稲垣真澄：発達障害の子ども達に対する効果的な学習支援．平谷こども発達クリニック　発達障害講演会，福井，2011.9.2.

5）　稲垣真澄：小児の認知機能に関する生理学的研究：刺激や解析法の工夫を通じて歩んできたこと．教育講演，第 9 回鳥取大学小児神経学入門講座　第 30 回米子セミナー，鳥取，2011.9.23-24.

6）　稲垣真澄：障害各論（知的）．平成 23 年度 JICA 研修「障害者スポーツリーダー養成」研修会，東京，2011.10.14.

7）　稲垣真澄：新学術領域研究「学際的研究による顔認知メカニズムの解明」班主催の市民向け公開講演会「顔認知の発達と自閉症の特徴、そして支援の展開」開催　日本科学未来館，みらい CAN ホール，東京，2011.10.30.

8）　稲垣真澄：解説　知的障害と災害ストレス．ラジオニッケイ　ドクターサロン，東京，2011.11.15.

9）　稲垣真澄：学習障害　Q&A：Q38 学習障害について．日本小児神経学会 HP http://child-neuro-jp.org/visitor/qa2/a38.html　2011.11.25.

10）稲垣真澄：治療の方法とその考え方：学習障害の治療について．第 5 回子どもの心の診療医専門研修会，東京，2012.2.19.

11）稲垣真澄：ADHD をもつ子どもの読み書きの困難さに対する評価と支援．「ADHD と特異的発達障害」特別講演会，福井，2012.3.15.

12）太田英伸：早産児の視覚特性を利用した新型保育器の開発．国立精神・神経医療研究センター　第十二回　若手育成カンファレンス，東京，2011.7.1.

13）太田英伸：NICU における光環境を科学する．国立精神・神経医療研究センター　小児神経科クリニカルカンファレンス，東京，2011.12.14.

14）太田英伸：NICU の光環境について．獨協医科大学　看護学部　研修会，栃木，2012.1.25.

15）軍司敦子：自閉症スペクトラムの顔認知．新学術領域研究「学際的研究による顔認知メカニズムの解明」班主催　市民向け公開講演会「顔認知の発達と自閉症の特徴、そして支援の展開」，東京，2011..10.30.

16) Gunji A: Voice specific responses: a NIRS study. Department of Psychology & Center for Cognitive Neuroimaging, University of Glasgow. Glasgow, 2012. 1.26.
17) 小林朋佳：知的障害の病理．平成 23 年度障害者スポーツ医養成講習会，埼玉，2012.1.28.

D．学会活動（学会主催，学会役員，座長，編集委員）

(1) 学会役員

1) 稲垣真澄: 日本小児神経学会　評議員
2) 稲垣真澄: 日本臨床神経生理学会　評議員
3) 稲垣真澄: 日本神経精神薬理学会　評議員
4) 稲垣真澄: 小児脳機能研究会世話人　事務局
5) 稲垣真澄: 日本てんかん学会　てんかん専門医指導医.
6) 太田英伸: 日本時間生物学会　評議員
7) 軍司敦子: 日本臨床神経生理学会　評議員

(2) 座長

1) 稲垣真澄: 第 22 回小児脳機能研究会. 静岡, 2011.11.10.
2) 軍司敦子: 第 41 回日本臨床神経生理学会学術大会. 静岡, 2011.11.10.-12.

(3) 編集委員等

1) 稲垣真澄: 発達障害研究　常任編集委員
2) 稲垣真澄: 日本小児神経学会機関誌「脳と発達」 編集委員
3) 稲垣真澄: 日本小児神経学会機関誌「Brain & Development」 編集委員
4) 太田英伸: 日本時間生物学会会誌　編集委員
5) 軍司敦子: 日本臨床検査同学院　主任試験委員
6) 軍司敦子: 日本特殊教育学会 「脳科学」研究小委員会　委員

E．研修

(1) 研修企画

第 11 回発達障害支援のための医学研修　2011.7.6-7.
第 12 回発達障害支援のための医学研修　2012.2.8-9.

F．その他

1) 稲垣真澄：関連機関報告，健やか親子 21 総会，厚生労働省，2.12.3.13.
2) 太田英伸，株式会社ルケオ：実用新案権者．「ハロゲンランプ及び新生児用の照明器具」実願 2011-001742 登録第 3168392 号．（2011 年 5 月 18 日登録）
3) 太田英伸，株式会社ルケオ：実用新案権者．「ハロゲンランプ及び新生児用の照明器具」実願 2011-001743 登録第 3168393 号．（2011 年 5 月 18 日登録）
4) 太田英伸：低体重児成長に光．朝日新聞　朝刊，2011.7.13.
5) 太田英伸：早産児の視覚特性を利用した新型保育器の開発．国立精神・神経医療研究センター　第十二回　若手育成カンファレンス，小平，2011.7.1.
6) 軍司敦子：IBIC 画像診断治療研究部　機能的治療研究室長

11. 社会復帰研究部

Ⅰ. 研究部の概要

社会復帰研究部は，生物・心理・社会的観点から精神疾患や精神障害を多面的に捉え，施策としても導入可能な精神保健医療福祉のサービスプログラムのモデルを呈示し，その効果に関する実証研究を推進することを，目的の第一としている．また非精神病圏のメンタルヘルスに対する対策のニーズが急増していることにともない統合失調症のみならず，摂食障害，あるいは社会的ひきこもりなども研究対象としてきた．

具体的には，重症精神障害者の地域生活支援を可能にするための訪問を主体とした包括型地域生活支援プログラム（ACT）のモデル作り及び普及のための臨床研究，精神障害者の一般就労と職場適応を支援するためのモデルプログラム（IPS）の開発普及，さらに近年は，専門疾病センターの「地域精神科モデル医療センター」の運営にコミットし，小平地区の活動も充実してきている．

これらの活動は、地域中心の精神保健医療福祉のシステムモデル作りとくくることが出来るが，めざすところは，当事者の「人生や生活をとりもどす」（recovery）ことへの支援として，地域精神医療を鍵概念とし，我が国の精神医療のありかたを転換することである．

【部の構成】

部　　長：伊藤順一郎
援助技術研究室長：吉田光爾
研　究　員：佐藤さやか
併任研究員：安西信雄（国立精神･神経医療研究センター病院副院長）
　　坂田増弘（国立精神･神経医療研究センター病院第３精神科医長）
　　平林直次（国立精神･神経医療研究センターリハビリテーション部長）
客員研究員：大嶋 巌　（日本社会事業大学社会福祉学部教授）
　　西尾雅明（東北福祉大学総合福祉学部教授）
　　瀬戸屋雄太郎（世界保健機関精神保健薬物依存部 Technical Officer）
流動研究員：高原優美子，山口創生
外来研究員：前田恵子
協力研究員：英 一也
科研費研究員：下平美智代，市川 健
研　究　生：浪久 悠，贄川信幸，久永文恵，香田真希子，小川雅代

Ⅱ. 研究活動

1)「地域生活中心」を推進する，地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究（伊藤順一郎，吉田光爾，佐藤さやか）

厚生労働科学研究費補助金　難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業（精神疾患関係研究分野）「「地域生活中心」を推進する，地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究」にて（独）国立国際医療研究センター国府台病院，東北福祉大学せんだんホスピタル，帝京大学医学部附属病院などと共同で多職種アウトリーチサービスおよび援助付き雇用モデルによる就労支援に関する効果検討研究および医療経済学研究を実施した．

2) アウトリーチ（訪問支援）に関する研究（伊藤順一郎）

厚生労働科学研究費補助金　障害者対策総合研究事業（精神障害分野）『アウトリーチ（訪問支援）に関する研究』にて，厚生労働省事業である精神障害者アウトリーチ推進事業に，各都道府県における事業の評価・モニタリング・アウトカム評価デザインなどについて意見具申・技術提供を行った．

3) 専門疾病センター（地域精神科モデル医療センター）

我が国における地域中心の精神科医療のモデル構築を目的として，多職種アウトリーチサービスや就労支援までを視野にいれた医療型デイケアを中心とした地域支援を実施する．平成 23 年度は厚生労働科研費「地域生活中心」を推進する，地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究」班の多施設共同研究の一環として，センター病院在宅支援室を中心とする多職種アウトリーチとデイケアを中心とする認知機能リハビリテーションおよび就労支援に関する対照群を設けた研究活動を開始した.

Ⅲ．社会的活動に関する評価

1） 市民社会に対する一般的な貢献

・東日本大震災の精神保健福祉に関する支援活動を継続して行った（伊藤）
・地域における講演会などに講師として可能な限り参加した（伊藤・吉田・佐藤）

2） 専門教育面における貢献

・各都道府県の精神保健福祉センター，福祉局等で行われる研修事業のうち，包括型地域生活支援プログラム（ACT），心理教育，デイ・ケア，ホームヘルプ，家族支援，解決志向的面接技法等のワークショップ，講演等に可能な限り協力した（伊藤・吉田）
・日本社会事業大学「支援環境開発論（精神保健福祉論Ⅲ）」，「精神保健学」非常勤講師（吉田光爾）
・日本福祉大学「支援環境開発論」非常勤講師（吉田光爾）
・日本社会事業大学「精神保健学」非常勤講師（佐藤さやか）
・日本社会事業大学大学院「認知行動療法」，「SST」非常勤講師（佐藤さやか）
・文教大学「精神科リハビリテーション学」，「就労支援サービス」非常勤講師（高原優美子）
・東洋大学 精神保健福祉士国家試験直前対策講座「精神科リハビリテーション学」担当講師（高原優美子）
・東洋大学 精神保健福祉士国家試験直前対策講座「精神保健福祉論」，「精神保健福祉援助技術」担当講師（山口創生）

3） 精研の研修の主催と協力

・第 9 回 ACT 研修の主任・講師，第 3 回アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修の主任・講師，第 9 回摂食障害治療研修の講師（伊藤）
・第 9 回 ACT 研修の副主任，第 3 回アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修の副主任・講師（吉田）
・第 3 回アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修の講師（佐藤）

4） 保健医療行政・政策に関する研究・調査，委員会等への貢献

・独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構の研究評価委員（伊藤）
・独立行政法人福祉医療機構助成の研修事業検討委員長（伊藤）
・独立行政法人福祉医療機構助成の研修事業検討委員（吉田）
・春日部市自立支援協議会の委員（高原）
・春日部市自立支援協議会計画策定部会の委員（高原）

5） センター内における臨床的活動

・地域精神科モデル医療センターの急性期病棟，在宅医療支援室と連携し，センター内での地域精神科リハビリテーションのシステム作りに関与している（伊藤・佐藤）
・国立国際医療研究センター国府台病院精神科で，毎週 1〜1.5 ポイント外来診療に従事している（伊藤）

Ⅳ．研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

1) Ito J, Oshima I, Nishio M, Sono T, Suzuki Y, Horiuchi K, Niekawa N, Ogawa M, Setoya Y, Hisanaga F, Kouda M, Tsukada K: The effect of Assertive Community Treatment in Japan. Acta Psychiatrica Scandinavica 123(5): 398-401, .2011.
2) Yoshida K , Ito J, Ogawa M：Model Project of Home-Visit Living-Skills Coaching for Individuals with Severe Mental Illness in Japan.,International Journal of Mental Health,40(4):19-27,2011.
3) Setoya Y, Sato S, Satake N, Ito. J：Care Management in Japanese Acute Psychiatric Units: A National Study.International Journal of Mental Health, 40(3),pp41-54, 2011.
4) Satake N, Hazama K, Sono T, Ito J : Changes in antipsychotic medication in clients of assertive community treatment in Japan: a one-year follow up. Clinical Practice & Epidemiology in Mental Health 7:1-3, 2011.
5) Clement S, Lassman F, Barley E, Evans-Lacko S, Williams P, Pagdin R, SladeM, Rüsch N,Yamaguchi S, Thornicroft G: Mass media interventions for reducing mental health-related stigma: protocol. Cochrane Database of Systematic Reviews 12, 2011. [DOI:10.1002/14651858.CD009453]
6) 伊藤順一郎：精神科医療機関に必要なアウトリーチサービスのスキルと研修．精神神経学雑誌，114(1)：26-34，2012.
7) 池淵恵美，後藤雅博，伊藤順一郎，鈴木友里子：中・長期の被災地支援ー地域生活支援とリハビリテーションの視点からー．精神神経学雑誌，114(3)：233-240，2012.
8) 吉田光爾，瀬戸屋雄太郎，瀬戸屋 希，英 一也，高原優美子，角田 秋，園 環樹，萱間真美，大島 巌，伊藤順一郎：重症精神障害者に対する地域精神保健アウトリーチサービスにおける機能分化の検討；Assertive Community Treatment と訪問看護のサービス比較調査より．精神障害とリハビリテーション，15(1)：54-63，2011.
9) 贄川信幸，大島 巌，園 環樹，小川雅代，深澤舞子，伊藤順一郎：包括型地域支援生活プログラム（ACT）のプログラム要素に対する利用者認知尺度の信頼性と妥当性の検討．精神医学，53(6)：523-533，2011.

(2) 総説

1) Yamaguchi S, Mino Y, Uddin S: Strategies and future attempts to reduce stigmatization and increase awareness of mental health problems among young people: a narrative review of educational interventions. Psychiatry Clin Neurosci 65: 405-415, 2011.
2) 伊藤順一郎：白衣を捨てよ，町へ出よう．〈第 4 回〉アウトリーチサービスにおける危機介入について(1)，精神科臨床サービス 11(2)：286-291, 2011.
3) 伊藤順一郎：日本の ACT：各地で行われている ACT の成果の現状．精神神経学雑誌，113(6)：593-594，2011.
4) 伊藤順一郎：白衣を捨てよ，町へ出よう．〈第 5 回〉アウトリーチサービスにおける危機介入について(2)，精神科臨床サービス 11(3)：418-423, 2011.
5) 伊藤順一郎：白衣を捨てよ，町へ出よう．〈第 6 回〉（最終回）家族の支援，精神科臨床サービス 11(4)：562-566, 2011.
6) 吉田光爾，伊藤順一郎：日本における精神保健福祉領域におけるアウトリーチサービスの現在．精神保健研究，24(57)：33-39，2011.
7) 佐藤さやか，伊藤明美：難治性統合失調症へのアプローチー日常生活技能が低下している統合失調症．Schizophrenia Frontier，11 (4)：284-288，2011.

8) 山口創生，米倉裕希子，周防美智子，岩本華子，三野善央：精神障害者に対するスティグマの是正への根拠：スティグマがもたらす悪影響に関する国際的な知見．精神障害とリハビリテーション， 15(1)：75-85, 2011.
9) 瀬戸屋雄太郎，高原優美子，佐竹直子，前田恵子，佐藤さやか，吉田光爾，伊藤順一郎：精神科救急・急性期病棟におけるケアマネジメントの実施状況と今後の課題．精神保健研究，24(57)：41-50，2011.
10) 下平（渡辺）美智代：精神障害者の地域生活支援の二つのあり方―ACT モデルとクラブハウスモデル―．精神科治療学 26(11)：1473-1477，2011.

(3) 著書

1) 伊藤順一郎，原子英樹：ACT-J が実践する退院促進．井上新平，安西信雄，池淵恵美 編：精神科退院支援ハンドブック．医学書院，東京，pp261-269，2011.5.
2) 伊藤順一郎：包括型地域生活支援プログラム（ACT）．松下正明 編：精神医学キーワード事典．中山書店，東京，pp675-677，2011.7.
3) 伊藤順一郎，後藤雅博 編：対談：家族療法における心理教育を語る．家族心理教育から地域精神保健福祉まで．金剛出版，東京，pp117-155，2012.3.
4) 吉田光爾：ひきこもり．精神保健福祉白書編集委員会：精神保健福祉白書 2012 年版．中央法規出版，東京，pp41，2012.
5) 佐藤さやか，池淵恵美：Ⅲ退院支援ガイドライン C 退院支援プログラムの実施．井上新平，安西信雄，池淵恵美 編：精神科退院支援ハンドブック．医学書院，東京，pp17-24，2011.5.
6) 佐藤さやか，池淵恵美：退院支援プログラムの実施．井上新平，安西信雄，池淵恵美 編：精神科退院支援ハンドブック．医学書院，東京，pp81-96，2011.5.
7) 伊藤明美，佐藤さやか，池淵恵美：退院困難要因の評価．井上新平，安西信雄，池淵恵美 編：精神科退院支援ハンドブック．医学書院，東京，pp69-80，2011.5.
8) 佐藤さやか：家族会．加藤敏，神庭重信，中谷陽二他　編：現代精神医学事典．弘文堂，東京，pp155,2011.10.
9) 佐藤さやか：家族教室．加藤敏，神庭重信，中谷陽二他　編：現代精神医学事典．弘文堂，東京，pp155,2011.10.
10) 佐藤さやか：心理社会的ストレス．加藤敏，神庭重信，中谷陽二他　編：現代精神医学事典．弘文堂，東京，pp542，2011.10.
11) 佐藤さやか：チーム医療．加藤敏，神庭重信，中谷陽二他　編：現代精神医学事典．弘文堂，東京，pp703，2011.10.
12) 松村人志，下平（渡辺）美智代：主観的ウェルビーイング評価．松下正明　編：精神医学キーワード事典．中山書店，東京，pp750, 2011.7.

(4) 研究報告書

1) 伊藤順一郎：「地域生活中心」を推進する，地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究．厚生労働科学研究費補助金　難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業（精神疾患関係研究分野）（研究代表者：伊藤順一郎）平成 23 年度　総括研究報告書．pp3-12，2012.
2) 吉田光爾：重症精神障害者に対する多職種アウトリーチチームのサービス記述と効果評価支援研究～基本プロトコルと進捗～．厚生労働科学研究費補助金　難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業（精神疾患関係研究分野）「「地域生活中心」を推進する，地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究」（研究代表者：伊藤順一郎）平成 23 年度　研究報告書．pp15-21，2012.
3) 佐藤さやか：重症精神障害をもつ者に対する認知機能リハと援助付き雇用の組み合わせによる就労支援研究班～基本プロトコルと進捗～．厚生労働科学研究費補助金　難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業（精神疾患関係研究分野）「「地域生活中心」を推進する，地域精神

科医療モデル作りとその効果検証に関する研究」（研究代表者：伊藤順一郎）平成 23 年度　研究報告書．pp23-34，2012.

4) 下平美智代，山口創生：重症精神障害者に対する多職種アウトリーチチームのサービスに関する医療経済的研究のプロトコル．厚生労働科学研究費補助金　難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業（精神疾患関係研究分野）「「地域生活中心」を推進する，地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究」（研究代表者：伊藤順一郎）平成 23 年度　研究報告書．pp35-37，2012.

5) 下平美智代，山口創生：重症精神障害者に対する日本版個別援助付雇用モデルに関する医療経済的研究のプロトコル．厚生労働科学研究費補助金　難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業（精神疾患関係研究分野）「「地域生活中心」を推進する，地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究」（研究代表者：伊藤順一郎）平成 23 年度　研究報告書．pp39-41，2012.

6) 佐藤さやか，大迫充江，大島真弓，富沢明美，伊藤明美，山口創生，市川 健，伊藤順一郎：小平地区における重症精神障害者への多職種アウトリーチチーム支援および認知機能リハビリテーションと個別就労支援の複合による就労支援のモデル体制の整備に関する報告．厚生労働科学研究費補助金　難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業（精神疾患関係研究分野）「「地域生活中心」を推進する，地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究」（研究代表者：伊藤順一郎）平成 23 年度　研究報告書．pp45-51，2012.

7) 前田恵子：全国ＡＣＴ事業所による診療報酬の観点から見た医療経済実態調査研究．厚生労働科学研究費補助金　難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業（精神疾患関係研究分野）「「地域生活中心」を推進する，地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究」（研究代表者：伊藤順一郎）平成 23 年度　研究報告書．pp117-135，2012.

8) 前田恵子，山口創生：地域精神保健福祉医療における支援スタッフのストレングス志向の支援態度評価尺度の開発．厚生労働科学研究費補助金　難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業（精神疾患関係研究分野）「「地域生活中心」を推進する，地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究」（研究代表者：伊藤順一郎）平成 23 年度　研究報告書．pp137-148，2012.

9) 前田恵子，山口創生：モデルが実践スタッフの支援態度に及ぼす影響の検討～スタッフ自記式調査におけるベースライン調査の概要～．厚生労働科学研究費補助金　難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業（精神疾患関係研究分野）「「地域生活中心」を推進する，地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究」（研究代表者：伊藤順一郎）平成 23 年度　研究報告書．pp149-157，2012.

10) 山口創生，前田恵子：根拠に基づく実践とスティグマティゼーションの関係：クロス・セクショナル研究．厚生労働科学研究費補助金　難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業（精神疾患関係研究分野）「「地域生活中心」を推進する，地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究」（研究代表者：伊藤順一郎）平成 23 年度　研究報告書．pp159-164，2012.

(5) 翻訳

(6) その他

1) 伊藤順一郎：今のところはひきこもり．こころの元気＋，2011.1.-2012.5.（月 1 回連載）

B．学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

1) 伊藤順一郎：家族による，家族自身のリカバリー・トーク：私たちは何を体験したか？心理教育，セルフヘルプを家族（当事者）の側から語る（その 5）．第 28 回日本家族研究・家族療法学会自主シンポジウム，静岡，2011.6.4.

2) 伊藤順一郎：医療機関に必要なアウトリーチサービスの実際と技術研修．第 107 回日本精神神経学会総会　シンポジウム，東京，2011.10.26.
3) 伊藤順一郎：東日本大震災への長中期支援～地域ケアとリハビリテーションの視点から～．第 107 回日本精神神経学会総会　シンポジスト，東京，2011.10.27.
4) 伊藤順一郎：臨床における心理教育と家族支援の実際．第 107 回日本精神神経学会総会　精神医学研修コース，東京，2011.10.27.
5) 伊藤順一郎：震災復興と新しい精神科医療．福島医学会精神科医療 21 世紀シンポジウム in 福島 2011　特別講演，福島，2011.11.3.
6) 伊藤順一郎：楽しくなければ精神科医療ではない！～患者さんのリカバリーを邪魔しない薬物療法～．日本精神障害者リハビリテーション学会　第 19 回京都大会，ランチョンセミナー，京都，2011.11.12.
7) 長谷川利夫，吉田光爾：我が国の精神科医療における隔離・身体拘束に関する各専門職の意識の背景要因と最小化に向けての役割検討．日本精神障害者リハビリテーション学会　第 19 回京都大会，自主シンポジウム，京都，2011.11.12.
8) 上田昌広，遠藤紫乃，吉田光爾，武田牧子：市川におけるアウトリーチサービスの現在　～ACT と訪問型生活訓練の内容と連携～．日本精神障害者リハビリテーション学会　第 19 回京都大会，自主シンポジウム，京都，2011.11.13.
9) 長谷川利夫，吉田光爾：我が国の精神科医療における隔離・身体拘束に関する医療従事者の意識の実態 ～最小化に向けて専門職は何をすべきか～．日本病院・地域精神医学会　第 54 回沖縄総会，沖縄，　2011.11.18.
10) 越川睦美，香田真希子，高原優美子，小佐々典靖：これからの障害者就労移行支援事業をより効果的にするための実践セミナー～プログラム評価を用いた効果モデル形成アプローチからの示唆～．効果のあがる就労移行支援プログラムのあり方研究会，シンポジスト，東京，2012.03.27.

(2) 一般演題

1) Yamaguchi Y, Wu SI, Biswas M, Yate M, Aoki Y, Kiso Y, Yonekura Y, Thornicroft G: A systematic review of educational interventions aimed at lessening stigmatisation towards people with mental illness in university students. 21th Asian-Pacific Socail Work Conference, Tokyo, July 15-18, 2011.
2) Yoshida,K, Ito J, Isogaya Y : The Referral Pathway to Assertive Community Treatment Program in Japan. 15th World Congress of Psychiatry, Buenos Aires, Argentina, September 18-22, 2011.
3) Yumiko Takahara, Yutaro Setoya, Keiko Maeda,Sayaka Sato,Naoko Satake,Junichiro Ito:Introducing Care Management System in Psychiatric Emergency Units in Japan: Change in Staff Members Perspective. The 15th World Congress of Psychiatry, Buenos Aires, Argentina, Sep.18-22,2011.
4) 吉田光爾，高原優美子，伊藤順一郎：Assertive Community Treatment・訪問看護の支援経過におけるケア内容の変化．日本病院・地域精神医学会　第 54 回沖縄総会，沖縄，2011.11.18.
5) 佐藤さやか，岩田和彦，古川俊一，安西信雄，伊藤順一郎，後藤雅博，丹羽真一，伊藤憲治，亀田弘之，池淵恵美：認知機能リハビリテーションと IPS 志向の就労支援の組み合わせが統合失調症をもつ人の臨床関連指標および雇用関連指標に与える影響．第 11 回　精神疾患と認知機能研究会，東京，2011.11.5 .
6) 佐藤さやか，渡辺純一，堀越涼子，天賀谷隆，柿島有子，仲野 栄：精神科救急・急性期病棟入院患者の入院後３か月以内の転帰を予測する要因の検討．日本病院・地域精神医学会　第 54 回沖縄総会，沖縄，2011.11.18.
7) 石川正憲，坂田増弘，富沢明美，大迫充江，大島真弓，佐藤さやか，伊藤順一郎：医療機関から

見たアウトリーチ活動および就労支援の現状と課題．第 31 回　日本社会精神医学会，東京，2012.3.15-16.

8) 坂田増弘，石川正憲，富沢明美，大迫充江，大島真弓，佐藤さやか，平林直次，伊藤順一郎：国立精神・神経医療研究センターにおける地域精神科モデル医療センターの概要．第 31 回　日本社会精神医学会，東京，2012.3.15-16.

9) 富沢明美，伊藤明美，坂田増弘，佐藤さやか，伊藤順一郎：急性期病棟におけるケアマネジメントと密接に連携したアウトリーチ活動．第 31 回　日本社会精神医学会，東京，2012.3.15-16.

10) 大迫充江，大島真弓，坂田増弘，佐藤さやか，伊藤順一郎：デイケアにおける多職種チームによるケアマネジメント．第 31 回　日本社会精神医学会，東京，2012.3.15-16.

11) 大島真弓，大迫充江，坂田増弘，佐藤さやか，伊藤順一郎：デイケアにおける就労支援．第 31 回　日本社会精神医学会，東京，2012.3.15-16.

12) 高原優美子，瀬戸屋雄太郎，前田恵子，佐藤さやか，佐竹直子，伊藤順一郎：「急性期ケアマネジメントモデル導入前後におけるスタッフの変化～日本の精神科救急１３病棟における介入研究から～」．日本病院・地域精神医学会　第 54 回沖縄総会，沖縄，2011.11.18.

13) 山口創生，Wu SI, Biswas M, Yate M, Aoki Y，Thornicroft G：大学生における精神障害者に対するスティグマティゼーションの是正を図る教育的介入の効果：システマティック・レビュー．日本精神障害者リハビリテーション学会　第 19 回京都大会，京都，2011.11.12.

14) 市川 健，嶋田洋徳：記憶固定が具体的記憶検索訓練における概括的記憶検索の修正効果に及ぼす影響．日本行動療法学会　第 37 回大会，東京，2011. 11. 28.

(3) 研究報告会

1) 佐藤さやか，岩田和彦，古川俊一，安西信雄，伊藤順一郎，後藤雅博，丹羽真一，伊藤憲治，亀田弘之，池淵恵美：認知機能リハビリテーションと援助つき雇用の組み合わせが精神障がい者の臨床および雇用関連指標に与える影響．国立精神・神経医療センター精神保健研究所　平成 23 年度研究報告会，東京，2012.2.27.

2) 高原優美子，吉田光爾，瀬戸屋雄太郎，英 一也，園 環樹，保坂聡年，萱間真美，伊藤順一郎：ACT・訪問看護・デイケアのサービスのアウトカム縦断調査．国立精神・神経医療センター精神保健研究所　平成 23 年度研究報告会，東京，2012.2.27.

3) 山口創生, Shu-I Wu, Milly Biswas, Madinah Yate,Yuta Aoki, Elizabeth A Barley & Graham Thornicroft　大学生における精神障害者に対するスティグマティゼーションの是正を図る教育的介入の効果：システマティック・レビュー．国立精神・神経医療センター精神保健研究所　平成 23 年度研究報告会，東京，2012.2.27.

C．講演

1) 伊藤順一郎：わたしの夢を叶えさせてほしいー障がいを乗りこえるにはー．江戸川区心理教育，東京，2011.6.2.

2) 伊藤順一郎：精神科多職種チームによるアウトリーチについて．第 6 回神奈川県精神科病院協会・神奈川県精神神経科診療所協会合同講演会，神奈川，2011.7.28.

3) 伊藤順一郎：日本における ACT の活動の実際と課題～白衣を捨てよ、町へ出よう～．第 1 回東葛アウトリーチプロジェクト，千葉，2011.8.29.

4) 伊藤順一郎：リカバリー　期待・夢・現実　～精神障害者のリカバリーに付随して何が生起するか～．リカバリー全国フォーラム 2011　基調シンポジウム，東京，2011.9.8.

5) 伊藤順一郎：「こんぼ亭」スペシャル：続・リカバリーのことを語ろうじゃないか．リカバリー全国フォーラム 2011　分科会，東京，2011.9.8.

6) 伊藤順一郎：精神保健医療福祉システムとリカバリー～私たちはこんな精神保健医療福祉システムを望んでいる～．リカバリー全国フォーラム 2011　分科会，東京，2011.9.9.

7) 伊藤順一郎：ACT における支援の在り方ー白衣を捨てよ、町にでようー．第 12 回臨床医のための統合失調症治療実践セミナー，東京，2011.9.9.
8) 伊藤順一郎：「ストレングス・リカバリー」の視点へ．社会医療法人清和会　こころクリニックせいわ特別講演会，島根，2011.10.3.
9) 伊藤順一郎：包括型地域生活支援プログラム（ACT）の日本での定着について．第 14 回北摂四医師会神経精神医学研究会，大阪，2011.10.8.
10) 伊藤順一郎：ACT（包括型地域生活支援プログラム）の日本での可能性．第 18 回精神医療法研究会，東京，2011.10.16.
11) 伊藤順一郎：健康な社会を育てる～笑顔ある未来のために一緒に進モー！！～．甲州・東海ブロック家族会　精神保健福祉促進研修会　松坂大会，三重，2011.11.10.
12) 伊藤順一郎：「白衣を捨てよ、町に出よう！」地域生活中心の精神科医療のあり方．第 4 回埼玉県北部精神科連携の会，埼玉，2011.11.15.
13) 伊藤順一郎：「家族相談会特別版」・「リカバリーの視点を用いた支援と”連携協働”」・「ひきこもりの現状から～当事者・家族の思いを伝える医療機関の役割」．地域医療講演会，高知，2012.1.13.
14) 伊藤順一郎：統合失調症の症状と、その付き合い方．精神保健福祉講演会，東京，2012.1.15.
15) 伊藤順一郎：白衣を捨てよ、町に出よう地域生活中心の精神科医療のありかたー必要なシステム・スキルー．第 3 回北海道精神科チームケア研究会，北海道，2012.1.23.
16) 伊藤順一郎：統合失調症を生きる．フォーラム統合失調症を生きる～病とともに自分らしく～，東京，2012.1.29.
17) 伊藤順一郎：ACT の理念・哲学について．ＡＣＴ普及・啓発セミナーＩＮ長崎，長崎，2012.2.11.
18) 伊藤順一郎：アウトリーチを地域の中で活かすために～病院や地域が今後どのように変わっていけば良いのか～．NPO 法人多摩在宅支援センター円・地域ネットワーク多摩（ちたま）共催講演会，東京，2012.2.17.
19) 吉田光爾：支援環境開発論「ひきこもりの理解と支援」．日本社会事業大学講義，東京，2011.6.24.
20) 吉田光爾：支援環境開発論「ひきこもりの理解と支援」．日本福祉大学講義，愛知，2011.12.3-4.
21) 吉田光爾：評価って何？．日本福祉大学第 7 回ケアマネジメント研究セミナー，名古屋，2011.12.3.
22) 吉田光爾：ケアマネジメントの標準化と評価の方法．日本福祉大学第 7 回ケアマネジメント研究セミナー，名古屋，2011.12.4.
23) 吉田光爾：精神障害者リハビリテーション概論．平成 23 年度厚生労働大臣指定講習（後期合同講習），千葉，2012.1.31.

D．学会活動　（学会主催，学会役員，座長，編集委員等）

(1) 学会役員

1) 伊藤順一郎：日本精神障害者リハビリテーション学会　常任理事
2) 伊藤順一郎：日本統合失調症学会　評議員
3) 伊藤順一郎：日本家族研究・家族療法学会　評議員

(2) 座長

(3) 学会誌編集委員等

1) 伊藤順一郎：日本家族研究・家族療法学会　編集委員
2) 伊藤順一郎：心理教育・家族教室ネットワーク　運営委員

3) 伊藤順一郎：リハビリテーション研究　編集委員
4) 吉田光爾：日本精神障害者リハビリテーション学会　査読委員
5) 吉田光爾：日本社会福祉学会 査読委員
6) 佐藤さやか：日本精神障害者リハビリテーション学会　査読委員

E．研修

(1) 研修企画

1) 伊藤順一郎，吉田光爾：平成 23 年度精神保健に関する技術研修．第 9 回 ACT 研修，東京・千葉，2011.10.18-21.
2) 伊藤順一郎，吉田光爾：平成 23 年度精神保健に関する技術研修．第 3 回アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問による生活訓練研修，東京・千葉，2011.10.18-21.

(2) 研修会講師

1) 伊藤順一郎：精神科リハビリテーションに必要な技術とは～アウトリーチに必要な技術～．新潟精神科リハビリテーション研修会　第 13 回研修会，新潟，2011.5.14.
2) 伊藤順一郎：統合失調症を中心とした家族心理教育に関する知識および介入技術の向上．標準版家族心理教育研修会 in 岡山，岡山，2011.6.17-19.
3) 伊藤順一郎：精神障害者の社会復帰及び精神障害者福祉．第 103 回精神保健指定医研修会，東京，2011.7.21.
4) 伊藤順一郎：ACT の理念と実際．日本精神科看護技術協会研修会（多職種チームシリーズアウトリーチ），東京，2011.7.28.
5) 伊藤順一郎：問題解決グループワーク．第 2 回家族心理教育インストラクター養成セミナー，東京，2011.7.29-30.
6) 伊藤順一郎：それでも未来をあきらめない．第 1 回 IPS 全国研修会，東京，2011.8.6.
7) 伊藤順一郎：心理教育的グループ．平成 23 年度精神保健に関する技術研修第 9 回摂食障害治療研修，東京，2011.9.1.
8) 伊藤順一郎：白衣を捨てよ、町に出よう： 医療が地域社会に出て行くとき・・ACT．第九回 ACT 研修，第三回 アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問による生活訓練研修，東京，2011.10.18.
9) 伊藤順一郎：精神障害者の社会復帰及び精神障害者福祉．第 47 回精神保健指定医研修会，大阪，2011.12.10.
10) 伊藤順一郎：ストレングスアセスメント．平成 23 年度精神障害者・知的障害者等の地域生活支援の為の研修会，千葉，2011.12.27.
11) 伊藤順一郎：精神障害者の社会復帰及び精神障害者福祉．第 106 回精神保健指定医研修会，東京，2012. 2.9.
12) 伊藤順一郎：精神科アウトリーチ支援の実践について～ACT-J の取り組み～．東京都立中部総合精神保健福祉センター研修会，東京，2012.2.22.
13) 伊藤順一郎：ACT-K における事例検討および「ストレングスモデル」について．たかぎクリニック職員研修会，京都，2012.2.24.
14) 新居昭紀，伊藤順一郎：アウトリーチにおける心理教育心理教育・家族教室ネットワーク第 15 回研究集会分科会，静岡，2012.3.8.
15) 伊藤順一郎：ストレングスモデルのケースマネジメントⅠ．第 3 回全国 ACT 研修　仙台大会，宮城，2012.3.18.
16) 伊藤順一郎：ストレングスモデルのケースマネジメントⅡ．第 3 回全国 ACT 研修　仙台大会，宮城，2012.3.18.
17) 吉田光爾：訪問活動のニーズと実際．平成 23 年度精神保健に関する技術研修．第 3 回アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問による生活訓練研修，千葉，2011.10.20.

18) 吉田光爾：ストレングスアセスメント．平成 23 年度　精神障害者・知的障害者等の地域生活支援の為の研修会，大阪，2012.2.17.
19) 吉田光爾：ACT の適合度評価尺度．第 3 回全国 ACT 研修　仙台大会，宮城，2012.3.18.
20) 佐藤さやか：認知行動療法と地域生活スキル．平成 23 年度精神保健に関する技術研修．第 3 回アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問による生活訓練研修，千葉，2011.10.20.

12. 司法精神医学研究部

Ⅰ．研究部の概要

司法精神医学研究部は，平成 15 年 7 月 10 日「心神喪失等の状態で重大な他害行為を行った者の医療及び観察等に関する法律」（以下．医療観察法とする）の成立に伴い，同年 10 月に第 11 番目の研究部として新たに設置された．研究部は制度運用研究室，専門医療・社会復帰研究室，精神鑑定研究室の 3 室より構成されている．新たな制度の運用状況を客観的に評価すること，専門施設における治療技術を開発すること，精神鑑定における諸問題を研究することなどを目的としている．

平成 23 年度（平成 23 年 4 月～24 年 3 月）の人員構成は，部長：岡田幸之，精神鑑定研究室長：岡田幸之（平成 23 年 1 月 1 日以降は部長併任），制度運用研究室長：菊池安希子，専門医療・社会復帰研究室長：安藤久美子，成人精神保健研究部認知機能研究室長（司法精神医学研究部併任）：福井裕輝，任期付研究員：西中宏吏，小松容子，長沼洋一である．なお，併任研究員として独立行政法人国立精神・神経医療研究センター病院医師の野田隆政，同病院臨床心理技術者の朝波千尋，同病院心理療法士の出村綾子，研究生として京都医療少年院法務技官：川田良作，NPO 法人性障害専門治療センター心理士：石塚聖堂，武蔵野大学大学院人間社会文化・研究科人間社会専攻：淺野敬子，広島大学大学院総合科学研究科：増井啓太，独立行政法人国立精神・神経医療研究センター病院第一精神診療部科研費心理療法士：中澤佳奈子を迎えて研究に臨んだ．

社会的活動としては，裁判所，検察庁から嘱託された精神鑑定を行い，また，法務省，警察庁，大学等の関係機関からの要請により専門教育に対する講師を務めた．

Ⅱ．研究活動

1)　心神喪失者等医療観察法制度の指定入院モニタリング調査研究

本研究は，医療観察制度の指定入院医療機関からの情報を統合的に収集管理し，専門的な見地からの評価と分析を加え，その結果を関係機関にフィードバックするものである．データ収集にあたっては，全国の医療観察法指定入院医療機関の協力により，その臨床情報から，対象者の基礎情報（氏名，住所等の個人を特定する情報を除く），治療期間や治療内容，退院に際しての住居の確保，社会復帰における連携状況等に関する情報などを収集し，解析した．指定入院医療機関の病床数を十分確保すること，地域社会における受け皿を確保するという同法の専門的治療の現状と問題点をデータを用いて明らかにすることができた．（岡田，菊池，長沼）

2)　心神喪失者等医療観察法制度の指定通院モニタリング調査研究

本研究は，医療観察制度の指定通院医療機関からの情報を統合的に収集管理し，専門的な見地からの評価と分析を加え，その結果を関係機関にフィードバックするものである．データ収集にあたっては，全国の指定通院医療機関の協力により，その臨床情報から，対象者の基礎情報（氏名，住所等の個人を特定する情報を除く），通院処遇中の精神保健福祉法による入院や問題行動の有無に関しても詳細な情報を収集し，解析した．指定通院医療機関を十分確保することの必要性などをデータを用いて明らかにすることができた．（岡田，安藤，中澤）

3)　刑事責任能力の評価に関する研究

司法精神鑑定の公平性の実現は長年にわたる懸案事項である．岡田らは，この刑事責任能力の評価・判定方法について精神医学と法学の両側面から，その標準化をはかるべく研究を行っている．本年度は，裁判員制度における精神鑑定の方法，および鑑定結果の報告の方法について，法実務家，法律学者を交えた検討を行い，次年度にむけた研究体制の拡充をはかった．（岡田，安藤）

4) 重度精神障害者に対する医療観察法指定入院・通院医療機関において実施する治療プログラムの開発に関する研究

医療観察法の指定入院医療機関にて実施可能な他害行為防止為の治療プログラムを引き続き開発した.

平成 17～18 年に開発したノーマライゼーションに基づく「認知行動療法導入プログラム（疾患教育の後に実施する集団プログラム)」を引き続き実施し，効果測定に関するデータを収集するとともに，研修等を通じて他機関への普及をはかった．また，認知行動療法の効果のモニタリングに有用な自記式病識尺度の信頼性・妥当性を検討するためのデータ収集を行った.

重度精神障害者の再他害行為防止にむけて，世界 17 ヶ国の刑務所ならびに司法精神科において，標準的に実施されている一般的他害行為防止プログラムについての調査を通して，本邦で実施する上で必要な要素を抽出し，医療観察法指定入院医療機関において提供可能なプログラム（名称：武蔵思考スキル強化プログラム）を開発し，試行を続けている．その結果，被害者への共感性に関係が深いとされる「視点取得」において，および問題解決能力に有意な改善が見られるという予備的結果が得られた．今後は，同プログラムを改訂し，効果検討を実施する予定である．また，同様のプログラムを，精神障害受刑者にも実施し，効果測定のための予備的データを収集している．（菊池）

5) 触法精神障害者に対する脳機能画像データの有効性に関する検討

世界における研究の進捗状況を概観し，適切な検査項目について検討を行った．質問紙として，衝動性，攻撃性，共感性，道徳観念その他を選択した．心理検査は，一般的な検査に加え，前頭前皮質，扁桃体などの機能的障害を特異的に検出する種々の検査を決定した．画像検査については，MRI，SPECT，PET など各種検査機器を用いて，どのように実施するのか検討を行った．（福井，西中）

6) 司法精神科医療における患者の積極的な治療・リハビリテーションへの参加に関する研究

司法精神科医療は，医療観察法による強制医療の側面を持っているが，今日の精神保健サービスにおいては，患者が積極的あるいは能動的に治療・リハビリテーションに参加することが望まれている．本研究では，英国マンチェスター大学の Lovell, Karina 教授と Baker, A. John 講師との共同研究で，本年度は，日本における司法精神科医療サービスにおける，患者の治療・リハビリテーションへの参加の程度についての分析および国際的文献レビューを行った．（小松）

Ⅲ．社会的活動に関する評価

1) 市民社会に対する一般的な貢献

岡田幸之，安藤久美子，福井裕輝は，裁判所，検察庁の依頼による刑事司法鑑定および心神喪失者等医療観察法の鑑定を行い，市民社会に貢献した.

安藤久美子は警視庁の依頼により，人質立てこもり事件等における支援活動員を務め，市民社会に貢献した.

西中宏吏は，鑑定助手として心理検査を担当し，一般的な検査に加え，前頭前皮質，扁桃体などの機能的障害を特異的に検出する種々の検査を施行した.

2) 専門教育面における貢献

岡田幸之は，科学警察研究所において，捜査担当者を対象とした「犯罪者プロファイリング課程研修講義：精神鑑定・精神医学概論」を担当し，捜査実務家の養成に貢献した.

岡田幸之は，法務総合研究所において，検察官を対象として「刑事責任能力」に関する講義を担当し，司法実務につく法律家の養成に貢献した.

岡田幸之は，司法研修所において，裁判官を対象として「精神鑑定」に関する講義を担当し，司法実務につく法律家の養成に貢献した.

岡田幸之は，東京医科歯科大学において，非常勤講師を務め，司法精神医療に携わる看護師の養成に貢献した.

安藤久美子は，関東管区警察学校において，全国の警察機関に所属する上級カウンセラーを対象に「精神医学的からみた非行少年の特性」について講義を行い，警察所属の少年カウンセラーの養成に貢献した.

安藤久美子は，内閣府主催のシンポジウムにおいて，「児童ポルノ被害者の心理」に関する講演を行い，児童ポルノ排除に向けた内閣府の広報活動に貢献した.

安藤久美子は，警察大学校において，全国の警察本部に所属する児童ポルノ担当警察官らを対象に「児童ポルノ被害者の心理」に関する講義を行い，警察官の教育等に貢献した.

安藤久美子は，法務総合研究所において，新任検事を対象として「精神鑑定」に関する講義を担当し，司法実務につく法律家の養成に貢献した.

安藤久美子は，認定産業医の資格のもと，司法研修所において新任検事を対象とした「メンタルヘルス」に関する講義を担当し，司法実務につく法律家の健康教育等に貢献した.

菊池安希子は，法務省心神喪失者等医療観察法制度導入研修や，医療観察法指定入院医療機関の開棟前研修において，「統合失調症の認知行動療法」ならびに「他害行為防止の認知行動療法」についての講義を行い，地域処遇実務につく社会復帰調整官と指定入院医療機関スタッフの養成に貢献した.

福井裕輝は，京都医療少年院において，法務教官を対象に司法精神医学の近年の知見について研修等を行い，知識の啓蒙を行った.

福井裕輝は，京都大学医学部において非常勤講師を務め，司法精神医学に関する専門的知識の啓蒙を行った.

3)　精研の研修の主催と協力

岡田幸之，安藤久美子，福井裕輝，菊池安希子，長沼洋一は，国立精神・神経医療研究センター平成 23 年度第 6 回司法精神医学研修にて講義を行った.

岡田幸之は，国立精神・神経医療研究センター平成 23 年度発達障害支援研修にて講義を行った.

菊池安希子は，国立精神・神経医療研究センター病院精神科レジデント初期セミナーおよび中期セミナーにて統合失調症の認知行動療法についての講義を行った.

菊池安希子は，国立精神・神経医療研究センター認知行動療法センターのアドバンスド研修において統合失調症の認知行動療法についての講義を行った.

小松容子，西中宏吏，長沼洋一は，国立精神・神経医療研究センター平成 23 年度第 6 回司法精神医学研修開催を援助した.

4)　保健医療行政・政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

岡田幸之，安藤久美子，福井裕輝，菊池安希子は，厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「心神喪失者等医療観察法制度における専門的医療の向上に関する研究」の運用にあたり有用な基礎的情報を提供に貢献した.

5)　センター内における臨床的活動

岡田幸之，安藤久美子は，病院第一病棟部精神科医師を併任し，臨床的活動を行った.

岡田幸之は，医療観察法病棟（8 病棟，9 病棟）運営会議に出席し，臨床的活動を行った.

岡田幸之は，医療観察法鑑定入院（5 階北病棟）に，鑑定医として協力した.

菊池安希子は，病院臨床心理技術者を併任し，臨床的活動を行った.

安藤久美子は，臨床治験の分担医師として複数の患者を担当し，新薬開発のために貢献した.

6) その他

小松容子は，雑誌「精神看護」医学書院のモニター役として，雑誌内容の評価及び意見を提供し，専門雑誌による情報普及に関する質の向上に貢献した.

Ⅳ. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

1) 安藤久美子，岡田幸之：同意によらない治療的介入に関する「緊急性評価基準」の開発．司法精神医学雑誌6(1):10-20，2011.

(2) 総説

1) 岡田幸之：精神鑑定とうそ．こころの科学 156：28-32，2011.
2) 岡田幸之，安藤久美子：裁判員にわかりやすい精神鑑定結果の報告．精神医学 53(10)：947-953，2011.
3) 岡田幸之：責任能力鑑定のあり方、とくに裁判員制度との関係．北陸司法精神医学懇話会会報 15：2-15，2011.
4) 岡田幸之：医師の立場からみた「治療反応性」の概念．司法精神医学 7(1)：73-79，2011.
5) 菊池安希子：ストレス関連障害，解離性障害，身体表現性障害の認知行動療法③－身体表現性障害－．神経症性障害の治療ガイドライン．精神治療学 26（302）：180-184，2011.
6) 菊池安希子，長沼洋一，安藤久美子，岡田幸之：医療観察法の運用状況．Schizophrenia Frontier12(3)：17-22，2011.
7) 安藤久美子：精神障害と暴力犯罪．Schizophrenia Frontier12(3)：7-12，2011.
8) 高岸治人，福井裕輝：うそつきとサイコパス．こころの科学 156：33-36，2011.
9) 小松容子：英国の大学におけるリサーチスチュエーデント育成のためのサポートシステムーマンチェスター大学を例にー．看護研究 45（01）：32-38，2012.

(3) 著書

1) 岡田幸之：8 章 犯罪捜査と心理学（健忘の偽装）．法と心理学事典，朝倉書店，東京，pp330-331，2011.
2) 岡田幸之：12 章 精神鑑定（精神鑑定，統合失調症，気分障害，パーソナリティ障害，物質関連障害，酩酊と責任能力，ICD と DSM，精神障害者による殺人，疾病の偽装と隠ぺい，健忘，刑事裁判の訴訟能力に関する鑑定，責任能力の基準）．法と心理学事典，朝倉書店，東京，pp518-566，2011.
3) 岡田幸之：「Ⅲ．鑑定書」B．簡易精神鑑定書．C．1. 刑事精神鑑定書．山内俊雄，松原三郎編：精神科医のためのケースレポート・医療文書の書き方「実例集」，中山書店，東京，pp395-404，2011.
4) 岡田幸之：「刑事責任能力」．松下正明総編：精神医学キーワード事典，中山書店，東京，pp394-396，2011.
5) 岡田幸之：不可知論の「カチ」ー刑事精神鑑定の基本問題からー．精神科臨床はどこへいく，日本評論社，東京，pp134-137，2011.
6) 菊池安希子：日常生活の改善を目指した認知行動療法．今日の精神疾患治療指針，医学書院，東京，pp854-856，2012.

7)　福井裕輝：5 章 心理学の諸分野と研究方法（ホルモンと犯罪の関係，神経伝達物質と犯罪の関係）．法と心理学事典，朝倉書店，東京，pp126-133，2011.
8)　安藤久美子：6 章 犯罪原因論（発達障害と犯罪）．法と心理学事典，朝倉書店，東京，pp180-181，2011.
9)　安藤久美子：12 章 精神鑑定（発達障害，アスペルガー障害，精神遅滞（知的障害），性嗜好障害（異常），外傷性記憶と法廷，精神保健福祉法における通報と措置診察，精神保健福祉法による入院）．法と心理学事典，朝倉書店，東京，pp518-566，2011.
10)　長沼洋一：統計資料．精神保健福祉白書 2012 年版東日本大震災と新しい地域づくり，中央法規，東京，pp197-219，2011.
11)　長沼洋一：解説（医療観察法，自殺，地域生活支援，雇用・職業）．精神保健福祉白書 2012 年版東日本大震災と新しい地域づくり，中央法規，東京，pp222，2011.
12)　長沼洋一：質的調査の方法と活用. 精神保健福祉士専門科目編，ミネルヴァ書房，東京，pp386-391，2012.

(4) 研究報告書

1)　岡田幸之：「医療観察法対象者のモニタリング体制の確立に関する研究」．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））「医療観察法制度の鑑定入院と専門医療の適正化と向上に関する研究（研究代表者：五十嵐禎人）」総括・分担研究報告書，pp71-76，2012.
2)　菊池安希子：「指定入院医療機関モニタリング調査研究」．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））「医療観察法制度の鑑定入院と専門医療の適正化と向上に関する研究（研究代表者：五十嵐禎人）」総括・分担研究報告書，pp79-94，2012.
3)　安藤久美子：「指定通院医療機関モニタリング調査研究」．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））「医療観察法制度の鑑定入院と専門医療の適正化と向上に関する研究（研究代表者：五十嵐禎人）」総括・分担研究報告書，pp97-125，2012.
4)　竹島 正，趙 香花，河野稔明，小山明日香，立森久照，長沼洋一，廣川聖子：「改革ビジョン」の進捗状況のモニタリングと評価に関する研究－「精神保健医療福祉の改革ビジョン」前期におけるマクロ実態の変化－．平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総括・分担研究報告書，pp9-27, 2011.
5)　竹島 正，河野稔明，長沼洋一，小山明日香，趙 香花，廣川聖子，立森久照：「改革ビジョン」の進捗状況のモニタリングと評価に関する研究－「精神保健福祉資料」に係る電子調査票の利用状況と回答時期の変化－．平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総括・分担研究報告書，pp29-34, 2011.
6)　竹島 正，小山明日香，河野稔明，立森久照，長沼洋一：「改革ビジョン」の進捗状況のモニタリングと評価に関する研究－「かえる・かわる 精神保健医療福祉の改革ビジョン研究ページ」の運用について－．平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総括・分担研究報告書，pp35-39, 2011.
7)　立森久照，河野稔明，長沼洋一，小山明日香，趙 香花，廣川聖子，竹島 正：精神保健医療福祉体系の改革のモニタリングの詳細分析. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総括・分担研究報告書，pp47-61，2011.
8)　安西信雄，長沼洋一，長沼葉月，平林直次，坂田増弘，池淵恵美：精神科デイ・ケアの有効活用に関する研究．平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総括・分担研究報告書，pp87-98, 2011.

9) 白石弘巳，竹島 正，趙 香花，長沼洋一，堀井茂男，野口正行，河野稔明，立森久照：精神障害者等のニーズ把握及び権利擁護にあたる民間団体の育成に関する研究－医療保護入院患者の保護者に関する研究－．平成22年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総括・分担研究報告書，pp115-127, 2011.

10) 立森久照，長沼洋一，伊藤順一郎，川野健治，鈴木友里子，三島和夫，和田 清，小川雅代，嶋根卓也，亀井雄一：精神・神経疾患に係る大規模コホートスタディの実施計画の検討．国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費(21 委-8) 精神・神経疾患に関わる大規模コホートの構築に関する研究 （主任研究者：竹島 正）平成22年度総括･分担研究報告書(平成21年度～22年度)，pp43-45, 2011.

11) 中込和幸，蟹江絢子，朴盛弘，兼子幸一，最上多美子、三浦祥恵，本谷麻貴，丹羽真一，稲垣晃子，池渕恵美，菊池安希子，山崎修道，岩田和彦，山田寛：「統合失調症の社会認知と生活機能の改善に関する研究」．平成21-23年度精神・神経疾患研究開発費「統合失調症の診断、治療法の開発に関する研究（研究代表者：安西信雄）」総括研究報告書，pp63-99

(5) 翻訳

1) 大澤智子，菊池安希子（訳）：エンボディされた自己に向けて（前編）－EMDR と身体的介入，自我状態療法の統合－．著：Sandra Paulsen and Ulrich Lanius．EMDR 研究 3(1)，日本 EMDR 学会，東京，2011.

2) 安藤久美子，中澤佳奈子（訳）：Ｊ・モナハン，Ｈ・Ｊ・ステッドマン，Ｅ・シルヴァー，Ｐ・Ｓ・アッペルバウム，Ｐ・Ｃ・ロビンス，Ｅ・Ｐ・マルヴェイ，Ｌ・Ｈ・ロス，Ｔ・グリッソ，Ｓ・バンクス（著）「暴力のリスクアセスメント」－精神障害と暴力に関するマッカーサー研究から－．星和書店，東京，2011.

(6) その他

1) 岡田幸之，中島直，田岡直博，金岡繁裕：裁判員裁判における精神鑑定の現状（座談会）．季刊刑事弁護， No.69 SPRING：35-51,2012.1.10.

2) 菊池安希子：統合失調症を理解し支援するための認知行動療法．（書評）ブリーフサイコセラピー研究20(1)：50，日本ブリーフサイコセラピー学会，2011.

3) 福井裕輝：弁護人の再鑑定請求が認められた事例(協力医コメント)．季刊刑事弁護， No.69 SPRING：111-113，2012.1.10.

4) 小松容子：「本学会や学会関係者から学ぶ日本の精神保健福祉政策の歴史」（会員の声）. JAMHP NEWS 39号, 日本精神保健福祉政策学会，東京，2011.

Ｂ．学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

1) Ando, K : Analysis of the Current Situations of Forensic Mental Health Services in Japan . Current Issues and Future Perspective of Criminal Psychiatry，16th World Congress of the International Society for Criminology，2011.8.5-9.

2) 岡田幸之：（シンポジウムⅠ）医師の立場からみた「治療反応性」の概念. 第7回日本司法精神医学学会大会，岡山，2011.6.4.

3) 岡田幸之：精神鑑定の基本手法．司法精神医学鑑定ワークショップ，日本司法精神医学会，東京，2011.11.12-13.

4) 岡田幸之：刑事精神鑑定の基礎－その手法と考え方（教育講演Ⅱ）. 第31回日本社会精神医学会，

東京，2012.3.15.

5) 太田茂, 菊池安希子:「EMDR 直近トラウマエピソード・プロトコル (R–TEP)」(講師)．日本 EMDR 学会第 6 回学術大会継続研修会，東京，2011.5.14.

6) 菊池安希子：自主シンポジウム「医療観察法における心理臨床」－リスク/ニーズアセスメント－．第 30 回日本心理臨床学会秋季大会，福岡，2011.9.2.

7) 安藤久美子：イギリスと我が国の「発達障害者と触法」を考える．P and A-J, 東京，2011.6.11-12.

8) 安藤久美子：内閣府「児童ポルノ排除対策公開シンポジウム」（講師），東京，2011.11.17.

9) 安藤久美子：矯正教育・再犯防止、精神鑑定と AA．NPO 法人 P and A-J「発達障害者と触法を考える」拡大研究会（講演），東京，2011.11.23.

10) 安藤久美子：司法が自閉症スペクトラムについて知っておかなければならないこと．NPO 法人 P and A-J 発達障害と地域支援セミナー「もしも知的傷害・発達傷害のある人がトラブルを起こしたら？」, 東京，2012.3.31.

11) 野田隆政，平林直次，安藤久美子，大森まゆ，黒木規巨：医療観察法における ECT のインフォームド・コンセント．シンポジウム 12．第 107 回日本精神神経学会学術総会，東京，2011.10.26.

(2) 一般演題

1) Kikuchi, A : A pilot study investigating psychiatric staff response to normalizing psychotic symptoms. British Association for Behavioural and Cognitive Psychotherapies 39th Annual Conference，2011.7.21-23.

2) Fukui H, Nishinaka H, Yoshikawa K : Anatomically related white matter abnormalities in schizophrenia with violence. The 10th World of Congress of Biological Psychiatry，Prague，2011.5.29.

3) Nishinaka, H, Fukui, H : Relationship between Psychic Trauma and Antisociality : Estimations on Emotional/Behavioral Probiems and Brain Functional Dysfunctions. 16th World Congress of the International Society for Criminology，Kobe，2011.8.5-9.

4) Nishinaka ,H, Fukui, H : Delay and Probability Discounting in Psychopathic Traits. 16th World Congress of the International Society for Criminology，Kobe，2011.8.5-9.

5) Nishinaka, H, Fukui, H : Reduced White Matter Integrity Correlated with Gray Matter Deficits in Schizophrenia with Violence．16th World Congress of the International Society for Criminology，Kobe，2011.8.5-9.

6) Nakazawa, K，Ando, K，Suzuki, S，Okada, T : Relationship between Victims and Objective Acts in the Medical Treatment and Supervision Act in Japan．16th World Congress of the International Society for Criminology，Kobe，2011.8.5-9.

7) 岡田幸之，安藤久美子：司法精神医学領域における成人アスペルガー症候群．第 107 回日本精神神経学会学術総会，東京，2011.10.26-27.

8) 菊池安希子, 長沼洋一, 佐野雅隆，中澤佳奈子，安藤久美子，岡田幸之：医療観察法指定入院医療機関におけるモニタリングに関する研究．第 7 回日本司法精神医学学会大会，岡山，2011.6.4.

9) 菊池安希子：幻覚妄想の認知再構成におけるシーディング利用．日本ブリーフサイコセラピー学会第 21 回秋田大会，秋田，2011.11.4.

10) 安藤久美子，中澤佳奈子，佐野雅隆，長沼洋一，菊池安希子，岡田幸之：医療観察法指定通院医療の実態に関する調査研究．第 7 回日本司法精神医学学会大会，岡山，2011.6.4.

11) 安藤久美子，中澤佳奈子，長沼洋一，菊池安希子，岡田幸之：医療観察法通院処遇における問題行動のリスクファクター．第 31 回日本社会精神医学会，東京，2012.3.16.

12) 西中宏史，宮田淳，福井裕輝：触法精神障害者を対象とした統合失調症と暴力における白質神経構造異常と認知機能の関連：CANTAB による検討. 第 33 回日本生物学的精神医学会, 東京, 2011.5.22.
13) 小松容子：患者の自己決定に関する予備的研究－指定入院医療機関における看護師および入院患者への半構造化面接調査－．第 42 回日本看護学会 - 精神看護 - 学術集会，北海道，2011.9.30-10.1.
14) 小松容子：医療観察法制度における入院治療中の青壮年期の患者の体験：治療に取り組むことへの意味づけ．日本質的心理学会第 8 回大会，広島，2011.11.26-27.
15) 小松容子：司法精神科医療における入院患者の治療・リハビリテーションへの積極的な関わりを促す援助技法の探索．第 31 回日本看護科学学会学術集会，高知，2011.12.3.
16) 小松容子，Lovell K，Baker J：精神科医療における SDM（Shared Decision Making）に関する国際的動向．第 31 回日本社会精神医学会，東京，2012.3.15.
17) 長沼洋一, 長沼葉月：学生支援における大学シャルワーカーの業務確立プロセスに関する研究(1)全国調査にみる大学ソーシャルワーカーの配置状況. 日本学校ソーシャルワーク学会第 6 回全国大会，福岡，2011.11.19-20.
18) 長沼洋一，菊池安希子，岡田幸之，安藤久美子：医療観察法入院医療機関における患者の入院時から退院時の変化．第 31 回日本社会精神医学会，東京，2012.3.16.
19) 小山明日香，沢村香苗，立森久照，長沼洋一，池田学，竹島正：精神障害およびひきこもり事例についての一般地域住民の認識．第 31 回日本社会精神医学会，東京，2012.3.16.
20) 河野稔明，趙香花，長沼洋一，立森久照，野口正行，堀井茂男，白石弘巳，竹島正：市町村同意による医療保護入院の実態と課題．第 31 回日本社会精神医学会，東京，2012.3.16.
21) 玉村あき子，福井裕輝：性犯罪加害者家族のストレスとグループ心理支援．第 7 回京都法精神医学研究会，京都，2012.2.4.
22) 石塚聖堂，山科満，福井裕輝：中学生いじめ実態調査－加害者・被害者の要因を通して－．第 33 回日本生物学的精神医学会，東京，2011.5.22.
23) 中澤佳奈子，安藤久美子，長沼洋一，菊池安希子，岡田幸之：医療観察法における対象行為と被害者との関係．第 7 回日本司法精神医学学会大会，岡山，2011.6.4.

(3) 研究報告会

1) 岡田幸之，菊池安希子，安藤久美子，長沼洋一：平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業「医療観察法制度の鑑定入院と専門的医療の適正化と向上に関する研究」（研究代表者：五十嵐禎人）第 1 回研究者会議，東京，2011.6.17.
2) 岡田幸之，菊池安希子，長沼洋一：平成 23 年度第 1 回村上分担班会議（研究分担者：村上優）「診療情報の管理に関する講習会」，東京，2011.7.1.
3) 岡田幸之：平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究」（研究代表者：竹島正）. 第 1 回研究班会議，東京，2011.8.1.
4) 岡田幸之：第 121 回中央検事打合せ会議．法務総合研究所，東京，2011.8.24，25.
5) 岡田幸之，菊池安希子，安藤久美子，長沼洋一：平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業「医療観察法制度の鑑定入院と専門的医療の適正化と向上に関する研究」（研究代表者：五十嵐禎人）第 2 回研究者会議，東京，2011.11.18.
6) 岡田幸之：平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究」（研究代表者：竹島正）第 2 回「精神保健改革」班会議, 東京, 2011.12.22.
7) 岡田幸之，菊池安希子，安藤久美子，長沼洋一：平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業「医療観察法制度の鑑定入院と専門的医療の適正化と向上に関する研究」（研究代表者：五十嵐禎人）第 3 回研究者会議，東京，2012.2.25.

8) 岡田幸之, 安藤久美子 : 精神科医・弁護士合同精神鑑定検討委員会. 八重洲ホール, 東京, 2012.3.17.
9) 菊池安希子 : 日本ブリーフサイコセラピー学会常任理事会. 東京, 2011.4.16.
10) 菊池安希子 : 平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「医療観察法における医療の質の向上に関する研究」（研究代表者 : 中島豊爾）分担研究「通院医療モデルの構築に関する研究」（研究分担者 : 岩成秀夫）第 1 回研究会議, 東京, 2011.7.30.
11) 菊池安希子 :「播磨社会復帰促進センター『教育に係るアンケート』の結果概要」報告会（講師）, 兵庫, 2011.9.15.
12) 菊池安希子 : 平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「医療観察法における医療の質の向上に関する研究」（研究代表者 : 中島豊爾）分担研究「通院医療モデルの構築に関する研究」（研究分担者 : 岩成秀夫）第 2 回研究会議, 東京, 2011.10.16.
13) 菊池安希子 : 精神・神経疾患研究開発費研究事業「統合失調症の社会認知と生活機能の改善に関する研究」（研究分担者 : 中込和幸）研究会議, 東京, 2011.10.22.
14) 菊池安希子 : 平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「医療観察法における医療の質の向上に関する研究」（研究代表者 : 中島豊爾）分担研究「通院医療モデルの構築に関する研究」（研究分担者 : 岩成秀夫）, 通院処遇ワークショップ「より良い通院処遇のために」, 福岡, 2011.11.27.
15) 菊池安希子, 長沼洋一, 八木深, 平林直次, 佐野雅隆, 安藤久美子, 岡田幸之 : 医療観察法モニタリング研究からみた入院処遇対象者の特徴, 平成 23 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会, 2012.2.27.
16) 中込和幸, 最上多美子, 三浦祥恵, 山崎修道, 菊池安希子, 岩田和彦, 山田寛, 池淵恵美, 丹羽真一, 兼子幸一, 稲垣晃子, 本谷麻貴, 朴盛弘, 蟹江絢子 : 統合失調症患者の社会認知と生活機能の改善に関する研究. 平成 23 年度精神・神経疾患研究開発費精神疾患関連研究班・報告会, 東京, 2011.12.13.
17) 菊池安希子 : 平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「医療観察法における医療の質の向上に関する研究」（研究代表者 : 中島豊爾）分担研究「通院医療モデルの構築に関する研究」（研究分担者 : 岩成秀夫）, 第 3 回研究会議, 東京, 2011.12.17.
18) 菊池安希子 : 播磨社会復帰促進センター「教育プログラムに係るアンケート」結果報告. 播磨社会復帰促進センター, 兵庫, 2012.3.22.
19) 安藤久美子, 岩成秀夫, 松原三郎, 岡田幸之 : 医療観察法における指定通院医療モニタリング研究. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所平成 22 年度研究報告会（第 22 回）, 2011.5.23.
20) 安藤久美子 : 平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「医療観察法における医療の質の向上に関する研究」（研究代表者 : 中島豊爾）分担研究「通院医療モデルの構築に関する研究」（研究分担者 : 岩成秀夫）第 1 回研究会議, 東京, 2011.7.30.
21) 安藤久美子 : 第 121 回中央検事打合せ会議. 法務総合研究所, 東京, 2011.8.24, 25.
22) 安藤久美子 : 平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「医療観察法における医療の質の向上に関する研究」（研究代表者 : 中島豊爾）分担研究「通院医療モデルの構築に関する研究」（研究分担者 : 岩成秀夫）第 2 回研究会議, 東京, 2011.10.16.
23) 安藤久美子 : 平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「医療観察法における医療の質の向上に関する研究」（研究代表者 : 中島豊爾）分担研究「通院医療モデルの構築に関する研究」（研究分担者 : 岩成秀夫）, 第 3 回研究会議, 東京, 2011.12.17.
24) 西中宏史, 宮田淳, 福井裕輝 : 触法精神障害者を対象とした統合失調症と暴力の効果に関する白質神経構造異常について. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所平成 22 年度研究報告会（第 22 回）, 2011.5.23.

25) 西中宏吏, 高橋泰城, 福井裕輝：サイコパス傾向にみられる謹慎眼性に関する研究，平成 23 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会, 2012.2.27.
26) 小松容子，Lovell K, Baker J：患者参加型ケア「患者によるケアの選択」に関する質的研究－医療観察法病棟の入院患者と看護師の視点－. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所平成 22 年度研究報告会（第 22 回），2011.5.23.
27) 小松容子，Lovell K, Baker J：殺人を行った統合失調症患者の治療・リハビリテーションへの参加に関する調査，平成 23 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会, 2012.2.27.
28) 趙香花，長沼洋一，堀井茂男，野口正行，河野稔明，立森久照，白石弘巳，竹島正：医療保護入院患者の保護者に関する研究. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所平成 22 年度研究報告会（第 22 回），2011.5.23.
29) 立森久照，河野稔明，長沼洋一，小山明日香，趙香花，廣川聖子，竹島正：統合失調症および認知症の在院患者数の概況. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所平成 22 年度研究報告会（第 22 回），2011.5.23.
30) 長沼洋一：平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究」（研究代表者：竹島正），第 1 回研究班会議，東京，2011.8.1.
31) 立森久照, 河野稔明, 廣川聖子, 趙香花, 赤澤正人, 長沼洋一, 竹島正：精神科病院の在院患者数等の年次推移. 平成 23 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会,2012.2.27.
32) 趙香花, 長沼洋一, 堀井茂男, 野口正行, 河野稔明, 立森久照, 白井弘巳, 竹島正：医療保護入院制度の運用実態に関する調査. 平成 23 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会, 2012.2.27.

C．講演

1) 岡田幸之：司法精神医学の評価方法と司法精神鑑定. 精神保健看護学特論 B-2（講義）. 東京医科歯科大学大学院，東京，2011.11.1.
2) 岡田幸之：精神鑑定の動向. 第 8 回みやぎ・法と精神科医療懇話会（講演）, 東北大学, 宮城, 2011.11.17.
3) 岡田幸之：裁判員裁判と精神鑑定. 平成 23 年度秋学期法政総合講座「裁判員裁判を考える」（講義），埼玉，2011.12.7.
4) 岡田幸之：発達障害とパーソナリティ障害. 刑事鑑定研究会（講演），茨城，2011.12.8.
5) 岡田幸之：精神鑑定意見の構造. 刑事鑑定研究会（講演），埼玉，2011.12.15.
6) 岡田幸之：精神鑑定意見の構造. 刑事鑑定研究会（講師），東京，2012.1.13.
7) 岡田幸之：責任能力の判断構造. 刑事鑑定研究会（講師），横浜，2012.1.31.
8) 岡田幸之：妄想性パーソナリティ障害（指定討論）. 平成 23 年度第 2 回精神鑑定研究会（講師），東京地方検察庁，東京，2012.3.9.
9) 菊池安希子：「性犯罪再犯防止指導に係わるスーパーヴィジョンについて」. 加害者に対する処遇プログラムに関する講義，川越少年刑務所，川越，2011.3.28.
10) 菊池安希子：「地域生活中心」を推進する、地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究」（講演）. 厚生労働科学研究費「難病・がん等の疾患分野の医療に実用化」研究事業，千葉，2011.5.27.
11) 菊池安希子：「マインドフルネス認知療法」. KIDS カウンセリングシステム研究会, 東京, 2011.6.27.
12) 菊池安希子：「ACT：アクセプタンス&コミットメント・セラピー」（講師）. KIDS カウンセリングシステム研究会，東京，2011.7.10.
13) 菊池安希子：「CBT ブリーフコース後期～ケースフォーミュレーション～」（講師）. KIDS カウ

ンセリングシステム研究会，東京，2011.10.23.

14) 菊池安希子：「CBT ブリーフコース後期～幻覚・妄想への CBT～」（講師）．KIDS カウンセリングシステム研究会，東京，2011.11.20.

15) 菊池安希子：自分をつぶさない認知の仕方について．認知行動療法を活用した学習会（講師），神奈川，2012.1.27.

16) 菊池安希子：統合失調症のやさしい認知行動療法（講師），岡山，2012.2.3.

17) 安藤久美子：専科教育「被害者少年の心理と特性」について. 警察大学校，東京，2011.8.23.

18) 安藤久美子:精神遅滞. 平成 23 年度第 1 回精神鑑定研究会(講師), 東京地方検察庁, 東京, 2011.11.16

19) 安藤久美子：矯正教育・再犯防止、精神鑑定と AA．NPO 法人 P and A-J「発達障害者と触法を考える」拡大研究会（講演），東京，2011.11.23.

20) 安藤久美子：指定通院医療機関におけるモニタリング調査の概要. 第 70 回医療観察制度関係機関連絡協議会, 東京, 2011.12.15.

21) 安藤久美子：NPO 法人 P and A-J「発達障害者と触法を考える」拡大研究会（講演），東京，2012.1.29.

22) 安藤久美子：妄想性パーソナリティ障害（指定討論）．平成 23 年度第 2 回精神鑑定研究会（講師），東京地方検察庁，東京，2012.3.9

D．学会活動（学会主催，学会役員，座長，編集委員）

(1) 学会役員

1) 岡田幸之：日本社会精神医学会　理事

2) 岡田幸之：日本司法精神医学会　評議員

3) 岡田幸之：日本犯罪学会　評議員

4) 岡田幸之：日本犯罪学会　監事

5) 菊池安希子：日本司法精神医学会　評議員

6) 菊池安希子：日本ブリーフサイコセラピー学会　副会長

7) 菊池安希子：日本ブリーフサイコセラピー学会　常任理事

8) 菊池安希子：日本EMDR学会　副理事長

9) 菊池安希子：日本EMDR学会　理事

10) 安藤久美子：日本社会精神医学会　理事

11) 安藤久美子：日本司法精神医学会　評議員

(2) 座長

1) 岡田幸之：第 3 回刑事鑑定ワークショップ：事例検討（座長）．第 7 回日本司法精神医学学会大会，岡山，2011.6.5.

2) 岡田幸之：精神医学(2)（座長）．第 48 回日本犯罪学会総会，埼玉，2011.12.3.

3) 岡田幸之：刑事施設の精神障害者（座長）. 第 31 回日本社会精神医学会，東京，2012.3.15.

4) 菊池安希子：統合失調症と診断された女性との安全な場所づくり（座長）．日本 EMDR 学会第 6 回学術大会，東京，2011.5.13.

5) 菊池安希子：事例研究「職場でいじめの被害を受けた女性との面談課程」－EMDR を用いた回復への援助－（座長）．第 30 回日本心理臨床学会秋季大会，福岡，2011.9.4.

6) 菊池安希子：来談者の要望に応じた症状の扱い方（座長）. 日本ブリーフサイコセラピー学会第 21 回秋田大会，秋田，2011.11.5.

(3) 学会誌編集委員等

1) 岡田幸之：日本司法精神医学会　編集委員長
2) 岡田幸之：日本犯罪学会　編集委員
3) 岡田幸之：日本司法精神医学会　研修・教育企画拡大委員
4) 岡田幸之：日本司法精神医学会　裁判員制度プロジェクト委員
5) 岡田幸之：日本司法精神医学会　精神鑑定委員
6) 岡田幸之：American Academy of Psychiatry and the Law　International Committee
7) 菊池安希子：日本ブリーフサイコセラピー学会　倫理会則委員長
8) 菊池安希子：日本 EMDR 学会　倫理委員長
9) 菊池安希子：日本司法精神医学会　編集委員
10) 菊池安希子：日本 EMDR 学会第 6 回学術大会プログラム委員会
11) 菊池安希子：日本臨床心理士会　司法矯正領域専門委員会　協力委員
12) 菊池安希子：第 12 回日本認知療法学会準備委員会　事務局長
13) 安藤久美子：日本司法精神医学会　編集委員
14) 安藤久美子：日本司法精神医学会　裁判員制度プロジェクト委員
15) 安藤久美子：American Academy of Psychiatry and the Law　International Committee

E．研修

(1) 研修企画

1) 岡田幸之，安藤久美子，福井裕輝，菊池安希子，小松容子，西中宏吏，長沼洋一：平成 23 年度第 6 回司法精神医学研修，東京，2011.10.12-14.

(2) 研修会講師

1) 岡田幸之：「責任能力を巡る諸問題」．第 1 回裁判員裁判の課題，司法研修所，和光，2011.4.12.
2) 岡田幸之:「留置と精神保健について」. 留置業務指導専門官・留置係長研修, 警視庁, 東京, 2011.4.21.
3) 岡田幸之：「責任能力を巡る諸問題」平成 23 年度刑事実務研究会. 司法研修所，和光，2011.6.28.
4) 岡田幸之：「第 2 回研究会重大少年事件の実証的研究」平成 23 年度家庭裁判所調査官実務研究（指定研究）. 裁判所職員総合研修所, 東京，2011.7.12.
5) 岡田幸之：「医療観察法における精神鑑定の実際と審判員の業務」第 1 回精神保健判定医研修会. 裁判所職員総合研修所，東京，2011.7.23.
6) 岡田幸之：「医療観察法における精神鑑定の実際と審判員の業務」. 精神保健判定医等養成研修会第 2 回，大阪，2011.8.6.
7) 岡田幸之 : 刑事精神鑑定、医療観察法鑑定の具体的な判定基準などについて. 刑事責任鑑定と医療観察法鑑定研修会，高知会館，高知，2011.8.27.
8) 岡田幸之：「医療観察法における精神鑑定の実際と審判員の業務」．平成 23 年度精神保健判定医等養成研修会，アルカディア市ヶ谷，東京，2011.9.3.
9) 岡田幸之：「解離性同一性障害の基本概念等について」. 第 121 回中央検事研究，東京，2011.9.6.
10) 岡田幸之：「刑事責任能力と精神鑑定をめぐる最近の諸問題」．第 121 回中央検事研究，法務総合研究所，東京，2011.9.7-8.
11) 岡田幸之：「ICF（国際生活機能分類）について」. 茨城県立こころの医療センター看護研修会，茨城，2011.9.14.
12) 岡田幸之 : 司法精神医学総論－歴史、制度. 平成 23 年度第 6 回司法精神医学研修, 東京, 2011.10.12.
13) 岡田幸之：精神鑑定．平成 23 年度第 6 回司法精神医学研修，東京，2011.10.14.
14) 岡田孝之 : 精神鑑定の基礎知識（講師）. 第 134 回検事一般研修, 法務総合研究所, 東京, 2011.10.20.

15) 岡田孝之：司法精神医学⑥医療観察におけるリスクアセスメント．第 4 回社会復帰調整官初任研修（講師），法務総合研究所，東京，2011.10.28.
16) 岡田幸之：リスクアセスメント．任用研修課程高等科第 43 回研修（講師），矯正研修所，東京，2011.11.2.
17) 岡田幸之：責任能力を巡る諸問題．平成 23 年度刑事実務研究会（第 2 回），司法研修所，埼玉，2011.11.9.
18) 岡田幸之：日弁連裁判員本部精神鑑定研修第 4 回意見交換会（講師）東京，2011.11.26
19) 岡田幸之：司法精神医学概論．鑑定技術職員養成科第 59 期研修（講演），千葉，2012.1.27.
20) 岡田幸之：リスクアセスメント（講師）．矯正研修所，東京，2012.2.29.
21) 菊池安希子：「統合失調症の認知行動療法」（講師）．東京都立中部総合精神保健福祉センター平成 23 年度行政職員地域援助研修・中級（前期），東京，2011.7.27.
22) 菊池安希子：平成 23 年度　指定入院医療機関従事者病棟研修会（講師）．埼玉県立精神医療センター，埼玉，2011.8.12.
23) 菊池安希子：早期精神病への認知行動療法．東京大学＆CBT センター主催ワークショップ（通訳講師），東京，2011.9.29.
24) 菊池安希子：パーソナリティ障害に対するスキーマ療法の進歩（通訳講師）．第 11 回日本認知行動療法学会，第 12 回日本認知療法研修会，大阪，2011.10.1-2.
25) 菊池安希子：パーソナリティ障害や困難事例へのスキーマ療法（通訳講師）．第 11 回日本認知行動療法学会，第 12 回日本認知療法研修会，大阪，2011.10.2.
26) 菊池安希子：認知行動療法（講師）．医療観察法病棟従事者院内研修，山口，2011.10.8.
27) 菊池安希子：医療観察法における認知行動療法(1)，(2)．平成 23 年度第 6 回司法精神医学研修，東京，2011.10.13.
28) 菊池安希子：司法精神医学⑥認知行動療法．第 4 回社会復帰調整官初任研修（講師），法務総合研究所，東京，2011.11.7.
29) 菊池安希子：統合失調症の認知行動療法－理論編－．CBT センター主催 CBT アドバンスド研修（講師），コスモホール，東京，2011.11.25.
30) 木下善弘，菊池安希子：統合失調症の認知行動療法－実践編－．CBT センター主催 CBT アドバンスド研修（講師），コスモホール，東京，2011.12.9.
31) 菊池安希子：認知行動療法の実際．北海道スクールカウンセリング研究協議会平成 23 年度第 3 回研修会（講師），北海道，2011.12.10.
32) 木下善弘，菊池安希子：統合失調症の認知行動療法－ケースフォーミュレーション演習－．CBT センター主催 CBT アドバンスド研修（講師），コスモホール，東京，2011.1.13.
33) 菊池安希子，田中さやか：幻覚・妄想の認知行動療法Ⅱ～Ⅲ（講師）．第 3 回全国 ACT 研修会，仙台，2012.3.18.
34) 福井裕輝：「人格障害」．平成 23 年度ストーカー・配偶者暴力専科，関東管区警察学校，東京，2011.5.25.
35) 福井裕輝：司法精神医学と認知神経科学．平成 23 年度第 6 回司法精神医学研修，東京，2011.10.13.
36) 安藤久美子：「ストーカー犯罪」．平成 23 年度ストーカー・配偶者暴力専科，関東管区警察学校，東京，2011.5.31.
37) 安藤久美子：平成 23 年度郡山市発達障がい児等療育指導講習会「発達障害の早期からの気づき」．郡山，2011.7.28.
38) 安藤久美子：専科教育「被害少年の心理と特性」について．警察大学校，東京，2011.8.23.
39) 安藤久美子：「解離性同一性障害の基本概念等について」．第 121 回中央検事研究，法務総合研究

所，東京，2011.9.6.

40) 安藤久美子：「刑事責任能力と精神鑑定をめぐる最近の諸問題」．第 121 回中央検事研究，法務総合研究所，東京，2011.9.8.

41) 安藤久美子：「ICF（国際生活機能分類）について」. 茨城県立こころの医療センター看護研修会，茨城，2011.9.14.

42) 安藤久美子：精神鑑定と少年犯罪（講演）．平成 23 年度東京家庭裁判所調査官自庁研修，東京, 2011.10.5.

43) 安藤久美子：医療観察法の現状（通院）．平成 23 年度第 6 回司法精神医学研修，東京，2011.10.12.

44) 安藤久美子：司法精神医療におけるリスクアセスメント．平成 23 年度第 6 回司法精神医学研修，東京，2011.10.14.

45) 安藤久美子：非行少年の特性～児童精神医学の視点から. 専門教養カウンセリング技術（上級）専科（講師），関東管区警察学校，東京，2011.11.9.

46) 安藤久美子：精神鑑定と少年犯罪. 平成 23 年度横浜家庭裁判所調査官自庁研修（講師），横浜，2011.11.22

47) 安藤久美子：日弁連裁判員本部精神鑑定研修第 4 回意見交換会（講師）東京，2011.11.26.

48) 安藤久美子：精神鑑定．平成 23 年度新任検事研修（講師），法務総合研究所，東京，2012.3.19.

49) 長沼洋一：医療観察法の現状（入院）．平成 23 年度第 6 回司法精神医学研修，東京，2011.10.12.

F．その他

1) 岡田幸之，菊池安希子，長沼洋一：「医療観察法診療支援システム診療管理士研修会」. 東京，2011.8.19.

2) 安藤久美子：ケースカンファレンス（指定討論）．愛光女子学園，東京，2011.11.11.

3) 安藤久美子：ケースカンファレンス（指定討論）．愛光女子学園，東京，2011.11.18.

4) 安藤久美子：ケースカンファレンス（指定討論）．愛光女子学園，東京，2012.2.14.

5) 安藤久美子：ケースカンファレンス（指定討論）．愛光女子学園，東京，2012.3.2.

6) 安藤久美子：ケースカンファレンス（指定討論）．愛光女子学園，東京，2012.3.27.

7) 長沼洋一：第 2 回キャンパスソーシャルワークネットワーク世話人会．淑徳大学，東京，2012.3.9.

13. 自殺予防総合対策センター

Ⅰ．自殺予防総合対策センターの概要

わが国の自殺による死亡者数は平成 10 年に 3 万人を超え，以後もその水準で推移している．わが国は世界でも自殺死亡率の高い国のひとつであり，自殺未遂や自殺の問題で深刻な影響を受ける人々を含めると，自殺対策はわが国の直面する大きな課題である．

自殺対策の目的は，自殺を防止し，あわせて自殺者の親族等に対する支援を充実し，もって国民が健康で生きがいを持って暮らすことのできる社会の実現に寄与することである（自殺対策基本法）．自殺予防総合対策センターは，自殺予防に向けての政府の総合的な対策を支援するために平成 18 年 10 月 1 日に国立精神・神経センター精神保健研究所の内部組織として設置された．

自殺予防総合対策センターは，センター長のもとに，自殺実態分析室，自殺予防対策支援研究室，適応障害研究室の 3 研究室を置き，下記の業務を行っている（自殺予防総合対策センター設置要綱）．

(1)　自殺予防対策に関する情報の収集及び発信に関すること．
(2)　自殺予防対策支援ネットワークの構築に関すること．
(3)　自殺の実態分析等に関すること．
(4)　自殺の背景となる精神疾患等の調査･研究に関すること．
(5)　自殺予防対策等の研修に関すること．
(6)　自殺未遂者のケアの調査･研究に関すること．
(7)　自殺遺族等のケアの調査･研究に関すること．

センター長：竹島 正（併任），副センター長（併任），自殺実態分析室長（併任）：松本俊彦，自殺予防対策支援研究室長：川野健治，適応障害研究室長：稲垣正俊，自殺実態分析室研究員：勝又陽太郎，非常勤研究員：大槻露華，小高真美（8/1 より），白神敬介，山内貴史，研究生：髙木幸子（6/1 より），センター研究助手：滝澤さなえ，八重樫弘子（～4/30），吉松純子（5/24 より），研究費雇上：長島弥生，増田久重．

Ⅱ．研究活動

1）心理学的剖検データベースを活用した自殺の原因分析に関する研究

本研究は，平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者総合対策研究事業）「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究（主任研究者：加我牧子）」によるものであり，今年度は，精神科受診歴を持つ男性の中高年うつ病性障害患者における心理社会的な自殺のリスク要因について検討するために，「自殺予防と遺族支援のための基礎調査」によって収集された自殺死亡例（事例群）に対して，性別，年齢階級をマッチさせた生存うつ病患者を対照群に設定した調査を実施し，収集されたデータを事例群のデータと比較することで各要因と自殺との関連性を明らかにした．その結果，1 ヶ月以上の休職経験があること，あるいは精神科への通院において自立支援医療を利用していることが，うつ病患者の自殺の保護因子として機能することが明らかとなった．また，本研究では自殺既遂との有意な関連は認められなかったものの，過去 1 ヶ月間の何らかの身辺整理や何らかの不注意・無謀な行動，過去 1 ヶ月の不定愁訴といった様々な言動や過去の転職歴，アルコール問題がうつ病患者の自殺のリスクとなる可能性が示唆された．以上により，休職や自立支援医療の利用など，うつ病の治療に専念できる環境づくりが自殺予防のために重要な役割を果たすものと考えられた．また，うつ病患者の自殺前のサインについても示唆的な情報が得られ，特にうつ病患者にアルコールの問題が併存した際に，自殺のリスクが高まる可能性について，今後も詳細な検討が必要であると考えられた（松本，勝又，竹島）．

2）地域における自死遺族への支援に関する研究

本研究は，平成23年度厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業「自殺のハイリスク者の実態解明及び自殺予防に関する研究（主任研究者 伊藤弘人）」によるものであり，自殺対策基本法に鑑み，地域での遺族へのケアという複合的な課題を検討することを目的としている．本年度は，神奈川県，川崎市，相模原

市，横浜市の精神保健福センターで取り組む自死遺族支援事業について，評価の仕組みをいれるための研究および調査を行った。数回の会議を経て，「神奈川県下の自死遺族が安心して居られる場所を提供する」ことを目標としたロジックモデルの作成と評価指標を準備し，実際に測定を行った．今後，これらをベースラインに，事業の進展状況をモニタリングできることとなった（川野，白神）．

3）一般診療科と精神科の連携によるうつ病患者/自殺ハイリスク者の発見と支援に関する研究

うつ病患者/自殺ハイリスク者に対するうつ病/自殺に対する予防法・介入法を開発することを目的とし，医学的観点からうつ病/自殺の病態解明，医療モデルによる予防・介入法の開発を目指し研究を実施している．かかりつけ医機能を有する一般病院内科外来におけるうつ病有病率と医師のうつ病認識率，治療導入率調査に次いで，うつ病の自然経過についての長期観察研究を実施した．また，かかりつけ医場面におけるた職種共同うつ病ケアモデル（うつ病スクリーニングとフォローアップ・ケースマネージメント）の実施可能性を検討し，予備的に効果についての知見を得た（稲垣，大槻）．

4）薬物依存者・アルコール依存者の自殺の実態解明と自殺予防に関する研究

本研究は，平成23年度厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業「自殺のハイリスク者の実態解明及び自殺予防に関する研究（主任研究者 伊藤弘人）」によるものであり，今年度は，2009年12月に5箇所の一般精神科医療機関に通院したうつ病性障害患者 775 名に対して，AUDIT（Alcohol Use Disorder Identification Test）により問題飲酒の評価を行い，うつ病性障害患者における問題飲酒の併存率を調べた．さらに，2003年6月に尾崎らが全国より無作為に成人男女 3,500 名を抽出して実施した，「わが国の成人飲酒行動およびアルコール症に関する全国調査」の結果を文献的対照群として用いて，うつ病性障害患者における問題飲酒の併存率を一般地域住民とのあいだで比較を行った．その結果，男性患者の 8.8%，女性患者の 4.7%にアルコール依存症水準の問題飲酒が，また，男性患者の 18.5%，女性患者の 11.2%に健康被害の可能性が高い問題飲酒が認められた．また，地域住民を対象とした文献的対照群との比較から，うつ病性障害の存在は，20～50代男性と40～50代女性のアルコール依存症水準の問題飲酒のリスクをオッズ比にして約5.6～7.6倍高め，あらゆる年代の成人女性における健康被害の可能性が高い問題飲酒のリスクを約4.7～17.6倍高めることが明らかにされた（松本）．

5）自殺対策取組状況調査

全国の都道府県・政令指定都市における自殺対策の取組状況および自殺対策連絡協議会の活動状況等を把握し，国および自治体における自殺対策の推進に役立てるため，全国の都道府県・政令指定都市の自殺対策主管課を対象に「都道府県・政令指定都市における自殺対策および自死遺族支援の取組状況に関する調査」の質問紙調査を実施した．調査は平成23年9月～3月に行われ，回答数は66（有効回答100.0%）であった．自殺対策は，精神保健領域への浸透が進んだ可能性が示されたものの，精神疾患，生活問題などを多重的な困難を抱えたハイリスク者対策等の普及を進めることが必要であると考えられた．自治体が主体となる自死遺族支援の整備・活動は量的に一段落したといえる．自助・支援グループのニーズを把握し，支援全般の充実を図ることが期待される（竹島，川野，大槻）．

6）自殺対策の取組の振り返り調査

自殺総合対策大綱（以下，大綱）が策定されて以降の自治体の大綱における重点施策の取組状況を把握し，大綱改正および今後の地域の実情に応じた施策の設定に必要な情報を提供することを目的として，全国の都道府県・政令指定都市の自殺対策主管課を対象に質問紙調査を実施した．大綱改正においては，事業の実施主体，その適用範囲を明確にすること，モニタリング・評価の方法を提示することが必要であると考えられた（竹島，稲垣，大槻）．

7）自殺関連行動とネット上の情報との関連についての検討

インターネット上には自殺に予防的に作用する可能性のある情報と自殺行動を促進させる可能性のある情報が得られる．しかし，その実態は不明で，自殺関連行動との因果関係も明らかとなっていない．そこで，インターネット上の自殺に関連する情報にアクセスする人の割合や，アクセスする人の特性について行った実態調査から得られた情報の解析を実施した（稲垣，竹島）．

8）船橋市における自殺の実態調査

千葉県船橋市における自殺の関連要因の実態を把握し，自殺対策として有効と考えられる施策の提言を行うことを目的として実施した．人口動態調査および船橋市内の関係機関（消防局救急課，警察，精神科医療機関，生活支援課を含む庁内各部署）から得られた自殺関連の資料の数量的分析とともに，資料に関するヒアリング調査を実施した．そのうえで，調査結果に基づき，市として取り組むべきと考えられる自殺対策の提言を行った（竹島，山内）．

9）総合病院通院患者における問題飲酒者の実態とアルコール依存症回復に向けた社会資源の認知度に関する研究

本研究は，東京都福祉保健局が行う地域自殺対策緊急強化基金事業の一つである「アルコール問題と社会資源に関する調査」の委託を受けて実施された．総合病院等の外来患者 1,826 名を対象に，問題飲酒者の併存率を明らかにすることを目的として，質問紙調査を行った．AUDIT のなかの 1 項目（項目 3）を用いた検討の結果，対象者の 7%が多量飲酒者であった．また，CAGE によるスクリーニングでは，対象者の 14%がアルコール依存症の疑いがあった．以上より，問題飲酒を呈する本人を依存症の専門機関につなぐためにも，総合病院においてスクリーニングを実施することの意義が示唆された（松本，赤澤）．

Ⅲ．社会的活動

1）市民社会に対する一般的な貢献

自殺予防総合対策センターホームページ「いきる」の運営，メディアカンファレンス等を通して，市民社会への情報発信を行った．相談窓口の連携をテーマに自殺対策ネットワーク協議会を開催した(2011.7.27)．また，「地域における自殺対策の手引き」を刊行した．さらに，東日本大震災の被災者支援・復興支援には，社会的取組と精神保健の連携等の自殺対策の枠組みが有効である可能性があることから，それを事例的，定点観測的に行い，検証・発信していく取組を進めた．

竹島正は，全国精神保健福祉連絡協議会の副会長としてその活動を支援した．また，「支援付き住宅推進会議」委員，「NPO 法人「自立支援センターふるさとの会」の苦情解決第三者委員会委員を務めた．

松本俊彦は，中学校・高校での生徒向け薬物乱用防止講演会，一般市民を対象とする自殺予防に関する啓発的な講演会の講師を務めた．また，各地で養護教諭を対象にした高校生等の自傷行為の実態と理解のための講演会の講師を務めた．

川野健治は，一般市民を対象とする自殺予防に関する啓発的な講演会の講師を務めた．また，自死遺族支援団体やいのちの電話の主催する研修会等で講師を務めた．

稲垣正俊は，各自治体における自殺対策立案に関する講演会の講師を務めると共に，自殺対策立案に関する会の委員等を務めた．また，医療従事者を対象としてうつ病・自殺予防に関する研修会の講師を務めた．

勝又陽太郎は，一般市民や民生委員等を対象とする自殺予防に関する啓発的な講演会の講師を務めた．また，埼玉県の自死遺族支援団体「あんだんて」で専門家スタッフを務めるとともに，自死遺族ケアのシンポジウムでシンポジストを務めた．

2）専門教育面における貢献

竹島正は，第 31 回日本社会精神医学会（大会テーマ「かえる・かわるーメンタルヘルスプロモーションと精神保健医療改革ー」の会長を務めた．また，自殺対策のための各種研修の実施・支援を行い，自殺対策のた

めの専門家養成に貢献した.

松本俊彦は，厚生労働省管轄，法務省（矯正局・保護局）管轄，地方自治体，教育委員会が主催する各種研修会，東京都学校保健会で講師を務めるとともに，精神保健福祉センター・保健所，養護教諭のグループが主催する事例検討会において助言者を務め，地域における実務家の業務を支援した．また，公立大学法人横浜市立大学非常勤講師として，医学領域の専門家養成に貢献した．さらに，自傷行為に関する海外の専門書を翻訳・刊行し，国内の研究者・実務家に有益な海外の研究知見を紹介した.

川野健治は，地方自治体，社会福祉協議会，日本弁護士連合，司法書士会等で自殺対策に関連するテーマで講師を務めた．また，地方自治体の自殺対策連絡協議会，事例検討会で助言者を務めた．さらに岩手県大槌町では自殺対策研修を共催し，講師を務めた.

稲垣正俊は，自殺対策のための各種研修の実施・支援を行い自殺対策のための専門家養成に貢献した．また，岡山大学医学部非常勤講師として，医学領域の専門家養成に貢献した.

勝又陽太郎は，帝京大学の非常勤講師として心理学領域の専門家養成に貢献するとともに，地方自治体，教育委員会等の自傷・自殺対策の研修会で講師を務めた.

３）精研の研修の主催と協力

竹島正は，第５回自殺総合対策企画研修（2011.8.24-26），第４回精神科医療従事者研修（2011.11.29-30）の主任，第２回心理職自殺予防研修（2011.7.5-6），第２回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修（2011.11.8-9），第３回精神科医療従事者自殺予防研修（2011.9.6-9.7）の副主任を務めた．また，精神保健計画研究部長として，第48回精神保健指導課程（2011.7.13-7.15）の主任を務めた.

松本俊彦は，第２回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修（2011.11.8-9）の主任，第２回心理職自殺予防研修（2011.7.5-6），第48回精神保健指導課程（2011.7.13-7.15），第５回自殺総合対策企画研修（2011.8.24-26），第３回精神科医療従事者自殺予防研修（2011.9.6-9.7），第４回精神科医療従事者研修（2011.11.29-30）の副主任を務めた．また，薬物依存臨床医師研修の講師を務めた.

川野健治は，第２回心理職自殺予防研修（2011.7.5-6）の主任，第48回精神保健指導課程（2011.7.13-7.15），第５回自殺総合対策企画研修（2011.8.24-26），第３回精神科医療従事者自殺予防研修（2011.9.6-9.7），第２回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修（2011.11.8-9），第４回精神科医療従事者研修（2011.11.29-30）の副主任を務めた.

稲垣正俊は，第３回精神科医療従事者自殺予防研修（2011.9.6-9.7）の主任を務め，第２回心理職自殺予防研修（2011.7.5-6），第５回自殺総合対策企画研修（2011.8.24-26），第２回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修（2011.11.8-9），第４回精神科医療従事者研修（2011.11.29-30）の副主任を務めた.

４）保健医療行政・政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

内閣府自殺対策推進室，厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部精神・障害保健課等と連携して，精神保健的観点からの自殺対策の推進のための提案および協力を行った．特に，自殺総合対策大綱見直しの提言に向けてのワーキンググループを立ち上げ，自殺対策に関連する学会の活動の経験や調査研究を通じて集積した知見に基づく提案を収集するとともに，自殺予防総合対策センターの研究成果も踏まえて，大綱改正に向けての提言を行う準備を進めた．また，平成23年版自殺対策白書（内閣府）の作成に協力した．全国精神保健福祉センター長会等の協力をもとに自殺対策研究協議会（2012.1.11-12）を開催した.

竹島正は，内閣府本府政策参与（非常勤），内閣府自殺対策推進会議オブザーバー，厚生労働省平成23年度自殺防止対策事業評価委員長，厚生労働省平成23年度地域自殺対策推進事業評価委員会委員，精神保健福祉士試験委員，船橋市自殺対策連絡会議委員長，全国精神保健福祉相談員会相談役，日本プライマリ・ケア連合学会心のケア・自殺予防ワーキンググループメンバー，地域からこころの医療を考える会　会長，公益社団法人　全日本断酒連盟顧問，子どもたちのインターネット利用について考える研究会フェローを務めた．また，アジア・パシフィック・コミュニティ・メンタルヘルス・プロジェクトに参画して，アジア地域に適した地域

精神保健の推進の共同研究を行った．さらに，国立精神・神経医療研究センターとメルボルン大学の「メンタルヘルスプログラムにおける協力関係に関する覚書」(MEMORANDUM OF UNDERSTANDING 2010 COOPERATION IN MENTAL HEALTH PROGRAMS AS BETWEEN NCNP and THE UNIVERSITY OF MELBOURNE)に基づき，2011 年国立精神・神経医療研究センター・メルボルン大学合同カンファレンスを開催した．

松本俊彦は，法務省保護局「薬物事犯者に対する保護観察に関する検討会」委員，法務省矯正局「少年院における薬物再乱用防止教育に関する検討会」委員，内閣府共生社会政策「米国における青少年の薬物乱用対策に関する企画分析」企画分析委員，文部科学省スポーツ・青少年局「薬物乱用防止広報啓発活動推進協力者会議」委員，世田谷区および中央区の自殺対策連絡協議会会長を務めた．また，東京地方裁判所登録精神保健判定医として心神喪失者等医療観察法の審判・鑑定に従事した．

川野健治は，内閣府「自死遺族支援研修等事業実施検討会」の構成員として，専門的見地から意見を述べ，報告書作成に協力した．

Ⅳ．研究業績

A．刊行物

(1) 原著論文

1) Orui M, Kawakami N, Iwata N, Takeshima T, Fukao A: Lifetime prevalence of mental disorders and itsrelationship to suicidal ideation in a Japanese rural community with high suicide and alcohol consumption rates. Environmental Health and Preventive Medicine 16(6): 384-389, 2011.
2) Sado M, Yamauchi K, Kawakami N, Ono Y, Furukawa T A, Tsuchiya M, Tajima M, Kashima H, Nakane Y, Nakamura Y, Fukao A, Horiguchi I, Tachimori H, Iwata N, Uda H, Nakane H, Watanabe M, Orui, M, Funayama K, Naganuma Y, Hata Y, Kobayashi M, Ahiko T, Yamamoto Y, Takeshima T, Kikkawa T: Cost of depression among adults in Japan in 2005. Psychiatry and Clinical Neurosciences 65(5): 442-450, 2011.
3) Sawamura K, Tachimori H, Koyama T, Koyama A, Naganuma Y, Kim Y, Takeshima T: Lay diagnoses and views on causes, coping strategies, and treatment for schizophrenia. Community Mental Health Journal 48(3): 309-16, 2011.
4) Matsumoto T, Azekawa T, Uchikado T, Ozaki S, Hasegawa N, Takekawa Y, Matsushita S: Comparative study of suicide risk in depressive disorder patients with and without problem drinking. Psychiatry and Clinical Neurosciences 65: 529-532, 2011.
5) Matsumoto T, Chiba Y, Imamura F, Kobayashi O, Wada K: Possible effectiveness of intervention using a self-teaching workbook in adolescent drug abusers detained in a juvenile classification home. Psychiatry and Clinical Neurosciences 65: 576-583, 2011.
6) Matsumoto T, Matsushita S, Okudaira K, Naruse N, Cho T, Muto T, Ashizawa T, Konuma K, Morita N, Ino A: Depression and suicide risk of outpatients at specialized hospitals for substance use disorder: Comparison with depressive disorder patients at general psychiatric clinics. Japanese Journal of Alcohol and Drug Dependence 46 (6): 554-559, 2011.
7) Aiba M, Matsui Y, Kikkawa T, Matsumoto T, Tachimori H: Factors influencing suicidal ideation among Japanese adults: From the national survey by the Cabinet Office. Psychiatry and Clinical Neurosciences 65(5): 468-475, 2011.
8) Kameyama A, Matsumoto T, Katsumata Y, Akazawa M, Kitani M, Hirokawa S, Takeshima T: Psychosocial and psychiatric aspects of suicide completers with unmanageable debt: A psychological autopsy study. Psychiatry and Clinical Neurosciences 65(6): 592-595, 2011.
9) Tsutsumi A, Izutsu T, Matsumoto T: Risky sexual behaviors, mental health, and history of childhood abuse among adolescents. Asian Journal of Psychiatry 5: 48-52, 2012.

10) Furukawa TA, Akechi T, Shimodera S, Yamada M, Miki K, Watanabe N, Inagaki M, Yonemoto N: Strategic use of new generation antidepressants for depression: SUN(^_^)D study protocol. Trials 12: 116, 2011.
11) Kobayakawa M, Inagaki M, Fujimori M, Hamazaki K, Hamazaki T, Akechi T, Tsugane S, Nishiwaki Y, Goto K, Hashimoto K, Yamawaki S, Uchitomi Y : Serum Brain-derived Neurotrophic Factor and Antidepressant-naive Major Depression After Lung Cancer Diagnosis. Japanese Journal of Clinical Oncology 41: 1233-1237, 2011.
12) Takahashi K, Saitoh A, Yamada M, Iwai T, Inagaki M, Yamada M: Dexamethasone indirectly induces Ndrg2 expression in rat astrocytes. Journal of Neuroscience Research 90(1): 160-6, 2012.
13) Takahashi K, Murasawa H, Yamaguchi K, Yamada M, Nakatani A, Yoshida M, Iwai T, Inagaki M, Yamada M, Saitoh A : Riluzole rapidly attenuates hyperemotional responses in olfactory bulbectomized rats, an animal model of depression. Behavioral Brain Research 216: 46-52, 2011.
14) Sugiyama A, Saitoh A, Yamada M, Iwai T, Hashimoto T, Makino Y, Ohhashi M, Hamada S, Oka J-I, Inagaki M, Yamada M: Riluzole produces distinct anxiolytic-like effects in rats through blockade of voltage-activated sodium channels. J Pharmacol Sci 118:Suppl, 68, 2012.
15) Sugiyama A, Saitoh A, Iwai T, Takahashi K, Yamada M, Sasaki-Hamada S, Oka J, Inagaki M, Yamada M: Riluzole produces distinct anxiolytic-like effects in rats without the adverse effects associated with benzodiazepines. Neuropharmacology 62: 2489-2498, 2012.
16) Kodaka M, Poštuvan V, Inagaki M, Yamada M: A systematic review of scales that measure attitudes toward suicide.International Journal of Social Psychiatry 57: 338-361, 2011.
17) Yamauchi T, Semba T, Sudo A, Takahashi N, Nakamura H. Yoshimura K, Koyama H, Ishigami S, Takeshima T. Effects of psychiatric training on nursing students' attitudes towards people with mental illness in Japan. International Journal of Social Psychiatry, 57(6), 576-579, 2011.
18) 竹島 正，小山明日香，立森久照，金田一正史，小泉典章，松本俊彦，瀬戸秀文，吉住 昭：精神保健福祉法による通報実態から見た触法精神障害者の地域処遇上の課題－全国の都道府県・政令指定都市へのアンケート調査をもとに－．日本社会精神医学会雑誌 21(1)：22-31，2012.
19) 瀬戸秀文，島田達洋，入野 康，山本智一，小泉典章，吉住 昭，竹島 正，尾島俊之，野田龍也，山下俊幸，小高 晃：医療観察法入院処遇前における精神保健福祉法入院の現状．臨床精神医学 40(11)：1495-1505，2011.
20) 小山明日香，長沼洋一，沢村香苗，立森久照，大島 巌，竹島 正：精神障害を有する人に対する一般地域住民のイメージ．日本社会精神医学会雑誌 20(2)：116-127，2011.
21) 松本俊彦，今村扶美，小林桜児，和田 清，尾崎士郎，竹内良雄，長谷川雅彦，今村洋子，谷家優子，安達泰盛：PFI（Private Finance Initiative）刑務所における薬物依存離脱指導の効果に関する研究：自習ワークブックとグループワークによる介入―第 1 報―. 日本アルコール・薬物医学会誌 46 (2)：279-296, 2011.
22) 松本俊彦，尾崎 茂，小林桜児，和田 清：わが国における最近の鎮静剤（主としてベンゾジアゼピン系薬剤）関連障害の実態と臨床的特徴―覚せい剤関連障害との比較―．精神神経学雑誌 113 (12)：1184-1198，2011.
23) 松本俊彦，小林桜児，今村扶美，赤澤正人，長 徹二，松下幸生，猪野亜朗：うつ病性障害患者における問題飲酒の併存率：文献的対照群を用いた検討．精神医学 54(1)：29-37，2012.
24) 松本俊彦，嶋根卓也，尾崎 茂，小林桜児，和田 清：乱用・依存の危険性の高いベンゾジアゼピン系薬剤同定の試み：文献的対照群を用いた乱用者選択率と医療機関処方率に関する予備的研究．精神医学 54(2)：201-209，2012.
25) 赤澤正人，松本俊彦，勝又陽太郎，木谷雅彦，廣川聖子，亀山晶子，横山由香里，高橋祥友，川上憲人，渡邉直樹，平山正実，竹島 正：死亡時の職業の有無で見た自殺既遂者の心理社会的特徴：心理学的剖検

による 76 事例の検討．日本社会精神医学会雑誌 20(2)：82-93，2011.
26) 小林桜児，松本俊彦，今村扶美，和田 清，尾崎士郎，竹内良雄，長谷川雅彦，今村洋子，谷家優子，安達泰盛：PFI（PrivateFinanceInitiative）刑務所における薬物依存離脱指導の効果に関する研究：自習ワークブックとグループワークによる介入―第 2 報：重症度別による効果の分析―．日本アルコール・薬物医学会誌 46(3)：368-380，2011.
27) 関口隆一，塚本哲司，深井美里，菊池礼子，岡崎直人，山川敬子，森宏美，黒田安計，杉山一，松本俊彦：精神科救急医療電話相談における自殺企図切迫例への対応. 埼玉県医学会雑誌 16(1)：291-296, 2011.
28) 赤澤正人，松本俊彦，勝又陽太郎，廣川聖子，立森久照，竹島 正：若年者の自傷行為と過量服薬における自殺傾向と死生観の比較．自殺予防と危機介入 32(1)：34-40，2012.
29) 山内貴史，藤田利治，立森久照，竹島 正，稲垣正俊：自殺死亡に対する職業および配偶関係の相乗的関連．厚生の指標 58(11)：8-13，2011.

(2) 総説

1) 竹島 正：自殺予防と地域づくり．こころのけんこう 38：2-13，2011.
2) 竹島 正：わが国の自殺対策・自殺学の方向－大原先生の業績を振り返って．日本社会精神医学会雑誌 20(2)：138-143，2011.
3) 竹島 正，松本俊彦，川野健治，稲垣正俊，勝又陽太郎：自殺予防総合対策センターの活動．産業精神保健 19(3)：218-223，2011.
4) 竹島 正：障害者自立支援法－制度改正の視点－．臨床精神医学 40(5)：553-557，2011.
5) 竹島 正，宇田英典，眞崎直子：地域のメンタルヘルスの問題はどのように変わっているのですか？．公衆衛生 75(4)：321-325，2011.
6) 竹島 正：公衆衛生の精神保健、精神保健医療のこれから．公衆衛生 76(3)：237-241，2012.
7) 竹島 正：革新的な啓発活動を進めるダックスセンター　第 1 回 革命的な啓発活動を進めるダックスセンター．心と社会 42(4)：94-99，2011.
8) 竹島 正：革新的な啓発活動を進めるダックスセンター　第 2 回 カニンガムダックスコレクションの誕生前．心と社会 43(1)：94-98，2012.
9) 竹島 正，森川すいめい，眞崎直子，的場由木，川野健治，若林秀樹，笹井康典，三輪正敬，勝又陽太郎，立森久照，米本直裕：災害支援の社会精神医学的視点．日本社会精神医学会雑誌 21(1)：48-98，2012.
10) 河野稔明，竹島 正：精神科病院における行動制限の状況とその背景．心と社会 42(1)：68-76，2011.
11) 眞崎直子，的場由木，竹島 正：活動の始まりの頃高知県駐在保健婦の活動からみる精神保健活動．こころの健康 26(1)：47-50，2011.
12) 小野さやか，竹島 正：活動の始まりの頃芸術活動による共生社会の実現を目指す取り組み～芸術活動を続けている精神障害者の活動から～．こころの健康第 26(2)：69-73，2012.
13) 松本俊彦：物質依存の強迫性・衝動性―渇望に対する薬物療法―．臨床精神薬理 14：607-614，2011.
14) 松本俊彦：アルコール依存症と嗜癖概念：DSM-5 ドラフトを受けて．日本精神科病院協会雑誌 30(4)：298-305，2011.
15) 松本俊彦：子どもの自殺．小児内科 43：909-914，2011.
16) 松本俊彦：思春期の自傷行為―その実態と予防を中心に―．精神科治療学 25(5)：553-559，2011.
17) 松本俊彦：薬物臨床の最前線 SMARPP が丸ごとわかる!第 3 回スマープの実際―セッションはどんな感じ？．季刊 Be!103 号：58-62，2011.
18) 松本俊彦：わが国における性被害の実態―少年施設男子入所者の調査から―．被害者学研究 21：89-100，2011.
19) 松本俊彦：嗜癖問題と自傷・自殺．アディクションと家族 27(4)：297-301，2011.
20) 松本俊彦：地域づくりのためのメンタルヘルス講座 6：虐待、暴力を経験した人たちの抱えやすいメンタルヘルス問題の特徴と支援上の注意事項を教えてください．公衆衛生 75：725-728，2011.

21) 松本俊彦：リストカットする思春期の理解と支援―かかわるすべての支援者のために―．広島県小児科医会会報 52：12-20，2011.
22) 松本俊彦：自傷行為の理解と援助～アディクションと自殺のあいだ～．日本アルコール関連問題学会雑誌 13：18-21，2011.
23) 松本俊彦：薬物臨床の最前線 SMARPP が丸ごとわかる！第 4 回タマープの挑戦―精神保健福祉センターで．季刊 Be!104 号：74-77，2011.
24) 松本俊彦：思春期における薬物乱用の危険因子と保護的因子．財団法人麻薬・覚せい剤乱用防止センターNEWSLETTER 第 85 号：2-7，2011.
25) 松本俊彦:非行や死の危険が高まる思春期―衝動行為の増加. 児童心理 2011 年 10 月号臨時増刊 No. 939: 99-105，2011.
26) 松本俊彦：覚せい剤検出時の法的対応：精神科医の立場から．中毒研究 24：193-197，2011.
27) 松本俊彦：境界性パーソナリティ障害の自己破壊的行動への対応．精神科治療学 26：1135-1142，2011.
28) 松本俊彦:認知行動療法を取り入れた包括的外来治療プログラムの必要性. 日本社会精神医学会雑誌 20：415-419，2011.
29) 松本俊彦：依存・嗜癖における強迫性・衝動性と薬物療法．精神神経学雑誌 1133(10)：999-1007，2011.
30) 松本俊彦：薬物臨床の最前線 SMARPP が丸ごとわかる！第 5 回医療観察法の「想定外」!?．季刊 Be！105 号:58-62，2011.
31) 松本俊彦：薬物依存臨床から見えてくる精神科薬物療法の課題―「全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査」の結果より―．精神科治療学 27(1):71-79，2012.
32) 松本俊彦：見逃すな!緊急報告と提言一般精神科における「うつ×飲酒」「向精神薬」の問題．季刊 Be!106 号：36-42，2012.
33) 松本俊彦：精神科治療薬の乱用・依存―医原性の薬物依存―．財団法人麻薬・覚せい剤乱用防止センターNEWSLETTER 第 86 号：2-7，2012.
34) 松本俊彦：若者の自傷行為～その実態と予防教育のあり方．心と社会 148：111-121，2012.
35) 松本俊彦：覚せい剤依存症の精神療法―患者と家族に対する初回面接の工夫―．財団法人麻薬・覚せい剤乱用防止センターNEWSLETTER 第 84 号：2-5，2011.
36) 松本俊彦：7．アルコールとうつ病、自殺．日本アルコール関連連問題学会雑誌特別号：S12-S13，2011.
37) 松本俊彦：アディクション概念～その理解と今日的な意義～．日本アルコール・薬物医学会雑誌 47(1)：13-23，2012.
38) 松本俊彦：2．うつ病治療～ベンゾジアゼピンの功罪．医薬ジャーナル 48(4)：1139-1142，2012.
39) 松本俊彦：アルコール・薬物問題と自殺予防．治療 94(4)：515-520，2012.
40) 松本俊彦：物質使用障害と自傷・自殺．精神科 20(3)：257-262，2012.
41) 赤澤正人，松本俊彦：労働者におけるアルコールの問題と自殺．産業精神保健 19(2)：93-98，2011.
42) 小林桜児，松本俊彦：覚せい剤・大麻・多薬物依存．精神科 18(6)：607-610，2011.
43) 木村勝智，松本俊彦：日常診療ケーススタディメンタルヘルス編～見逃さないで！あなたも診ている心の病気～CASE8「この世から消えてしまいたい人」への対応：プライマリケアで診る自殺念慮．日本医事新報 No．4569：36-40，2011.
44) 宮崎 仁，松本俊彦：日常診療ケーススタディメンタルヘルス編～見逃さないで!あなたも診ている心の病気～CASE10「朝から酒を飲まずにいられない人」への対応：プライマリケアで診るアルコール依存症．日本医事新報 No．4578:36-40，2012.
45) 木村勝智，松本俊彦：日常診療ケーススタディメンタルヘルス編～見逃さないで!あなたも診ている心の病気～CASE12「リストカットを繰り返す人への対応：プライマリケアで診る自傷行為．日本医事新報 No．4586：35-39，2012.
46) 尾崎 茂，小林桜児，松本俊彦，和田 清：医療施設からみた最近の特徴．日本社会精神医学会雑誌 20(4)：

399-406，2011.
47) 川野健治, 竹島 正, 白神敬介, 的場由木：自殺予防の枠組みと被災地の地域精神保健. 精神保健研究 25(58)：35-42，2012.
48) 的場由木，川野健治：困窮者支援と被災者．社会精神医学 21，61-64，2012.
49) 稲垣正俊，大槻露華，竹島 正：自殺とうつ状態．治療うつ状態を理解する 93(12)：2457-2460，2011.
50) 稲垣正俊：がん患者における自殺と希死念慮．精神科治療学 26(8)：959-964，2011.
51) 稲垣正俊，大槻露華：身体疾患に伴う精神障害と自殺予防．日本臨牀 70(1)：151-156，2012.
52) 山田光彦，稲垣正俊，米本直裕：向精神薬と自殺予防．臨床精神薬 14(12)：1919-1924，2011.
53) 勝又陽太郎：自殺の危険の高い人たちの自殺リスクはどのように推移するのですか？支援のあり方にはどのような注意が必要ですか？地域づくりのためのメンタルヘルス講座 5. 公衆衛生 75：637-640, 2011.
54) 勝又陽太郎：海外における BPD の地域支援―豪州の場合．境界性パーソナリティ障害（BPD）の新しい理解と援助のあり方．精神科治療学 26：1111-1117，2011.
55) 勝又陽太郎：学校でのカウンセリング以前．こころの科学 160：78-83，2011.

(3) 著書

1) 竹島 正：年間 3 万人死亡・自殺大国ニッポンの現状と将来対策．西村周三監修，ヘルスケア総合政策研究所編：医療白書 2011 年度版．日本医療企画，東京，pp18-26，2011.
2) 竹島 正：うつ病と自殺防止対策．新・精神保健福祉士養成講座 2 精神保健の課題と支援．日本精神保健福祉士養成校協会編集：中央法規出版，東京，pp224-228，2012.
3) 竹島 正：自殺の予防．今日の治療指針私はこう治療している（総集編）．医学書院，東京，pp863，2012.
4) 吉川武彦，竹島 正：精神保健マニュアル．南山堂，東京，2012.
5) 竹島 正：地域精神保健福祉活動．ストレス科学事典：日本ストレス学会・財団法人パブリックヘルスリサーチセンター監修，実務教育出版，東京，pp699-701，2011.
6) 竹島 正：国際生活機能分類．現代精神医学事典，弘文堂，東京，pp335，2011.
7) 竹島 正：自殺対策基本法．現代精神医学事典，弘文堂，東京，pp409，2011.
8) 竹島 正：社会的入院．現代精神医学事典，弘文堂，東京，pp449，2011.
9) 竹島 正：通院公費負担制度．現代精神医学事典，弘文堂，東京，pp721，2011.
10) 竹島 正：精神保健に関する予防の概念と対象．新・精神保健福祉士養成講座 2 精神保健の課題と支援．日本精神保健福祉士養成校協会編集：中央法規出版，東京，pp62-66，2012.
11) 竹島 正：精神保健に関する国、都道府県、市町村、団体等の役割および連携．新・精神保健福祉士養成講座 2 精神保健の課題と支援．日本精神保健福祉士養成校協会編集：中央法規出版，東京，pp67-73，2012.
12) 竹島 正：精神保健に関する基本的理解．新・精神保健福祉士養成セミナー2 精神保健学－精神保健の課題と支援．新版精神保健福祉士養成セミナー編集委員会編集：へるす出版，東京，pp1-16，2012.
13) 竹島 正：地域精神保健の現状と課題．新・精神保健福祉士養成セミナー2 精神保健学－精神保健の課題と支援．新版精神保健福祉士養成セミナー編集委員会編集：へるす出版，東京，pp227-253，2012.
14) 小山明日香，竹島 正：23．その他の臨床的諸課題アンチスティグマ．今日の精神疾患治療指針．医学書院，東京，pp925-927，2012.
15) 松本俊彦：Ⅱ．薬物療法の到達点 D．不安障害 5．ベンゾジアゼピン常用量依存を防ぐには．樋口輝彦・石郷岡純編：専門医のための精神科臨床リュミエール 25. 向精神薬のリスク・ベネフィット，中山書店，東京，pp207-214，2011.
16) 松本俊彦：12 社会心理的疾患薬物乱用．五十嵐隆編：小児科診療ガイドライン―最新の診療指針―［第 2 版］，総合医学社，東京，pp514-518，2011.
17) 松本俊彦：Ⅴ．薬物依存．4．心理社会的治療．福居顯二編：専門医のための精神科臨床リュミエール 26 依存症・衝動制御障害の治療．中山書店，東京，pp132-142，2011.

18) 松本俊彦：11 章薬物乱用・依存とその支援．平木典子，斉藤こずゑ，氏家達夫，稲垣佳世子，髙橋惠子，湯川良三編：児童心理学の進歩 vol.50．金子書房，東京，pp255-280，2011.
19) 松本俊彦：Question22 自傷行為をする生徒への学校での対応について教えてください．住田実編：養護教諭のための教育実践に役立つ Q&A 集 Ⅳ保健指導をめぐる疑問・質問を中心に（健康教室 2011 年 7 月号増刊号）．東山書房，京都，pp80-82，2011.
20) 松本俊彦：思春期編：リストカットが続いている［自傷］．山登敬之・斎藤環編：入門子どもの精神疾患：悩みと病気の境界線．日本評論社，東京，pp67-72，2011.
21) 松本俊彦：自殺対策のこれまでとこれから．こころの科学増刊号井原裕編：精神科臨床はどこへ行く．日本評論社，東京，pp115-120，2011.
22) 松本俊彦：第Ⅱ章症状および発病状況にもとづいて分類した病態とその治療 9．通院中の患者が自殺企図した後に初めて診察するときの精神科主治医の対応．精神科治療学 vol.26 増刊号精神科治療学編集委員会編集：神経症性障害の治療ガイドライン．星和書店，東京，pp343-347，2011.
23) 松本俊彦：第Ⅱ章症状および発病状況にもとづいて分類した病態とその治療 10．通院中の患者の自傷行為を発見したときの精神科主治医の対応．精神科治療学 vol．26 増刊号精神科治療学編集委員会編集：神経症性障害の治療ガイドライン．星和書店，東京，pp348-353，2011.
24) 松本俊彦：2-1-5 今後の自殺対策における課題と関連学会の果たす役割．精神保健福祉白書編集委員会編：精神保健福祉白書 2012 年度版東日本大震災と新しい地域作り．中央法規出版，東京，pp38，2011.
25) 松本俊彦：薬物依存とアディクション精神医学．金剛出版，2012.
26) 松本俊彦：摂食障害の関連症状（自傷，過量服薬）．樋口輝彦，市川宏伸，神庭重信，朝田隆，中込和幸編：今日の精神疾患治療指針．医学書院，東京，pp276-278，2012.
27) 松本俊彦：大麻依存．樋口輝彦，市川宏伸，神庭重信，朝田隆，中込和幸編：今日の精神疾患治療指針．医学書院，東京，pp631-632，2012.
28) 松本俊彦：Ⅲアルコール関連問題対策．小阪憲司，谷野亮爾監修：新版精神保健福祉士養成セミナー第 2 巻精神保健学―精神保健の課題と支援．へるす出版，東京，pp106-121，2012.
29) 松本俊彦：Ⅳ 薬物乱用防止対策．小阪憲司，谷野亮爾監修：新版精神保健福祉士養成セミナー第 2 巻精神保健学―精神保健の課題と支援．へるす出版，東京，pp122-140，2012.
30) 松本俊彦：Ⅵ 生理的障害及び身体的要因に関連した行動症候群．小阪憲司，谷野亮爾監修：新版精神保健福祉士養成セミナー第 1 巻精神医学―精神疾患とその治療．へるす出版，東京，pp119-127，2012.
31) 松本俊彦：Ⅶ成人のパーソナリティおよび行動の障害．小阪憲司，谷野亮爾監修：新版精神保健福祉士養成セミナー第 1 巻精神医学―精神疾患とその治療．へるす出版，東京，pp127-140，2012.
32) 松本俊彦：第 8 章アルコール依存症．水野雅文編集一般診療科医と精神科医のメンタルヘルス連携ハンドブック，東京都保健福祉局，東京，pp87-95，2012.
33) 松本俊彦：Ⅳ．薬物関連精神障害の治療のプロセスと選択肢．6．ワークブックを用いたグループ治療プログラムの実際．日本精神科救急学会編：精神科救急医療ガイドライン：規制薬物関連精神障害 2011 年版，へるす出版，東京，pp80-86，2012.
34) 川野健治：第 30 章中高年期のうつや自殺等への支援．日本発達心理学会編：発達科学ハンドブック 6 発達と支援，新曜社，東京，pp308-320，2012.
35) 川野健治：自殺予防活動の方向性政策・施策のあり方をとおして．清水新二監修：死にたい声に寄り添って．奈良いのちの電話，奈良，pp263-279，2012.
36) 自殺予防総合対策センター編：地域における自殺対策の手引き．ライフ出版社，東京，2011.

(4) 研究報告書

1) 竹島 正，大類真嗣，廣川聖子，立森久照，赤澤正人，森 隆夫，秋田宏弥，川野健治，勝又陽太郎，松本俊彦：自殺の心理学的剖検の実施に関する研究．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究（研究代表者：加我牧

子)」総括・分担研究報告書，pp13-23，2012.

2) 竹島 正：精神保健医療福祉体系の改革に関する研究．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総合研究報告書（平成 21 年度～23 年度），pp1-13，2012.

3) 竹島 正：精神保健医療福祉体系の改革に関する研究．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総括研究報告書，pp1-10，2012.

4) 竹島 正，赤澤正人，河野稔明，趙 香花，立森久照，廣川聖子，小山明日香，長沼洋一：「改革ビジョン」の進捗状況のモニタリングと評価に関する研究ー精神保健医療福祉の改革ビジョン」中期におけるマクロ実態の変化ー．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総合研究報告書（平成 21 年度～23 年度），pp15-32，2012.

5) 竹島 正，山内貴史，高橋祥友，立森久照，松本俊彦，樋口輝彦：「改革ビジョン」の進捗状況のモニタリングと評価に関する研究ー精神疾患に関する理解の深化のためのメディアカンファレンスの活動報告ー．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総合研究報告書（平成 21 年度～23 年度），pp33-38，2012.

6) 竹島 正，河野稔明，赤澤正人，趙 香花，立森久照，廣川聖子：「改革ビジョン」の進捗状況のモニタリングと評価に関する研究ー「精神保健福祉資料」に係る電子調査票の利用状況と回答時期の変化ー．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総合研究報告書（平成 21 年度～23 年度），pp39-43，2012.

7) 竹島 正，趙 香花，長沼洋一，堀井茂男，野口正行，藤田健三，太田順一郎，河野稔明，立森久照，白石弘巳：「改革ビジョン」の進捗状況のモニタリングと評価に関する研究ー医療保護入院患者の保護者に関する調査ー．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総合研究報告書（平成 21 年度～23 年度），pp45-59，2012.

8) 竹島 正，織田信生，小野さや香，山内貴史，吉川武彦：「改革ビジョン」の進捗状況のモニタリングと評価に関する研究ー精神疾患に関する理解の深化のための革新的な取り組みの紹介ー．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総合研究報告書（平成 21 年度～23 年度），pp61-67，2012.

9) 立森久照，河野稔明，赤澤正人，廣川聖子，趙 香花，長沼洋一，竹島 正：精神保健医療福祉体系の改革のモニタリングの詳細分析．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総合研究報告書（平成 21 年度～23 年度），pp69-85，2012.

10) 竹島 正，河野稔明，立森久照，池田 学，中島 央，仲本晴男，原田 豊，堀井茂男，松浦雅人：てんかんの地域医療における保健行政的研究、国外調査及び提言．厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「てんかんの有病率等に関する疫学研究及び診療実態の分析と治療体制の整備に関する研究（研究代表者：大槻泰介）」総括・分担研究報告書，pp47-58，2012.

11) 伊藤弘人，西田淳志，水野雅文，鈴木友理子，杉浦寛奈，瀬戸屋雄太郎，野田寿恵，藤本美智，竹島 正，趙 香花：医療政策・医療経済の観点からみた諸外国の精神科医療．厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神障害者への対応への国際比較に関する研究（主任研究者　中根允文）」総合研究報告書（平成 21～23 年度），pp17-22，2012.

12) 竹島 正，的場由木，川野健治，趙 香花：欧米を中心とした諸外国の精神保健医療福祉政策の調査、評価ー韓国・中国との比較としての，日本の困窮者とメンタルヘルスー．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神障害者への対応への国際比較に関する研究（主任研究者：中根允文）」総括・分担研究報告書，pp41-46，2012.

13) 竹島 正，趙 香花，的場由木，川野健治：欧米を中心とした諸外国の精神保健医療福祉政策の調査，評価ーホームレス状態等の困窮者のメンタルヘルスについての国際比較ー．平成 23 年度厚生労働科学

研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神障害者への対応への国際比較に関する研究（研究代表者：中根允文）」　総括・分担研究報告書, pp47-55, 2012.

14) 竹島 正：早期介入の精神保健システムにおける位置づけの検討．平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神病初回発症例の疫学研究および早期支援・早期治療法の開発と効果確認に関する臨床研究（研究代表者：岡崎祐士）総括・分担研究報告書，pp126-134，2011.

15) 自殺予防総合対策センター：都道府県・政令指定都市における自殺対策および自死遺族支援の取組状況に関する調査報告書（23 年度）．独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所　自殺予防総合対策センター，2012.

16) 自殺予防総合対策センター：自殺対策の取組の振り返り調査報告書ー都道府県・政令指定都市への質問紙調査をもとにー（23 年度）独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所　自殺予防総合対策センター，2012.

17) 染矢俊幸，森田昌宏，高木 顯，有賀康雄，竹島 正，眞壁伍郎，福島 昇，阿部俊幸，鈴木典子，矢野正枝，小日山俊哉：平成 23 年度精神保健福祉推進事業報告書ー新潟県の自殺者数減少に向けた取組みについてー．新潟県自殺予防対策検討会，2011.

18) 吉住 昭，竹島 正，島田達洋，小泉典章，稲垣 中，小口芳世，椎名明大，小山明日香，猪飼紗恵子，瀬戸秀文：医療観察法導入後における触法精神障害者への精神保健福祉法による対応に関する研究 その２　医療観察法導入後における精神保健福祉法第 24 条に基づく警察官通報の現状について．厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「重大な他害行為をおこした精神障害者の適切な処遇及び社会復帰の推進に関する研究（研究代表者：平林直次）」総括・分担研究報告書，pp69-107，2012.

19) 竹島 正，河野稔明，立森久照，森 隆夫：既存の統計資料を用いた機能分化の現状分析と将来予測．平成 20・21 年度厚生労働科学研究費補助金（こころの健康科学研究事業）・平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神科病院の機能分化に関する実態の分析と方法論の開発に関する研究」（研究代表者：山内慶太）総合研究報告書，pp83-96，2011.

20) 竹島 正，河野稔明，立森久照，森 隆夫：既存の統計資料を用いた機能分化の現状分析と将来予測．平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神科病院の機能分化に関する実態の分析と方法論の開発に関する研究」（研究代表者：山内慶太）総括・分担研究報告書，pp119-139，2011.

21) 吉川武彦，竹島 正，野口正行，宇田英典：地域精神保健福祉活動における保健所機能強化ガイドラインの作成総括研究報告書．地域精神保健福祉活動における保健所機能強化ガイドラインの作成報告書，社団法人日本精神保健福祉連盟，pp1-6，2012.

22) 竹島 正，赤澤正人，立森久照，宇田英典，金田一正史，澁谷いづみ，野口正行，藤田健三：保健所及び市区町村における精神保健福祉業務に関する調査．地域精神保健福祉活動における保健所機能強化ガイドラインの作成報告書，社団法人日本精神保健福祉連盟，pp7-57，2012.

23) 多田羅浩三，宇田英典，高岡道雄，石丸康隆，加納紅代，本屋敷美奈，竹島 正，工藤一恵：精神保健分野における保健所の危機管理体制に関するガイドライン．平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金「健康危機発生時における行政機関相互の適切な連携体制及び活動内容に関する研究（研究代表者：多田羅浩三）」報告書，pp209-292，2011.

24) 高岡道雄，宇田英典，伊地智昭浩，山田全啓，加納紅代，本屋敷美奈，酒井ルミ，角田正史，竹島 正，工藤一恵：6．精神保健分野．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）「地域健康安全・危機管理システムの機能評価及び質の改善に関する研究（研究代表者：多田羅浩三）」報告書，pp131-157，2012.

25) 高岡道雄，宇田英典，伊地智昭浩，山田全啓，加納紅代，本屋敷美奈，酒井ルミ，角田正史，竹島 正，工藤一恵：6．精神保健分野．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）「地域健康安全・危機管理システムの機能評価及び質の改善に関する研究（研究代表者：多田羅浩三）」報告書　別冊　保健所健康危機管理対応指針　日本版標準 ICS/IAP/AC, pp195-210, 2012.

26) 眞崎直子，橋本修二，竹島 正，飯村富子，松原みゆき，森本千代子：災害時要援護精神障害者への支

援に関するアンケート調査－災害時要援護精神障害者支援ガイドラインの作成－．平成 22 年度「赤十字と看護・介護に関する研究助成」報告書，pp1-8，2011.

27) 松本俊彦：薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業（精神障害分野）「薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究（研究代表者：松本俊彦）」総括・分担研究報告書，pp1-10，2012.

28) 松本俊彦，今村扶美，小林桜児，和田 清，尾崎士郎，今村洋子：司法関連施設における認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業（精神障害分野）「薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究（研究代表者：松本俊彦）」総括・分担研究報告書，pp55-69，2012.

29) 松本俊彦，近藤あゆみ，高橋郁絵，今村扶美，神田博之，栗坪千明，白川裕一郎，矢澤祐史：民間回復施設における認知行動療法治療プログラムの開発と効果に関する研究（1）．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業（精神障害分野）「薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究（研究代表者：松本俊彦）」総括・分担研究報告書，pp71-80，2012.

30) 松本俊彦，近藤あゆみ，高橋郁絵，今村扶美，神田博之，栗坪千明，白川裕一郎，矢澤祐史：民間回復施設における認知行動療法治療プログラムの開発と効果に関する研究（2）．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業（精神障害分野）「薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究（研究代表者：松本俊彦）」総括・分担研究報告書，pp81-90，2012.

31) 小林桜児，松本俊彦，今村扶美，根岸典子，若林朝子，和田 清：専門外来における認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業（精神障害分野）「薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究（研究代表者：松本俊彦）」総括・分担研究報告書，pp11-19，2012.

32) 今村扶美，松本俊彦，小林桜児，平林直次，和田 清：医療観察法における物質使用障害治療プログラムの開発と効果に関する研究．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業（精神障害分野）「薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究（研究代表者：松本俊彦）」総括・分担研究報告書，pp43-53，2012.

33) 松本俊彦，森田展彰，猪野亜朗，小沼杏坪，奥平謙一，成瀬暢也，芦沢 健，松下幸生，武藤岳夫，長 徹二，阿瀬川孝治，長谷川直美，尾崎茂，内門大丈，武川吉和，小林桜児，今村扶美，赤澤正人，上岡陽江，幸田実，山田幸子，渡邊敦子，岡坂昌子，谷部陽子，宮城純子：薬物依存者・アルコール依存者の自殺の実態解明と自殺予防に関する研究．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業（精神障害分野）「自殺のハイリスク者の実態解明及び自殺予防に関する研究（研究代表者：伊藤弘人）」総括・分担研究報告書，pp121-134，2012.

34) 松本俊彦，森田展彰，猪野亜朗，小沼杏坪，奥平謙一，成瀬暢也，芦沢 健，松下幸生，武藤岳夫，長 徹二，阿瀬川孝治，長谷川直美，尾崎 茂，内門大丈，武川吉和，小林桜児，今村扶美，赤澤正人，上岡陽江，幸田 実，山田幸子，渡邊敦子，岡坂昌子，谷部陽子，宮城純子：薬物依存者・アルコール依存者の自殺の実態解明と自殺予防に関する研究．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業（精神障害分野）「自殺のハイリスク者の実態解明及び自殺予防に関する研究（研究代表者：伊藤弘人）」総合研究報告書，pp47-60，2012.

35) 松本俊彦，勝又陽太郎，赤澤正人，小高真美，竹島 正，亀山晶子，白川教人，五十嵐良雄，尾崎茂，深間内文彦，榎本稔，飯島優子：自殺既遂者の心理社会的特徴に関する研究―精神科受診歴のあるうつ病患者における自殺のリスク要因の検討―．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究（研究代表者：加我牧子）」総括・分担研究報告書，pp25-35，2012.

36) 松本俊彦，尾崎茂，嶋根卓也，小林桜児，和田 清：全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査．平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業「薬物乱用・依存等の実態把握と薬物依存症者に関する制度的社会資源の現状と課題に関する研

究（研究代表者：和田 清）」総括：分担研究報告書，pp97-106，2012.

37) 松本俊彦，今村扶美，小林桜児：司法関連施設における少年用薬物乱用防止教育ツールによる介入効果とその普及に関する研究．平成23年度厚生労働科学研究費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業「薬物乱用・依存等の実態把握と薬物依存症者に関する制度的社会資源の現状と課題に関する研究（研究代表者：和田 清）」総括：分担研究報告書，pp185-200，2012.

38) 松本俊彦，成瀬暢也，梅野充，上原（青山）久美，小林桜児，森田展彰，嶋根卓也，和田 清，湯本洋介，高濱三穂子，合川勇三：向精神薬乱用と依存(1)―依存症専門医療機関調査―．平成23年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業（精神障害分野）「様々な依存症における医療・福祉の回復プログラムの策定に関する研究（研究代表者：宮岡 等）」総括・分担研究報告書，pp26-47，2012.

39) 松本俊彦，嶋根卓也，和田 清：向精神薬乱用と依存(2)―薬剤師調査―．平成23年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業（精神障害分野）「様々な依存症における医療・福祉の回復プログラムの策定に関する研究（研究代表者：宮岡 等）」総括・分担研究報告書，pp48-68，2012.

40) 宮岡 等，田辺 等，石川 達，松本俊彦，後藤 恵，伊波真理雄，樋口 進，真栄里仁，神村栄一，岡崎直人，岩崎正人，稲村 厚，田中克俊，佐藤 拓，村井俊哉，河本泰信：病的ギャンブリング（いわゆるギャンブル依存）の概念の検討と各関連機関の適切な連携に関する研究．平成23年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業（精神障害分野）「様々な依存症における医療・福祉の回復プログラムの策定に関する研究（研究代表者：宮岡 等）」総括・分担研究報告書，pp69-125，2012.

41) 川野健治，伊藤真人，川島大輔，桑原 寛，白川教人，白神敬介，杉本脩子，鈴木志麻子：自死遺族支援グループの評価に関する研究．平成23年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業（精神障害分野）「自殺のハイリスク者の実態解明及び自殺予防に関する研究」，総括・分担研究報告書，pp155-164，2012.

(5) 翻訳

1) 小林桜児，松本俊彦（共訳）：S・ウインター著「解離性使用外とアルコール・薬物依存症を理解するためのセルフ・ワークブック」．金剛出版，東京，2011．（Winter S: Understanding dissociative disorders and addiction, Second edition. Hazelden Publishing, 2003）

2) 山内貴史，稲垣正俊：エビデンスに基づく自殺予防プログラムの策定に向けて．自殺予防総合対策センターブックレット No.9，東京，2011．（World Health Organization: Towards Evidence-based Suicide Prevention Programmes, 2010）

3) 樋口輝彦，山田光彦（監訳），中川敦夫，米本直裕（訳），稲垣正俊 他7名（翻訳協力）：ロンドン大学精神医学研究所に学ぶ―精神科臨床試験の実践．医学書院，東京，2011．（Brian S. Everitt, Simon Wessely: Clinical Trials in Psychiatry. Second Edition, 2008.）

(6) その他

1) 竹島 正：日本社会精神医学会．精神医学 53(6)：597．2011.

2) 竹島 正：（書評）仰うつと自殺の心理学臨床心理学的アプローチ坂本真士著．精神療法 37(4)：492-493, 2011.

3) 竹島 正，樋口輝彦：（質疑応答）自殺者と精神疾患罹患の関係．日本医事新報 4565：56-57，2011.

4) 有田宏美，上田 正，大塚淳子，禧久孝一，生水裕美，管美千世，竹島 正，高橋信子，新里宏二，行岡みち子：多重債務者相談の手引き～「頼りになる」相談窓口を目指して～．金融庁・消費者庁，2011.

5) 松本俊彦：アディクションと自殺．社団法人座編陽だまりの庭Ⅱ．ぶどう書房，奈良，pp23-27，2011.

6) 山内貴史，竹島 正：（質疑応答）飛び込み自殺と日時の関係．日本医事新報 4571：55-56，2011.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

1) Takeshima T, Oda N, Higashino K, Yamauchi T : Japan's Activities for Mental Health Promotion using Art. Asia Australia Mental Health, Melbourne, 2011.11.9.
2) Takeshima T, Inagaki M : Community Mental Health Promotion in Japan-Effort to Propose Effective Suicide Prevention Measures to the Japanese Government-. Asia Australia Mental Health, Melbourne, 2011.11.10.
3) Matsumoto T, Imamura F, Kobayashi O: Treatment program for substance use disorder under the Medical Treatment and Supervision Act of Japan. XXII International Congress on Law and Mental Health, Berlin (Humbolt University), 2011.7.21.
4) Shiraga K, Kawano K: Electronic media use and recommended websites in Japanese people having anxiety and distress. The 26th World Congress of the International Association for Suicide Prevention, Beijing, China, 2011.9.13-17.
5) Kawanishi C, Yamada M, Inagaki M, Yonemoto N, ACTION-J Group : ACTION-J: A randomized, controlled, multicenter trial of post-suicide attempt case management for the prevention of further attempts in Japan. The 26th World Congress of the International Association of Suicide Prevention (IASP), Beijing, 2011.9.13-17.
6) Yamada M, Inagaki M, Yonemoto N, J-MISP Group: Japanese Multimodal Intervention Trials for Suicide Prevention, J-MISP. The 26th World Congress of the International Association of Suicide Prevention (IASP), Beijing, 2011.9.13-17.
7) Yonemoto N, Akechi T, Shimodera S, Yamada M, Miki K, Watanabe N, Inagaki M, Furukawa TA : Strategic Use of New generation antidepressants for Depression, SUN(^_^)D : study design and rationale. MRC HTMR Clinical Trials Methodology Conference, Bristol, 2011.10.4-5.
8) Inagaki M, Yamada M, Kodaka M: NOCOMIT-J (ClinicalTrials.gov: NCT00737165): A community intervention trial of multimodal suicide prevention program in Japan: A Novel multimodal Community Intervention program to prevent suicide and suicide attempt in Japan. International Mental Health Research Colloquium, Melbourne, 2012.1.31.
9) Yamada M, Inagaki M: A glutamate-modulating drug, riluzole, is one of the candidate drugs for new generation antidepressants and/or anxiolytics. International Mental Health Research Colloquium, Melbourne, 2012.1.31.
10) Yamada M, Inagaki M, Kodaka M: ACTION-J (ClinicalTrials.gov: NCT00736918.): A randomized controlled multicenter trial of post-suicide attempt case management for the prevention of further attempts in Japan. International Mental Health Research Colloquium, Melbourne, 2012.1.31.
11) Kodaka M, Poštuvan V, Inagaki M, Yamada M : Personal and occupational factors associated with attitudes of social workers toward suicide. 21st Asia-Pacific Social Work Conference, Tokyo, 2011.7.15-18.
12) 森川すいめい，竹島 正(司会)，本田 徹，向谷地生良，重富 亮：（シンポジウム）「ホームレス」化する精神・知的障碍者をどう支えるのか～世界と日本の実情～．第 107 回日本精神神経学会学術総会．東京，2011.10.26.
13) 竹島 正：セッション 2「地域精神保健の発展と NCNP の役割」．精神保健医療改革におけるメンタルヘルスプロモーションの意義．2011 年国立精神・神経医療研究センター・メルボルン大学合同カンファレンス．東京，2011.10.31.
14) 竹島 正：（シンポジウム）日本におけるうつ病啓発戦略 NGO レベルの連携を進める．2011 年国立精神・神経医療研究センター・メルボルン大学合同カンファレンス．東京，2011.11.1.
15) 竹島 正：（特別講演）自殺対策の新たな展開．第18回関西アルコール関連問題学会京都大会．2011.12.4.
16) 竹島 正：（学会長講演）かえる・かわるー真の改革に向けてー．第 31 回日本社会精神医学会，東京，2012.3.15.

17) 松本俊彦：アルコール問題と自殺．シンポジウム11　プライマリ・ケアに必要な断酒・節酒指導と地域連携－あなたはお酒と自殺の関係を知っていますか？－．第2回日本プライマリ・ケア連合学会，北海道，2011.7.3.
18) 松本俊彦：自傷行為の理解と援助．第33回日本アルコール関連問題学会 公開シンポジウム「若者の自傷行為～生きる支援へ～」，佐賀，2011.7.23.
19) 松本俊彦：アディクションの背後にあるもの―「故意に自分の健康を害する」症候群―．第30回信州精神神経学会 特別講演，松本，2011.10.1.
20) 松本俊彦：アディクション概念の理解と意義．シンポジウム5「物質依存から『多様なアディクション』へ（Ⅱ）―何が違って何が同じなのか―．平成23年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，愛知，2011.10.14.
21) 松本俊彦：アルコール・薬物問題と自殺予防．3学会合同市民公開講座「アルコール・薬物依存と自殺防止」，平成23年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，愛知，2011.10.15.
22) 松本俊彦：依存・嗜癖における強迫性・衝動性と薬物療法．シンポジウム29 強迫スペクトラム障害の可能性と治療～DSM-5の動向と薬物療法を中心に～．第107回日本精神神経学会学術総会，東京，2011.10.27.
23) 松本俊彦：自殺対策から見えてくる精神科医療のこれから．コアシンポジウムⅢ「問題行動の精神病理学」．第31回日本社会精神医学会，東京，2012.3.16.
24) 松本俊彦：我が国の自殺の現状と自殺予防に期待する薬剤師の役割．シンポジウム S37薬剤師を真の“ゲートキーパー”とするために～薬剤師が潜在的な精神科疾患や処方薬による薬物依存をピックアップできるようになるためにはどうすることが必要か～．第132回日本薬学会，北海道，2012.3.31.
25) 川島大輔，荘島幸子，川野健治，多田羅竜平，石井千賀子，無藤 隆：（ワークショップ企画・司会）子どもと／死を／語りなおす(2)．日本心理学会第75回大会，東京，2011.9.15.
26) 柏木哲夫，斎藤真理，河西千秋，川野健治，南部節子：自殺/自死問題の現状と対策～今私たちがすべきこと．第35回死の臨床研究会，千葉，2011.10.9-10.
27) 稲垣正俊：がんの診断・治療に伴う抑うつの機序とその対応．第9回日本予防医学会学術総会，東京，2011.11.20.
28) 稲垣正俊，大槻露華，山田光彦，竹島 正：（シンポジウム）かかりつけの医師によるうつ病の発見と適切な治療への導入のために．第35回日本自殺予防学会総会，沖縄，2011.12.15-17.
29) 河西千秋，平安良雄，山田光彦，米本直裕，稲垣正俊，高橋清久：（シンポジウム）多施設共同無作為化比較研究ACTION-Jの目指すところ．第35回日本自殺予防学会総会，沖縄，2011.12.15-17.

(2) 一般演題

1) Ando S, Hojo A, Kanata S, Yasugi D, Matsumoto T: One-year follow-up of 132 patients who admitted due to self-poisoning. XXVII International Association for Suicide Prevention World Congress, Beijin, Sep 15, 2011.
2) Kobayashi O, Suzuki J, Matsumoto T, Wada K: Adolescents' Attitude Towards illicit drug use-comparison between US & Japan-. The American Academy of Addiction Psychiatry's (AAAP) 22nd Annual Meeting and Symposium, Scottsdale, AZ, Dec 8, 2011.
3) Yonemoto N, Inagaki M, Yamada M: The Epidemiology of Suicide after Natural Disaster: A Systematic Review. The 26th World Congress of the International Association for Suicide Prevention, Beijing, China, 2011.9.13-17.
4) Inagaki M, Ono Y, Yamada M, Yonemoto N, NOCOMIT-J Group：NOCOMIT-J: A Community Intervention Trial of Multi-Modal Suicide Prevention Program in Japan, The 26th World Congress of the International Association of Suicide Prevention (IASP), Beijing, 2011.9.13-17.
5) Yonemoto N, Inagaki M, Yamada M: Accuracy of Depression Screening for Suicidal Ideation in

Primary Practices and Community Health Service: a Systematic Review. The 26th World Congress of the International Association for Suicide Prevention, Beijing, China, 2011.9.13-17.

6) Saitoh A, Sugiyama A, Yamada M, Iwai T, Takahashi K, Yuya M, Inagaki M, Hamada S, Oka J, Yamada M: A glutamate-modulating drug, riluzole, produces anxiolytic-like effects via the sodium channels in rat. The 32nd Naito Conference on Biological Basis of mental functions and disorders, Kitamori, 2011.10.18-21.

7) Yamada M, Inagaki M, Yonemoto N, Takahashi K : ACTION-J:A randomized, controlled, multicenter trial of post-suicide attempt case management for the prevention of further attempts in Japan.20th European congress of psychiatry EPA 2012, Prague, Czech Republic , 2012.3.3-6.

8) Saitoh A, Yamada M, Inagaki M, Yamada M : A Glutamate-Modulating Drug, Riluzole, is one of the candidate drugs for new generation antidepressants and/or anxiolytics. 20th European congress of psychiatry EPA 2012, Prague, Czech Republic, 2012.3.3-6.

9) Inagaki M, Yamada M, Yonemoto N, Takahashi K: NOCOMIT-J: A community intertvention trial of multi-modal suicide prevention program in Japan. 20th European congress of psychiatry EPA 2012, Prague, Czech Republic , 2012.3.3-6.

10) Yamauchi T, Fujita T, Tachimori H, Takeshima T, Inagaki M. Rates of and factors associated with suicide among adolescents in Japan between 1978 and 2007. The 6th International Conference on Child and Adolescent Psychopathology, London, UK, 2011.7.11-12.

11) Yamauchi T, Fujita T, Tachimori H, Takeshima T, Inagaki M: Relative risks of suicide with respect to marital status and employment in Japan. The 26th World Congress of the International Association for Suicide Prevention, Beijing, China, 2011.9.13-17.

12) 須賀万智，柳沢裕之，山内貴史，立森久照，竹島 正：医療圏レベルでみた自殺死亡と地域特性に関する分析．第 70 回日本公衆衛生学会総会，秋田，2011.10.19-21.

13) 赤澤正人，江口のぞみ，松本俊彦，勝又陽太郎，廣川聖子，亀山晶子，川上憲人，竹島 正：心理学的剖検による症例対照研究を用いた自殺の社会経済的要因に関する検討．第 31 回日本社会精神医学会，東京，2012.3.15.

14) 廣川聖子，川上憲人，稲垣晃子，江口のぞみ，土屋政雄，立森久照，松本俊彦，勝又陽太郎，亀山晶子，竹島 正：日本における自殺と精神疾患の関係についての検討：心理学的剖検による症例対照研究．第 31 回日本社会精神医学会，東京，2012.3.15.

15) 大類真嗣，廣川聖子，立森久照，川野健治，森 隆夫，秋田宏弥，竹島 正：精神科医療の現場で経験している自殺の現状について．第 31 回日本社会精神医学会，東京，2012.3.15.

16) 瀬戸秀文，島田達洋，入野 康，山本智一，小泉典章，吉住 昭，竹島 正，尾島俊之，野田龍也，山下俊幸，小高 晃：医療観察法導入後における措置入院制度の現状－2000 年度と 2008 年度の検察官通報調査から．第 31 回日本社会精神医学会，東京，2012.3.16.

17) 趙 香花，竹島 正：中国のホームレスとメンタルヘルスの現状．第 31 回日本社会精神医学会，東京，2012.3.16.

18) 小山明日香，沢村香苗，立森久照，長沼洋一，池田 学，竹島 正：精神障害者およびひきこもり事例についての一般地域住民の認識．第 31 回日本社会精神医学会，東京，2012.3.16.

19) 河野稔明，趙 香花，長沼洋一，立森久照，野口正行，堀井茂男，白石弘巳，竹島 正：市町村長同意による医療保護入院の実態と課題．第 31 回日本社会精神医学会，東京，2012.3.16.

20) 今村扶美，松本俊彦，小林桜児，尾崎士郎，和田 清：PFI（Private Finance Initiative）刑務所における薬物依存離脱指導の効果に関する研究：自習ワークブックとグループワークによる介入．第7回日本司法精神医学会大会，岡山，2011. 6. 4.

21) 赤澤正人，松本俊彦：若年者における自傷行為と死生観との関連．日本心理学会第75回大会，東京，2011.9.17.

22) 今村扶美，松本俊彦，小林桜児，和田 清，尾崎士郎，竹内良雄，長谷川雅彦，今村洋子，谷家優子，安達泰盛：PFI刑務所における薬物依存離脱指導の効果に関する研究：自習ワークブックとグループワークによる介入．平成23年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，愛知，2011.10.13.

23) 小林桜児，松本俊彦，今村扶美，和田 清，尾崎士郎，竹内良雄，長谷川雅彦，今村洋子，谷家優子，安達泰盛：刑務所における薬物依存離脱指導の効果―重症度別による効果の分析―．平成23年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，愛知，2011.10.13.

24) 池田朋広，常岡俊昭，髙木のり子，石坂理江，清水勇人，稲本淳子，松本俊彦，加藤進昌：精神科亜急性期における併存性障害治療プログラムの試行．平成23年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，愛知，2011.10.13.

25) 小林桜児，松本俊彦，今岡岳史，和田 清：物質使用障害と統合失調症における解離の併存．平成23年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，愛知，2011.10.13.

26) 松本俊彦，小林桜児，今村扶美，赤澤正人，長 徹二，松下幸生，猪野亜朗：うつ病性障害患者における問題飲酒の併存率:文献的対照群を用いた検討.平成23年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，愛知，2011.10.14.

27) 近藤千春，鈴木竜世，久保マリ子，柴田枝里子，高橋祐香里，松本俊彦：0病院におけるアルコール依存症患者を対象にしたSMARPP実施における集団凝集性とその効果について．平成23年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，愛知，2011.10.14.

28) 嶋根卓也，松本俊彦，和田 清：薬局薬剤師を情報源とする向精神薬の乱用・依存の実態把握に関する研究．平成23年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，愛知，2011. 10.15.

29) 松本俊彦，嶋根卓也，尾崎 茂，小林桜児，和田 清：乱用・依存の危険性の高いベンゾジアゼピン系薬剤同定の試み:文献的対照群を用いた予備的研究.平成23年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，愛知，2011.10.15.

30) 李菊姫，川野健治：外国人留学生における災害ストレスと不安，希死念慮，精神健康度の関係．日本パーソナリティ心理学会第20回大会，2011.9.3.

31) 荘島幸子，川島大輔，川野健治：死・自殺のイメージスキーマ．日本心理学会第75回大会，東京， 2011.9.17.

32) 川野健治他:自死遺族支援グループの運営・評価に関する研究．第35回日本自殺予防学会総会，2012.12.16.

33) 李菊姫，河西千秋，川野健治：外国人留学生の自殺関連行動：質問紙調査および事例研究から．第35回日本自殺予防学会総会，2011.12.17.

34) 川島大輔，川野健治：自死遺族の語りにみる死別後の意味再構成プロセス―事例検討―．第23回日本発達心理学会，2012.3.9.

35) 川野健治（企画・座長・報告）：自殺急増以降の経年変化に関する再検討－中高年男性に焦点をあてて．第31回日本社会精神医学会，2012.3.16.

36) 稲垣正俊，大槻露華，小高真美，酒井ルミ，石蔵文信，渡辺洋一郎，山田光彦：医師のうつ病に対する態度と関連する要因の検討．第8回日本うつ病学会総会.大阪，2011.7.1-2.

37) 斎藤顕宜，高橋弘，杉山梓，牧野祐哉，橋本富男，岩井孝志，山田美佐，稲垣正俊，岡淳一郎，山田光彦：グルタミン酸遊離調節作用を有するリルゾールはラットにおいて抗うつ様作用および抗不安様作用を示す．第30回躁うつ病の薬理・生化学的研究懇話会，京都，2011.7.15-16.

38) 岩井孝志，高橋 弘，斎藤顕宜，山田美佐，稲垣正俊，山田光彦：単離アストロサイトにおけるNdrg2のグルココルチコイドによる発現誘導機構．第34回日本神経科学大会，横浜，2011.9.14-17.

39) 斎藤顕宜，山田美佐，高橋 弘，岩井孝志，稲垣正俊，山田光彦：グルタミン酸神経調節薬リルゾールは、嗅球摘出ラットうつ病モデルの不安様行動を改善する．第34回日本神経科学大会，横浜，2011.9.14-17.

40) 斎藤顕宜，高橋弘，山田美佐，岩井孝志，稲垣正俊，山田光彦：グルタミン酸神経調節薬によるストレス性精神疾患の治療法開発．第27回日本ストレス学会学術総会，東京，2011.11.18-20.

41) 山田光彦，古川壽亮，下寺信次，三木和平，明智龍男，渡辺範雄，稲垣正俊，米本直裕，高橋清久：実践的精神科薬物治療研究プロジェクト：Japan Trislists Organization Psychiatry，J-TOP の試み．第 32 回日本臨床薬理学会年会，静岡，2011.12.1-3.

42) 米本直裕，稲垣正俊，山田光彦：臨床試験における自殺リスクマネジメントの問題．第 32 回日本臨床薬理学会年会，静岡，2011.12.1-3.

43) 光永修一，池田公史，仲地耕平，大野泉，清水怜，高橋秀明，奥山浩之，稲垣正俊，古瀬純司，落合敦志：進行膵がんにおいて、病状悪化を認める IL-6 高値群のうち IL-1 高値群は予後不良である．第 42 回日本膵臓学会大会，青森，2011.7.29.

44) 稲垣正俊，齋藤友紀雄，高橋祥友，河西千秋，齋藤利和，本橋豊，矢永由里子，松本俊彦，川野健治，勝又陽太郎，大槻露華，竹島 正：学術研究の成果を反映した自殺対策の策定に向けた自殺予防総合対策センターの取組み．第 35 回日本自殺予防学会総会. 沖縄，2011.12.15-17.

45) 米本直裕，稲垣正俊，山田光彦：自殺予防介入研究における自殺リスクマネジメントの問題．第 35 回日本自殺予防学会総会．沖縄，2011.12.15-17.

46) 杉山梓，斎藤顕宜，岩井孝志，山田美佐，橋本富男，牧野祐哉，大橋正誠，濱田幸恵，岡淳一郎，稲垣正俊，山田光彦：リルゾールは電位依存性 Na^+チャネルの阻害によりラットにおいて抗不安様作用を示す．第 85 回日本薬理学会年会，京都，2012.3.14-16.

47) 大槻露華，稲垣正俊，川野健治，勝又陽太郎，松本俊彦，竹島 正：都道府県・政令指定都市における自殺対策の取組．第 35 回日本自殺予防学会総会．沖縄，2011.12.15-17.

48) 福島喜代子，小高真美，鈴木あおい：ＩＭＲ（リカバリーと病気の自己管理）プログラム-予備的効果検討と、日本の文化と社会システムに合致した配布資料の開発の研究-．日本精神障害者リハビリテーション学会 第 19 回京都大会．京都，2011.11.13.

49) 小高真美，稲垣正俊，山田光彦：薬剤師の自殺に対する態度と関連因子の検討．第 31 回日本社会精神医学会，東京，2012.3.15.

50) 山内貴史，稲垣正俊，竹島 正：“Towards Evidence-based Suicide Prevention Programmes”(World Health Organization，2010)日本語版の刊行．第 35 回日本自殺予防学会総会，沖縄，2011.12.15-17.

51) 山内貴史：人口動態統計からみる自殺者の経年変化：中高年男性に焦点をあてて．第31回日本社会精神医学会企画シンポジウムⅣ，東京，2012.3.16.

(3) 研究報告会

1) 立森久照，河野稔明，長沼洋一，小山明日香，趙 香花，廣川聖子，竹島 正：統合失調症および認知症の在院患者数の概況．平成22年度国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会，2011.5.23.

2) 赤澤正人，立森久照，松本俊彦，竹島 正：断酒会と共同したアルコール依存症患者のメンタルヘルス支援についての検討－自殺予防の観点に着目して－．平成22年度国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会，2011.5.23.

3) 趙 香花，長沼洋一，堀井茂男，野口正行，河野稔明，立森久照，白石弘巳，竹島 正：医療保護入院患者の保護者に関する研究．平成22年度国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会，2011.5.23.

4) 竹島 正：自殺の心理学的剖検の実施に関する研究．平成23年度厚生労働科学研究費補助金　自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究（研究代表者：加我牧子）第 1 回班会議．東京，2011.6.29.

5) 竹島 正：630 調査の経緯．精神保健医療福祉改革のモニタリングの改善のために－630 調査の経緯、現状と今後の課題，平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究」第 1 回班会議．東京，2011.8.1.

6) 竹島 正，川野健治，立森久照，山内貴史：平成 23 年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）「芸術活動を続けている精神疾患当事者の作品の分析に基づく啓発資材の開発に関する研究（研究代表者 竹島 正）」

第１回班会議．東京，2011.8.3.

7) 竹島 正：欧米を主とした諸外国の精神保健医療福祉政策の調査、評価．厚生労働科研費　障害者対策総合研究事業(身体・知的等障害分野)「精神障害者への対応への国際比較に関する研究（研究代表者　中根充文)」．東京，2011.8.6.

8) 竹島 正：てんかんの地域医療における保健行政的研究、国外調査及び提言（地域保健領域）．厚生労働科研費　障害者対策総合研究事業(精神障害分野)「てんかんの有病率等に関する疫学研究及び診療実態の分析と治療体制の整備に関する研究（研究代表者　大槻泰介)」第１回班会議．東京，2011.8.20.

9) 竹島 正：保健所等調査グループ研究報告．平成23年度障害者総合福祉推進事業費補助金「地域精神保健福祉活動における保健所機能強化ガイドラインの作成（社団法人精神保健福祉連盟)」第1回検討委員会，東京，2011.10.1.

10) 竹島 正，河野稔明，赤澤正人：「改革ビジョン」の進捗状況のモニタリングと評価に関する研究．H23年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業)「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究」第２回班会議．東京，2011.12.22.

11) 竹島 正，大類真嗣，廣川聖子：自殺の心理学的剖検の実施に関する研究．H23年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業)「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究」第２回班会議．東京，2012.1.24.

12) 竹島 正：精神医療保険福祉体系の改革に関する研究．厚生労働科学研究費研究成果等普及啓発事業障害者対策総合研究成果発表会．東京，2012.2.7.

13) 竹島 正：保健所等調査グループ研究報告. 平成23年度障害者総合福祉推進事業費補助金「地域精神保健福祉活動における保健所機能強化ガイドラインの作成」第２回検討委員会. 東京，2012.2.10.

14) 立森久照，河野稔明，廣川聖子，趙 香花，赤澤正人，長沼洋一，竹島 正：精神科病院の在院患者数等の年次推移．国立精神･神経医療研究センター精神保健研究所平成23年度研究報告会．東京，2012.2.27.

15) 廣川聖子，萱間真美，角田 秋，大熊恵子，林 亜希子，瀬戸屋 希，竹島 正：精神科訪問看護の有効活用に関する研究．国立精神･神経医療研究センター精神保健研究所平成 23 年度研究報告会．東京，2012.2.27.

16) 趙 香花，長沼洋一，堀井茂男，野口正行，河野稔明，立森久照，白石弘巳，竹島 正：医療保護入院制度の運用実態に関する調査．国立精神･神経医療研究センター精神保健研究所平成23年度研究報告会．東京，2012.2.27.

17) 竹島 正：(座長)保健所精神保健福祉活動に関する期待．平成23年度障害者総合福祉推進事業費補助金「地域精神保健福祉活動における保健所機能強化ガイドラインの作成」研究報告会．東京，2012.3.25.

18) 竹島 正：保健所・市町村・精神保健関連団体調査をもとに．（シンポジウム）これからの地域精神保健を考えるー研究成果をもとにー．平成23年度障害者総合福祉推進事業費補助金「地域精神保健福祉活動における保健所機能強化ガイドラインの作成」研究報告会，東京，2012.3.25.

19) 稲垣正俊，大槻露華，小高真美，石藏文信，渡辺洋一郎，酒井ルミ，山田光彦，竹島 正：一般身体科医のうつ病に対する態度．平成22年度国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会，2011.5.23.

20) 杉山 梓，斎藤顕宜，稲垣正俊，山田美佐，橋本富男，牧野祐哉，大橋正誠，岡 淳一郎，山田光彦：グルタミン酸神経調節薬リルゾールの抗うつ様および抗不安様作用の検討．平成23年度精神・神経疾患研究開発費気分障害研究班合同報告会，東京，2011.12.12.

21) 濱田幸恵，酒井浩旭，加藤教史，斎藤顕宜，稲垣正俊，山田美佐，杉山 梓，牧野祐哉，大橋正誠，山田光彦，岡 淳一郎：海馬神経活動に対するリルゾールの作用の電気生理学的解析．平成23年度精神・神経疾患研究開発費気分障害研究班合同報告会，東京，2011.12.12.

22) 斎藤顕宜，杉山 梓，稲垣正俊，山田美佐，岩井孝志，岡 淳一郎，長瀬 博，山田光彦：新規δ受容体アゴニストの抗うつ様作用の検討．平成23年度精神・神経疾患研究開発費気分障害研究班合同報告会，東京，2011.12.12.

23) 岡本泰昌，岡田 剛，土岐 茂，吉村晋平，国里愛彦，小野田慶一，稲垣正俊，竹林 実，山脇成人：うつ病の治療反応性に関する脳画像研究．平成23年度精神・神経疾患研究開発費気分障害研究班合同報告会，東京，2011.12.12.
24) 齋藤顕宜，杉山梓，山田美佐，稲垣正俊，橋本富男，藤井秀明，岩井孝志，岡淳一郎，長瀬博，山田光彦：新規に合成された選択的 δ オピオイド受容体作動薬 KTN127 はラットにおいて抗不安様作用を示す．国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所平成 23 年度研究報告会．東京，2012.2.27.
25) 牧野祐哉，山田美佐，齋藤顕宜，杉山 梓，大橋正誠，橋本富男，稲垣正俊，山田光彦：マウス成体海馬歯状回腹側部/背側部における遺伝子発現定量法の確立．国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所平成 23 年度研究報告会．東京，2012.2.27.
26) 山内貴史，竹島 正：明治11 年から明治31 年のわが国における自殺死亡の推移．平成22年度国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会，2011.5.23.
27) 山内貴史，高橋恵美子，内田祥子，友久保智子，竹島 正：千葉県船橋市における自殺企図の実態：市消防局救急課の救急活動記録の分析．国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所平成23年度研究報告会．東京，2012.2.27.

(4)その他

1) 竹島 正，川野健治：被災者支援のための情報収集．青森・岩手，2011.3.30- 4. 2.
2) 竹島 正：被災者支援のための情報収集．宮城，2011.4.15.
3) 竹島 正，松本俊彦，川野健治，立森久照，勝又陽太郎，山内貴史，白神敬介，赤澤正人：第1回メディアカンファレンス．東京，2011.4.27.
4) 竹島 正，川野健治：被災者支援のための情報収集．岩手，2011.5.6-7.
5) 竹島 正，川野健治，白神敬介：被災者支援のための情報収集．岩手・宮城，　2011.5.25-28.
6) 竹島 正，川野健治，稲垣正俊，勝又陽太郎，大槻露華：第 1 回大綱改正ワーキンググループ会議．東京，2011.6.10.
7) 竹島 正，松本俊彦，川野健治，立森久照，勝又陽太郎，山内貴史，白神敬介，赤澤正人，廣川聖子：第 2 回メディアカンファレンス．東京，2011.7.25.
8) 竹島 正：自殺対策ネットワーク協議会．東京，2011.7.27.
9) 竹島 正，川野健治，白神敬介，的場由木：被災者支援のための情報収集．岩手・宮城，2011.7.28-29.
10) 竹島 正，川野健治，勝又陽太郎：被災者支援のための情報収集．岩手・宮城，2011.8.18.
11) 竹島 正，松本俊彦，稲垣正俊，大槻露華：第 2 回大綱改正ワーキンググループ会議．東京，2011.8.28.
12) 竹島 正，川野健治，白神敬介：被災者支援のための情報収集．岩手・宮城，2011.9.1-2.
13) 竹島 正，川野健治：宗教者災害支援連絡会　第 5 回情報交換会．東京，2011.9.11.
14) 竹島 正，山内 貴史：第 1 回船橋市自殺対策庁内連絡会議．千葉，2011.10.4.
15) 竹島 正：第 1 回船橋市自殺対策連絡会議．千葉，2011.10.12.
16) 竹島 正，川野健治，白神敬介：被災地のための支援．岩手・宮城，2011.10.6-7.
17) 竹島 正，松本俊彦，大槻露華，小高真美，白神敬介，山内貴史：第 3 回メディアカンファレンス．東京，2011.11.24.
18) 竹島 正，大槻露華：メディアカンファレンス．秋田，2011.12.2.
19) 竹島 正，川野健治，稲垣正俊，大槻露華：第 3 回大綱改正ワーキンググループ会議．東京，2012.12.19.
20) 竹島 正：第 2 回船橋市自殺対策庁内連絡会議．千葉，2012.2.3.
21) 竹島 正，山内貴史：第 2 回船橋市自殺対策連絡会議．千葉，2012.2.17.
22) 竹島 正，立森久照，松本俊彦，赤澤正人，大槻露華，山内貴史，白神敬介，小高真美：第 4 回メディアカンファレンス．東京，2012.2.24.
23) 竹島 正，松本俊彦，川野健治，稲垣正俊，勝又陽太郎，大槻露華：第 4 回大綱改正ワーキンググループ会議．東京，2012.3.21.

24) 竹島 正：自殺防止対策事業評価委員会．東京，2012.3.23.
25) 竹島 正，山内 貴史：第3回船橋市自殺対策庁内連絡会議．千葉，2012.3.26.
26) 竹島 正：安心ネットづくり促進協議会．東京，2011.5.12.
27) 竹島 正：NPO法人自立支援センターふるさとの会 苦情解決第三者委員会．東京，2011.5.14.
28) 竹島 正：第14回精神保健福祉士試験委員会．東京，2011.6.15.
29) 竹島 正：支援付き住宅推進会議検証会．東京，2011.6.25.
30) 竹島 正：NPO法人自立支援センターふるさとの会 苦情解決第三者委員会．東京，2011.7.9.
31) 竹島 正：JCPTD職場メンタルヘルス対策認証機構第2回準備会．東京，2011.7.22.
32) 竹島 正：全国精神保健福祉連絡協議会常務理事会．東京，2011.8.2.
33) 竹島 正：全国精神保健福祉センター研究協議会．秋田，2011.10.19.
34) 竹島 正：全国精神保健福祉連絡協議会理事会・総会．福井，2011.10.24.
35) 竹島 正：NPO法人自立支援センターふるさとの会 苦情解決第三者委員会．東京，2012.1.28.
36) 竹島 正：竹島 正：日本精神保健福祉連盟平成23年度第2回理事会･総会. 東京，2012.2.7.
37) 竹島 正：松戸市第4回障害者の居住支援研修会. 千葉，2012.2.16.
38) 竹島 正：「リスク情報システム科学の構築」集会. 東京，2012.2.18.
39) 竹島 正：自殺防止対策事業評価委員会．東京，2011.3.23.

C．講演

1)佐竹隆幸（コーディネーター），木下 浩，竹島 正，川野健治：（パネルディスカッション）見識者が語る、東日本大震災の今後について．東日本大震災復興支援イベント　復興への思いを込めて～司法書士は社会とともに～大阪，2011.6.26.
2)竹島 正:こころの健康･地域の健康. 平成23年度東久留米市心のヘルスサポーター講座, 東京, 2011.9.14.
3)竹島 正：お酒とうつの危険な関係－自殺対策の側面から．平成23年度アルコール関連問題対策事業に係わる講演会．埼玉，2011.11.26.
4)竹島 正：こころの健康・地域の健康．鳥取県中部総合事務所福祉保健局主催「眠れてますか？睡眠キャンペーン」1市4町共同講演会．鳥取，2011.12.6.
5)竹島 正：メンタルヘルス（自殺予防）の視点からの被災者救済．国際医療福祉大学大学院乃木坂スクール「震災と医療福祉のあり方」．東京，2011.12.9.
6)竹島 正，稲垣正俊：自殺対策の経緯と評価/大綱改正へ向けての提言づくり．第5回自殺対策研究協議会，東京，2012.1.11.
7)竹島 正：（座長）（基調講演）被災者支援は我が国の新たな社会保障の開発につながる．みやぎ心のケアセンター主催自殺対策シンポジウム，宮城，2012.2.6.
8)竹島 正：（シンポジウム）被災地支援と今後の精神保健福祉．みやぎ心のケアセンター主催自殺対策シンポジウム，宮城，2012.2.6.
9)清水徹夫，竹島 正，中村 純，粥川祐平：（座談会）うつ病・睡眠・自殺予防．「睡眠医療」6巻2号座談会．愛知，2012.2.12.
10)竹島 正：自殺予防・精神保健分野での故藤田教授の業績と今後の研究動向．藤田利治先生追悼シンポジウム．東京，2012.2.18.
11)松本俊彦：自殺予防について．特定非営利活動法人ワーカーズコープ主催 社会人基礎学習講座，東京，2011.4.4.
12)松本俊彦：職場における自殺予防．社団法人加賀労働基金主催　講演会，石川，2011.4.15.
13)松本俊彦:ドラッグから自分をまもろう. 藤田保健衛生大学アセンブリ委員会主催 薬物乱用防止講演会，愛知，2011.5.2.
14)松本俊彦：自傷・自殺企図への対応．東京都教育相談センター主催 平成23年度第1回都立学校教育相談担当者連絡会，東京，2011.5.16.

15)松本俊彦：薬物依存の理解と援助．関東信越厚生局麻薬取締部主催 再乱用防止対策プログラムにかかる講習会，九段第三合同庁舎，東京，2011.5.23.
16)松本俊彦：薬物依存の理解と援助．横浜ひまわり会主催：ひまわり会勉強会，神奈川，2011.5.25.
17)松本俊彦：自傷と自殺～その理解と援助．NPO 法人埼玉児童思春期精神保健懇話会主催 第 21 回埼玉児童思春期精神保健懇話会，埼玉，2011.5.28.
18)松本俊彦：自傷行為の理解と援助．BPD 家族会主催講演会，東京，2011.5.29.
19)松本俊彦：精神科救急における諸問題―物質依存を中心に―．メディカルトリビューン・大塚製薬主催 学術講演会「これからの精神科急性期治療を考える」，東京，2011.6.4.
20)松本俊彦：依存症の理解と回復．横須賀刑務支所主催 受刑者対象講話，神奈川，2011.6.10
21)松本俊彦：事例検討会助言者．メンタルケア協議会主催 東京都自殺相談ダイヤル事例検討会，東京，2011.6.12.
22)松本俊彦：向精神薬乱用・依存の実態と乱用・依存者の臨床的特徴．アディクション研究会主催 定例研究会，東京，2011.6.16.
23)松本俊彦：自傷行為の理解と援助～若者の自殺予防のために．埼玉県臨床心理士会主催 埼玉県臨床心理士会総会公開講演会，埼玉，2011.6.19.
24)松本俊彦：薬物依存者に対する医療・援助の現状と課題．法務省保護局主催 平成 23 年度地方構成保護委員会委員長・保護観察所長会合同講演会，東京，2010.6.21.
25)松本俊彦：アルコールとうつ、自殺．大塚製薬・福島アルコール関連疾患研究会主催 第 12 回福島アルコール疾患研究会，宮城，2011.6.23.
26)松本俊彦：薬物依存の理解と援助．川崎ダルク主催 川崎ダルク 7 周年記念フォーラム，神奈川，2011.6.24.
27)松本俊彦：自傷行為の理解と援助．釧路市医師会・アステラス製薬主催 第 5 回釧路精神科講演会 特別講演，北海道，2011.7.8.
28)松本俊彦：自傷行為の理解と援助．佐賀大学医学部同窓会主催 平成 23 年度佐賀大学医学部同窓会特別講演，佐賀，2011.7.9.
29)松本俊彦：現在の依存症～理解と援助．岡山市薬剤師会主催 第 10 回岡山市薬剤師会オープンフォーラム，岡山，2011.7.10.
30)松本俊彦：わが国の自殺の現状について．中央区保健所主催 自殺対策講習会，東京，2011.7.13.
31)松本俊彦：自傷行為関連問題への対応．日本サイコセラピー学会主催 精神療法の枠組みを学び外来診療に生かすための講座～困る患者について学ぶ，東京，2011.7.17.
32)松本俊彦：学校における自傷・自殺予防．熊本県高等学校教育研究会健康教育部会・熊本県教育委員会主催 平成 23 年度熊本県高等学校教育研究会健康教育部会研究大会，熊本，2011.7.26.
33)松本俊彦：思春期における自傷行為の理解と自殺予防．東京都養護教諭部会主催 平成 23 年度東京都養護教諭部会研究大会，東京，2011.7.27.
34)松本俊彦：子どもの心の問題：子どもの自傷・自殺などの問題．神奈川県立保健福祉大学主催 平成 23 年度教員免許状更新講習会，神奈川，2011.8.3.
35)松本俊彦：求められる薬物乱用防止教育とは?～「ダメ、ゼッタイ」だけではダメ．富山県くすり政策課主催 平成 23 年度薬物乱用防止フォーラム，富山，2011.8.6.
36)松本俊彦：自傷行為の最近の傾向と事例研究．日々輝学園高等学校主催 SP 関連生徒に対する事例研究会，東京，2011.8.26.
37)松本俊彦：アルコール依存と自殺．アディクション問題を考える会主催 第 28 回 AKK 市民講座，東京，2011.8.28.
38)松本俊彦：依存症と自殺.財団法人大阪府人権協会主催 2011 年度自殺防止サポーター養成講座，大阪，2011.9.2.
39)松本俊彦：自傷行為と薬物依存の青年～かかわり方を中心に．明治安田こころの健康財団主催 平成 23

年度第2回集中講座「現代の思春期を考える」，東京，2011.9.4.

40)松本俊彦：自傷行為の理解と援助．広島大学保健管理センター主催 広島大学学生相談シンポジウム，広島，2011.9.5.

41)松本俊彦：「こころの危機」をどう受け止めるか？．群馬県東部保健福祉事務所主催 平成23年度地域自殺対策緊急強化事業 自殺予防講演会，群馬，2011.9.9.

42)松本俊彦：自傷行為と自殺予防～アディクションの視点から．アルコール関連問題ソーシャルワーカー協会北海道支部主催 アルコール関連問題基礎講座2011，北海道，2011.9.17.

43)松本俊彦：身近なアルコール問題、気になりませんか？．新潟県長岡地域振興局健康福祉環境部・新潟マック主催 平成23年度自殺対策市民公開講座，新潟，2011.9.23.

44)松本俊彦：若者の飲酒の問題を考える～「故意に自分の健康を害する」症候群．信州アディクションセミナー実行委員会主催 第2回信州アディクションセミナー，長野，2011.9.25.

45)松本俊彦：薬物依存症からの回復―親離れ、子離れ．アナク（薬物依存症を考える家族の会）主催 ANAK 8周年フォーラム，茨城，2011.10.2.

46)松本俊彦：薬物依存の理解と援助．厚生労働省医薬食品局監視指導・麻薬対策課主催 平成23年度東海北陸地区薬物中毒対策連絡会議 相談従事者講習会，愛知，2011.10.4.

47)松本俊彦：自殺ハイリスク患者への対応の原則．ヤンセンファーマ・中国地区GHP研究会主催 第8回中国地区GHP研究会，広島，2011.10.8.

48)松本俊彦：薬物依存の理解と援助．「第3回アディクション・フォーラムin鳥取」実行委員会主催 第3回アディクション・フォーラムin鳥取，鳥取，2011.10.9.

49)松本俊彦：働きざかりのこころの健康～お酒を飲んで頑張りすぎていませんか?～．世田谷区北沢総合支所主催 働きざかりのメンタルヘルス講演会，東京，2011.10.18.

50)松本俊彦：自傷行為を行う子どもたちとどのように向き合うか．一般社団法人埼玉県助産師会主催 思春期保健関係者研究会，埼玉，2011.10.19.

51)松本俊彦：薬物依存の理解と援助．厚生労働省医薬食品局監視指導・麻薬対策課主催 平成23年度北海道・東北地区薬物中毒対策連絡会議 相談従事者講習会，青森，2011.10.25-26.

52)松本俊彦：アルコールと心の健康．東久留米市主催 平成23年度東久留米市心の健康づくり事業 心のヘルスサポーター講座，東京，2011.10.31.

53)松本俊彦：子どもの自殺予防のために学校にできること．岐阜県高等学校生徒指導研究会主催 第57回岐阜県高等学校生徒指導研究大会，岐阜，2011.11.4.

54)松本俊彦：自傷行為の理解と援助～故意に自分の健康を害する若者たち～．社団法人宮崎県精神科診療所協会主催 宮崎県精神科診療所協会学術講演会，宮崎，2011.11.5.

55)松本俊彦：身近にかくれたアルコールとこころの問題．新潟県小千谷市健康センター主催 平成23年度心の健康講演会，新潟，2011.11.7.

56)松本俊彦：自殺の現状と地域での対策のあり方．国立保健医療科学院主催 平成23年度専門課程，東京，2011.11.10.

57)松本俊彦：リストカットと自殺について．川崎市立商業高等学校主催 学校保健連絡協議会講演会，神奈川，2011.11.14.

58)松本俊彦：薬物依存の理解と援助．厚生労働省医薬食品局監視指導・麻薬対策課主催 平成23年度関東・甲信越地区薬物中毒対策連絡会議相談従事者講習会，神奈川，2011.11.22.

59)松本俊彦：アルコールと自殺．NPO法人愛媛県断酒会今治断酒会・今治市主催 市民公開セミナー 基調講演，愛媛，2011.11.27.

60)松本俊彦：自殺に傾いた人を支えるために～自殺対策の基礎知識と対応．広島市主催 平成23年度うつ病・自殺対策相談機関職員研究会，広島，2011.12.5.

61)松本俊彦：自傷行為の理解と援助．高知県精神保健福祉センター主催 平成23年度自殺対策関連事業，高知，2011.12.9.

62)松本俊彦：ドラッグから自分を守ろう！．神奈川県立光陵高等学校主催 生徒対象薬物乱用防止講演会，神奈川，2011.12.11.

63)松本俊彦：地域で役立つ薬物依存症の基礎知識とその対応～若者はなぜ薬物に手を出すのか～．東京都多摩小平保健所主催 平成 23 年度薬物依存症講演会，東京，2011.12.14.

64)松本俊彦：アルコールとうつ、自殺．独立行政法人国立病院機構久里浜アルコール症センター主催 平成 23 年度アルコール問題の早期発見早期介入実践講座，神奈川，2011.12.16.

65)松本俊彦：薬物依存症と HIV 感染症．東京 HIV 診療ネットワーク主催 東京 HIV 診療ネットワーク講演会，東京，2011.12.18.

66)松本俊彦：自殺および自傷行為の臨床現場から見た死生の課題．早稲田大学人間科学学術院 健康福祉学科主催 臨床死生学概論講義，埼玉，2011.12.20.

67)松本俊彦：自傷行為の理解と援助．全国家庭裁判所調査官有志主催 第 43 回カウンセリング研究会　第 1 分科会講師および事例検討会助言者，大阪，2012.1.15.

68)松本俊彦：多重構造の『ザル』を目指して～治療プログラムを介したつながり．龍谷大学矯正・保護総合センター主催 第 9 回薬物依存症者回復支援セミナー，神奈川，2012.1.22.

69)松本俊彦：わが国の自殺および自殺対策の実態、臨床における自殺予防．独立行政法人国立精神・神経医療研究センター病院看護部主催 第 10 回精神科専門講座，東京，2012.2.1.

70)松本俊彦：自傷・パーソナリティ障害の理解．公立大学法人横浜市立大学医学部精神医学講座主催 シニアレジデント講義，神奈川，2012.2.2.

71)松本俊彦：自殺とアルコール問題のかかわりについて．NPO 法人愛知県断酒連合会主催 愛知県委託自殺ハイリスク者対策モデル事業（アルコール依存症関連対策）「サイバラ流『お酒と命のたいせつなお話』」，愛知，2012.2.5.

72)松本俊彦：ドラッグから自分を守ろう．神奈川県立大和西高等学校主催 生徒対象薬物乱用防止講演，神奈川，2012.2.7.

73)松本俊彦：依存症の実態と認知行動療法にもとづく依存症からの回復．特定非営利活動法人ドムクス主催 第 8 回 NPO 法人ドムクス・フォーラム，静岡，2012.2.11.

74)松本俊彦：自傷行為の理解と援助～「故意に自分の健康を害する無症候群～．筑波大学大学院人間科学総合研究科ヒューマン・ケア科専攻社会精神保健学主催 講演会，茨城，2012.2.14.

75)松本俊彦：被災地におけるうつ・自殺予防について．新潟県精神保健福祉協会ここのケアセンター主催 被災地におけるうつ・自殺予防講演会，新潟，2012.2.22.

76)松本俊彦：自殺未遂者の実態と対策の必要性．仙台グリーフケア研究会主催 医療現場で自殺未遂者に対応するためのワークショップ～精神科関係者篇，宮城，2012.2.26.

77)松本俊彦：自傷や薬物に向かう子どもの現状と対策．第 26 回日本精神保健会議（メンタルヘルスの集い）シンポジウム「子どもたちは学校に何を求めているのか」，東京，2012.3.3.

78)松本俊彦：児童青年期の自傷．東京都小児総合医療センター主催 子どもの心の診療支援拠点病院事業「医療関係者向け講座」，東京，2012.3.21.

79)西原理恵子，松本俊彦：対談「人生の歩き方～前を向いて進んで行こう～」．熊本県健康福祉局障がい者支援総室主催平成 22 年度自殺予防講演会，熊本，2011.3.21.

80)松本俊彦：気づき、かかわり、つないでいこう～みんなで支える心の健康．阿蘇地域振興局保健福祉環境部保健予防課主催 平成 22 年度阿蘇シルバーハートネット推進フォーラム，熊本，2011.3.22.

81)松本俊彦：自傷行為の理解と援助～感情的に反応するな，医学的に反応せよ．北里大学精神科学教室主宰 北里大学精神科教室拡大研究会，神奈川，2012.3.22.

82)松本俊彦：自傷行為と思春期の自殺未遂．北海道立精神保健福祉センター主催 北海道自殺未遂者講演会「傷ついたからだ，痛むこころ」，北海道，2012.3.24.

83)松本俊彦：大切な人のいのちを守るために，一人ひとりにできること．大子町主催 大子町うつ・自殺予防対策事業講演会，茨城，2012.3.25.

84)川野健治：こころの健康．志木市健康増進センター主催　こころの安全週間講演会，埼玉，2011.5.14.
85)川野健治：自殺予防対策の推進のために～自死遺族支援の経験を通して～．神奈川県足柄上保健福祉事務所主催　平成23年度自殺予防対策研究会，神奈川，2011.5.16.
86)川野健治：地域精神保健と電話相談の役割．東京多摩いのちの電話主催28期生前期講義，東京，2011.6.4.
87)川野健治：東日本大震災復興支援イベント復興への思いを込めて～司法書士は社会とともに～「見識者が語る『東日本大震災の今後』」近畿司法書士会連合会主催，大阪，2011.6.26.
88)川野健治：生きる支援～自死を考える．佼正カウンセリング研究所主催　相談研究会分科会C，東京，2011.7.3.
89)川野健治：誰でもかかる心の病気を知る．平成23年度東久留米市心の健康づくり事業　心のヘルスサポーター講座，東京，2011.7.20.
90)川野健治：ケースレビュー・検討（スーパーバイズ）．ハイリスク者の支援している保健師等の相談技術向上事業，埼玉，2011.7.21.
91)川野健治：ハイリスク者対策の視点と関係機関連携のあり方．岡崎市保健所主催　こころの健康づくりネットワーク会議作業部会，愛知，2011.8.19.
92)川野健治：自死の現状と対策の分析．愛知県教育委員会障害学習課～命を見守る地域づくり推進受託事業，愛知，2011.9.29.
93)川野健治：ハイリスク者対策の視点と関係機関連携のあり方．岡崎市保健所主催　こころの健康づくりネットワーク会議作業部会，愛知，2011.11.10.
94)川野健治：ケースレビュー・検討（スーパーバイズ）．ハイリスク者の支援している保健師等の相談技術向上事業，埼玉，2011.11.24.
95)川野健治：自殺予防対策の考え方～働き盛り仙台への自殺予防の働きかけ（気づき～支援へのつなぎかた等）．平成23年度大田区精神保健福祉講座，東京，2011.11.25.
96)川野健治：被災地支援と自殺予防．第5回自殺対策研究協議会，東京，2012.1.12.
97)川野健治：自治体からみた自殺対策の重点施策について．山形県精神保福祉センター主催，山形，2012.1.16.
98)川野健治：自殺予防と災害支援．筑波大学人間系主催 東日本大震災における災害と自殺対策に関する講演会，東京，2012.1.31.
99)川野健治：（シンポジウム）まとめ：被災地支援と今後の精神保健福祉．みやぎ心のケアセンター主催 自殺対策シンポジウム「被災地の中長期支援と自殺予防－地域の互助、社会的支援、メンタルヘルスの連携－」，宮城，2012.2.6.
100)川野健治：（座長）分科会Ⅰ「生活を支える法律支援～「生きる」を支えるということ」．みやぎ心のケアセンター主催 自殺対策シンポジウム「被災地の中長期支援と自殺予防－地域の互助、社会的支援、メンタルヘルスの連携－」，宮城，2012.2.6.
101)川野健治：ケースレビュー・検討（スーパーバイズ）．ハイリスク者の支援している保健師等の相談技術向上事業，埼玉，2012.2.17.
102)川野健治：高齢期のこころの疲れと悩み－気づきの輪を広げよう－．平成23年度千葉県自殺対策緊急強化基金事業自殺予防対策講演，千葉，2012.2.18.
103)川野健治：自殺対策の研究と取組について．日本弁護士連合会主催 第55回人権擁護大会シンポジウム実行委員会における勉強会，東京，2012.3.7.
104)川野健治：（シンポジウム）“かなしみ”にやさしい社会と絆．グットリーフ・ネットワーク主催，東京，2012.3.18.
105)川野健治：（基調講演）自殺対策の動向と社会福祉士への期待．日本社会福祉士会事務局主催，東京，2012.3.18.
106)稲垣正俊：自殺予防対策とうつ病治療．東久留米医師会自殺予防懇話会，東京，2011.7.25.
107)稲垣正俊：平成22年度集積した89事例の集計結果について・今後取り組む課題の検討等．愛知県精

神保健福祉センター，自殺関連事例分析検討会，愛知，2011.8.19.

108)稲垣正俊：平成 22 年度集積した 89 事例の集計結果から今後の自殺対策を考える. 自殺関連事例分析検討会，愛知，2011.9.22.

109)稲垣正俊：うつ病　症例検討会．第 2 回東久留米医師会自殺予防懇話会，東京，2011.11.7.

110)稲垣正俊：がんの診断・治療に伴う抑うつの機序とその対応．第 9 回日本予防医学会学術総会，東京，2011.11.20.

111)稲垣正俊：自殺関連事例の集積結果から今後取組む課題の検討について．自殺関連事例分析検討会，東京，2011.11.28.

112)稲垣正俊：三重県自殺行動計画について、現三重県自殺対策行動計画の評価について、次期三重県自殺対策行動計画査定方針について等．三重県自殺対策行動計画策定に向けた勉強会，三重，2012.2.23.

113)稲垣正俊：うつ病に対する医療連携モデル事業に係る考察．うつ病に対する医療連携モデル事業実践報告及び意見交換会，広島，2012.2.28.

114)勝又陽太郎：子どもたちの出すサインー自傷行為の理解と援助．三浦市学校教育研究会講演会，神奈川県三浦市，2011.4.13.

115)勝又陽太郎：働く人の自殺予防と起こった後の対応．神奈川産業保健推進センター主催　神奈川産業保健メンタルヘルス交流会，神奈川，2011.5.14.

116)勝又陽太郎：SOS を見逃さないために各関係期機関の連携をー自殺予防ー．平成 23 年度小平市地区連絡協議会，東京，2011.8.5.

117)勝又陽太郎：ストレスとのつき合い方．小金井市主催　平成 23 年度自殺予防対策特別講演会，東京，2011.10.2.

118)勝又陽太郎：学校における自傷行為の理解と対応. 埼玉県立春日部高等学校　教育相談委員会講演会，埼玉，2011.10.4.

119)勝又陽太郎：思春期の精神保健的問題の実態と周囲の大人にできること. いきるを支える鎌倉・逗子・葉山実行委員会主催　平成 23 年度精神保健福祉講演会，神奈川，2011.10.26.

120)勝又陽太郎：自己破壊的行動の理解と対応「気づき・かかわり・つなぎ」とセルフケア．獨協大学カウンセリングセンター講演会，獨協大学，埼玉，2011.11.22.

121)勝又陽太郎：いきるを支える―精神保健と社会的取り組み，相談窓口連携の構築に向けて．第 31 回全国クレサラ・ヤミ金被害者交流集会第 2 分科会，愛媛，2011.11.26.

122)勝又陽太郎：みんなで考える自殺予防　ー大切な人を支えるためにー．戸田市福祉保健福祉センター，埼玉，2011.8.27.

123)勝又陽太郎：心理学的剖検による自殺の実態．絆で支える自殺対策地域連携シンポジウム基調講演，静岡，2012.2.25.

124)勝又陽太郎：自殺に向かうこころと向き合うために．八丈町保健福祉センター主催　平成 23 年度八丈町ゲートキーパー養成講座，東京，2012.2.29.

125)勝又陽太郎：「死にたい」と言われた時どう対応するか．所沢市保健センター主催　平成 23 年度自殺防止対策講座，埼玉，2012.3.6.

126)勝又陽太郎：自殺の実態分析における当事者との協働．自死遺族ケアシンポジウム，東京，2012.3.13.

127)福島喜代子，小高真美，岡田澄恵：2011 年度第 1 回自殺危機初期介入スキルワークショップ，東京，2011.9.1.

128)小高真美：自殺の現状と対応について．鎌ヶ谷市健康福祉部主催 自殺予防人材育成講習会，千葉，2011.9.26.

D．学会活動

(1) 学会役員

1) Takeshima T：International Advisory Council,　Asia Australia Mental Health

2) 竹島 正：日本社会精神医学会常任理事（総務企画委員長）
3) 竹島 正：第31回日本社会精神医学会会長
4) 竹島 正：日本精神衛生学会理事
5) 竹島 正：日本自殺予防学会理事
6) 竹島 正：日本精神保健福祉政策学会理事
7) 竹島 正：日本精神神経学会「精神保健に関する委員会」委員
8) 松本俊彦：日本青年期精神療法学会理事・編集委員
9) 松本俊彦：日本アルコール精神医学会理事
10) 松本俊彦：日本司法精神医学会評議員
11) 松本俊彦：日本アルコール・薬物医学会評議員
12) 松本俊彦：日本精神科救急学会評議員
13) 川野健治：日本パーソナリティ心理学会常任理事
14) 川野健治：日本社会精神医学会理事
15) 川野健治：日本質的心理学会理事
16) 稲垣正俊：日本生物学的精神医学会評議員

(2) 座長

1)竹島 正：（司会）シンポジウム11 プライマリ・ケアに必要な断酒・節酒指導と地域連携ーあなたはお酒と自殺の関係を知っていますか？ー. 第2回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会, 北海道, 2011.7.3.
2)高橋祥友（司会），竹島 正（司会），張 賢徳，大塚耕太郎，細田眞二，河西千秋：自殺対策と精神保健. 第107回日本精神神経学会学術総会. 東京，2011.10.27.
3)竹島 正（司会），三井敏子，立森久照，千葉 潜，平林直次：かえる・かわるー精神保健医療の発展のために. 第107回日本精神神経学会学術総会. 東京，2011.10.27.
4)竹島 正（座長），本橋 豊，花城梨枝子，反町吉秀，的場由木：自殺の背景にある格差の再考. 第35回日本自殺予防学会総会. 沖縄，2011.12.16.
5)松本俊彦（座長）：コアシンポジウムⅢ「問題行動の精神病理学」. 第31回日本社会精神医学会，東京，2012.3.16.
6)古郡規雄（座長），小高真美（座長），太刀川弘和，阿部恭久，李菊姫，進藤太郎，大山寧寧，岩本洋子：意識調査. 第35回日本自殺予防学会総会. 沖縄，2011.12.16.

(3) 学会誌編集委員等

1) 竹島 正：日本公衆衛生学会査読委員
2) 松本俊彦：日本精神衛生学会編集委員
3) 松本俊彦：星和書店「精神科治療学」編集委員
4) 川野健治：日本質的心理学会機関誌「質的心理学フォーラム」副編集委員長

E. 研修

(1) 研修企画

1)竹島 正，立森久照：第48回精神保健指導課程研修. 東京，2011.7.13-15.
2)川野健治，竹島 正，松本俊彦，稲垣正俊：第2回心理職自殺予防研修. 東京，2011.7.5-6.
3)竹島 正，松本俊彦，川野健治，稲垣正俊：第5回自殺総合対策企画研修. 東京，2011.8.24-26.
4)稲垣正俊，竹島 正，松本俊彦，川野健治：第3回精神科医療従事者研修. 東京，2011.9.6-7.
5)松本俊彦，竹島 正，川野健治，稲垣正俊：第2回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修. 東京，2011.11.8-9.
6)竹島 正，松本俊彦，川野健治，稲垣正俊：第4回精神科医療従事者自殺予防研修. 愛知，2011.11.29-30.

(2) 研修会講師

1)竹島 正：地域における自殺予防の必要性と対応について．平成 23 年度船橋市民生児童委員大会におけるゲートキーパー研修，千葉，2011.5.31.

2)竹島 正：地域自殺予防対策について．松戸市地域自殺予防対策従事者研修会，千葉，2011.8.31.

3)竹島 正：生活保護における自殺予防の必要性と対応について．平成 23 年度船橋市ケースワーカー研修，千葉，2011.9.21.

4)竹島 正：我が国の自殺及び自殺対策の実態. 第 3 回精神科医療従事者研修，東京，2011.9.6.

5)竹島 正：生活困窮者の社会的支援とメンタルヘルスー私たちは何ができるのかー．司法書士を対象としたメンタルヘルス研修会．宮城，2011.10.29.

6)竹島 正：生活保護における自殺予防の必要性と対応について．平成 23 年船橋市ケースワーカー研修．千葉，2011.11.15.

7)竹島 正：自殺･うつ病の実態～多様化する健康問題～．北海道看護協会主催心のケアー自殺・うつ病の現状とその支援ー研修会．北海道，2011.12.13.

8)竹島 正：メンタルヘルスの問題について．金融庁「多重債務者相談の手引き」研修会，埼玉，2011.12.21.

9)竹島 正：メンタルヘルスの問題について．金融庁「多重債務者相談の手引き」の研修会，大阪，2012.1.18.

10)竹島 正：自殺の現状と地域における対応について．八千代市自殺予防対策研修会．千葉，2012.1.20

11)竹島 正：船橋市における自殺対策のあり方について．平成 23 年度船橋市自殺対策ゲートキーパー研修会．千葉，2012.2.21.

12)松本俊彦：自殺予防のために私たちができること．社団法人厚木市医師会主催　医師研修会，神奈川，2011.4.8.

13)松本俊彦：自殺対策の現状と課題．子どもの虹情報研修センター主催「親子心中に関する研究」第 1 回研究会，神奈川，2011.4.18.

14)松本俊彦：自殺対策，いまできること．逗子市主催 自殺対策職員研修，神奈川，2011.5.11.

15)松本俊彦：自殺対策をどうすすめるか．兵庫県立精神保健福祉センター主催 平成23年度 第1回自殺対策企画研修会，兵庫，2011.5.12.

16)松本俊彦：自傷行為の理解と援助．香川県臨床心理士会主催 香川県臨床心理士研修会，香川，2011.5.15.

17)松本俊彦：自殺の実態と地方自治体の施策について．横浜市こころの健康相談センター主催 平成 23 年度自殺対策「基礎研修」，神奈川，2011.5.27.

18)松本俊彦：薬物依存の理解と援助．国連アジア極東犯罪防止研修所主催 アジア極東刑事司法従事者研修会，東京，2011.5.30.

19)松本俊彦：DV 犯の心理と病理．NPO 法人性犯罪加害者の処遇制度を考える会主催 ストーカー・配偶者暴力対策専科研修，東京，2011.6.1.

20)松本俊彦：自殺をめぐる最近の動向とその対策．東京都多摩総合精神保健福祉センター主催 平成 23 年度自殺対策研修，東京，2011.7.15.

21)松本俊彦：自殺予防のために学校にできること．昭島市教育委員会主催 学校経営研修会，東京，2011.7.29.

22)松本俊彦：SMARPP とは何か?～薬物依存の理解と援助～．茨城県立こころの医療センター主催 職員研修会，茨城，2011.8.1.

23)松本俊彦：自殺念慮者と自殺未遂者への対応．大阪府こころの健康総合センター主催自殺予防相談従事者養成研修，大阪，2011.8.5.

24)松本俊彦：性被害に遭遇した男性の精神医学的特徴について．性教育研究会主催 性教育研究会研修会，東京，2011.8.7.

25)松本俊彦：ワークブックを用いた統合的外来治療プログラム. 北九州市立精神保健福祉センター主催 平成 23 年度第 2 回薬物乱用・依存関連問題専門研修，福岡，2011.8.9.

26)松本俊彦：思春期の自殺対策について．埼玉県春日部保健所主催 自殺対策研修会，埼玉，2011.8.10.
27)松本俊彦：思春期のこころと自己破壊的行動～「故意に自分の健康を害する」症候群．熊本県精神保健福祉センター主催 平成23年度熊本県自殺予防研修会・思春期精神保健講座，熊本，2011.8.12.
28)松本俊彦：自殺の実態と地方自治体の施策について．横浜市こころの健康相談センター主催 平成23年度第2回自殺対策「基礎研修」，神奈川，2011.8.17.
29)松本俊彦：自分を傷つけることでSOSを発する子供への援助のあり方．香川県津教育センター主催「子どもを自殺から守る」研修会，香川，2011.8.19.
30)松本俊彦：薬物乱用・中毒・依存について．社団法人東京都病院薬剤師会・吉富製薬共催 平成23年度第3回精神科専門領域薬剤師養成研修会，東京，2011.8.20.
31)松本俊彦：薬物依存の理解と援助．徳島県教育委員会体育健康課主催 平成23年度薬物乱用防止教育研修会，徳島，2011.8.22.
32)松本俊彦：自傷行為と摂食障害．国立精神・神経医療研究センター　精神保健研究所主催 摂食障害研修，東京，2011.8.31.
33)松本俊彦：薬物依存症と認知行動療法．東京保護観察所主催 保護観察所職員研修，東京，2011.9.26.
34)松本俊彦：薬物依存の理解と離脱に関する概念．多摩少年院主催 職員研修会，東京，2011.9.27.
35)松本俊彦：薬物依存症と認知行動療法．東京家庭裁判所主催 家庭裁判所調査官研修，東京，2011.9.28.
36)松本俊彦：矯正施設における自殺・自傷への対応．法務省矯正研修所主催 任用課程高等科第43回研修，東京，2011.9.30.
37)松本俊彦：自殺の現状や国の施策．横浜市鶴見区福祉保健センター主催 鶴見地区自殺対策基礎研修，神奈川，2011.10.5.
38)松本俊彦：なぜ若者たちは自身を傷つけるのか．東京都福祉保健局主催 平成23年度若年層への自殺対策ゲートキーパー研修，東京，2011.10.7.
39)松本俊彦：司法精神医療とアルコール・薬物使用障害．精神保健研究所主催 第5回司法精神医学研修，東京，2011.10.12.
40)松本俊彦：電話相談の受け方．メンタルケア協議会主催　自殺相談ダイヤル相談員研修会，東京，2011.10.16.
41)松本俊彦：自傷行為の理解と援助～なぜリストカットを繰り返すのか～．世田谷区烏山総合支所主催 要保護児童支援烏山地域協議会研修会，東京，2011.10.28.
42)松本俊彦：自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応．大分県こころとからだの相談支援センター主催 平成23年度自殺対策相談支援研修，大分，2011.10.30.
43)松本俊彦：精神保健観察における自殺と物質依存への対応．法務総合研究所主催 第4回社会復帰調整官初任研修，東京，2011.11.1.
44)松本俊彦：自殺企図者の心理．山梨県立精神保健福祉センター主催 平成23年度自殺対策再企図防止研修，山梨，2011.11.2.
45)松本俊彦：地域での自殺予防の取り組み．東京都多摩立川保健所主催 平成23年度自殺対策ゲートキーパー指導者養成研修，東京，2011.11.25.
46)松本俊彦：薬物依存症の理解と援助～自殺対策という切り口から～．愛媛県心と体の健康センター主催 平成23年度自殺関連研修会，愛媛，2011.12.2.
47)松本俊彦：薬物依存に対する認知行動療法プログラム（SMARPP）の有効性とその導入について．愛媛県心と体の健康センター主催 平成23年度自殺関連研修会，愛媛，2011.12.2.
48)松本俊彦：自傷行為と自殺企図の評価のポイント．上越地域振興局健康福祉環境部主催 平成23年度自殺予防事業医療機関関係者研修会，新潟，2011.12.7.
49)松本俊彦：薬物関連問題の基礎知識と対応について．鹿児島県精神保健福祉センター主催 平成23年度薬物関連問題従事者研修会，鹿児島，2011.12.19.
50)松本俊彦：日本の自殺の現状と自殺のリスクアセスメント．特定非営利活動法人メンタルケア協議会主

催 東京都自殺予防のための電話相談技能研修会，東京，2012.1.29.

51)松本俊彦：自殺に傾く人への介入にあたって～行政職員が知っておくべき専門知識～．特別区研修所主催 平成 23 年度専門研修「自殺対策～つながる支援に向けて～」，東京，2012.2.1.

52)松本俊彦：自殺予防および発症後のケア．神奈川労務安全衛生協会厚木支部主催 産業保健研修会，神奈川，2012.2.3.

53)松本俊彦：アルコール問題とうつ、自殺．石川県医師会主催 平成 23 年度依存症等対応研修事業特別講演会，石川，2012.2.8.

54)松本俊彦：電話相談の受け方. メンタルケア協議会主催　自殺相談ダイヤル相談員研修会，東京，2012.2.12.

55)松本俊彦：自傷と自殺～若者の自殺予防のために．京都市主催 自殺予防にかかるゲートキーパー養成研修会 専門講義，京都，2012.2.15.

56)松本俊彦：うつとアルコールの関係、過量服薬防止．長野県健康福祉部主催　平成 23 年度うつ病の診療・支援基盤強化事業【精神医療関係者研修】，長野，2012.2.18.

57)松本俊彦：プライマリ・ケア医としてのアルコール・薬物依存、自傷、自殺へのかかわり方. 福井県医師会・福井県主催 平成 23 年度うつ病に対する一般医と精神科医の連携強化研修会，福井，2012.2.19.

58)松本俊彦：自傷行為と自殺について．大阪自殺防止センター主催 平成 23 年度相談員継続研修会，大阪，2012.2.20.

59)松本俊彦：向精神薬乱用・過量服薬と自殺予防. 社団法人山梨県看護協会主催 平成 23 年自殺対策人材育成研修会～薬局等勤務薬剤師に係る研修会～，山梨，2012.2.21.

60)松本俊彦：自傷する生徒の理解と対応．川崎市教育委員会主催 川崎市中学校スクールカウンセラー研修会，神奈川，2012.2.24.

61)松本俊彦：地域における自殺ハイリスク者への介入のしかた．仙台市精神保健福祉センター主催 平成 23 年度地域自殺対策研修講座第 3 回目，宮城，2012.2.29.

62)松本俊彦：自傷行為の理解と対応．社会福祉法人相模原市社会福祉事業団主催 平成 23 年度施設支援事業精神障害研修，神奈川，2012.3.2.

63)松本俊彦：自傷行為の理解と援助～「故意に自分の健康を害する」症候群．神奈川県臨床心理士会主催 第 2 回研修会，神奈川，2012.3.4.

64)松本俊彦：薬物依存の理解と援助～薬物依存からの回復のためのプログラム．熊本県精神保健福祉センター主催 第 2 回自殺予防従事者研修会（薬物依存対策研修），熊本，2012.3.5.

65)松本俊彦：自殺予防のために医療者にできること．世田谷区医師会主催 平成 23 年度自殺対策研修会，東京，2012.3.6.

66)松本俊彦：解離性同一性障害の精神鑑定事例．法務省矯正研修所主催 調査鑑別特別科第 5 回研修，東京，2012.3.7.

67)松本俊彦：地域における自殺対策について．武蔵野市主催 平成 23 年度武蔵野市自殺対策職員研修，東京，2012.3.7.

68)松本俊彦：わが国の自殺の現状と対策～市職員の役割～．篠山市健康課主催 平成 23 年度篠山市自殺対策職員研修会，兵庫，2012.3.19.

69)松本俊彦：働き盛りの自殺予防～うつ、アルコールとの関係～．熊本県健康福祉局障がい者支援総室主催 玉名郡市医師会研修会，熊本，2011.3.22.

70)松本俊彦：死にたいと言われたときの対応について．北九州市立精神保健福祉センター主催 平成 23 年度自殺対策支援者研修，福岡，2012.3.26.

71)松本俊彦：自殺のハイリスク者と自殺未遂者の支援．広島県・広島県臨床心理士会主催 平成 22 年度広島県自殺対策相談支援関係者【臨床心理士等】研修会，広島，2011.3.27.

72)松本俊彦：自殺の現状と対策～一人ひとりにできること．中央区保健所主催 平成 23 年度第 2 回自殺対策ゲートキーパー研修会，東京，2012.3.28.

73)松本俊彦：自殺をめぐる最近の動向とその対策．社会福祉法人村山苑主催 職員研修，東京，2012.3.30.
74)川野健治：地域でできる自殺対策～自殺に傾いた人を支えるために～．島根県立心と体の相談センター主催　平成２３年度自殺予防対策等関係機関研修会，島根，2011.6.28.
75)川野健治：自殺の現状と対策について～市職員としてできること～．平成23年度第１回自殺予防対策職員研修会，埼玉，2011.6.29.
76)川野健治：自殺未遂者のための基礎理解．大分県看護協会主催　平成23年度自殺対策専門研修，大分，2011.8.21.
77)川野健治：地域における自殺予防対策～自死遺族支援から～．岐阜県精神保健福祉センター主催　地域指導者養成研修会，岐阜，2011.10.3.
78)川野健治：自殺予防におけるハイリスク者への気づきと対応について．志木市役所主催　窓口・相談担当職員研修会，埼玉，2011.10.5.
79)川野健治：働き盛り世代のうつ病・自殺とどう向き合うか．埼玉県朝霞保健所　自殺対策研修会，埼玉，2011.10.21.
80)川野健治：自殺対策の概念・自殺念慮者の心理と対応．平成23年度川崎市自殺対策相談支援基礎研修，神奈川，2011.11.02.
81)川野健治：平成23年度第１回院内自殺の予防と事後対応のための研修会．公益財団法人日本医療機構機能評価機構主催，東京，2011.11.25.
82)川野健治：震災と子どもの心のケアについて．埼玉県春日部保健所主催 研修会，埼玉，2011.12.2.
83)川野健治：自殺対策．法務総合研究所主催　平成23年度社会復帰調査医官特別研修，東京，2011.12.07.
84)川野健治：自殺対策．法務総合研究所主催　平成23年度社会復帰調査医官特別研修，東京，2011.12.14.
85)川野健治：自殺の現状と対策について～市職員としてできること～．平成23年度第２回自殺予防対策職員研修会，埼玉，2012.1.20.
86)川野健治：困難事例から考えるつながる支援～ハイリスク対応～．特別区職員研修所主催 平成23年度専門研修「自殺対策～つながる支援に向けて～」，東京，2012.2.1.
87)川野健治：自死遺族支援の基本．平成23年度滋賀県自死遺族支援従事者研修会，滋賀，2012.2.8.
88)川野健治：ゲートキーパー的役割を担うために自殺対策として大切なこと．平成23年度霧島市自殺対策研修会，鹿児島，2012.2.15.
89)川野健治：自殺企図者への対応について．栃木県安足健康福祉センター主催 平成23年度第２回ゲートキーパー養成講座研修会，栃木，2012.2.28.
90)川野健治：自殺対策基本法、その後の５年を統括して～今後地域で取り組むべき重点課題について．平成23年度第２回栃木県自殺対策担当者研修会，栃木，2012.2.29.
91)川野健治：（基調講演）自死予防における社会的取り組みと連携．大阪司法書士会主催自殺予防研修会，大阪，2012.3.3.
92)川野健治：（パネルディスカッション）いきるを支えるための他職種連携のあり方を考える．大阪司法書士会主催 自殺予防研修会，大阪，2012.3.3.
93)川野健治：院内自殺の予防と事後対応．公益財団法人日本医療機構機能評価機構主催　平成23年度第２回院内自殺の予防と事後対応のための研修会，東京，2012.3.9.
94)川野健治：院内自殺の予防と事後対応．公益財団法人日本医療機構機能評価機構主催　平成23年度第２回院内自殺の予防と事後対応のための研修会，東京，2012.3.10.
95)稲垣正俊：「現場で自殺予防につなげるために」～自殺に傾く人への相談技術アップ～．自殺対策関係者研修会，山形，2011.7.15.
96)稲垣正俊：自殺についていまわかっていること～新潟市に期待される社会的な取り組み～．平成23年度自殺総合対策事業庁内推進体制強化事業庁内研修会（課長職以上），東京，2011.11.21.
97)稲垣正俊：自殺の背景とその対応．医師向け自殺念慮者等対応力研修会，東京，2011.11.23.
98)稲垣正俊：うつ病の基礎知識と自殺予防．平成23年度静岡市かかりつけ医等心の健康対応向上研修会，

静岡，2011.12.3.
99)稲垣正俊：私たちに何ができるか・・・地域で取り組む視点 3．平成 23 年度自殺予防相談従事者養成研修，大阪，2011.12.9.
100)稲垣正俊：相談者のうつ状態のリスクアセスメントと受診勧奨の進め方～うつ病のスクリーニングをするために～．平成 23 年度心の健康づくり地域連携研修（ゲートキーパー研修 2），埼玉，2012.1.13.
101)稲垣正俊：かかりつけ医におけるうつ病患者へのケアの提供・うつ病患者への声掛け．平成 23 年度東部地域自殺対策「地域医療連携事業研修会」，広島，2012.2.3.
102)稲垣正俊：精神疾患へのプライマリケア・アプローチ、プライマリ・ケアにおけるうつ病スクリーニングとモニタリング・ケースマネジメント．プライマリ・ケア認定薬剤師研修会及び生涯教育セミナー，広島，2012.2.12.
103)稲垣正俊：うつ病診療と自殺予防．うつ病診療充実強化研修事業講演会，東京，2012.2.13.
104)稲垣正俊：これからの自殺対策の考え方．平成23年度第5回自殺対策関係職員研修会，愛知，2012.3.12.
105)勝又陽太郎：「死にたい」との訴えと「自殺するかもしれない」と感じたらどう対応するか．飯能市保健センター主催　平成 23 年度心の健康づくり地域連携研修ゲートキーパー研修 1，埼玉，2011.6.3.
106)勝又陽太郎：自殺実態分析に基づく自殺対策の企画・プランニング．平成23年度市町村における自殺対策企画研修会，新潟県精神保健福祉センター，新潟，2011.7.21.
107)勝又陽太郎：自傷・自殺企図の危険性の高い対応困難事例に対するアプローチ．平成 23 年度南魚沼地域振興局主催 対応困難ケーススキルアップ研修会，新潟，2011.10.19.
108)勝又陽太郎：事後対応．精神保健研究所主催　第 2 回心理職自殺予防研修，東京，2011.7.5.
109)勝又陽太郎：パーソナリティ障害の地域支援ーオーストラリアでの取組例を参考にー．精神保健研究所主催 第 2 回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修，東京，2011.11.9.
110)勝又陽太郎：自殺事例の検討方法と遺族支援について．新潟県精神保健福祉センター主催　平成 23 年度自死遺族支援者研修会，新潟，2011.12.20.
111)勝又陽太郎：窓口での気づきが命を救う―私たちができる自殺対策．狭山市役所主催　平成 23 年度職員向け自殺予防対策研修会，埼玉，2011.12.22.
112)勝又陽太郎：自傷行為と自殺企図について―対応のポイント．新潟県立中央病院主催　自殺未遂者対策関係者連携研修会，新潟，2012.2.23.
113)福島喜代子，小高真美，岡田澄恵：2011 年度第 2 回自殺危機初期介入スキルワークショップリーダー養成研修．東京，2011.9.2.
114)福島喜代子，小高真美：富山県精神保健福祉士協会研修会 自殺危機初期介入スキルワークショップ，富山，2011.12.4.
115)岡田澄恵，小高真美：自殺危機初期介入スキルワークショップ．川崎市精神保健福祉センター主催 平成 23 年度自殺対策相談技術研修，神奈川，2012.2.27.
116)福島喜代子，小高真美：自殺危機初期介入スキルワークショップ．船橋市主催 自殺予防研修（市役所職員）研修，千葉，2012.3.2.

研　修　実　績

平成２３年度研修報告

研究所事務室

精神保健研究所における研修は、国、地方公共団体、精神保健福祉法第 19 条の規定による指定病院等において精神保健の業務に従事する医師、保健師、看護師、作業療法士、臨床心理業務に従事する者、精神科ソーシャルワーカー等を対象に、精神保健技術者として必要な資質の向上を図ることを目的として、精神保健各般にわたり必要な知識及び技術の研修を行うものである。平成 23 年度には、精神科医療評価・均てん化研修、発達障害早期総合支援研修、心理職自殺予防研修、発達障害支援医学研修（２課程）、精神保健指導課程研修、不眠症の認知行動療法研修、自殺総合対策企画研修、摂食障害治療研修、精神科医療従事者自殺予防研修（２回）、薬物依存臨床医師研修、薬物依存臨床看護等研修、発達障害精神医療研修、ＰＴＳＤ認知行動療法基本研修、司法精神医学研修、アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修、ＡＣＴ研修、自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修、摂食障害看護研修、薬物依存症に対する認知行動療法研修、犯罪被害者メンタルケア研修、の計 22 回の研修を合計 1,157 名に対して実施した。

≪精神科医療評価・均てん化研修≫

平成 23 年 6 月 13 日から 6 月 14 日まで、第 5 回精神科医療評価・均てん化研修を実施し、「精神疾患治療を担う精神科救急・急性期医療施設をとりまく現状を理解し、精神科医療の質を高めるための専門的知識および技能を修得すること」を主題に、精神科救急・急性期医療施設において精神科診療に従事している医師、看護師等 33 名に対して研修を行った。

課程主任：伊藤　弘人　　課程副主任：野田　寿恵

６月１３日（月）

精神科医療政策の方向性	友利　久哉
行動制限最小化研修プログラム（パイロット版）	
わが国の行動制限の実態（630 調査より）と臨床指標について	野田　寿恵
実習①「一覧性台帳から主要ＣＩを算出しよう」	
コア戦略を学ぶ	杉山　直也
実習②「コア戦略」グループディスカッション：すぐにできる対策を探そう	
精神科急性期治療導入時の人的資源投入量	泉田　信行
取り組みの経験から	吉浜　文洋・杉山　直也
実践①　行動制限最小化チーム	則村　良
実践②　データ利用：eCODO	冨田　敦
実践③　タイムアウト	佐藤　雅美
実践④　コンフォートルーム	山野　真弓
実践⑤　コンシューマの役割	野田　寿恵
実践⑥　デブリーフィング	山口　しげ子

６月１４日（火）

日本精神科救急学会での取り組み	川畑　俊貴
薬物療法研究成果最前線	
－抗精神病薬単剤への反応不良例に対する方略	八田　耕太郎・松崎　朝樹
切り替え（switching）	大舘　太郎
上乗せ（augmentation）	竹林　宏
高用量（high dose）	須藤　康彦
クロザピン（clozapine）	三澤　史斉
JAST study group の成果	八田　耕太郎
精神科地域連携クリティカルパス開発の試み	
総論：地域連携クリティカルパス	下村　裕見子
北里東病院における地域連携	大石　智
東日本大震災と精神科医療	
被災地への派遣経験から	藤田　純一
現地支援の在り方	鈴木　友理子
精神科病院の大規模災害対策	筧　淳夫

講師名簿

伊藤　弘人	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会精神保健研究部部長
野田　寿恵	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会精神保健研究部室長
友利　久哉	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部精神・障害保健福祉課課長補佐
杉山　直也	復康会沼津中央病院院長
泉田　信行	国立社会保障・人口問題研究所社会保障応用分析研究部第一室長
吉浜　文洋	神奈川県立保健福祉大学教授
則村　良	青渓会駒木野病院精神看護専門看護師
冨田　敦	復康会沼津中央病院看護係長
佐藤　雅美	精神医学研究所付属東京武蔵野病院精神看護専門看護師
山野　真弓	国立精神・神経医療研究センター病院作業療法士
山口しげ子	国立精神・神経医療研究センター病院看護師長
川畑　俊貴	京都府立洛南病院副院長
八田耕太郎	順天堂大学練馬病院医師（先任准教授）
松崎　朝樹	国立精神・神経医療研究センター病院医師
大舘　太郎	群馬県立精神医療センター医長
竹林　宏	埼玉県立精神医療センター部長(医師)
須藤　康彦	土佐病院院長
三澤　史斉	山梨県立北病院医師
下村裕見子	東京女子医科大学病院係長
大石　智	北里大学東病院副病棟長
藤田　純一	神奈川県立こども医療センター医長
鈴木友理子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所成人精神保健研究部室長
筧　淳夫	工学院大学建築学部教授

《発達障害早期総合支援研修》

平成 23 年 6 月 22 日から 6 月 24 日まで、第 6 回発達障害早期総合支援研修を実施し、「発達障害支援における早期発見の意義とその方法、地域における早期からの発達発見・支援の実際」を主題に、各自治体において、乳幼児健診に携わる医師および保健師で、発達障害支援について責任的立場にある者 50 名に対して研修を行った。

課程主任：神尾　陽子　　課程副主任：井口　英子

６月２２日（水）

発達障害者支援事業について	小林　真理子
自閉症スペクトラム児の早期診断とその意義：ライフステージの観点から	神尾　陽子
自閉症児の脳の発達：早期支援の観点から	橋本　俊顕
地域における自閉症スペクトラムの早期発見・早期支援	神尾　陽子

６月２３日（木）

乳幼児の対人コミュニケーション行動アセスメント実習Ⅰ	稲田　尚子
乳幼児の対人コミュニケーション行動アセスメント実習Ⅱ	黒田　美保
地域における発達障害の早期診断・早期療育と連携のあり方	高橋　脩
親の気づきのために：子どもの特性を親に伝える	辻井　弘美
ワークショップⅠ	平山　真美江

６月２４日（金）

自治体における乳幼児健診を活用した早期発見・早期支援システムづくり	瀬野　勝久
ワークショップⅡ	平林　恵美
ペアレント・トレーニングの実際	井上　雅彦

講師名簿

神尾　陽子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・思春期精神保健研究部部長
小林真理子	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課発達障害対策専門官
橋本　俊顕	徳島県赤十字ひのみね総合療育センターセンター長
稲田　尚子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・思春期精神保健研究部研究員
黒田　美保	淑徳大学総合福祉学部准教授
高橋　脩	豊田市こども発達センターセンター長
辻井　弘美	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・思春期精神保健研究部研究員
平山真美江	新居浜市地域福祉ネットワーク放課後クラブぴあ
新村　津代子	本巣市役所健康増進課課長補佐
瀬野　勝久	舞鶴市福祉部こども支援課
井上　雅彦	鳥取大学医学系研究科臨床心理学講座教授
平林　恵美	諏訪保健福祉事務所健康づくり支援課

≪心理職自殺予防研修≫

平成23年7月5日から7月6日まで、第2回心理職自殺予防研修を実施し、「自殺のアセスメントと基本的対応、関連する精神科診断、薬物療法の知識、ソーシャルワーク等の基礎知識の習得」を主題に、精神科医療機関等で働く心理職等、46名に対して研修を行った。

課程主任：川野　健治　　課程副主任：竹島　正・松本　俊彦・稲垣　正俊

7月5日（火）

自殺対策の基本	竹島　正
医療現場での連携のために（1）	
診断と薬物療法	稲垣　正俊
医療現場での連携のために（2）	
ケースワーク	明田　久美子
自殺のハイリスク者への対応	松本　俊彦
事後対応	勝又　陽太郎

7月6日（水）

パーソナリティ障害	遊佐　安一郎
臨床心理士の役割について	川野　健治・矢永　由里子

講師名簿

竹島　正	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センターセンター長
松本　俊彦	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター副センター長
川野　健治	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター室長
稲垣　正俊	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター室長
勝又　陽太郎	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター研究員
明田　久美子	川崎市精神保健福祉センター担当課長
遊佐　安一郎	長谷川メンタルヘルス研究所所長
矢永　由里子	慶応義塾大学医学部感染制御部特任助教

《発達障害支援医学研修》

平成 23 年 7 月 6 日から 7 月 7 日まで、第 11 回発達障害支援医学研修を実施し、「発達障害の診断・治療と支援の実際」を主題に、病院、保健所、発達障害支援センター等に勤務し発達障害に関心を有する医師、特に指導について責任的立場にある者 40 名に対して研修を行った。

課程主任：稲垣　真澄　　課程副主任：太田　英伸・軍司　敦子

７月６日（水）

厚生労働省における発達障害施策の紹介	小林　真理子
発達障害児・者の支援の考え方	宮本　信也
発達障害の二次障害へのサポート	齋藤　万比古
ＡＤＨＤ児の支援	井上　祐紀
自閉症スペクトラムの療育のあり方：医師として知っておくこと	本間　博彰

７月７日（木）

発達障害児をもつ親・保護者に対する支援	林　隆
千葉県の発達障害者支援の取り組み：保護者の立場からみて	大屋　滋
障害者就労支援の現状と今後の課題	田中　敦士
学習障害の診断と治療の現状	関　あゆみ
小児科クリニックで実践する発達障害児支援	平谷　美智夫

講師名簿

稲垣　真澄	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部部長
太田　英伸	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部室長
軍司　敦子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部室長
小林真理子	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課発達障害対策専門官
宮本　信也	筑波大学大学院人間総合科学研究科教授
齋藤万比古	国立国際医療研究センター国府台病院精神科部門診療部長
井上　祐紀	島田療育センターはちおうじ診療科長
本間　博彰	宮城県子ども総合センター所長
林　　隆	公立大学法人山口県立大学看護栄養学部教授
大屋　滋	旭中央病院脳神経外科部長
田中　敦士	琉球大学教育学部准教授
関　あゆみ	国立大学法人鳥取大学地域学部准教授
平谷美智夫	平谷こども発達クリニック院長

《精神保健指導課程研修》

平成23年7月13日から7月15日まで、第48回精神保健指導課程研修を実施し、「精神保健医療福祉の改革、自殺対策、地域精神保健福祉活動（コミュニティメンタルヘルス）の推進等、精神保健福祉行政の重要課題についての情報を総合的に提供するとともに、受講者間の相互交流を行う。」を主題に、都道府県（政令指定都市）等の精神保健福祉センター所長、精神保健福祉担当部署（本庁主管課、精神保健福祉センター及び保健所等）において指導的立場またはキーパーソン的役割を担う者、都道府県（政令指定都市）等の精神保健福祉に関する専門的検討会もしくは精神医療審査会委員等33名に対して研修を行った。

課程主任：竹島　正　　課程副主任：立森　久照

７月１３日（水）

精神保健福祉行政　　中谷　祐貴子
災害時のメンタルヘルス　　金　吉晴

７月１４日（木）

被災地支援における連携　　川野　健治・上原　久美・三輪　正敬
地域精神保健と医療観察法　　岡田　幸之・平林　直次

７月１５日（金）

地域からこころの医療を考える　　野口　正行
ワークショップ　　野口　正行・秋田　宏弥・竹島　正・立森　久照・川野　健治

講師名簿

竹島　正	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神保健計画研究部部長
立森　久照	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神保健計画研究部室長
中谷　祐貴子	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部精神・障害保健課課長補佐
金　吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所成人精神保健研究部部長
川野　健治	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所自殺予防総合対策センター室長
上原　久美	神奈川県立精神医療センターせりがや病院
三輪　正敬	災害鍼灸マッサージプロジェクト代表
岡田　幸之	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部部長
平林　直次	国立精神・神経医療研究センター病院リハビリテーション部部長
野口　正行	岡山県精神保健福祉センター副参事
秋田　宏弥	医療法人健生会明生病院精神科医師

≪不眠症の認知行動療法研修≫

平成 23 年 7 月 28 日から 7 月 29 日まで、第 2 回不眠症の認知行動療法研修を実施し、「原発性不眠症、うつ病に伴う不眠症に対する認知行動療法に必要な理論と基礎技量の習得」を主題に、医療機関に所属する医師、心理職、看護職等、実際に不眠治療に携わる医療従事者 49 名に対して研修を行った。

課程主任：三島　和夫

７月２８日（木）

不眠症総論	井上　雄一
不眠の自記式検査	岡島　義
不眠の認知行動療法総論	渡辺　範雄
睡眠日記	渡辺　範雄
睡眠衛生・睡眠環境	山寺　亘
不眠の集団認知行動療法	山寺　亘
リラクセーション	岡島　義

７月２９日（金）

随伴性マネジメント、認知療法	岡島　義
睡眠薬治療抵抗性の不眠症に対する認知行動療法	岡島　義
3 因子モデル	渡辺　範雄
睡眠スケジューリング	渡辺　範雄
再発予防	渡辺　範雄
うつ病不眠に対する短期睡眠行動療法	渡辺　範雄

講師名簿

渡辺　範雄	名古屋市立大学大学院医学研究科精神・認知・行動医学講師
岡島　義	東京医科大学睡眠学講座兼任助教
	（財）神経研究所附属睡眠学センター研究部研究員
	医療法人社団絹和会睡眠総合ケアクリニック代々木心理士
山寺　亘	東京慈恵会医科大学大学院医学研究科精神医学講座講師
井上　雄一	東京医科大学睡眠学講座教授
	（財）神経研究所附属睡眠学センターセンター長
	医療法人社団絹和会睡眠総合ケアクリニック代々木理事長

≪自殺総合対策企画研修≫

平成23年8月24日から8月26日まで、第5回自殺総合対策企画研修を実施し、「地方自治体における自殺対策の計画づくりの企画立案能力の向上」を主題に、都道府県（政令指定都市）等の精神保健福祉センター所長、精神保健福祉担当部署（本庁主管課、精神保健福祉センター及び保健所等）において指導的立場またはキーパーソン的役割を担う者101名に対して研修を行った。

課程主任：竹島　正　　課程副主任：松本　俊彦・川野　健治・稲垣　正俊

８月２４日（水）

自殺問題の捉え方	竹島　正
自殺と自殺予防：概要	稲垣　正俊
自殺対策の基本的考え方	高橋　祥友
わが国の自殺対策①	安部　雅俊
わが国の自殺対策②	荒川　亮介
受講者の自己紹介と意見交換	竹島　正

８月２５日（木）

世代別の自殺の特徴と自殺対策の方向	松本　俊彦
自殺予防活動とその評価	稲垣　正俊
地域における自殺対策	竹島　正・松本　俊彦・川野　健治・稲垣　正俊・勝又　陽太郎
自殺対策の推進体制（グループディスカッション）	山口　美紀

８月２６日（金）

取組事例紹介と意見交換	本間　直美・内田　祥子・守屋　法子・小林　敦子
地域に合った自殺対策の企画立案（グループディスカッション）	稲垣　正俊

講師名簿

竹島　正	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センターセンター長
松本　俊彦	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター副センター長
川野　健治	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター室長
稲垣　正俊	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター室長
勝又　陽太郎	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター研究員
高橋　祥友	防衛医科大学校防衛医学研究センター教授
安部　雅俊	内閣府自殺対策推進室参事官
荒川　亮介	厚生労働省精神・障害保健課心の健康づくり対策官
山口　美紀	長崎県福祉保健部障害福祉課課長補佐
本間　直美	新潟県福祉保健部障害福祉課いのちとこころの支援室主任
内田　祥子	船橋市役所健康福祉局健康部健康政策課技師
守屋　法子	山梨県立精神保健福祉センター副主幹
小林　敦子	仙台市精神保健福祉センター保健師

≪摂食障害治療研修≫

平成 23 年 8 月 30 日から 9 月 2 日まで、第 9 回摂食障害治療研修を実施し、「摂食障害の病態と治療に関する最新の知見」を主題に、病院、保健所、精神保健福祉センター等に勤務し、摂食障害に関心を有する医師、臨床心理士、精神保健福祉士、保健師 33 名に対して研修を行った。

課程主任：小牧　元　　課程副主任：安藤　哲也

８月３０日（火）

摂食障害病態・治療概論	小牧　元
精神障害・パーソナリティー障害を合併する摂食障害	永田　利彦
セルフヘルプ	武田　綾

８月３１日（水）

自傷行為と摂食障害	松本　俊彦
身体的合併症・身体的管理	鈴木(堀田)　眞理
小児の摂食障害	宇佐美　政英
摂食障害とアルコール・薬物などのアディクション	鈴木　健二

９月１日（木）

心理教育的グループ	伊藤　順一郎・小原　千郷
入院治療	瀧井　正人
症例検討	神谷　博章・尾崎　洋子

９月２日（金）

症例検討	瀧井　正人・神谷　博章・尾崎　洋子
認知行動療法	切池　信夫

講師名簿

小牧　元	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所心身医学研究部部長
安藤　哲也	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所心身医学研究部室長
永田　利彦	大阪市立大学大学院医学研究科神経精神医学准教授
武田　綾	NPO 法人のびの会相談室心理療法士
松本　俊彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
鈴木(堀田)眞理	政策研究大学院大学保健管理センター教授
宇佐美　政英	国立国際医療研究センター国府台病院児童精神科
鈴木　健二	鈴木メンタルクリニック院長
伊藤　順一郎	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部部長
小原　千郷	東京女子医科大学大病院臨床心理士
瀧井　正人	九州大学病院心療内科講師
神谷　博章	九州大学病院心療内科医員
尾崎　洋子	九州大学病院北棟９階１病棟看護師
切池　信夫	大阪市立大学神経精神医学教授

≪精神科医療従事者自殺予防研修≫

平成23年9月6日から9月7日まで、第3回精神科医療従事者自殺予防研修を実施し、「精神科医療における自殺予防の取組の充実」を主題に、医師を含む医療従事者43名に対して研修を行った。

課程主任：稲垣　正俊　　課程副主任：竹島　正・松本　俊彦・川野　健治

9月6日（火）

我が国の自殺及び自殺対策の実態	竹島　正
自殺と精神疾患	稲垣　正俊
自傷行為・過量服薬を繰り返す患者への対応	松本　俊彦
自殺が生じた後の対応	川野　健治

9月7日（水）

アルコール・薬物依存症の自殺予防	松本　俊彦
精神科病院における自殺のリスクとその予防	森　隆夫
事例から学ぶこと	佐藤　智幸
精神科医療における自殺とその予防（スモールグループディスカッション）	

佐藤　智幸・竹島　正・松本　俊彦・川野　健治・稲垣　正俊

講師名簿

竹島　正	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センターセンター長
松本　俊彦	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター副センター長
川野　健治	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター室長
稲垣　正俊	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター室長
森　隆夫	あいせい紀年病院理事長
佐藤　智幸	医療法人二本松会上山病院看護部看護師

《薬物依存臨床医師研修》　《薬物依存臨床看護等研修》

平成 23 年 9 月 13 日から 9 月 16 日まで、第 25 回薬物依存臨床医師研修ならびに第 13 回薬物依存臨床看護等研修を実施し、「薬物依存症概念の理解と薬物依存症に対する臨床的対応の普及」を主題に、精神科病院、精神保健福祉センター等に勤務する医師 20 名、看護師等 36 名に対して研修を行った。

課程主任：和田　清　　課程副主任：松本　俊彦・舩田　正彦

９月１３日（火）

「薬物依存に関する基礎知識」と「わが国の薬物乱用・依存の現状と課題」　和田　清
行動薬理学からみた薬物依存（精神依存、身体依存）　舩田　正彦
有機溶剤乱用・依存の現状と臨床　和田　清

９月１４日（水）

ベンゾジアゼピン系薬物の基礎と臨床　石郷岡　純
薬物依存症者に対する心理療法　森田　展彰
薬物関連精神障害者の司法的問題とその対応　松本　俊彦
覚せい剤依存・精神病の臨床　小林　桜児

９月１５日（木）

精神保健福祉センターにおける薬物依存への取り組み　五十嵐　雅美
【埼玉県立精神医療センターへ移動】病棟見学
医療施設における薬物依存の治療（医師）・（看護）　成瀬　暢也・井浦　澄子

９月１６日（金）

地域における薬物依存の治療：ダルクと治療共同体について　和田　清
薬物依存からの回復者による自助活動・ダルクの取り組み　栗坪　千明・栃原　晋太郎
大麻によって発現する動物の異常行動　三島　健一
覚せい剤精神疾患の生物学的病態　曽良　一郎

講師名簿

和田　清	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部部長
松本　俊彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
舩田　正彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
小林　桜児	国立精神・神経医療研究センター病院医師
石郷岡　純	東京女子医科大学医学部精神医学講座教授
森田　展彰	筑波大学大学院人間総合科学研究科講師
五十嵐雅美	東京都立精神保健福祉センターアウトリーチ係
成瀬　暢也	埼玉県立精神医療センター副病院長
井浦　澄子	埼玉県立精神医療センター第２病棟看護師長
栗坪　千明	栃木ダルク代表
栃原晋太郎	栃木ダルクスタッフ
三島　健一	福岡大学薬学部臨床疾患薬理学教室准教授
曽良　一郎	東北大学大学院医学系研究科神経・感覚器病態学講座教授

≪発達障害精神医療研修≫

平成 23 年 9 月 28 日から 9 月 30 日まで、第 4 回発達障害精神医療研修を実施し、「未診断の発達障害を抱える青年・成人患者の鑑別診断と処遇法に関する幅広い臨床ニーズに対応する最新の知見」を主題に、各自治体において、精神医療の中核となる機関（精神科病院、総合病院精神科、精神保健福祉センター等）に勤務する精神科医 36 名に対して研修を行った。

課程主任：神尾　陽子　　課程副主任：井口　英子

９月２８日（水）

成人期の発達障害の臨床的問題について	神尾　陽子
広汎性発達障害児・者の認知研究からわかること	神尾　陽子
発達障害者支援事業について	小林　真理子
発達障害とパーソナリティ	奥寺　崇

９月２９日（木）

発達障害成人の疫学	神尾　陽子
発達障害成人の脳画像研究からわかること	山末　英典
発達障害成人のデイケアの実際	横井　英樹
発達障害成人の診断と治療の実際	飯田　順三
発達障害を有する成人女性の臨床的諸問題	笠原　麻里

９月３０日（金）

精神科医療現場での広汎性発達障害の触法例	井口　英子
ひきこもり事例にみられる高機能広汎性発達障害の特徴	近藤　直司
成人期の広汎性発達障害の就労支援	梅永　雄二

講師名簿

神尾　陽子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・思春期精神保健研究部部長
井口　英子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・思春期精神保健研究部
小林真理子	厚生労働省社会･援護局障害保健福祉部精神･障害保健課発達障害対策専門官
奥寺　崇	クリニックおくでら院長
山末　英典	東京大学脳神経医学専攻臨床神経精神医学講座准教授
横井　英樹	昭和大学医学部附属烏山病院
飯田　順三	奈良県立医科大学精神医学講座教授
笠原　麻里	駒木野病院児童精神科診療部長
近藤　直司	山梨県都留児童相談所所長
梅永　雄二	宇都宮大学教育学部教授

≪ＰＴＳＤ認知行動療法基本研修≫

平成 23 年 10 月 5 日から 10 月 6 日まで、平成 23 年度 PTSD 認知行動療法基本研修を実施し、「PTSD の認知行動療法に関する臨床研修、理論と基本スキル研修」を主題に、「PTSD に対する認知行動療法の臨床的知識と基本技能の獲得、PE を応用した PTSD 臨床のスキル向上」を目的として、精神科等の医師、心理士、看護師、精神保健福祉士（5 年以上の臨床経験を有し、トラウマを有する患者の臨床に携わった経験のある者）50 名に対して研修を行った。

課程主任：金　吉晴

１０月５日（水）

ＰＥの概念と治療研究	金　吉晴
心理教育	金　吉晴
治療導入	金　吉晴・小林　由季
現実エクスポージャー	金　吉晴

１０月６日（木）

想像エクスポージャー①	金　吉晴
想像エクスポージャー②	金　吉晴
治療上の困難①	金　吉晴
治療上の困難②	金　吉晴

講師名簿

金　吉晴	国立精神・神経医療研究センター認知行動療法センター副センター長
小林　由季	国立精神・神経医療研究センター認知行動療法センター研究開発部研究員

≪司法精神医学研修≫

平成 23 年 10 月 12 日から 10 月 14 日まで、第 6 回司法精神医学研修を実施し、「重大な他害行為を行った精神障害者に対して評価と介入を提供するために必要となる基本的な知識と技能の習得」を主題に、指定医療機関や行刑施設、地域(保健所等)において精神医療に従事している医師、臨床心理技術者、看護師、精神保健福祉士等 54 名に対して研修を行った。

課程主任：岡田　幸之　　課程副主任：菊池　安希子・福井　裕輝・安藤　久美子

１０月１２日（水）

司法精神医学総論—歴史、制度	岡田　幸之
医療観察法の現状（入院）	長沼　洋一
医療観察法の現状（通院）	安藤　久美子
司法精神医療における薬物・アルコールの治療	松本　俊彦
司法精神医療における心理プログラム	今村　扶美

１０月１３日（木）

司法精神医療におけるソーシャルワーク	三澤　孝夫
司法精神医療における看護	山口　しげ子
司法精神医療における作業療法	三澤　剛
司法精神医療における認知行動療法（1）	菊池　安希子
司法精神医療における認知行動療法（2）	菊池　安希子

１０月１４日（金）

司法精神医学と認知神経科学	福井　裕輝
精神鑑定	岡田　幸之
司法精神医療におけるリスクアセスメント	安藤　久美子

講師名簿

岡田　幸之	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部部長
長沼　洋一	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部研究員
安藤　久美子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部室長
松本　俊彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
今村　扶美	国立精神・神経医療研究センター病院臨床心理士
三澤　孝夫	国立精神・神経医療研究センター病院精神保健福祉士
山口　しげ子	国立精神・神経医療研究センター病院看護師長
三澤　剛	国立精神・神経医療研究センター病院作業療法士
菊池　安希子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部室長
福井　裕輝	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部（成人精神保健研究部　室長）

≪アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修≫

平成 23 年 10 月 18 日から 10 月 21 日まで、第３回アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修を実施し、「アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練のスキル向上プログラム」を主題に、障害者自立支援法における社会福祉サービスの事業者、医療機関、市町村等に属する医療・社会福祉従事者 40 名に対して研修を行った。

課程主任：伊藤　順一郎　　課程副主任：吉田　光爾

１０月１８日（火）

ワールドカフェ「皆さんにとって、地域精神保健医療福祉のシステムとは」

武田　牧子・伊藤　順一郎・久永　文恵

多様性を持って地域で支える。マディソンモデル in US から学ぶ　久永　文恵

訪問による生活訓練を中心に日本の地域福祉を俯瞰する　武田　牧子

白衣を捨てよ、町に出よう： 医療が地域社会に出て行くとき・・ACT　伊藤　順一郎

１０月１９日（水）

障害を持つ人のリカバリーとは　久永　文恵

ストレングスモデルのケアプラン作り　佐藤　光正

家族支援　福井　里江

１０月２０日（木）

訪問活動のニーズと実際　遠藤　紫乃・吉田　光爾

ケアプランを地域で作るために　松尾　明子・遠藤　紫乃

認知行動療法と地域生活スキル　佐藤　さやか

１０月２１日（金）

訪問による生活訓練事業の運営の実際～市川市・鶴岡市の実践～　松尾　明子・佐原　和紀

講師名簿

伊藤　順一郎	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部部長
吉田　光爾	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部室長
佐藤　さやか	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部研究員
武田　牧子	社会福祉法人南高愛隣会東京事務所所長
久永　文恵	特定非営利活動法人地域精神保健福祉機構コンボ
佐藤　光正	駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻准教授
福井　里江	東京学芸大学教育学部教育心理学講座准教授
遠藤　紫乃	特定非営利活動法人ほっとハートほっとハートらいふ管理者
松尾　明子	特定非営利活動法人ほっとハート相談支援専門員
佐原　和紀	精神障害者地域生活支援センター翔（はばたき）相談支援専門員

《ＡＣＴ研修》

平成 23 年 10 月 18 日から 10 月 21 日まで、第９回ＡＣＴ研修を実施し、「包括型地域生活支援プログラム（ＡＣＴ）の定着のためのプログラム」を主題に、精神科医療機関、精神保健福祉センター、保健所、市町村、社会復帰施設等に勤務する医療従事者、40 名に対して研修を行った。

課程主任：伊藤　順一郎　　課程副主任：吉田　光爾

１０月１８日（火）

ワールドカフェ「皆さんにとって、地域精神保健医療福祉のシステムとは」

武田　牧子・伊藤　順一郎・久永　文恵

多様性を持って地域で支える。マディソンモデル in US から学ぶ　久永　文恵

訪問による生活訓練を中心に日本の地域福祉を俯瞰する　武田　牧子

白衣を捨てよ、町に出よう： 医療が地域社会に出て行くとき・・ACT　伊藤　順一郎

１０月１９日（水）

障害を持つ人のリカバリーとは　久永　文恵

ストレングスモデルのケアプラン作り　佐藤　光正

家族支援　福井　里江

１０月２０日（木）

就労支援の実際　樺島　沙織・大島　みどり・香田　真希子

ACT 支援の実際　山田　創・足立　千啓

医療のかかわりについて　佐竹　直子

１０月２１日（金）

“ACT の実際の組み立て方について－経営も含めて考える”

総論報告　伊藤　順一郎

指定討論１　福祉的サポートと医療との結合　武田　牧子

指定討論２　訪問看護ステーションからのたちあげ　原子　英樹

講師名簿

伊藤　順一郎	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部部長
吉田　光爾	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部室長
佐藤　さやか	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部研究員
武田　牧子	社会福祉法人南高愛隣会東京事務所所長
久永　文恵	特定非営利活動法人地域精神保健福祉機構コンボ
佐藤　光正	駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻准教授
福井　里江	東京学芸大学教育学部教育心理学講座准教授
樺島　沙織	特定非営利活動法人リカバリーサポートセンターＡＣＴＩＰＳ
大島みどり	障害者就職サポートセンタービルド
香田真希子	目白大学保健医療学部作業療法学科

山田　創　　ぴあクリニック
足立　千啓　　特定非営利活動法人リカバリーサポートセンターＡＣＴＩＰＳ
佐竹　直子　　国立国際医療研究センター国府台病院
原子　英樹　　特定非営利活動法人多摩在宅支援センター円　訪問看護ステーション元

≪自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修≫

平成23年11月8日から11月9日まで、第2回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修を実施し、「自傷を繰り返す者、あるいは、パーソナリティ障害を抱える者が自殺リスクの高い一群であることを理解し、適切に治療・対応できるようになること」を主題に、医療機関、自治体における相談業務従事者等192名に対して研修を行った。

課程主任：松本　俊彦　　課程副主任：竹島　正・川野　健治・稲垣　正俊

１１月８日（火）

自殺予防のためのパーソナリティ障害の理解と対応	林　直樹
自傷行為・過量服薬の理解と対応	松本　俊彦
摂食障害を伴うBPD患者の地域支援	武田　綾
事例検討：解離性障害を伴うパーソナリティ障害の援助	小林　桜児・若林　朝子・近藤　保代
若者の自傷予防プログラム（DVD視聴）	松本　俊彦

１１月９日（水）

境界性パーソナリティ障害に対する弁証法的行動療法	遊佐　安一郎
地域における女性の境界性パーソナリティ障害の支援	上岡　陽江
パーソナリティ障害の地域支援体制：オーストラリアでの取組例を参考に	勝又　陽太郎
家族の立場から	奥野　栄子

講師名簿

竹島　正	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センターセンター長
松本　俊彦	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター副センター長
川野　健治	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター室長
稲垣　正俊	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター室長
勝又　陽太郎	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター研究員
林　直樹	東京都立松沢病院部長
武田　綾	ＮＰＯ法人のびの会心理療法士
小林　桜児	国立精神・神経医療研究センター病院精神科医師
若林　朝子	国立精神・神経医療研究センター病院精神保健福祉士
近藤　保代	国立精神・神経医療研究センター病院外来副看護師長
遊佐　安一郎	長谷川メンタルヘルス研究所所長
上岡　陽江	ダルク女性ハウス代表
奥野　栄子	ＢＰＤ家族会代表

≪摂食障害看護研修≫

平成 23 年 10 月 26 日から 10 月 28 日まで、第８回摂食障害看護研修を実施し、「摂食障害の病態と治療に関する最新の知見」を主題に、精神科、心療内科、小児科、精神保健福祉センター等に勤務する看護師および保健師、作業療法士、精神保健福祉士等 52 名に対して研修を行った。

課程主任：小牧　元　　課程副主任：安藤　哲也

１０月２６日（水）

摂食障害の疫学･病態･治療概論	小牧　元
摂食障害の身体的合併症の管理	鈴木（堀田）眞理
心理教育的アプローチ	武田　綾

１０月２７日（木）

精神障害、パーソナリティ障害を合併する摂食障害	西園　マーハ文
栄養リハビリテーション	鈴木　知子
心療内科病棟における看護	浦川　由紀子・濱上　美穂
ケアとコミュニケーションのスキル	小原　千郷

１０月２８日（金）

摂食障害治療の基本	河合　啓介
重症の神経性無食欲症の入院治療と看護	行俊　可愛
小児科病棟における治療と看護	髙宮　静男・佐野　智子

講師名簿

小牧　元	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所心身医学研究部部長
安藤　哲也	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所心身医学研究部室長
鈴木(堀田)眞理	政策研究大学院大学保健管理センター教授
武田　綾	NPO 法人のびの会心理療法士
西園マーハ文	（財）東京都医学総合研究所臨床児童精神医学研究室室長
鈴木　知子	国立国際医療研究センター国府台病院臨床栄養管理部栄養係長
浦川　由紀子	国立国際医療研究センター国府台病院看護師長
濱上　美穂	国立国際医療研究センター国府台病院副看護師長
小原　千郷	東京女子医科大学病院臨床心理士
河合　啓介	国立大学法人九州大学病院心療内科講師
行俊　可愛	北里大学東病院看護部看護師
髙宮　静男	西神戸医療センター精神科部長
佐野　智子	西神戸医療センター小児病棟看護師

≪薬物依存症に対する認知行動療法研修≫

平成 23 年 11 月 15 日から 11 月 16 日まで、平成 23 年薬物依存症に対する認知行動療法研修を実施し、「薬物依存症者の臨床的特徴と治療に関するエビデンスを理解し、直面化を避けた動機づけ面接の重要性を理解し、ビデオ学習やデモセッションの見学を通じて、薬物依存症に対する集団認知行動療法のファシリテーションの実際を学ぶ」を主題に、医療機関、行政機関、司法機関、民間回復施設等で薬物依存症者の援助に従事している者 48 名に対して研修を行った。

課程主任：松本　俊彦　　課程副主任：和田　清

１１月１５日（火）

総論～薬物依存症の理解と援助	松本　俊彦
SMARPP～精神科医療機関での試み	小林　桜児
TAMARPP～精神保健福祉センターでの試み	近藤　あゆみ
医療観察法物質使用障害治療プログラム	今村　扶美

１１月１６日（水）

認知行動療法プログラムの立ち上げ方～保健機関における実例	嶋根　卓也
SMARPP ビデオ学習	松本　俊彦
デモセッション	松本　俊彦・小林　桜児・今村　扶美・嶋根　卓也
ディスカッション	松本　俊彦

講師名簿

和田　清	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部部長
松本　俊彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
嶋根　卓也	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部研究員
小林　桜児	国立精神・神経医療研究センター病院精神科医師
近藤　あゆみ	新潟医療福祉大学社会福祉学部社会福祉学科准教授
今村　扶美	国立精神・神経医療研究センター病院心理療法士

≪精神科医療従事者自殺予防研修≫

平成 23 年 11 月 29 日から 11 月 30 日まで、第４回精神科医療従事者自殺予防研修を実施し、「精神科医療における自殺予防の取組の充実」を主題に、医師を含む医療従事者 71 名に対して研修を行った。

課程主任：竹島　正　　課程副主任：松本　俊彦・川野　健治・稲垣　正俊

１１月２９日（火）

我が国の自殺及び自殺対策の実態	竹島　正・稲垣　正俊
自殺と精神疾患	稲垣　正俊
自傷行為・過量服薬を繰り返す患者への対応	松本　俊彦
自殺が生じたあとの対応	川野　健治

１１月３０日（水）

アルコール・薬物依存症の自殺予防	元　武俊
精神科病院における自殺のリスクとその予防	森　隆夫
事例から学ぶこと	赤松　拡
精神科医療における自殺とその予防（スモールグループディスカッション）	赤松　拡・中西　和紀

講師名簿

竹島　正	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センターセンター長
松本　俊彦	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター副センター長
川野　健治	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター室長
稲垣　正俊	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター室長
元　武俊	医療法人香流会紘仁病院精神科部長
森　隆夫	医療法人愛精会あいせい紀年病院理事長
赤松　拡	医療法人静心会桶狭間病院藤田こころケアセンター精神科医師
中西　和紀	医療法人愛精会あいせい紀年病院心理室長

≪犯罪被害者メンタルケア研修≫

平成24年1月16日から1月18日まで、第6回犯罪被害者メンタルケア研修を実施し、「犯罪被害者･遺族の心理についての基本的な知識、および臨床現場での適切な治療対応」を主題に、精神科医療機関、精神保健福祉センター、保健所、犯罪被害者支援関連機関に勤務する医療・臨床心理、福祉業務従事者等56名に対して研修を行った。

課程主任：金　吉晴　　課程副主任：中島　聡美

１月１６日（月）

犯罪被害者等基本法および基本計画における精神医療の役割	河原　誉子
警察による犯罪被害者支援	滝澤　依子
犯罪被害者と刑事司法	柑本　美和
犯罪被害者の心理（精神疾患を中心に）	中島　聡美

１月１７日（火）

犯罪被害者の声：犯罪被害者・遺族そして精神科医として	高橋　幸夫
犯罪被害者遺族の心理	白井　明美
ＤＶ被害者への対応	加茂　登志子
子どもの被害者への対応	白川　美也子

１月１８日（水）

ＰＴＳＤの治療	金　吉晴
犯罪被害者への治療対応	小西　聖子
犯罪被害者の事例提示	小西　聖子・中島　聡美
犯罪被害者治療の実際	小西　聖子・中島　聡美

講師名簿

金　吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所成人精神保健研究部部長
中島　聡美	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所成人精神保健研究部室長
河原　誉子	内閣府犯罪被害者等施策推進室参事官
滝澤　依子	警察庁長官官房給与厚生課犯罪被害者支援室室長
柑本　美和	東海大学大学院実務法学研究科准教授
高橋　幸夫	医療法人東浩会石川病院精神科医局部長
白井　明美	国際医療福祉大学大学院医療福祉学研究科講師
加茂　登志子	東京女子医大女性生涯健康センター所長
白川　美也子	昭和大学特別研究生
小西　聖子	武蔵野大学人間関係学部教授

《発達障害支援医学研修》

平成 24 年 2 月 8 日から 2 月 9 日まで、第 12 回発達障害支援医学研修を実施し、「発達障害児に対する医学的介入と社会心理学的支援の実際」を主題に、病院、保健所、発達障害支援センター等に勤務し、発達障害に関心を有する医師、特に指導について責任的立場にある者 34 名に対して研修を行った。

課程主任：稲垣　真澄　　課程副主任：太田　英伸・軍司　敦子

２月８日（水）

厚生労働省における発達障害施策の紹介	小林　真理子
発達障害児における向精神薬の使い方	宇佐美　政英
司法精神医学と発達障害	岡田　幸之
現場の医師が知っておきたい心理検査：理論編・実習編	後藤　隆章

２月９日（木）

成人期自閉症スペクトラムの支援	高橋　和俊
発達性協調運動障害の診断	中井　昭夫
発達障害の疫学研究～レビューと進行中の調査	栗山　進一
発達障害のある大学生の支援―ＡＤＨＤコーチングを含めて	篠田　晴男

講師名簿

稲垣　真澄	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部部長
太田　英伸	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部室長
軍司　敦子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部室長
小林　真理子	厚生労働省社会･援護局障害保健福祉部発達障害対策専門官
宇佐美　政英	国立国際医療研究センター国府台病院児童精神科医師
岡田　幸之	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部部長
後藤　隆章	富士常葉大学保育学部助教
高橋　和俊	おしま地域療育センター所長
中井　昭夫	福井大学大学院医学系研究科附属子どもの発達研究センター特命准教授
栗山　進一	東北大学大学院医学系研究科環境遺伝医学総合研究センター教授
篠田　晴男	立正大学心理学部臨床心理学科教授

研修の推移

	国立精神衛生研究所			
	36年6月～		54年度～	61年度
研修課程	・医学科研修 ・心理学科研修 ・社会福祉学科研修 ・精神衛生指導科研修	→	・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神衛生指導課程研修 ・精神科ﾃﾞｲ・ｹｱ課程研修	・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神衛生指導課程研修 ・精神科ﾃﾞｲ・ｹｱ課程研修

	国立精神・神経センター精神保健研究所					
	61年度		62年度～	18年度～	20年度	21年度
研修課程	・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神衛生指導課程研修 ・精神科ﾃﾞｲ・ｹｱ課程研修	→ →	・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神保健指導過程研修 ・精神科ﾃﾞｲ・ｹｱ課程研修	・精神保健指導過程研修 ・精神科ﾃﾞｲ・ｹｱ課程研修 ・発達障害支援課程研修 ・摂食障害治療課程研修 ・社会復帰ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ研修 ・ACT研修 ・薬物依存臨床課程研修 ・児童思春期精神医学研修 ・司法精神医学課程研修 ・犯罪被害者ﾒﾝﾀﾙｹｱ研修	・自殺総合対策企画研修 ・地域自殺対策支援研修 ・心理職等自殺対策研修 ・自殺対策相談支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・発達障害支援医学研修 ・発達障害精神医療研修 ・摂食障害治療研修 ・摂食障害看護研修 ・社会復帰ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ研修 ・薬物依存臨床看護研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・PTSD精神療法研修 ・犯罪被害者ﾒﾝﾀﾙｹｱ研修 ・司法精神医学研修 ・ACT研修	・自殺総合対策企画研修 ・地域自殺対策支援研修 ・心理職等自殺対策研修 ・自殺対策相談支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・発達障害支援医学研修 ・発達障害精神医療研修 ・摂食障害治療研修 ・摂食障害看護研修 ・社会復帰ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ研修 ・薬物依存臨床看護研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・PTSD精神療法研修 ・犯罪被害者ﾒﾝﾀﾙｹｱ研修 ・司法精神医学研修 ・ACT研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修

	独立行政法人　国立精神・神経医療研究センター　精神保健研究所	
	22年度	23年度
研修課程	・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・司法精神医学研修 ・PTSD医療研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・発達障害精神医療研修 ・ｱｳﾄﾘｰﾁによる地域ｹｱﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ並びに訪問型生活訓練研修 ・自殺予防のための自傷行為とﾊﾟｰｿﾅﾘﾃｨ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・ACT研修	・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・精神保健指導課程研修 ・不眠症の認知行動療法研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・PTSD認知行動療法基本研修 ・司法精神医学研修 ・ｱｳﾄﾘｰﾁによる地域ｹｱﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ並びに訪問型生活訓練研修 ・ACT研修 ・自殺予防のための自傷行為とﾊﾟｰｿﾅﾘﾃｨ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修

平成23年度精神保健に関する技術研修課程実施計画表

→ 当センターの受付期間　▩ 研修期間

課程名	定員	23年3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	24年1月	2月	3月	主任 副主任	会場	受講料
（第5回） 精神科医療評価・均てん化研修	30		受付締切5/6(金)		13(月) 14(火)										伊藤 弘人 野田 寿恵	小平市	¥18,000
（第6回） 発達障害早期総合支援研修	50		受付締切5/6(金)		22(水) 24(金)										神尾 陽子 井口 英子	港区	無料
（第2回） 心理職自殺予防研修	80		受付期間4/28(木)～5/20(金)			5(火) 6(水)									川野健治 竹島 正 松本俊彦 稲垣正俊	府中市（東京）	無料
（第11回） 発達障害支援医学研修	60		受付締切5/20(金)			6(水) 7(木)									稲垣 真澄 太田 英伸 軍司 敦子	名古屋市	無料
（第48回） 精神保健指導課程研修	60		受付締切5/27(金)			13(水) 15(金)									竹島 正 立森 久照	小平市	¥30,000
（第5回） 自殺総合対策企画研修	100			受付期間6/16(木)～7/7(木)			24(水) 26(金)								竹島 正 松本 俊彦 川野 健治 稲垣 正俊	府中市（東京）	¥15,000
（第9回） 摂食障害治療研修	40				受付締切7/13(水)		30(火)	2(金)							小牧 元 安藤 哲也	小平市	¥24,000
（第3回） 精神科医療従事者自殺予防研修	80			受付期間6/29(水)～7/20(水)				6(火) 7(水)							稲垣正俊 竹島正 松本俊彦 川野健治	府中市（東京）	無料
（第25回） 薬物依存臨床医師研修 （第13回） 薬物依存臨床看護等研修	30 40				受付締切7/27(水)			13(火) 16(金)							和田 清 松本 俊彦 舩田 正彦	小平市	¥24,000
（第4回） 発達障害精神医療研修	70					受付締切8/11(木)		28(水) 30(金)							神尾 陽子 井口 英子	千代田区	無料
（第6回） 司法精神医学研修	70					受付締切8/25(木)			12(水) 14(金)						岡田 幸之 菊池 安希子 福井 裕輝 安藤 久美子	小平市	¥10,000
（第3回） アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに （第9回） ACT研修	40 40					受付締切9/1(木)			18(火) 21(金)						伊藤 順一郎 吉田光爾	小平市	¥20,000
（第2回） 自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修	80						受付期間8/30(火)～9/20(火)			8(火) 9(水)					松本俊彦 竹島正 川野健治 稲垣正俊	府中市（東京）	無料
（第8回） 摂食障害看護研修	30						受付締切9/2(金)		26(水) 28(金)						小牧 元 安藤 哲也	小平市	¥18,000
（第4回） 精神科医療従事者自殺予防研修	80						受付期間9/22(木)～10/13(木)			29(火) 30(水)					竹島正 松本俊彦 川野健治 稲垣正俊	名古屋市	無料
（第6回） 犯罪被害者メンタルケア研修	40								受付締切11/18(金)			16(月) 18(水)			金 吉晴 中島 聡美	小平市	¥15,000
（第12回） 発達障害支援医学研修	60									受付締切12/15(木)			8(水) 9(木)		稲垣 真澄 太田 英伸 軍司 敦子	小平市	無料

国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所
平成 23 年度　研究報告会
(第 23 回)

プログラム・抄録集

平成 24 年 2 月 27 日(月)

国立精神・神経医療研究センター

研究所 3 号館　セミナー室

平成 22 年度精神保健研究所報告会　受賞者名

青申賞

- 栗山健一（成人精神保健研究部）

「ヒトの恐怖出来事記憶の想起特性―PTSD 発症予防策としての睡眠強制剥奪の有効性の検討―」

- 舩田正彦（薬物依存研究部）

「合成カンナビノイドの薬物依存性および細胞毒性評価」

寒露賞

- 高橋 弘（精神薬理研究部）

「単離アストロサイトにおける Ndrg2 のグルココルチコイドによる発現誘導機構の解明」

- 富山健一（薬物依存研究部）

「合成カンナビノイド誘導体の細胞毒性発現機構の解明」

平成23年度　国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所　研究報告会

会期：平成24年2月27日(月)

会場：国立精神・神経医療研究センター　研究所３号館セミナー室

日程：

	９：００～	９：１０	開会の辞　ご挨拶
【セッションⅠ】	９：１０～	９：４０	演題１　知的障害研究部
	９：４０～	１０：１０	演題２　精神生理研究部
	１０：１０～	１０：４０	演題３　児童・思春期精神保健研究部
＊休憩＊	１０：４０～	１０：５５	
【セッションⅡ】	１０：５５～	１１：２５	演題４　精神薬理研究部
	１１：２５～	１１：５５	演題５　社会復帰研究部
	１１：５５～	１２：２５	演題６　成人精神保健研究部
	１２：２５～	１２：４０	写真撮影・連絡
	１２：４０～	１３：４０	昼食
【セッションⅢ】	１３：４０～	１４：１０	演題７　司法精神医学研究部
	１４：１０～	１４：４０	演題８　精神保健計画研究部
	１４：４０～	１５：１０	演題９　自殺予防総合対策センター
＊休憩＊	１５：１０～	１５：２５	
【セッションⅣ】	１５：２５～	１５：５５	演題１０　心身医学研究部
	１５：５５～	１６：２５	演題１１　社会精神保健研究部
	１６：２５～	１６：５５	演題１２　薬物依存研究部
	１６：５５～	１７：００	講評・閉会の辞
	〈　後片付け・評価検討　〉		
	１８：３０～	２０：００	懇親会・表彰式（コスモホール）
	（１８：００開場）		

平成23年度　精神保健研究所リサーチ委員会
伊藤順一郎　堀口寿広　太田英伸　中島聡美　高橋秀俊　勝又陽太郎

お知らせとお願い

＜口頭発表の皆様へ＞

1. 発表スライド原稿は、2 月 23 日（木）11 時までに horigti@ncnp.go.jp（社会精神保健研究部・堀口）宛に電子メールの添付ファイルにてご提出ください。各部 1 ファイルにまとめて、部長からご送付ください。サイズが大きい場合は CD 等に入れてご提出ください。リサーチ委員会による動作確認が必要ですので〆切厳守でお願いいたします。24 日（金）13 時より会場にて動作のご確認をいただけます。
2. **※重要：**円滑な進行を目的として、リサーチ委員会で用意する Windows マシン（Office 2007 対応）を使用いたします。発表者の持参機、Macintosh マシンとの切り替え作業は行いません。Windows 版 Office でのスライド原稿作成をお願いいたします。
3. 座長は各部長先生にお願いいたします。質疑込み 29 分での運営をお願いいたします。持ち時間で、各部で実施されている研究課題についてご発表を行っていただきます。スケジュールが非常にタイトですので、時間厳守でお願いします。
4. タイムキーパー、照明は、セッションごとにリサーチ委員の所属する部からのご協力をお願いいたします。
5. 次の座長、発表者は最前列にご着席になり、お待ちください。

＜お願い＞ 午前中の発表が終了した段階（12:25～）で、会場で記念写真撮影を行います。若手研究者の皆様には、テーブルや椅子、機材等の移動等のお手伝いをお願いいたします。

平成23年度　精神保健研究所　研究報告会　プログラム

9：00-9：10　開会の辞　リサーチ委員会

ご挨拶　国立精神・神経医療研究センター　総長　樋口 輝彦

精神保健研究所　所長　加我 牧子

<< 発表 >>

9：10- 9：40 知的障害研究部　座長 稲垣真澄

1：新生児集中治療室における光環境デザイン

○太田英伸，関 美佳，戸田宜子，李 珩，刑部仁美，加我牧子，稲垣真澄　知的障害研究部

2：自閉症スペクトラム障害児における顔識別時脳波の事象関連オシレーション解析

○崎原ことえ[1)]，軍司敦子[1)]，井上祐紀[2)]，北 洋輔[1),3)]，加我牧子[1)]，稲垣真澄[1)]

1) 知的障害研究部　2) 島田療育センターはちおうじ　3) 日本学術振興会特別研究員

3：不安様行動における CCKA /CCKB 受容体の異なる役割を皮質脳波を指標として明らかにする

○李 珩，太田英伸，刑部仁美，関 美佳，戸田宜子，松田芳樹，加我牧子，稲垣真澄

知的障害研究部

9：40-10：10 精神生理研究部　座長 三島和夫

1：生体組織を利用したヒト生物時計機能評価－概日リズム睡眠障害患者への応用－

○肥田昌子[1)]，北村真吾[1)]，大澤要介[1)]，榎本みのり[1)]，片寄泰子[1)]，野崎健太郎[1)]，元村裕貴[1)]，寺澤悠理[1)]，大場健太郎[1)]，加藤美恵[1)]，塚田恵鯉子[1),2)]，守口善也[1)]，亀井雄一[1),3)]，後藤雄一[4)]，池田正明[5)]，三島和夫[1)]

1) 精神生理研究部　2) センター病院精神科　3) センター病院臨床検査部，4) 疾病研究二部

5) 埼玉医科大学生理学講座

2：短時間睡眠による睡眠負債が情動に関する脳機能に及ぼす影響

○元村祐貴[1)]，大場健太郎[1)]，寺澤悠理[1)]，片寄泰子[1)]，北村真吾[1)]，榎本みのり[1)]，守口善也[1)]，樋口重和[2)]，三島和夫[1)]

1) 精神生理研究部　2) 九州大学芸術工学研究院

3：鎮静性抗ヒスタミン薬の就寝前投与が翌日の精神運動機能に及ぼす影響

○片寄泰子[1)]，有竹清夏[2)]，北村真吾[1)]，榎本みのり[1)]，肥田昌子[1)]，守口善也[1)]，高橋清久[3)]，三島和夫[1)]

1) 精神生理研究部　2) 東京医科大学　睡眠学講座　3) 精神・神経科学振興財団

10：10-10：40 児童・思春期精神保健研究部　座長 神尾陽子

1：日本人の自閉症スペクトラム児における聴覚性驚愕反射に関する研究

○高橋秀俊，中鉢貴行，井口英子，森脇愛子，稲田尚子，武井麗子，神尾陽子

児童・思春期精神保健研究部

2：日本の乳幼児健診における M-CHAT を用いた自閉症スペクトラム障害の早期発見についての検討

○稲田尚子，神尾陽子　児童・思春期精神保健研究部

3：一般児童・生徒のメンタルヘルスに及ぼす自閉症的行動特徴の影響

○森脇愛子，神尾陽子　児童・思春期精神保健研究部

10：55-11：25 精神薬理研究部　座長 山田光彦

1：新規に合成された選択的δオピオイド受容体作動薬 KNT127 はラットにおいて抗不安様作用を示す

○斎藤顕宜[1)]，杉山 梓[1),3)]，山田美佐[1)]，稲垣正俊[1),2)]，橋本富男[1)]，藤井秀明[4)]，岩井孝志[1),4)]，岡 淳一郎[3)]，長瀬 博[4)]，山田光彦[1)]

1) 精神薬理研究部　2) 自殺予防総合対策センター　3) 東京理科大学薬学部薬理学教室

4) 北里大学薬学部生命薬化学研究室

2：抗うつ薬関連遺伝子 Rhotekin は神経分化を促進する

○岩井孝志[1),3)]，斎藤顕宜[1)]，山田美佐[1)]，高橋 弘[1)]，橋本富男[1)]，橋本恵理[2)]，鵜飼 渉[2)]，
齋藤利和[2)]，山田光彦[1)]

1) 精神薬理研究部　2) 札幌医科大学医学部神経精神医学教室　3) 北里大学薬学部生命薬化学研究室

3：マウス成体海馬歯状回腹側部/背側部における遺伝子発現定量法の確立

○牧野祐哉[1),2)]，山田美佐[1)]，斎藤顕宜[1)]，杉山 梓[1),2)]，大橋正誠[1),2)]，橋本富男[1)]，稲垣正俊[1),3)]，
山田光彦[1)]

1) 精神薬理研究部　2) 東京理科大学薬学部薬理学教室　3) 自殺予防総合対策センター

11：25-11：55 社会復帰研究部　　座長　伊藤順一郎

1：認知機能リハビリテーションと援助つき雇用の組み合わせが精神障がい者の臨床および雇用関連指標に与える影響

○佐藤さやか[1)]，岩田和彦[2)]，古川俊一[3)]，安西信雄[1)]，伊藤順一郎[1)]，後藤雅博[4)]，丹羽真一[5)]，
伊藤憲治[6)]，亀田弘之[7)]，池淵恵美[8)]

1) 社会復帰研究部　2) 大阪府立精神医療センター　3) 東京大学病院リハビリテーション部
4) 新潟大学医学部保健学科　5) 福島県立医科大学神経精神医学教室
6) 東京電機大学 情報環境学部・先端工学研究所　7) 東京工科大学コンピュータサイエンス学部
8) 帝京大学医学部精神科学教室

2：ACT・訪問看護・デイケアのサービスのアウトカム縦断調査

○高原優美子[1)]，吉田光爾[1)]，瀬戸屋雄太郎[1)]，英 一也[1)]，園 環樹[1)]，保坂聡年[1)]，
萱間真美[2)]，伊藤順一郎[1)]

1) 社会復帰研究部　2) 聖路加看護大学 看護学部

3：大学生における精神障害者に対するスティグマティゼーションの是正を図る教育的介入の効果：システマティック・レビュー

○山口創生[1)], Shu-I Wu[2)], Milly Biswas[3)], Madinah Yate[3)], Yuta Aoki[3)], Elizabeth A Barley[3)] ,
Graham Thornicroft[3)]

1) 社会復帰研究部　2) Mackay Medicine Nursing and Management College, Taiwan
3) Institute of Psychiatry, King’s College London, UK

11：55-12：25 成人精神保健研究部　　座長　金 吉晴

1：ω3 系脂肪酸による PTSD 予防への挑戦

○松岡 豊[1,2,3,4)]，西 大輔[2,3)]，米本直裕[3,4)]，浜崎 景[3,5)]，橋本謙二[3,6)]，浜崎智仁[3,5)]

1) 成人精神保健研究部　2) 災害医療センター精神科　3) JST/CREST　4) TMC 情報管理・解析部
5) 富山大学　6) 千葉大学

2：巨大地震が平衡感覚機能に与える影響

○本間元康[1,2)]，栗山健一[1)]，長田佳久[2)]，遠藤信貴[3)]，金 吉晴[1)]

1) 成人精神保健研究部　2) 立教大学現代心理学部　3) 近畿大学総合社会学部

3：日本人遺族に対する複雑性悲嘆治療：予備的報告

○伊藤正哉[1)]，中島聡美[1)]，白井明美[2)]，小西聖子[3)]，金 吉晴[1)]，Ketherine M. Shear[4)]

1) 成人精神保健研究部　2) 国際医療福祉大学　3) 武蔵野大学　4) Columbia University

13：40-14：10 司法精神医学研究部　　座長　岡田幸之

1：医療観察法モニタリング研究から見た入院処遇対象者の特徴

○菊池安希子[1)]，長沼洋一[1)]，八木 深[2)]，平林直次[3)]，佐野雅隆[4)]，安藤久美子[1)]，岡田幸之[1)]

1) 司法精神医学研究部　2) 国立病院機構東尾張病院　3) 国立精神・神経医療研究センター病院

4) 早稲田大学大学院

2：サイコパス傾向にみられる近視眼性に関する研究

○西中宏吏[1)]，高橋泰城[2)]，福井裕輝[1)]

1) 司法精神医学研究部　2) 北海道大学大学院文学研究科行動システム科学専攻

3：殺人を行った統合失調症患者の治療・リハビリテーションへの参加に関する調査

入院患者自身の視点に着目して

○小松容子[1)]，Lovell Karina[2)]，Baker A. John[2)]

1) 司法精神医学研究部　2) The University of Manchester

14：10-14：40 精神保健計画研究部　　座長　竹島 正

1：精神科病院の在院患者数等の年次推移

○立森久照[1)]，河野稔明[1)]，廣川聖子[1)]，趙 香花[1)]，赤澤正人[1)]，長沼洋一[2)]，竹島 正[1)]

1) 精神保健計画研究部　2) 司法精神医学研究部

2：医療保護入院制度の運用実態に関する調査

○趙 香花[1)]，長沼洋一[2)]，堀井茂男[3)]，野口正行[4)]，河野稔明[1)]，立森久照[1)]，白石弘巳[5)]，竹島 正[1)]

1) 精神保健計画研究部　2) 司法精神医学研究部　3) 岡山県精神科病院協会/慈圭病院

4) 岡山県精神保健福祉センター　5) 東洋大学ライフデザイン学部生活支援学科

3：精神科訪問看護の有効活用に関する研究

○廣川聖子[1)2)]，萱間真美[3)]，角田 秋[3)]，大熊恵子[2)]，林 亜希子[4)]，瀬戸屋 希[5)]，竹島 正[1)]

1) 聖路加看護大学　2) 聖路加看護大学大学院博士課程　3) 精神保健計画研究部　4) 覚王山メンタルクリニック

5) 前 聖路加看護大学

14：40-15：10 自殺予防総合対策センター　　座長 竹島 正

1：自死遺族支援グループの評価に関する研究

○川野健治[1)]，白神敬介[1)]，伊藤真人[2)]，川島大輔[3)]，桑原 寛[4)]，白川教人[5)]，杉本脩子[6)]，鈴木志麻子[7)]

1) 自殺予防総合対策センター　2) 川崎市精神保健福祉センター　3) 北海道教育大学

4) 神奈川県精神保健福祉センター　5) 横浜市こころの健康相談センター

6) 全国自死遺族総合支援センター　7) 相模原市精神保健福祉センター

2：都道府県・政令指定都市における自殺対策の取組

○大槻露華，稲垣正俊，川野健治，勝又陽太郎，松本俊彦，竹島 正　　自殺予防総合対策センター

3：千葉県船橋市における自殺企図の実態：市消防局救急課の救急活動記録の分析

○山内貴史[1)]，高橋恵美子[2)]，内田祥子[3)]，友久保智子[3)]，竹島 正[1)]

1) 自殺予防総合対策センター　2) 船橋市消防局　救急課　3) 船橋市役所　健康福祉局健康部　健康政策課

15：25-15：55 心身医学研究部　　座長　安西哲也

1：女子大学生のダイエット経験者および気晴らし喰い経験者の心理的・身体的特徴

○安藤哲也[1)]，東風谷祐子[2)]，市丸雄平[2)]，兒玉直樹[1)]，菊地裕絵[1)]，小牧 元[1)]

1) 心身医学研究部　2) 東京家政大学家政学部栄養学科

2：The 20–item Toronto Alexithymia Scale（TAS–20）でとらえるアレキシサイミアのパーソナリティに基づく検討

○上野真弓[1)]，菊地裕絵[1)]，安藤哲也[1)]，守口善也[2)]，前田基成[3)]，小牧 元[1)]

1) 心身医学研究部　2) 精神生理研究部　3) 女子美術大学　芸術学部

15：55-16：25 社会精神保健研究部　　座長　伊藤弘人

1：隔離室入室期間の人的資源投入とそのコスト調査

○野田寿恵[1)]，泉田信行[2)]，杉山直也[1,3)]，平田豊明[1,3)]，伊藤弘人[1)]

1) 社会精神保健研究部　2) 国立社会保障・人口問題研究所　3) 日本精神科救急学会

2：国立精神・神経医療研究センター病院における eCODO を用いた行動制限施行日数と患者特性との関連

○佐藤真希子[1)]，野田寿恵[1)]，小宅比佐子[2)]，坂下利香[2)]，川内健三[2)]，緒方正道[2)]，児野愛未[2)]，篠村純子[2)]，大柄昭子[2)]，岸 清次[2)]，久保田みち子[2)]，等々力信子[2)]，森田宏子[2)]，山口しげ子[2)]，安西信雄[2)]，伊藤弘人[1)]

1) 社会精神保健研究部　2) 国立精神・神経医療研究センター病院

3：抗精神病薬の心毒性に関する報告の分析

○池野 敬[1)]，石黒智恵子[2)]，奥村泰之[1)]，伊藤弘人[1)]

1) 社会精神保健研究部　2) 医薬品医療機器総合機構 安全第一部 調査分析課・薬剤疫学課

16：25-16：55 薬物依存研究部　　座長　和田 清

1：鎮静剤（主にベンゾジアゼピン系薬剤）関連障害の実態と臨床的特徴に関する研究

○松本俊彦[1)]，尾崎 茂[2)]，嶋根卓也[1)]，小林桜児[1),3)]，和田 清[1)]

1) 薬物依存研究部　2) 東京医療生活協同組合 中野総合病院 精神神経科

3) 独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 病院

2：地域の中学生を対象とした飲酒･喫煙･薬物乱用についての実態調査

○小堀栄子[1)]，嶋根卓也[1)]，和田 清[1)]，仁木敦子[2),3)]，今野弘規[3)]，森脇 俊[2)]，磯 博康[3)]

1) 薬物依存研究部　2) 大阪府豊中保健所　3) 大阪大学大学院医学系研究科公衆衛生学

3：合成カンナビノイド誘導体 CP-55,940 の細胞死誘導機序の解明

○富山健一，舩田正彦，和田 清　　薬物依存研究部

16：55-17：00　　講評　　企画戦略室長　藤崎清道

閉会の辞　　リサーチ委員会

18：30-20：00　　懇親会・表彰式（コスモホール）

口頭発表

抄録

知的障害研究部

新生児集中治療室における光環境デザイン

○太田英伸, 関 美佳, 戸田宜子, 李 珩, 刑部仁美, 加我牧子, 稲垣真澄
知的障害研究部

1）早産児と軽～中等度の運動障害・精神神経発達遅滞・学習障害　出生率の低下にも係らず日本の早産児出生は増加傾向にあり、毎年約 10 万人(年間総出生数の約 9%)の低出生体重児（出生体重 2,500g 未満）が生まれている。その原因として妊婦の過剰なダイエット・喫煙、そして高齢化に伴う妊娠合併症の増加が指摘され、今後も早産の増加が予想される。出生体重 1,000g 未満の早産児の新生児集中治療室（NICU）への入院期間は平均 3 カ月に渡り、従来の救命医療に加え、成長障害を予防する人工保育環境の科学的な設計・開発が現在の重要な課題である。退院時の診察・画像診断にて明らかな神経障害の所見を認めない早産児においても、発達の過程で軽～中等度の運動障害・精神神経発達遅滞・学習障害が高頻度で観察される。しかし早産児の QOL に大きく影響するこの早産児発達遅滞に対する実態調査及び治療法の開発は現在十分に進んでいない。

2）光環境と早産児の発達　そこで問題解決の一つの切り口として、私達は保育環境の整備、特に光環境に着目し探索的臨床研究を開始した。早産児は妊娠 28 週から光を認知し（Hao et al. PNAS 1999）常に明るい光環境（恒明環境）が児の身体発育を妨げ、明暗サイクルのある光環境（明暗環境）が発育を促すことが知られている（Mann et al. BMJ 1986; Brandon et al. J Pediatr 2002）。また NICU の不規則な光環境が精神・神経発達に影響する可能性も指摘されている（Mirmiran & Ariagno, Semin Perinatol 2000; Ohta et al., Nat Neurosci 2005 ; Ohta et al., Pediatr Res 2006）。このメカニズム解明のため視覚特性を調べたところ、早産児の眼球においてはロドプシン・コーンオプシンといった従来の光受容体は十分に機能せず、近年発見された光受容体「メラノプシン」が光情報を処理することを確認した（Hanita et al., J Pediatr 2009）。

3）昼夜差のある光環境（明暗環境）の NICU への導入　しかし、救命医療を行う NICU では治療目的の夜間照明が必要であり、早産児の発達に適切な明暗環境を選ぶのか、医療行為に適切な恒明環境を選ぶのか、ジレンマが存在する。そこで、本研究では、「メラノプシン」の光特性を利用して、成人である医療スタッフは保育器内を観察できる一方で、保育器内の早産児が光を知覚できない特殊な光フィルターを開発した（特許第 4463177 号 2010; 実願第 3168392 号 2011）。この光フィルターを夜間保育器カバーとして装着し、保育器内に人工昼夜を導入したところ、出生体重 1,000g 以上 1,500g 未満の極低出生体重児において睡眠発達および身体発育に有意な効果を認めた。

参考文献・知的財産：

○Ohta H, Yamazaki S, McMahon DG. Constant light desynchronizes mammalian clock neurons. Nature Neuroscience. 2005; 8:267-269.
○Ohta H, Mitchell A, McMahon DG. Constant light disrupts the developing mouse biological clock. Pediatric Research. 2006; 60 :304-308.
○Hanita T, Ohta H, Matsuda T, Miyazawa H. Monitoring preterm infants' vision development with light - only melanopsin is functional. Journal of Pediatrics 2009; 155:596.
○太田英伸. 特許第 4463177 号「保育器フード用カバー」
○太田英伸、株式会社ルケオ. 実願第 3168392 号「ハロゲンランプ及び新生児用の照明器具」

知的障害研究部

自閉症スペクトラム障害児における顔識別時脳波の事象関連オシレーション解析

○崎原ことえ [1)], 軍司敦子 [1)], 井上祐紀 [2)], 北 洋輔 [1,3)], 加我牧子 [1)], 稲垣真澄 [1)]
1) 知的障害研究部　2) 島田療育センターはちおうじ　3) 日本学術振興会特別研究員

【目的】自閉症スペクトラム障害児（ASD 児）は自他識別の脆弱性が示唆されており，その神経基盤は顔画像の弁別課題で認められる脳波を用いて検証されつつある．P300 成分は複数の周波数成分で構成された反応であり，いずれの周波数成分が自他識別および顔の識別に関与しているか不明である．本研究では ASD 児における自己顔・他者顔認知に関する P300 成分の周波数特性を明らかにすることを目的とした．

【方法】定型発達（TD）男児 11 名と ASD 男児 14 名（7～12 歳）を対象に，自己顔、他者顔，物画像を標的画像としてオドボール課題を実施した．被検児が標的刺激に対してキー押しを行っているときの頭皮上脳波について，脳波データを MBFA（Gram 社）により 5－45Hz（θ～γ 帯域）の周波数帯域での時間周波数解析を行った．各周波数帯域について，画像呈示前 100ms をベースラインとして画像呈示後 800ms の周波数パワーの増加を事象関連同期反応（ERS 反応）として検討した．

【結果】TD 児ではα帯域の ERS パワーは自己顔に対して他者顔より有意に増加した（$p<0.01$）．θ帯域の ERS パワーは物画像で顔画像よりも有意に増加し（$p<0.01$），かつ顔課題間での差は認められなかった．一方，ASD 児では，θ帯域とα帯域のいずれも ERS パワーが画像間で差がなく、自己顔への ERS 反応が抑制されていた．

【結論】TD 児では自他識別の際の P300 成分の振幅増強にはα帯域の関与が示唆され，また非顔情報の弁別処理にはθ帯域の関与が考えられた．ASD 児ではα帯域の ERS パワー変化がみられなかったことから，彼らの顔認知における特異性によるものと推察された．

知的障害研究部

不安様行動における CCK_A/CCK_B 受容体の異なる役割を皮質脳波を指標として明らかにする

○李 珩，太田英伸，刑部仁美，関 美佳，戸田宜子，松田芳樹，加我牧子，稲垣真澄
知的障害研究部

【背景と目的】 消化管ホルモン Cholecystokinin (CCK)は脳内の興奮性神経伝達物質であることが近年判明した。CCK のカルボキシル末端に存在する 4 個のペプチド CCK-4 は、不安障害の症状悪化や健常者での不安誘導が知られている。CCK 受容体は 2 種類あり、CCK_A受容体とCCK_B受容体が存在する。CCK_A受容体は主に消化管に発現し、消化酵素の分泌に関与していると考えられている。CCK_B受容体は脳と胃粘膜に主に存在し、中枢神経系に発現する CCK_B受容体は、CCK 誘導性の精神不安に関係すると考えられている。また CCK_A 受容体はCCK_B受容体より低いレベルで脳にも発現している。しかしながら、不安誘導における CCK_A/CCK_B 受容体の役割の違いは明らかとなっていない。そこで本研究では、CCK-4 投与にて作成した不安モデルマウスに受容体拮抗薬を投与し、不安状態に関わる CCK_A/CCK_B 受容体の機能を行動実験と皮質脳波を指標として検討した。

【方法】1.　9 週齢の C57BL/6J マウス（各 n=8）を対象とした。麻酔下で右側脳室内に微量注射用カニューラを留置し、左頭頂葉皮質表面に脳波記録用ステンレス製ネジ電極の埋め込み手術を施行した。回復期間後、マウスに CCK-4 (75ng/2μl)あるいは生理食塩水（saline）を脳室内投与(i.c.v)し、その前後の行動（高架式十字迷路試験および明暗探索試験）をビデオカメラで記録し、同時に大脳皮質の神経活動の変化について検討した。

2.　CCK 受容体拮抗薬の関与メカニズムを解明するため、CCK_A 受容体および CCK_B 受容体拮抗薬(Devazepide、Cl-988)を予め腹腔内投与（i.p）して、30 分後の変化を観察した。また、自由行動における広帯域皮質脳波も記録した。なお、行動はエソビジョン（Noldus 社）にて解析し、広帯域脳波は Spike2 ソフトウェアによりバンドパスフィルター80−500Hz／0−30Hz を適用して、高周波活動／低周波活動を抽出した。

【結果】1.　行動実験で、CCK-4 (75ng)脳室内投与群は高架式十字迷路の open filed 滞在時間と明暗探索試験の light box 滞在時間がともに saline 投与群より有意に減少し、不安行動誘導が確認された。脳波では、CCK-4 投与により頭頂葉皮質の高周波帯域パワー値が saline 投与に比べて有意に減弱して、低周波帯域パワー値が saline 投与群に比べて有意に上昇した。

2.　CCK_B受容体拮抗薬(0.1mg/kg, 1mg/kg)を予め投与することにより、CCK-4 による上記不安様行動と脳波所見が用量依存的に改善した。一方 CCK_A受容体拮抗薬も CCK-4 誘導性不安様行動と脳波の低周波帯域の変化を改善したが、高周波帯域所見は変化しなかった。

【考察】マウスにおける潜在性不安や CCK-4 脳室内投与により誘導された不安様行動は、大脳皮質の高周波活動の著明な低下を伴うことが確認された。すなわち、マウス不安行動の神経生理学的指標として高γ帯域を含む高周波成分を指標として利用できる可能性を確認した。そして脳においては、CCK_A/CCK_B受容体がともに不安行動に関連し、後者がとくに重要な役割を担っている可能性が明らかになった。当研究部で保有している遺伝性難聴ミュータントマウス（bv）も同様の皮質高周波活動の変化が観察されており、不安症状の発生メカニズムに大脳の電気生理学的異常が関与することが推測された。

Li H et al: Cortical EEG activities differentiate the roles of CCKA and CCKB receptors in mouse CCK-induced anxiety-like behaviors. 投稿中

精神生理研究部

生体組織を利用したヒト生物時計機能評価
ー概日リズム睡眠障害患者への応用ー

○肥田昌子[1)]，北村真吾[1)]，大澤要介[1)]，榎本みのり[1)]，片寄泰子[1)]，野崎健太郎[1)]，元村裕貴[1)]，寺澤悠理[1)]，
大場健太郎[1)]，加藤美恵[1)]，塚田恵鯉子[1)2)]，守口善也[1)]，亀井雄一[1)3)]，後藤雄一[4)]，池田正明[5)]，
三島和夫[1)]
1) 精神生理研究部，2) 国立精神・神経医療研究センター病院精神科，
3) 国立精神・神経医療研究センター病院臨床検査部，4) 神経研究所疾病研究二部，5) 埼玉医科大学生理学講座

【背景】睡眠相前進型、睡眠相後退型、フリーラン（非同調）型などの概日リズム睡眠障害は、生物時計機能の異常や不適応から生じていると考えられているが、生体リズム異常の病態を精確に理解し診断するためには、患者個人の生物時計機能を正しく評価することが必要である。生物時計の発振機構には時計遺伝子群が構成する転写・翻訳制御ネットワークが深く関与しており、その時計機能は中枢である脳視床下部・視交叉上核だけでなく他の組織・器官の細胞（末梢細胞）にも備わっていることが知られている。そこで、末梢細胞における時計遺伝子発現リズムを測定し、個人の生物時計機能の評価を試みた。

【方法】健常者 17 名を対象に、朝型夜型（クロノタイプ）質問紙（MEQ，MCTQ）、1 サイクル 28 時間周期の脱同調実験、皮膚生検を施行した。脱同調実験前後の血漿メラトニン・コルチゾル分泌リズムを測定し、生理機能リズム周期を決定した。また、各被験者の皮膚生検から初代線維芽培養細胞を樹立し、生物時計リポーター遺伝子 Bmal1::Luc（時計遺伝子 Bmal1 プロモーター＋ルシフェラーゼ遺伝子）を用いて末梢細胞における時計遺伝子発現リズム周期（末梢リズム周期）を決定した。さらに、フリーラン型患者 6 名についても同様の方法で生理機能リズム周期および末梢リズム周期を評価した。

【結果】中間型群において生理機能リズム周期と末梢リズム周期は強い相関性を示したが、夜型群では相関性は認められなかった。末梢リズム周期は、生理機能リズム周期ではなくクロノタイプ定量指標である MSF（midpoint of sleep on free days）と強い相関性を示した。

【考察】末梢リズムが生理機能リズムよりも個人の生物時計機能の特性（概日特性）を反映することが示唆された。このことは、生体試料を利用して患者個人の生物時計機能評価が可能となり、概日リズム睡眠障害をはじめとする生体リズム異常の病態解明に大きく貢献することが期待される。今後は、生体リズム周期のみならず位相評価法の実用化にも取り組み、概日リズム睡眠障害診断システムの開発を目指す。

精神生理研究部

短時間睡眠による睡眠負債が情動に関する脳機能に及ぼす影響

○元村祐貴 [1)]，大場健太郎 [1)]，寺澤悠理 [1)]，片寄泰子 [1)]，北村真吾 [1)]，
榎本みのり [1)]，守口善也 [1)]，樋口重和 [2)]，三島和夫 [1)]
1)　精神生理研究部，　2) 九州大学芸術工学研究院

背景：睡眠不足時には，高揚や落ち込み、もしくはそれらの混在など気分が不安定で変化しやすくなることが知られている(Horne,1993)。気分が不安定になる機序として、睡眠不足が情動刺激に対する扁桃体の被賦活性を亢進させている可能性が挙げられている。過去の研究では、一晩の断眠（36 時間の連続覚醒）後に不快な画像刺激によって扁桃体活動がより強く賦活されることが明らかにされている(Yoo et al.,2007)。しかしながら、我々が日常生活で経験するような連続日にわたって蓄積する睡眠不足（睡眠負債 sleep debt）が情動反応とその責任脳領域に及ぼす影響は検討されていない。そこで本研究では平日に相当する 5 日間にわたり一日 4 時間の睡眠剥奪を実施し、睡眠負債時の情動に関わる脳機能について機能的 MRI を用いて検討した。

方法：対象は健康な成人男性 14 名である。各被験者は 5 日間の通常睡眠条件(8 時間睡眠)、および 5 日間の短時間睡眠条件(4 時間睡眠)の二つのセッションにクロスオーバーデザインで参加した。両セッション間は少なくとも 2 週間のインターバルを設けた。各スケジュールの最終日に MRI 内で表情画像を用いた情動刺激呈示課題を実施した。課題では注視点を 1000ms 呈示した後、Fear, Happy, Neutral のいずれかの表情を 200ms 提示した。画像呈示は 8 トライアルを 1 ブロックとし、1 ブロック中に一度ターゲット刺激を呈示してボタン押しを行わせ、起きていることを確認した。Rest のブロックでは注視点画像を 15s 呈示した。

結果：Fear 表情を呈示した際に、短時間睡眠条件において通常睡眠条件と比較して左扁桃体と視床下部に有意に大きな活動($p<0.001$,5voxel)が認められた。各賦活部位をシードとした機能接続の解析では、睡眠負債時において、扁桃体と右腹側前帯状皮質および右背外側前頭前皮質間の機能接続の低下がみられた。

考察：これらの結果から、睡眠負債によって不快な情動刺激を受けた際に扁桃体がより賦活されやすくなることが示唆された。この現象は睡眠負債時に気分が不安定となる認知神経学的プロセスの一端を担っている可能性がある。また扁桃体賦活は前頭前野領域との機能接続の減少と関連していることが示唆された。腹側前帯状皮質は扁桃体の活動を制御するフィードバックループの一部を担っており（Pezawas et al.,2005)、睡眠負債は扁桃体に対するネガティブフィードバック機能を低下させているものと推測された。同じく睡眠負債時に Fear 表情呈示により視床下部が賦活された。同部位は覚醒を促すヒスタミン投射系の起始核である結節乳頭体核を含んでおり、ネガティブな情動刺激を受けた際に覚醒水準が上昇することも情動反応の強化に関与している可能性がある。

精神生理研究部

鎮静性抗ヒスタミン薬の就寝前投与が翌日の精神運動機能に及ぼす影響

○片寄泰子 [1)]，有竹清夏 [2)]，北村真吾 [1)]，榎本みのり [1)]，肥田昌子 [1)]，
守口善也 [1)]，高橋清久 [3)]，三島和夫 [1)]
1)　精神生理研究部　2) 東京医科大学　睡眠学講座　3) 精神・神経科学振興財団

Background：アレルギー疾患患者の二次性不眠症に対して催眠鎮静作用の強い抗ヒスタミン薬があえて処方されることがあるが、そのリスクに関する情報は十分に得られていない。

Subjects & Methods：中枢移行性の高い抗ヒスタミン薬を就寝前に服用した翌日中の眠気と精神運動機能をプライマリエンドポイントとする無作為二重盲検プラセボ対照交叉比較試験を実施した。健常男性 22 名（平均年齢 22.2 ± 3.8 歳）が 1 週間以上相互に間隔をおいて配置された 4 つの薬物投与セッション（2 泊 3 日）に参加し、第 2 夜目の眠前に Zolpidem 10mg (ZPD)、Diphenhydramine 50mg (DPH)、Ketotifen 1mg (KTF)、もしくは Placebo のいずれかを服用した。被験者は、試験薬を服用した夜に睡眠評価のための polysomnography を、服用翌日の午前及び午後に主観的眠気評価（Visual analog scale）、客観的眠気評価（Multiple sleep latency test、Alpha attenuation test）、及び、精神運動機能評価（n-back test、reaction time test、digit symbol substitution test）のための試験を受けた。

Results：Placebo 服用時に比較して、中枢移行性の高い抗ヒスタミン薬服用翌日に、有意に強い鎮静感、客観的眠気、及び精神運動機能低下が認められた。抗ヒスタミン薬の持ち越し効果は KTF 服用時に最も強く、次いで DPH 服用時であった。また、抗ヒスタミン薬の持ち越し効果は午前に強く、午後には軽減した。一方、Placebo 服用時に比較して、対照標準治療薬である ZPD 服用時には有意な持ち越し効果は認められなかった。

Conclusion：本研究の結果は、アレルギー疾患に伴う二次性不眠症に対して中枢移行性が高い抗ヒスタミン薬を安易に用いることのリスクベネフィット比について留意する必要性を示唆している。

児童・思春期精神保健研究部

日本人の自閉症スペクトラム児における聴覚性驚愕反射に関する研究

○高橋秀俊，中鉢貴行，井口英子，森脇愛子，稲田尚子，武井麗子，神尾陽子

児童・思春期精神保健研究部

【目的】自閉症スペクトラム障害(Autism Spectrum Disorders: ASD)では、対人認知や言語、意思決定などの高次認知障害のみならず、より早い段階で処理される知覚や情動の異常と脳機能の非定型性についても指摘されており、低次の知覚処理機能と高次の対人認知や言語機能との関連と、その脳内基盤の発達的発達を明らかにすることは、ASD の病態形成メカニズムを理解する手がかりとなりうると考えられる。聴覚性驚愕反射(Acoustic Startle Response: ASR)検査は、実験動物やヒトの児童においても実施可能な単純な検査であるため、近年、精神医学領域におけるトランスレーショナル・リサーチにおいて、国内外で広く行われている。しかし、ASD を対象とした ASR に関する研究は、欧米においていくつかの報告がある程度である。欧米の ASD 成人では、定型発達 (Typical Development: TD) 成人に比べ ASR の Prepulse Inhibition (PPI)が有意に低下していたが、一方で、欧米の ASD 児では、TD 児との間で PPI に有意な差を検出できなかったものの、ASR の潜時が ASD 児では TD 児に比べ有意に延長していた。ASD では、児童期から成人期にかけて ASR のプロフィールが変化する可能性が考えられた。また、ASR のプロフィールは人種によって異なることが知られており、PPI を含む ASR のプロフィールを日本人成人の ASD と TD とで比較したところ（投稿準備中)、ASD 群では、TD 群に比べ、PPI に有意差は認めず、ASR の大きさが大きく、ASR の馴化が小さく、欧米の研究結果との間に乖離がみられた。さらに、ASD では感覚（聴覚）過敏といった特性も知られている。そのため、本研究では、日本人の ASD 児の ASR のプロフィールを検討するために、まず Prepulse を含まない単純な ASR 検査を行い、ASR のプロフィールを検討した。

【方法】対象は、日本人の児童期の ASD 群 2 名(9 歳男児と 12 歳女児)ならびに TD 群 12 名(9-13 歳、平均 10.4±1.6 歳、男児 7 名)である。なお、本研究は国立精神・神経医療研究センター倫理委員会の承認を得ており、全ての被験者およびその保護者に対して研究の目的及び内容を十分に説明して書面によるインフォームド・コンセントを得て行われた。本研究では、ニホンサンテクの驚愕性聴覚反射測定機器 Map1155SYS を用いて、聴覚性驚愕反射検査を行った。60dB の白色雑音を背景音とし、65dB から 110dB まで 5dB きざみで 10 段階の音圧の白色雑音(40msec)の聴覚刺激をそれぞれ 6 回ずつ平均 15 秒間隔で pseudorandom に提示した。各聴覚刺激提示後 20-85msec 後の左眼輪筋筋電図を測定し、ASR の大きさや潜時などを評価した。

【結果】ASR の大きさは、TD 群全員、85dB の刺激で 60μV を下回り、110dB では 160μV を超えることはなかったが、ASD 群では 2 名ともに 85dB の刺激で 70μV を超え、110dB ではともに 200μV を超えていた。ASR の潜時は、TD 群では 1 名を除き全員 70msec を下回ったが、ASD 群では 2 名とも 70msec を超えていた。

【まとめ】日本人の ASD 児では、ASR の潜時が延長しており、ASR の閾値が低下している可能性が示唆された。今後は、さらに被験者数を増やし、ASD 児の ASR のプロフィールを検討した後、PPI も含めて ASR のプロフィールの評価できる聴覚刺激パラダイムを決定した後、日本人の ASD の ASR の発達的変化について検討する予定である。

児童・思春期精神保健研究部

日本の乳幼児健診における M-CHAT を用いた自閉症スペクトラム障害の早期発見についての検討

○稲田尚子，神尾陽子

児童・思春期精神保健研究部

【背景と目的】乳幼児期自閉症チェックリスト修正版（Modified Checklist for Autism in Toddlers; M-CHAT）は、2 歳前後の自閉症スペクトラム（Autism Spectrum Disorders: ASD）のスクリーニング目的で使用される、親記入式の質問紙である（Robins et al.,2001）。全 23 項目から構成され、はい・いいえの二者択一で回答する。全項目を用いた日本語版 M-CHAT は、1 歳半健診における臨床的妥当性が示されている（神尾ら，2006 ; Inada et al,2011）。今日、わが国の乳幼児健診を実施する多くの自治体において M-CHAT の導入がなされているが、より正確かつ現場の負担を軽くしうる問診表を提案するために、より ASD に敏感な項目を同定する必要がある。本研究は、日本語版 M-CHAT を構成する項目から判別力においてベストな項目群を決定し、短縮版を提案することを目的とする。

【方法】対象： 1 歳半健診または 2 歳健診時に親による M-CHAT 回答情報があり、かつ 3 歳まで追跡された三自治体の合計 2459 名の児である。そのうち、3 歳で ASD と診断された 45 名の児を ASD 群（男児 75.6% ; 評価時平均月齢 36.8±1.5 ヵ月 ; 平均 DQ 77.1±20.3）、ASD 群を除く 2414 名を参照群（男児 49.9% ; 健診受診時月齢 38.8±1.0 ヵ月）とした。参照群の児は、3 歳または 3 歳半での健診で小児神経科医を含む健診スタッフに ASD を除外された者である。

解析 : M-CHAT 各項目の通過率を群間で比較し、項目分析を行った（Fisher の正確確率検定（Bonferroni の修正））。次に、ASD 群と参照群を分類する項目を決定するために判別機能分析を行い、標準化判別係数を求めた。

【結果】項目分析の結果、参照群と比べ ASD 群で通過率が有意に低かったのは、23 項目中 14 項目であった。標準化判別係数の高い項目として 9 項目が選択された。それらの項目群に共通する項目として、興味の指さし、興味あるものを見せる、指さし追従、視線追従などの共同注意行動、およびふり遊び、要求の指さし、言語理解などコミュニケーションに関連する項目、さらに模倣、呼名反応などの対人応答性に関連する項目を含む 9 項目が抽出された。

【考察】日本の複数地域の幼児母集団からのデータをもとに、日本語版 M-CHAT における ASD の判別力の高い 9 項目が同定された。いずれの項目も、定型発達児では 1 歳前後に獲得するとされる年齢依存の行動であった。またこれらの項目は、米国および中国でそれぞれ提案されている短縮版項目と共通しており、ASD の早期行動特徴は普遍的であることが示唆された。以上より、1 歳半から 2 歳にかけての乳幼児健診において ASD を早期発見する目的では、日本語版 M-CHAT の短縮版としてこれらの 9 項目を活用することが推奨される。

児童・思春期精神保健研究部

一般児童・生徒のメンタルヘルスに及ぼす自閉症的行動特徴の影響

○森脇愛子，神尾陽子
児童・思春期精神保健研究部

【目的】ASD と診断された児童の問題は対人・コミュニケーション・常同/限局的行動だけに限らず、うつや不安、行為などの一般的な精神症状の合併が多いことが報告されている(Simonoff et al., 2008; 神尾ら, 2011)。さらに我々の通常学級在籍の小中学生を対象とした調査の結果、ASD の診断がつかないが閾下レベルの症状をもつ子どもは約 1 割存在し(Kamio et al., in submission)、こうした自閉症的行動特徴のある子どもは情緒・行動問題の合併率が、特徴を持たない子どもと比べて高いことが示された（森脇ら,2011）。このことから、一般の学校のメンタルヘルスの観点から、ASD 診断閾下にある子どもは予防的ニーズが高いハイリスク群であることが示唆される。さらに、わが国の一般児童母集団では、症状の程度は情緒の問題は女児で、行為の問題は男児で高いとされ、また症状の平均得点は年齢が上がるほど低減することが示されているが（Matsuishi et al., 2008）、合併リスクの高い自閉症的行動特徴のある子どもでは情緒・行動の問題の程度が発達の段階によって異なるかどうかは明らかではない。そこで本研究では、児童青年のメンタルケアの観点から、情緒・行動の問題に及ぼす年齢区分（小低学年／小高学年／中学生）の影響が自閉症的行動特徴の程度によって異なるかどうかを調べる。

【方法】（1）対象：全国 10 都道府県 219 校の通常学級に在籍する小学 1 年～中学 3 年生の児童・生徒 87,548 名の保護者に回答を依頼した。回収された質問紙のうち欠損があった者を除外し 25,075 名（男児 12,762 名、女児 12,313 名：全体の 28.6%）の有効回答を得た。（2）質問紙：①ASD の行動特徴の把握のために SRS（Social Responsiveness Scale：対人応答性尺度）日本語版を用いた。ASD 行動特徴の重症度によって、SRS-Possible 群（T-score≧75）、ASD-Probable 群（60≦T＜75）、SRS-Unlikely 群（T-score＜60）の 3 群に分類した。②子どもの情緒と行動の問題を把握するために SDQ（Strength and Difficulties Questionnaire：子どもの強さと困難さアンケート）日本語版を使用した。（3）分析方法：性別に、群と年齢区分を独立変数、SDQ の「情緒の問題」、「行為の問題」得点を従属変数とした二要因分散分析を行った。

【結果】情緒の問題では、男女ともにいずれの年齢区分においても SRS3 群間で得点 ASD-Possible 群が最も高く、次いで Probable 群、Unlikely 群の順に低かった。男児では 2 要因の交互作用が見られた（p<.05）。また男女とも年齢区分の主効果が見られ（ps<.001）、Unlikely 群では男女とも年齢区分を通じて漸減したのに対して、Probable 群以上では得点の低減時期が遅れたり、女児の Possible 群では小高で一旦低減した症状が中学で再び上昇し小低と同レベルまで困難さが高まる傾向が見られた。また、行為の問題でも男女とも群の主効果があり症状は Possible＞Probable＞Unlikely 群の順に有意に高く（ps<.001）、年齢区分の主効果は男女とも見られるが（ps<.001）、Unlikely 群では低年齢から症状の低減が見られるのに対して、Possible 群ではいずれの年齢区分でも有意な差がなかった。

【結語】自閉症的行動特徴を多く持つ児童は自閉症的行動特徴の見られない大多数の児童と比べて、情緒、行為の問題ともに困難度が高かった。また自閉症的行動特徴の低い児童では学年が上がるにつれ問題が改善していく傾向が男女ともにみられたのに対して、自閉症的行動特徴の高い児童では困難さが年齢区分が上がっても改善せず、慢性化している可能性が考えられた。このことより、通常期待される年齢効果は期待しにくく、早期にみられた情緒や行為の問題は小学校入学時から介入することが思春期でのメンタルヘルスの予防につながるものと推察される。今後は前向きに追跡して発達的変化を検証する必要があると考える。

精神薬理研究部

新規に合成された選択的δオピオイド受容体作動薬 KNT127 は ラットにおいて抗不安様作用を示す

○斎藤顕宜[1)]，杉山 梓[1),3)]，山田美佐[1)]，稲垣正俊[1),2)]，橋本富男[1)]，
藤井秀明[4)]，岩井孝志[1),4)]，岡淳一郎[3)]，長瀬 博[4)]，山田光彦[1)]
1）精神薬理研究部，2）自殺予防総合対策センター
3）東京理科大学薬学部薬理学教室　4）北里大学薬学部生命薬化学研究室

【背景・目的】δオピオイド受容体(DOR)を欠損させたマウスは、生得的な不安の評価系において、強い不安様行動を示す。そのため、DOR 作動薬は、新規作用機序による治療薬開発のシード化合物の一つとして注目されている。最近我々は、DOR 受容体に対する優れた親和性と高い選択性を示す化合物（KNT127）の合成に成功した。そこで本検討では、KNT127 の抗不安様作用について明らかにするために、生得的な不安の評価モデルを用いて検討を実施した。

【方法】動物は wistar 系雄性ラット 9-12 週齢を用いた。被験薬物として、KNT-127 0.3-3.0 mg/kg を用い、DOR 拮抗薬として、ナルトリンドール 0.1 mg/kg を用いた。また、陽性対照薬物として、ベンゾジアゼピン系抗不安薬ジアゼパム 1.0 mg/kg を用いた。抗不安様作用の評価は、生得的な不安の動物モデルである高架式十字迷路試験、明暗箱試験、オープンフィールド試験を用いた。抗不安様作用の評価には、高架式十字迷路試験における壁なし走行路滞在時間率、明暗箱試験における明箱側滞在時間、オープンフィールド試験における中心部滞在時間をそれぞれ指標とした。なお、被験薬物は試験開始 30 分前、DOR 拮抗薬は被験薬物処置の 30 分前にそれぞれ皮下に処置した。

【結果・考察】高架式十字迷路試験の結果、KNT127 は用量依存的かつ有意にラットの壁なし走行路滞在時間率を増加させた。KNT127（3.0 mg/kg）で認められたこの効果は、ジアゼパムと同程度であった。また、KNT127（3.0 mg/kg）で認められた壁なし走行路滞在時間率の増加は、DOR 拮抗薬であるナルトリンドールの前処置により拮抗された。従って、KNT127 は、ラットにおいて DOR 受容体を介した抗不安様作用を示すことが示唆された。さらに KNT127 で認められた高架式十字迷路試験におけるこれらの効果は、その他の不安モデルである明暗箱試験やオープンフィールド試験においても同様に確認された。以上のことから、新規化合物 KNT127 は、生得的な不安の動物モデルにおいて抗不安様作用を示すことが示唆され、新規作用機序による抗不安薬開発のためのシード化合物となる可能性が示唆された。

精神薬理研究部

抗うつ薬関連遺伝子 Rhotekin は神経分化を促進する

○岩井孝志 [1),3)]，斎藤顕宜 [1)]，山田美佐 [1)]，高橋　弘 [1)]，橋本富男 [1)]，
橋本恵理 [2)]，鵜飼　渉 [2)]，齋藤利和 [2)]，山田光彦 [1)]
1）精神薬理研究部　2）札幌医科大学医学部神経精神医学教室
3）北里大学薬学部生命薬化学研究室

【背景・目的】以前に我々は、抗うつ薬の奏功機序を解明するために抗うつ薬慢性投与後のラット脳内遺伝子変化に対する網羅的スクリーニングを行い、Rhotekin の発現が変動していることを見出した。Rhotekin は低分子 G タンパク質 Rho の下流シグナルとして知られているが、中枢神経系における機能は明らかにされていない。本研究では、抗うつ薬の奏功機序に重要であると考えられている神経分化過程における、Rhotekin の役割について検討した。
【方法】Wistar ラット（E14）の脳より神経幹細胞を単離した。ニューロスフェア法により神経幹細胞を増殖させた後、トリプシンで分散させ 24-well plate 又は 6 cm dish で接着培養を行った。神経分化は培地より bFGF を除去することで誘導した。Rhotekin の産生はウエスタンブロットと蛍光免疫染色で確認した。接着培養開始 24 時間後に Rhotekin siRNA（5-20 nM）を導入し、Rhotekin の産生を抑制した。siRNA 導入後の生存率は MTT assay と核染色、分化率および突起長は Tuj1 染色、増殖活性は核内に取り込まれた BrdU の蛍光染色により検討した。染色画像の取り込みと解析は In cell analyzer 2000（GE ヘルスケア社製）を使用した。
【結果】Rhotekin の産生は神経幹細胞と神経細胞で認められ、神経分化に伴い産生量は有意に増加した。神経幹細胞の神経分化誘導 24 時間後に siRNA を導入して Rhotekin の産生量を低下させると、siRNA 導入 72 時間後から細胞生存率が低下した。また、細胞死が誘導されていない分化 48 時間後より、分化率および神経突起伸長が減少した。一方、神経幹細胞を分化させることなく培養し続けると細胞数と MTT 活性の増加が認められた。これらの変化は Rhotekin siRNA 導入 48 時間後から、有意に増強された。Rhotekin siRNA 導入 48 時間後には、細胞増殖マーカーである BrdU 取り込み数も有意に増加していた。
【考察】以上より、Rhotekin は神経幹細胞の増殖抑制、神経分化の促進、神経突起伸長、および神経細胞の生存維持に働くことが明らかとなった。Rhotekin は神経幹細胞から成熟神経細胞へ分化する過程の各段階において重要な調節因子であることが示唆された。

精神薬理研究部

マウス成体海馬歯状回腹側部/背側部における遺伝子発現定量法の確立

○牧野祐哉 [1),2)]，山田美佐 [1)]，斎藤顕宜 [1)]，杉山　梓 [1),2)]，大橋正誠 [1),2)]，
橋本富男 [1)]，稲垣正俊 [1),3)]，山田光彦 [1)]
1）精神薬理研究部　2）東京理科大学薬学部薬理学教室
3）自殺予防総合対策センター

【背景と目的】これまでに、海馬歯状回の神経可塑的変化がうつ病の治癒過程に関連するという報告がなされているが、その分子機構は解明されていない。近年、海馬歯状回において腹側部と背側部とではその機能が異なることが明らかとなりつつある。そのため、これらの部位を分離した検討を進める必要がある。一方、当研究部は、Notch-bHLH シグナル伝達系に属する遺伝子が、抗うつ薬の奏功機転に関与する可能性をこれまでに報告した。本伝達系は、発生期において神経可塑的変化を時間的・空間的に制御しているが、成体脳での役割は明らかにされていない。そこで本研究では、うつ病の治癒機転に本伝達系の発現変化を介した、成体海馬歯状回における神経可塑的変化が関与するという作業仮説のもと、①マウス成体海馬歯状回の腹側部と背側部を分離・摘出する方法、②両部位における本伝達系遺伝子群の発現変化を定量するための測定手技、を確立することを目的とした。
【研究方法】①Hagihara らの方法（2009）に基づき、実体顕微鏡下でマウス全脳から海馬歯状回のみを摘出した。摘出した歯状回にアンモン角が含まれていないことの確認は、アンモン角に特異的に発現する遺伝子 Mrg1b 用のプライマーセットを用いて、real time RT-PCR 法により行った。次に、摘出した歯状回を腹側部と背側部に分離した。腹側部と背側部の分離の確認は、それぞれの部位に特異的に発現する遺伝子 Trhr（腹側部）及び Lactase（背側部）用のプライマーセットを用いて、real time RT-PCR 法により行った。②Notch-bHLH シグナル伝達系遺伝子のプライマーセットを作成した。候補遺伝子群の遺伝子配列情報は GenBank®より取得し、Primer Express®によりプライマーセット候補を選択した後、BLAST 法により相同性検索を行った。各プライマーセットの妥当性は、real time RT-PCR 法により確認した。
【結果】①Mrg1b の発現を検討した結果、摘出した海馬歯状回で発現が認められなかったことから、アンモン角が含まれていないことが確認された。また、分離した歯状回の腹側部、背側部を用いて、Trhr 及び Lactase を増幅した結果、それぞれの部位に特異的に発現していたことから、腹側部と背側部に分離できていることが確認された。②設計した各遺伝子のプライマーセットを用いてマウス脳 cDNA を鋳型に PCR を行ったところ、得られた PCR 産物の融解曲線はシングルピークであり、アガロースゲル電気泳動においてもシングルバンドであることが確認された。次にこの PCR 産物をサブクローニングし塩基配列を決定した結果、目的の遺伝子が増幅されていることが確認された。
【考察】我々は、マウス成体海馬歯状回の腹側部、背側部を分離・摘出し、Notch-bHLH シグナル伝達系遺伝子の発現変化を定量する方法を確立した。本研究の成果は、既存のメカニズムとは異なる新規抗うつ薬の開発基盤となることが期待される。

社会復帰研究部

認知機能リハビリテーションと援助つき雇用の組み合わせが精神障がい者の臨床および雇用関連指標に与える影響

○佐藤さやか[1)]，岩田和彦[2)]，古川俊一[3)]，安西信雄[1)]，伊藤順一郎[1)]，
後藤雅博[4)]，丹羽真一[5)]，伊藤憲治[6)]，亀田弘之[7)]，池淵恵美[8)]
1）社会復帰研究部，　2）大阪府立精神医療センター
3）東京大学病院リハビリテーション部　4）新潟大学医学部保健学科
5）福島県立医科大学神経精神医学教室　6）東京電機大学 情報環境学部・先端工学研究所
7）東京工科大学コンピュータサイエンス学部　8）帝京大学医学部精神科学教室

【目的】本研究の目的は「Cogpack」日本語版を利用した認知機能リハと援助付き雇用を組み合わせたプログラムが精神障がいをもつ人の臨床関連指標および就労関連指標にどのような影響を及ぼすか検討することであった。
【方法】本研究は非ランダム化による Experimental Study として実施された。比較する群は「モデル的就労支援」のみ群（SE 群）および「認知機能リハ+就労支援」群（CR+SE 群）とし，両群の介入開始前に別々に対象者のリクルートを行った。リクルートの結果 SE 群 57 名および CR+SE 群 52 名が研究に導入され、CR＋SE 群にはコンピュータソフト「Cogpack」を用いた認知機能リハビリテーションを実施した。また、両群に対して IPS のエッセンスを特徴とする就労支援を実施した。評価は認知機能（BACS-J・NAB 迷路課題），精神症状（PANSS），社会機能（LASMI-I&W），作業能力（ワークサンプル幕張版）、就労率，就労期間，賃金などを指標とした。
【結果】臨床関連指標については PANSS，LASMI の各領域で両群間の交互作用に有意差もしくは有意傾向が見られた（PANSS：F=3.612，p<.10；対人関係領域：F=11.496，p<.01；労働領域：F=2.853，p<.10）。さらに BACS-J の言語性記憶，数字配列，トークン運動，総合得点に有意な交互作用が見られた（言語性記憶：F=9.093，p<.01；数字配列：F=6.378，p<.05；トークン運動：F=6.931，p<.05）。就労関連指標については CR+SE 群は SE 群と比べてデイケアなどの就労準備期間利用日数が有意に長く（t=3.990，p<.05），障害者雇用の日数が長かったが統計的な有意差はなかった（t=1.719，p>.05）。
【考察および結論】以上の結果から認知機能リハが精神障がいをもつ人の言語性記憶，作業記憶，処理速度といった認知機能領域について，その障害の改善に良い影響を与えていることが示唆された一方，就労関連指標については，認知機能リハを付加することによる改善が明確にはならなかった。これは追跡期間の短さや就労支援担当者の習熟度などが影響したと考えられ，これらの改善が今後の課題と考えられた。

社会復帰研究部

ACT・訪問看護・デイケアのサービスのアウトカム縦断調査

○高原優美子[1)]，吉田光爾[1)]，瀬戸屋雄太郎[1)]，英 一也[1)]，園 環樹[1)]，
保坂聡年[1)]，萱間真美[2)]，伊藤順一郎[1)]
1)社会復帰研究部, 2)聖路加看護大学 看護学部

【背景と目的】近年、「入院医療中心から地域生活中心へ」という精神保健医療福祉施策のもとで精神障害者への支援が地域へと移行しつつあり、今後医療と生活支援が密接に結びついて提供できる効果的なサービスモデルの確立・普及は急務である。医療と生活支援の両方が提供されるサービスとして、展開されているものは精神科訪問看護および精神科デイケア、包括型地域生活支援プログラム（Assertive Community Treatment: ACT）等がある。これらのサービスの効果や特性は、それぞれに議論されており、その違いについては明確ではない。そのため、本研究では同じ手法によって、これらのサービスの、対象者・業務内容の相違、効果について縦断的に調査し、これらのサービスの詳細な実態の把握をして、我が国における今後の地域精神保健の機能分化やシステム作りに寄与することを目的とする。
【方法】 ACT7 施設、訪問看護 21 施設、デイケア 10 施設を対象に、施設調査、全利用者調査、および以下に関する追跡調査を原則として 2008 年 11 月から実施した。追跡調査は、6 ヵ月後、12 ヵ月後、18 ヵ月後、24 ヵ月後と半年ごとに行っている。
《アウトカム調査》 調査内容は、スタッフ配置、サービス提供回数、全利用者の性、年齢、診断、および過去の入院歴、過去 1 カ月に退院した統合失調症/双極性障害を持つ利用者各施設最大 10 名の基本属性、機能レベル（GAF）、社会行動（SBS）の状況等である。
追跡調査は半年ごとに実施し、半年間の入院歴、就労歴、サービス利用歴、GAF、SBS 等を実施した。
【結果および考察】 平成 24 年 1 月現在、2 年後の追跡データを回収しているため、2 月に行われる精神保健研究所の研究報告会時点までにデータを解析し、当日結果を報告する。

社会復帰研究部

大学生における精神障害者に対するスティグマティゼーションの是正を図る教育的介入の効果：システマティック・レビュー

○山口創生 [1], Shu-I Wu[2], Milly Biswas[3], Madinah Yate[3],
Yuta Aoki[3], Elizabeth A Barley[3], Graham Thornicroft[3]
1）社会復帰研究部　2) Mackay Medicine Nursing and Management College, Taiwan
3) Institute of Psychiatry, King's College London, UK

【背景】近年、精神障害者に対するスティグマは国際的な問題となっており、その改善に向けた様々な教育的介入が開発されている。本研究は、大学生のスティグマティゼーションの是正を図る効果的な教育的介入を模索することを目的として、システマティック・レビューを行った。
【方法】1)大学生を対象とし、2)スティグマティゼーションの是正を目的とした介入の効果を検討した、3)対照群を有する臨床試験を導入基準とした。関連する研究を収集するために、11 の学術データベースを用いたほか、文献リストの検索、専門家への情報提供の働きかけ、公的機関（WHO など）のホームページの模索、Google 検索を実施した。最低 2 人以上の調査者が、Cochrane group によって作成された EPOC Data checklists を用いて、研究の選考やデータ抽出、そして研究の質（Risk of bias）の評価などの過程にかかわった。
【結果】様々な介入内容を持った 35 の研究（N=4257）が対象となった。接触体験またはビデオなどの間接的接触体験を含む介入は、精神障害者に対する態度や社会的距離の改善に効果的な傾向があった。他方、精神保健サービスの利用に関する態度の変容には、治療に関する情報や利用できる相談機関などについての講義が有効であった。ただし、これらの研究の多くは、無作為割付けの方法が不透明であるなどの方法論的な問題を有していた。また、医大生に対する有効な介入の効果、長期的な介入の効果、差別などの行動変容に関する介入の効果についてのエビデンスは示されていなかった。
【結論】スティグマティゼーションの是正を図る介入は、内容によって、それぞれ異なるアウトカムに影響すると思われる。これらのエビデンスは必ずしも明確なわけではなく、今後はより厳密な研究デザインを用いた追試の必要性が示唆される。また、医大生に対する介入の開発や長期的な介入効果の検証、そして差別やサービス利用などの行動を変容できる介入の模索が今後必要とされる。

成人精神保健研究部

ω3 系脂肪酸による PTSD 予防への挑戦

○松岡 豊 [1,2,3,4]，西 大輔 [2,3]，米本直裕 [3,4]，浜崎 景 [3,5]，橋本謙二 [3,6]，浜崎智仁 [3,5]
1）成人精神保健研究部，2）災害医療センター精神科, 3) JST/CREST,
4) TMC 情報管理・解析部, 5）富山大学，6）千葉大学

【目的】「ω3 系脂肪酸を摂取すると海馬の神経新生が活性化され、それにより海馬依存性の恐怖記憶が減弱し、PTSD 症状が最小化する」という仮説[1]を検証する橋渡し臨床試験を計画した。この仮説は、ω3 系脂肪酸が神経新生を向上させるという知見と井ノ口らの知見「生後の海馬で起きる神経新生の程度が、恐怖連合学習後の時間経過に伴う記憶の依存する脳領域の移行に関わる」（Kitamura et al, Cell 2009）を基盤にしている。今回、オープン試験を実施し安全性と有効性を予備的に検討したので、その概要を報告する。
【方法】救命救急センターに搬送された重傷者を対象に、ω3 系脂肪酸の魚油カプセルを事故直後から 12 週間投与し、3 ヶ月後の PTSD 症状が最小化されるか否かを検討した。PTSD 症状は、Clinician-Administered PTSD Scale（CAPS)を用いた得点で評価した。本研究は、施設倫理委員会で研究計画が承認された後、本人から文書同意を得て実施された。
【結果】3 ヵ月後の CAPS 得点は、交通外傷患者のコホート研究データを基に、試験実施前に推測した仮説平均値に比べ、低く抑えられていた（11 vs. 25, 1 サンプル t 検定, $p = 0.03$）[2]。副次的アウトカムとして、血清中の脳由来神経栄養因子(BDNF)を試験開始前後で測定した。その結果、PTSD を発症した事例の血清 BDNF 値はほとんど変化しなかったが、PTSD を発症しなかった事例の血清 BDNF 値は、試験後有意に増加した[3]。一部の参加者に軽度の軟便とおくびを観察したが、試験を中止するような事例はなかった。
【考察】オープン試験という限界はあるが、本試験の結果からω3 系脂肪酸が事故後 PTSD 症状を低く抑える可能性、そして BDNF 増加が PTSD 予防に何らかの役割を担っている可能性が示唆された。これより救急医療現場においてω3 系脂肪酸による初期介入が可能であること、そして受傷後早期からのω3 系脂肪酸摂取は PTSD 発症抑制に有効である可能性が示された。現在、プラセボ対照二重盲検比較試験を実施中である。
【文献】
[1] Matsuoka Y: Clearance of fear memory from the hippocampus through neurogenesis by omega-3 fatty acids: A novel preventive strategy for posttraumatic stress disorder? ***Biopsychosocial Medicine*** 2011 February 8; 5:3
[2] Matsuoka Y, Nishi D, Yonemoto N, Hamazaki K, Hashimoto K, Hamazaki T: Omega-3 fatty acids for secondary prevention of posttraumatic stress disorder after accidental injury: An open-label pilot study. ***J Clin Psychopharmacol*** 30(2): 217-219, 2010
[3] Matsuoka Y, Nishi D, Yonemoto N, Hamazaki K, Hamazaki T, Hashimoto K: Potential role of brain-derived neurotrophic factor in omega-3 fatty acid supplementation to prevent posttraumatic distress after accidental injury: An open-label pilot study. ***Psychother Psychosom*** 80: 310-312, 2011

成人精神保健研究部

巨大地震が平衡感覚機能に与える影響

○本間元康 [1,2]，栗山健一 [1]，長田佳久 [2]，遠藤信貴 [3]，金 吉晴 [1]

1）成人精神保健研究部　2）立教大学現代心理学部　3）近畿大学総合社会学部

2011 年 3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震は，多くの過去の巨大地震と同様に，膨大な数の余震を伴い発生した．震源地から約 350 km 離れた東京でも本震発生から 4 カ月間に震度 2 以上の余震が 100 回以上観測されている．繰り返す余震は，様々な心身の不調をもたらすことが知られており，今回の地震でも本震から数か月経過した後に，特にめまいを訴える人の増加が報告されている．めまいは平衡感覚機能の異常によってしばしば引き起こされる．他方で，平衡感覚機能は心理的ストレスの影響を受けやすく，しばしば身体化症状としても現れる．しかし巨大地震と平衡感覚異常の関係を調査した研究はこれまでになく，巨大地震後の平衡感覚異常は，繰り返す余震が物理的に前庭系機能（三半規管など）に影響を与える結果なのか，再度発生するかもしれない巨大地震への不安がもたらす心理的ストレスの結果生じるのか明らかにされていない．本研究は東北地方太平洋沖地震発生 4 カ月後の 2011 年 7 月 4 日から 15 日の期間中に，余震を繰り返し経験したグループ（東京在住 52 名：地震群）とほとんど経験しなかったグループ（大阪在住 49 名：コントロール群）の平衡感覚機能と心理的ストレス指標を調査した．平衡感覚機能はデジタル重心計を用い，開眼および閉眼条件での身体の微細な揺れを測定し，心理的ストレス指標は自記式ストレス関連症状質問票（STAI, BDI, IES-R, PSQI）を用い評価した．全ての自記式評価指標に群間差は見られなかったが，地震群の重心動揺量は閉眼時に限りコントロール群よりも有意に大きかった．また地震群では STAI-state, STAI-trait, BDI と重心動揺量に有意な正の相関が認められた．重心動揺におけるパワースペクトル解析では，地震群で前庭神経系末梢機能の障害を反映する低周波帯域のパワーが有意に増大していた．これらの結果から，繰り返す余震が前庭系機能に物理的に作用し，さらに繰り返す余震に対する心理的ストレスが不安脆弱性の高い個人の前庭神経末梢機能異常を増幅させると示唆できる．本研究成果は巨大地震被災者および周辺地域住民に対する，新たな心身健康ケアのための治療的・予防的アプローチの必要性を示唆している．

成人精神保健研究部

日本人遺族に対する複雑性悲嘆治療：予備的報告

○伊藤正哉 [1]，中島聡美 [1]，白井明美 [2]，小西聖子 [3]，

金 吉晴 [1]，Ketherine M. Shear[4]

1）成人精神保健研究部，2）国際医療福祉大学，

3）武蔵野大学，4) Columbia University

目的: 複雑性悲嘆とは、愛する人を亡くした直後の急性悲嘆反応の強度が長期間遷延する症候群であり、DSM-5 への診断基準の包含が検討されている。近年の研究では、複雑性悲嘆に対する認知行動療法の有効性が報告されている。本発表では、当部で実施している複雑性悲嘆治療(Shear et al., 2005, JAMA）のオープン試験の経過を報告する。

方法:これまでに 4 人の日本人遺族が研究への包含基準を満たし、治療を完遂した。主要評価項目として複雑性悲嘆質問票（ICG; Prigerson et al., 1995）、二次評価項目として抑うつ(BDI-II)、悲嘆関連症状(回避、自責感)の自記式尺度を実施した。

結果: 治療を完遂した 3 人の参加者において、複雑性悲嘆の症状に低下が認められた。これらの参加者は治療一週間後のアセスメントにおいて複雑性悲嘆の診断基準(ICG < 30)を満たしていなかった。一週間後のアセスメントでは抑うつや回避症状でも低下が認められたが、自責感には変化が認められなかった。

考察: 文化圏にかかわらず、複雑性悲嘆において自責感は共通して見られる。しかし、日本人においてはそうした自責感が特に強く、複雑性悲嘆からの回復過程を難しくさせている可能性が考えられる。

司法精神医学研究部

医療観察法モニタリング研究から見た入院処遇対象者の特徴

○菊池安希子 [1)]，長沼洋一 [1)]，八木 深 [2)]，平林直次 [3)]，佐野雅隆 [4)]，
安藤久美子 [1)]，岡田幸之 [1)]
1）司法精神医学研究部，2）国立病院機構東尾張病院、
3）国立精神･神経医療研究センター病院、4）早稲田大学大学院

【目的】当センター司法精神医学研究部では、2005 年の「心神喪失等の状態で重大な他害行為を行った者の医療及び観察等に関する法律（以下、医療観察法）」施行以来、同制度における入院処遇に関するモニタリング研究を実施している。その目的は、指定入院医療機関の診療記録中の情報を分析することにより、入院処遇の運用状況を明らかにして専門的医療の向上を図ることにある。本研究では、医療観察法モニタリング研究より明らかになった入院処遇対象者の特徴に焦点をあてて報告する。
【方法】医療観察法指定入院医療機関のうち、協力を得られた病院より通常業務の中で作成される診療録中の情報（各種シート等）を、個人を特定可能な情報を削除した上で、エクセル形式にて収集し、集計した。入院期間については、観察期間を 2 年間とした入院年度別の推計値をカブランマイヤー法により算出した。
【結果】平成 22 年度は、14 病院 902 例のデータが得られた。制度開始以来 5 年間の推移をみると、新規入院者数は 2007 年をピークに漸減傾向を示していた。性別（男性対女性 4:1）、年齢構成（30 代、40 代で過半数を占める）、診断構成（約 8 割が統合失調症）、対象行為構成（殺人・傷害・放火で約 9 割）については、経年的に見ても、制度開始以来、安定した推移を見せていた。対象行為では、性別による特徴（女性に殺人・放火が多い）や、女性・高齢者に放火が多い傾向がみられた。入院年度別にみると、2005 年度に入院処遇を開始した対象者に比べ、2006 年度、2007 年度、2008 年度に入院処遇開始した対象者では、推計入院期間が有意に延長していた。
【考察】入院処遇対象者の属性が制度開始以来、一貫した傾向を見せていることは、対象者の選択に関する初期の制度設計及びその運用の安定度が高かったことを示唆している。推計入院期間の延長傾向については、退院圧力減少要因、退院調整難渋要因、その他の入院期間延長要因等、多要因が考えられた。入院処遇者数の増減については、病床運営上も、今後の推移を見守る必要がある。医療観察法入院処遇のモニタリングに通常診療録情報を用いることには、データ入力上の問題が数多く認められた。今後はそうした課題に取り組み、データの精度を上げていくことが課題である。

司法精神医学研究部

サイコパス傾向にみられる近視眼性に関する研究

○西中宏吏 [1)]，高橋泰城 [2)]，福井裕輝 [1)]
1）司法精神医学研究部
2）北海道大学大学院文学研究科行動システム科学専攻

【背景と目的】サイコパスは情動と行動の障害として捉えられている。サイコパスでは、その近視眼性、自己制御の欠如などの衝動性がしばしば問題になり、彼らの示す反社会的行動は意思決定の障害であると考えられている。サイコパスでは報酬および損失に関する意思決定課題である Iowa Gambling Task (IGT) (腹内側前頭前皮質と関連)での成績が悪い。一方、行動経済学の分野で、人間は合理的な経済主体とされていたが、時間や確率の展望を伴う意思決定に際して、目前の損失を回避しようとしたり、即時的に報酬を得ようとする作用が働くことが最近議論されるようになってきている。サイコパシー傾向の高い者ではその近視眼性によって、これら経済学的行動に特異的なパターンを示すことが推測される。本研究では、健常者におけるサイコパス傾向とこれらの意思決定行動との関連についての検討を行った。
【対象と方法】大学生・大学院生 41 名を対象に、Psychopathic Personality Inventory (PPI)を用いて、サイコパシー傾向を評価した。また、神経心理学的検査 IGT とともに、行動経済学的課題の、遅延割引課題（報酬、損失）と確率割引課題（報酬、損失）を実施し、net score (IGT)と割引率 k（割引課題）を行動指標とした。サイコパシー傾向と各課題の指標において、相関分析を行った。
【結果】PPI-R の合計得点と IGT net score、遅延割引の k には有意な相関は得られなかった。一方、PPI-R の合計得点と確率割引の k には有意な相関がみられた(報酬: $r = -.38$, $p < .05$; 損失: $r = 0.43$, $p < .01$)。PPI-R の下位尺度（自己中心的衝動性、恐れ知らず、冷淡）の分析では、恐れ知らずのみが、確率割引の k と有意な相関があった(報酬: $r = -.35$, $p < .05$; 損失: $r = 0.41$, $p < .01$)。
【考察】確率割引行動のみが、サイコパシー傾向と関連していた。サイコパシーは、異時点間の選択における衝動性に関連はなく、”myopia for the future” (Damasio, 1994)というよりは、不確定な状況下での危険な意思決定に関わりがあることが示唆される。

司法精神医学研究部

殺人を行った統合失調症患者の治療・リハビリテーションへの参加に関する調査 - 入院患者自身の視点に着目して -

○小松容子 [1)]，Lovell Karina [2)]，Baker A. John [2)]

1）司法精神医学研究部，2) The University of Manchester

【背景・目的】医療におけるサービスユーザームーブメント，ノーマライゼーションの観点から，徐々に患者自身が主体的あるいは積極的に治療に参加することへの関心が寄せられるようになった。臨床場面においては近年，患者中心あるいは患者主体の医療，患者参加型医療等が，病院あるいは病棟の理念に含まれるようになってきた。医療観察法における入院処遇ガイドラインにおいても，患者の治療における前向きな姿勢や自律性を高めることを理念のひとつとしており，司法精神科医療においても患者の主体的な治療への参加は重要視されている。患者の治療への参加に関する研究としてこれまでに，患者主体の医療，患者参加型ケア，患者と共に治療の決定を行う Sheared Decision Making 等の調査研究がなされてきた。しかし，既存の研究の多くは，医療従事者の視点で行われており，患者自身の視点に着目して行われた研究は少ない。また，殺人等の重大な他害行為を行った精神障害者の治療・リハビリテーションへの主体的な参加に関する研究は殆どなされていない。よって本研究では，治療・リハビリテーションへの参加について，殺人を行った統合失調症患者の体験，意見を明らかにすることを目的とした。

【対象・方法】医療観察法病棟に入院中の患者で，統合失調症と診断された患者のうち，対象行為が殺人あるいは殺人未遂であるものを研究対象とし，多職種チームによって本研究への参加に支障がないと判断された者に聞き取り調査を行った。この調査では，半構造化面接を実施し，治療・リハビリテーションに参加することへの意見，思い，体験を自由に語ってもらった。聞き取り内容は録音し，逐語録を作成し，これをもとに質的帰納的分析を行った。

【結果・考察】分析の結果，多職種チームでの話し合いや地域関係者とのケア会議への関与の程度，治療方針・ケア計画作成への参加状況，治療・リハビリテーションへの参加のきっかけや思い等が明らかになった。結果の詳細および考察は当日報告する。

精神保健計画研究部

精神科病院の在院患者数等の年次推移

○立森久照 [1)]，河野稔明 [1)]，廣川聖子 [1)]，趙 香花 [1)]，

赤澤正人 [1)]，長沼洋一 [2)]，竹島 正 [1)]

1)　精神保健計画研究部　2) 司法精神医学研究部

【背景と目的】2009 年に公表の「今後の精神保健医療福祉のあり方等に関する検討会報告書」では，「精神保健医療福祉の改革ビジョン」で掲げられていた平均残存率および退院率に加えて，統合失調症と認知症に関する目標値の設置の必要性を指摘した。前者は今後 5 年間でその人数を約 15 万人にするとの目標値が設定された。後者についても「新たな地域精神保健医療体制の構築に向けた検討チーム（第 2R:認知症と精神科医療）とりまとめ」では，2020 年度までに，精神科病院に入院した認知症患者のうち、50%が退院するまでの期間を，入院から 2 カ月(現在は 6 カ月)とするとされた。現時点で最新の調査である 2009 年までの精神保健福祉資料のデータを用いて精神科病床を有する病院（以下，精神科病院等）における在院患者の数的状況等の推移を明らかにすることにより，改革ビジョンのこれまでの進捗を明らかにすることを目的とした。

【対象と方法】厚生労働省精神・障害保健課が，都道府県等の精神保健福祉主管部長に文書依頼を行い収集した全国の精神科医療施設等の状況についての資料を許可を得て二次的に分析した。このデータはわが国の精神科病院等の悉皆調査により得られたものである。今回は 1997 年から 2009 年調査のデータを使用した。

【結果】2009 年の精神科病院等の在院患者総数は 310,738 人であり，前年比で 2,533 人の減であった。統合失調症等の在院患者総数は 183,700 人（前年比で 2,673 人の減），一方で認知症を含む器質性精神障害のそれは 64,329 人（前年比で 885 人の増）であった。都道府県別に比較した際に認知症，統合失調症等ともに人口 10 万対在院患者数が多いのは日本の周辺部，特に南部に集中しているという特徴は 2009 年時点でも変化はない。この十数年間の在院患者数の推移は，概ね全ての都道府県で，総数では減少か横ばい，統合失調症については減少傾向，認知症を含む器質性精神障害は増加傾向にあった。認知症を含む器質性精神障害おいては，その在院間患者数の増加が著しい都道府県も存在した。

【結論】改革ビジョンの目的のひとつはいわゆる社会的入院による長期在院の解消にあると考えられる。新規入院者の在院期間の短縮や在院期間が一年以内の動態の指標である平均残存率の改善等（34.8→28.8）から，数値目標の達成には十分ではないものの，新たにそうした状況を生じさせない点では改革の一定の成果が伺えた。一方，すでに長期在院となった者の地域移行に関しても退院率に一定の改善（21.7→23.1）は見られたが，長期在院者の中核をなす統合失調症の在院患者数の数値目標の達成には課題が残る。認知症を含む器質性精神障害の精神病床の在院患者数の増加が著しい地域があることは注視が必要と考えられた。ただし認知症については精神科医療だけでなく，その地域の医療，介護の全般を把握した上で，評価することが必要であろう。

精神保健計画研究部

医療保護入院制度の運用実態に関する調査

○趙 香花[1)]，長沼洋一[2)]，堀井茂男[3)]，野口正行[4)]，河野稔明[1)]，
立森久照[1)]，白石弘巳[5)]，竹島 正[1)]
1) 精神保健計画研究部，2) 司法精神医学研究部，
3) 岡山県精神科病院協会/慈圭病院，4) 岡山県精神保健福祉センター，
5) 東洋大学ライフデザイン学部生活支援学科

【背景と目的】わが国の精神科入院患者の約4割は医療保護入院で、精神科医療における役割は極めて重要であるが、制度存続を巡っては賛否両論が続いている。そんな中、2011年1月7日から、厚生省による「保護者制度・入院制度の検討（「新たな地域精神保健医療体制の構築に向けた検討チーム第3ラウンド」」が始まっており、保護者制度の見直しについて平成24年内を目途に結論を得ようとしている。医療保護入院制度の見直しについては、精神保健に関わる専門職者と当事者の間で関心が高まりつつあるが、制度の運用実態や当事者の状況を明らかにした関連研究は十分に蓄積されていない。本研究では、医療保護入院制度に関わる医療機関、市町村、保護者へのアンケート調査を通して、医療保護入院制度の運用上の実態と課題を明らかにし、制度の見直しや適正な運用に役立てる。

【対象と方法】岡山県の精神科病院24カ所のうち、本調査への協力が得られた20カ所を対象に以下の4種類の調査票を郵送した。①施設票A（在院患者数や医療保護入院制度で経験した課題等）、②施設票B（医療保護入院患者全員の属性及び保護者情報等）、③保護者票A（続柄、生活状況、保護義務の履行状況等）、④保護者票B（市町村長が保護者の場合の保護義務の履行状況と経験した課題等）。対象病院には、①②についての返答、および医療保護入院患者の3分の1に該当する保護者宛て（868名）に③④の郵送を依頼した。

【結果と考察】回収率は施設票100%、保護者票56.9%であった。岡山県の医療保護入院患者は約56%で、全国平均の4割よりやや高かった。診断別ではF2が51.3%、F0が38.0%と約9割を占めていた。医療機関が経験した課題としては、「保護者と連絡が取れ難い」が最も多かった。患者と保護者の平均年齢は共に高齢化（患者67歳、保護者63歳）しており、保護者の多くは保護義務が果たせ難い状況（生活・健康）にあることが浮き彫りとなった。患者退院後の対応については、約7割の保護者が「引き続き病院、または施設にいて欲しい」と回答しており、引き取り責任の履行が困難であることを示した。一方、保護者の役割については、約6割が「続けたい」と答えており、保護者制度や役割の受容と保護義務の履行実態は必ずしも一致しないことが明らかとなった。また、医療保護入院においては市長村長の同意が得られ難く、保護者の役割も果たせていない課題が明らかとなった。

精神保健計画研究部

精神科訪問看護の有効活用に関する研究

○廣川聖子[1)2)]，萱間真美[3)]，角田 秋[3)]，
大熊恵子[2)]，林 亜希子[4)]，瀬戸屋 希[5)]，竹島 正[1)]
1) 精神保健計画研究部，2) 聖路加看護大学大学院博士課程，
3) 聖路加看護大学，4) 覚王山メンタルクリニック，5) 前 聖路加看護大学

【目的】精神科訪問看護のケア内容の標準化（地域連携クリニカルパスの作成）とその普及・有効活用を目指し，精神科訪問看護クリニカルパス試案を作成することを目的とした。

【方法】平成21年度に，パスのコンテンツ抽出のための文献検討および聞き取り調査，平成22年度に，基盤パスの開発および利用者の状態変化に応じたコ・パスの検討，平成23年度は，作成した精神科訪問看護クリニカルパス冊子体を11施設で試用し，アンケートおよびヒアリングによってフィードバックを得て，改良点および使用可能性を検討した。

【結果および考察】作成にあたり行った文献検討および訪問看護師への聞き取り調査から、利用者の視点でのアウトカムを明示すること，訪問看護師・関連職種が実施する項目（タスク項目）と，アセスメントの項目がわかるように示すこと，他職種・他部門・他機関での連携の動きが分かりやすく，かつその中での訪問看護師の役割が明確に示されるような工夫が必要であると考えられた。これらをもとに作成したクリニカルパス冊子体の試用の結果，以下のフィードバックが得られた。病院スタッフからは，退院後までの視野を持てることがよい，多職種の動きがわかるのが良いとの評価の一方で，多職種連携のためにはそれまでの職場での協力関係によるところが大きいとの声もあった。また，パスのコンテンツが細かさについては施設によりニーズが二分した。訪問看護師からは，新規だけでなく入院を繰り返す利用者のためのパスの必要性，地域から入院に向けたパスの必要性についても言及された。

【結論】本研究での取り組みから得られた検討課題から、より一般的に活用可能な地域連携パスの内容についての示唆が得られた。あわせて、現在試用しているケースについて引き続き経過を確認し、今後さらに活用しやすい内容へ洗練していく必要がある。

自殺予防総合対策センター

自死遺族支援グループの評価に関する研究

○川野健治 [1)]，白神敬介 [1)]，伊藤真人 [2)]，川島大輔 [3)]，桑原 寛 [4)]，
白川教人 [5)]，杉本脩子 [6)]，鈴木志麻子 [7)]
1）自殺予防総合対策センター，2）川崎市精神保健福祉センター，
3）北海道教育大学，4）神奈川県精神保健福祉センター，
5）横浜市こころの健康相談センター，
6）全国自死遺族総合支援センター，7）相模原市精神保健福祉センター

【問題と目的】平成 24 年度の地域自殺対策強化基金では、自殺対策に検証プロセスを含むことを推奨しており、自治体が自死遺族支援グループを中心に運営する自死遺族支援についても、検討が必要である。しかし、自死遺族支援グループの機能について、実証的に明らかにした研究は国内外ともに極めて乏しい。これには①個々のグループの規模が小さく断続的な参加形態も多いため方法的に難しい、②グループの活動を研究材料とすることや第三者が介入することに自死遺族が抵抗を感じる、③支援者も二次的被害の回避と守秘義務を重視している、といった課題があるためと考えられる。そこで本研究では、自治体での自死遺族支援評価の実行可能性を検討することを目的とする。
【方法】23 年度の神奈川県、川崎市、相模原市、横浜市（以下神奈川 4 県市）の自死遺族支援事業について評価を行う。この 4 箇所は一つの NPO がグループ運営を支援しており、あわせて活動を評価できる可能性がある。課題の②、③については、Rossi ら（2005）の提唱するプログラム評価を、NPO、行政スタッフ、研究者、また当事者が協働して行うことで対応した。具体的作業として、関係者が集まり、ディスカッションを通して事業の目的「神奈川県の自死遺族が安心して過ごせる場所を提供する」とその下位概念によるロジックモデルを作成し、測定指標の検討を行った。23 年度の評価時期は指標によって異なるが、以下では、グループ運営に関わる行政スタッフによる、グループの機能に関する評価観察について報告する。海外の自死遺族の自助グループ活動から抽出された相互扶助の 10 の原理（Feigelman & Feigelman, 2008）に基づき調査項目を準備した。
【結果】神奈川 4 県市から、各 2 名の行政スタッフを対象に、2011 年 12 月にアンケート調査を実施した。また、国内で自死遺族支援グループを運営している他の自治体にも調査協力者を求め、28 自治体から 44 名の回答を得た。相互扶助の 10 の原理のうち、「2.普段は話せない話題（故人に対する怒りや他人への失望感、自殺念慮、負担からの解放感など）について口にしている」では神奈川 4 県市のグループでより多く、逆に「4.他の参加者が問題を解決するのを手助けしている」は少ないことが見出された。
【考察】他の自治体との差異は、神奈川 4 県市の自死遺族支援の事業目標に照らし了解できるものであったが、新たな検討課題ともいえる。また、相互扶助の 10 の原理に基づく評価は、他の自治体でも一部は実施可能と考えられるため、今後は提案していきたい。

自殺予防総合対策センター

都道府県・政令指定都市における自殺対策の取組

○大槻露華，稲垣正俊，川野健治，勝又陽太郎，松本俊彦，竹島 正
自殺予防総合対策センター

平成 18 年に自殺対策基本法が施行され、それに基づき、平成 19 年 6 月には政府が推進すべき自殺対策の指針として、自殺総合対策大綱（以下、大綱）が策定された。大綱はおおむね 5 年を目途に見直しを行うこととされており、平成 23 年 3 月 1 日に大綱の見直しに向けた検討に着手することが閣議決定された。大綱の「自殺を予防するための当面の重点施策」（以降、重点施策）は 9 本の柱、50 の項目で構成され、「地方公共団体においては、本大綱を踏まえつつ、地域の実情に応じた施策を設定する必要がある」との記述がある。そこで、自殺予防総合対策センターではこれまでの各自治体の取組を振り返り、大綱を改正するにあたり必要な情報を提供することを目的として、大綱が策定されて以降の都道府県・政令指定都市（以降、自治体）における重点施策の取組状況を調査した。
全国の 66 の自治体を対象とし、各自治体の自殺対策主管課に調査票を郵送した。調査票の記入にあたり、自殺対策主管課に精神保健福祉センターや保健所などの自殺対策の現場の担当者の協力により回答することを依頼した。本調査では、重点施策の各項目について、大綱が策定されて以降、平成 22 年度までにおいて、プロセス評価として①事業の実施、②難易度、③評価方法の設定、アウトカム評価として④効果、費用対効果として⑤今後の必要性、⑥優先度、を質問した。各施策には複数の内容にまたがり記述されている場合があるため、便宜的に大綱で示された文章を段落で分割し、計 67 の内容について質問した。実施主体が他の部署であり、自殺対策主管課で回答ができないと判断される場合には該当する担当機関名を記載するように依頼した。
全 66 自治体から回答を得た。重点施策は多岐にわたっているため、主管課では取組状況を把握することが困難である領域もあった。事業の評価方法が設定されているものは少なかった。優先すべき対策をより効果的に実施するためにもモニタリング・評価の仕組みが必要だろう。

自殺予防総合対策センター

千葉県船橋市における自殺企図の実態：市消防局救急課の救急活動記録の分析

○山内貴史 [1)]，高橋恵美子 [2)]，内田祥子 [3)]，友久保智子 [3)]，竹島 正 [1)]

1）自殺予防総合対策センター　2）船橋市消防局　救急課

3）船橋市役所　健康福祉局健康部　健康政策課

【目的】自殺未遂者は自殺死亡者の約 10～20 倍存在すると推定されている。しかしながら、わが国では、自殺未遂を含めた自殺企図に関する統計的調査は三次救急医療機関など病院ベースで行われたものが多く、地域ベースでの研究はほとんどない。本研究では、千葉県船橋市消防局救急課の「救急活動記録」をもとに、地域の自殺企図者の特徴および自殺企図と精神疾患との関連を明らかにすることを目的とした。
【方法】平成 20 年 1 月から平成 22 年 12 月の 3 年間に、船橋市内で自損行為により救急自動車が出動した自殺企図者についての救急活動記録を分析資料とした。自殺企図者の延べ人数は 707 例、実人数は 653 人であった。性・転帰（自殺未遂、自殺死亡）別に、年齢、職業、自殺手段、疾患既往歴、複数回の自殺企図の有無の各要因について分析を行った。分析に際しては、国立精神・神経医療研究センター倫理委員会の承認を得た。
【結果および考察】自殺企図者 653 人のうち、自殺死亡者は男性 105 人、女性 58 人の計 163 人、自殺未遂者は男性 147 人、女性 343 人の計 490 人であり、自殺企図者全体の 52.5%が女性の自殺未遂者であった。男性では自殺企図者の 41.7%が自殺死亡者であったのに対し、女性では自殺死亡者の割合は 14.5%であった。男女ともに自殺死亡者は 30 歳代以上に多く、自殺未遂者は 20 歳代から 40 歳代に多い傾向がみられた。手段に関しては、男女ともに自殺死亡は縊頸によるものが多く、自殺未遂は薬物または切創によるものが多かったが、このような傾向は特に女性で顕著であった。既往歴に関しては、女性の自殺未遂者の 70.8%、女性の自殺死亡者の 56.9%に精神疾患の既往歴がみられた。一方、男性では、精神疾患既往歴ありの者の割合は未遂者で 44.2%、死亡者で 26.7%であり、既往歴不詳の者が多かった。複数回自殺企図の有無に関しては、男性 3 人、女性 29 人の計 32 人が期間内に自殺企図を繰り返しており、3 人は期間内に自殺死亡が確認された。複数回企図者の 81.4%は 10 歳代から 40 歳代の女性であった。また、複数回企図者の 90.6%に精神疾患の既往歴がみられた。
【結論】船橋市救急活動記録の分析の結果、自殺未遂者、特に自殺未遂を繰り返す者には精神疾患既往歴がある者が多く、自殺未遂者に対する精神科医療支援の重要性が示唆された。

心身医学研究部

女子大学生のダイエット経験者および気晴らし喰い経験者の心理的・身体的特徴

○安藤哲也 [1)]，東風谷祐子 [2)]，市丸雄平 [2)]，

兒玉直樹 [1)]，菊地裕絵 [1)]，小牧 元 [1)]

1）心身医学研究部，　2）東京家政大学家政学部栄養学科

【背景】近年、若年女性の平均 BMI は低下してやせの割合が増加し、それに伴い食行動の異常を呈する女性や摂食障害患者の割合の増加している。
【目的】若年女性の体型や食行動異常に関連する心理的、身体的要因を明らかにする。
【方法】対象は女子大学生のボランティアで摂食障害その他の既往のない 280 名である。摂食態度調査票（EAT-26）、摂食障害調査票（EDI-2）、抑うつ、不安、強迫、完璧主義、自尊感情、ストレッサー、コーピング、性格特性を質問紙で調べ身体計測を実施した。血液中の蛋白、脂質、糖、コルチゾール、IGF-I、freeT3 等を測定した。１）BMI 基準によるやせ、２）ダイエット歴の有無、３）過去 3 ヶ月間の気晴らし喰いの有無、と心理・身体・血液測定値との関連を統計的に解析した。
【結果】対象者の年齢の平均（SD）は 20.7 (0.5)才、体格指数（BMI）は 20.4(2.3)kg/m^2、体脂肪率は 27.1(4.5)%であった。１）やせは 21.7%、普通 73.8%、肥満 4.5%であった。やせ群では生理不順を訴える割合が高かった。EDI-2 の「過食」、「やせ願望-身体への不満」の得点が低く、アルブミン値が高く、LDL と IGF-I は低い傾向がみられた。２）ダイエットを現在実施している者は 24.9%、過去に経験した者は 36.8%に上った。経験群では非経験群に比べ現在および過去の最低・最高・最長 BMI が有意に高かった。しかし理想の BMI は約 19kg/m^2 で非経験群と差がなく、実際と理想との隔たりが非経験群に比べ大きかった。また経験群では EDI-2 の「過食」と「やせ願望-身体への不満」の得点が高く、freeT3 が低い傾向がみられた。３）過去 3 ヵ月以内に気晴らし喰いを経験した者は 30.3%であった。経験群では非経験群に比較し、現在・過去の BMI、過食、やせ願望-身体への不満、内界への気づきの欠如、衝動統制の困難さ、不安、抑うつ、ストレッサー、責任受容型コーピング、強迫傾向、完璧主義、神経症傾向、失感情症傾向の得点が高く、誠実性や自尊感情が低い傾向がみられた。
【考察】元々の体重が高く理想体重との隔たりが大きいことが身体への不満を強め、ダイエットの動機となっていると考えられた。ダイエット自体の健康への悪影響として代謝の低下が認められた。一方、気晴らし喰いにはまた、気晴らし喰いには日常生活のストレスが大きいこと、責任受容型コーピングを取る傾向が強いこと、抑うつ、衝動統制の困難さ、誠実性の低さなど多くの心理的要因が関連していることが示唆された。

心身医学研究部

The 20-item Toronto Alexithymia Scale（TAS-20）でとらえる アレキシサイミアのパーソナリティに基づく検討

○上野真弓 [1)]，菊地裕絵 [1)]，安藤哲也 [1)]，守口善也 [2)]，
前田基成 [3)]，小牧 元 [1)]
1）心身医学研究部，2）精神生理研究部，3）女子美術大学 芸術学部

【目的】心身症の素因のひとつと考えられているアレキシサイミア傾向を測定する尺度として，現在では the 20–item Toronto Alexithymia Scale（TAS–20）が信頼性･妥当性の高いものとして国内外で広く用いられている (Taylor 他,1994; 小牧他, 2003）。本研究ではこの TAS–20 の得点によりアレキシサイミア傾向が高いとされている者の中に，パーソナリティ特徴の異なるサブグループが存在するか探索的に検討することを目的とした。
【方法】14 歳から 84 歳までの男女 2188 名（男性 1114 名，女性 1074 名，平均年齢 39.44 歳）を対象に，アレキシサイミア傾向を測定する質問紙である TAS–20 の日本語版と，個人のパーソナリティを測定する質問紙である日本語版 the NEO Five–Factor Inventory（NEO–FFI; 下仲他, 1999）を実施した。なお，全参加者より書面によるインフォームドコンセントを得た。
【結果と考察】TAS–20 の下位尺度（感情の同定困難，感情の言語化困難，外的思考）の得点を用い階層的クラスター分析を行ったところ, 特徴の異なる 5 群に分類された。群毎に TAS–20 総合得点について検討したところ，2 つの群において特に高い得点が確認された。さらにこの得点の高かった 2 つの群を比較すると, 一方の群は TAS–20 の下位尺度のうち「感情の同定困難」が高く，もう一方の群は「外的思考」が高いという，異なる特徴が見られた。同様に，NEO–FFI の 5 つの下位尺度（神経症傾向，外向性，経験への開放性，調和性，誠実性）について検討したところ，「感情の同定困難」が高い群は神経症傾向が非常に高く，「外的思考」が高い群は開放性が非常に低いという違いがみられた。これらのことから，従来 TAS–20 によってアレキシサイミアの傾向が高いとされていた者の中には，うつや不安などネガティブな感情を意識する傾向の強いタイプと，様々な物事に対して関心が低く，自らは関わろうとしない感情的に平板なタイプという異なるパーソナリティを有するグループが存在しているものと考えられる。

社会精神保健研究部

隔離室入室期間の人的資源投入とそのコスト調査

○野田寿恵 [1)]，泉田信行 [2)]，杉山直也 [1,3)]，平田豊明 [1,3)]，伊藤弘人 [1)]
1）社会精神保健研究部　2）国立社会保障・人口問題研究所
3）日本精神科救急学会

【背景と目的】精神保健福祉資料によると 1 日の隔離施行者数は 2008 年にて 8,456 人（入院患者の 2.7%）で，海外と比較して多いにもかかわらず [1)]，2006 年から減少傾向は認められていない．隔離の施行量に地域別や施設別なばらつきがあり，精神科救急入院料病棟という基準が統一されている病棟においてでも，月当たりの隔離施行日数は 6～15 日, 入院した患者のうちその月に隔離が開始となった患者割合（施行開始割合）は 30～100%の開きがある．この隔離の施行開始割合はその施設が立地する精神科医療圏の人口と正の相関を認められている [2)]．病棟間の人的配置が同一であれば，濃厚なケアを必要とする隔離中の患者に対して，隔離施行量の多い病棟ではそのケア量が少なくなると考えられる．本研究の目的は，施設別に隔離室入室期間中の標準的なケア量を測定し，施設立地との関係を明らかにし，隔離最小化の検討へ寄与することである．
【対象と方法】精神科救急入院料病棟を有する 3 病院を対象とした予備的研究で有用性の確認できた方法 [3)]を用い，新たに協力が得られた 8 病院を加えて分析対象とした．調査は，該当病棟を担当する医師・看護師・精神保健福祉士を含む多職種チームに対して，精神科急性期の典型的な想定事例を提示し，職種別・ケア内容別に標準的なケア時間についてヒアリングを行う方法を用いた．これら 11 病院は，立地する都道府県の 2006～2008 年 6 月の措置入院および応急入院等の患者数の合計数に応じて，都市型と非都市型に分類した．
【結果】各病院が想定した隔離日数の中央値は，都市型で 11.5 日，非都市型で 9 日であった．人的投入量を都市型と非都市型で比較を行うと，1 日目の都市型の中央値が 755 分，非都市型で 1,719 分であり、非都市型が有意に長かった（$z = -2.75$, $p < 0.01$）．1 日目の直接ケア時間と想定される隔離日数の相関をみたところ，非都市型において 1 日目の直接ケア時間と隔離日数とに有意な負の相関を認めた（$r_s = -0.90$, $p < 0.05$）．都市型においてはそのような相関は認められなかった．
【考察】非都市部の病院では入院初日の直接ケア時間が都市型よりも多く，その初日投入量に応じて隔離期間が有意に短縮されるという結果が得られた. 本報告はシミュレーションという方法的な限界はあるものの, 初めて，わが国の行動制限量の多さを説明する有力な要因にヒューマンパワーがあるとことを示した．措置患者を多く扱い重症者のウエイトが大きい都市部の病院では, 1 人当たりの隔離患者に投入できる直接ケア量が不足しているために，別の要因が隔離期間の施設別相違に関与した可能性がある．

1）野田寿恵，他：精神医学 2009，2）杉山直也，他：精神医学 2010，3）泉田信行，他：精神医学 2010

社会精神保健研究部

国立精神・神経医療研究センター病院における eCODO を用いた行動制限施行日数と患者特性との関連

○佐藤真希子 [1)]，野田寿恵 [1)]，小宅比佐子 [2)]，坂下利香 [2)]，川内健三 [2)]，緒方正道 [2)]，児野愛未 [2)]，篠村純子 [2)]，大柄昭子 [2)]，岸 清次 [2)]，久保田みち子 [2)]，等々力信子 [2)]，森田宏子 [2)]，山口しげ子 [2)]，安西信雄 [2)]，伊藤弘人 [1)]

1）社会精神保健研究部　2）国立精神・神経医療研究センター病院

背景と目的：隔離・身体拘束は，患者の精神症状により引き起こされる危険から患者とスタッフの安全を守るために行われる治療法である．しかし，隔離・身体拘束は，患者治療者関係の構築の妨げや身体的合併症併発の危険性を伴う心理的および身体的副作用をあわせ持つ治療技法であり，常に最小化への努力を重ねる必要がある．社会精神保健研究部は，行動制限最適化データベースソフト（Coercive measure database for optimization; eCODO）を開発した．精神科病棟は日々の隔離・身体拘束の施行状況を eCODO を用いて記録することにより，精神科病院に整備が求められている「行動制限に関する一覧性台帳」を簡便に出力することができる．eCODO は，国際比較可能でかつ医療の質指標としてモニタリングが行える．本研究の目的は，eCODO 導入施設である国立精神・神経医療研究センター（NCNP）病院の患者別台帳を用いて，隔離・身体拘束施行日数と患者特性との関連性を分析し，隔離・身体拘束施行日数に影響を与える要因を明らかにすることである．

研究方法と対象：eCODO をもとに，NCNP 病院へ 2010 年 4 月 1 日以降に入院し，かつ 2011 年 10 月 31 日までに退院し，その間に隔離・身体拘束を受けた患者のべ 372 名を分析対象とした．平均年齢は 48.6 歳，男性 177 名，女性 195 名，患者の平均入院期間は 55.7 日（中央値 44.5 日）あった．隔離を受けた患者は 323 名，平均隔離日数 18.6 日（中央値 14.0 日）であった．身体拘束を受けた患者は 176 名，平均身体拘束日数 20.1 日（中央値 11.5 日）であった．対象患者の ICD10 に基づく主診断は F2（統合失調症圏）146 名，F3（気分障害圏）76 名，G4（発作性障害圏）61 名，F0（器質性精神障害圏）27 名，F1（薬物性精神障害圏）13 名，F6（人格障害圏）13 名，その他 30 名であった．ポアソン回帰分析により年齢，性別，主診断を独立変数とし隔離施行日数および身体拘束施行日数への影響をそれぞれ調査した．

結果：身体拘束施行日数において，主診断に有意な差が見られた．特に，F6 診断で有意に日数が短かった．一方，隔離施行日数は，どの変数においても有意な差は見られなかった．

考察：上記の結果から，身体拘束施行日数に影響を与える要因として主診断が挙げられる． F6 診断の身体拘束施行日数は，他の診断に比べ短期であることが本調査により得られた．NCNP 病院では，F6 診断の患者の危機的状況等に対する，短期の身体拘束の治療体制が反映されている可能性があり，施行日数に影響していると考えられる．一方，隔離施行日数に関しては，いずれの要因も有意な差が認められなかった．急性期病棟における隔離施行時間と患者特性の関連の研究 [1)]では，主診断に有意な差が見られている．しかし，本調査において，NCNP 病院では急性期のみならず幅広く治療を担っていることから病棟特性との関連も考えられ，今後の課題とする．発表当日は，eCODO を導入している他 3 病院を加えた計 4 病院のデータ比較を発表する予定である．

[1)] 佐藤真希子，野田寿恵，杉山直也　他．第 19 回日本精神科救急学会総会，宮崎，2011.10.21.

社会精神保健研究部

抗精神病薬の心毒性に関する報告の分析

○池野 敬 [1)]，石黒智恵子 [2)]，奥村泰之 [1)]，伊藤弘人 [1)]

1）社会精神保健研究部

2）医薬品医療機器総合機構 安全第一部 調査分析課・薬剤疫学課

【目的】薬剤誘発性 QT 延長やそれに伴うトルサードドポアント(TdP)を惹起する医薬品として抗精神病薬などが知られている(1)。これら致死的な副作用の予防や評価は、国際的にも薬事行政の課題となっている(2)。そこで我々は、抗精神病薬による心毒性を把握するために、文献的検討を行うとともに、薬事法に基づき医薬品医療機器総合機構(PMDA)に自発報告された副作用症例における抗精神病薬による心毒性のある副作用症例の整理を行った。

【方法】わが国で薬事承認された抗精神病薬の関与による心毒性（QT 延長、TdP、意識消失、心室細動、心室性頻脈、突然死）に関し、2000 年から 2010 年に報告のあった症例報告（Case Report）を以下の検索式例に従い MEDLINE より収集した（検索式例：(haloperidol AND (“ventricular tachycardia” OR VT), limit: English, Case Report) ）。さらに、わが国における抗精神病薬による心毒性のある副作用症例の報告を、PMDA のホームページに公開されているデータベース(2004 年 1 月～2010 年 12 月までに報告された 178,575 症例）から整理した。なお、本研究では抗精神病薬を定型抗精神病薬（定型）と非定型抗精神病薬（非定型）に分類した。

【結果】QT 延長、TdP、意識消失（失神）、心室細動、心室性頻脈、突然死に関し抗精神病薬による影響を論文調査した結果、それぞれ延報告数は 51 報告（定型 28 報告、非定型 23 報告）、12 報告（定型 5 報告、非定型 7 報告）、11 報告（定型 1 報告、非定型 10 報告）、2 報告（定型 2 報告、非定型 0 報告）、7 報告（定型 2 報告、非定 5 報告）、15 報告（定型 2 報告、非定型 13 報告）であった。一方、PMDA のデータベースでは延症例数は、QT 延長 16 症例（定型 8 症例、非定型 8 症例）、TdP11 症例（定型 4 症例、非定型 7 症例）、意識消失 17 症例（定型 2 症例、非定型 15 症例）、心室細動 8 症例（定型 4 症例、非定型 4 症例）、心室性頻脈 4 症例（定型 1 症例、非定型 3 症例）、突然死 25 症例（定型 6 症例、非定型 19 症例）であった。

【考察】多くはないものの抗精神病薬による複数の重篤な副作用が国内外で報告されていた。これら副作用を予防するためにも、抗精神病薬の投与期間中は定期的な心電図測定や血液検査等を行い、患者の状態を充分に観察することが求められる。

1. Roden DM. N Engl J Med. 2004;350(10):1013-22.　2. Darpo B, et al. J Clin Pharmacol. 2006;46(5):498-507.

薬物依存研究部

鎮静剤（主にベンゾジアゼピン系薬剤）関連障害の実態と臨床的特徴に関する研究

○松本俊彦 [1], 尾崎 茂 [2], 嶋根卓也 [1], 小林桜児 [1,3], 和田 清 [1]

1）薬物依存研究部

2）東京医療生活協同組合 中野総合病院 精神神経科

3）国立精神・神経医療研究センター 病院

【背景】近年、わが国の薬物関連障害臨床では、鎮静剤（主としてベンゾジアゼピン［以下, BZ］系の催眠薬・抗不安薬）関連障害が重要な臨床的課題となっている。
【目的】わが国における鎮静剤関連障害の実態と臨床的特徴を明らかにする。
【方法】対象は、2010 年 9～10 月に全国の有床精神科医療施設の外来受診もくしは入院した薬物関連障害患者 671 例である。そのなかから鎮静剤関連障害患者を抽出し、わが国における代表的な薬物関連障害である覚せい剤関連障害患者との比較を行った。また、乱用リスクの高い BZ 系薬剤を同定するために、全薬物関連障害患者中、BZ 乱用経験患者 139 例を抽出し、文献的対照群とのあいだで BZ 系薬剤の選択率と処方率を比較した。
【結果】薬物関連障害患者 671 例中、鎮静剤関連障害患者は 119 例（17.7%）であり、薬物関連障害患者のなかでは、覚せい剤関連障害患者 361 例（53.8%）に次いで多かった。
鎮静剤関連障害患者と覚せい剤関連障害患者との比較では、鎮静剤関連障害患者は、女性が多く、若年であり、司法的処遇経験者が少なかった。また、快楽の目的ではなく、苦痛緩和の意図から乱用を開始し、その大多数が精神科医師から薬物を入手していた。
鎮静剤関連障害患者における主要な ICD-10 の F1 下位診断では、依存症候群や有害な使用が多かった。また、気分障害やパーソナリティ障害の併存率が高く、自己破壊的行動を呈する者が多く、特に医薬品の過量服薬によるものが多かった。
BZ 系薬剤の選択率と処方率の比較では、triazolam、zolpidem、lormetazepam では選択率が処方率よりも高く、brotizolam と rilmazafon では選択率が処方率より低かった。
【考察】BZ の依存性に関する卒前・卒後教育の強化、薬局薬剤師との連携による乱用防止とともに、専門的な治療体制を整備し、医療が責任をもって医原性の薬物依存を回復させる必要がある。

薬物依存研究部

地域の中学生を対象とした飲酒･喫煙･薬物乱用についての実態調査

○小堀栄子 [1], 嶋根卓也 [1], 和田 清 [1],

仁木敦子 [2,3], 今野弘規 [3], 森脇 俊 [2], 磯 博康 [3]

1）薬物依存研究部,　2）大阪府豊中保健所

3)大阪大学大学院医学系研究科公衆衛生学

【背景】当研究部では 1996 年以来、中学生（12-15 歳）の全国レベルでの代表的集団を対象に、薬物乱用の実態調査を隔年で継続的に実施しているが、地域の中学生の実態把握、及び予防教育の実施・評価・改善を通じた薬物乱用予防の実施には、地域レベルでの調査が欠かせない。そこで本研究を計画･実施した。
【目的】本研究では、地域の中学校の生徒における飲酒・喫煙を含めた薬物乱用の実態把握を目的の 1 つとしているが、今回はその中で薬物乱用に注目して調査結果を報告する。また全国中学生調査の結果を参照し、考察を深める。
【方法】A 市中学校の 1－3 年生全員を対象に、飲酒、喫煙、薬物乱用、および生活背景などに関する無記名自記式質問票調査を実施した。
【結果】全市の生徒数 9,653 人中 3，914 人（9 校）の回答を得た。そのうち、すべての質問項目に無回答の 11 件、性別に無回答の 2 件の計 13 件を除外した 3,901 件（40.4%）を対象に解析した。協力校 9 校の全生徒数に対する回答率は 96.0%であった。薬物の生涯使用割合（カッコ内は全国中学生調査 2010 の結果）は、有機溶剤 0.6%（0.7%）、大麻 0.2%（0.3%）、覚せい剤 0.3%（0.3%）、MDMA 0.2%、ガス 0.6%で、いずれかの使用割合は 1.1%であった。
全国中学生調査では尋ねてこなかった MDMA 及びガスについてみてみると、MDMA 使用者 8 人は全員が有機溶剤、大麻、覚せい剤、ガスのすべてまたはいずれかを使用していたのに対し、ガス使用者は 25 人中 12 人がガスのみの使用であった。
【考察】本調査対象地域の中学生の薬物生涯使用割合は、全国中学生調査のそれと大きな違いは見られない。全国中学生調査で調査していないガスについては、有機溶剤同様、使用者が比較的多く、また単独で使用するケースも一定程度みられたことから、今後の動向が注目される。

薬物依存研究部

合成カンナビノイド誘導体 CP-55,940 の細胞死誘導機序の解明

○富山健一，舩田正彦，和田 清

薬物依存研究部

【背景】最近、我が国において大麻と類似した効果をもたらす俗称「Spice」と呼ばれる違法ドラッグが流通し社会問題となっている。「Spice」は、乾燥した植物に少量の合成カンナビノイド誘導体を添加した製品であることが判明している。合成カンナビノイド誘導体の細胞毒性の発現については不明な点が多い。そこで我々は、「Spice」シリーズに含まれる合成カンナビノイド誘導体の中で、CP-55,940 を標準物質として選び、その細胞毒性について培養細胞を用いて評価した。さらに、CP-55,940 による細胞死誘導メカニズムに関しても詳細に検討を行った。
【方法】合成カンナビノイド誘導体 CP-55,940 の細胞毒性は、NG108-15 細胞および大脳費皮質由来神経細胞を用いて検討した。アポトーシスの誘導は Annexin-V 染色によって確認した。また、アポトーシス誘導における、caspase 活性化、ミトコンドリア障害、さらに細胞内 Ca^{2+}変動の関与について検討を行った。
【結果及び考察】CP-55,940 の処置によって Annexin-V 陽性、ミトコンドリア膜電位低下、caspase-3 の活性化などを伴うアポトーシスの誘導が認められた。CP-55,940 によるアポトーシスの誘導は、CB_1受容体アンタゴニスト AM251 および caspase-3、-9、-12 活性阻害剤によって有意に抑制された。これらの結果から、CP-55,940 は CB_1受容体を介して caspase を活性化させてアポトーシスを誘導することが明らかになった。一方、細胞に CP-55,940 を処置すると細胞内 Ca^{2+}濃度の上昇が見られ、AM251 および N 型 Ca^{2+}チャネル拮抗薬ω- conotoxin の併用によってこの細胞内 Ca^{2+}上昇は有意に抑制された。従って、アポトーシスによる細胞死の誘導は、CB_1受容体を介した細胞内 Ca^{2+}上昇が関与し、特に N 型 Ca^{2+}チャネルを介した Ca^{2+}流入が重要であることが示唆された。

V　平成23年度委託および受託研究課題

	研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
精研所長室	加我牧子	研究代表者	自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究	厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	加我牧子	研究分担者	「ライソゾーム病（ファブリ病含む）に関する調査研究」内「小児副腎白質ジストロフィーの超早期診断法開発に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患克服研究事業）	厚生労働省
	加我牧子	評価委員	「シナプス・ニューロサーキットパソロジーの創成」	新学術領域研究	文部科学省
精神保健計画研究部	竹島　正	研究代表者	精神保健医療福祉体系の改革に関する研究	厚生労働省科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	竹島　正	研究分担者	「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究」内「自殺の心理学的剖検の実施に関する研究」	厚生労働省科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	竹島　正	研究分担者	「精神障害者への対応への国際比較に関する研究」内「欧米を主とした諸外国の精神保健医療福祉政策の調査、評価」	厚生労働省科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（身体・知的等障害分野））	厚生労働省
	竹島　正	研究分担者	「精神病初回発症例の疫学研究および早期支援・早期治療法の開発と効果確認に関する臨床研究」内「早期介入の精神保健システムにおける位置づけの検討」	厚生労働省科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	竹島　正	研究分担者	「精神障害者の重症度に応じた評価手法の開発に関する研究」内「既存の統計資料を用いた機能分化の現状分析と将来予測」	厚生労働省科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	竹島　正	研究分担者	「てんかんの有病率等に関する疫学研究及び診療実態の分析と治療体制の整備に関する研究」内「てんかんの地域医療における保健行政的研究、国外調査及び提言（地域保健領域）」	厚生労働省科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	竹島　正	研究代表者	「芸術活動を続けている精神疾患当事者の作品の分析に基づく啓発資材の開発に関する研究」	日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究C）	独立行政法人日本学術振興会
	竹島　正	検討委員/調査事業担当	「地域精神保健福祉活動における保健所機能強化ガイドラインの作成」内「保健所及び市区町村における精神保健福祉業務に関する調査」	障害者総合福祉推進事業（指定課題２０）	厚生労働省
	竹島　正	申請者	ＮＣＮＰ・メルボルン大学合同カンファレンス（10/31～11/1）	国際研究集会助成	独立行政法人国立精神・神経医療研究センター
	立森久照	研究分担者	「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究」内「精神保健医療福祉体系の改革のモニタリングの詳細分析」	厚生労働省科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	立森久照	研究分担者	「てんかんの有病率等に関する疫学研究及び診療実態の分析と治療体制の整備に関する研究」内「患者調査では把握できないてんかん患者数に関する研究」	厚生労働省科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	立森久照	研究分担者	「児童・思春期摂食障害に関する基盤的調査研究」内「児童・思春期摂食障害に関する疫学調査の実施基盤整備」	厚生労働省科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省

	研究者氏名	主任,代表分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費交付機関
	趙　香花	研究分担者	「統合失調症患者の家族の認知行動様式に関する日韓比較共同研究」内「自傷他害による危機的状況に関するトラウマと支援ニーズに関する検討」	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究B）	文部科学省
	荘島幸子	研究代表者	「思春期・青年期の性的少数者と自殺予防：学校における自己構築を支えるモデルの構築」	文部科学省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）	文部科学省
薬物依存研究部	和田　清	主任研究者	アルコールを含めた物質依存に対する病態解明及び心理社会的治療法の開発に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人国立精神・神経医療研究センター
	和田　清	研究代表者	薬物乱用・依存等の実態把握と薬物依存症者に関する制度的社会資源の現状と課題に関する研究	厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業）	厚生労働省
	和田　清	研究分担者	飲酒・喫煙・くすりの使用についてのアンケート調査（2011年）通称：薬物使用に関する全国住民調査（2011年）	厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業）	厚生労働省
	和田　清	研究分担者	薬物乱用・依存者のHIV感染と行動のモニタリングに関する研究	厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策研究事業）	厚生労働省
	松本俊彦	研究代表者	薬物依存症に対する認知行動療法の開発とその効果に関する研」	厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	松本俊彦	研究分担者	司法関連施設における少年用薬物乱用防止教育ツールによる介入効果とその普及に関する研究	厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業）	厚生労働省
	松本俊彦	研究分担者	自殺のハイリスク者の実態解明及び自殺予防に関する研究	厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	松本俊彦	研究分担者	自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究	厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	松本俊彦	研究分担者	様々な依存症における医療・福祉の回復プログラムの策定に関する研究	厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	松本俊彦	研究分担者	「医療観察法」指定入院医療機関への入院患者を対象とした認知行動療法の開発と普及に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人国立精神・神経医療研究センター
	舩田正彦	研究代表者	違法ドラッグの精神依存並びに精神障害の発症機序と乱用実態把握に関する研究	厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業）	厚生労働省
	舩田正彦	分担研究者	大麻成分の薬物依存性及び神経毒性に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人国立精神・神経医療研究センター
	舩田正彦	研究分担者	脱法ハーブ含有合成カンナビノイドの薬物依存性および細胞毒性の評価	厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業）	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	クラブユーザーにおけるMDMA等のクラブドラッグ乱用実態に関する研究	厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業）	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	若年薬物乱用者向け認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究	厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	薬剤師を情報源とする医薬品乱用の実態把握に関する研究	厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業）	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	インターネットによるMSMのHIV感染予防に関する行動疫学研究	厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策研究事業）	厚生労働省

	研究者氏名	主任,代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
	富山健一	研究分担者	合成カンナビノイドの薬物弁別刺激特性：カンナビノイド受容体の役割	厚生労働科学研究費補助金 （医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業）	厚生労働省
	小堀栄子	研究代表者	在日タイ人の健康に関するフィールドワーク：社会階層の形成と格差の広がりの中で	文部科学省科学研究費補助金	文部科学省
心身医学研究部	小牧　元	研究代表者	神経性食欲不振症を対象とした一塩基多型マーカーによるゲノムワイド相関遺伝子解析	日本学術振興会科学研究費補助金 （基盤研究B）	独立行政法人 日本学術振興会
	小牧　元	研究代表者	児童・思春期摂食障害に関する基盤的調査研究	厚生労働科学研究費補助金 （障害者対策総合研究事業 （精神障害分野））	厚生労働省
	小牧　元	主任研究者	心身症の病態解明ならびに効果的治療法の開発研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	小牧　元	分担研究者	「心身症の病態解明ならびに効果的治療法の開発研究」内「肥満・摂食障害の病態解明ならびにCBTの開発研究」	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	小牧　元	研究分担者	アレキシサイミアにおける、自己意識・メタ認知に関する統合的脳機能画像研究	日本学術振興会科学研究費補助金 （基盤研究B）	独立行政法人 日本学術振興会
	安藤哲也	研究代表者	摂食障害のプロテインアクティブアレイを用いた網羅的自己抗体スクリーニング	日本学術振興会科学研究費補助金 （基盤研究C）	独立行政法人 日本学術振興会
	安藤哲也	研究分担者	神経性食欲不振症を対象とした一塩基多型マーカーによるゲノムワイド相関遺伝子解析	日本学術振興会科学研究費補助金 （基盤研究B）	独立行政法人 日本学術振興会
	安藤哲也	分担研究者	「心身症の病態解明ならびに効果的治療法の開発研究」内「機能性消化管障害の臨床評価ならびにCBT開発研究」	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	菊地裕絵	研究代表者	EMAによる日常生活下での多面的調査を用いた肥満成人における食行動関連要因の同定	日本学術振興会科学研究費補助金 （若手研究B）	独立行政法人 日本学術振興会
	菊地裕絵	分担研究者	「心身症の病態解明ならびに効果的治療法の開発研究」内「日常生活下のストレスの多面的評価法の開発」	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	兒玉直樹	研究代表者	他者比較における自己評価：摂食障害を対象とした機能画像研究	日本学術振興会科学研究費補助金 （挑戦的萌芽研究）	独立行政法人 日本学術振興会
児童・思春期精神保健研究部	神尾　陽子	研究代表者	就学前後の児童における発達障害の有病率とその発達的変化：地域ベースの横断的および縦断的研究	厚生労働科学研究費補助金 （障害者対策総合研究事業 （精神障害分野）	厚生労働省
	神尾　陽子	主任研究者	精神医学的障害の早期発見と早期介入：児童期から成人期への連続性・不連続性の解明	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	神尾　陽子	研究代表者	「特定不能の広汎性発達障害」の境界と異種性についての研究	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究C	文部科学省
	神尾　陽子	研究代表者	発達障害の子どもと家族への早期支援システムの社会実装	社会技術研究開発センター 社会技術研究開発事業 （研究開発成果実装支援プログラム）	独立行政法人 科学技術振興機構

	研究者氏名	主任,代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
	神尾　陽子	研究分担者	「発達障害者に対する長期的な追跡調査を踏まえ、幼児期から成人期に至る診断等の指針を開発する研究」内「ライフステージに応じた多元的鑑別指標の固定に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 （障害者対策総合研究事業 （精神障害分野）	厚生労働省
	神尾　陽子	分担研究者	「精神医学的障害の早期発見と早期介入：児童期から成人期への連続性・不連続性の解明」内「幼児期、児童期から青年期への発達軌跡の多様性と介入可能性」	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	神尾　陽子	研究分担者	成人期注意欠陥・多動性障害の疫学、診断、治療法に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 （障害者対策総合研究事業 （身体・知的等障害分野）	厚生労働省
	高橋　秀俊	研究代表者	自閉症スペクトラムの児童期の聴覚性驚愕反射の生理的メカニズムの解明に関する研究	文部科学省科学研究費補助金 研究活動スタート支援	文部科学省
	高橋　秀俊	分担研究者	「精神医学的障害の早期発見と早期介入：児童期から成人期への連続性・不連続性の解明」内「聴覚性驚愕反射の制御機構を用いた児童期から成人期における精神医学的障害の早期発見と早期介入に関わる認知・生理学的病態解明に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	稲田　尚子	研究分担者	自閉症児と定型発達児の比較研究：社会性発達成立基盤-自己制御と共感	文部科学省科学研究費補助金 （基盤研究C）	文部科学省
	稲田　尚子	研究分担者	自閉症スペクトラムを対象とした感情コントロール促進プログラムの開発	文部科学省科学研究費補助金 （基盤研究C）	文部科学省
	森脇　愛子	研究分担者	自閉症スペクトラム障害児に対する仲間関係の形成のための支援法の開発と効果の検討	文部科学省科学研究費補助金 （基盤研究C）	文部科学省
	石川　文子	研究代表者	自閉症児と定型発達児の比較研究：社会性発達成立基盤-自己制御と共感	文部科学省科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究	文部科学省
	則内まどか	研究代表者	自閉症スペクトラム児をもつ母親の養育行動を支える神経基盤に関する研究	文部科学省科学研究費 学術研究助成基金 （若手研究B）	文部科学省
成人精神保健研究部	金　吉晴	研究代表者	大規模災害や、犯罪被害等による精神科疾患の実態把握と介入手法の開発に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 （障害者対策総合研究事業 （精神障害分野））	厚生労働省
	金　吉晴	研究分担者	「大規模災害や犯罪被害等による精神疾患の実態把握と対応ガイドラインの作成・評価に関する研究」内「東日本大震災後の精神医療初期対応の概要」	厚生労働科学研究費補助金 （障害者対策総合研究事業 （精神障害分野））	厚生労働省
	金　吉晴	研究分担者	「大規模災害や犯罪被害等による精神疾患の実態把握と対応ガイドラインの作成・評価に関する研究」内「自然災害のメンタルヘルスに関する研修の効果について-予備的調査-」	厚生労働科学研究費補助金 （障害者対策総合研究事業 （精神障害分野））	厚生労働省
	金　吉晴	研究代表者	健康危機発生時における地域健康安全に係る効果的な健康保健医療体制の構築に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 （健康安全・危機管理対策総合事業）	厚生労働省
	金　吉晴	研究分担者	「健康危機発生時における地域健康安全に係る効果的な精神保健医療体制の構築に関する研究」内「災害時の精神保健医療対応の課題について」	厚生労働科学研究費補助金 （健康安全・危機管理対策総合事業）	厚生労働省
	金　吉晴	研究分担者	「精神療法の有効性の確立と普及に関する研究」内「トラウマ（複雑性悲嘆を含む）に対する認知行動療法の均霑化に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 （障害者対策総合研究事業 （精神障害分野））	厚生労働省

	研究者氏名	主任,代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
	金 吉晴	共同研究者	「恐怖記憶制御の分子機構の理解に基づいたPTSDの根本的予防法・治療法の創出」内「PTSDのエクスポージャー療法に対する増強療法の開発」	戦略的創造研究推進事業（CREST）	独立行政法人 科学技術振興機構
	金 吉晴	主任研究者	わが国における低強度認知行動療法実施マニュアルの開発と地域への応用可能性に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	松岡 豊	共同研究者	「恐怖記憶制御の分子機構の理解に基づいたPTSDの根本的予防法・治療法の創出」内「不飽和脂肪酸によるPTSD予防法の開発」	戦略的創造研究推進事業（CREST）	独立行政法人 科学技術振興機構
	松岡 豊	研究分担者	「精神・神経・筋分野における治験・臨床研究の推進のための基盤整備に関する研究」内「験・臨床研究に関する教育研修プログラムの整備」	厚生労働科学研究費補助金 （医療技術実用化総合研究事業）	厚生労働省
	中島聡美	研究代表者	複雑性悲嘆の認知行動療法の効果の検証およびインターネット治療のプログラムの開発	日本学術振興会科学研究費補助金 （基盤研究B）	独立行政法人 日本学術振興会
	中島聡美	研究分担者	「大規模災害や犯罪被害等による精神疾患の実態把握と対応ガイドラインの作成・評価に関する研究」内「犯罪被害者の急性期心理ケアプログラムの構築に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 （障害者対策総合研究事業 （精神障害分野））	厚生労働省
	中島聡美	研究分担者	「健康危機発生時における地域健康安全に係る効果的な精神保健医療体制の構築に関する研究」内「大規模災害時精神保健活動における被災地行政支援の在り方についての検討」	厚生労働科学研究費補助金 （健康安全・危機管理対策総合事業）	厚生労働省
	鈴木友理子	研究分担者	「精神障害者への対応への国際比較に関する研究」内「災害時の国際機関等との連携と我が国の役割」	厚生労働科学研究費補助金 （障害者対策総合研究事業 （身体・知的等障害分野））	厚生労働省
	鈴木友理子	研究分担者	「大規模災害や犯罪被害等による精神疾患の実態把握と対応ガイドラインの作成・評価に関する研究」内「心的外傷後ストレス障害のスクリーニングおよび症状評価のための自記式調査票の開発、尺度特性の検討」	厚生労働科学研究費補助金 （障害者対策総合研究事業 （精神障害分野））	厚生労働省
	鈴木友理子	研究分担者	「健康危機発生時における地域健康安全に係る効果的な精神保健医療体制の構築に関する研究」内「災害精神保健に関する研修体制の構築および効果評価研究の予備的検討」	厚生労働科学研究費補助金 （健康安全・危機管理対策総合事業）	厚生労働省
	鈴木友理子	研究分担者	「自殺対策のための複合的介入法の開発に関する研究」内「行政データとの比較検討」	厚生労働科学研究費補助金 （障害者対策総合研究事業 （精神障害分野））	厚生労働省
	栗山健一	研究代表者	睡眠中の作働記憶容量強化メカニズムの解明	文部科学省科学研究費補助金 （若手研究B）	文部科学省
	栗山健一	研究代表者	D-サイクロセリンによる睡眠中の恐怖記憶消去学習強化への影響の検討	2010年度医学系研究奨励金 （精神疾患・脳疾患）	公益財団法人 武田化学振興財団
	栗山健一	研究代表者	抑圧された外傷出来事記憶が睡眠剥奪により受ける影響の精神生理学的検討	2011（平成23）年度 「睡眠の生物化学」研究助成	財団法人 中山科学振興財団
	栗山健一	研究代表者	高照度光照射による外傷記憶消去促進効果の検討：PTSD補助治療としての高照度光の有用性	平成23年度（第5回） 精神薬療分野萌芽研究助成	公益財団法人 先進医薬研究振興財団
	本間元康	研究代表者	痛みの認識に基づく触知覚メカニズムの検討：脳機能画像手法を用いて	文部科学省科学研究費補助金 （若手研究B）	文部科学省

	研究者氏名	主任,代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
	本間元康	研究代表者	余震の長期経験後に生じる平衡感覚の異常に関する予備的研究	震災からの復興のための実践活動及び研究	公益社団法人 日本心理学会
	本間元康	研究分担者	脳機能画像手法に基づく触の錯覚の検討と解離性離隔の臨床治療への実証的試み	文部科学省科学研究費補助金 （基盤研究B）	文部科学省
	伊藤正哉	研究代表者	共感的自己なだめによる感情調整プロセス：課題分析に基づく心理療法プロセス研究	日本学術振興会科学研究費補助金 （特別研究員奨励費）	独立行政法人 日本学術振興会
	伊藤正哉	研究代表者	震災により死別・離別を経験した遺族への心理社会的支援	震災からの復興のための実践活動及び研究	公益社団法人 日本心理学会
精神薬理研究部	山田光彦	研究代表者	自殺対策のための複合的介入法の開発に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 （障害者対策総合研究事業 （精神障害分野））	厚生労働省
	山田光彦	研究分担者	「うつ病の最適治療ストラテジーを確立するための大規模多施設共同研究」内「一般身体診療科におけるうつ病の早期発見と治療への導入に関する研究の総括」	厚生労働科学研究費補助金 （障害者対策総合研究事業 （精神障害分野））	厚生労働省
	山田光彦	研究分担者	「精神・神経・筋分野における治験・臨床研究の推進のための基盤整備に関する研究」内「治験を含む臨床研究のための体制強化」	厚生労働科学研究費補助金 （医療技術実用化総合研究事業）	厚生労働省
	山田光彦	主任研究者	気分障害の病態解明と診断治療法の開発に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	山田光彦	主任研究者	精神神経領域における大規模臨床研究実施基盤の構築に関する検討	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	山田光彦	研究代表者	抗うつ病の作用メカニズムにおけるNotchシグナル伝達系の役割	文部科学省科学研究費補助金 （基盤研究C）	文部科学省
	山田光彦	研究分担者	「うつ病の治癒機転に関連する転写因子MATH2の標的遺伝子の同定と分子機構の解明」内「MATH2-標的遺伝子のプロモーター解析」	文部科学省科学研究費補助金 （基盤研究C）	文部科学省
	山田光彦	研究代表者	内科外来を受診する高齢患者におけるうつ病の自然経過についての観察研究	（財）三菱財団社会福祉研究助成	財団法人 三菱財団
	斎藤顕宜	分担研究者	「気分障害の病態解明と診断治療法の開発に関する研究」内「気分障害治癒を目的としたグルタミン酸神経系を介した神経調節ネットワークの生物学的基盤研究」	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	斎藤顕宜	研究分担者	「抗うつ病の作用メカニズムにおけるNotchシグナル伝達系の役割」内「Notchシグナル伝達系調節による行動解析」	文部科学省科学研究費補助金 （基盤研究C）	文部科学省
	斎藤顕宜	研究分担者	「うつ病の治癒機転に関連する転写因子MATH2の標的遺伝子の同定と分子機構の解明」内「MATH2-標的遺伝子による情動行動変化」	文部科学省科学研究費補助金 （基盤研究C）	文部科学省
	斎藤顕宜	研究代表者	グルタミン酸神経調節薬による情動調節機序に関わる脳内ネットワークの解明	調査研究助成金	財団法人 精神・神経科学振興財団
	斎藤顕宜	研究代表者	抗うつ薬の神経新生亢進作用におけるrho/rhotekin系の役割に関する検討	研究助成金	財団法人 薬理研究会
	斎藤顕宜	研究代表者	新規オピオイドδ受容体作動薬を用いた鎮痛作用および抗うつ・抗不安作用の検討	研究助成金	公益財団法人 中富健康科学振興財団

	研究者氏名	主任,代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
	稲垣正俊	研究分担者	「自殺対策のための複合的介入法の開発に関する研究」内「多施設共同研究における進捗運営管理とデータ管理について」	厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	稲垣正俊	研究分担者	「うつ病の最適治療ストラテジーを確立するための大規模多施設共同研究」内「一般身体診療科におけるうつ病の早期発見と治療への導入に関する研究分担」	厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	稲垣正俊	研究分担者	「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究」内「地域における自殺と関連する精神保健上の問題に関する実態把握の方法と活用の検討」	厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	稲垣正俊	分担研究者	「気分障害の病態解明と診断治療法の開発に関する研究」内「わが国のうつ病治療システムにおけるコラボレーティブケアモデルについての検討」	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人国立精神・神経医療研究センター
	稲垣正俊	分担研究者	「精神神経領域における大規模臨床研究実施基盤の構築に関する検討」内「自殺対策および精神神経領域におけるエビデンスを導く大規模多施設共同研究においてプロトコール、手順書、各種指針を遵守し実施するための体制の検討」	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人国立精神・神経医療研究センター
	米本直裕	研究分担者	「自殺対策のための複合的介入法の開発に関する研究」内「多施設共同研究における進捗運営管理とデータ管理について」	厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	米本直裕	研究分担者	「うつ病の最適治療ストラテジーを確立するための大規模多施設共同研究」内「大規模無作為割り付け比較試験の疫学統計学的基盤の研究」	厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	米本直裕	研究分担者	「精神・神経・筋分野における治験・臨床研究の推進のための基盤整備に関する研究」内「治験を含む臨床研究のための人材育成・体制強化」	厚生労働科学研究費補助金（医療技術実用化総合研究事業）	厚生労働省
	米本直裕	研究分担者	「HTLV-I母子感染予防に関する研究：HTLV-I抗体陽性妊婦からの出生児のコホート研究」内「研究デザイン、統計解析計画の作成」	厚生労働科学研究費補助金（育成疾患克服等次世代育成基盤研究事業）	厚生労働省
	米本直裕	研究分担者	「周産期医療の質と安全の向上のための研究」内「研究デザイン、統計解析計画の作成」	厚生労働科学研究費補助金（地域医療基盤開発推進研究事業）	厚生労働省
	米本直裕	分担研究者	「精神神経領域における大規模臨床研究実施基盤の構築に関する検討」内「自殺対策および精神神経領域におけるエビデンスを導くために必要なデータマネジメント、統計解析の実施体制の検討」	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人国立精神・神経医療研究センター
	米本直裕	分担研究者	「遺伝性神経・筋疾患における患者登録システムの構築と遺伝子診断システムの確立に関する研究」内「遺伝性神経・筋疾患患者情報データベースに対応する遺伝子診断システムの確立」	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人国立精神・神経医療研究センター
	米本直裕	研究代表者	根拠に基づいた自殺予防ガイドラインの策定に関する研究	文部科学省科学研究費補助金（若手研究B）	文部科学省
	山田美佐	研究代表者	うつ病の治癒機転に関連する転写因子MATH2の標的遺伝子の同定と分子機構の解明	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C）	文部科学省

	研究者氏名	主任,代表分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費交付機関
	山田美佐	研究分担者	「抗うつ病の作用メカニズムにおけるNotchシグナル伝達系の役割」内「Notchシグナル伝達系遺伝子の経時的発現変化」	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C）	文部科学省
	山田美佐	研究分担者	「脳を育てるうつ病治療：中枢―末梢両面からの脳神経回路網修復促進機構の解明」内「関連遺伝子発現検討」	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C）	文部科学省
	岩井孝志	研究分担者	「抗うつ病の作用メカニズムにおけるNotchシグナル伝達系の役割」内「Notchシグナル伝達系調節による行動解析」	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C）	文部科学省
	岩井孝志	研究分担者	「うつ病の治癒機転に関連する転写因子MATH2の標的遺伝子の同定と分子機構の解明」内「MATH2-標的遺伝子の機能の解明」	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C）	文部科学省
社会精神保健研究部	伊藤弘人	研究代表者	自殺のハイリスク者の実態解明及び自殺予防に関する研究	厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	伊藤弘人	研究代表者	精神科救急医療における適切な治療法とその有効性等の評価に関する研究	厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	伊藤弘人	主任研究者	精神科医療の質の評価と均てん化に関する研究 23-8	精神・神経疾患研究開発費	厚生労働省
	伊藤弘人	研究分担者	「健康危機発生時における地域健康安全に係る効果的な精神保健医療体制の構築に関する研究」内「災害精神保健体制に関する行政評価研究」	厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）	厚生労働省
	伊藤弘人	研究分担者	「精神障害者への対応への国際比較に関する研究」内「国際政策・医療経済の観点からみた海外諸国の精神科医療」	厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（身体・知的等障害分野））	厚生労働省
	伊藤弘人	研究分担者	「新しい精神科地域医療体制とその評価のあり方に関する研究」内「精神医療全般の医療政策立案ならびに精神科医療の評価に資する指標の開発」	厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	伊藤弘人	研究分担者	「慢性疾患における多剤併用と副作用発現との関連に係る疫学調査の手法に関する研究」内「現存リソースの特徴と副作用に関する分析」	厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業）	厚生労働省
	伊藤弘人	研究分担者	「精神・神経・筋分野における治験・臨床研究の推進のための基盤整備に関する研究」内「「精神及び神経筋疾患領域の治験の動向」に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 厚生科学基盤研究分野 医療技術実用化総合研究（臨床研究基盤整備推進研究）	厚生労働省
	伊藤弘人	分担研究者	「循環器領域における大規模災害時の対策に関する研究」内「循環器疾患におけるメンタルケアの方策」	平成23年度循環器病研究開発費（臨床基盤）	厚生労働省
	堀口寿広	研究代表者	共生社会を実現するための地域づくりを促進する要因の解明	厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（身体・知的等障害分野））	厚生労働省
	野田寿恵	研究分担者	「所得水準と健康水準の関係の実態解明とそれを踏まえた医療・介護保障制度・所得保障制度のあり方に関する研究」内「疾病罹患による所得・健康喪失に関する研究―うつ病罹患による世帯の所得を含む負担についてー」	厚生労働科学研究費補助金 行政政策研究分野 政策科学総合研究（政策科学推進研究事業）	厚生労働省
	奥村泰之	研究代表者	うつ病への集団認知行動療法の効果と認容性の総合評価:無作為化比較試験のメタ分析	文部科学省科学研究費補助金（若手研究B）	文部科学省

	研究者氏名	主任,代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
精神生理研究部	三島和夫	研究代表者	睡眠障害患者のQOLを改善するための科学的根拠に基づいた診断治療技術の開発	厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	三島和夫	研究分担者	就学前後の児童における発達障害の有病率とその発達的変化：地域ベースの横断的および縦断的研究	厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	三島和夫	研究分担者	健康づくりのための休養や睡眠の在り方に関する研究	厚生労働科学研究費補助金（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）	厚生労働省
	三島和夫	研究分担者	向精神薬の処方実態に関する国内外の研究比較	厚生労働科学研究費補助金（特別研究事業）	厚生労働省
	三島和夫	研究代表者	睡眠・覚醒リズム障害の迅速かつ高精度な病態診断システムの開発	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究B）	文部科学省
	三島和夫	主任研究者	睡眠医療及び睡眠研究用プラットフォームの構築に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人国立精神・神経医療研究センター
	三島和夫	研究分担者	体[睡眠・リズム]とこころの恒常性維持及び破綻機構の遺伝子環境相互作用に関する研究	脳科学研究戦略推進プログラム	文部科学省
	守口善也	研究代表者	リアルタイムfMRIによる脳機能画像を用いた、ストレス関連疾患の治療法に関する研究	厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	守口善也	研究分担者	睡眠障害患者のQOLを改善するための科学的根拠に基づいた診断治療技術の開発	厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	守口善也	研究代表者	アレキシサイミアにおける、自己意識・メタ認知に関する統合的脳機能画像研究	文部科学省科学研究費補助金（若手研究B）	文部科学省
	守口善也	研究分担者	発達性「読み」障害に関する臨床的、計算論的、脳機能研究	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究B）	文部科学省
	守口善也	分担研究者	心身症の病態解明ならびに効果的治療法の開発研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人国立精神・神経医療研究センター
	肥田昌子	研究代表者	睡眠障害・生体リズム障害の新規治療薬候補物質の探索	厚生労働科学研究費補助金（創薬基盤推進研究事業）	厚生労働省
	肥田昌子	研究分担者	睡眠障害患者のQOLを改善するための科学的根拠に基づいた診断治療技術の開発	厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	肥田昌子	研究代表者	躁うつ病におけるＷｎｔシグナル系と生物時計システム	文部科学省科学研究費補助金（若手研究B）	文部科学省
	肥田昌子	研究分担者	ヒト網膜のメラノプシンの遺伝子多型およびその機能的役割の解明	文部科学省科学研究費補助金挑戦的萌芽研究	文部科学省
	肥田昌子	研究分担者	睡眠・覚醒リズム障害の迅速かつ高精度な病態診断システムの開発	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究B）	文部科学省
	北村真吾	研究代表者	睡眠調節に関与する生体リズム調節機構と恒常性維持機構との機能的連関の解明	文部科学省科学研究費補助金（若手研究B）	文部科学省
	北村真吾	研究分担者	光の生理心理作用の脳内機序と健康リスクへの適応	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究B）	文部科学省

	研究者氏名	主任,代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
知的障害研究部	稲垣真澄	主任研究者	発達障害の診断および治療法開発に関する臨床研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人国立精神・神経医療研究センター
	稲垣真澄	研究分担者	「学際的研究による顔認知メカニズムの解明」内「顔認知障害の病態生理の解明とその治療法の開発」	文部科学省科学研究費補助金（新学術領域研究）	文部科学省
	稲垣真澄	研究分担者	「生涯に亘って心身の健康を支える脳の分子基盤，環境要因，その失調の解明」内「発達障害児社会認知に関する臨床研究」	「脳科学研究戦略推進プログラム」心身の健康を維持する脳の分子基盤と環境因子（生涯健康脳）課題E	文部科学省
	稲垣真澄	分担研究者	「高次脳機能障害の生物学的基盤」内「精神遅滞・難聴をきたすミュータントマウスによる脳機能障害メカニズムの研究」	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人国立精神・神経医療研究センター
	太田英伸	研究代表者	液晶型光フィルターを用いた早産児の発達障害を予防する次世代人工保育器の開発	産業技術研究助成事業（NEDO若手研究グラント）	新エネルギー・産業技術総合開発機構
	太田英伸	研究代表者	環境センサー遺伝子を用いた胎児発育を促進する子宮環境メカニズムの解明	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C）	独立行政法人日本学術振興会
	太田英伸	研究分担者	「ヘモグロビン型人工赤血球を用いた妊娠高血圧症に伴う胎児低酸素へのナノマイクロ治療」内「ヘモグロビン型人工赤血球を用いた妊娠高血圧症に伴う胎児低酸素へのナノマイクロ治療」	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究B）	独立行政法人日本学術振興会
	太田英伸	研究分担者	「現代の光環境が子宮内膜症を誘導する分子メカニズムの解明」内「現代の光環境が子宮内膜症を誘導する分子メカニズムの解明」	日本学術振興会科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）	独立行政法人日本学術振興会
	太田英伸	研究分担者	「重症新生児のアウトカム改善に関する多施設共同研究」内「NICUにおける光環境調査および早産児発達障害を予防する光環境の開発」	厚生労働科学研究費補助金（成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業）	厚生労働省
	太田英伸	研究代表者	メラノプシンを制御する光フィルターを用いた早産児発達障害を予防する次世代人工保育器の開発	光科学技術財団　研究助成	光科学技術財団
	太田英伸	研究代表者	新生児の視覚発達の解明と睡眠発達を促進する照明器具の開発	医科学応用研究財団　研究助成	医科学応用研究財団
	軍司敦子	研究分担者	「特別支援教育における脳科学の活用に関する総合的研究」内「学習障害への支援」	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究A）	文部科学省
	軍司敦子	主任研究者	脳磁図を用いた発話時の聴覚フィードバック機構とヒト脳機能の研究	平成23年度自然科学研究機構生理学研究所共同利用研究・生体磁気計測装置共同利用実験	自然科学研究機構生理学研究所
	軍司敦子	分担研究者	「発達障害の診断および治療法開発に関する臨床研究」内「自閉症スペクトラムの社会性認知に関する神経生理学的研究」	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人国立精神・神経医療研究センター
	軍司敦子	研究分担者	「学際的研究による顔認知メカニズムの解明」内「顔認知障害の病態生理の解明とその治療法の開発」	文部科学省科学研究費補助金（新学術領域研究）	文部科学省
	矢田部清美	研究代表者	運動と認知の脳内統合モデルに基づいた巧緻運動困難な学習障害児への支援	日本学術振興会科学研究費補助金（若手研究B）	独立行政法人日本学術振興会
	北　洋輔	研究代表者	日常的空間における個体間同期作用の解明と社会性連関モデルの教育支援への展開	日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）	独立行政法人日本学術振興会

	研究者氏名	主任,代表分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費交付機関
社会復帰研究部	伊藤順一郎	研究代表者	「地域生活中心」を推進する、地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究	厚生労働科学研究費補助金（難病･がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業（精神疾患関係研究分野））	厚生労働省
	伊藤順一郎	研究分担者	「アウトリーチ（訪問支援）に関する研究」内「チーム機能のモニタリング」	厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	伊藤順一郎	センター長	地域精神科モデル医療センター	精神・神経疾患研究開発費（専門疾病センター事業費）	独立行政法人国立精神・神経医療研究センター
	吉田光爾	研究分担者	「「地域生活中心」を推進する、地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究」内「多職種アウトリーチチームの効果評価研究」	厚生労働科学研究費補助金（難病･がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業（精神疾患関係研究分野））	厚生労働省
	佐藤さやか	研究分担者	「「地域生活中心」を推進する、地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究」内「認知機能リハビリテーションを用いた就労支援の効果評価」	厚生労働科学研究費補助金（難病･がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業（精神疾患関係研究分野））	厚生労働省
	前田恵子	研究代表者	精神科医療・福祉における訪問型サービスの質の管理	文部科学省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）	文部科学省
司法精神医学研究部	岡田幸之	研究代表者	全国の地方裁判所の裁判員制度における精神鑑定の実態に関する調査研究	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C）	文部科学省
	岡田幸之	研究分担者	「医療観察法制度の鑑定入院と専門的医療の適正化と向上に関する研究」内「医療観察法対象者のモニタリング体制の確立に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	菊池安希子	研究代表者	触法精神障害者の再犯関連要因の調査と介入プログラムの開発	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C）	文部科学省
	菊池安希子	研究分担者	「医療観察法制度の鑑定入院と専門的医療の適正化と向上に関する研究」内「医療観察法対象者のモニタリング体制の確立に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	福井裕輝	研究代表者	限定された合理性に基づく意思決定の神経基盤の解明と触法精神障害者に対する応用	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C）	文部科学省
	安藤久美子	研究分担者	「医療観察法制度の鑑定入院と専門的医療の適正化と向上に関する研究」内「指定通院医療機関モニタリング調査研究」	厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）（精神障害分野））	厚生労働省
	小松容子	研究代表者	医療観察法病棟におけるインボルブメント	文部科学省科学研究費補助金（若手研究B）	文部科学省
	長沼洋一	研究代表者	学生支援における大学ソーシャルワーカーの業務確立プロセスに関する研究	文部科学省科学研究費補助金（若手研究B）	文部科学省
自殺予防総合対策センター	竹島　正	研究代表者	「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究」	厚生労働省科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	竹島　正	研究分担者	「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究」内「自殺の心理学的剖検の実施に関する研究」	厚生労働省科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省

	研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
	竹島　正	研究分担者	「精神障害者への対応への国際比較に関する研究」内「欧米を主とした諸外国の精神保健医療福祉政策の調査、評価]	厚生労働省科学研究費補助金 （障害者対策総合研究事業 （身体・知的等障害分野））	厚生労働省
	竹島　正	研究分担者	「精神病初回発症例の疫学研究および早期支援・早期治療法の開発と効果確認に関する臨床研究」内「早期介入の精神保健システムにおける位置づけの検討」	厚生労働省科学研究費補助金 （障害者対策総合研究事業 （精神障害分野））	厚生労働省
	竹島　正	研究分担者	「精神障害者の重症度に応じた評価手法の開発に関する研究」内「既存の統計資料を用いた機能分化の現状分析と将来予測」	厚生労働省科学研究費補助金 （障害者対策総合研究事業 （精神障害分野））	厚生労働省
	竹島　正	研究分担者	「てんかんの有病率等に関する疫学研究及び診療実態の分析と治療体制の整備に関する研究」内「てんかんの地域医療における保健行政的研究、国外調査及び提言（地域保健領域）」	厚生労働省科学研究費補助金 （障害者対策総合研究事業 （精神障害分野））	厚生労働省
	竹島　正	研究代表者	芸術活動を続けている精神疾患当事者の作品の分析に基づく啓発資材の開発に関する研究	日本学術振興会科学研究費補助金 （基盤研究C）	独立行政法人 日本学術振興会
	竹島　正	検討委員/ 調査事業担当	地域精神保健福祉活動における保健所機能強化ガイドラインの作成	障害者総合福祉推進事業 （指定課題20）	厚生労働省
	竹島　正	申請者	ＮＣＮＰ・メルボルン大学合同カンファレンス（10/31～11/1）	国際研究集会助成	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	松本俊彦	分担研究者	「アルコールを含めた物質依存に対する病態解明及び心理社会的治療法の開発に関する研究」内「「医療観察法」指定入院医療機関への入院患者を対象とした認知行動療法の開発と普及に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	厚生労働省
	松本俊彦	研究分担者	「薬物乱用・依存の実態把握と再乱用防止のための社会資源の現状と課題に関する研究」内「司法関連施設における少年用薬物乱用防止教育ツールによる介入効果とその普及に関する研究」「全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査」	厚生労働科学研究費補助金 （医薬品・医療機器レギュラトリーサイエンス総合研究事業）	厚生労働省
	松本俊彦	研究分担者	「自殺原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究」内「自殺既遂者の心理社会的特徴に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 （障害者対策総合研究事業 （精神障害分野））	厚生労働省
	松本俊彦	研究分担者	「自殺のハイリスク者の実態解明及び自殺予防に関する研究」内「薬物依存・アルコール依存者の自殺の実態解明および自殺予防に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 （こころの健康科学研究事業）	厚生労働省
	松本俊彦	研究代表者	薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 （障害者対策総合研究事業 （精神障害分野））	厚生労働省
	松本俊彦	研究分担者	「様々な依存症における医療・福祉の回復プログラムの策定に関する研究」内「向精神薬乱用と依存」	厚生労働科学研究費補助金 （障害者対策総合研究事業 （精神障害分野））	厚生労働省
	松本俊彦	研究代表者	刑事収容施設における自習ワークブックを用いた覚せい剤依存離脱プログラムの開発とその効果に関する研究	2010年度社会安全研究財団 一般研究助成	財団法人 社会安全研究財団
	川野健治	研究分担者	「自殺のハイリスク者の実態解明及び自殺予防に関する研究」内「地域における自死遺族の支援」	厚生労働科学研究費補助金 （障害者対策総合研究事業 （精神障害分野））	厚生労働省

	研究者氏名	主任,代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
	川野健治	研究代表者	若年層の自殺への態度に関する研究	文部科学省科学研究費補助金 （基盤研究C）	文部科学省
	稲垣正俊	研究分担者	「自殺原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究」内「地域における自殺と関連する精神保健上の問題に関する実態把握の方法と活用の検討」	厚生労働科学研究費補助金 （障害者対策総合研究事業 （精神障害分野））	厚生労働省
	稲垣正俊	研究分担者	「うつ病の最適治療ストラテジーを確立するための大規模多施設共同研究」内「一般身体診療科におけるうつ病の早期発見と治療への導入に関する研究分担」	厚生労働科学研究費補助金 （障害者対策総合研究事業 （精神障害分野））	厚生労働省
	稲垣正俊	研究分担者	「自殺対策のための複合的介入法の開発に関する研究」内「多施設共同研究における進捗運営管理とデータ管理について」	厚生労働科学研究費補助金 （障害者対策総合研究事業 （精神障害分野））	厚生労働省
	稲垣正俊	分担研究者	「気分障害の病態解明と診断治療法の開発に関する研究」内「わが国のうつ病治療システムにおけるコラボレーティブケアモデルについての検討」	精神・神経疾患研究委託費	厚生労働省
	稲垣正俊	分担研究者	「精神神経領域における大規模臨床研究実施基盤の構築に関する検討」内「自殺対策および精神神経領域におけるエビデンスを導く大規模多施設共同研究においてプロトコール、手順書、各種指針を遵守し実施するための体制の検討」	精神・神経疾患研究開発費	厚生労働省
	小高真美	研究代表者	ソーシャルワーカーを対象とする効果的な自殺対策研修の開発に関する研究	文部科学省科学研究費補助金 （若手研究B）	文部科学省

Ⅵ　平成23年度　精神保健研究所　取材一覧（抜粋）

取材日時	取材元	取材対象		取材・撮影内容	番組名/掲載紙
H23.4.4	中日新聞東京本社	成人精神保健研究部	金　吉晴	「ニュースがわかるAtoZ『PTSD』」取材のため	東京新聞・中日新聞
H23.4.6	講談社	成人精神保健研究部	鈴木友理子	特集「震災のストレスとどうつきあうか」の取材	ﾍﾙｽ&ﾋﾞｭｰﾃｨｰﾚﾋﾞｭｰ
H23.4.7	読売新聞社 静岡支局	薬物依存研究部/ 自殺予防総合対策センター	松本俊彦	薬物依存者の克服を支える家族に焦点を当てた連載企画（全6回中6回目予定）	読売新聞・静岡県版
H23.4.8	（株）メディカルトリビューン	成人精神保健研究部	金　吉晴	災害精神保健医療マニュアル：東北関東大震災対応版に関する被災地における運用の在り方、被災地の現状を踏まえた心のケアの在り方に関する展望	Medical Tribune
H23.4.13	共同通信社 釧路支局	成人精神保健研究部	金　吉晴	東日本大震災被災者の心のケアについて	
H23.4.14	毎日新聞社京都支局	成人精神保健研究部	金　吉晴	震災時における遺族へのメンタルケアについて	毎日新聞東京本社本紙
H23.4.14	朝日新聞社論説委員室	成人精神保健研究部	金　吉晴	被災地の心のケアについて	朝日新聞本紙（社説）
H23.4.20	読売新聞立川支局	精神保健計画研究部/ 自殺予防総合対策センター	竹島　正	本の紹介記事の取材	読売新聞多摩版
H23.4.21	（株）プラップジャパン	成人精神保健研究部	栗山健一	睡眠をテーマにした味の素メディア向けニュースレター作成のため	味の素ﾒﾃﾞｨｱ向けﾆｭｰｽﾚﾀｰ
H23.4.28	日本経済新聞社	自殺予防総合対策センター 室長	川野健治	グリーフケアについて	日経新聞 日曜版
H23.5.2	BBC Brasil	精神保健計画研究部/ 自殺予防総合対策センター	竹島　正	震災で被災された方々に対しての対策	BBC Brasil web site
H23.5.10	産経新聞社	成人精神保健研究部	中島聡美	悲嘆のケアについて（震災遺族）	産経新聞 朝刊
H23.5.18	朝日新聞社	成人精神保健研究部	金　吉晴	デブリーフィングについて	朝日新聞
H23.5.20	ﾊﾟﾌﾞﾘｯｸﾍﾙｽﾘｻｰﾁｾﾝﾀｰ	成人精神保健研究部	中島聡美	特集記事「PTSDとは何か」について	「ストレス&ヘルスケア」夏号
H23.5.24	ﾊﾟﾌﾞﾘｯｸﾍﾙｽﾘｻｰﾁｾﾝﾀｰ	成人精神保健研究部	鈴木友理子	特集記事「震災後の心のケア」について	「ストレス&ヘルスケア」夏号
H23.5.25	サグレス	知的障害研究部	稲垣真澄	ＩＱについての記事作成のため	Web R25
H23.6.2	日本映画大学	社会復帰研究部	伊藤順一郎	主に統合失調症について	学内発表
H23.6.6	ＮＨＫ	成人精神保健研究部	中島聡美	東日本大震災の被災者への取材に際して、意見を聞きたい	ＮＨＫ総合
H23.6.16	日本農業新聞	精神保健計画研究部/ 自殺予防総合対策センター	竹島　正	農業従事者の自殺問題について	日本農業新聞
H23.7.1	読売新聞東京本社	成人精神保健研究部	金　吉晴	東日本大震災の被災地住民が直面する心身の影響などについて	読売新聞「医療ルネサンス」
H23.7.4	TBSテレビ	精神生理研究部	三島和夫	ヒトの体内時計に関するインタビュー	はなまるマーケット
H23.7.5	滝田誠一郎（フリー）	児童・思春期精神保健研究部	神尾陽子	「発達障害と就労支援」の取材のため	労務行政研究所「ｼﾞﾝｼﾞｭｰﾙｾﾚｸﾄ」

取材日時	取材元	取材対象		取材・撮影内容	番組名/掲載紙
H23.7.8	朝日新聞・科学医療グループ	知的障害研究部 室長	太田英伸	光環境が早産児に与える生理的影響に関する研究について	朝日新聞
H23.7.15	ＮＨＫ	成人精神保健研究部 部長	金　吉晴	番組の企画開発のため	NHKスペシャル「HUMAN」
H23.7.22	(株) 協和企画	自殺予防総合対策センター	川野健治	「医療リスクマネジメントシリーズ」の一環として	Astellas Square
H23.7.26	日本経済新聞社	成人精神保健研究部	栗山健一	健全な睡眠週間について	日経新聞 土曜別刷
H23.7.28	ライフ出版社	成人精神保健研究部	鈴木友理子	被災地支援に関わる読者の参考に資するため	公衆衛生情報
H23.7.28	エイデル研究所	薬物依存研究部/ 自殺予防総合対策センター	松本俊彦	「思春期の子どもの自殺について」	「季刊ｾｸｼｭｱﾘﾃｨ」
H23.8.8	ＮＨＫ	薬物依存研究部/ 自殺予防総合対策センター	松本俊彦	「依存症」について	「ためしてガッテン」
H23.8.23	三軒茶屋ﾌｧｸﾄﾘｰ	自殺予防総合対策センター	川野健治	自殺者急増の原因、予防対策、相談への対応について	Yahoo!月刊ﾁｬｰｼﾞｬｰ
H23.8.29	（株）ユーコム	精神生理研究部	三島和夫	睡眠医療に関する情報提供と啓発	たけしの健康ｴﾝﾀｰﾃｲﾝﾒﾝﾄ！みんなの家庭の医学
H23.9.12	毎日新聞社	薬物依存研究部/ 自殺予防総合対策センター	松本俊彦	処方薬などの薬物依存問題について	毎日新聞紙上
H23.9.20	読売テレビ放送	司法精神医学研究部	福井裕輝	性依存症患者の現状と対策の必要性	関西情報ネットten
H23.10.4	朝日新聞 水戸総局	司法精神医学研究部	岡田幸之	医療観察法病棟の設置意義、治療効果、課題、展望などについて	朝日新聞
H23.10.4	ＮＨＫ報道局	精神生理研究部	三島和夫	睡眠調査についてのインタビュー	ＮＨＫニュース
H23.10.20	朝日新聞社	薬物依存研究部	嶋根卓也	向精神薬の乱用・依存について	朝日新聞紙上
H23.11.7	日本労働組合総連合会	成人精神保健研究部	鈴木友理子	被災地の自治体職員、ボランティアに対する心のケアについて	月刊誌「連合」
H23.11.8	ｼﾄﾞﾆｰABCﾗｼﾞｵ	成人精神保健研究部	金　吉晴	津波災害後の精神保健について	The World Today
H23.11.10	(株)プラップジャパン	成人精神保健研究部	栗山健一	睡眠健康に関する知識、研究成果について	味の素「ﾍﾙｽｹｱﾚﾎﾟｰﾄ」
H23.11.14	ＮＨＫ宮崎放送局	成人精神保健研究部	金　吉晴	宮崎県の口蹄疫対策における被災者支援に関する取材	みやざきスペシャル
H23.11.15	産経新聞東京本社	知的障害研究部	稲垣真澄	自閉症について	産経新聞 (生活面)
H23.11.21	The Korea Times	精神保健計画研究部/ 自殺予防総合対策センター	竹島　正	韓国の高い自殺率について	韓国内で配信
H23.11.30	毎日新聞社	薬物依存研究部	和田　清	薬物依存症の治療体制の整備について	毎日新聞紙上
H23.12.2	（株）ユーコム	精神生理研究部	三島和夫	睡眠医療に関する情報提供と啓発	たけしの健康ｴﾝﾀｰﾃｲﾝﾒﾝﾄ！みんなの家庭の医学

取材日時	取材元	取材対象		取材・撮影内容	番組名/掲載紙
H23.12.7	ＮＨＫｴﾃﾞｭｹｰｼｮﾅﾙ	精神生理研究部	三島和夫	事前出演了解済みの患者様のカウンセリングの様子、研究風景など	NHKﾃﾚ「ここが聞きたい！名医にQ 睡眠の悩み」
H23.12.19	読売新聞西部本社	薬物依存研究部	舩田正彦	脱法ドラッグの依存症および毒性に関する情報提供	読売新聞 九州版
H23.12.20	㈱都市環境研究所	社会精神保健研究部	堀口寿広	国土交通省「都市公園の移動等円滑化整備ガイドライン」改訂にかかる意見聴取	都市公園の移動等円滑化整備ガイドライン改訂検討調査報告書
H23.12.27	時事通信社 仙台支社	成人精神保健研究部	鈴木友理子	東日本大震災に関する心のケア問題	新聞・テレビなど
H24.1.7	ＴＢＳテレビ	薬物依存研究部	舩田正彦	脱法ハーブの依存症および毒性に関する情報提供	TBS 「Nスタ」
H24.1.11	読売新聞東京本社	成人精神保健研究部	栗山健一	睡眠について	読売新聞本紙または読売オンライン
H24.1.17	NHK（ﾆｭｰｽｳｫｯﾁ9）	薬物依存研究部	舩田正彦	「脱法ハーブ」の実態について	NHK総合「ﾆｭｰｽｳｫｯﾁ9」
H24.1.25	ニュースプロダクションＣＷＶ	薬物依存研究部	舩田正彦	脱法ハーブの依存性および毒性に関する情報提供	日本テレビnews every　NEWS ZERO
H24.2.1	ＮＨＫ	薬物依存研究部	舩田正彦	脱法ハーブの依存性および毒性に関する情報提供	NHKゆうどきﾈｯﾄﾜｰｸ
H24.2.17	朝日放送株式会社	薬物依存研究部	舩田正彦	脱法ハーブの危険性に関する情報	朝日放送「キャスト」
H24.2.28	講談社	薬物依存研究部	舩田正彦	ゴメオの依存性および毒性に関する情報提供	講談社フライデー
H24.3.2	中日新聞東海本社	成人精神保健研究部	中島聡美	災害グリーフサポートプロジェクトについて	中日新聞 東京新聞
H24.3.2	ＮＨＫ制作局	成人精神保健研究部	中島聡美	（震災）被害者遺族のメンタルヘルス課題であるグリーフについて	ＮＨＫ番組
H24.3.6	日本農業新聞	精神保健計画研究部/ 自殺予防総合対策センター	竹島　正	2011年の自殺者数が確定したことを受けての自殺要因	日本農業新聞
H24.3.13	読売テレビ放送	薬物依存研究部	舩田正彦	脱法ハーブの依存性および毒性に関する情報提供	関西情報ネットten
H24.3.19	International Policy Digeset	成人精神保健研究部	金　吉晴	東日本大震災における被災者のケアに関する取材	International Policy Digeset
H24.3.21	ＮＨＫ	薬物依存研究部	舩田正彦	脱法ハーブの依存性および毒性に関する情報提供	ＮＨＫニュース（番組未定）
H24.3.21	毎日新聞社	薬物依存研究部	和田　清	薬物依存（脱法ハーブ）問題について	毎日新聞紙上
H24.3.22	リクルートスタッフィング	社会復帰研究部	伊藤順一郎	精神障害者就労支援事業において専門家からの知見を登録者に向けて発信する	Ability Staffing ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ
H24.3.28	㈱物語り舎	成人精神保健研究部	栗山健一	雑誌企画「10分の仮眠で頭スッキリ」の取材	月刊BIG tomorrow6月号
H24.3.28	小学館「週刊ポスト」	精神保健計画研究部/ 自殺予防総合対策センター	竹島　正	隣国の高い自殺率の原因・背景を掘り下げる	週刊ポスト
H24.3.29	学校法人昭和大学	精神薬理研究部	山田光彦	2013年度昭和大学入学案内パンフレット 薬学部卒業生インタビュー	昭和大学入学案内パンフレット

Ⅶ　平成23年度　公的機関を中心とした常勤研究者の社会貢献より抜粋

研究者名	職名	機関	職務内容
加　我　牧　子	所長	内閣府	内閣府本府政策参与
加　我　牧　子	所長	厚生労働省社会・援護局　障害保健福祉部	発達障害者施策検討会委員
加　我　牧　子	所長	厚生労働省社会・援護局　障害保健福祉部　精神・障害保健課	認知行動療法研修事業評価委員
加　我　牧　子	所長	独)国立特別支援教育総合研究所	運営委員
加　我　牧　子	所長	財)精神・神経科学振興財団	「自殺対策のための複合的介入法の開発に関する研究」運営委員
加　我　牧　子	所長	特定非営利活動法人 ALDの未来を考える会	顧問
加　我　牧　子	所長	公益財団法人 日本障害者スポーツ協会	専門委員会医学委員
竹　島　正	自殺予防総合対策センター長 /精神保健計画研究部長	内閣府	内閣府本府政策参与
竹　島　正	自殺予防総合対策センター長 /精神保健計画研究部長	内閣府自殺対策推進会議	オブザーバー
竹　島　正	自殺予防総合対策センター長 /精神保健計画研究部長	厚生労働省社会・援護局　障害保健福祉部精神・障害保健課	自殺防止対策事業評価委員長
竹　島　正	自殺予防総合対策センター長 /精神保健計画研究部長	船橋市	自殺対策連絡会議委員長
竹　島　正	自殺予防総合対策センター長 /精神保健計画研究部長	全国精神保健福祉連絡協議会	副会長
竹　島　正	自殺予防総合対策センター長 /精神保健計画研究部長	全国精神保健福祉相談員会	全国精神保健福祉相談員会相談役
竹　島　正	自殺予防総合対策センター長 /精神保健計画研究部長	財)社会福祉振興・試験センター	精神保健福祉士試験委員
竹　島　正	自殺予防総合対策センター長 /精神保健計画研究部長	日本社会精神医学会	常任理事/総務企画委員長
竹　島　正	自殺予防総合対策センター長 /精神保健計画研究部長	日本社会精神医学会	第31回会長
竹　島　正	自殺予防総合対策センター長 /精神保健計画研究部長	Asia Australia Mental Health	International Advisory Council
松　本　俊　彦	自殺予防総合対策センター副センター長 /薬物依存研究部室長	内閣府	「アメリカにおける青少年の薬物乱用対策」に関する企画分析会議委員
松　本　俊　彦	自殺予防総合対策センター副センター長 /薬物依存研究部室長	厚生労働省医薬食品局	薬物中毒対策連絡会議委員及び再乱用防止対策講習会講師
松　本　俊　彦	自殺予防総合対策センター副センター長 /薬物依存研究部室長	文部科学省スポーツ・青少年局	薬物乱用防止広報啓発活動推進協力者会議協力者
松　本　俊　彦	自殺予防総合対策センター副センター長 /薬物依存研究部室長	法務省保護局	薬物処遇研究会構成員
松　本　俊　彦	自殺予防総合対策センター副センター長 /薬物依存研究部室長	法務省矯正局	矯正教育プログラム（薬物非行）開発会議構成員
松　本　俊　彦	自殺予防総合対策センター副センター長 /薬物依存研究部室長	法務省矯正研修所	調査鑑別特別科第5回研修講師
松　本　俊　彦	自殺予防総合対策センター副センター長 /薬物依存研究部室長	東京都多摩府中保健所	非常勤医師
松　本　俊　彦	自殺予防総合対策センター副センター長 /薬物依存研究部室長	山梨県立精神保健福祉センター	自殺対策調査研究事業検討会助言者
松　本　俊　彦	自殺予防総合対策センター副センター長 /薬物依存研究部室長	日本社会精神医学会	事務局/副会長
松　本　俊　彦	自殺予防総合対策センター副センター長 /薬物依存研究部室長	社会福祉法人　横浜博萌会 子どもの虹情報研修センター	共同研究員
松　本　俊　彦	自殺予防総合対策センター副センター長 /薬物依存研究部室長	横浜市立大学	非常勤講師
川　野　健　治	自殺予防総合対策センター室長	財)日本医療機能評価機構	院内自殺の予防と事後対応に関する検討会委員
稲　垣　正　俊	自殺予防総合対策センター室長 /精神薬理研究部室長	財)精神・神経科学振興財団	「実践的精神科薬物治療研究プロジェクト」運営委員
稲　垣　正　俊	自殺予防総合対策センター室長 /精神薬理研究部室長	岡山大学医学部	非常勤講師
勝　又　陽　太　郎	自殺予防総合対策センター研究員	東京都教育庁指導部	スクールカウンセラー
勝　又　陽　太　郎	自殺予防総合対策センター研究員	帝京大学	非常勤講師
勝　又　陽　太　郎	自殺予防総合対策センター研究員	首都大学東京	心理相談員

立　森　久　照	精神保健計画研究部室長	大学共同利用機関法人 情報･システム研究機構統計数理研究所	客員准教授
立　森　久　照	精神保健計画研究部室長	日本社会精神医学会	事務局長
和　田　　清	薬物依存研究部長	厚生労働省社会・援護局	地域依存症対策推進モデル事業の評価に関する検討会構成員
和　田　　清	薬物依存研究部長	厚生労働省社会・援護局	薬物中毒対策連絡会議委員及び再乱用防止対策講習会講師
和　田　　清	薬物依存研究部長	法務省保護局	薬物処遇研究会構成員
和　田　　清	薬物依存研究部長	東京都福祉保健局	薬物情報評価委員会委員
和　田　　清	薬物依存研究部長	文部科学省スポーツ・青少年局	高等学校における薬物乱用防止啓発DVD作成協力者
和　田　　清	薬物依存研究部長	独)医薬品医療機器総合機構	専門委員
舩　田　正　彦	薬物依存研究部室長	星薬科大学	客員講師
嶋　根　卓　也	薬物依存研究部研究員	文部科学省スポーツ・青少年局	薬物等に対する有識等調査に関する協力者
嶋　根　卓　也	薬物依存研究部研究員	社)全国高等学校PTA連合会	薬物乱用防止パンフレット編集委員
嶋　根　卓　也	薬物依存研究部研究員	津田塾大学	非常勤講師
嶋　根　卓　也	薬物依存研究部研究員	龍谷大学矯正・保護総合センター	嘱託研究員
小　牧　　元	心身医学研究部長	東京大学医学部	非常勤講師
小　牧　　元	心身医学研究部長	九州大学医学部	非常勤講師
安　藤　哲　也	心身医学研究部室長	独)国立国際医療研究センター	精神科診療援助
菊　地　裕　絵	心身医学研究部室長	共立女子大学　共立女子短期大学	非常勤講師
神　尾　陽　子	児童・思春期精神保健研究部長	小平市教育委員会	特別支援教育専門家委員会委員
神　尾　陽　子	児童・思春期精神保健研究部長	国立成育医療研究センター　エコチル調査メディカルサポートセンター	エコチル調査関連WG会議に出席
井　口　英　子	児童・思春期精神保健研究部研究員	地方独立行政法人大阪府立病院機構　大阪府立精神医療センター	非常勤医師
金　吉　晴	成人精神保健研究部長	社)宮城県精神保健福祉協会　みやぎ心のケアセンター	顧問
金　吉　晴	成人精神保健研究部長	福島県精神保健福祉協会	顧問
金　吉　晴	成人精神保健研究部長	岩手県	東日本大震災津波に伴うこころのケアに関するアドバイザー
金　吉　晴	成人精神保健研究部長	財)友愛福祉財団	HIV遺族実態調査検討会委員
金　吉　晴	成人精神保健研究部長	日本トラウマティック・ストレス学会	編集委員長
金　吉　晴	成人精神保健研究部長	東京大学大学院医学系研究科	非常勤講師
金　吉　晴	成人精神保健研究部長	京都大学医学部	非常勤講師
金　吉　晴	成人精神保健研究部長	東京医科歯科大学	非常勤講師
中　島　聡　美	成人精神保健研究部室長	内閣府	「内閣府平成23年度交通事故被害者サポート事業検討委員会」専門委員
中　島　聡　美	成人精神保健研究部室長	内閣府	犯罪被害者等施策推進会議専門委員
中　島　聡　美	成人精神保健研究部室長	国土交通省総合政策局安心生活政策課	公共交通事故被害者等支援における「被害者等支援計画」策定のためのガイドライン検討会合委員
中　島　聡　美	成人精神保健研究部室長	金融庁総務企画局	振り込め詐欺救済法に係る預保納付金に基づく事業の担い手選定のための有識者ヒアリング委員
中　島　聡　美	成人精神保健研究部室長	国土交通省	公共交通における事故発生時の被害者支援の在り方検討委員会委員
中　島　聡　美	成人精神保健研究部室長	東京都総務局	犯罪被害者等支援を進める会議委員
中　島　聡　美	成人精神保健研究部室長	岩手県	東日本大震災津波に伴うこころのケアに関するアドバイザー
中　島　聡　美	成人精神保健研究部室長	社)いばらき被害者支援センター	参与
中　島　聡　美	成人精神保健研究部室長	独)日本学術振興会	科学研究費委員会専門委員

中　島　聡　美	成人精神保健研究部室長	財)友愛福祉財団	HIV遺族実態調査検討会委員
中　島　聡　美	成人精神保健研究部室長	日本学術会議事務局	連携会員
鈴　木　友　理　子	成人精神保健研究部室長	岩手県	東日本大震災津波に伴うこころのケアに関するアドバイザー
鈴　木　友　理　子	成人精神保健研究部室長	宮城県保健福祉部	災害アドバイザー
鈴　木　友　理　子	成人精神保健研究部室長	日本トラウマティック・ストレス学会	理事
鈴　木　友　理　子	成人精神保健研究部室長	福島県立医科大学　放射線医学県民健康管理センター	専門委員会委員
鈴　木　友　理　子	成人精神保健研究部室長	福島県立医科大学	非常勤講師
鈴　木　友　理　子	成人精神保健研究部室長	山形大学医学部	非常勤講師
栗　山　健　一	成人精神保健研究部室長	武蔵野大学	非常勤講師
松　岡　豊	成人精神保健研究部室長	独)国立病院機構　災害医療センター	診療援助
山　田　光　彦	精神薬理研究部長	星薬科大学	非常勤講師
山　田　光　彦	精神薬理研究部長	財)精神・神経科学振興財団	「実践的精神科薬物治療研究プロジェクト」運営委員
伊　藤　弘　人	社会精神保健研究部長	厚生科学審議会地域保健健康増進栄養部会	次期国民健康づくり運動プラン策定専門員会委員
伊　藤　弘　人	社会精神保健研究部長	厚生労働省	平成22年度診療報酬改定結果検証に係る調査（平成23年度調査）検討委員会委員
伊　藤　弘　人	社会精神保健研究部長	一般社団法人　支援の三角点設置研究会	「精神障害者地域移行・地域定着支援推進事業」に係る委員
堀　口　寿　広	社会精神保健研究部室長	交通エコロジー・モビリティ財団	旅客施設と車両等に関するバリアフリー整備ガイドライン見直しのための小委員会委員
堀　口　寿　広	社会精神保健研究部室長	国土交通省総合政策局	公共交通機関の移動等円滑化整備ガイドライン検討委員会委員
三　島　和　夫	精神生理研究部長	厚生労働省健康局	国民健康・栄養調査企画解析検討会構成員
三　島　和　夫	精神生理研究部長	独)医薬品医療機器総合機構	専門委員
三　島　和　夫	精神生理研究部長	独)宇宙航空研究開発機構　有人宇宙環境利用ミッション本部　宇宙環境利用センター	評価パネル委員
三　島　和　夫	精神生理研究部長	東京医科歯科大学	非常勤講師
三　島　和　夫	精神生理研究部長	秋田大学大学院医学系研究科	非常勤講師
三　島　和　夫	精神生理研究部長	財)精神・神経科学振興財団	「睡眠健康推進機構」における運営委員会委員
守　口　善　也	精神生理研究部室長	筑波大学大学院人間総合科学研究科	非常勤講師
稲　垣　真　澄	知的障害研究部長	環境省総合環境政策局環境保健部	エコチル調査企画評価委員
稲　垣　真　澄	知的障害研究部長	独)国立国際医療研究センター	厚生労働省こころの健康づくり対策事業　思春期精神保健研修企画委員
稲　垣　真　澄	知的障害研究部長	公益財団法人 日本障害者スポーツ協会	障害者スポーツ協会医学委員会委員
稲　垣　真　澄	知的障害研究部長	千葉大学大学院	客員教授
軍　司　敦　子	知的障害研究部室長	東京学芸大学	非常勤講師
伊　藤　順　一　郎	社会復帰研究部長	独)国立国際医療研究センター	精神科診療援助
伊　藤　順　一　郎	社会復帰研究部長	独)高齢・障害者雇用支援機構	研究評価委員
伊　藤　順　一　郎	社会復帰研究部長	特定非営利活動法人 リカバリーサポートセンターACTIPS	理事
伊　藤　順　一　郎	社会復帰研究部長	特定非営利活動法人　地域精神保健福祉機構	理事
伊　藤　順　一　郎	社会復帰研究部長	特定非営利活動法人 NECST	理事
伊　藤　順　一　郎	社会復帰研究部長	特定非営利活動法人 ほっとハート	研修事業検討委員
吉　田　光　爾	社会復帰研究部室長	特定非営利活動法人 リカバリーサポートセンターACTIPS	理事
吉　田　光　爾	社会復帰研究部室長	日本社会事業大学	非常勤講師

吉　田　光　爾	社会復帰研究部室長	特定非営利活動法人 ほっとハート	研修事業検討委員
佐　藤　さ　や　か	社会復帰研究部研究員	日本社会事業大学	非常勤講師
佐　藤　さ　や　か	社会復帰研究部研究員	日本社会事業大学専門職大学院	非常勤講師
岡　田　幸　之	司法精神医学研究部長	最高裁判所事務総局刑事局　刑事法研究会	刑事法研究会助言者
岡　田　幸　之	司法精神医学研究部長	司法研修所　刑事実務研究会	講師／助言者
岡　田　幸　之	司法精神医学研究部長	東京保護観察所立川支部	助言者
岡　田　幸　之	司法精神医学研究部長	日本弁護士連合会　責任能力プロジェクトチーム	助言者
岡　田　幸　之	司法精神医学研究部長	東京医科歯科大学	非常勤講師
岡　田　幸　之	司法精神医学研究部長	日本弁護士連合会　経験交流会	講師
安　藤　久　美　子	司法精神医学研究部室長	警視庁刑事部	捜査支援活動員
安　藤　久　美　子	司法精神医学研究部室長	日本弁護士連合会　責任能力プロジェクトチーム	助言者

Ⅷ　東日本大震災に関する精研の支援活動（平成23年3月～平成24年3月）

*1 NCNP=国立精神・神経医療研究センター
＊2 JSPN=日本精神神経学会

日付	担当者	内容	場所
平成23年 3月14日	東北地方太平洋沖地震の被災者支援に関わる緊急職員集会開催		NCNP(*1)
3月14日	東北地方太平洋沖地震メンタルヘルス情報サイト開設		インターネット
3月17日	金吉晴・中島聡美・鈴木友理子	JSPN(*2)災害対策委員会立ち上げ準備会議	東京都
3月20日	和田清	千葉県旭市の被災状況把握と、旭中央病院精神神経科病棟損傷とその対応について現地視察	千葉県旭市
3月23日	金吉晴・中島聡美・鈴木友理子	JSPN対策本部第1回会議	東京都
3月24日	金吉晴	岩手県精神保健福祉センター視察	岩手県盛岡市
3月24日	伊藤順一郎	千葉県旭中央病院精神神経科にて被災者への心のケア支援者研修と実施訪問指導	千葉県旭市
3月25日	金吉晴	宮城県視察	宮城県
3月25日 ～4月2日	鈴木友理子	宮城県障害福祉課における行政支援、視察	宮城県仙台市
3月26日 ～27日	井上祐紀	福島県鏡石町の避難所にて診療支援活動	福島県鏡石町
3月30日 ～4月2日	竹島正・川野健治	被災者支援の情報収集のため陸前高田、大船渡を訪問。岩手県精神保健福祉センター、岩手県福祉総合相談センター等を訪問	岩手県陸前高田市、大船渡市、盛岡市
4月1日	鈴木友理子	「こころのケアチーム」会議に参加（石巻日赤病院）	岩手県石巻市
4月2日	中島聡美	「いのちの電話」相談員への震災被災者対応研修	東京都
4月2日	鈴木友理子	岩手県南三陸町を視察	岩手県南三陸町
4月4日	自殺予防総合対策センター	自殺予防総合対策センターHP内に「いきる・ささえる災害支援情報」掲載開始	インターネット
4月5日	金吉晴・中島聡美・鈴木友理子	JSPN対策本部第2回会議	東京都
4月6日	金吉晴・中島聡美・鈴木友理子	NCNP病院が福島県いわき市に派遣する医療チームの事前研修にて講義	東京都
4月10日 ～17日	中島聡美	岩手県精神保健福祉センターにおける行政支援	岩手県盛岡市
4月11日 ～7月1日	NCNP病院	福島県いわき市に一週交替での医療チーム派遣を開始	福島県いわき市
4月11日	自殺予防総合対策センター	自殺予防総合対策センターHPのトピックスに「避難所への支援物資にアルコールを入れないで」掲載	インターネット
4月12日 ～14日	川野健治	岩手県釜石市および大槌町にて、震災被災者のための保健師とのミーティング	岩手県釜石市、大槌町
4月12日 ～13日	松本俊彦	福島県立医大「心のケアチーム」の一員として公立相馬総合病院臨時精神科外来で診療	福島県相馬市
4月13日 ～15日	鈴木友理子	宮城県精神保健福祉センターにおける行政支援	宮城県大崎市

4月13日	中島聡美	陸前高田市の避難所で「心のケアチーム」ミーティングに参加	岩手県陸前高田市
4月13日	中島聡美	御遺体の搬送に関わる行政職員に対するメンタルケア研修の実施	岩手県気仙郡住田町
4月14日 ～16日	竹島正・立森久照	被災者支援の情報収集のため、宮城県庁、石巻市、南三陸町を訪問	宮城県仙台市、石巻市、南三陸町
4月14日	中島聡美	保健師および市職員に対するメンタルケア研修（釜石保健所）	岩手県釜石市
4月14日	中島聡美	大槌町にて市職員のリラクゼーション講座に参加	岩手県上閉伊郡大槌町
4月15日	中島聡美	岩手県障害福祉部を訪問し、メンタルヘルス施策への助言と医療ミーティングへの参加	岩手県盛岡市
4月16日	中島聡美	保健師に向けてのメンタルケア研修及び相談（宮古保健所）	岩手県宮古市
4月23日	金吉晴・中島聡美・鈴木友理子	JSPN対策本部第3回会議	東京都
4月24日	小牧元	日本心身医学会関東甲信越支部「東日本大震災被災者支援に関する講習会」司会	東京都
4月24日	鈴木友理子	日本心身医学会関東甲信越支部「東日本大震災被災者支援に関する講習会」講師	東京都
4月27日	竹島正・金吉晴・中島聡美・鈴木友理子	自殺予防総合対策センター、第1回メディアカンファレンスを開催（全国町村会館）。講演「災害後の心のケアと回復力」ほか、メディア報道に関するディスカッション	東京都
4月28日	鈴木友理子	支援者メンタルヘルスケア打ち合わせ（宮城県庁、精神保健福祉センター）	宮城県仙台市
5月1日	安藤久美子	東日本大震災による地域患者の心理的支援および診療支援（郡山市針生ヶ丘病院）（任期～H24.3.31）	福島県郡山市
5月6日 ～7日	竹島正・川野健治	岩手県司法書士会館、および世界の医療団にて被災者支援のための意見交換会	岩手県盛岡市
5月8日	鈴木友理子・中島聡美	日本心身医学会関東甲信越支部「東日本大震災被災者支援に関する講習会」講師	東京都
5月9日 ～12日	栗山健一	NCNP病院医療チームスタッフとして医療支援	福島県いわき市
5月10日 （～継続）	金吉晴	東日本大震災における精神医療対策の打ち合わせ	東京都
5月11日	金吉晴・鈴木友理子・中島聡美	JSPN対策本部第4回会議	東京都
5月11日 ～12日	鈴木友理子	宮城県気仙沼・岩沼・仙南保健所管内の職員向け講話	宮城県
5月13日	鈴木友理子	福島県立医科大学公衆衛生学講座にて、「災害時の地域保健およびこころのケア支援のあり方」について講義	福島県福島市
5月16日	伊藤順一郎・鈴木友理子	東日本大震災後の中長期支援に係る検討会にて講義（岩手県精神保健福祉センター）	岩手県盛岡市
5月19日	安藤久美子	東日本大震災による地域患者の心理的支援および診療支援（郡山市針生ヶ丘病院）	福島県郡山市
5月21日	金吉晴・鈴木友理子	JSPN東日本大震災に対するこころのケア支援と復興支援対策ワークショップ	東京都港区
5月21日	金吉晴・鈴木友理子・中島聡美	JSPN災害対策本部会議（精神神経学会会場にて）	東京都港区
5月22日	鈴木友理子	日本若手精神科医の会、講義および会議	東京都新宿区

5月24日	稲垣正敏	奥州市まごころ病院にて、自殺・うつ予防の調査・研究会議出席	岩手県奥州市
5月24日 ～29日	中島聡美	岩手県精神保健福祉センターへの支援業務	岩手県盛岡市
5月25日 ～28日	竹島正・川野健治・白神敬介	震災支援ならびに多職種連携の準備のため、宮城県および岩手県の関係機関・被災地を訪問（宮城県庁、気仙沼保健所ほか）	宮城県仙台市、気仙沼市
5月25日	金吉晴・鈴木友理子・中島聡美	JSPN対策本部第5回会議	東京都
5月26日 ～27日	金吉晴	厚生科学特別研究・被災地の健康調査ワーキンググループの班会議	兵庫県神戸市
5月26日	安藤久美子	東日本大震災による地域患者の心理的支援および診療支援（郡山市針生ヶ丘病院）	福島県郡山市
5月29日 ～6月1日	鈴木友理子	オーストラリア・ニュージーランド精神医学会における精神神経学会との合同シンポジウムで、災害に関する発表	オーストラリア
5月30日 ～6月3日	三島和夫	NCNP病院医療チームスタッフとして医療支援	福島県いわき市
6月3日 ～6日	鈴木友理子	支援者ストレス対応に関する会議（宮城県精神保健福祉センター）	宮城県大崎市
6月6日	金吉晴・鈴木友理子・中島聡美	JSPN対策本部第6回会議	東京都
6月11日 ～12日	伊藤順一郎	「相双地区の新しい精神科医療サービスシステムの構築を考える会」出席	福島県相馬市
6月12日	鈴木友理子	福島県民健康管理調査会議	福島県福島市
6月16日 ～17日	金吉晴	震災における心のケアの研修における技術支援（岩手県精神保健福祉センター）	岩手県盛岡市
6月16日 ～17日	中島聡美	東北精神神経学会：平成23年度第1回障害教育研修会講師「災害と心のケア」	宮城県仙台市
6月19日	竹島正・川野健治	第3回宗教者災害支援連絡会に出席	東京都
6月22日	金吉晴・鈴木友理子・中島聡美	JSPN対策本部第7回会議	東京都
6月22日	金吉晴・中島聡美	東日本大震災トラウマ対策技能研修（主催：精神保健研究所）にて講師（国立がん研究センター）	東京都
6月23日 ～24日	金吉晴	災害時こころのケアに関するかかりつけ医等研修会にて講義	宮城県大船渡市
6月27日 ～29日	中島聡美・鈴木友理子・深澤舞子	岩手精神保健福祉センターへの助言と業務支援	岩手県盛岡市
6月27日 ～7月1日	高橋秀俊	NCNP病院医療チームスタッフとして医療支援	福島県いわき市
6月29日 ～7月3日	竹島正・川野健治・白神敬介・的場由木	震災支援ならびに多職種連携の準備として宮城県および岩手県の関係機関・被災地を訪問（宮城県庁、気仙沼保健所ほか）	宮城県仙台市、気仙沼市
7月4日	鈴木友理子	県民健康管理調査「こころの健康度」第１回専門委員会出席（福島県立医科大学）	福島県福島市
7月4日	金吉晴・鈴木友理子・中島聡美	JSPN対策本部第8回会議	東京都
7月5日 ～6日	鈴木友理子・深澤舞子	岩手県「こころのケアチーム」活動のまとめに関する会議（岩手県精神保健福祉センター）	岩手県盛岡市
7月7日	川野健治	中長期的な自殺予防のための意見交換会（宮城県精神保健福祉センター、はあとぽーと仙台、仙台市障害者支援課）	宮城県仙台市

7月7日	安藤久美子	東日本大震災による地域患者の心理的支援および診療支援（郡山市針生ヶ丘病院）	福島県郡山市
7月11日	鈴木友理子	宮城県職員ストレス対応についての助言（宮城県精神保健福祉センター）	宮城県大崎市
7月12日	金吉晴・中島聡美・鈴木友理子	岩手県こころのケアに関するアドバイザーに就任（任期～H24.3.31）	岩手県
7月14日	安藤久美子	東日本大震災による地域患者の心理的支援および診療支援（郡山市針生ヶ丘病院）	福島県郡山市
7月18日	竹島正・川野健治	「東日本大震災被災者のいのちをまもるフォーラム」出席（東北大学艮陵会館）	宮城県仙台市
7月20日	金吉晴・鈴木友理子・中島聡美	JSPN対策本部第9回会議	東京都
7月22日	鈴木友理子	第60回東北公衆衛生学会における特別講義（福島県立医科大学）	福島県福島市
7月24日	鈴木友理子・深澤舞子	岩手県「こころのケアチーム」活動のまとめに関する会議（岩手県精神保健福祉センター）	岩手県盛岡市
7月25日～27日	鈴木友理子	岩手県精神保健福祉センターにおけるデータ整理	岩手県盛岡市
7月27日～29日	竹島正・川野健治・白神敬介	中長期的な自殺予防のための意見交換会（釜石保健所、宮城県大槌町役場仮庁舎、気仙沼保健所、気仙沼市役所ほか）	宮城県釜石市、大槌町、気仙沼市
7月26日	中島聡美	被災地での支援活動に関する技術支援（岩手県精神保健福祉センター）	岩手県盛岡市
7月27日	金吉晴	東日本大震災心のケア支援プロジェクト「トラウマケア講演会」講師	岩手県釜石市
7月27日～28日	中島聡美	山田町・大船渡市・陸前高田市の保健師、三陸病院医療関係者、心のケアチームを対象とした「悲嘆と喪失の理解とケア」の研修	岩手県
8月4日	鈴木友理子	福島県民健康管理調査（詳細調査）における「こころの健康度」専門委員会	福島県福島市
8月9日	鈴木友理子	福島県民健康管理調査（詳細調査）における「こころの健康度」専門委員会	福島県福島市
8月11日	安藤久美子	東日本大震災による地域患者の心理的支援および診療支援（郡山市針生ヶ丘病院）	福島県郡山市
8月17日	金吉晴・鈴木友理子・中島聡美	JSPN対策本部第10回会議	東京都
8月18日	竹島正・川野健治・勝又陽太郎	中長期的な自殺予防のための意見交換会（石巻赤十字病院）	岩手県石巻市
8月18日	安藤久美子	東日本大震災による地域患者の心理的支援および診療支援（郡山市針生ヶ丘病院）	福島県郡山市
8月22日～23日	鈴木友理子	宮城県心のケア対応支援・職員健康調査と支援者ケアについて（宮城県精神保健福祉センター）	宮城県大崎市
8月23日	鈴木友理子	宮城県教育庁と職員健康調査について打ち合わせ、県支援関係者と支援者ケアについて打ち合わせ	宮城県仙台市
8月31日	金吉晴	被災者健康調査の中間報告会	東京都
9月	金吉晴	東日本大震災トラウマ対策技能研修（6.22）のWeb視聴システム開始（～2月）	インターネット
9月1日	金吉晴	秋田県精神保健福祉協会研修会にて大震災と心のケアについて講演	秋田県秋田市
9月8日	鈴木友理子	仙台市にて児童生徒の心の健康調査に関する打ち合わせ	宮城県仙台市

9月8日	安藤久美子	東日本大震災による地域患者の心理的支援および診療支援（郡山市針生ヶ丘病院）	福島県郡山市
9月9日	鈴木友理子	福島県健康診査専門委員会に出席	福島県福島市
9月11日 ～12日	鈴木友理子	国際専門家会議「放射線と健康リスク-世界の英知を結集して福島を考える」参加	福島県福島市
9月13日 ～15日	鈴木友理子	岩手県精神保健福祉センターにおけるデータ整理	岩手県盛岡市
9月14日	鈴木友理子	岩手県気仙沼地域精神福祉担当者等連絡会に出席	岩手県気仙沼市
9月15日	鈴木友理子	岩手県こころのケアチームの相談記録票（全国統一版）の作成開始	岩手県盛岡市
9月15日	金吉晴・鈴木友理子・中島聡美	JSPN第11回対策本部会議	東京都
9月18日 ～23日	金吉晴・鈴木友理子	15th World Congress of Psychiatry　参加	ブエノスアイレス（アルゼンチン）
9月23日	金吉晴	東日本大震災におけるメンタルヘルス対策について討論	パリ（フランス）
9月26日	鈴木友理子	宮城県教育庁福利課にて健康調査打ち合わせ	宮城県仙台市
9月26日 ～28日	中島聡美	東日本大震災後のこころのケアにかかる技術支援（岩手県精神保健福祉センター）	岩手県盛岡市
9月29日	金吉晴	福島県自殺対策推進行動計画担当者研修会にて、災害時の心のケアと自殺対策について講義（福島県県北保健福祉事務所）	福島県福島市
9月29日	安藤久美子	東日本大震災による地域患者の心理的支援および診療支援（郡山市針生ヶ丘病院）	福島県郡山市
10月6日	安藤久美子	東日本大震災による地域患者の心理的支援および診療支援（郡山市針生ヶ丘病院）	福島県郡山市
10月10日	中島聡美	第10回日本トラウマティック・ストレス学会にて、シンポジウム「災害による遺族のメンタルヘルスとケア」のコーディネーター（神戸国際会議場）	兵庫県神戸市
10月10日	鈴木友理子	第10回日本トラウマティック・ストレス学会にて講演（神戸国際会議場）	兵庫県神戸市
10月11日	鈴木友理子	カナダ大使館にて震災シンポジウムに関する打ち合わせ	東京都
10月12日	金吉晴・鈴木友理子・中島聡美	JSPN対策本部第12回会議	東京都
10月13日	鈴木友理子	仙台市教育局にて児童生徒の心の健康調査検討委員会に出席	宮城県仙台市
10月18日 ～21日	鈴木友理子	岩手県精神保健福祉センターにて、岩手県こころのケア活動相談記録の整理と解析支援	岩手県盛岡市
10月20日	金吉晴	和歌山県御坊保健所「災害時の地域精神保健活動とメンタルヘルス」にて「災害とこころのケアについて」講演	和歌山県御坊市
10月21日	金吉晴	江東区にて福島県からの被災避難者のメンタルケアについて打ち合わせ	東京都江東区
10月24日	鈴木友理子	宮城県庁にて、宮城県支援者調査打ち合わせ	宮城県仙台市
10月26日	金吉晴	シンポジウム「東日本大震災の復興計画と中長期的支援」司会	東京都
10月27日	金吉晴	江東区保健所長と打ち合わせ	東京都江東区

10月27日	安藤久美子	東日本大震災による地域患者の心理的支援および診療支援（郡山市針生ヶ丘病院）	福島県郡山市
11月3日	金吉晴	第27回ISTSS（国際トラウマティック・ストレス学会）にて、「福島第一原発事故による心理的影響について」「日本における大災害時の精神的サポート：神戸と東北の経験から」について講演	ボルチモア（アメリカ）
11月9日	金吉晴	2011UOEH（産業医科大学）国際シンポジウム「原子力災害対応労働者の産業保健」について講演	福岡県北九州市
11月9日	金吉晴・鈴木友理子・中島聡美	JSPN対策本部第13回会議	東京都
11月10日	安藤久美子	東日本大震災による地域患者の心理的支援および診療支援（郡山市針生ヶ丘病院）	福島県郡山市
11月17日 ～18日	鈴木友理子	岩手県精神保健福祉センターにて、岩手県におけるこころのケア活動のまとめに関する打ち合わせ及びデータ整理	岩手県盛岡市
11月20日	中島聡美	岩手県精神保健福祉センターへの支援活動（トラウマ技能研修会講師）	岩手県盛岡市
11月22日	金吉晴	「大震災と災害・紛争時等における精神保健・心理社会的支援におけるIASCガイドライン」について講演	パリ（フランス）
11月23日	鈴木友理子	岩手県平成23年度地域自殺対策研修会にて「トラウマ・気分障害」について講演	岩手県盛岡市
11月24日	安藤久美子	東日本大震災による地域患者の心理的支援および診療支援（郡山市針生ヶ丘病院）	福島県郡山市
11月27日	金吉晴	日本行動療法学会第37回大会・第35回研修会にて、企画シンポジウム「東日本大震災後に求められるケア」講演	東京都
12月1日	金吉晴	「災害後のメンタルケア（PTSD）-製薬会社が貢献できる情報提供活動とは-」講演（ファイザー社）	東京都
12月1日	鈴木友理子	第47回宮城県公衆衛生学会学術総会にて講演「災害後のメンタルヘルス：中長期の課題と対応」	宮城県仙台市
12月2日	鈴木友理子	山形県にて精神保健科学研修会（23年度特別講義）「災害後のメンタルヘルス～危機から回復に向けて～」	山形県山形市
12月8日	金吉晴	第20回心の健康フォーラムにて「災害時における心のケア」について講演	鳥取県鳥取市
12月8日	鈴木友理子	カナダ大使館にて東日本大震災後の精神衛生についての討議会	東京都
12月13日 ～14日	鈴木友理子	岩手県こころのケア相談分析（岩手県精神保健福祉センター）	岩手県盛岡市
12月14日 ～15日	金吉晴	第2回東日本大震災トラウマワークショップINみやぎにて「トラウマと悲嘆について」講演	宮城県気仙沼市、石巻市
12月16日	鈴木友理子	宮城県の公立学校教職員のストレス対応に関する助言（宮城県庁）	宮城県仙台市
12月18日 ～19日	中島聡美	岩手県精神保健福祉センターへの支援活動	岩手県盛岡市
12月21日	金吉晴	被災地のこころのケア（主催：内閣府）連携会議出席	東京都
12月22日	安藤久美子	東日本大震災による地域患者の心理的支援および診療支援（郡山市針生ヶ丘病院）	福島県郡山市
平成24年 1月13日	鈴木友理子	WHO（世界保健機関）関係者（サクシーナ部長ほか）と災害関係の打ち合わせ	東京都
1月22日	中島聡美	岩手県精神保健福祉センターへの支援活動	岩手県盛岡市
1月22日	金吉晴	第27回こころの県民講座にて「災害時のこころのケア～いま、一人ひとりができること～」について講演	群馬県前橋市

1月27日	金吉晴	都内城東地区学術講演会にて「自然災害と精神医療対応：東日本大震災から」について講演	東京都
1月30日	鈴木友理子	宮城県行政職員支援会議に出席	宮城県仙台市
1月31日	鈴木友理子	管理監督者メンタルヘルス研修会にて「健康調査を踏まえた管理監督者の役割とメンタルヘルス対策」を講義	宮城県仙台市
1月30日 ～2月2日	金　吉晴	西シドニー大学にてラファエル教授と災害後のメンタルヘルスについて情報交換と今後の課題について協議	オーストラリアシドニー
2月19日 ～20日	中島聡美	岩手県精神保健福祉センターへの支援活動	岩手県盛岡市
2月5日	金　吉晴	第4回日本不安障害学会学術大会　市民公開講座「外傷後ストレス障害の治療」について講演	東京都文京区
2月6日、7日	金　吉晴	平成23年度「こころの健康づくり対策」自然災害等精神医療対応研修開催、講師	東京都新宿区
2月9日	金　吉晴	米国戦略研究所CSISモリソン氏との心のケア活動に関する会議に出席	東京都千代田区
2月9日	金　吉晴	女性精神科医による女性のメンタルヘルスを考える会にて「東日本大震災と精神保健医療対応」について講演	東京都新宿区
2月24日	金　吉晴	平成23年度厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究）成果発表会「健康危機発生時における地域健康安全に係る精神保健医療体制の構築に関する研究」	埼玉県和光市
3月1日	金　吉晴	災害医療とIT 「遠隔医療とメンタルケア」について対談	東京都千代田区
3月6日	鈴木友理子	平成23年度厚生労働科学研究費補助金（厚生労働科学特別研究事業） 東日本大震災被災者の健康状態に関する調査に係る研究班会議	東京都千代田区
3月6日	金　吉晴	平成23年度厚生労働科学研究費補助金（厚生労働科学特別研究事業） 東日本大震災被災者の健康状態に関する調査に係る研究班会議に出席	東京都千代田区
3月7日	金　吉晴	東日本こころのケア活動に係る意見交換会を開催	東京都中央区
3月5日 ～9日	中島聡美	ミネソタ大学での「行方不明者家族へのケアについての研修会」参加	米国ミネソタ州セントポール
3月8日	鈴木友理子	「東日本大震災に伴う教職員の健康調査」の公表に関する助言	宮城県仙台市
3月8日	鈴木友理子	第3回児童生徒の心のケア推進委員会	宮城県仙台市
3月11日 ～18日	金　吉晴	ペンシルベニア大学フォア教授のPTSD持続エクスポージャー療法指導者研修に参加、今後の被災者のPTSD対応について協議	米国フィラデルフィア
3月29日	鈴木友理子	東日本大震災　東日本大震災被害者の心のケア従事者セミナー	宮城県仙台市

■担当者の所属（50音順）

安藤久美子：　司法精神医学研究部
伊藤順一郎：　社会復帰研究部
稲垣　正敏：　自殺予防総合対策センター
井上　祐紀：　知的障害研究部
勝又陽太郎：　自殺予防総合対策センター
川野　健治：　自殺予防総合対策センター
金　吉　晴：　成人精神保健研究部
栗山　健一：　成人精神保健研究部
小　牧　元：　心身医学研究部
白神　敬介：　自殺予防総合対策センター
鈴木友理子：　成人精神保健研究部
高橋　秀俊：　児童・思春期精神保健研究部
竹　島　正：　自殺予防総合対策センター/精神保健計画研究部
立森　久照：　精神保健計画研究部
中島　聡美：　成人精神保健研究部
深澤　舞子：　成人精神保健研究部
松本　俊彦：　薬物依存研究部/自殺予防総合対策センター
的場　由木：　精神保健計画研究部
三島　和夫：　精神生理研究部
和　田　清：　薬物依存研究部

精神保健研究所年報 No.25（通号 No.58）2012

平成 24 年 3 月 31 日発行

編集責任者　加我　牧子

編 集 委 員　金　　吉晴

鈴木友理子

松本　俊彦

発　行　所　独立行政法人

国立精神・神経医療研究センター

精神保健研究所

〒187-8553

東京都小平市小川東町 4-1-1

（非売品）　電話　042（341）2711

印刷：（株）東京アート印刷所